満洲文藝年鑑

第二輯

昭和13年版

Ja
8
Ma 15
(2)

原本書影

アジア經濟
1.13
研究所藏書

滿洲文話會編

滿洲文藝年鑑

昭和十三年版

滿蒙評論社刊

緒言

本年鑑第一輯はG氏文學賞委員會によつて發刊されたが、本輯より滿洲文話會が其の事業の移讓を受け、編纂に當つた。

本輯は昭和十二年一箇年間の滿洲における文學活動を概觀的に記錄編纂し、併せて代表的作品を選定し再錄したものである。

滿洲において如何なる文學が發生し如何なる問題が問題とされつゝあるかを知らうと欲する人々には最も適切なる俯瞰を提供する一卷であることを信じて疑はない。殊に、昭和十二年は、滿洲建設の觸手が漸く文化面にも及び、新聞に雜誌に文藝活動の異狀なる發展展開をみせた年で、その新しき文化建設への意欲は注目に値し、作品においても日本內地文壇に比肩し得る成果を幾多生んでゐる。特に評論においては未曾有の活潑なる討論が展開されたが、本輯は所謂"滿洲文學論"の發展を系統的に理解し得るやう編輯に留意した。

滿洲には滿洲の文學がある。それは單なる內地亞流の文學から離れて、獨立に大陸的新文化の萌

芽を含み、此の土地に別箇の殿堂を築き上げやうとしてゐる。その様相の全般を具體的に把握し得るやう、本書は各面に遺漏なきを期し、網羅し得た心算である。

但し年鑑の性質上、昭和十二年度において活躍を潜めてゐた作家達の動靜は雜錄程度に留つたことをお斷りして置きたい。

なほ本年鑑は滿洲文話會の編纂によつて逐年刊行せられるものであることを附記して置く。

滿洲文話會

文藝年鑑編纂事務委員

青木實
吉野治夫
西村眞一郎
城小碓

滿洲文藝年鑑目次

概觀

評論……西村眞一郎 一
小說……大谷健夫 五
詩壇……城小碓 一〇
和歌……甲斐水棹 一一
俳句……高山峻峰 二〇
兒童文學……石森延男 二三

評論

滿洲文學の精神……城小碓 三五
滿洲文學に就て……角田時雄 三〇
當爲的と自然的……大河節夫 三三
建設の文學……木崎龍 三八
幻想の文學……加納三郎 四三
滿洲文學の特有性……金崎利光 四七
滿洲文化の文學的基礎……上野凌嶝 五三
東洋の猶太民族……西村眞一郎 五九
滿洲に於ける文學の方向……川上旗男 六四
滿洲文學運動の主流……佐藤四郎 六七
滿洲文壇の回顧……古川哲次郎 七五
最近の國文學研究思潮につきて……渡部榮 八一
川端康成論……大谷健夫 九〇
チェーホフに於ける「絶望」……紫藤貞一郎 九九
「天才論」批判の序章……西川清 一〇四

詩

黃河……高木恭造 一一
戲畫……井上麟二 一三五
蝶の宿……城小碓 一三〇
天邪鬼……古川賢一郎 一三三
湯……小池亮夫 一三四
薔薇百科辭典……三好弘光 一四一
七月の愛の歌……古屋重芳 一四六
蟬の歌……坂井艶司 一五〇
寒北斷章……矢原禮三郎 一五三
巡禮……廿地滿 一五六
鴉……小杉茂樹 一五九

小說

手記……吉野治夫 一六三
一農夫……青木實 一八三

概觀

夜の話……秋原勝二 一九一
西喇木倫河……福家富士夫 二三三
ある少年の記錄……木崎龍 二三一
泥家……鈴木啓佐吉 二四〇
老家行……長谷川四郎 二四七
滿洲の受胎……工清定 二六三
隣一二軒……町原幸二 二八三
逃亡……今村久米子 二八七
炎天……宮川靖 二九六
母へ……西川清六 三〇三
桔梗の季節……松原一枝 三一〇
安東……島崎恭爾 三一六
幾山河……富田馨 三三三
流離……竹内正一 三六五

短歌

事變は進む……中斐水棹 三七九
栗原大尉……富田充 三八一
離心抄……荒川石楠花 三八三
旅順……伊藤千鶴子 三八五
年若き僧……香川末光 三八七
雨と滿人……新井重美 三八九
激流渡舟……相川澪 三九一
苦力……宮島正美 三九三

吾兒……欅田正東 三九五
北支事變抄……永原いね子 三九七

俳句

南嶺……三溝沙美 三九九
新京……三木朱城 四〇一
氷山……高山峻峰 四〇三
不毛の地……久米幸叢 四〇五
奉天……石原沙人 四〇七
月……金子麒麟草 四〇九
春耕……江川三眛 四一一
柳絮……森脇巽治 四一三
春聯……青山靜丘 四一五

隨筆

蔦の實……寛太郎 四一七
喜怒哀樂帳……橋本八五郎 四一九
仕掛花火……石森延男 四二四
溪谷溫泉にて……竹内節夫 四二七
川柳と滿洲……石原巖徹 四二九
秋の隨筆……三溝沙美 四三六

雜錄

昭和十二年文藝年況……四四一
新聞雜誌社一覽……四五四
文藝團体……四五五
滿洲文藝人名錄……四五九

文藝評論界の概觀

西村眞一郎

はしがき

昭和十二年度の滿洲文藝評論界は、前年度のそれに比してはるかに活況を呈したといひ得るのである。しかも後半期の始頭の北支事件の發端が不擴大主義方針の聲明を裏切つて北支事變となり支那事變と擴大された戰爭のさなかにあつて、文藝活動は顯著現象を示したのである戰局の最も激化を極めた上海戰南京攻略の前夜たる十月に於ては、滿洲の文藝評論界は異常なる活氣に溢れたのであつた。

この事實はどういふことを意味するのであらうか。世に謂ふところのインテリゲンチヤは時局に對して無關心であり、無關心を裝ふものであるとの說を、證據づけるものであらうか。私はさやうに考へたくはない。全く反對に、各自が難局に直面して眞劍さを取り戻した結果、各自は各自の職務、使命に對して異常なる熱意を把持するに至つたのである。

その熱意が、偶々文學に關心を持つ人々にあつては、文學の世界に注がれたのである。何事にせよ、戰場に出征するまでは、從來の使命、目的を放棄すべきでないことを如實に示したと解せられる。

もう一つには文藝評論發表機關にやゝ惠まれ始めたことも、活況を呈するに至つた原因であらう。殊に滿日學藝欄が地元の執筆家に紙面を提供したことは、日刊紙であるだけに活氣を促進する大きな役割をなした。

しかしながら活氣を呈したとは云へ、提出された問題にせよ、論議せられた事項にせよ、いづれも解決をみずに越年してゐるのである。

從つて一年を概觀するに當つても亦、解決乃至はその方向をとることを極力避けて記述することにする。

提議された問題

提議された問題の冠頭を占めるものは「滿洲文學論」に關するものである。今、主なるものを摘錄すれば、大住孝二「滿洲作家への希望」（新天地一月）築地はる「滿洲文學運動」（月刊滿洲二月）西村眞一郎「最近の

滿洲文學」（滿日四月）城小碓「滿洲文學の精神」（滿日五月）角田時雄「滿洲文學に就て」（滿日五月）大河節夫「當爲的と自然的」（滿日五月）金崎利光「滿洲文學の特異性」（滿日六月）芳山沙朗「滿洲文學に於ける能動精神」（協和五月）川上旗男「滿洲に於ける文學の方向」（滿日八月）江原鐵平「滿洲文學と滿洲生れのこと」（滿日八月）八木橋雄次郎「滿洲の文學を思ふ」（滿日六月）宮川靖「所謂滿洲文學論」（滿日七月）上野凌略「滿洲文化の文學的基礎」（滿日九月）木崎龍「建設の文學」（滿日九月）加納三郎「幻想の文學」（滿日十月）秋原勝二「滿人ものをなぜ書くか」（滿日十一月）等をあげることができる。勿論その他にも滿洲文學論に關連する評論は見受けられたが、あまり問題にはならなかつた。

就中、城小碓の「滿洲文學の精神」は日本文學の主體性及び滿洲國のイデーを強調して反響を呼んだが之れに對して角田時雄が「滿洲文學に就て」と題して、文學の精神は人間性探求にありと題して政治的なものは計畫的であるから文學の場合は妥當でないとした。更に大河節夫はこの兩氏の所說を檢討して、「文學も政治も自然的動向に流れるけれども、人間が作るものである。必ず人間の頭腦を媒介とする故に、ある場合には當爲的に見られもする。城氏が自然的に流れるといふ文學を、當爲的に動かさうとすること自身は、文學が自然的動向に流れるといふ命題と矛盾するものではないが、一見矛盾するごとく見えるからこゝをよく說明してもらひたかつた」といひ文學の純粹性と世界觀との關連を辯證法的に說いた。

同じく滿洲文學に於ける政治性を指摘したものに西村眞一郎の「最近の滿洲文學」があり、政治性を分類して新京イデオロギー、大連イデオロギーと呼稱して新京側の指導性を說明した。

次に問題となつたのは木崎龍の「建設の文學」に對する加納三郎の「幻想の文學」といふ駁擊であつて、この論文の提出後、滿洲文學論に關する論述は、當年度に於ては一應の沈默となつた。木崎龍の見解は滿洲國の世界觀に樹立する文學精神を述べたに對して加納三郎は、觀念的な、神宣的な文學論として之れを排擊して、滿洲文學の出發は、滿洲の現實に立脚するものでなければならぬと、現實主義を强調した。

又、江原鐵平は、滿洲に於て我々の現在なし得ることは、植民過程を取扱ふ文學しかないと指摘して歷史派的傾向を示した。

大體に於て述べられた滿洲文學理論は、日本文學を主流とする城小碓、上野凌略。滿洲國の世界觀を强調する木崎龍、西村眞一郎の建設派。及び現實主義派の三派に分類せられると見て大差ないであらう。

第二に提議された問題は、故郷に關する論述である。所謂、滿洲生れ乃至は滿洲育ちの人々が、滿洲を故郷と觀念するか、どうかの問題である。

「夜の話」に於いてこの問題を取扱つた秋原勝二によつて投ぜられたのである。秋原勝二は、滿洲で育つたにも拘らず滿洲のことは學ばなかつたし、さりとて內地のことも學ぶには學んだが實感がないとして結局、故郷喪失の氣持に支配されてゐると述べ、之れに對して江原鐵平の同感的論文「滿洲生れと滿洲文學」が發表された。江原鐵平は、滿洲生れの人々が、かくのごとき境地に押しやられたのは教育の不完全乃至は誤謬にありと指摘し自己の故郷喪失感を述べ、さうして眞に故郷感をいだかされるには「土」に對する感情がなければならぬと述べた。

この兩者の境地は、結局、ユダヤ民族と相通ずるものがあり、日本の大陸發展が東洋のユダヤ民族をつくりあげてしまふ危險性があると西村眞一郎は「東洋の猶太民族」に於て述べ、教育が謬つてゐるならば、自らの力で自己教育をすべきであるとした。

秋原、江原の所說に對しては別に、金崎賢氏の同情的な論文が發表された。

研究論文の發表

研究論文も亦、當年度は精力的なものがあつた。この方面では大谷健夫、渡部榮兩氏のものが、最も光彩を放つてゐる。

大谷健夫は、時局に關連して「戰爭と文學」を發表して、その博讀な探求的な東西文學に於ける戰爭描寫を說明したが、この他に「川端康成小論」を發表し、渡部榮は主として國文學に關する論文を滿日及び滿蒙評論に發表した。國文學に關する研究論文の發表は、一昨年來のことであつて、滿洲に於ては稀しいことであつた。

又、プーシキンに關する論文「プーシキン回顧」佐藤通男、「プーシキン斷想」野崎韶夫があつた

紫藤貞一郎の今尙ほ連載中の「醫學と文學」及び「チ

エホフの斷片」が造詣の深さを示してゐる。

研究論文の發表といふことは、從來の滿洲文學界に於ては、たゞ一人大谷健夫が存在してゐたのみで、他は外國作家の紹介程度に終つてゐたものが少なくなかつた。然し當年度よりは研究の本格に第一歩を蹈み入れたことはひとつの飛躍といふべきである。

その他のこと

以上の他に、評論界に於て特記して置くことは「詩に關する論爭」が八木橋雄次郎、落合郁郎に於て兩三回に亘つて行はれたことである。この論爭は最初、多くの關心を持たれたのであつたが、結局立脚點の相違に終つてしまつて、詩論に於ける飛躍は說かれなかつた。

評論に對する批判乃至は駁論といふ現象も多分に見受けられた。鈴木啓佐吉の「自然、不自然」と題する西村眞一郎の地元評への反駁、或ひは滿洲文學論に關しての諸家の反撥、坂井艷司「最初の基準の破綻」と題する福家富士夫への反駁等、相當の活氣を呈したのである。然しながら反駁に對する反駁といふ現象はあまり見うけなかつた。

地元小說評文藝時評等は新聞雜誌の積極的な關心のもとに置かれ始めたことも一つの傾向といふべきである。

最後に、三好弘光のシュールレアリズムに關する二三の論文のあつたことを附記してをく。

小說界概觀

大谷健夫

（一）

此の土地に小說が現れてから何年かになる。ある土地に「小說」が現れると言ふ事は、その土地に小說を書く人と、小說を載せる雜誌が現れた事を意味してゐる。しかしそれは必ずしも「讀む人」を必要とはしない。小說は「讀む人」がある數に達してから商品性を獲得するのである。「小說」が商品性を獲得すればその「小說」の製作者は「作家」としての地位を獲得する。日本の東京は、小說を高い稿料で買ふ雜誌と、小說で生活し得る人の結びついてゐる場所即ち「文壇」を持つてゐる。文學の中央集權がそこに形成される。書く人を一つの場所に集め、讀む人は廣い場所、津々浦々に散在してゐる。そして供給と需要の連絡は極めて滑かである。その組織下に於ける地方の素人作家の製作する小說の商品性は零に等しい。文學が「土地的」なものに制約され乍ら、その「地方的」なものを喪失して「國民的」になり易い意味はそこにある。

資本主義社會では、すべてが商品として取扱はれ勝である。「小說」にあつても、作家の手から離れて讀者の眼に現れるまでの過程は商品としての過程である。しかも商品としての需要と供給の關係は、他の商品の場合とは甚しく異つてゐる。例へば時計職人の製作した一個の時計は、唯一人の人の需要を滿たすに過ぎないが、一人の作家の書いた一つの「小說」は、優に何百萬人の需要を滿たすのである。それは一人の人の手になつた「製作物」が直ちに商品となるのでなく、それが容易に何萬かの複製品となり、複製品となつてから始めて商品性を獲得するからである。その複製品ですら、時計や靴と違つて一をもつて多くの人の需要を滿たし得る。（例へば圖書館）

以上の理由は、小說技術家が時計や靴の製造人に比べて比較にならぬ程少數で事足りる事實を規定してゐる。尙、それが生活必需品でない事も小說技術家にとつて惡い條件である。

工業技術者は全國の工場に散在してゐる。それは原料との關係が制約するからである。しかし小說技術者には特にある土地を必要とする原料の制約がない。唯、頭腦とペンと紙で事足りる。その事情はかゝる技術者を一つの場所に集める事を非常に容易にしてゐる。所謂「文壇」と云ふ小說工場は、東京に一個所あれば、優に全國の需要を滿たす事が出來、かくして文學の中央集權は形成されるのである。

如上の理由によつて、地方文壇の存在が如何に困難であるかが分ると思ふ。

（二）

滿洲國は日本の一地方ではない。風土や、政治經濟的環境は、日本內地とは全く異つてゐる。そこに日本の一地方文學ではない「滿洲文學」と云ふ特殊な存在が要求せらるゝのである。しかし考へて見ると、此の土地で小說を書く人が日本人であり、それが日本の言葉で書かれそれを讀む人が日本人であり、しかも大多數が東京工場から製作される小說を讀んでゐると云ふ事情では、日本內地の一地方と同一の條件にあるのである。だから作家を職業とする人間（東京文壇に依存しない）が近い將來に現れる事は頗る困難である。

滿洲文學の隆盛、即ち滿洲に住む人の書いた小說を滿洲の人達の多數が愛讀する時代が來るには、人間が此の土地を永住の土地として愛し、此の土地の風土にぴつたり合致した生活が生まれ出る事が一つの前提である。風土は直ちに人間の生活（外形的なもの、變化はあつても）を完全に規定するものではない。人間の生活を規定するものは「歷史的風土」である。その土地の風土が人間の生活を規定する歷史的風土となるには「時」が必要であり、その風土がある藝術樣式を生むまでには更に「時」が必要である。日本民族が、大陸から渡來して以來、日本人としての風土的性格を形成し、日本的藝術を形成するに費した「時」を計量せよ。

然らば果して滿洲に、東京文壇に替るべきものが出來職業的作家が輩出し得べきか。私のそれに對する答は？である。東京工場で製作する「小說」を輸入禁止し、頗る困難な職業的作家の存在を可能にする讀者を滿洲が持たねば、かかる事は望まれないであらう。

千九百三十一年の滿洲事變は、日本と滿洲の結びつきを緊密にし、續いて昨年の支那事變以來、更に支那本土とも結びつき、その三つを一丸にした「新しい日本」が誕生しやうとしてゐる。「島國的日本」は、その歷史的風土を超へて「大陸的日本」にまで展開しやうとする。その政治的經濟的發展に伴つて「島國的日本」を否定するイデオロギーが一部には要求せられてゐる。

滿洲在住の作家に、內地延長主義の淸算を要求し、纖細、巧緻とは反對のものが望まれてゐるのはその理由である。

此の現象は、日本のジヤーナリズムが、外地の荒々しさを取り入れて、東京文壇に淸新な空氣を導入しやうとする現れである。その氣運には「コシヤマイン記」「城外」「地中海」等が芥川賞に取り上げられたのと一脈通ずる「異國的」なものへの憧れがある。

今後滿洲の作家達は、內地文壇を若返らせる役割をもその双肩に課せられるであらう。內地から切り離された滿洲をでなく、內地否、世界とつながりを持つ「滿洲」を描くため、その現實をみつめる苦しい試練と勉强、それも滿洲の作家に課せられた重い使命である。

（三）

十二年度に於ける重な作品十二篇を擧げて一瞥すると實に多種多樣である。リアリズムの王座にゐるものにG氏文學賞を獲得した吉野治夫の「手記」がある。そこには「ある精神病院風景」に示した特異な性格描寫が、高度に達成せられた形でなされてゐる。眞實を描くのにその人間の內の心理に先づ突入して、外の骨格を作り上げやうとする。リアリズムの構成的な一面の見事な「型」である。井上鄕の「故鄕」も亦此の系列の秀作である。其處には「手記」に見る立體的、構成的なものはない。描く者と描かれるものとの間に距離がある。平面的な形を持つてゐるが描かうとするものを克明に見つめ、それを適確に表現する腕を此の作者は持つてゐる。

リアリズムとは對蹠的なロマンチシズムの王座に長谷川四郎の「老家行」がゐる。此れは美しい大人の童話、そこには古い家を中心にして、血縁の流れの悠久を思はせる懷しい歌聲が聞へる。彫琢的な陰影と重さを持つ表現は獨自なものであり、「一行一行が美しい」ことが氏の長所になつてゐる。

リアリズムとロマンチシズムの中間に立つ作家に町原幸二がある。「繪の旅」には氏の抒情詩面が快く淫び上つてゐる。洗練された練絹のやうな表現は他の追隨を許さない。

以上の四作には所謂「滿洲的」なものはない。「滿洲的」でない事がこの純粹な藝術を生んだやうな形にも見える。

「滿洲的」である作品を眺めると、其處に二つの流れがあるやうに思はれる。一つは、靑木實の「一農夫」秋原勝二の「夜の話」鈴木啓佐吉の「泥家」であり、一つは竹内正一の「流離」と富田壽の「幾山河」である。前者は滿洲の土地を描く事に意欲的であり、後者は傍觀的である。

前者も二つに分れ、靑木、鈴木の寫實的なものに、秋原勝二の浪曼的なものが對立してゐる。靑木の「一農夫」には滿洲の土地に住む一農夫をリアルに描かうとする努力がある。農夫の生活を知らうとする作者の意欲は、それを調べる事に大きな力を拂はせてゐる。所謂調べた藝術である。しかし「一農夫」はその努力に全體の効果が伴つてゐない。

秋原勝二は滿人の生活をリアルに書く事よりも此の風土にある日本人の生活を問題にしてゐる。彼はリアルに現實を表現するよりも、現實の中から問題を抽出しやうとする。昨年度の大きな收穫であつた「夜の話」が滿日の學藝欄を賑はした「故郷喪失」の問題を提起したのは當然である。しかし問題の提示に優れた頭腦を持つてゐる此の氣鋭の作者には、反面表現力がそれに伴はない短所をも持つてゐる。「量感」を持つその獨特な表現をもつと生かす事が出來れば、彼の前途は洋々たるものがある。

靑木實の「一農夫」は彼の過渡期的作品であるが、滿人の生活をリアルに描かうとした點で滿洲での劃期的な「作品」だと云へる。作者の意欲の烈しさは此の方面での大道を約束するものである。

竹内の「流離」富田の「幾山河」は、滿洲に於ける日露人や日本人を取り入れてゐるが、靑木程のリアルに描かうとする意欲はなく、傍觀者的である所に、一脈のペーソスが流れてゐて、物柔かな豐かな作品になつてゐる竹内の「流離」は、「友情」等と並んで「ハルビン」シリーズの一をなすもので、日露人の生活がなだらかに描かれてゐる。富田の「幾山河」も此の土地を流れる女を點じて哀愁をたゝへ相當な量を持ち乍ら破綻を見せてゐない。

此の二作は十二年度の大きい收穫の一つである。來年度の期待をつなぐに足るが、「滿洲」を描くものの中では、靑木の「一農夫」の發展（リアリスティックな）が最も期待されさうである。

滿洲の日本人生活の一端を提へて美しい短篇にしてゐるのに、町原幸二の「晩學」と古川賢一郎の「黃花女」がある。共に愛すべきもの、殊に町原の「晩學」は井伏式の構成を巧みにこなして、內容も鋭い諷刺をユーモアで包んでぴりりとしてゐる。「黃花女」は作者の抒情歌的な一面が現れてゐる。

福家富士夫の「別府の宿」島崎恭爾の「保菌者」は共に寫實的な作品である。そして前者は明るく後者は暗いが共に冷たい感觸を持つてゐる。福家の「別府の宿」を見ると、此の作者の神經は中々細かく觀察も鋭くて流石に科學者らしい片鱗を持つてゐる。そこに木下李太郎氏あたりと通ずる長所と缺點がある。島崎の「保菌者」は面白いテーマを摑へてゐる。

以上が私の眼にふれた次りでは十二年度の重な作品である。尙此の他に北村謙次郎、三宅豐子、大庭武年等相當な作家がゐるが、何れの作品も此の作者達の力量から云へば明かにマイナスである。池淵鈴正、松原一枝、岡二郎は、既に滿洲に緣なき人々であるから觸れるのを止める。

最後に概觀をのべれば、吉野治夫の「手記」を筆頭に置く事には誰しも異存はなかるべく竹内正一の「流離」富田壽の「幾山河」も、その構成の緊密さに於ては「手記」に劣るが此れ又大きな收穫と云ふべきであらう。長谷川四郎の「老家行」と井上郷の「故郷」は新人の新鮮な作として十分に異色あるもの、殊に「老家行」は獨逸の作家のものでも見るやうな美しさと深さを併せ持つてゐる。秋原勝二の「夜の話」靑木實の「一農夫」は意欲的に滿洲を描かんとした點で高く評價せらるべきである町原幸二は大作こそ出さなかつたが、幾つかの短篇にその健在を示してゐる。

此れ等の作家達と、成長過程にあるその他新人との華々しい角逐こそ、明年の滿洲文學界に展開される興味深き繪卷物であらう。

詩壇回顧

城小碓

昭和十二年の滿洲詩壇について一言にいへば、それは精神的に頽氣を失つたことであつた。何分にも事變下に於ては、詩に限らず總ての文藝運動の萎縮はまぬがれないとはいへ、少くとも小說陣に對する詩陣のみじめさは傳統として滿洲文壇の王座に位置した詩の轉落を意味しはせないであらうか。見方によつては小說の作家達の急速の發展を意味するのであるが、何はともあれ十二年度の滿洲詩壇の疲困はおほふ事の出來得ない事實である。然し詩壇の疲困は全日本的であつて、あながち滿洲詩壇の人々のみを責めるべきものではない。

詩作の態度は第二として本年度の滿洲詩壇に活躍したものは、「鵠」に依る詩人達と、裸跣詩社に依る一連の若き詩人達であつた。前者は詩雜誌「鵠」を機關紙として、小池亮夫、三好弘光、西原茂、龍口武士、井上麟二、八木橘雄次郎、松畑優人、宮下秀雄等で、後者は「裸跣」に依る、廿地滿、今村義夫、西町春介、宮添正博、水城雅夫、深町敏雄等々であつた。尙「作文」に依る詩人達の地位は見逃せないのであるが、此等の詩人達は昨年度に比して稍々その詩作態度に迫力を失つてゐはしなかつたか。僅か新人坂井艷司の鬱頭を見た事に依つて作文による詩人達の面目を保持せることであつた。小杉茂樹、落合郁郎、佐々木勝造、古屋重芳、坂井艷司、後半期に至りて古川賢一郎、高木恭造の二氏が參加してゐる。

以上の外、「文苑」に依る詩人に橋本末喜、「大連詩書倶樂部」に城小碓、「醫科」に依る高木恭造、小嵜隆本田保雄、黑田源次、佐々木一彥、鳥居次男、「新京文藝集團」に依る伏木龍三郎、堀井正一、泉芳雄、太田正高木喜久藏、濱田鈞、玉置昇平、其の他に母里山正夫、砂見爽、島崎曙海、中島光夫、山下明、棚木一良、矢原禮三郎、川島豐敏、近東綺十郎、「協和」による數名の詩人達が居る。以上の詩人達に依つて滿洲に於て發行されてゐる定期刊行物の文藝欄にその作品は掲載されてゐるのである。

本年度中の滿洲に於て發行された詩の刊行物として、定期刊行の「鵠」と不定期刊行の「裸跣」其の他で、尙詩集としては日野廣池の詩集「獨り旅」があつた。

歌壇の動向

甲斐水棹

△

本年度に於ける滿洲歌壇は大體に於て次ぎの歌誌結社其他の動向により察知することが出來よう。

まづ發刊順に列記すれば、昭和三年發刊の合崩、同四年の滿洲短歌、同十一年の北滿歌人、アカシヤ、本年新設のラヂオ歌壇、滿洲アララギ、水甕大連支社、創作支社ますの會、新京歌話會、滿洲藤浪會、吾妹支社、ごぎやう支社等であり、他に內地結社直系或は無所屬の人々が散在して、現在繼續的作品を發表しつつある歌人は五百程度を前後するであらうと思はれる。

右四誌八團体其他より成る滿洲歌壇が本年度に於いては、滿洲歌壇未曾有の熱意と活氣を示し、歌論作品共に空前の成績を示した事實に對し、岡二郎氏は大連公論七月號に於いて「胎動する滿洲歌壇」の一文を草し「アカシヤ」の創刊されたことが間接的ではあるが滿洲に歌壇的な自覺を齎らせる役割を果してゐると思ふ」といひ、「其等の刺戟もあつたらうが滿洲一圓に文化云々の各種の論議や運動が旺んになつて、滿洲歌壇にも各社の旗幟が大きな足跡を殘すであらうことを期待出來るかと喜ぶ」といふ意味のことを發表された。

以下各社團體別々大要をのべ滿洲歌壇を鳥瞰することにしよう。

△

合崩では其主宰西田猪之輔氏が時局關係等にて多忙を極め、一月より五月まで從前通り編輯を續けてゐた荒川石楠化氏が健康障害にて任を辭したため六月以降中島新氏が專ら編輯其他に携はることになつた。中島氏は滿洲藤浪會同人で稻垣輝安、井上一郎、谷葉杜子氏等の同人と協力し從來の合崩を革新して藤浪會流の色彩を濃厚にすべく努力した。爲めに從來の同人中の一部と抵觸を生じ三井實雄氏其他の分離となり、翌平度「滿洲歌人」發刊の基を醸成したと見られてゐる。然し乍ら從來稍隋性的になつてゐた合崩に一道の熱意と活氣を導入し、同人誌友を鼓舞して歌論批評を感んにし緊張を促進した樣な努力

は大いに認めらるべきものと思ふ。然るに同氏らが實作批評等には常に「短歌至上主義」の主張主知的短歌を祖述しつつ、論説に當つては「內地歌壇の亞流を排せよ」「滿洲歌壇の隔離孤立運動に努めよ」「內地歌壇の追從に甘んずな」といふ風の氣焰萬丈のものであるため、いつとなく周圍に矛盾感を抱かせ、本質的研究を離れた雜音の耳につくものを注目せらるるに至つた。

合崩は十年の歷史を持つだけに內容にも多種多樣の複雜性を保ち、西田氏の冬柏調、西島さだ氏の花房調、永原いね氏の吾妹調、中島氏等の短歌至上主義調をはじめ創作アララギ新短歌などの種々調を網羅して百花撩亂の趣があり交互練磨の刺戟が大きい點を多とすべきであらう

歌論隨筆其他にも相當の力作が認められ、從前通り毎月例會を續けて研究練磨した。特に八月十周年記念號に七十餘頁の倍大號で、內容外觀共に立派なものであつた。十周年記念事業として短歌展覽會、記念歌集出版、記念短歌會、記念吟行會等豫告せられたが恰も時局に直面して展覽會は無期延期となり、記念歌集は現在印刷中とのことである。

歌論の見るべきものとしては岡二郎氏の「知性と反逆」末野稠氏の「短歌絕緣論」等で感想文としては稻垣輝安氏の「秋風立つ日の記」橋本淺夫氏の「主知的短歌について」といふ命題の下に「淺間の表情讀後感」をかいたものなどが目についた。

隨筆には寺本初音、永原いね、西島さだ氏らの作が見るべきものであり、作品評には田山一雄、松本ひろみ、堺三郎氏等に穩健であり素養ある筆致を認むることが出來た。

六月編輯擔當時中島氏は卷頭言と編輯信條を掲載して信念を披瀝し、卷頭言は毎號續けて既成短歌を排擊し選後評などにも短歌至上主義傾向の作品を奬勵した。同時に特選歌欄を設けて同人交互に選ばしめ、九月號より反對鏡欄を設けて對外的に論説などをとりあげ井上一郎氏が執筆した。

本年度作品中西田、荒川、永原三氏は本年鑑別項に採錄されてゐるので、他の代表作と見るべきものを十二月自選歌號に發表せられたるものより拔き、本誌の傾向を見ることにしよう

西島さだ

復活祭すぎてひそけきキタイスカヤ桃の蕾を乙女ひさげり

秋さりて花のともしきホテル前の夾竹桃にもわかれを告げむ

末野稠

風ぎの海日は晴れやかにい照れども冬の濱べの冷え身には沁む

薄暮に似たる夜明まへ出勤する人達階級のなかに自分を見かける

寺本初音

一隊の兵を遊ばし其の長は藤花近きベンチに倚りぬ

戰線へ毛布となりて送らるるわが編物のかすかなるわざ

田山一雄

空冴えて爆擊機とぶ天津ゆ電話につたふ聲たしかなり

演說會はてて歸りの帛りに何すべき輜重特務兵われは

三井實雄

事務室の朝の机の冷めたきにむかひて人を憎むべからず

夜更だちて歸れる故におとなしくねむらむとする冷たき部屋に

芝に寢て眼に追ふ鳥のかげ散るは山脈うすき日のいろに似つ

丘の上海神廟の旗おもく動けるほどに霧まき流る

西澤流

燈管の鋪道を動くもの一方に影をおとしてもつれなき月夜

中島新

わかれを宜べる君とほどよき位置もてば靜けさの泌む夕べ風ぐ海

右の通りであるが、前述の如く多くの傾向により次第に長所を吸收しあひ、そこに個性表現の路を見いでて近き將來に於いて刮目すべき作品を生むであらうことを期待する。

滿洲短歌では一月に城所英一氏が編輯をなし其後富田充氏と長南滿治氏が相半して編輯をなしてゐる。編輯名義人たる八木沼淳雄氏は本年中一回も作品論說共に發表せず、十月號に「長城突破の歌」として長詩の採錄されてゐるものも滿洲日々新聞よりの轉載と記されてある。

一月號編輯後記に城所氏は曰く「新春と共に沈滯の氣を一掃して滿洲短歌は漸く稍充實しました。——久しぶ

りに四十人近くの同志が顔を揃へ得たものの尙一人殘らず出詠したいもの。大いに頑張つて行かう。我々の機關誌は我々自身でもり立てたいもの云々」斯くして近頃に見なかつた熱意が誌面に漲り、同人の作品文章にも夫々見るべきものがあり、城所氏の隨筆、富田氏の「最近作品評」日向伸夫氏の「ハルピンの橫顔」長南氏の「瓦小屋」などの文章が掲載され堂々たる風手を示した。

從來本誌同人は凡て多忙なる公務に携はりために歌誌への熱意表現も不如意であつた樣に見えてゐたが、是より「作品評」或は「合評」の形にて毎月社內評を繼續し、尙前月作品一人一首抄頸筆等を掲載した。是等の中見るべきものは城所氏の「御はこぐさをよむ」富田氏の「嚴檜を推薦す」及香川末光氏の「嚴檜をよむ」等であらう。

作品欄に於いて最も努力の著しきは富田氏、櫻田正東氏で殆んど皆出詠であり、原眞弓氏、香川、長南、木田晴夫氏是についで努力した。城所氏は一月五月二回出詠にて其後作品を見ない。右作品の中より前月抄として採られたものを本年刊掲載以外の作者より選んで大體この誌傾向を見よう。

城所英一

みぞれ降る夜の坂道やわが家の窓に小暗きともし灯のいろ

ふたたびは見むことかたき土佐のくに吉野の川に降るさむき雨

原　眞弓

みじわよるこの川口に生ふ葦の拔きて靑きにも思ふ節を

山人は山にかへりてひとりなる夜半の坊に茶をのみてをり

長南滿治

曉はいまだ暗きに家々の稻こく音のはやきこえくる

天つ日は常の日の如おちゆきぬいとまなかりし一日なりしか

志武路勝雄

池の面に樹のまゆにふき月照りて風過ぐるらしき波ひかり見ゆ

再びは會ひ得ざるべしと分隊長心極まる別れを告げぬ

木田晴夫

社員より四人の犧牲者つひに出でぬ事變の噂は食堂にも滿つ

今にしてひとりのみ母を想ふにし怠り多き自らを悔ゆ

右によつて見るに本誌は最も傳流的短歌の眞髓に突入すべく深さ或は醍醐味といふ樣なものに向つて努力してゐるらしく富田、香川、櫻田氏などは多分に其傾向を感ぜられ最も堅實な努力が認められる。此會でも月々例會を開き研究を續けてゐる。

尙表紙裏幀及紙質の佳良なこと編輯印刷の美しいことも本誌の特色と見られる本年度に於いて六・九・十二の三月休刊は同人多忙の爲めであつたらしい。

當同人原眞弓氏の歌集嚴檜が東京にて出版された。

△

北滿歌人は創立第一年の少壯の意氣旺んで北滿の藝術創造を昂揚し北滿調建設に努力した。從つて本誌の特色とも見るべきは各作品に地方色の多く盛られてゐることと同人が各自覺的熱意に燃えてゐることで、いかにも新開の氣分が誌面に漲つてをり、編輯後記などにも旺盛なる元氣が感ぜられる。初め高山晃氏が編輯してゐたが、九月號を最後に轉勤してあとを相川濤氏が引きうけ益々「北滿調」完成に努力した。

論說の代表的なものには「北滿藝術を創造せよ」相川濤「哈爾濱のもつ文學的魅力について」土方敏「北滿の作歌態度」新井重美氏等があり、高山晃氏が五月號より「短歌の題材について」を連載してゐる。感想隨筆には天久卓夫、古川賢一郎、伊藤忠夫、富永幸子氏等のものが目立つてゐる。

本誌の主張「北滿調」に對しては「何故北滿と限つたか」等の聲も時をりきく樣であるが要するに次の如きものゝ樣である。

「吾々の周圍は日本內地とは氣候風土が全然異つてゐるし、又生活人の覺悟も內地人と違つて逞ましい意慾をもつて此處に來てゐる。是等のことから短歌を作るといつても幽玄さびなどとは全然違つたものになるのが眞個である。嚴寒にまけぬ健康さ太い神經、是等による吾々の周圍の特異なる素材を消化してゆくべし。そこに北滿調が生ずる」と云ふので全然この誌獨特の主張であり創意である。態度としても正しく純情と熱意ある同人達により作品も次第に完成せられてゆくことと思ふ。

本誌代表作中別掲三名を除いて拔く。

市島盛造

苦力らが日毎の山に木を倒す音とどろきつ冬深むなり

ひたと張り動かぬ河の處々凍て殘りたる水光り見ゆ

富永幸子

ポキポキと草ふみ歩む枯原のはたては碧き空晴るるなり
わが前をゆきなづむ馬車凍てとほる地にこだまして鞭をうちたり

西村ふじえ

車の上に積みゆく豆の豐かさや中秋節もま近となりつ
三十年を育みし棕梠や金故に手放すといふマダムを哀れむ

土方敏

尖塔の寺院の上のあをぞらを見つつしわれはひそけく歩む
兄は北支の戰ひの地にありにけり爭ひて別れしを今にして悔む

右の樣に取材に地方的のものが多く淸新潑剌としてゐるのは、同人誌友團結してモットーに向つてゐる努力の現はれであつて將來が期待される。

本誌も一回休刊したが何か印刷所に都合あつた由、月々例會を開き研究しつつ翌年へ移つてゐる。

△

アカシヤは第二年を迎へた。本年迄は隔月發刊であつた爲め何となく物足りない感もあつたが、昭和三年あかしや會創立以來の同人及新入の同人の熱意次第に加はり號を追ふて向上の氣運に向つた。編輯名義人は大下三雄氏となつてゐたが同氏が一身上の都合にて全然編輯に關與せず、實際に於いては甲斐雅人が專ら編輯に當つたので十一月名義人の變更をなした。甲斐水棹は單にアカシヤ人のみならず全歌人に呼びかける信念を以て每號卷頭言を掲げ「傳統の上に立つて自由に現代人としての個々の人間性昂揚を目的とすべきこと、又地方人としての淸新なる短歌制作に努力すべきこと」などを主張した。尙十一月一周年記念號は七十頁の倍大號を出し、中にアカシヤ趣意要項を發表して本誌の主義主張を明瞭にした。

本誌は主宰者が水甕同人であるため、水甕を祖述する云々の言も見聞したのであるが、元來水甕が偏狹なる主義主張を持たず專ら個性の昂揚を目的とする行方であり、アカシヤが前述のイデオロギーに立つのであるから決して個々を束縛する如き言動なく一意自己表現の眞髓を目ざして進んで行つた。その爲め本誌の特徵としては作品にも夫等が表現せられをることで、論說批評も亞流的形骸的でなくそれぞれ本人の研究創意に成つてゐることは全歌壇の認識せる所と思ふ。

論說の主なるものは橋口次夫氏の「歌に表はれし憂鬱なる潮流」池田政治氏の「短歌用語の問題について」甲斐雅人の「短歌內容に於ける現代性の介在」甲斐水棹の「感銘歌私鈔」（共に連載）等であり隨筆感想等では伊東千鶴子、高橋房男、北林祐道氏等が見るべき作を殘してゐる。其他歌集評、合評選後評は同人交互に、擔當して繼續し本質的研究ものを豐富に讀ませていつた。

一週年記念號よりは「歌論一瞥」宮島正美擔當、「滿洲歌壇展望」同人協力を開始し以後繼續することとした展望欄は特に全滿各誌でも贊意を表した。例會は每月一回互評研究をつゝけてゐる。

作品の代表的なものを別揭三名のほかより拔く。

故池田政治

長生きは我れはせざらむと友にいひつつ其こゝにわが
涙ぐめりき
闇にありて寬ぎゆくに似し心あらし遠ぞく果に聞き澄む

甲・斐雅人

武裝して吾が家をいづる兵士ふたり外にまつ聲聲にまじり行きつも
雞舍がひく影の角度は日日おなじく黃薔薇にけふの陽のかげりゆく

橋口次夫

保定爆擊の事變號外をとり圍み參謀本部員のごとく吾等もありつる
至急親展のかへしは書かず三日たち漂然として旅にいで來つ

角谷靜江

ひそけくも瞼に來つる面わなれ夜半しみじみと覺めて嘆かふ
白きバナマ目深に似合ふ君なりし渤海夏風ぎて樂しかりにし

谷岡智子

燈火管制の黑幕はりてこもる夜の部屋のあつさに子はむづかりぬ
大建築の現場に近きこれの道牛車のわだち深くつきたる

高橋房男

戰ひに召されん時世に進みきていまだ子もたぬ嬶を寂しむ
粧ひし構へにあらず聲を聽せゆく兵あるゆゆしき寫眞

高橋雅子

古めきし御堂はただ廣々し念ずる言葉ととのへ歩む
醉にまかせ支那を罵倒する白糸露人の民族意識すらか
弱きものを

△

ラヂオ歌壇は十二年一月より新設され毎月一回JQAKより甲斐水棹が選後感を放送してゐる。作品は都度サンデーラヂオに掲載してゐるが、代表作として次の數氏のものを拔く。

井上壽老

軍馬たちし後の校庭ただ廣し林をめぐりて芽ぶく麥あり

武田勝利

生藥のなかに交れるものの芽のくすりの色に干からびゐるも

野田勝

粘稠の液のおもてに比重計とわが顏つかれ寫りてありぬ

平井湯村

機械化の石炭港よぎりきて柳芽をふく村つきたり

小島眞砂

何となくととのはぬもの胸にありとけゆくコツプの氷をつつく

滿洲アララギ人の精進はアララギ流の鍛練道に惇らず默々として作歌研究に努力する方で一面滿洲短歌同人の精進態度にも共通する。月々の萬葉研究は既に十幾年間繼續し、今や第十卷に及んで武田尊市、加藤鐵、湯本勇之助、石光ヨシ子、櫻田正東氏其他十餘名程の人々が熱心に研究互評をつづけアララギに發表しつつある。

水甕大連支社は月々會合、作品研究等は水甕に發表し當地ではアカシヤに發表してゐる。

創作支社ますの會では會員のみ隨時謄寫版パンフレットにより作品研究を發表してゐる由、直接滿洲歌壇へは合朋を通じて發表してゐる人あり、創作にのみ出詠する人もある樣である、同人に平山斌、三井實雄、朝原信一郎、橋本淺夫氏らがある。

新京歌話會は十一年發會より繼續して月々歌話會を開き三井實雄、桃北好澄、鈴來濟、津田八重子、石田幸氏をはじめ諸會員の作品、批評、動靜等は細大洩らさず新京日々新聞に發表された。尙新京にて別に熱心に集合研究してゐた清明短歌會は內山若校氏の大連轉住と共に滿洲短歌に合同した。

滿洲藤浪會は大體合朋の項で述べたが尙別に短歌至上主義同人のみ月々會合研究しつつある。其消息及作品は合朋短歌至上主義に發表してゐる。

吾妹支部は奉天撫順に盛んであつて奉撫支社を形作り本年十二月發會した。荻野精一、江藤秀雄、石井重子、加倉一己、吉田信幸氏他全十餘名研究をつづけてゐる。

ごぎやう支社は岸野愛子、須知まさえ氏他五六名の人々が隨時集合歌作研究をなしてをり、岸野氏は滿洲短歌に、須知氏はアカシヤに發表してゐる。

元曉原主宰神山哲三氏は本年は無所屬で奉天の商工新報に作品及論評を又隨筆なども發表してゐた。

あしかび同人三宅豐子氏が奉天に於いて歌集「七草」を出版し其祝賀會が同地で盛大に行はれた。同書に關する反響は各誌上及び滿日新聞に發表された。

草炎同人桂定治郎氏が本年熱河に赴任され國民文學の山本友一氏が白城子に居つて共に內地歌壇に活躍してゐられるが滿洲歌壇への發表は未だ見ない。

近代短歌の岡二郎氏が滿洲日々新聞をはじめ、幾種かの歌誌文藝雜誌に幾干かの歌論或は滿洲歌壇としての諸問題などを發表されたが作品は見なかつた。

新短歌の白井尙子氏は奉天にて、同藤井千鶴子氏は大連にて共に作品研究に努力されたが當地歌壇に發表されたものは隨筆のみであつたのを惜しむ。

△

終りに新聞雜誌について一言しておかう。滿洲日々新聞は初め殆んど歌壇的作品記事を見なかつたが、岡二郎氏の新短歌論を二三回掲載した。

新京日日新聞は前述の通り新京歌話會の機關紙の如く報導し、新年文藝にも短歌の懸賞募集などして貢獻するところが大きかつた。

大新京日報、哈爾濱日日新聞、奉天日日新聞も時に作品批評などを掲載した。

滿鐵の機關誌協和には編輯局選の歌壇があり。滿蒙、滿洲公論、滿蒙評論、新天地、日滿女性、女性と滿洲、大連公論などにも時々作品歌論が發表された。電々會社の「電々」及警察協會雜誌にも歌壇が設けられてある由本年度のものは見ることを得なかつたのを遺憾とする。

以上大略を纏めたつもりであるが尙遺漏ある場合は御指摘願ひたく、讀者諸賢にお願ひして擱筆致します。

俳壇展望

高山峻峰

滿洲に於ける俳壇は種々多樣の系統を發見することが出來るが、大體ホト、ギス、石楠、曲水の三系が大動脈となり、それぞれの機關誌を發行してゐる。

△

平原　月刊　一部　二五錢
發行所　大連市花園町六四番地
三溝方

平原はホト、ギスの「花鳥諷詠」をモットーとし、三溝沙美、三木朱城、江川三昧、久米幸叢等の諸氏中心となり、昭和四年四月創刊、十二年九月號を以て通卷百號を重ねた。

雜詠選者　江川三昧

作例

水甕に浮べて賣れる西瓜かな　沙美
仰ぎ見て月の欠けゐる驚備かな　朱城
空を航く翼も車輪も朝燒くる　三昧
梅雨空の下にフランス船白し　蘇城
消えかけてにわかに疾し走馬燈　雨意
興安のうすうす見ゆる野を燒けり　幸叢
大馬路にかゝりそめたり月の馬車　休山
えぞ菊の孳かさなりて深みどり　三橋

滿洲　月刊　一部　二五錢
發行所　大連市神明町百番地
江口方

滿洲は曲水系に屬し昭和七年七月鉾者之れを發行し十二年末通卷七十九號を重ねたり、同人は全滿、北支及中支に及ぶも重なる同人として江口我孫子、本間沼路、野嶋島人、白石久詩子、堀之江錦江、武田しをり、宇都宮嵐翠、笹原魚衣、丸山青瓢等其中心となり居れり。

句帖選者　高山峻峰

作例

病みほうけしごと朽野の曉もちて　嵐翠
行く年や月夜果てなき雪高原　錦江
蹟々に暗き冬至の街明けり　汀路
燈の落葉夜の國の奥へ消えにけり　魚衣
舵守りて吹雪に歸心矢の如し　青瓢
兒の寢顔見にゆく二月襖かな　久詩子
口吟む師の詠調や風叢る　しをり
銀漢や征兵宿す大連市　我孫子
天國をかゝけ水揚く裸婦の國　島人
海は天へ溶けて晉なきおほろかな　峻峰

大連通信俳句　月刊　一部　十錢
發行所　大連市青雲台五〇番地
寺内方

本誌は雜詠選者を置かず、自句發表「各人五句」機關となし、毎月誌上互選の方法を採つてゐる。隨て各系綜合的句會となつてゐる。和田烏峰、寺内默子、寛鳴鹿、加藤映一の諸氏中心となり昭和五年の發刊より今日に及んで居る。毎號四頁

作例

花氷溶け流れけり能さ中　默子
おこたりし風邪に重き夏蒲團　烏峰
窓涼し鉢の小石に山河あり　鳴鹿
うちにゐてよく食ふ瓜や夏休み　武士
殘雪の大晴に在り表忠碑　映一
福は内會者十六皆笑ふ　月哉

山楂子　月刊　一部　三〇錢
發行所　奉天市大和區葵町六九
成田方

本誌は滿洲石楠聯盟機關誌として之れが結成は十一年三月なれとも昭和六年の創刊にかゝつてゐる。石原沙人成田凡十、福田窓花、梅村素人、志和斗史、金子麒麟草等の諸氏が中心となり、石楠系俳人を網羅してゐる。

雜詠選者　金子麒麟草

作例　（五月號より）

表忠塔朦朧たり胡沙夜も降る　沙人
夜のまどゐの菜の花は繪に見るばかり　窓花
梨花無香てばなをかんで羞恥なし　素人
街の女はきれいにりぬ舞史斗ふな　絮柳

春みぞれ鴉の懸巣空に浮き　麒麟草
霾の空割るゝと見るや雨くだつ　凡十
霧の夜の輪禍ちまたを血ぬりたり　五味子
古き怒り湧きつゝ粉雪昏くなる　呂青
涅槃相冷たきものゝ天地佛　十九瓶

△

新聞、雜誌

一、滿洲日々新聞　選者　島田青峰
一、サンデーラヂオ　同　高山峻峰
一、觀光東亞　同　同

△

滿洲に於ける他の新聞には俳壇を置かず各地の句會、吟社等の吟詠を時々發表さるゝのみなり

附記材料蒐集の暇なく概略を丹記せる次第なればこを諒とされんことを希ふ

兒童文學追想

石森延男

滿洲地元文藝について、とやかくいはれてきたのはここ二三年のことである。滿洲の特異性を文學的眞實によつてあらはさうとする傾向、努力、意志はもつと早くから叫ばれてよかつたものである。

滿洲の兒童文學についてかゝる主唱を初めたのは昭和三年頃からであるから既に十年ばかりの日時はたつてゐる。その間、社會的には目に見えぬ不斷の作品發表が行はれ、それぞれ、滿洲在住の兒童たちに、母親たちに影響を與へて來た。

もつと兒童文化運動に對しては、一般的理解があつてもいいし、援助があつてもいゝわけだ。

やゝもすると、大人どもの足の下にされたり、大人たちの考へ方に劣るものと早合點されてあとまはしにされがちである、滿洲殖民地では、ことにさうだ。

昭和十二年度の滿洲兒童文學としてあげたい單行本は合志光氏の「滿洲少年實話集」であらう。その他に地元に於ける單行本はなかつたのは寂しい僅かに雜誌「童話作品」によつて次の諸氏が、發表した位のものである。

一月
母（童話）矢澤邦彥
河（童話）久富榮次郎
粉雪（童話）柳生昌勝
なでしこと松（童話）松尾茂
茶坊主（童話）政本勇
蜂の巣（童話）小林正則
ほそいお月さん（童話）石森延男
蜜柑（童詩）高橋周子
みなし兒（童話）平力久直

二月
五六行しかないお話（童話）矢澤邦彥
芝居小屋（童話）柳生昌勝
ゴムテープ（童話）松尾茂
少女たちと小魚（童詩）石森延男

三月

ちつぺの話（童話）佐々木梯三
一年坊主（童話）松田公子
健兒團（童話）大津房子

重さんと子供たち（童話）松尾茂
喧嘩（童話）政本勇
蜂の巣（童話）小林正則
岸の蛙（童話）石森延男
健三とミス（童話）松田公子
一枚の葉（童話）高橋周子
夕やけこやけ（童話）平方久直

五月

おみつ（童話）松尾茂
砂糖水（童話）政本勇
平坊とおばちゃん（童話）小林正則
綿雲（童話）石森延男
もや（童詩）高橋周子
櫻の蕾ふくらむ頃（童話）高島豐
巣（童話）平方久直

六月

すみれ（童話）久富榮次郎
最後の夢（童話）松尾茂
赤ン坊はどこから生れる（童話）小林正則
北平といふとこ（隨筆）石森延男
幸福を攫つた小犬（童話）高島豐

七月

採點（童話）久富榮次郎
青いバス（童話）柳生昌勝
町（童話）松尾茂
この一年（童詩）石森延男

九月

雨（童話）久富榮次郎
月夜の林檎島（童話）松尾茂
二人の繪かき（童話）政本勇
林の子供たち（童話）小林正則
遠泳（童詩）石森延男
ルルとシル（童話）高橋周子

十二月

セントニコラスさま（兒童舞踊劇）石森延男

評論

滿洲文學の精神

城　小　碓

我々は今、巨大なるものに向つてゐる。いひかへれば我々が滿洲文學云々を叫ぶ。その滿洲文學なるものが我々にとつては巨大なるものである。

處女地、それは世界文學から滿洲文學に與へられた言葉である。我々はそれを如何に開拓すべきか思ふだに憂鬱でもあり、また反對に我々を希望に燃えたたせるのである。

大きく滿洲文學といへば、滿洲の產物の如く滿洲にゐる人が滿洲のことを書けばよいやうに思はれまたそれに違ひない。その反對の例には我々が歐洲に旅行して歐洲のことを盛んに書いたからとて、決して歐洲文學とはいつてくれない。只單に旅行記に過ぎないのである。定住は大きな條件である。滿洲文學は滿洲で生活する人が滿洲の土地、氣候に即したことを書けば滿洲文學であるといへないことはないのであるが、然し純粹なる意味での滿洲文學はさうした單純なるものではない筈だ。滿洲文學を特徵づける何物かゞ存在しなければならない。私は今、その未知數な巨大なる物に向つて、何物かを求めたい氣持で書いてゐるのである。

滿洲國の歷史、滿洲そのものは三千年の昔から獨立國として歷史に記錄されてあるのは、誰しも御承知の事、然し滿洲文學なるものは未だ存在を見なかつたのである。渤海國の名稱の下に、或は契丹國の名稱の下に、文化的には可なりの發展のあつたことは歷史に見えるが、ことに契丹國に至りては契丹文字まで殘されてはゐるが、文學的には何物をも殘されてゐないのである。清朝亦然り愛親覺羅の昔より墳墓の地でありながら、これを邊境視して、只植民的產業地としてわづかにその存在を認めてゐたのである。甚だしきは清朝末期に至りては國際的問題のわづらはしさに繼子視し正に放棄してゐたのであるかうした環境の中に文學は愚な事、文化の發展は思ひもつかなかつたのである。無論滿洲は氣候風土の關係によつて住民の心に藝術的要求心が起きなかつた事も充分

にうなづかれるものではあるが。

然し、それが露西亞の滿洲經營となり、多大の犧牲が拂はれて日本に移り、南滿洲鐵道株式會社の經營によつて急速な發達を見るに及んで、諸外國は滿洲に食指を動かし始め、中華民國もそれ等の國に副うて末練を持ち出したのであつた。もともと清朝の亡んだ現在、中華民國は滿洲をその領有として主張する權利はない筈であるが只清朝の領有してゐた滿洲をあたかも自己の主權であるかの如き錯覺をもつてゐた。事實は清朝その者の領有してゐたのが中華民國である。滿洲の獨立を阻害してゐたのである。歴史はもとより、現在麗然として獨立せる滿洲國の前には一片の言葉をさしはさむ餘地はないのである。

藝術に國境なし、それは我々も肯定する。然し一國に主權の確立する以上、その國を表徴すべき文學がなくてはならない筈だ。强力なる國家においては尙更の事。國家の獨立を强調すべき滿洲國においては、當然に滿洲文學なるものが生ひ立たなければならないのである。

然し滿洲文學なるものは何か、その根本となるべき精神とは何かかういふ私は、もとより淺才非學の若輩に過ぎず、次に記錄してゆくものは只自己の脊弱なるノートの斷片に過ぎないのであるが、只將來必至的に研究されるべき此の問題について、諸君への御參考になれば幸ひである。

現在の滿洲國は（今の場合私は當然滿洲國民として滿洲國の稱を我が國と云ひたいが、私自身　日本の國籍にあり、また關東州に居住してゐる關係から我が國と言ふのは避ける）云ふ迄もなく五族協和の上に築かれてゐる即ち滿洲族の主上を戴き、日、鮮、漢、蒙の民族が一致團結して國家を形成してゐるのである。たとひ現在の指導的地位に日本が立つてゐるにせよ、これは過渡期として當然である。無論、將來に於ては政治的にも、文學的にも、五族平等に否その五族と云ふ言葉も消滅しなければならない。

さて、世界文學から見て滿洲文學は略何處の國の文學に接近すべきか。滿洲國の周圍には世界的な露西亞文學がある。日本文學はもとより、支那文學もある。云ふまでもなく各々その特徴を持ち、また發揮してゐるのである。思想的問題は別として、地理的氣候的からは露西亞に文學接近し、單に人口的にいへば支那文學、指導的位置から行けば無論、日本文學に接近せねばならないのであるが、然し文學史を歴史的に檢討してみると、亞米利加文學が發生した形式に接近するのが比較的容易である。もとより日本文學、露西亞文學、支那文學を合流し其處に滿洲の士に即せる文學、即ち滿洲文學を創設し世界文學の水準の到達するには、少くとも一世紀の餘裕を見なければならないのであるが、それは只形式上の問題であつて、根本の精神は最初から徐々に强調されて行かなければならないのである。

文學の場合、我々日系から見れば日本文學の延長でも差つかへのない筈であり、漢文系から行けば支那文學の延長であつても差つかへのない筈ではあるが、然し獨立の國家として國民の要望せる文學は、當然一致しなければならない。又さうする事が國民融和の上に重大なる鍵となるのである。

現在の滿洲國の國語は、別に制定されてはゐない。どの會話も國民は自由であるが、公文書に限り日本文を附することゝなつてゐる筈だ。國家としての統制上、一定の用語の必要なる事は論を待つまでもない。即ち滿洲文學は前述の日本文學を主流にして、つまり日本文を主にして滿洲文學を創造せよ、否さうすべく約束されてゐるのである。この點、我々日系の住民は文學的にも惠まれてゐると共に、また、その責任を感じなければならないのである。

私がアメリカ文學形式に接近するのが滿洲文學を創造するには比較的容易であると言ふのは、アメリカ文學そのものでなく、アメリカの文學史そのものである事で、それは各種種族の上に立ち、世界でもつとも新しき歴史をもつた文學であるからである。

言ふまでもなくアメリカ文學史は、コロンブスのアメリカ發見から始まるとしても、ほんの未だ四世紀に過ぎない。それも百年は探險時代として文學そのものには凡そ緒の無い時代であつた。この時代には、主としてスペイン、フランス　オランダ　イギリス等の諸國民が移住したのであるが、結局イギリス人が勢力を得て、イギリスの文化が總てを支配するやうになつた。然し、そのイギリス人にも二つの動向があつて、即ち南方から上陸して移住した舊教派、北方から上陸して移住した清教派の

人々である。この兩者の植民の動機が非常に異つてゐた。前者はエリザベス朝に捲き起つたルネッサンスのもたらした人間的欲望、殊に冒險欲、財寶欲にかられ、無限の寶庫とも見えるその新世界に誘惑せられてやつて來たのである。そしてその後、續々とこの地方に移住した連中は前と同じ動機からでもあるが、中には清教主義者が王政を倒し權威を振ふに至つた爲めに難をのがれ、また財寶を求めて渡つて來たフランスの王黨員が多かつた。しかるに後者はその動機が前者とは大いに異り、母國イギリスの宗教上の壓迫を避け、信仰の自由を求め、宗教上理想の天地を築かうと思つて渡來したものである。一体、彼等の奉じた清教主義とはフランスの宗教改革者カルヴインから發したもので、彼等にとつて神は愛の神でなく、義の神、權勢の神である。信者は神の意志をこの世に行ふ事、奉仕に依つて救ひの神に對する義務を果さなければならない。家業をはげみ社會を清め、國家を向上せしめなくてはならない等等。

以上の如く異つた精神と文化とを共にもつたアメリカ文學は、例の獨立戰爭となり、南北戰爭から米西戰爭となつて、世界大戰後には押しも押されぬ世界文學の寵兒となつたのである。

無論、私は滿洲文學をこのまゝアメリカの文學史にあてはめようとするのではない。滿洲國は國情も、また獨立の動機も異にしてゐる。只その新しい歴史と、その文學を確立した精神をとり入れたならといふのである。

一國の文學には歴史がある。たとひその消長はあるにせよ、何物かに理論づけられてゐるのである。作品の後に理論づけられたものか理論の後に作品が從つて行つたものか、常にこの二つに左右されてゐるのである。

滿洲文學の場合は、この二つの内の何れであるべきか云ふ迄もなく、理論が作品を價値づけて行く後者の場合であらう。時間的に發展の過程をたどり行くもの、其處には必然的に非藝術的な、不純なる作品が現れてくる。かうしたものは嚴正なる批判のもとに、勇敢に淘汰して行く氣概をつて持ほしいと思ふのである。

文學においてはそれ自體、政治と相反する場合がないとも限らない。即ち政治は當爲的に、文學は自然の動向に流れて行くからである。それは各國の文學史が雄辯に物語つてゐる。果して滿洲國の場合、政治そのものに

擊肘を受けられなければならないか。幸ひにして滿洲國の場合においては、その擊肘を受くべき問題なく、又それを受くべき文學自體の存在も認められないのである。

文學に限らず、總ての藝術は純粹であらねばならない我々は先づ純粹なる氣持で、滿洲國の建國精神を文學に受け入れなければならない。確固たる信念を養ひ、いやしくもそれに對して不純なる迫害があれば、斷乎として反抗しなければならないのである。五族協和の下に結合された魂と魂は何のわだかまりもなく、何の猜疑もなく協力一致して滿洲國を育てゝ行く。我々の墳墓の地となるべき、我々の子孫を殘して行くべきこの滿洲國を、よりよき理想郷を建設しなければならないのである。郷土愛、つまり郷土愛そのものが五族を同一方向に轉ずる唯一つの道である。

茲に於て問題されるべきものは祖國愛である。當然現在の滿洲國の國家を形成する。しかも一つの大きな民族の歸趨である。祖國愛か、郷土愛か。文學の場合に於ても、この問題の動向によつて滿洲文學の方針が分岐されるのである。

祖國愛か、郷土愛か。郷土愛か、祖國愛か。

現在の國民の惱みは言葉にこそ出さね、この問題にあるのではなからうか。私の現在では、郷土愛より、この祖國愛の方が大きいのだ。然し私の場合でなく、大きく滿洲文學の問題から檢討する時、もつとも強く郷土愛を主張しなければならないのではなからうか。

五族融和の上からも、將來に於けるこの問題に對して文學の場合、祖國愛を犧牲にしてこそ滿洲國を愛し、滿洲文學を世界文學の水準に引上げる過程ではなからうか。

最後に私はいふ。滿洲文學の精神は、郷土愛に立脚し建國の精神を強調し、五族の融和を計ることこそその根本であると。私は敢て自問を繰返す、益々發揮しつつある滿洲國の國威に副ひて滿洲文學を確立し、ひいては世界文學の水準に高めるこそ、我々の責任でもあり、その報國の至大なるものと確信するのである。

滿洲文學に就て

―城小碓氏の論を讀んで―

角田時雄

城小碓氏の「滿洲文學の精神」は文學者ならざる門外漢の我等にも當然の課題を論じたるものとして興味深く讀まして貰つた。軍事と政治に全力をあげた草創時代の滿洲から、經濟に産業に、そして最も重要なる精神文化の建設へ必然的に進まねばならない現代――その方面に携はる人々の歴史的役割は、まことに重大である。私は滿洲を知ること（と云ふより棲むこと）未だ僅かに一年一人前の口を利く柄ではないかも知れないが滿洲に棲んで見て最も感ずることは、在滿日本人青年の精神生活の問題である。男女を通じて若い人々の精神生活が、非常に淀はついてゐるやうに思へてならない。殊にそれを痛感させられるのは、インテリ層とも云ふべきサラリーマンにおいてゞある。古本屋に入つて見ても、雜誌屋に立つて見てもそれを直感し痛感する。

或先輩は、滿洲には指導精神はあるが思想がない――と極言して居つた。もとより嚴密な意味に於てさうは云へないが、尠くとも、五族協和の中心をなすべき日本人青年層の思想的動きが、極めて不活潑であるとは云へると思ふ。これには諸種の原因や、影響があらう。それを檢討し剔抉することは重要な問題であるが、此處には別問題として城氏の「滿洲文學の精神」に就て、門外漢の讀後感を率直に書いて見たい。

混亂時代や草創時代には、文學の地位は極めて脆弱である。いやまるで問題にならない時代すらある。しかし、それは極めて一時的な、しかも表面的な場合であつて文學は凡ゆる時代に生き、あらゆる時代に重要である。祖國日本が曾て儒佛の外來思想に惑溺し、一大混亂時代を呈したる時、日本の眞の姿を明かにして萬丈の氣を吐いたのは我が國文學であり、賀茂眞淵、本居宣長兩先生の如き國文學者たちであつた。

輿論――眞の意味における輿論――とは民族の血であり、傳統であり、純粋なる感情の波動である――ヘルンの「文學論」。而して文學の地位が表面的に、時代的に

何處に置かれようとも、文學の價値と民族的な力には（文學それ自身の本質的消長はあつても）本來の重要性には變化はない。建設時代の滿洲――においてこそ、文學の重要性は層一層問題視され注目されねばならぬ。殊に青年層の精神生活が、輕薄なる明朗さを發揮しつゝある滿洲の都會生活を見る時、文學運動、文運勃興を祈らざるを得ない。

さて、城氏の所論には大體において私も同感である。しかし、率直に云へば城氏の所論全體を通じて、政治的範疇――とも云ふべき觀念が、常に文學に對する本質的情熱を禍して居はしなかつたかと思ふ。文學は文學それ自體の場合において、文學至上主義であるべきだと私は思ふ。私は文學者ではないが恐らく眞に文學する人々はさうであらねばならぬと思ふ。

また祖國愛と鄕土愛の問題が、滿洲文學の方針を決定する――といふのは餘りにも簡單な、政治的な見かたではないかと思ふ。況んや、城氏は頻に建國精神を强調して居るが、眞に祖國日本の建國精神と、滿洲帝國の建國精神を體感せらるゝならば、祖國愛と鄕土愛とを分岐點におくのは矛盾ではなからうか。いふまでもなく鄕土として滿洲を愛することは、祖國愛に出發し、祖國愛に徹底することであらねばならぬ。五族協和といふことも政治的に、或は行政的には計畫的であり指導的で政策的であつてよろしいが文學あるがまゝなる我等の惱み、あるがまゝなる我等の誇り、あるがまゝなる我等の姿、それが眞に五族協和に役立つ時でなければ眞の五族協和はない。我等の人間的良心や、日本人的精神の燃燒が純粋に流露する時、其處には目色、毛色の障害物は存在しない日露戰爭における我軍將兵の忠勇果敢と、武士道的態度は、屢々露軍側の戰史筆者をして感激の筆をとらしめて居る。また「日本人此處にあり」の叫びは、世界人を感動せしめた。

文學はあくまで純粋なる文學であり、あくまで純粋なる生命の燃燒であるべきだ。また日本人は何處まで日本人である。祖國愛を遠慮する必要など微塵もない。外務省の對外文化事業として計畫さるゝ映畫製作が、常に滑稽なる失敗に歸するごとく、觀念的な机上のイデオロギーや、計畫的、政策的な掣肘の下には偉大なる藝術は生れない。

曾て華やかなりしイデオロギー文學、所謂プロ文學は

全く泡沫の如く消え失せた。それは本質的に文學的でなく、日本人的でなく、人間的でなかつたからだ。

滿洲文學の今日に於ける役割は先づ日本人の滿洲文學として出發してよいと思ふ。而して、それが滿洲に於ける日本人の生活に喰ひ入り、日本人の生活を充實せしめ得たならば先づ第一の成功と云ふべきであらう。云ふまでもなく、內地の出版物に現るゝ文學と匹敵して遜色なき文學となるだけでもまだ容易ではあるまい。滿洲で發行さるゝ諸種の出版物のものを見た私の遠慮なき感想はまだ同人雜誌の水準に漸く達しつゝあるところだと思ふ。

その鄉土、その風物、その自然、その民族性の特殊な姿と雰圍氣が文學に表現さるゝのは、意識的、計畫的、觀念的にされるのではなく、またそれを特に强調し、特に表現されたからと云つて、本質的な文學の價値と力にはなんの影響もない。筋も、叙景もない、隨筆でも、それが優れたものであれば優れた文學として尊敬されるのである。大愚良寛の歌ににじみ出づる人間味とローカルカラー、其處まで純化し、其處まで沒入した時眞の文學が生れるのだ、と私は思ふ。

文學には觀念は邪魔物だ、あくまで本質的に苦惱し、本質的に懷疑し、本質的に突つ込んでゆくべきである。その本質的な深さ、その觀念せられざる、計畫せられざる、本質的なものゝ力こそ、眞の文學であり、眞の五族協和ではないかと思ふ。

當爲的と自然的

—城・角田兩氏の間隙へ—

大河節夫

滿洲文學の根本問題が提起され檢討されるやうになつて來たことは、滿洲の社會秩序の整備、發展の結果であつて、甚だ喜ばしい現象である。滿洲文學は滿洲文化の一翼としての役割を充分に果し、社會の重要なる契機となる爲に今後益々理論的に檢討され、實踐的に創作されなければならぬし、また創作されるであらう。

角田氏のいはれる如く、在滿日本人青年は非常に浮薄なところがある。それは時代の病弊ではあるが、日本において社會條件の惡しき側面を反映した青年の浮薄は、滿洲では自乘されてゐるやうに見える。經濟的に餘裕が多いために促進されたのか、社會の未來への止揚的契機が滿洲においては青年の頭腦に反映しにくいのか、政治政策經濟政策の先端にあるために惡しき側面がより鋭くなつてゐるためか、傳統の壓力、歷史の重みが足りず、文化的に後れてゐるので、かゝる傾向を阻止、緩和するものがないためか、兎に角、在滿日本人青年は浮薄なところがある。前途の人間的な光明を目がけて奮鬪努力する者は寥々たるものだ。

最近よく性格の弱さ、動物的本能等に對して人間的といふ言葉が用ひられるが、私はそれらを人間的なものゝ中より非人間的なものだと思ふ。たとへばカフエで飲みダンスホールに行くことが人生を知るのに役立ち、人間的だと思はれたりする。それら一切の享樂は人間のすることであるから人間的ではあるけれども、人間性は稀薄である。それらは人間性の上に浮ぶ泡沫のごときものだ眞に人間的なるものは生活を深く深く掘り下げて初めて得られるのであらう。

文學は人間性の深さと廣さと力强さの中からのみ生れる。だから滿洲文學が盛んになれば青年の性格に磨きをかけ、人間的に彼らを高めることに役立つであらうと思ふ。

私は城氏の所論には云ひ足りないところや、混亂があると思ふ。

城氏の提出した問題の中で、私は言語、民族等の問題に

は觸れず、文學に就いてのみ少しく書きたいと思ふ。私も渡滿後日なほ淺く從來滿洲文學を充分に知らないので勢ひ抽象的たらざるを得ない。

文學は自然の動向に流れてゆくが必ずしも單純に自然の動向に流れるのではない。文學が社會の發展に制約されてゆくといふ意味では自然に流れるけれどもそれは究極においてさうであるに止まり、その基礎の上においては、種々の領域との間に媒介運動が行はれてゐる。文學それ自身の內部においても、理論と作品との間に媒介運動が行はれる。いかなる場合にも起源的には實踐が理論に先行するのだが一度人間が理論的に自己を高めた時には、兩者は交互に滲透し合ひ影響し合ふ。從つて場合によつては理論が實踐を、文學では作品を指導する。何れが指導的になるかは、兩者の比重の變化によつて決まる。一般的には、飛躍期においては理論が指導的になるのだが、その指導的理論それ自身は、新しく生成して來た實在から生れたものである。だから指導的な理論家は、新しき實在をその萠芽の中に、またはいまだそれが支配內にならぬ中に普通の人よりも遙かに鋭敏な感覺と悟性とを以て認識するのだ。

政治もまた文學と同じ意味で決して當爲的ではない。政治が當爲的に見えるのは、その政治的觀念の起源が閑却されるからである。

文學も政治も自然的動向に流れるけれども、人間が作るものである。必ず人間の頭腦を媒介とする故に、ある場合當爲的に見られもする。城氏が自然的に流れるといふ文學を、當爲的に動かさうとすること自身は、文學が自然的動向に流れるといふ命題と矛盾するものではないが、一見矛盾するごとく見えるからこゝをよく說明してもらひたかつた。

私には次のやうにも思はれる。氏にあつては兩者の關聯が未だ精密に考察されてゐないで、滿洲の現實の現象形態に氏の頭腦が強く影響されてゐるため、現段階において意識的な努力に俟つことの多い政治は當爲的と見え、飛躍期から時間的に遙かに手前の所にある滿洲文學は滑らかに動いてゐるため自然的動向に流れると思つてをられるのではないか、と。

「文學は純粹でなければならぬ」この命題は決して何らの世界觀をも作者が持つてはならぬといふ意味に解すべきでない。人間は彼の社會的存在によつて彼自身の社

會的意識を作る。いかに純粹であつても、作者は皆各自の世界觀をもつてゐる。どの作品にもその世界が滲透してゐるのだ。作者がそれを意圖してゐゐ、ゐないに拘らず。いかに手品師的巧妙さを以てしても創作する時だけその思想を棄てゝ純粹になるといふ藝當は出來ない。大體純粹の頭腦とか態度といふものは存在しないのだ。

若し純粹な頭腦があるとして見よう、それは何物をも認識できず、何ものも表現できるものではない、現實は無限の內容をもち、無限に錯雜してゐる。現象形態は殆どつねにその本質と一致してゐない。この現象形態の內部に その本質、生命、內部的聯關を認識し、これを摘出し更にそれを概念によつてではなく、具體的に表現するのが文學である。

本質、生命、內部的聯關を他の言葉でいへば「眞」である。藝術が我々を感動させるのは、既知の眞のみでなく、同時に經驗的に直接には我々が到達し得ない眞をも我々に與へてくれるからだ。純粹な頭腦は——もしあるとして——かゝる眞を現實の無限の錯雜の中から摘出する能力をもたない。

自己の世界觀をもたないこと、確固たる立場のないことは個性的でないことなのだ。その逆も亦眞である。そしてただ眞に人間的なものだけが眞に個性的たり得る。だから文學は眞に人間的な人間によつてのみ作られ得るのである。

因に個性、人間性を何か神秘的なものと解してはいけない。個性、人間性とは畢竟するに社會國家、世界に外ならぬ。

作者が彼自身の世界觀を以て文學するとすれば、彼の作品は主觀的であつて普遍性がなくなりはしないかといふ疑問が生じさうである。が、秀れた作品は、すべて主觀的であつて同時に客觀的であることを知れば、この疑問は解けるであらう。たとへばトルストイの作等でよく分ると思ふ。

トルストイの藝術の偉大なる部分は、彼の主觀的な思想が客觀と一致した部分であり、卑俗な部分は彼の主觀が客觀から游離してゐるために、客觀の內部的生命を把握し得なかつた部分なのだ。

作者は、自己の思想を客觀にあてはめようとして、客觀を歪曲してはならない。その場合最もうまく出來た場合ですら、作品は觀念の外化になる。觀念が洋服を

着て喋つてゐるやうな現實的な死せる生命のない人物が出來あがる。ある學者は、この種の誤謬を犯した作者としてシルレルをあげてゐる。私はツルゲーネフの「父と子」を讀んだ時、同じやうに思つた「復活」のネフリユードフも觀念的人物になつてゐるので失敗だと思ふ。

「文學には觀念は邪魔物だ。あくまで本質的に苦惱し、本質的に懷疑し、本質的に突込んでゆくべきである」

角田氏はかくいふ。

然し私には本質的に突込んでゆくため、本質的に苦惱するためには作者は一定の、彼自身の世界觀をもつてゐなければできないことゝ思ふ。文學は觀念である。現實を感性に受け入れた場合、その混沌たる表象を整理し、その生命をとらへるものも觀念である。どうしても觀念の力で生けるものと死せるもの、本質的なるものと偶然的なるもの、眞なるものと非眞なるものを見分けなければならぬ。

文學は經濟學とは違ふ。だから經濟學が最も單純な要素にまで社會を分析し、次に後方への旅を行つて社會を觀念的に再生産するやうな七面倒な手續をしなければならぬといふのではない。

世界觀が完全に頭腦と心臓とを染色してしまつた場合、即ち作者の血肉となつた場合を想像して戴きたい。

一般に世界觀といふと體系的な思惟でなければならぬと思はれるかも知れぬが、私の意味するところは、現實的なる思惟である。心臓の中にまで滲みこんだ思惟—變な言葉だが—である。頭腦が自由に思惟し心臓が自由に感じてゐることが、つねに矛盾せず、體系的な世界觀に一致するといふ風な、血管の中に赤い血となつて脈搏つてゐる世界觀である。

對外文化事業として制作される映畫や教育映畫や、嘗てのプロ文學が藝術として失敗してゐるのは作者に一定の世界觀があつたからではなく、世界觀が消化されてゐなかつたからだ。同時に作者が彼の消化不良の世界觀を現實に當てはめようとしたからだ。だから作品の中でそれは剝出しに出てゐるし、觀念の幽靈になつてしまつてゐる。世界觀を作品に押し着けようとする時作品は生彩のない、ひからびたものになる。

作者の世界觀は、農夫における鍬の如きものであつてその鍬が良いものであればあるだけ、農夫が畠をより

よく耕やすことが出來るやうに、人生の畠をより深くより廣く、より力強く耕し それから吸收した內容を藝術品として再現する力でなければならない。世界觀を作品に押しつけるのではなくして、人生の中に眞を見出すのだ、所謂世界觀とは人生の眞を抽象して之れを體系づけたものに外ならない。

現實的な世界觀を體現せる人が人間的に生きる時、現實と血みどろになつて取組む時、對象の生命が何ら理論的思惟を經ずとも直接的に心臓に感ぜられ頭腦に映ずる時、それらの材料が心の中で完全に醱酵して自然に流露する時、初めて眞の藝術品が制作される。その過程が餘りに自然であり何らの作意もない爲に誤つて作者に世界觀がないやうに感ぜられるのだ。

文學の對象たる具體的な生活の現代の特殊性は、作者の偏見や野卑なる意慾を驅り立てる傾向がある。商品生産社會は人間にとつて從つて作者にとつて一つの必然惡である。

今日では、いかに秀れた高尙な藝術品でも、ヅロースや羅詰と並んで商品市場で顧客に身を賣らなければならぬ。定價は顧客に送る秋波である。作家も人間であり食はねばならぬ以上は、よく賣れる商品＝藝術を生産しなければならぬ。たゞ藝術を生産するだけではだめなのだ。藝術は處女によく似てゐる。處女が純潔で高尙で氣質が優しくても顧客たる青年の嫁さんになる資格がないならば、即ち使用價値がないならば青年にとつても親にとつても價値がないやうに藝術品も商品としての價値、讀者にとつて使用價値のあるものでなければならぬ。親が娘の理性や感情の教育を怠つて、生花や琴や料理や良人操縱法ばかりに力をつくす時、單なる商品的娘ができ上るやうに藝術の商品的側面が支配的になる時、卑俗な、大衆に阿ねる作品ができ上る。作者は觀念を藝術に押しつけてはならない。と同時に藝術への純眞なる情熱を汚すところの藝術の商品性から自由にならなければならない。

建設の文學

木崎龍

もし「滿洲文學」を特殊な文學理念として、その特殊性において主張するならば、それは間違ひである。滿洲には滿洲の文學が存在せねばならぬ。それは、恰も日本には日本の文學が存し、フランスにはフランスの文學がある如く、事實であり乃至は當爲である。その事實乃至當爲としての滿洲文學を、特異なる文學理念におきかへることは明かに決定的な誤謬である。文學の理念は、時間的にも空間的にも普遍妥當性に伴はれて確立するものである。

滿洲文學は日本文學と絶緣して獨自の展開をなせとする主張の如きは、この誤つた置換の上に立つ空虛な掛け聲に過ぎない。なるほど現代の日本文學は、我々に敎へる何物をも持つてはゐない。しかし、それは何が日本文學をかくも無內容に無氣力に行きつまらせたかといふ貴重な歷史的過程を、赤裸々に呈示してゐてくれるのである。人間の解剖は、猿の解剖に多くの示唆を與へるであらう。滿洲文學は日本文學の、特に明治以後の文學の展開において、幾多の敎訓を受取る筈である。無慈悲にそれらを剔抉し、容赦なく批判攝取すること、それ自體が滿洲文學の生成發展に不可缺な課題でなければならぬ。いたづらに若き日の夢におぼれて、呼號叱咤するところに、歷史は何物をも殘したためしはないのだ。

現在世界のあらゆる國々を蔽ふものは、世紀末の惱みである。いふまでもなく、それは時間的には決して新しい出現ではなかつた。それは資本主義發展の早い頃にさへ萠芽を見せてゐたものであり、その成熟が所謂帝國主義の段階に入る頃、全世界を風靡し盡したものなのだ。而も、それを打破しようとする勢力は二分して、左右兩翼の抗爭となり、守舊的な勢力を廻つての三ツ巴の混沌の中に、青年の純眞な魂は蝕まれていつたのだ。青年の顏は、或は憂鬱に、或は狂燥に、目まぐるしい程の色彩の轉換の中に極度に變貌した。彼等は遂に自巳の素顏を見喪つたのだ。彼等は鏡さへ持たなかつた。ダダイズム、フォーヴイズム、キユービニズム、シユール・レリズムア、アフオリズム、ザツハリヒカイト、ノイエ・ザツハリツヒカイト、ネオ・何々等々イズムの氾濫は、それ自體が墳末主義の派生物にしか過ぎなかつた。これら混迷の中に、青年は喘ぎ、呻き、崩折れて泥濘に自巳を埋沒した。日本文學の行詰りも、決してこの埒外に出るものではない。

然るに獨り滿洲文學のみは、前記の如き混迷の圈外に聳え立つ可能性を持つと思はれる。それは滿洲國が持つ王道樂土の實現と、民族協和の大理想達成といふ輝かしい前途と地盤とが可能性を約束するからである。

しかし、建設の惱みは、廢頽と崩壞との惱みよりも、より少いといへるであらうか。量的にのみでなく、質的にその惱みは濃く深いのだ。むしろその質的な苦惱の深さにおいて、我々は滿洲文學建設の誇りを見なければならない。我々は無から有を生み出さうとしてゐるのでは斷じてない。我々は時間的、空間的な歷史を背負つて立つてゐる。唯我々はそれを重壓拘束としては受取らない既に我々は進展しつゝある。歷史の重壓をはね返し、歷史を創造する人間として、本來然くあるべきであつた「人間」として巨大な歩みを歷史の上に刻みつけようとしてゐる。こゝに我々が、舊世界と質的に異つた苦惱を誇りとして擔ふ所以があるのだ。

そうして、この苦惱は自巳完成の線において輝かしい成果を期待出來る。假面を脫して眞に自我を再發見し個を完成の高みに押し上げることによつて、全體は全き混融の中にその見事な結實を享受し得る。自巳完成は決してエゴイズムを意味するものではない。エゴイズムこそは、近代資本主義の生んだ最も醜惡な結果であつた。さうして現代のリベラリズムとは、かゝるエゴイズムを母胎としたところに、革新の途上で撲斥されねばならぬ障碍にと墮し終つた、云はば資本主義の私生兒、早產兒であつたのだ。もとより我々は、かゝるものとは斷乎として手を切らねばならない。こゝにいふ自巳完成とはかゝるものとは全く趣を異にする新しい「生活」のタイプである。我々にあつて個我の完成とは滿洲國がその大理想へ向つて躍進する巨大な歩みと相關し結びついて、その達成が約束されるところのものである。それを建設的なエゴテイズムといふ言葉で言ひ現してもよい。さうして新時代の文學は、かゝる眞正エゴテイズムを基脚とするところに發展の獨自性と赫耀とを持つであらう。

建設の苦悩はかゝるエゴテイズムにおいて組織化され方向づけられるのであり、且つ輝かしい將來を以て酬はれるのであらう。

かくて我々がエゴテイズムを新しい「生活」のタイプとして取上げたとすれば、我々の文學的倫理の探求の場所、實踐の場所としての「滿洲」自體が問題とならねばならぬ。

最初にふれたやうに、滿洲文學は「滿洲文學」があつて然る後に存在するのではなく、滿洲があつて初めて存在するところのものである。

この一見平凡な設定には、幾多の本質的な問題が含まれてゐることを注意しなければならない。

即ち「滿洲文學」なる理念設定に導かれて空疎な理論操作に陷る危險性に對蹠して、滿洲なる現實規定からして瑣末的な追隨主義に墮し終る危險性の如きがそれである。滿洲の文學は植民地文學であるとする如きは、既にその一つの現れであると見ることが出來る。

浮動的な存在の樣相を見ることによつて、現實を知ることは出來ない。滿人家屋を知りその中で營まれる生活を體驗し、茫漠たる曠野を逍遥したところで「滿洲」を知つたとは言へまい。と同時に現實一般なるものは存在せず、常に現實とは、さうした浮動的な樣相を通して發現し、それらの混淆した偶發關係の總體として觀取されるのである。從つて現實を知るとは、その將來性において本質を把握することでなければならない。さもなければ所謂あるがまゝの觀察者なるものが、瑣末主義に墮し終ることは火をみるより瞭かである。

大體あるがまゝとか、素朴な現實模寫などいふものが存在し得ると思ふのが根本的な誤りだ。もしあつたとすれば それは建設途上の社會において、時代の世界觀と彼の世界觀との統一の下に、現實を至要の一點において把え得たからに過ぎぬ。それは既に、かつて有り得た一モメントに過ぎぬ。現代において文學するものは、それを意識的理念的に把握し、意欲的に實踐することを課題として擔つてゐるのだ。

文學の倫理を探求し、ヒユマニテイをおひつめようとするのも、畢竟この點に還元される努力なのだ。こゝに現代文學の性格がありそれは例へば日本文學の場合では宿命的な桎梏とさへなつてゐる。彼等の場合では、彼等は自己完成への途を見失つてしまつてゐるからだ。

川端康成の「末期の眼」が鋭さを投げ、横光利一の「純粹性」が妖しく輝いたのも、結局同じ理由に基いてゐる。人はジイドにおいてヒユマニテイを求め、彼のエゴテイズムを取上げる。しかも、結局それらは雜音の中に消え去つて徒らに派生的な問題のみが殘されほぢくり返される。現實の地盤に決定的な據點を持ち得ない彼等にとつて、それは始めから判りきつたことでしかない。人は文學評論の貧困を咎め、創作の貧困を歎く前に「生活」の貧困を顧みるべきなのだ。

以上の叙述は極めて不充分ではあるが（それにまだ現實把握の問題が殘つてゐるが）僕の言はうとする方向は略明かになつたやうに思ふ。方法論的にそれがリアリズムと呼ばれ、ロマンチシズムと呼ばれやうとも、それは僕にとつては問題ではない。といふより、それらの單なる手法としての存在を否定する僕にとつて、それは世界觀との關聯において新たに取上げられるべき問題となるのだ。

幻想の文學

―滿洲文學の出發のために―

加納三郎

「建設の文學」(滿日)に於て木崎龍氏がわれわれに約束したものは何んであつたか？

「文學の理念は時間的にも空間的にも普遍妥當性につれて確立するものである」この前提から出發して、「その特殊性に於て主張されるのではない」「普遍妥當な滿洲文學の理念」を建設することであつた。われわれは樂しい豫想に胸をふくらませながら氏の案内の鞭に從つた然し、われわれがそこで聞き得たものは、氏の直言とは正に反對の、全く特殊な滿洲文學の理論でしかなかつた。

特殊な文學理論とわれわれはいつたが、それは滿洲文學の物質的基礎である滿洲の社會的現實と、日本文學の物質的基礎である日本の社會的現實とを絶緣させ、從つて又、その二つの基礎の上に立つ文學の牽連を否定し、後者には行き詰りの宣告を、前者には輝かしい前途を約束する特殊な態度をさしたのである。それが現在、滿洲についてわれわれが聞かされ、訓へられ、或る時には押しつけられさへする一つの支配的なイデオロギーの文學的進出であるといふ點においては別に特殊なものではない。誠にありさうな文學理論である。われわれは今日この樣な「理論」にとり圍まれてゐる。

恐らく氏の文學は、一見科學的でさへある扮裝と相俟つて、今日、文學の領域において多くの保護者と追隨者とを見出すであらう。その故にこそ、われわれはこれを理解し、これを批判する必要に迫られるのである。

木崎氏が歩んだ案内のコースを見よう。

氏も一應文學の地盤を現實の中に求める。

從つて日本文學の行き詰りを「資本主義發展の早い頃にさへ萠芽を見せ」「帝國主義の段階に入る頃全世界を風靡し盡した」「世紀末の惱み」のうちに見出す。「これらの混迷の中に青年は喘ぎ呻き崩折れて泥濘に自已を埋沒した」「日本文學の行き詰りも決してこの埒外に出るものではない。」こゝで人は極めて抽象的ながら、文學の社會的被規定性―被制的性を敎へられる。日本的現實の上に

日本文學がある！こゝ迄は當然のことである。だが、われわれは次の瞬間に、突然、激しいうつちやりを喰はされねばならぬのである。

今迄、地を向いてゐた氏の鞭先が、急に天上を指し始めたのだ。「然るに獨り滿洲文學のみは、前記の如き混迷の圈外に聳え立つ可き可能性を持つと思はれる。」何とならば「滿洲國が持つ王道樂土の實現と、民族協和の大理想の達成と云ふ輝かしい、前途と地盤とが可能性を約束するからである。」

滿洲の現實の上に滿洲文學がある。滿洲國の前途は樂土だ。從つて滿洲文學は輝かしい未來を持つ。この形式論理の飛躍に面喰ひながら、われわれは湧き起つて來る疑問をどうすることも出來ない。日本を見た氏の眼は何處に行つたのだらうか。世界の現實に對して一應リアルであり得た氏の眼は何故滿洲の前に失明せねばならなかつたか。滿洲を愛する故だらうか。愛することはそれの理解を前提とするといふのがわれわれの常識であつた筈だが、氏は滿洲を愛するの餘りそれを日本から切り離し、世界から孤立させ、凡ゆる現實的なものを捨象して遂にお伽の域に創り上げて了つたのだ。

氏によれば、滿洲文學の地盤は現實の滿洲ではなくてこれが持つと稱せられる倫理的理想だといふことになるその對象は滿洲の社會的現實ではなくて「輝しい前途で」ある。從つて、その方法は、現實の文學的概括ではなくて空想の任意なる組み立てに外ならない。

氏の文學理論の本質を主觀的觀念論と規定し、これに「幻想の文學理論」と名づけては見當違ひだらうか。唯こゝでは從來の萎縮してゐた文學的觀念論が、文學外の世界的狀勢にあふられ、國家の生成といふ異常な雰圍氣において、積極的に、强行的に、自らの觀念性を表面に押し出したことが特徵的なのである。氏は、自身の方法論をリアリズムと呼ばれ、ロマンチシズムと呼ばれようとも問題ではないと言ふが、われわれはそれを、ファシズムの文學理論と呼ぶに躊躇しないであらう。

尤も、氏の聰明は、現實を無視して眞實の文學があり得ないことを知らぬのではない。否、知ればこそ、どうにかして空想と現實との結びつきを考へ出す必要に迫られる。「輝しい前途」を文學的對象とするために、それと現實との間の距離を抹殺せねばならないのだ。そして氏は遂に、奇術によつてこれを爲しとげた。「現實を知

るとは」ー氏は書いてゐるー「その將來性に於て本質を把握することでなければならない。」この方法によれば、忽ち現實と空想との間の障壁はとり拂はれ、距離は消滅し、將來が現實に轉化するのである。然らば氏の所謂將來とは何であるか。それは現實と無關係に、否寧ろ現實と對蹠的に一定の倫理的見地から設定された觀念である。從つて「將來性において把握する」とは、この倫理觀念のプリズムを通じて現象を眺めることに外ならない。もつと具體的にいふと、この倫理觀念の枠にあてはまる現實だけをとり上げ枠からはみ出す現實を切りすてることを意味する。何のことはない。氏は人々に、一定の色彩だけが見える眼鏡を與へて、殿に宣告するのだ。こゝに現はれたものゝみが、本當の滿洲の姿だ！滿洲文學の建設者は、この眼鏡をかけて建設せよ！

われわれが嘗て、社會的眞實に近づかうとして犯した誤謬ー創作における圖式主義、押型主義かこゝでは權威を以て主張されてゐるのである。想像して見よう。氏の文學理論の上に、如何なる收穫が期待しうるだらうか。われわれの思ひ浮ぶのは鶴見祐輔の文學のみである。

われわれも、もとより、固定した單に視覺的な現實ではなくて、生きた現實を捉え、これを形象化せねばならぬと主張する。そしてそのためには、現象を發展性において把握することが必要だと信じてゐる。併し、それは現象自體に流れてゐる合則的發展性を認め、その法則に從つて現象の本質的動向を認識することを意味するのである。謂はば現實を藝術的により現實的ならしめるために雖然たる現實の中から本質的なものと、偶然的なものとを區別し、この二つのものゝ正しい組合せの上に、現實の本質的、決定的動向を創り出し、現實を歪められない發展において把握することである。倫理的な將來といふ眼鏡をかけて、現實を任意に選擇することではない。一人の批評家が、ゴーリキイの偉大さについて語つてゐる。

彼の力は、彼の世界觀の高い水準の中に現實を視、その中に基本的な、性格的な、典型的なものを見出し、そしてそれを現實にとつて副次的な、不必要な、また非性格的なものを投げすてゝ、大きな哲學的な高さに迄押し上げるところの彼の手腕にある。かゝる創作方法に、われわれは「社會的リアリズム」と名づけた。それは現在、世界の發展的の文學が辿りついた水準を示し、又文學が眞に社會的であるために、必ず持たねば

ならぬ方法である。優れた文學の分析が、そのことを證明してゐる。この意味においては滿洲文學、日本文學、世界文學の區別は存し得ない。滿洲文學のみに、それに固有な現實の把握と形象化の方法を與へようとする一切の試みは徒勞であると共に有害である。

滿洲文學が他の文學と區別されるのは、その方法論に於てゞはなく、藝術的對象としての滿洲の持つ持殊性の故にである。滿洲文學が輝かしい未來を持つとすれば、それは歴史が嘗て見たことのない新しい社會的現實の形成過程が、文學にとつて無限の寶庫であるといふ意味においてゞあらう。

問題は、この寶庫を如何なる鍵によつて開くかの一點にかかるのだ。

われわれは日本に於て、この創作方法が完全に實踐され、或は實踐されつゝあるとは言はない。然しそれへの萠芽は到るところに見出される。否、日本の若き文學の歴史は、此旗印の確立とその實踐の血みどろな精進だつたとも言へる。われわれは幾度か逸脱と固定化の危險を犯し、又政治的強壓と騒然たる嘲罵の前に屢々立停まらざるを得なかつた。そして現在も低く地に俯匐して自らを護り且強めようとしてゐる。滿洲文學が眞實の文學であらうとする限り、日本文學からこの態度を學びとらねばならぬことは言ふ迄もない。「現代の日本文學はわれわれに教へる何ものをも持ち得ない」と云ふ氏の放言は、文學を知らざるものゝ勇敢さである。

成る程、現在この方法を主張し、強め、深め、豐かにしてゆくことは困難な狀勢にある滿洲に於て殊にその感を深くせざるを得ないだらう。それは何人も認めざるを得ない現實である。しかし困難の故にこの方法が棄てられてよいわけはない。それは文學の自殺を意味するからである。唯、文學のおかれたこの樣な狀勢と、滿洲といふ文學的處女地にあつては、より低度の旗印を掲げることは許されねばならぬであらう。それを假に、最もいひ古された言葉で、現實主義と呼ばう。われわれの滿洲文學は、先づ此處から出發せねばならない。「眼の前に與へられた現實」の忠實な文學的研究者、觀察者となることである。勿論、創作方法と創作實踐とを引き離すことは誤りである。けれども、方法は完全な形象化への手引であつて、それなくしては何等の出發をも爲し得ないといふ意味の定規ではない。われわれは先づわれわれ自身の

「視覺」と「感覺」から出發しようと云ふのだ。觀念的な神宣的な、文學理論の跳梁の中に、このさゝやかなる旗を打ち立てることも無意味ではないであらう。

「滿人家屋を知り、その中に營まれる生活を體驗し、茫漠たる曠野を逍遙したところで滿洲を知つたとは云へまい」と氏は言ふ。確にさうだ。だが、こゝにも滿洲の現實の一片が存在することには間違ひない。而もその一片は滿洲全體の影を宿してゐるのだ。われわれは先づ滿洲の現實に喰ひ入り之を體驗し、燃燒させて再現しようわれわれの文學的認識が現象の全貌を捉える迄一部分を抽いて全體を表現し得る迄一追求の手をゆるめまい。

滿洲と云ふ象の脚を探り、胴を撫ぜ、鼻に觸れ、脚が胴に、胴が他の部分に、鼻が頭に繋ることを發見する迄「象を撫す」ことをやめまい。さうすれば假令われわれが象の形態を知らぬ群盲であつても、何時かはその全貌を把握し得るであらう。一匹の象の部分的な斷片の克明な積み重ねが、眼鏡をかけた象の哲學者の空想よりも、より眞實に肉迫し得ないと誰が斷言出來よう。トルストイの眼は階級的な制限をうけながらも遂に彼の盲つた貴族社會の埒を超え、バルザックの眼は矛盾に滿ちながら尙ほ當時の新興ブルジョアーの心臓を映したといはれる。バール・バックも、現實的であつたと云ふ唯そのことのために、日本の支那哲學者よりもよく支那の本質を知ることが出來た。われわれに目下必要なのはこの逞しいリアリズムの精神である。

農民はどんな生活條件の上にたつてゐるか。彼等は何を食ひ、何を着、何を考へてゐるか。彼等の上に、誰が如何にして、どんな政治を打ちたてたか。政治は何をもたらし又何をもたらさうとしてゐるか。二つの民族は如何なる政治的、心理的交錯を持つたか、米を食ふ人種の中に如何なる心理、思想、生活が育くまれて行つたか。それは高粱を食ふ人種の心理、思想、生活とどんな有機的な關聯をもつてゐるか。

われわれは、かくの如き基礎構造を有する滿洲社會の各部分に執拗に喰ひ下り、部分の中にその全体の姿を捉え、これを文學的概括にまで昇めることを理想としよう。

附記、蕪雜、再讀に耐えぬものであるが、多少の意味を持つかも知れぬと思つて、敢て發表することにした。根本的な修正と發展とは他日に期さねばならない。

滿洲文學の特有性

金崎利光

滿洲文學に對する批判檢討及び鄕土文學、植民地文學の問題等に關しては既に大江、青木、西村、大谷諸氏の激しく論戰したところで、或はそれらの內容と大同小異なる諸點もあるかも知れない。

即ち之等諸氏の系統立つて一貫せる說を綜合斟酌し、飜つて又諸氏と視角を異にして滿洲文學を觀察して見ようと思つてゐる。

滿洲文學に關する評論及び作品の批評等旺んに喧傳され積極的文學運動の發生を見るに至つたのは昭和期も殆ど最近の現象である。

勿論それ以前の記錄においても類似的な文學運動らしき片影は見受けることも出來るが、輓近において忽然としてその活動が滿洲文學界を風靡した事實は誰しも否定出來ないことだと思ふ。

その事實を證明するものとして昨年六月以降において滿洲文學に關して發表された評論を擧げると（勿論次に擧げるものは私の目を通した範圍であつてこれ以外に有るかも知れない。）

△昭和十一年度

何時頃發表されたかはつきりとしたことは忘れたが大谷健夫氏の「土地と文學」と西村眞一郎氏の「滿洲文學瞥見」とは滿洲文學界に最も刮目せられ、昭和十一年度に於ける滿洲評論界の先驅篇である。

七月一日〃協和〃誌文藝欄「鐵道文學を興せ」栗田秋花氏。鐵道文學なるものは滿洲に於てのみその存在性を有するものではないが滿洲鐵道及び從業員の使命は特殊な立場にあるを以て鐵道文學の興起を認めた所以である。

鐵道文學と云ふと滿洲では事新しく聞えるかも知れないが、內地では大正の末葉から昭和の初葉にかけて勃然として興つたプロレタリヤ文學と同じ頃に興つたものである。或は鐵道文學もプロ文學の一範疇として見做す事も可能だがプロ文學が思想的背景を伴ふに反して鐵道

文學は唯自然の鐵道に關する寫實にある點で異つてゐる。

十月號〃藝術科〃「滿洲における文學運動」靑木實氏

△昭和十二年度

一月一日〃協和〃誌文藝欄「滿洲文學界に希望す」靑木實氏

一月廿四日〃滿日〃學藝欄「滿洲國描寫」大江賢次氏

三月十五日〃協和〃誌文藝欄「滿洲文壇の展望」筆者

四月十四日〃滿日〃學藝欄「最近の滿洲文學界」西村眞一郎氏

五月一日〃協和〃誌文藝欄「滿洲文學における能動精神」芳山沙朗氏

五月二日〃滿日〃學藝欄「滿洲文學の精神」城小碓氏

五月十四日〃滿日〃學藝欄「滿洲文學について」角田時雄氏等の評論が發表されてゐる。

以上に依つても解るやうに昭和十一、二年度は實に滿洲文學の劃期的發展期であると思ふ。

如何なる規約の下に斯く急速に發展したかを質せばいふまでもない。過去三十數年間において在滿邦人及び諸文化團体は攷々として植民地文化建設のために日本文化の滿洲移植化に盡瘁した。その聖業は驕て植民地文化の充實を招來して今日に至つたのである。

その充實と相俟つて滿洲事變勃發し、それを契機として滿洲國は呱々の聲を擧げ帝政施かれ王道樂土の謳歌、五族協和の標榜等により促進せしめられ在滿邦人の思想上に一轉換期を來し、それの延長線となつて所謂滿洲文學の誕生を見たのである。

滿洲文學を論ずるのに滿洲文化を引用する事は冗漫かも知れないが、文化と文學とは有機的同伴關係にあつて我々は此の兩者を各々引離し、一獨立体として觀察する事が出來ぬ程不可分の關係にある。即ち文化は文學を生み文學は文化を表徵し、又文化上から見れば文化は文學を伴ひ文學上から見れば文學は文化を伴つてゐる。故に滿洲植民地文化の消長を知る事は或角度に於て滿洲文學のそれを知る事である。

或は然し文化を以て文學を推察批判する事は抽象的な觀察だと非難する人もあるだらうが、事實結果として滿洲文學は滿洲文化の變遷に水準を保つてゐた。故に滿洲文化方面から各期に於ける滿洲文學を觀る事は、强ち無駄ではないだらうと思ふ。

今までに述べた滿洲文化なる語は日滿露諸文化が相互に融解し合つて形成した特殊植民文化の意であつて、純粹の滿洲文化の意ではない。

日滿兩文化の關係に就ては〃滿洲公論〃四月號において野村一郎氏が「滿洲おける文化の發展」と題して一論を發表してゐる。

その論旨に「滿洲文化面において日本文化は滿洲文化に對して支配的立場にある　といふやうなことを述べてゐる。絕對的に支配權を有するものではないが、或境界線において日本文化は滿洲文化を指導し支配することは可能で、氏の論旨はそれに良く的中してゐる。又「日滿兩文化提携における日本文化の基礎的役割及び使命は滿洲文化を同化しその結果として末期的反抗が現れる」と云ふやうなことも述べ、この要約點に就いては古川哲次郎氏も色々と批評を加へてゐたやうに記憶してゐる。

滿洲文化が近代的日本の資本主義文化の感化を受けてその封建社會組織を漸次に崩壞し近代社會組織化することは否めないが、滿洲文化を同化することは事實上成立しない。滿洲在來の文化は三千年の古い歴史をもつてゐる。その間に幾多の障碍にも遭遇したことであらうと想像してゐる。結局今日に傳つた文化は滿洲に最適の文化であらねばならぬ。即ち先主的文化たる滿洲文化を日本文化が同化し自已の支配内に入れる等常識を以つてしては解せないのである。

野村氏の意圖も亦こんな阿蒙的着眼點にあつたのではないと思考してゐる。

筆は中心を外れたが、日露戰役後我が政權が滿洲に擴大されると共に日本文化も亦必然的に追從した。

明治の末葉から大正の初期は所謂開拓期で日本文化は傳統的土着の滿洲文化とはその樣式を全然異にし、又露國政權時代の遺物たる西歐文化との間に在つて混沌とした植民地文化を形成してゐた。

更に進んで大正の整備期に入るや日本文化は多分に滿洲文化を吸收し、西歐文化と融合し滿洲に適した特殊植民地文化への發展を見るに至つた。

昭和期は前にも述べたやうに異常なる發展期と看做される。即ち過去三十年間を文化的に開拓期、整備期、發展期に區分し、その各期における文化に隨伴した文學を假定する事も出來るが、それは正理であるまい。

明治の末葉から大正の初期にかけての所謂開拓期にあ

つては、文學も亦殆と表面に現れなかつたのが當然かも知れない。滿洲精神における確乎たる思想上の根據も無く、又在滿邦人は文學等に關心を持つ精神的餘裕をも持ち合してゐなかつたからである。

大正年代における文學は形式的滿洲文學の名稱を形成し、就中詩の方面においてその名稱が保持せられてゐた安西冬衛、龍口武士等の「亞」における文學活動は目覺しかつた。遠く日本詩壇にもその存在が認められ滿洲文學の印象を深め、いはゞ滿洲文學の先驅者であるのだ。

創作（小說）は昭和期に入つて初めてそれらしきものを認め得るやうになり、近來やうやく滿洲文學作品らしい香がするやうになつた。

從來の作品は殆ど日本文學の亞流にしか過ぎず、從つて新鮮味のある滿洲情緒描寫等を期待する事は河淸を待つの感だつた。又たとひ滿洲を取材背景として作品を作り上げたとしても、必ずしもそれが滿洲文學作品とは云へない。表面的の描寫でなく滿洲に存する事物の心臟までも剔抉し探索する事に依つて初めて滿洲眞實の姿が把握され、又滿洲文學も生れるのである。

大きな見地から滿洲文學を批判する時は三十年間を滿洲文學の基礎的工事期間と看做し、敢て不振の原因を指摘する必要も無いのだが、文學的に滿洲を觀る能動精神に就き在滿作家諸氏に一言したい。

一在滿作家の說を借れば「傳統する何等の文學要素をもたない赭土の曠野に、日本文學樣式とは全然別個のものが突發的に起り得る筈はない」と。

この文章の內容は自然の理合であつて非難することを許されないのであるが、その背後に介在するオプテイミスティックな自認において滿洲に文學が興らないのは當然だといふやうなことが感ぜられる。滿洲文學が日本文學の支配を免れないのは當然で、寧ろ我々の望むところでさへある。若し日本文學樣式と全然別個の突然變異の文學が興つたなら、それは我々の從ふ滿洲文學ではない。

植氏文化的に三十年の歷史しか有してゐない滿洲に、傳統するところの文學要素が無いのは當然だが、滿洲は滿洲獨特の豐富な文學要素を備へてゐる。

無味無色に見える赭土の曠野にも、見やうに依つては內地には見られぬ味がある。驢馬を伴ひながら野良仕事から歸る農夫の姿、折柄黃塵は弧を畫いて吹きまくる。地平線の彼方には赤い夕日がまぶしく輝き、羊の群は一日の祈りを捧げつゝ牧舍に歸つて行く。

こんな情緖的場面があるかと思へば又匪賊の曠野を疾驅する蹄の音に戰慄を覺え、夜半の犬の遠吠にも恟々として一夜を明かさねばならない。

飜つて滿洲社會層を觀れば苦力の如き勞働階級があり在滿邦人の中產階級があり、ブル的な滿人豪農等もあり又人種的にも日本人、西洋人、朝鮮人、滿洲人、蒙古人の諸族が雜居してをり、これ等を描寫する時滿洲文學は自ら國際性をも帶びてくるであらう。

日本文壇では最新の傾向として滿洲を描寫しようとする氣運が擡頭してゐるのを見ても、滿洲に文學要素のある事を證據立てるもので既に一、三の作品にはそれが見受けられる。現在作家の九十%以上は都會（就中東京）に在住してゐるが、都市生活の頽廢に伴れ思想上の根據を失つたインテリゲンチヤの彷徨と人造的都市社會には既にその材料が缺乏してゐる。

四月の下旬作家室生犀星氏が來滿した。或長篇小說の題材を得るため在滿邦人の生活狀態を普遍的に視察するのだと氏自身も語つてゐた。月餘の視察ぐらゐで眞實の滿洲の姿が描寫されるかどうかは疑問だが、相手は日本文壇の既成作家である。今後も內地作家が次々に來滿することは豫想に難くない。そして一度滿洲文學が內地作家によつて獨占せられ、それに對する思想的方針が樹立されたなら微力な滿洲作家が如何に其思想的軌道を脫しようと企圖しても唯永泡に歸するのみで不可抗力に近いであらう。もつとも從來の如く在滿作家がそれらの文學に加擔し追從するなら別問題だが、滿洲に獨創性を有する良心的作家が登場しそれらの文學に抗立して實質的滿洲文學の新興を目的に運動を續けるとしたら滿洲文學なる問題は兩者の間に立つて舵なき舟の如く彷徨するであらう。

滿洲文學の持有性は日本と滿洲とが文化的に精神的に融解し合ふことに依つて存在する。

今日滿洲文學を云々する時は邦人文學のことに限定されてゐるが他日における滿洲文學は滿洲人文學をもその名稱下に加へなければならない。既に滿洲人の作品も發表されてゐるが、それは一部分的であつて滿洲人文學が文學問題としての水準面に達するには、なほ數十年を要する。それには三千萬民衆間に敎育が普遍的に浸潤し、現代の文盲征伐が徹底された曉に實現することゝ思ふ。

滿洲文化の文學的基礎

―滿洲文學とは何ぞや―

上野凌嵘

最近滿洲文學について論ぜらるゝ多くの理論に耳を傾けて來たが我々はこの基礎理論から、果して何物をつかみ、進路を決定すべきいくらかの暗示を得たであらうか？私の見た範圍内では、多くのものが否定的存在に終つてゐるやうであつた。〃帝國主義文學が第一にそれからほんたうのものが〃といふ具合に…何物か、文學を躊躇させるものが背後に忍び寄つてゐる書き振りは、一体何がためであらうか。

その原因の一部については一應認められる。然しながらそれ以上のものでは決してない それは滿洲文學に對する認識の不充分と、もう一つは過渡期だとおぼろに信ぜられてゐる觀念の矛盾にあると思はれる。我々は過去において社會科學的に、あまりにも強ひられた。

中堅的存在であるべき筈の滿洲在住の作家並びに理論家の多くが社會科學によりて教へられた矛盾對立の概念的觀點から、過渡的と思惟するその亡靈に何時までも苦しめられつゝある現實なるが故に折角掘り當てた偉大なる名詞―滿洲文學―も、遂に發源し、そして發展せざる原因があるのではなからうかと思はれる。

第一に、滿洲文學の意義について滿洲文學理論展開の諸氏が各々その主張を異にしてゐられるやうであるが、この點の闡明が最も肝要なのではあるまいか、然りこの點こそ滿洲文學を決定する根本問題であると思ふ私の理論展開上誤解を避けるために一應斷つておきたいのは、或人々の云ふやうに、滿洲文學といふ意味は日本文學に對する滿洲國の文學であると云ふやうな、廣義且つ散漫な意味では決してない。又或人の云ふやうな滿洲文學とは日本人は補導的地位であつて、ほんとうには滿人の手によりて成されねばならない、など云ふ見當外れな理論を聞くにおいては全く啞然とせざるを得ないのである。斯くの如きことは教育家のやるべきことである。我々は教師であつてよからうか。決して否である。我々はあくまで文學するものでなければならない。從つて滿洲文學は決してかゝるものであつてはならない。滿洲文學とは、あくまで日本文學の流れであらねばならない。而もその本流に咲いた現代日本文學の指導的イデオロギーでなければならないのである。

或人は云ふであらう「そんな馬鹿なことが」と「英國文學を母体にした米國文學は、建國二百年の後に立派に咲いたではないか」と。「だから滿洲國に生れる文學を滿洲文學と言つても差支へはなからう」と

しかし我々は孫やその末に生れるものを云々する時間と意義を持たない。我々は今日の文學を創造し建設しつゝあるのではないか。しかも米國と滿洲國を同樣に考へてよからうか。米國は完全な一經濟單位によりて成れる國であり、英國とは何等關係のない國家であつた。滿洲國は大いにその趣を異にしてゐることは建國の第一頁に特筆大書されてゐる所であつて日滿不可分進んで日滿一体の關係に始まることである。

日滿一体とは、國防責任の一体であり、經濟單位の一体であり、これは現にどしどし實現され、何ら遠慮さることなく堂々世界に表明されてゐる事實である。斯くの如き國家に全然別箇な、あやふやな文化が生れていゝものであらうか。文化においても同樣。綜合的且つ創造的な日滿一体の文化を構成しなければならないのが當然の歸結である。即ち茲に滿洲文學成立の基礎がある。

それは決して米國文學の名のやうな一國の文學を表す概念であつてはならない。滿洲文學は日滿一体の新文化の現實的基礎として、滿洲國建國を通じて表現せられつゝある東洋民族の解放――即ち封建的社會――つまり軍閥の搾取下にありし東洋被壓迫民族の解放と同時に解放された民族の新しきモラルの創造發展となるべきイデオロギー把握によりて成さるべき文學でなければならないのである。從つてこの文學は行詰れる現在日本文學打開の鍵であり、それ故にこそ日本文學の本流たる所以である。

この生れつゝある滿洲文學を、反動的なものとして葬つてよからうか。又滿洲文學の名を借りて日本文學より逃避し現實的意義を失つた思ひつきに終らせてよからうか。過去において我々はあまりにも西歐文學や思想に支配され過ぎた。小さな一つ一つの事件にすら文學や思想

に關する限り、我々は氣にし過ぎて來た。而もこれが我々の過去における日本文學の方向を喪失せしめ、寧ろ退歩的な足踏みに終らしめた原因がある。現在日本の諸々の流れはそれ故に、現實に根を下したものがあり得ないのである。即ちこの支配から敢然と脱却すべき時機が到來したことに思ひを致さねばならない。この滿洲文學は又かゝる意味における脱却過程に存在する重要なる意義を有してゐなければならないのである。

或る人は云ふであらう。「然らば我々は東洋文化を再現するのか」と。否、決してかゝる一方的なものではあり得ない。我々は東洋民族であるが故に、家族制度において、社會生活において、戀愛において、結婚において色々の點が西洋民族と甚だしい差違を有してゐることは事實である。だからと云つて西洋文化は全然捨てるといふ意味ではない。我々近代日本はあまりにも多くの西洋文化を吸收し過ぎた。それはそれとして、我々の近代性を育て上げるに充分役立つて來てゐるこの價値を疑ふ程、私は家畜的な東洋主義者ではない。我々はあまりにも社會科學的に強ひられたと述べて置いた。即ちこの中には、東洋民族をしてユダヤ化せしむる多分の根據を持つてゐるがためである。而も亦この中には、多くの學ぶべき優秀性をも所有してゐる。つまり脱却といふ過程は、我々民族の持ち來つた飛躍的現實としての、滿洲國を通じて行はれつゝある被壓迫民族解放の現實認識によりて突き當るであらうところの、日本文化の精神力の高さを自覺評價し、これに社會科學の優秀部分を批判吸收して以て綜合的且つ創造的な世界觀を造り上げることに外ならない。

以上は決して一部の人の考へるやうな折衷的理論ではない。我々は西洋文化を身を以て体驗し吸收して來た。それでゐて我々は東洋民族であり、而もその指導的地位に立脚せる日本民族である。さうして飛躍的な現實が我々のぐるりを取り卷いてゐる。それは淀みに淀み來つた所の人間の飛躍であり、同時に日本社會、ひいては東洋社會の轉換を意味し、以て綜合統一されたる創造的文化形態への進出であり、是れを稱して我々は滿洲文化と呼ぶ所以のものである。

見よ、今や現實に東洋における被壓迫民族は解放されつゝある。而も此の解放された民族の進むべき道は創造的文化形態によりて意圖せらる所の新しきモラルの

建設への道でなければならない。即ち創造的文化の基礎としての滿洲文學は此の文化のよつて來る所のものから批判し闡明し以て現實の發展を助成し、常に現實の高揚、批判者としての存在を明らかにし、現實と共に進む所のものでなければならない。即ち茲に日本文學の飛躍的本流があり、創造文化の翼賛者としての滿洲文學の存在價値と偉大なる使命があるのである。

ところで、第二には滿洲文學の方法論であるが、この點については未だ鍬を入れた人を見受けないやうである。

以上において大体滿洲文學の意義並びにその存在理由を述べたから、以下その具体的方法論について卑見を述べて見たい。

前述のやうに、滿洲文學は日本文學の本流であつた。だからして當然日本文學の中から、發展過程における多少の遺産を繼承しないといふ筈はない。この意味において方法論に移る前に史的批判の餘裕を許して頂きたい。

日本文學における發生期の萬葉文學、中世貴族社會に生れたる源氏物語文學の價値批判は暫く別として、近代以後の日本に眞に文學らしい文學を創造したのは自然主義文學に始まり、さうして以て、而もそれで終つてゐると云はねばならない。

その後に於る發展と自稱せる人道主義の武者小路、有島武郎、其他の諸氏の文學、唯美派の谷崎、佐藤氏の文學、新理想主義をかざした芥川、菊池、久米、里見諸氏の文學、さうして現在のリベラリズムの横光並びに川端氏、其他の一群の作家達によつて行はれてゐる東京文學にしても、ほんとうの自然主義文學の發展者ではなく根を下ろす所の現實が實にあやふやなものであつたり、さうして又觀念の中にのみ閉籠つて何等現代日本社會と相關々係に於て存在して居るものではあり得ない。さうして西歐、殊にソウエート文學の影響の下に突忽として湧き來り、一時は月刊雜誌の文藝欄を埋め盡すかに見えたプロレタリヤ文學も結局日本社會の特殊性の研究なしに不自然な階級闘爭文學として、何等その啓蒙性の幾分をも果し得ずに自滅的存在に終つたが、是れも文學のよつて來る現實認識を缺いたものに外ならなかつたからである。

即ち前者一連の作家に依つて成されたものは、殆どが自分を中心とした獨尊的表現に終始し何等社會、種族

土地との關聯に於て表現しようと試みなかつた所に我々の魂をゆるがしめ、血となり肉となるものを創造し得なかつたと同樣に、後者の自ら社會關聯と云ひながら、露歐の社會をそのまゝ適用して以て通俗的概念的日本社會を見た所に失敗があつたのである。

文學といふものは永遠に存在するものであつて、或一部の人のいふやうに、映畫が生れてから影が薄くなり、心理的表現にのみその存在が狹められたといふやうなものでは決してない。かゝるものは現實社會に根を下さないものであつて、一般社會大衆に何等關係のないものゝいひに外ならないのである。

眞の意味における文學は、常に現實と共に、大衆と共に　さうして文化の常に創造的役割を果す所にあるのであつて、かゝる意味において我々は、僅かに自然主義文學の上にその遺產を發見するのである。

我が近代日本は、日淸戰役を通じて始めて世界との相關關係に置かれたといつて差支ないからうと思ふ。この點に關しては「滿洲事變の世界史的意義」において、いみじくも指摘されてゐる所であるが我が近代社會は、あらゆる點がこれを契機として滔々と發展の段階に至つたことは既に明らかな事實であつた。即ちこの社會的現實を把握しやうとし、表現しやうと試みたところに自然主義文學の眞摯なる一面があつたのだ。

それはひたむきな探究の一面、知らうとするための暴露の一面であつた。だからまだ殘されてゐた封建道德への反抗として表現せられ、結果として資本主義の罪惡をもえぐることにもなつたのであつた。

田山花袋の性道德に對する反抗としての「蒲團」その他の性慾描寫　藤村氏の家族制度　戀愛等封建社會に對する反抗としての「家」「春」「破戒」を流れる所のもの、長塚節の自然、生物の一部として描かれた「土」に見る農民生活暴露の偉大なる表現、島村抱月や正宗白鳥氏の指導的理論的役割に於ける文學論、石川啄木に見られる體當り的な短歌の世界等明治三十五六年頃より大正初期に移る迄の自然主義作家には何物にも容赦しない所の眞面目さがあり、勇敢さを所有してゐるのだつた。

然しながら此の文學は遂にそれ以上のものであり得なかつたことは、後續の自然主義作家が各々主觀的且つ諦觀的に墮して行つた所を見れば判明する。結局此の眞摯さを持ちながら、何等そこに新しきモラルが生れ得なかつた點は、我が日本社會の動向、發展に對する正しい理論的根據亦びに現實に對する正しい認識を持つに至らない內に悲觀的、觀念的な方向に筆を向け、且つそれを少しも怪しまなかつたところの愚さにあつたのである。

ところで、日本に唯一の創造性を植えつけたところのものから、繼承すべきものは現實認識の發展である。あの盲目にも等しき眞摯な探究精神の文學から、今や目を開き、明らかに認識する滿洲創造文化の發展、展開を社會的目的とし、あの眞摯な探究精神を繼承して以て文學するに外ならない。

我等の文學はその根底に、創造的文化の意識をはつきり把握して成される所のものであり、從つて人間的個人に至りても自然主義のやうな、悲觀的諦觀的なものに墮し得ないのであつて、土地、自然民族社會の動向に對する明るい能動的且つ一般大衆的な現實と共に存在することである。而もこれはあくまで眞摯な探究を現實に對してゆるめてはならない。彼の自然主義時代が、日本の世界關聯、即ち世界資本主義に卷込まれたころの苦悩であつたとは反對に、今や日本は世界資本主義の隷屬の中から滿洲を通じて新しい經濟社會に飛躍しつゝある。

此の現實なるが故にあらゆる文化は、さうして人間は自由主義的なものから社會連關的全體的に移り行く苦悩の世界に、飛躍を前提として卷き込まれつゝあるのである。さうして又、日本民族に比し隔世的な滿洲諸民族も同樣に、封建的被壓迫的且つそれ故に徹底個人主義の社會から、直接國家社會連關の全體人として生れ出ようとしてゐる。即ちこの偉大なる社會轉換に直面して現實は容赦なき冷酷にもすぎるべき解剖と、創造文化の道に誘導するための過去の道德、文化の批判が最も藝術的に、我々の魂を打ち振はしめる表現として現れねばならないのである。

我々文學の母體的存在としての自然主義文學の中にも「土」の如きバルザックの「農民」に比しても何等遜色なき世界的な文學を殘してゐる。

私は自然主義文學として「土」を最も高く評價するものであるが然し我々の滿洲文學は決してかゝるところに止まつてはならない。明治末期の農民社會のまたなき表現として「土」は存在するが、それは靜止的諦觀的に存在し、滿洲事變以前の農民社會は階級的に醒め、動的鬪爭的に存在してゐるのであり、今や轉換期の農民は更に

創造的全體的に飛躍しようとしてゐるのは滿洲移民の現狀を見るものには明らかな現實として存在する。これは他のあらゆる方面が社會的歷史的現實として存在するのであつて、これは全く民族社會發展の原則である。

もう一つ方法論上つけ加へて置きたいことは、凡ての發展原則は民族社會を通じて始めて具體化されると云ふ事實である。民族と云ふ言葉を侮蔑的に見る人があるが、それは現實的認識を缺いた所の人であつて、決してそれは單なる種族ではない。民族と土地、即ち領土、經濟、生活言語及び文化の共通性を通じて歷史的に成されたる諸種族の結合統一の社會乃至國家的事實であつて、具體的社會は民族社會でなければならないからだ。

從つて創造的文化の遂行によりて、現滿洲五族と稱される諸種族は當然一創造民族への飛躍的展開を成さなければならない日を近き將來に持たなければならない。而して又茲にも滿洲文化の基礎としての滿洲文學の果すべき役割が存在する。

最後に何處より何を描くべきかは前述の過程により作家諸氏の努力と研究に俟つて、始めて發展の緒に着くものである。

東洋の猶太民族

西村眞一郎

一握りの土塊も持たない、祖國もない、たゞひたすらに精神王國を夢に描きつゝ、世界到るところにフリーメーソン結社を形成し、世界政治の舞台に暗躍して全世界を攪亂しつゝあるユダヤ民族。

國を追はれ、國から國へ彷徨ふ彼等には、祖國愛もなければ故鄕觀念も持ち得ない。たゞ民族愛があるのみ。

私は秋原勝二氏の「故鄕喪失」及び江原鐵平氏の「滿洲文學と滿洲生れのこと」の二論文を讀むとき、滿洲生れの邦人第二世が東洋における日本の勢力と相俟つて東洋のユダヤ民族といふ感を受ける、否、少くとも土地觀念に關する限りユダヤ民族と相通ずる感情を發見する。殊に江原氏において强度な響きを與へてゐる。

滿洲生れの邦人が故鄕を喪失、それかといつて滿洲にも愛着を持ち得ずに大陸を彷徨ふ民族であつてよいものだらうか、私も亦滿洲育ちの人間として、この問題に無關心でゐることが出來ない。

私見を述べるに先立つて、はつきり斷つて置くが私はこの曠土に一握りの土もなければ血緣者の墳墓も持たなければ況や家屋等の所有もない。それにも拘らず私は滿洲に限りなき愛着を感じてゐる。然らばこの愛着はどこから來てゐるものだらうか、之は生活感情に基因してゐるのだ。私は滿洲に居住する限り、生活に對する自信を持つてゐる。それのみか、この土地こそは本當に仕事らしい仕事、生き甲斐ある生活、それが未開地であり、文化的にも子供や孫たちのための基礎工事をやつてゆく、輝かしさ、熱情に溢れてゐる滿洲、さういつたものが漠然として私に愛着を與へてゐるのだ。だから私は最も思ひ出多い旅順の地を本當の故鄕だと思つてゐる。五歲の時別れた横濱を生地、原籍地と考へる以外に、何らの感情も持つてゐない。神奈川縣人會などが大連にもあるし私もいつの間にか會員になつてゐて、總會だ、例會だといつて、その都度案内を受けてゐるのだが、一度も出席したこともなければ會費も納めず、いつ除名されてもよ

ろしいとの不心得をさへ起してゐる。

要するに私にとつて横濱の地は私が日本人たるの證據になつて貰へばよろしいのだ。この點、秋原、江原の兩氏とも意見を同じうする。

かくて在滿邦人第二世の一部に故郷喪失の觀念を植付けた第一因は小學校教育にあつたと秋原、江原の兩氏は指摘してゐる。

「私らは滿洲にゐて、日夜、夜毎、內地の朝の叙景や村の風物についてをしへられるのである。オ宮、ミノ、カサ、カラカサ、柏子木の音カチカチ、お蔭で私らは滿洲のことは殆ど習はずにすぎてしまつた。—中略—滿洲にゐて滿洲知らず、一體私らは何なのか、その無性格ぶりにおどろいてしまふ。」

と、秋原氏は云ひ、江原氏も亦往時の小學校教育の非を衝いてゐる。

「われ〳〵が小學校の頃から教へられたのは「お前達の國は海の向ふにあつて此處は植民地である。お前達は植民地へ來て生れたのだが母國を忘れてはならぬ。海の向ふの我國は山紫水明の國、綠深く花咲き鳥歌ふ夢の如く美しい國」それから幾多のそれに關する知識である。」

併し我々は、このやうな教育方針と同時に「關東州及び滿鐵附屬地は支那から九十九年間借りてゐるのだ」と常に教へこまれたものだ。さういふとき幼かりし我々は「九十九年經つたらどうなるのですか」と質問したものだ。すると先生は笑ひながら「その時は復九十九年間借りることになるだらう」と訓へてくれた。私は何んの疑問も持たず、たゞたゞ日本の偉さ強さに感激したのであつた。

ところで教育に就てであるが、私は滿洲と限らず文部省當局の教育にいさゝかの期待をもかけてゐない。（茲に自分の體驗を語る要はないから省略するが）滿洲について云へば、今昔ともに適應した教育は施されてゐない當節は土地に即した教育といふことが唱へられ、その具體的な表れとして滿洲語が正科に加へられてゐる。これなど謬れる教育の尤なるものである。東洋の盟主といふ日本は日本語普及に努力すべきであつて、滿洲語や支那語は語學校に委ねれば足る。英語が未開地に普及されたと同樣に考へて然るべきだ。（英語の場合は語學を通じて歐米から學ぶものがあつたが滿洲からは學理的に學ぶべきものはない。）

教育は何時の時代においても、その社會全般を滿足せしめ得ないのではないかと思ふ。假りに教育政策の分析を除外しても尙然りであらう。例へば我々の年輩のものは、學校教育と別に多かれ少かれ左翼の教育（？）を受けて來てゐる。唯物辯證法によつて展開された理論に、絕對的な信賴が置かれるかに見えた。が時代の推移は其處に幾多の誤謬を發見せしめた。かくて我々はその上に出直さねばならなかつた。

滿洲の場合も同樣だと思ふ。もし教育が誤つてゐたと悟つたならば、自分たちの力で新しく出直せばよいのである。だから謬れる教育が必ずしも故郷喪失の原因を作つたとは考へられない。

私達は「土地」自體が必要なのだ。「自分の土地」のない故郷は空中樓閣である。

私達は今から滿洲の黃塵萬丈や木のない山々を愛することは容易なことではない。かといつて日本を母の懷だと思ふことも出來ないから、私は滿洲を愛することを義務と考へながら、心は遂にスイスの山奧などにとばせたりする實情である。と江原氏はいふ。茲に土地が必要だと述べられてゐることは、個人所得を意味するか、或は國家の所有する土地を指すのかはつきりしてゐないが、若し前者であるならば、恐らく問題にはならない。日本國民の幾パーセントが自分の土地を持つてゐるだらうか鄉土觀念の強い人でも土地を持つてゐるかといふと、必ずしもさうではない。後者を意味するならば、成る程滿洲は昔も今も日本の××ではない。

しかし滿洲と日本との關係は周知の如く日滿議定書に因る日滿不可分、一心同體であるから、法文上は滿洲國の領土であつても、我々は自由に生命を享樂することは出來る。

若し領土觀念を必要と欲するならば××の××だと觀念をもつたとしても差支へはなからう。しかし更に深く考察するならば、滿洲は五族協和・王道樂土の精神からして、領土觀念といふか如き小さき城壁に取圍まれてゐるものではなく、この精神が向後普遍化され、具體化されゝばされる程在來の領土觀念は色褪せて行つて、それぞれの民族が、それぞれに自分達の土地として、この地を拓き築いて行くであらう。さうして在住する優れた民族が、他の民族を指導して行くであらう、それが何の時代に出現するか、或は永久に到來しないかもしれないが

少くともこの理想に邁進してゐるのは事實である。だから、謂ふところの帝國主義はあらゆる手段、あらゆる姿態を以て迫つて來るとのマルクス主義の命題は滿洲の場合妥當ではない。假りに段階的にみて帝國主義であつたとしても、窮極の見通しは五族協和、王道樂土の具現のために、日本の全能力を傾注してゐるのである。

この事實と見通しの上に立つとき、私は江原氏の云ふやうに、法文上の自分の土地を持たねば故郷觀念が湧いて來ぬ、とは考へられないのである。

次に江原氏は故郷喪失に關聯して滿洲文學に觸れてゐる。江原氏は云ふ。

「故郷ならぬ養家（滿洲）に歸つて見れば、そこには養家の文學といふものが提唱されてゐたのである。私は繼子の文學ではないかと疑つた。」

「或一部では滿洲の都會に育つた第二國民が滿洲文學の製作者であることに見きりをつけた。むしろ佳木斯邊の移民地から、それが出て來はしないかと、そこで私は笑つた。滿洲文學は生れないで帝國主義文學が生れるだらうと。」

さうして「滿洲文學とは何か？」と自問した後「私が若しそれをこれから試みるとすれば」如何にして滿洲の都會を築いて行つたか、「事變前後の經緯其他日本人中心の勢力扶植史を書くより材料を見出すことが出來ない。それは實に滿洲文學ではない。植民文學といふものである」と、

一應理解出來る說である。たゞ我々は江原氏の意味に於ける植民文學を過去に於て持たずして、新なる滿洲の情勢に直面してゐるのである。然し滿洲における日本の歩いて來た道、現在及び將來を大乘的にみるとき、つまり植民地時代の滿洲が今日の滿洲を築き上げる素地であつたと理解するとき、この地の文學も又滿洲文學の名稱の下に統一されて可なりと考へられるし、滿洲が儼然と存在する以上、この土地の文學の存在も又許さるべきであつて、それは決して一世紀後の話ではない。

若し政治時代として滿洲が搖籃期であるならば、搖籃期なりにその時代を反映した文學も生れよう。たゞ生れると否とは勉強するか否かに懸けられるのだが、滿洲文學論は他日にゆづるとして、たゞはつきり云はせて貰ふならば、それはマルクス主義のいふ帝國主義文學ではないことである。

かくて滿洲の邦人第二世の一部が故郷喪失をしみじみ味ひ、さうして領土觀念が持てない故に、滿洲に心から愛着を感じないといふことは、僅かに一つの悲哀でなければならない。さういふ人たちの子供も亦故郷を失ひ、その子の子も亦故郷を喪ふにいたるであらう。

それは恐しいことだ、次から次へと故郷喪失の觀念を植付けられたとしたならば遂には祖國愛も喪失してしまふだらう。さうして大陸の日本民族は東洋のユダヤ民族と化すであらう。

それ故に今日、第二世によつて故郷喪失の問題が採り上げられたことは、けだし劃期的なことであつて、それは各方面を異常に刺激すると同時に、向後故郷觀念樹立の教育が全面的に強化されることとならう。

そこで私は最後に希望する。

秋原、江原の兩二世氏の故郷喪失の觀念が、つまりはインテリゲンチヤの一片の哀愁に止まることを。私はさう信じてゐる。

滿洲に於ける〝文學〟の方向

―文化一聯として―

川上旗男

當地の文學も植民地文學と呼ばれ、又滿洲文學と呼ばれて最近まで大部熱心に滿日紙上で論議され、大體において峠を越したかに思はれる。

然し、それ等はある一、二の論說を除いては殆どが單なる作文的論說の域を出ず、何を如何にすべきかに就いては鮮明な表示をされたものを見なかつた。

文學に限らず、現今の滿洲においてなされる文化分野の形態は、殆と啓蒙的な範圍を出ない樣である。

文學に於ては龍口武士等の一團によつて新らしい傾向による運動が大分前に出發し、生育してゐる。然し、その後その運動が當地において最近この土地が示して來た政治的、經濟的現象を根底から分析して相携し亜行しつつ、又は前驅しつゝあることは近時の業績を見てはいへないと思ふ。

少くとも、ある沈滯した型でその發生初頭の儘の、即ち育つて居ない型で存續してゐるやうである。

流動的なこの文化方面では一日一日進歩し、そして不斷に清算されつゝある。

曩に八木橋氏が內地の某評論家が來た折、感激して提灯を持つて居たが、彼我一致點を發見したことを嬉しがる前に、今少し嚴密な批判をその論據の中に必要としないか？

これと殆ど同樣な現象が滿洲國の訪日宣詔團でも云はれる即ち當地で最も進歩的な繪畫團體と云はれる五果會の運中の作品が全部問題にされなかつた。（少々語弊があるが）その上アンチテーゼと思はれる藤島氏の言葉にも「繪は自然を寫さなくては不可ない」―滿日紙載―と（尤も、これは相當に修正を要する暴言だと思ふが）聞いた。

進歩的な五果會の運中が斯く冷遇されたその原因は何か、それには審査員の思想的根據、作品の大きさ等を云々する前に、五果會自身の對社會的（この場合は對滿洲の文化のもつ思想的主張）根據とそして滿洲國の持つ文化面への意圖を感知しなければならない筈だ。

現代において五果會の動きは文化運動の一つとして當然許さるべきものである。しかし意識された社會からは當然反動的な立場の故を以て拒否さるべきものであるからである。

微溫的な繪畫においてこれだけの判然とした事實のある事を見ても、文學の分野では一考も二考もしなければならないものがある。

文學においては對社會的思想的反映が最も露らさまな型を以て示されるがために、社會及び思想に對する教養の度は、ひいて作品の高さを規定する事になるであらう（非常に純粹な考察で具體的には當地における文學關係者の社會的―生活のための―位置、又時間まで考慮さるべきであるが）

當地の文學人の持つ教養の度は植民地的なハンデイキヤツプを考慮に入れるにしても尙不足を感じさせられる處の多い事を感ずる。

文學が單に文學的要素のみで構成されてゐる樣な觀念は、拒否されねばならない。

餘りにも政治的な、又經濟的な要素の過ぎた作品は文學的價値に乏しくなつてくる。作品は兩者が文學的消化の下に基礎となるべきだ。

自分でも決して文學的要素の缺除を希望しない當地では、かへつてこの文學的要素さへも極めて低い訓練しかもつて居ないのを多々見かける。「舌足らず」で創作された作品が植民地であるため、幸か、不幸か自分達の眼にとまる事になるのである。

斯樣な傾向に對しては今少し當地の關係者が嚴密な批判を爲すべきだと思ふ。文化といふものが生活から、又土から離れられない、即ち內發性のものである事は餘りにも明白な事實である。急激な變化が到底その中に生ぜられるとは考へられない。

現在飜譯的公式的文化樣式が何等の修正をも加へられることなしに、又その限界までの必然な過程も持たずになされつゝある。

この形態はある一つの運動であるにしてもそれに對する理解を當然必要とする。それ等の型は、それが發生するまでの必要な歷史と民族的文化的體臭を持つてゐるのだ。

しかし滿洲の中からこの體臭を感知すること、そして

それから作品の高さまで昇華することは文學であるだけに當地では現在難しいことである。當地の土、空氣、生活さうしたものは自分達と、餘りにかけ離れて存在し剩へそれを拒否しつゞけてゐる。生活程度の差によるものと思はれる。）

生物の生育には日光、清澄な空氣等の自然的條件と共に良き環境が必要とされるやうに、この滿洲を溫床として生長する文化、その中の文學も、それが生育するやうな雰圍氣と意志及び純正な批判がなされねばならない。なほそれは滿洲國の主張にそつたものでなくてはならない。

この場合良き環境とは文化面の擴がりを意味し、日九とほこの文化（含文學）の持つ思想の健康性をいはれる空氣とは卽ち文化（含文學）の描破力を言へる。

滿洲において爲される場合滿洲の文化的水準から見て藝術運動の域に至らない文化運動が現段階の持つ一貫した第一の姿であると思ふ。餘りにも飛びあがつた、地に足着かない運動はこの場合最も排擊さるべきものである理由は邦人の持つ役割が滿洲國の文化に對して指導的なものであらねばならないからである。

現今までの滿日紙上での論說によれば當地の文學の運動が在滿日本人を對象とする場合、又滿洲國人を對象とする場合の二つが取り上げられた。

この二つの異なつた文化圈の中で自分達の運動を植民地的ユニークな型を以て結成させるには、この二つの文化圈が嚴密に分析される事を要求される。

滿洲國人を對象として取り上げられた場合の運動は當然文化運動でなくてはならないし、在滿邦人を對象とする運動は充分藝術的運動を許容される。

然るに植民地文學、滿洲文學運動と稱されるものは在滿邦人の文化運動の中からは目下の處萌芽さへも發見出來ない。唯僅かにバンブタオ集團及びその一黨がその意圖を表示してゐるにすぎない。

在滿邦人の植民地文學運動は、植民地といふハンディキャップを冠せられ乍らも、終始中央の亞流でしかない

今滿洲文學、植民地文學といふものを在滿邦人の作品の力によつて發芽させるためには、敢然と滿洲人の生活と歷史の中に突入して行かねばならないと思ふ。これに加へて、その生長を最大な限度に擴げるための描破力と神經を持たねばならないことは言を俟たない。

滿洲文學運動の主流

佐藤四郎

恐らく私の知つてゐる限りでは、この土地に於いてはこの年程文學的活動の顯著な年はなかつたであらう。それについては滿洲國の國家的な整備とこの國に住む人々の社會的活動の充實を重大なる理由として擧げなければなるまい。勿論この事實はこの國の政治的事情としての制約が文化の發展形体或ひは文化自身に及ぼす影響を考慮に入れない譯には行かないであらうが、それにも拘らずこの國の社會實情を前提としてのある形式に於ける文化の擴大がこの國の文學的活動に與へた有利は決して瑣末なものではなかつた。つまりこの國の整備につれて私達の文學活動を展開する上では更に都合がよくなつたのである。

先づ、この年の文學的成果として最も記憶されなければならないのは何と云つても滿洲文話會の結成であつた。これは、恐らくこの國の文化的分野に文筆を表現手段とする各方面の殆ど總てを包含してゐるであらうこの集團は當初は別に何も文學的意圖のもとに創められたのもでなく、單にお互ひの親睦機關と云ふやうな輕い氣持であつたらしい。それが結成後幾月も經たない中に、滿洲に於ける文學運動の重要な指導標となり了せて了つたのであるから、全くそれは驚異であつた。

例へば新京、吉林に支部を設けるし、又毎月例會を持ち、文學研究の爲に、會合をひらいた。それに月々の「文話會通信」の刊行はこの國の文學運動に非常な活況を添へたのである。こゝ最近に於ては全滿各地から會員を招集して滿洲文學の運動史を再檢討するなど華々しい仕事振りを見せてくれたものである。滿洲文學が特に滿洲の事情に立脚して注目され急激に滿洲文學の研究が眞摯に扱はれて、批判の對象となつたのはこの會の結成を前後としてゞあつた。卽ち或る意味では文化が擴充され、この國としての特異な文學の創造への關心が昂つたので「滿洲文話會」がその手段の一つとして出現したと云へない事もないであらう。

所がかうした機運を與へたのは實は「G氏文學賞」の設定にあるのを認めない譯には行くまい。それはG氏の好意によつて設定されたもので本年度は小杉茂樹氏の「麥の花」に與へられた。これは滿洲文學の高揚の意圖のもとになされたものであつて、この文學賞は滿洲文學のためには一つの權威として表徵されたのは疑ひのない事實であらう。

そしてそれと同時に重要なことは「滿洲文藝年鑑」の刊行であつた。これは滿洲文學のジャンルのためには非常に重要な部分を受け持つたのである。つまりこの文學賞の設定はたゞに文學賞の狹い範圍に止らず、積極的にこの國の文學運動に參加したのであつた。

然るに、それにつけても殘念なのは滿洲國政府が國家として企畫した「文藝懇話會」の成果についてである。一体この催しは滿洲國がその政治的意向と文學との接觸を如何に取扱ふかの打開について準備されたにも拘らず、その結實として何を得たであらう。成程會合は持たれた。併し、それはそれだけでしかなかつたのである。この國の文學者はこの會合を完全に默殺して了つた。文學上の實際問題としてかうした社會事情を背景とする思想と文學の渡り合ひについてはこの國の文學者は敢然として立上らなければならなかつたのではならうか。私の知つてゐる限りではこれを問題として採り上げたものは僅かな評論であつたに過ぎない。

結局、この國の作家が問題として、これに對立しないならばこの現象から無思想であると考へられても是非もあるまい。卽ち世界觀の狹小である。このやうな有樣はこの國の文學の建やかな成育から云つて決して望ましい事ではない。

かうした文學運動に伍して、重なる役割を演じたものに同人雜誌がある。この同人雜誌はこの國の文學活動にとつては殆ど樞軸ですらあるのだ。成程、文化事業としての雜誌はあるにはある。けれどもそれは極めて微弱な存在で今の所文學活動の上では何等貢獻がないと云つてもよいであらう。事實、逞ましい文學的意欲を持つて美事な仕事を見せてくれたのはこの同人雜誌であつた。彼等は重厚に文學のために默々として努力する人達である。「作文」「文苑」「新土」「鵲」等はこの國の文學運動の中心をなしたものであつた。特に「作文」の滿洲文學創造のためになしてゐる功績は顯著なものと云はなければならないであらう。

そしてこれらの同人はその會合の同人としてだけではなく、この國の文學運動の最前線に立つて立働いた人々であつた。つまりこれらの同人雜誌の存在はどちらかと云ふと滿洲文學運動にとつては主流として參畫してゐると云つてもよいであらう。

それと「滿洲アバンガルト藝術クラブ」の結成は文學に於ける前衛的な團体として注目されてゐるが、今年は餘り華々しい仕事は見せなかつたやうである。

こんなものが大体この年の文學運動の主なものであつたが、滿洲文學がこの國の特異な文化に立つ可きものとして、異常に關心を昂めた事は正にこの國の文學によつて劃期的な出來事であつた。

個々の文學的分野に於ての成果はどうであつたであらう。

先づ「順序」として評論であるが、これは前年度に引續いて、この國の文學が如何なる對象を作品の上に採り上げる可きかゞ主要なる命題であつた。卽ちこの國の文學がしばしば世界觀に乏しい小說やその他として製作されることに對して一つの方向を與へやうと努力した事である。いつて見れば滿洲の特異性の强調であつたのだ。

かうした傾向は滿洲に於てはごく近年、それも昨年から、今年にかけての著るしい現象であつた。特にこの年はこの事實に對して眞劍な批判がなされたのである。全く今までの滿洲文學史に於いて、これ程華々しく作品の對象について激しく採り上げられた年は曾てなかつた。

そして、その結果として、この國の作家達にこの國の所謂特異な社會的實情に對する關心をひどく昂めて作品の上に非常な變化を與へるに至つたのである。全くこれらの文學的方向への指示が、この國の作家達に彼等の作品の上で、この土地を取り込む一つの機運を與へたといつても、決して過言ではないであらう。つまりこの年に於けるこの國の評論家の功績として數へられる可きものは、この國の作家の世界觀に、ある擴充或ひはそのための示唆を與へたといふ點にあるのである。これは同時に滿洲文學にとつては劃期的な功績でなければならない。

そのために立働いた人々として西村眞一郎 胥木實 大內隆雄、城小碓の諸氏は記憶に殘るべき人々であらう

この點で秋原勝二氏が「滿人ものを何故書くか」と云

ふ標題の下にこの國の作家の作品對象について批判したのはこの國の環境から適切な問題としてひどく各方面の注目を惹いた。

つまり作家の取扱ふ滿洲の特殊性に對する理解とそれらに對する苦闘にすつぱり切りこんだのである。秋原氏はこの春にはこの國の第二世の「故郷喪失」につき異常な問題を提出して著るしい波紋を與へてゐる。これらはこの年の文學的成果として擧げなければなるまい。

所が滿洲文學運動にとつて重要な役割を受け持つ可き滿洲文話會がその存在の意義としてとり上げられたのは殆ど宮川靖氏一人位であつたのは淋しい限りであつた。

これは創設の當初に於てはその建前から、それ程考慮を拂はれる必要は認められないかも知れないが、既にこの國の文學の爲には一つの指導標でさへある今日に於ては更に見直されなければなかつたのではなからうか。其他大谷健夫氏の「戰爭と文學」は異色あるものとして注視されそれに落合郁郎氏と八木橋雄次郎氏の「詩精神に關する論爭」も興味のあるものであつた。

これらの人達は、まづ多くは大連に住居を持つ人々であるが、大連イデオロギーと新京イデオロギーなる名稱がこの年、私の記憶では新らしく一部の人々によつて使用され始めてゐる。それに對する八木橋雄次郎氏の論難も甚だ妥當なものであつた。

所で、それから文學評論の舞臺面としてのこの國の新聞紙は忘れてはならないものであらう。滿洲に於ては文學評論にその紙面を割くのは雜誌としては極めて稀である。それには種々な理由もあるであらうがそれはさておき新聞學藝欄のこの國の文學活動への貢献は實に大きい特に評論に於ては學藝欄がその中心であると云つても差支えないであらう。その意味で滿日の月々の「地元の小說評」などのこの國の文學に與へた影響は大きいその他各新聞の寸評なども數へ上げなければならないものであらう。

まづこんな所がこの年の評論の中心であつた。然しながらこの國の文學の不幸は今の所批判の對象が地方的であると云ふ點であるがこれは已むを得ない事情であらうだが、それにもかゝはらず、この年の文學評論の示した滿洲への關心がこの土地の小說やその他に與へた影響は非常なものであつた。さうかと云つて、必ずしも小說がその期待にそつたとは云へない。たゞこの年の文學評論

かその立場で、ある方向を持ち、これまでにない新らしい文學形式の創造に對して、美事な結實の爲めの努力を見せてくれたのである。

作品としてこの國の文學の主体を形成してゐるものは小說及び詩であるが、この年はその作品內容に非常な角度の變化をさし示したのであつた。土地への關心、特にこの國の社會的實情と私達の住んでゐる環境の特殊さへの再檢討は作家達に異常な衝動を與へたのである。そしてこの土地を如何に描く可きか、又は私達の生活との有機的關聯を如何に作品にとり入れるかに作家の努力が拂はれはじめたのであつた。

この傾向はこの國の文學にとつて、確かに新らしい文學の誕生であつた。これこそ滿洲文學の名稱に相應はしいものであつたであらう。卽ち、我々の文化を土臺として文學の創造であつたのである。

その試みとして、出現したものが、靑木實氏の「孫の不幸」「砂塵」「殺意」「一農夫」などの一聯の滿人の生活もの及び大庭武年氏の「農民」等であつた。

然し乍ら、それらは必ずしも成功したとは云へない。何故なら、土地を描く事にのみ力を奪はれて了つて、我々の持つ境遇と文學との有機的關聯への考慮が充分でなかつたことに原因があるであらう。

けれども、それらは少しも責めらる可きものではあるまい。それは飽までも一つの試みであり、我々として新しい文學を生む苦惱に他ならなかつたのである。この點では牛島春子氏の「苦力」は可成優れたものであつた。それは私達とこの土地との關聯に於て先づ成功と云つてもよいであらう。

この事實から滿洲文學は美事な成靑への機運を正確に示したのであつた。これは正に所謂滿洲文學の確立の一歩として記憶さる可きであつたであらう。

一方、G氏文學賞授與を前後として作家の制作活動は著るしく活潑さを見せたが それは必ずしも これらの滿洲の特異性を背景とした新らしい形式による文學ではなく、どちらかといふと、日本的に地方的意識で扱はれたものが多かつた。その中で異色な存在として注視されたのは竹內正一氏の「流離」と福家富士夫氏の「仙人館」であつた。だがこれらは素材と云ふ點でとり上げられたのであらう。その他では靑木實氏「冬日抄」富田壽氏「明日」三宅豐子氏「靜かなる風」吉野治夫氏「黑髮の湯」

なとが優れた作品としてこの年の成果であつた。福家富士夫の創作集「眼劑」などもこの年を飾つた一つとして擧げられるべきであらう。

併し、これらのすぐれた作品が正しくは滿洲に於ける我々の環境としての特殊さが少しも描かれてゐないのは甚だ遺憾でならない。この現象からは、だから作者が自己の周圍についての理解が決して高いとは云へないであらう。この意味では靑木氏などの努力は、假令不成功に終つたにしてもこの國の文學建設の上から多としなければなるまい。

詩に於てその活動は依然たるものがあつた。文學の領域の中でこの國の詩は安西冬衛、北川冬彦などを中心とした「亞」の時代から日本詩壇に與へた影響の大きさをその歷史の中に持つてゐるが、この年も溌剌な働を見せてくれた。その主流をなしてゐるのは詩誌「鵠」であるこの年はたゞ、作品內容に於ける再檢討と云ふやうな劃時代的な試みは別になされなかつたやうである。その中で最も大きかつた事は小杉氏の麥の花の文學賞受賞であつた。その他の出來事としては新人詩集「裸跣詩信」の發刊など。詩人としては八木橋雄次郎氏、小杉茂樹氏、坂井艷司氏等の活躍が目立つてゐた。

戲曲として發表されたものはこの國では殆んど僅かな數量だつた。採り上げるなら「王麟官」牛島春子作であらうけれども、これはある政治的方向への制約の下に制作されたものであるから兎や角云ふまい。

この年の作品活動はこんなものであつたが、評論の生々しさにひきかへて、一般的に作品は低調であつた事は免れないであらう。勿論一部では眞摯に努力がなされてゐた。然し、大体に云つて、現實に游離的な風格であつた事は疑ひのない事實である。

私はこの年の美事な文學的成果に礒讃の言葉を少しも惜まない。それは全く滿洲文學のためには、その名に相應しい創造への努力であつたのである。事實、これ程、この國に於て文學的內容を深めた年は曾てなかつた。

それはこの國の我々としての文化內容が充實し始め、我々のこの國の社會的實情との有機的關聯即ち、我々としての所謂滿洲の特異性の檢討とその昂揚がこの國の文學を引き上げたのであらう。そして新らしい文學のジャンルが發生の機運を見たのである。

然しながら、それは嚴正な批判の上では決して充分な

ものではなかつたのだ。一部の作家がこの點に於てなしてゐる非常な苦心を私は知つてゐる。だが、それは、不幸にも成功であつたとは云へないのである。彼等はこの土地を作品の中に取りこむ事にのみ力を奪はれて我々の生活を忘れて了つてゐる。

滿洲及滿洲人が作品の上で縱橫に現れるのもよい。けれども、それよりも更に重大なのは我々が如何にしてこの土地に住んでゐるかと云ふ事なのだ、つまり、我々の持つてゐる文化內容が獨自なものであつて、例へば日本人が日本に於いて持つてゐる文化內容とは自ら相違がなければならないことなのである、これが屢々とり上げられる「滿洲の特異性」なのだ、こうした文化的教養が作品の上で呼吸してこそ、この國の文學はある文學ジャンルを始めて形成するのである。それをこのやうな文化的基底を無視して、無暗に滿人が描かれても優れた作品が生れやう道理はない。

さうは云つても、私は何も傳統的な日本人から離脫しろと云ふのではなく、移住民としてこの國に住む場合この國の社會實情に於て必然的に特異な文化形式が發生し、それが私達の教養內容となるであらうと云ふだけのことなのである。

では、このやうな文化は如何にして認識するかと云ふことになれば、それは飽くまでも作家の任務であらう。

それにした所で、この國の文化活動が活潑になつたのは漸くこの一、二年の傾向であるから、先驅的立場に置かれてゐる作家の苦惱は充分に察せられる。そしてまたその業跡は讃えられなければなるまい。

けれども、この國の作家は思想的な貧困我ひは世界觀の狹小については充分な責任を負はなければならないであらう。

この年に於ては滿洲國政府が政治的意圖の下に企畫した「文藝親話會」の開催と云ふ重大な出來事があつた。この會合に對するこの國の文學者の態度はどうであつたであらう。彼等はそれを完全に默殺して了つたかに見える。兎に角一つの國家が積極的に藝術的分野に眞正面から開き直つたのは確に異常な事柄である。文學にとつては正に由々しい出來なのだ。こうした政治的工作が文學に及ぼす非常な影響を考慮するならそれに隨伴するにしろ、しないにしろ、この國の文學者は默つて傍觀する譯には行くまい。

所が、これを採り上げたのはほんの僅かな評論の程度であつて別に何等問題にならなかつた。これで文學が文學として健やかな成育が望めるであらうか。この國の文學者はこの問題に對しては實は敢然と立上がらなければならなかつたのだ。そしてその關聯を如何に處理すべきか對處されなければならなかつたのである。

この出來事は文學的領域の廣さに於て、滿洲文話會の結成などよりこの年に於ては更に重大な意味を含んでゐたのである。だから、何ら對策が施されない限りは、この意味で無思想であると考へられても已むを得まい。文學に於ては無思想作品の立派な成立などは考へ得られるものではない。

然し、これとて考へて見ればこの國の現狀からは文學者達に對しては同情を寄せなければならない多くの點があるのである。先づ彼等は作品に依つて生計を保つてゐるものは全くない。そしてその多くは國策的な大會社に勤務してゐるのであるから迂闊に口も利けない勿論、この意味で文學運動などは思ひもよらないであらう。

それから、文化と文化事業の貧困である。これらがこの國の文學者の成育をどれ程阻害してゐるかは想像出來る。けれども、なし得る限り、この國の文學の擴充のために努力を傾注したい。口が利けないのは例へば作品によつて生計を得たにしても同樣なのだ。私には彼等が充分に文學のために働いてゐるとは思へない。

文學的成果に對する批判としては、先づこうした事は云へるが、然しながら、どの角度から見てもこの年に於ける文學の收穫は實に華々しいものであつた。

この年はこの國の文學を劃する一線となるに違ひない文學ジャンルとしての滿洲文學はかうした堆積によつて漸く形成されつゝあるのである。私はこの意味に於て滿洲文學創造の主流としてこの年も最も働いた「作文」同人、特に靑木實氏の勞を多としたいのである。

一九三七年
滿洲文壇の回顧

古川哲次郎

あらゆる意味に於て多事多端であつた一九三七年も殘すところ僅か一ケ月で最後の幕を閉ぢようとして居る。本年度滿洲文壇の動きは如何であつたざらうか。本年度に於ける見通しと飛躍のため、本年度の回顧も亦必要である。

私は「一九三六年滿洲文壇の回顧」の中で「滿洲文壇にとりて來るべき三十七年こそは更に目醒しく活動性を發揮するであらう。そして文學活動は本年度（三六年）より一層華々しく展開せられるであらう。それは來年が滿洲に於ける政經的なものゝ一層の現象的安定を見るであらうからである」といふやうな意味のことを書いたと記憶してゐる。私のこの豫言的言葉の如く、本年度における滿洲文壇は非常なる現象的繁榮を示した。それは次のやうな本年度文壇の出來事として現れてゐる。

三月　昨年十月發表された第一回G氏文學賞、小杉茂樹氏著詩集「麥の花」に授賞さる

五月　滿洲における前衛的靑年藝術家による滿洲アヴアン・ガルト藝術家クラブの結成

六月　滿日學藝欄の讀者への解放と內容の充實

同月　在滿文筆家の綜合團体たる滿洲文話會の結成

七月　大新京日報に學藝欄新設さる

八月　滿洲映畫協會の設立

同月　滿洲大同劇團の誕生

九月　滿洲國民生部具申機關たる滿日文化協會主催の藝術親話會開催さる

十月　G氏文學賞委員會の手になる滿洲文藝年鑑第一輯發刊さる、以上は主として筆者の記憶によるもので（重要事にして脫落してゐるものは全く筆者の不注意である）

以上の諸事項を通じて先づ考へられることは本年は、何故に斯くも華々しい活動を示したかといふことであるその一般的原因として私は次の如く考へてゐる。

滿洲における日本資本の經濟開發は三七年に入りて漸く第一期工作を終り、第二期的建設が開始されるに至つた。このやうに滿洲經濟のブレストな近代資本主義化は四圍の國際情勢と日本內部における要求とがしからしめ

たものであつて、日本資本はこの情勢に應じて驚くべき近代的能力を發揮し活動を續け來つた。斯くて鬼角表面的には、一應の落付又は一區切を見たかの觀を呈した。このことによりて在滿邦人は現象的生活より內省的な又は本質的な落付きをもつた生活を求めんとした。丁度それは餓ゑ渴したものが食物を求めるやうに本能的であり熾烈ではあつたが、一般的に見てそれはあくまで無意識的なものであつた。こゝに三七年度における文學活動の現象的活潑性の社會的根據を見出すことが出來ると思ふ

然らばその活潑性は何故に現象的であつただらうか。それは眞の意味での激動せる滿洲經濟の安定ではなく、その上に樹立されたところの文化ではなかつたからである。我々は滿洲に既存する文化とは異つた新しい文化を求めて居りそれを作り上げんとして居る。既存文化を維持することではない、さればこそこの文化は新しい土臺の上に作り上げねばならないのである。だが、その土臺が未だ建設の端緒にあり、プロセスにある。斯る土臺の上では文化は未だ開花どころか漸く種蒔く時位にしか當らないのである。この意味において、本年度滿洲文壇の非常なる活況は本質的なものではなく現象的なものである。土臺が漸く第一期的建設を終り、一つの過程を經たといふところに、土臺の上に咲く文化の――そしてその一分野としての文學の現象的な活動性を見出すことが出來るのである。それは本質的に深くなく內省的でなくあくまで現象的、表面的な華々しさに過ぎない。

三七年度に於ける滿洲文壇を回顧するには、前半期と後半期とに分けて考察することが便判である。それは單に後半期七月以降支那事變が勃發してあらゆるものが戰時情勢化の坩堝に卷込まれた變動のポイントであるばかりでなく、滿洲文壇の諸事象を通じて前期と後期とに明確な區別をつけ得るからである。先づ前半期間に起つた文壇の諸出來事及び諸發表機關を通じて文壇の主流、傾向といつたものを窺ふことにする。

三六年度は「植民地文學」又は「滿洲文學」なる課題が提出されこれに對する熱心な批判、討論が續行され議論の中心となつた。これがため今まで文藝とは凡そ緣遠いと思はれた者までが「滿洲文學」「植民地文學」を口にするやうになり、文壇はこれらの活潑な討論が支配するに至り、越年して三七年を迎へたのであつた。この討論は本年初頭においても續けられて來た。滿鐵社員會機

關誌「協和」にすら滿洲文學に關する寄稿が目につくやうになつて來た。けれども大抵の論旨は、滿洲文學に對する再檢討、再批判、鄉土文學、植民地文學の問題、在滿作家の役割といつた極く概念的な昨年度の延長に過ぎなかつた。それが本期の終りごろに至つて、滿洲文學の進むべき方向に就て語られる傾向を示した。

これに刺戟されたのか、作家側では滿人寫實の作品、五族交涉、土地等をテーマに選ぶ作品が續々と生れて居る。一月より五、六月に亘る新天地、滿蒙評論、滿洲公論、日滿女性、滿洲行政、作文、新京等の月刊諸雜誌及び奉天、新京、哈爾濱等の新聞紙に揭載された創作欄を通覽すれば、題目だけで一見してそれと判然するものが如何に多かつたことであらう。これと同時にこれら作品に對する評論家の批判が行はれ、作者と評論家との論爭すら派生的なものとして起つた。例へば鈴木啓佐吉氏作「沙十九號」に對する西村眞一郎氏の批評、それに對する作者の反發、三宅豐子氏の抗議等がある。

同期間における滿日學藝欄の文藝に對する關心は他の在滿諸新聞のいづれよりも熱心であり、文壇に寄與するところは大きかつた。殆ど毎月土地の作品に對する時評が續けられ、その他有意義な評論が數多く發表された。大連の文壇は同欄を中心として圓周を描くやうな樣相を呈した。だが然し新聞文藝欄は時評、短評、隨筆といつたものを通じて文壇の中心的存在を示したが、文學の生命である創作は月刊諸雜誌に發表され「作文」のそれが一番多く問題となり又「作文」に發表された個々の作品が滿洲文壇の質的レヴエルを代表するものでもあつた。このやうに文學的活動が華々しい活潑を示し始めると、今まで餘り文藝に關心を持つてゐなかつたかに見られてゐた在滿諸月刊雜誌も文藝欄を特設したり、擴張したり文壇人を文藝欄顧問にしたりして文學に對し多大のスペースを割愛するやうになつたことも、今期間の注目すべき一現象であつた。これに對して評論家側からは「政經的なものに對する極度の言論統制によりそのハケ口を比較的統制外に置かれてゐる文藝的なものに求めんとする傾向である」と說明し、又或者は「文化、文藝の昂揚されつゝある證據である」とも說明した。

前半期は上述の如く、前年度來の評論のむし返しと土地のものを主題とする作品の發表とが主な傾向であつた大体において評論が活潑を示し作品に先行した觀がある

評論が活潑であるといふことは立派な作品が生れる前の一つの陣痛であるかも知れない。然しながら、いたづらに無統制、盲目的な評論は立派な作品を生むのに何等の寄與もなさない。新興文學の指標を示すに足る立派な評論の出現こそ歡迎すべきであるが、今期はそれらしきものを見ることが出來なかつたことは遺憾である。

前半期に比較して後半期は非常な相違を示してゐる。前半期が作品、評論を通じての文壇の主な傾向であるならば、後半期は諸種の文藝機關が生れ、文藝運動が華々しく展開された「滿洲にあつても、亦中央政府にあつても、日滿兩國はよろしく、滿洲文化事業に對比して積極的な保障を與ふべきである」（文化運動に就て「滿蒙評論」一月號）と西村眞一郎氏は本年々頭に待望してゐるがそれが具体化し、現るゝに至つたのは本年後半期以後の事である。五月滿洲アヴアン・ガルト藝術家聯盟の結成を皮切として六月末全滿文化文藝人の親睦連絡機關である滿洲文話會が呱々の聲を擧げた。亞いで新京支部が結成され滿洲大同劇團、滿洲映畫協會といつたやうな文藝に密接な關聯を有する文化團体が出現し、九月七日より十月九日に至る間、國都新京に於て、この國の最初の試みである滿日文化協會主催になる　文化親話會」が開催され美術、演劇音樂、文藝、民衆娯樂等の各親話會が行はれた。このことは滿洲國政府が漸く文化建設に餘裕を持つに至り、積極的に乗り出して來たことを物語るものである。

更に本年文壇の特筆すべきものとしてG氏文學賞による「滿洲文藝年鑑」第一輯の刊行がある。內容如何は別として刊行されたといふ一事によつても本年度滿洲文壇の大きな收穫の一つである。尙私の記憶にあるものとして「苦力素描」「裸跣詩信」「新士」「文苑」等の文學雜誌の發刊も本年後半期に入つてからの出來事である。

本期間における評論は前期に比し餘り振はなかつたやうである。前期末頃に展開された「滿洲文學の方向」はそれにづいて議論されたゞけに止まり、指導理論は遂に確立されず、「故鄕喪失」と「滿洲文學の精神」の二問題が評論界の中心となり、支那事變の勃發によつて　戰爭と文學」といつたものが現れ、それも土地の人の手によるものではなく、多く內地中央人の書いたものであつた故鄕喪失と滿洲文學の精神は共に、滿洲文學に關する命題の一つであり、前半期及び前年度以來引續き討論され

て來た論題の延長に過ぎなかつたが、評論振はざるの時、新しい命題として出現したことにより、各方面に注意の眼を以て迎へられた。評論が振はなくなつたといふことは今次事變によつて影響されたからであり、これは單に文藝評論ばかりでなく一般の評論界においても同じく非常な不振を示してゐる。これらと相前後して「詩」に關する論爭が華々しく行はれた。最初滿日紙上で落合氏の時評に對し八木橋氏が批判を加へたことに始まり、更に反擊となり、再反擊まで見たが、この問題は新天地滿蒙評論等の雜誌でも問題として居る。

創作の方では「作文」特輯記念號の「詩と小說」號は本期のヒットであり、又諸月刊雜誌も事變にも拘らず作品を掲載し前期に劣らぬ、或はそれ以上量的に多い程の活況を呈し事變に際し評論界が不振になつたことに反し作品の依然たる確實な歩みは、本年度文壇の最も喜ぶべき傾向であり、前期に比し內容的にも優れたものが多かつた。斯くて本年度の後半期は、事變勃發といふ文壇にとりて、このましからぬ客觀的情勢裡において、文學運動としては、前半期よりも華々しく活潑に多くの動きを見せつゝ越年することになつたのである。

一九三七年の一ケ年を通じて文壇を回顧するとき、滿洲事變以後今年ほど活況と繁榮を見たる年はなかつたやうに思はれる。滿洲事變數年前、內地において左翼文藝の華やかなりし頃、滿洲文壇もこれらの直輸入によりてプロレタリヤ文學論が論壇を支配し且つ假裝作品が橫行した時代があつた。これら左翼評論家又は作家（假裝的なものに過ぎなかつたが）等は理論と實踐の辨證法的統一を口にして小兒街頭進出をなし、華やかな場面を展開したのであつたが、それは滿洲事變といふ政治的激動に出會つて、ひとたまりもなく泡沫のやうに壞滅し去つて了つた。それは滿洲における日本人間の左翼文學がプロレタリヤといふ大衆を基礎として、その大衆の中にあつたのではなく、一部急進的インテリが流行的風邪病患者の如く觀念的な運動を續けたに過ぎなかつたからである。

滿洲事變は滿洲における文化の再認識と再出發とを要求した。斯くて一昨年末ごろまでは「文壇不振　の聲があちらこちらで叫ばれ續けて來つたのであるが昨年初頭ころより「滿洲文學」「植民地文學　の問題をターニング・ポイントとして滿洲文壇は急速に活況を呈し始めた。そして「この一ケ年（三六年）間において、特に在滿邦

人インテリゲンチアの文學活動は著しく」小說の「一般の傾向は作者が滿洲に在住する日本人としての生活感情を基礎にする立場からの創作態度を示し」評論も亦「滿洲の文學に對する再檢討、再批判、鄕土文學、植民地文學の問題、在滿作家の役割の問題等かなり華々しい論戰が展開された」(滿洲年鑑 二十七年版) そして本年を迎へたのであつた。本年度も大体前年度同樣の傾向を示し、前年度の延長の如くであつたが、評論はいたづらに討論され部分的な問題が問題となる活況を示したのみで、統計的にして、確固たる新興文學の指標となるべき理論が確立され得なかつた。作品の方においては滿洲文學の特殊性を表現すること急にして滿人寫實、五族交涉等をテーマとする作品を創作する傾向を示したが、大体に於て皮相的なものに終り、滿洲生れの人々によつて鄕土的視角からの吟味が行はれたに過ぎなかつた。

七月に入つて「支那事變」に遭遇した滿洲文壇は「戰爭は文化の發展を阻害する」といふ戰爭と文化との關係に於ける根本的公式にも拘らず、一見無影響のやうに諸種の文藝團体が創立され、滿洲國政府も亦文化に對する積極的態度の片鱗を見せた。然しながらこの事實によつて我々は、滿洲文壇が(文學が)根本的に確固たる基礎の上にその歩みを續け來つたものであるといふやうな樂觀的考へ方は禁物であらう。これは政經的動亂の中に於ける一時的安定の上に咲いたところの文化分野の片鱗に過ぎない。昨年又は本年前半期に於ける文學的昂揚の波が蓄積されて後半期において文學的運動となつて表面に現れたに過ぎない。さればこそ、滿洲文壇は一見、今次事變とは無關係のやうに活況を呈し來つたのであつた。

明年度の滿洲文壇は如何であらうか。將來のことは何ものといへども正確な豫測をすることは出來ないが、かうであらうといふ推測はするに難しくない。私は恐らく明年には事變の影響が何等かの形式に於て現れるものと信ずる。或は滿洲文壇が窒息するが如き狀態を呈するかも知れない。これは單なる私の杞憂に終ることを、私は希望する。希望するが故に私は今年の如く昂揚した文藝の波を將來とも持續させ、滿洲文學發展のために、各文藝人は「全生命を文學のために打ち込む情熱をもつて、壁に身を打ちつけ、石に嚙りついても滿洲文學を創り出さんとする決意で打ち進まん」ことを要求するものである。

最近の國文學研究思潮につきて

「文藝復興」の發刊を機として

渡部榮

「近時我が國文學研究は異常の進展を遂げ世の關心を牽くに至つたが、しかし時勢の變轉と學界の情勢とは、漸くこゝにも行詰りの狀態を招來するに至つた。我々は今や一大轉回を期して、從來の研究態度・方法の上に、眞摯なる檢討を加へると共に、學界をその特殊化、孤立化の現狀より開放し、廣く現實社會との接觸を圖ることによつて、これが局面を打開すべき重大時期に直面してゐる。そしてそれこそは現下の我々に課せられた最大の義務でなければならない。しかしながら、このことは決して一部同志の手によつてのみ成し遂げられることではない——我々は啻に學界内部に對するばかりでなく、進んで文壇・評壇の積極面との提携をも求めなければならぬ。(下略)」

右は「文藝復興」創刊の辭の要旨であるが、かゝる切實なる意圖のもとに新に誕生した本誌は、兎に角、從來の國文學關係誌の概念を遙かに超えて一新型を提示したと見られるのであるが、これは決して偶然乃至は超越的所産と見らるべきではない。最近頓に重要視せられつゝある國文學研究における批評性の雰圍氣の中より、指導的役割を以て具現したものが本誌であると見ることこそ最も正しい立場であらう。

昭和十・十一年を契機として、我が國文學界に一つの强烈な嵐が吹き起つたことは、已に述べるまでもない。それは主として岡崎義惠氏(東北帝大文學教授)の著「日本文藝學」を中心として喧傳され、論議せられて來たかの如くである。

(實際には昭和七年に石山徹郎、高木市之助兩氏等によつて「日本文藝學」の提唱が爲されてゐるし、更に遡れば垣内松三師の先見的活動にまで連繫されるものである。然るにその後に現はれた岡崎氏の論が主として取り上げられ、論議の中心となつたに就いては色々の原因があげられるのであるが、これに就いては他日

の機會に筆を執りたいと考へる）

この書は、方法と體系（日本文藝學樹立の根據、學の對象として見たる日本文藝學、古典文藝研究の態度、日本文藝思潮、日本文藝理論の主流）解釋と批評（古事記の國しぬびの歌、柿本人麿と杜少陵、光源氏の道心、正徹の風體、元禄歌舞伎の世界構造、芭蕉と良寛、新體詩の本質）美學的基礎（あはれの考察、有心と幽玄）に分類され、種々の題材を通じて兎に角一貫せる意圖と精神とを傳へんと努めて居る。

而して日本文藝學樹立の最も切實なる動因は、氏の言を借りれば次の二項に存して居ると見ねばならぬ。

「今の國文學者が、今少し智接に現代生活に接觸し憑いては來るべき時代の原動力たるべき素因を、より多く蓄積してはどうだらうかといふことである」「私が切に國文學者の奮勵を促したいのは、外廓瑣末の点において一語一字を忽にせざるその精到な觀察眼を割いて、今少しく精神の内陣に迫つてはどうであらうか、この点でも文壇の空氣に生息する人々のなす所から學ぶべき点かありはしないかといふことである。」

岡崎氏の出發点は、從來の國文學界の研究領域が、殆ど文献學的方面にのみ限られて居た事實に照して、正當なる反撥としての意義を十分に持つものであらう。國文學者の頑迷が指摘され、その「傳統性」がメスの先きに掘り上げられて、新進の學徒は雪崩の如くに「日本文藝學」の傘下に集まり、所謂　國文學者」は、理論的言辭の放射を浴びながら、舊城廓に踏み止まつて居る情勢を現出した。

併しながら贊否兩論者の何れからも「日本文藝學」は正しく認識されたかといふ點に至つては甚だ疑はしい所謂　國文學者に　は、直ぐに新らしいものを見くびつてしまふ悪風があり。「新進學徒」には買ひ被り易い早計と、あらゆる新らしきものに對する觸手的敏感性とがある。それ故に前者は「日本文藝學」の主張するところを、皆まで聞かずに中座しようとするし、後者は一言半句を耳にして、もうそれですつかり、その精神を理解し盡したかの如くに思ひ上つてゐる者が相當に多い。

これでは眞劍になつて學界に叫びを上げた岡崎氏にとつて、誠に不當なる酬い方であるといはねばならぬが、實際には又少數の眞の理會者と提携者とが現れたのでもあつた。併し「日本文藝學」提唱の現在における意義は

寧ろ其處に存するのではなく、これを動機として「國文學研究」そのものに對する各種のアングルよりの嚴正なる批評的精神の示唆にあると私は信じて居る。

事實、昭和十一年度後半期における諸種の雜誌は、「日本文學の世界性「我が國の文化遺産に對する現代的再吟味」等の内容を以て充され「日本文藝美論」「日本古典批評」として學徒の關心を煽り立てたのである。

かゝる反省と更新との過渡期にあたつて、眞摯なる思索と學的良心と、更に知識層への喰ひ込みとを中心とする「文藝復興」の出現は、それの持つであらう處の、高き批評的精神の故にこそ祝福されねばならぬのである。

さて我々は次に、かゝる本誌の内面層に立ち入つて果して其の意圖が實現されて居るか、更に又未來に向つて光輝と希望とが約束されて居るかどうかを檢討しなければならない。併し其處に盛られた諸論文の一々に亘つて紹介と批評とを爲して行く事は不可能であり、從つて全體を把握する二、三の角度からのみ俯瞰されねばならぬ。

長谷川如是閑氏の「日本文學の形態的特徴」に現はれた論旨は特筆すべき程の斬新さは無いが支那文學と我が國文學との差異を論じて「兩者の差は、宜に同じ事柄を語る言語の調子の差のやうなものではなく、同じ事柄を見る角度の差異であり、同じ事柄を表現する態度の差異であり、それは表現の形式のみの差ではなく感情の形態の差異である」と指摘し、上代日本文學形態に對して「表現上の特徴と感情内容のそれとがあつたがその兩者ともに、非常に早い時代に於てわが國民の間に行はれてゐた傳誦文學のそれを復興せしめたものであつたといふことを先づ考へなければならない」と云つたのは尤もな示唆である。

併し、已にこれ等の事は氣附かれて居る領野であり、唯その十分なる實際的研究と、其實績を以て改訂されるべき日本文學形態史への希望が踐されて居るのである。

次に石山徹郎氏の「文藝における藝術性と實踐性」とは氏の透徹せる筆致に依り良くその意をつくされて居る。

この論文は文藝の本質研究といふ事に關聯させて取り上げられたものであるが、論旨とする所は大體左の如きものに要約する事が出來るであらう。

「文藝作品を藝術性と實踐性との結合體として、その具體的な特性を摑み、その特性をその決定者としての

作者の世界觀に還元し、その世界觀の因つて來たるところを歴史的、社會的諸事情に重要な契機において正しく探求すること及びそれと關聯して、當該作品の內容的機能と見られる實踐性が、その作品の享受者層に對して如何なる働きをなしたか、換言すれば、それが歴史的に如何なる役割を果したかを判定することが中樞的な操作となる」

而してこの場合、氏は「文藝の實踐性 について次の如く述べてゐる。

「生きた文藝ーそれは歴史的なものであるーは、結局享受者の生の狀態方向を變革する可能性として見るべきである。それは單なる鑑賞の對象ではなく、鑑賞を通して享受者の實踐に結びつく力を持つたものである。その力が即ち內容的機能である。それ故に、文藝の內容的機能はこれを文藝の實踐性と呼ぶことが出來る。」

更に氏は

「文藝の本質は、これを現實的に見るならば、どうしてもその內容的機能に重點を置いて捉へなければならない」と說く。文藝が特にその藝術性の一面においてのみ論じられようとし、文藝の本質研究の對象がかく局限されて來た時に於て、かくの如く高所よりの論述を爲された事に、かなりの價値を見出さねばならぬであらう。殊に氏は「日本文藝學」批判時代（若しかゝる呼稱をその一般的傾向の故に使用し得るならば）において頓にその穩健、忠正なる思索者として識者間に注目せられつゝある人である。この石山氏にして、而も「國文學」關係誌たる本誌に、かゝる論を發表されたことに一層の意義を認めざるを得ない。

岡崎義惠氏の「文藝學とその基礎學」において、氏はかなりヒステリツクな筆致を使つてゐる。これは「日本文藝學」提唱者としての氏が、こゝ二年間に蒙つた內外幾多の論難、誤解、妥協、輕視ー等に對する當然の憤懣であり、必然の傾向であらう。氏の論を中心として起り且つ起りつゝある群雄の言辭を持てあまし、愛想をつかしてゐる形があり〳〵と觀取される。そして兎に角、すべての人に納得してもらひたい事は「文藝學は哲學としての美學を基礎學とする藝術學の一分科であると考へられなければならない」といふ事だと念を押して居るのである。

更に氏は「文藝を言語、文獻によつて規定せんとする

者は言語、文獻が文化の媒材であるといふことを忘れて美的精神とか科學的精神とかいふ如きものと同列に置き得るものであるとする錯誤に陷つてゐるのではないかと思ふ」と指摘し「文藝學の本來の機能は、美學の持つ基礎的な力に統制されつゝ、あらゆる補助的な文化科學的要素を獨自の形態に構築してゆくことである」と述べてゐる。

更に「日本文藝學」の名の下に發表せられた田崎氏の業績について見るに、我々は多くの信頼と好意とを寄せることに些かの躊躇をおぼえるのである。

これについては文藝復興誌上の「國文學時評」において榊原美文氏及び鈴木福五郎氏に依つて一部指摘されて居る

即ち「文學」（岩波書店刊行）四月號「古典批評號」に卷頭を飾つた岡崎氏の論文「源氏物語の美について」鈴木氏は次の如く述べてゐる。「ものゝあはれの淨土は現代に迄又未來に迄その目的を置くものだといひ、平安朝的限界を超えて、普遍人間に參ずる道を築いて居るといはれるが、それは氏がさうお思ひになるといふだけのことでしかないだらう。さういふ私人的な臆測を公の事實として遮二無二に押しつけようとするのは、一つの我儘でしかあるまい。獨斷といふべである」と。更に榊原氏は「理想小說としての統一を緩めようとする程に現實的な要素に富むところに文藝の日本的個性を認め、その理由として文藝が國語と結合する運命を持つてゐることを指摘される岡崎氏の說には、かなりの無理がある」と指摘し、神秘的幻想への移行を警戒してゐる。

私はさきに、この岡崎氏の論文を讀了して右二氏の如き不滿を感じると同時に「名文だな」と思つた。

名文ー惹きつける力はあるが飽きが來る。美しいが自ら醉つて歌つて居るといふ風に感じないわけには行かなかつた。「美」といふものを讀者に傳へるためには、このやうな方法が最も効果的であるかもしれぬとおもひながら、而もそれを喰ひ止める白々しさがあるー輕羅に包まれた獨斷の塊を探り當てた淋しさであつたらう。これが氏の意圖せるものゝ性格を十分に持つたものであるとすると淋しい。「光源氏の道心」も、更に檢討されねばならぬ。

この意味において、同誌に「國文學時評」の存在する

事を心から喜びとする。至平に、見識と感斷とを以て埋められたこの欄は、寧ろ「月刊雜誌本來の使命は、それが如何なるものにてもあれ目まぐるしく生起してくるところの現象を的確に把へ、公正なる批判を加へることによつて現實の正しき發展に寄與することにある、本誌の任務とするところもまた決してそれ以外のものはないのである」と標榜した本旨を、最も具體的に表出したものと言つても過言ではない。但し「國文學時評」の價値は、その批評者の「學」と「人」とに依つて如何樣にも高下するものである。批判のマンネリズム、行き過ぎた尖端性の兩者に留意し指導性の横溢に心がけるべきであらう。

頴原退藏氏の「近世後期文藝の特性」は、その「逃避的精神」の闡明を心がけた好論文である。初期洒落本の多くが漢學者の餘技として現れて居ることについて、氏は　所詮詩文の間にはなほ十分の自己滿足を見出し得なかつた學徒が、最後に求めた逃避の手段ではなかつたかさうした彼等は纒に鬱懷を遣り、會心の笑を洩らしたのである。さういへば、その笑には何かしら虛無と自嘲の匂が感ぜられないだらうか」と言はれたのは正しい。更に、元祿の「粹」と安水、天明における「通」とを比較して、「粹の特質とすべきは、やはり現實生活に對する自由濶達な情熱であつた。これに對して通は現實への聰明な、しかし消極的な諦めが核心を成して居る。――もし粹に生の躍動が見られるならば、通にはむしろ性の回避があつた　といはれて居る。

生活の中に構へられた遊びの態度に依つて生れた近世後期の文藝作品に對し我々は確かに華やかさと同時に一種の淋しさを感じる。第二の西鶴も近松も、出現せずして、空しき多彩の中に過ぎ去つた數十年の時期を悲しむのであるが、氏の言はれる如く「このやうな遊びがあつたからこそ、近世後期の文藝はなほその文藝性を保持し得たのである。さうでなかつたら享保期以後の小說書目年表は、談義物や教訓物だけで埋めつくされたかも知れない」ことは注意されて良い。氏の批評に現はれた鋭い角度に敬意を表すると共に、病氣御全快後の潑剌たる活躍に期待するものである。

「日本文化の偉大性」(本田喜代治氏)は、押へるべき所を十分に押へたすつきりした論文である。殊に近時「日本的」なる語に依つて構成されて居る單純なる概念が横

行する時にあたつて、氏の提說は十分傾聽するに足るものであらう。併し心ある者にとつてはそれは、既に高度の常識と云つても良いであろうし又それ故にわざ〳〵此處に記す必要も無いと思はれるのであるが、なほ氏の論をして光ある存在たらしめるものは實に時代そのものである。信念とか、精神とかが無闇に尊重され、知性的なる一切のものを目して非日本的となす井蛙の群が横行する時代相そのものに存してゐるのである。氏はいふ「日本的は動的原理であり、それは何かから生りそして何かに成るものである。それは生り成りて正に辨證法的原理である。支那文化が來ようが西洋文化が來ようが恐れるところなく呑吐して、その惜みなく瀆澤な呑吐の過程中にもと〳〵自分のもつてゐる生活內容を純粹の持續において文化する、その生命力、その動的な原理、それが私の日本的なものであり、それは萬葉から明治に至るまで發展もなく、だらりと延びた死骸ではない」「貫つたものをどし〳〵自分のものとして、終ひにはこれを人に吳れてやれるやうにする、その力こそはわが文化の偉大さ若さの賜であり、それは明かにあはれやさびではなくて明治――萬葉の世界精神である」と。

私は此所に日本文化を以て「無の文化」と思惟される西田幾太郎氏の說を思ひ浮べる。氏は日本文化を情の文化として次の如くに述べて居られる「情の對象となるものは知的に限定せられるものではない、空間的に固定せられたものではない。それは無限に動くものである。否形ありながら形なきものである。そこに情の文化といふものが考へられるのである。我國文化の本質はこゝに捕へられなければならない。それはエードスの文化でもない、禮教の文化でもない、純情の文化である」(哲學の根本問題・續篇)と。

日本文學の世界性が盛んに論議せられつゝある今日、かゝる性格を持つ日本文化の流れの上に立つて認識せられねばならぬであらう。而して世界文化とは、實は外でも無い「種々なる文化が各自の立場を守りながら、世界を媒介として自己自身を發展することによつて」西田氏同書　のみ形成されて行くのである事を再思すべきである。(此の項に關しては、渡部政盛氏の「日本的なるもの〳〵研究」――啓文社刊行――を參照せられゝば、更に多くの示唆に富むであらう。)

本誌は更に、歷史講座を設けて好論文を得て居るが今

は一切を省略しよう。

以上、一雜誌の論文を中心として最近における國文學研究の情勢に多少とも觸れて來たのであるがそれは主として最前線の側に屬する思潮と、その批判とについてであつた。併し學界の事實上の狀態は、多種多樣の立場と論戰とに依つて複雜多岐を極めて居り、諸種の研究雜誌に發表される每月の論文の大多數は實證主義的研究の所產であり、これが學界の中心を根強く貫いて居るのである。

だが、この實證主義的研究は、批評的研究に對して正に對局的對立に在ると考へることは不當であらう。我々は今日と雖も、更に多くの實證主義的研究の成果を要望する。併し又一方、實證主義的研究の側に立つ者に依つて、この批評意識の問題が眞劍にとり上げられることを望むのである。それは「實證」の科學性を獲得する唯一の道なのであるから。

最後に大學國文學科に身を置く人々について一言しよう。

彼等は今、この批評意識の油然たる迫進に驚きの眼を瞠り思索的世界に魅力を感じる連中は身を以てこの潮流に泳ぎ出さうとあせつて居る。併し私がさきに述べた如く「國文學」の研究は「美學」「哲學」そのものではないのであつて作品の理會が根抵に存しなければ國文學研究における思想の泉はかれ果てる。卒業論文の內容が、擔任教授に對する媚や、流行に終つてしまつては無意味である。唯、この過渡期的現象の中に、如何に「國文學徒」としての道を正當に跡づけるかの見識が必要とされねばならぬのである。

「桐壺源氏」「須磨源氏」の稱がある如く、作品の一小部分のみを窺つて源氏物語の價値を論じようとし、一かど判つたつもりの僞學者的態度こそ學界を毒し、且つ歪曲するものである。我々は先づ十分に腰を据ゑて讀みこなさねばならぬ。一切の研究はそれからこそ出發する。「單に索引や表題を知つたのみで博識顏をする人々は如何にひどく蹉跌するかを世の人は知つてゐる僅かばかりの未完成の書は尙更著者の眞精神を計る尺度たり得ない」とはヘルデルの言である。

又一方、古色蒼然たる「國學者風」の生き方に言ひ知れない憧憬を感ずる學生連は、須らくその上に立つて批評的精神の何者たるかを認識すべきである。

ヘルデルの Verstehen デイルタイの Psychographie に連結されて行く跡を辿り、更にショルツの批判へ到りつく思想の流れ、更に現代「ナチス文藝學」の行方を一通りは觸れて見なければなるまい。時代を呼吸する國文學徒は「こそ」「侍れ」「あはれ」「ことぐし」の世界を通つて、更に一歩現代の意識の中に脫け出して來なければならないのである。

（ドイツ文藝を母胎として發生した日本文藝學の意義については更に詳しく論じなければならぬし、それこそは現代の國文學研究の未來性に及ぶものであるが、他日に讓り擱筆することゝする。）

川端康成論

大谷健夫

（一）

川端康成の「雪國」に文藝懇話會賞授與の決定を見たこの一年間を通じて、果して「雪國」が最高の傑作であつたか、それともそれを凌ぐものが他にあつたかどうか餘り雜誌を讀まない私には判斷出來兼ねるが、とにかく川端康成が文學的經歷において、それに値する貫祿を十分に持つた作家であることは確である。第一回の受賞者横光利一と並んで藝術派の最高峰に位し、最近佳作「雪國」を完成させた彼に授賞を見たのはまづ順當で、貫祿を重視する文藝懇話會の官僚的な一面と結びつけて考へることもないだらう。

今、彼の「雪國」を批評する前に、大正末期の新現實主義行詰り時代に出現し、新感覺派運動をくぐつて現在の境地に到達した彼の文學史的意味を考へると同時に、「有難う」から出發して「伊豆の踊子」に川端的なものを發展させ、次に童謡でそれを一應完成し、更に「雪國」に展開した彼の足跡を辿つて見よう。

自然主義以後、白樺、新思潮を經過した大正時代文學のくどくどしい叙述は此處では遠慮するが、川端の文學史的意味を語る手段として、彼の巨大な同伴者横光利一との比較に若干觸れる事にする。二人共、所謂藝術派のレッテルの示す如く、人生派とは對蹠的な存在で、人間と社會との關係を描く作家ではなくて、人間と人間との關係を、異常な面、美しい面において捉へる作家である。それは社會的關心の次第に深まつて行く大衆の要望とは明かに背馳してゐる。島崎藤村が、山本有三が、「夜明け前」に「眞實一路」に、動いてゐる社會面の進展と混亂を描いてゐるのに比べると、この二人は完全にそれを默殺してゐるやうに見える。

横光が「時間」を書いた時、私は十一谷義三郎と彼とを並べて「藝術派最後の型」と呼んだ。それから十年近い今、横光、川端が藝術派の高峰として光芒を放つてゐる事實は何を意味するものであらうか。十一谷の所謂「夏爐冬扇の文學」である二人の作品が、揃つて文藝懇話會賞といふ作家最高の榮譽を擔つてゐる事實は、近來この國に起つてゐる日本的なものと、社會主義的文學の彈壓とも關聯を持つてゐることは確であるが、更に二人を大きな存在にした原因の一つに、藝術至上主義に徹底してゐたことを數へようと思ふ。社會を正確に認識してゐる作家ならばとにかく、その武器を持たないものが「バルザック」や「ジイド」の眞似をして社會を描くことは一つの漫畫である。それは新興藝術派の淺原六朗、岡田三郎、久野豐彦等が、貧弱な社會意識で新社會派といふ怪しげな旗印を抱いて沒落した一事でも了解出來るだらう。横光、川端はそんなものには眼もくれず、驀地に自分の道を歩いた。社會的關心を持たないといふことは、作家として一つの弱點であるが、そのことがかへつて彼等を大きな存在にしてゐる。（しかし讀者は誤解してはならない。私は社會的關心を持たない故に横光、川端を大きい存在だと云ふのではないのである。要するに横光、川端は藝術派としての本物で、淺原や岡田は、藝術派としても、人生派としてもインチキであることが言ひたかつたのである。）

横光は、ある意味で夏目漱石、志賀直哉の系列に屬し川端康成は泉鏡花の傳統を繼いでゐる。新現實主義が行詰つた時、その打開としての新感覺派運動は、まだ記憶に新なることで今更縷説するまでもないが、横光は、こゝでリアリズムがもう發展の餘地もない位に、志賀直哉によつて完成されてゐるのを見て、現實を眺める作者の眼の角度を變へ、同時に概念的な表現（それが後になつて新しい概念を作つたが）を振り棄てゝ、所謂横光的な新表現を試みた。新感覺といつても、ある意味で彼等の先驅者ともいふべき室生犀星の觸覺的な感覺は横光の作品にはなかつた。それは飽くまで視覺を主とする感覺だつた。當時の彼の作品が建築を思はせるのも、非人情の冷たさを持つのも其處に原因してゐる。また感覺の中で視覺ほど角度を變へ易いものはないと考へると、彼の作品の次へと變貌する意味も解けるだらう。

川端も新感覺派の曉將であるが横光程の苦闘と變貌を必要としなかつた。それは新感覺派が新現實主義打開を

目標として格闘した際、川端は泉鏡化を母胎とする有利な立場にゐたからである。少くとも横光が新現實主義の母胎から抜け出ようとした苦しみを彼は感じなかつたのである。横光が全面的に新感覚派的であつたのに比べると、新感覚派的なものは彼の一面に過ぎなかつたとも云へる。「死體紹介人」「空の片假名」がそれで、初期において最も川端的だと推賞された「伊豆の踊子」などは寧ろ新感覚派に遠いものを示してゐる。横光と川端は同伴者的一面を持ちながら、それだけの距離があつた。前者は流に逆らつて浪を揚げ、後者は流に順つて水を清めてゐる。

（二）

優れたる短篇作家としての川端康成の素質は、初期の「有難う」の一篇に小さい輝きを發してゐる。繪畫的、抒情詩的な表現、彼の全作品を貫いてゐる「近代的物の哀れ」が美しく要約されて、後年の發展を十分に暗示してゐる。

「今年は柿の豐年で山の秋が美しい」書き出しの一行と同じ文章を反復して最後を結んだ手法は抒情詩の持つ手法であり、又額縁にはまつた繪である。彼の文章に繪畫的要素の濃いことは、彼の色彩に對する感覚の豐なことを思はせる。横光の文章が同じく視覚的ではあつてもそれは幾何學的な線の美しさで、空間に切結ぶ線の美しさは、立體的な建築の持つ美しさであるか、川端の文章は色のある文章である。線の持つ鋭さ（横光の）も、建築の持つ輪廓の鮮かさ（志賀の）もない。しかし繪畫的とはいつても、マネの明るさや、レンブラントの暗さはなく、花やかな色彩を仄かに滲ませた日本畫の美しさである。それは彼の抒情詩的な内容に相應しい表現である

「如何に表現すべきか」の作者のアポリヤは、川端にとつては無意味である。抒情詩は内容が同時に表現を規定すると共に、表現が即ち内容であるからである。彼の作品の渾然とした快適感は、勿論表現と内容の一致から湧き上つてくる。絢爛な表現が讀者の眼を眩ますのでも、内容の持つ迫力が讀者の胸を打つのでもない渾然とした詩情が讀者の心に觸れるのである。「金襴緞子の帶しめながら、花嫁御寮はなぜ泣くのだろ、文金島田の髪結ひながら、花嫁御寮はなぜ泣くのだろ。」この童謡は、又彼

の「童謡」でもある。「有難う」は抒情詩であると共に、物語り的要素をも含んでゐる。又抒情詩的なほのぼのとした美しさを持ちながら、同時に異常な美しさを含んでもゐる。運轉手と娘、急角度を切つて結ぶ人と人との關係は異常美を發生させる。檀一雄の「夕張胡学塾景觀」はそれの一つの發展である。私は川端康成の以後の作品の系列を説明するために彼の出發點である「有難う」を取上げた。そしてこれからの彼の發展を辿るのである。

新感覚派運動は、「有難う」の持つてゐる異常美の一面を歪曲して發展させた。それは人間の接觸を異常な角度において捉へた美しい作品である。死體紹介人」「空の片假名」がそれで、この一聯を私は、彼の作品の第三系列と呼ばう、勿論、そこにも甘美な川端の持味はあるが新感覚派の作家で又新感覚派でない彼の新感覚派的要素が、この系列の作に最も多く流れこんでゐる。歪曲された異常美の高度の發展が、時に探偵小説的なものを派生させる例は、既に我々が谷崎潤一郎、佐藤春夫の「黒白」「指紋」で見たところであるが、川端も當然、第三系列の一支脈としての第四系列の探偵小説的なものを派生させた。「散りぬるを」がそれであり、「田舍之居」がその到達點である。しかし、之は本來の川端とはやゝ遠いもので、發展はそこで止つてゐる。「伊豆の踊子」が川端的なものゝ發展であることを前章で説いたが、此處では「有難う」の持つ抒情詩的なものゝ高度の發展で、新感覚派的な第三系列とはある距離を隔てゝゐる。その美しい情趣は日本的なもので、作中の人間の素朴な美理人情はクラシック日本の美しさであり、主人公の素直な感情は、巧まないしかも効果的な表現と渾然一致して甘美な潤ひをにじませてゐる。「伊豆の踊子」は成長して「童謡」となり、更に「雪國」に展開してゐる。この一連の作を私は彼の第一の系列と呼び、彼の本流であるとしたい。

「有難う」が抒情詩の中に物語的要素を含んでゐる事を私は指摘したが、その物語的な要素は第二系列となつて、第一系列と並行してゐる。これは第一系列の二つの面と見て差支へない程、二つの流れは親さで結びついてゐる。第一系列が日本的で日本の踊り子、舞妓、藝妓を描いてゐるのに比べて、第二系列は半西洋的、ジャズ的で、そこにはレヴューガール、西洋舞踊の世界がある。

「淺草紅團」に出發して、「虹」「花のワルツ」と展開した一連の作が、第二系列であることは云ふまでもなからう。

昭和四、五年のころ、私は「淺草紅團」を批評して、「彼は短篇作家である。「淺草紅團」はそれが長篇小說としての分量は持つてゐようとも、彼の本質は飽くまでも短篇作家である。「淺草紅團」は短篇の寄木細工である。」と云つた事があるが、この系列の他の作品「虹」「花のワルツ」（その他「雪國」も「散りぬるを」も、獨立した短篇として雜誌に發表されたものを集めた一つの長篇であつて、私の言葉を裏書するものである）にもその言葉は適用出來よう。一つの物語として短篇の量を超えてゐながら、それは長篇小說と云ふよりも、寧ろ幾つかの樂章を集めた音樂に似てゐる。そこで第一系列の繪畫的要素の豐富さに、第二系列の音樂的要素の優越を對立させる事も出來る。

（三）

私は川端康成の作品を四つの系列に分けて鳥瞰を試みたが、しかもその四つの系列は、互に緊密な關係を持つて「川端的」と云ふ名で呼ぶ事が出來る。それらの全系列の底を流れてゐるもの、即ち「川端的」なものゝ正體を眺める前に、私は三つの系列（第四系列は第三系列の支派として除外する）の關係に就ての考察を試みる事にする。

「伊豆の踊子」から「童謠」「雪國」の第一系列が、所謂新感覺派に遠いものであることは既に說いた。「古めかしい人情の否定」「古い審美と習性の躁躙」「テーマの急角度屈折」「速いテンポ」さうした新感覺派的なるものと、凡そ兩極にある作品だからである。「伊豆の踊子」は、二十歳の高等學校の生徒が十四になる旅廻りの踊子への思慕を中心に描かれた美しい抒情詩である。そこには「古めかしい人情」が「古い習性」が、行間に滲み出てゐる。旅藝人、茶店の婆さん、宿屋の主婦、銀山の鑛夫、すべてが古い義理人情、習性の世界に安住し、古めかしい封建道德の最も美しい面がそこに輝いてゐるその美しい面は日本的といふ言葉で呼ぶことも出來る。さうした世界での學生と踊子の關係は、果敢ない思慕の

關係であり、その思慕は燃ゆることなく、結局結ばれない悲しい關係である。そこから所謂川端的「物の哀れ」が滲み出てくる。

「物の哀れ」は、距離間からくる空しい感情でもあるその距離を埋めようとする人間の活動は英雄的な悲劇を生むが、距離を肯定して人間の無力を感じる所に「物の哀れ」は發生する。月を見て物の哀れを感じるのは、克服出來ない空間的距離と悠久な時間的距離を思はせるからである。「物の哀れ」は、又、弱い美しいものへの感情でもある。そこにも「そのもの」と自分との距離を縮めようとしない無力感が物の哀れを覺えさせる。「猿を聞く人捨子に秋の風いかに」「一つ家遊女も寢たり萩に月」この芭蕉の「物の哀れ」も、弱く美しいものへの距離の感情である。

「伊豆の踊子」の古い義理人情の美しいイデオロギーは、勿論それを必然とする封建的階級の上に立つてゐるこの世界の最上位の階級にあるものは學生の「私」であり、最下級に佇むものは踊子である。踊子達の旅藝人が如何に人々から蔑視されてゐるか、それは茶店の婆さんや宿屋の主婦の言葉「あんな者」にも、「物乞ひ旅藝人村に入るべからず」の立札にも明かであり、彼等もまた、それを認めてゐる。高等學校の學生と旅藝人の踊子、その階級的距離は、學生が「男」であり、踊子が「女」であることによつて更に擴大される。「さあ、お先きにお飲みなさいまし、手を入れると濁るし、女の後は汚いだらうと思つて——」（山で清水を飲む一節）「一口でも召上つて下さいませんか、女が箸を入れて汚いけれども」（學生が彼女等と別れる前後の一節）この「おふくろ」の言葉は、すべて女を賤しいものとする封建主義的イデオロギーの現れであり、彼女達がそれを肯定してゐるところに弱く美しいものゝ哀れを感じさせる。

「伊豆の踊子」の「物の哀れ」が、この小說の世界の封建的階級構成の中での學生と踊子の距離にあることは前述の通りであるが、もし「私」がその距離を突破して踊子と結びついたなら、この作品のもつ美しい詩は崩壞したに違ひない。又「私」が踊子との距離を縮めるための苦鬪をしたならば、別の悲劇的小說が出來ただらう。しかし「私」の踊子への肉體的な愛着は「十七、八かと思つたら十四だつた」年齡の距離のために、精神的

思潮に變化した。そして肉體的な愛着は同時に彼女の肉體の純潔を保護したい清潔な欲望に變形する。そこにも「川端的」な悲劇がある。「純潔」「清潔」この言葉は川端の全作品の中に星の如くばら撒かれてゐるが、弱い美しいものゝ純潔を欲し乍ら、彼の描く女性は純潔を保つことの困難な立場に置かれてゐる。「伊豆の踊子」の肉體的純潔を欲する「私」の願ひの裏には、彼女を階級的に清めんとするも一つの願ひが隠されてゐる。この背後の願ひが果されないかぎり、彼女の肉體的純潔は望まれない。

谷崎潤一郎の描く女は、美しかつたら毒婦でもよい。しかし川端は美しい上に純潔を求めてゐる。そこに彼獨特の甘美な抒情詩が生れてくる。彼の純潔を求める願ひは「童謡」で更に發展してゐる。「雨雨ふれふれ」の童謡を歌ふ華やかで無邪氣な「舞妓」やがては一本の藝者となる彼女達に對して、何とそれは果敢ない悲しい願ひであるか?その意味で「童謡」は純潔を失はれてゆく弱く美しいものへの挽歌である。「童謡」の龍野は、金彌や小栗の純潔を尊ふものを憎み乍ら、どうすることも出來ないで眺めてゐる傍觀者である。そこで「捨子」や「遊女」に、消極的な傍觀者態度をとつて芭蕉の「物の哀れ」と結びつくのである。

（四）

川端康成の「物の哀れ」の他の面は、「淺草紅團」「虹」「花のワルツ」を一連とする第二系列の作品に現れてゐる。「伊豆の踊子」の抒情詩的境地から離れて物語的に發展した此の系列は、ジャズ的な花やかさを持ち、半西洋的な異國情趣を漂はせてゐるが、その基底をなすものが「物の哀れ」である事に變りない。「伊豆の踊子」から「雪國」を結ぶ第一系列の女性達が封建的觀念、封建的雇傭關係に縛られてゐれば、第二系列の女性達は、幾分自由でありながら、やはり近代的雇傭關係の新しい絆につながれ、資本主義社會の享樂面を彩る商品としての「へし折られた花」の可愛さを持つてゐる。「淺草紅團」の梅園龍子も「虹」の銀子も、その存在はいかに華やかであらうと、所詮「伊豆の踊子」や「童謡」の金彌と同じやうに、「弱い美しい女」に過ぎない。川端はそれに「物の哀れ」を感じてゐる。

彼女達の美しさは結局商品としての美しさで、しかも彼女達はそれを自覺してゐない。美しい肉體を持ち乍ら衣裳に無頓着な「虹」の銀子は、「借着の人絹の汚れた衣裳」「ひとの帽子」「びつこの舞踏靴」で舞臺に出るし「童謡」の桃太郎は、「顔形の立派さ」に似合はない粗末ななりをしてゐる。そこにも美しい、無智ではあるが無邪氣なものへの「哀愁」がある。

彼女達が勝氣であることも亦一つの悲劇である。それは商品としての弱い立場の中で勝氣にすぎないからである。「伊豆の踊子」はまだその悲劇を自覺してゐない。「童謡」の金彌は、龍野の隣の部屋に客と泊つた時、自分の純潔の亡びゆくのを悲しんでくれた龍野への義理に一時的ではあるが客から身を護つたのが、精一杯の反抗であらう。「雪國」の駒子になると、好きな男と親密な關係を結んだ後で、「あんた笑つてるわね私を笑つてゐるね」「心の底で笑つてゐるでせう。今笑つてなくてもきつと後で笑ふわ」と、自分と男の關係が、所詮職業的なものから逃れられない弱い立場を憎悪しながら、自分自身を切り刻んで苦しめる言葉を吐くまで、その悲劇性は發展してゐる。

川端の第三系列の作品「死體紹介人」は、新感覺派的要素の最も濃いもので、此處では古い人情は完全に輕蔑されてゐる。非人情の冷たさ、科學の白々しさが行間に冴へかへつてゐる。朝木新八とバスガールゆき子、その妹千代子、火葬場で知つた娘たか子との關係に美しさがあるとしたら、それは人間と人間の異常な結びつきから起る美しさである。テーマも急角度に屈折し、第二の妻の死體の傍で第三の妻と結婚するといふテンポの速さである。川端の作品の底を流れてゐる室生犀星式のエロチシズムは抒情詩的扮裝を振り捨てゝ表面に浮上つてゐる。彼の描く女性に舞妓、レヴューガールの多いことも、色つぽいそして純潔であつて欲しい彼の女性への要望を滿たすものとしての意味を持つてゐるが、ここでは解剖臺に横はつてゐる女の全裸體をレンズに入れてゐる。

「弱い美しい女」を歌ふ歌はここにはない。そのかはりにメカニズムの冷たい眼がある。その眼は第四系列の作品「散りぬるを」の龍子の死體の「腋の下の皺」「乳房の下の傷口」を直視し、遂に「田舍芝居」の性慾と物欲の權化とも云ふべき「花」を眺めた。

「空の片假名」は「死體紹介人」よりも第一系列に近

づいてゐる。そして　これを見し時に」續き、「父母」「夕映少女」で一層第一系列の抒情詩的（檀一雄が川端の異常美を繼承した作家だとすると、堀辰雄は彼の抒情詩的なものを繼いでゐる。）なものとの接近を示してゐる。

私は「有難う」に出發した川端の諸作品が四つの系列に分れたことを書いた。しかしそれが共通した川端的なものを持つてゐることも既に說いた。この四つの系列は「川端的」と云ふ名で結晶してゐる一つの萬華鏡の異つた別々の面で、互に交流しつゝ發展するものであることは勿論である。「伊豆の踊子」から展開した第一系列も「雪國」になると第三系列の作品の持つ冷たさと交流し、「淺草紅團」に出發した第二系列は、「花のワルツ」で、「弱い美しいものゝ哀れ」を喪失して物語的なものを發展させ、一面、通俗小說に近づいてゐる。

最後に、もう一度「伊豆の踊子」から「雪國」への展開を振返つて、「伊豆の踊子」「童謠」の持つ「物の哀れ」が、何故「雪國」の冷たさに變つたかを吟味しよう。川端の物の哀れが、彼の傍觀者態度からくる距離の感情である事は既に說いた。「伊豆の踊子」では、傍觀者であり乍ら、越えられない距離を持つた踊子への思慕が此の作品を甘美なものにしてゐる。「童謠」にはもはや思慕の感情はない。たゞ「弱い美しいもの」を歎く歌がある此の二つの作品では、主人公とヒロインの間にはある距離が保たれてゐる。しかし「雪國」では、主人公がやはり傍觀者であるのに、女は火のやうな思慕で近づいてくる。二人の距離の喪失は同時に「物の哀れ」の喪失であり、女の思慕の激しさは、同時に主人公の傍觀者的態度の冷たさを作の前面に押し出してゐる。「雪國」は、感情の曇りのない研ぎ澄まされた冷たい鏡面に映る鮮かな女の映像である。

川端の虛無的な冷たさは、既に昭和八年の「二十歲」（この論を書き上げた後で、彼の秀作「禽獸」を一讀したが、そこにも川端の虛無的な冷たさ、傍觀者的態度が浮き出てゐる　に現れてゐるが、彼の「物の哀れ」と「冷たさ」は、氷炭相容れないやうに見え乍ら、實は　傍觀者的態度」の二つの面にすぎない。「捨子」と「遊女」に冷たい傍觀者的態度をとつた芭蕉の「物の哀れ」は、同時に我が川端康成の「物の哀れ」である。

チエーホフに於ける『絕望』

紫藤貞一郎

チエーホフはその作風乃至は思想の上から一八八七ー八年を境として前期、後期に截斷され、前期は所謂チエホンテ時代の小鳥が樹枝を飛び歩く樣な活々とした而も明朗にしてユーモラスな作を發表した時代であるがそれが後期に這入つて「退屈な話」などを書き始めてから彼は所謂「絕望の詩人」としてのレッテルを貼られて仕舞つたことは既に前にも述べ又周知の事實である。彼の思想の變化は彼の時代が反動への推移時代であつたと云ふことが先づ擧げられて居るが、內的にはチーホフ自身の中に起つた肉体的精神的の變化を考へなければならない。これは誰しも感ずる處であり又屢々チエーホフ批評家の言つたことである。併しチエーホフの「絕望」が單にその限られたる一時代の背景、又は一個人の中からのみ生れたものであらうか。その時代が過ぎ去り又彼自身の肉体が亡びる時、その絕望は解消さるべきものであらうか。また今日に於てもチエーホフが我國に於て演ぜられつゝあると云ふことは現代が彼の時代に似て居るとか、それを演技する者が個人的にチエーホフの人物や表現を好むからとか云ふ偶然的な理由からのみであらうかそうではないと私は思ふのである。成程彼の「絕望」は彼の時代を背景として彼自身の心身の色を帶びたものとして彼の網膜に映じたのであらう。然し彼が眞に見たものは「人類」における絕望ではなかつたのか。偉大なる詩人作家の眼は決して一時代を受動的に反映する單なる平面鏡ではないのである。詩人は偉大なるヒューマニストでなければならない。多面的なるチエーホフは一面眞に偉大なるヒューマニストであると私は斷定する。問題は實にこの偉大なるヒューマニストにおける「絕望」の意義である。

彼の絕望は一体「否定」なのか「肯定」なのか。或はよく云はれる「否定による肯定」なのか。「虛無よりの創造」なのか、或は單なる受動的の諦觀なのか、更に何か外のものであるか。チエーホフの絕望の中に希望を發見しやうとする、又發見したチエーホフ批判家は我國に

も隨分多い。過去の我國に於ける自然主義の無理想性に對して、同じリアリストとしてのチエーホフの中に現想主義的なものを拾ひ上げてチエーホフの特異性を示さんとする試みも屢々企てられた。例へば「伯父ワーニア」に於けるアーストロフの思想としてソニアの口を通して云はれる「希望」の言葉など取り上げられるのである。成程吾々もあの言葉を聞くと憂鬱から救はれた樣に一寸ホットするのである。しかし乍ら、これらの希望はあの恐ろしい憂鬱や絶望の代償としては余りに弱過ぎる。樹を植ゑて百年の後、二百年の後に希望を托することはあの場合余りに觀念的な諦めである。チエーホフの絶望に於て全面的な否定を見たシエストフすら、初めはチエーホフの中に斯かる希望を求め、虚無よりの創造を探したのであつた。シエストフは遂にチエーホフを希望に破滅した生活者として、又同時に汎ゆる人々の希望を殺戮する藝術家として見た。彼はボードレールの詩「諦めよ、わが心、生れのまゝに眠りを眠れ」の句を引いてチエーホフの絶望と諦觀とを結論して居るのである。

しかし我々はこのシエストフによつて我々がチエーホフの眞意に掛ける希望をも否定される二重の絶望に身を投げなければならないのであらうか。

「絶望」とは普通の形式論理的に解釋すれば希望の自己否定であろう。絶望の自己否定はしかし一つの諦念であつて眞の「絶望」ではない。聲なく涙に濡れた消極的の姿である。然し、眞の絶望は希望を強く肯定して現實の障壁に頭を打ちつけた時の苦悶と憤りの聲なのである。チエーホフに於けるそれは「希望」と「不可能」との組打ちの聲なのである、或は希望不可能の深淵に飛び込む時の絶叫であるといつてよい。その深淵の手前の綠の野に立ち止まつて彼方の空の美しい虹を見て居る人達には不幸な絶望はない。しかし眞のインテリゲンチアはその綠の野を越えずには居られないのだ。そこには深淵が大きな口を開いて待つて居るのである。身を退くにはもう遲い。彼はその中に飛び込みつゝ絶望の聲を叫ぶのである。チエーホフに於ては總ての希望、知的な要求が無條件に肯定され、それが彼の悲劇の要素となつて居る 彼に於ける絶望は、決して希望自からを殺しては居ない。チエーホフの人物が、あれほどの憂鬱と絶望を持ち乍ら殆んど自殺がないと云ふことは不思議な位であるが、そこにチエーホフの究極の精神を私は見るのである。壁に頭を

打ちつけるあの絶望の姿は決して自らを否定し、殺すことを示すのではなく、飽くまでも不可能の壁との格闘を示すものである。伯父ワーニアのピストルも決して絶望の自分には向けられない。あの絶望の究極に於て尙ほそうである。チエーホフに於ては希望は生活の、又は新らしき生活への原動力なのである。彼が否定し嘲笑すら與へて居るのは唯だその絶望の壁に打つつからない希望なのである。彼の人物はそれぞれの希望を持つて夏の蟲の樣に火の中に飛び込んで行く。そしてジユツと燃えて灰となるのである。その灰に歸することが彼の絶望なのである。然しその灰は永久に無機物の灰として殘るのか、又フエニツクスの靈鳥がその中から甦るのであろうか。

彼がその絶望に於て否定したものがありとすれば（否實際は運命的に外部から否定されたと云ふ可きであるが）それは知性的なるもの、即ち時代の思想や觀念や科學であると私は思ふ。然しそれは前にも云つた樣に決してそれ等のものゝ自己否定ではない。それ等のものは飽くまで自己を肯定し深淵に飛び込む迄は否定を知らないのである。知性は斯くして滅亡する。しかし乍ら尙ほ人間の生活は殘る。而もそれは知性を越え、遊離した觀念や思想でない所の生活そのものゝ純な姿として殘るのである。聲なき生活である言葉や思想によつて表現されない生活それ自身によつてのみ表示し得る生活である。「どうしたらよいのでせう。私の生きる可き道を教へて下さい」若いカーチヤの絶望の問に對して老學者ニコライ・ステパノウイッチが「わしには解らない」と突つ放す、その言葉の中に生活の解釋や觀念に對して「知性」絶望を叫んで居る聲を我々は聞く。知性は「解らない」と答へ又「知らない」と突つ放して後は沈默に沈むのである。眞の生活は之を「解る」べきものでもなく「知る」べきものでもないのである。それは聲なく体驗すべき行や實踐なのであろう。

觀念や思想や科學が無能だと知る時から眞の生活は始まるのである。觀念や思想や科學をしかし乍ら決して初めから放棄するのではない。その無能に絶望した後にこそこれらのものが眞に自分の生活に這入つて來ると云ふ意味である。「可能性」を擔ふ人間の希望生活が 不可能」の運命の障壁に突き當る處に絶望があり眞實の生活が生れる。チエーホフにとつては絶望が人間生活のモラルなのである。悪魔の神に成ろうと努力して絶望する處に

人間が生れるのである。神の姿を望み見ながら地獄に落ちゆくのが人間なのである。チエーホフは常にかゝる姿に人間を見て居たのであると思ふ。

チエーホフはモラルとしての絶望を描いた。モラルは人間生活を否定するものではなく價値づけるものなのである。チエーホフの人物は決して絶望に滅亡する人間ではなく、それに生きる人物である。チエーホフの藝術は「絶望の文學」ではなく「絶望についての文學」（長谷川如是閑）なのである。寧ろ人間の眞の救ひの文學であると私は思ふ。

更に今一つのチエーホフに於ける「絶望」は、自然の力に對する人間の不可抗な運命である。年老いて既に生活を終へたるもの（例へばスリブリヤーコフの如き）取り返へしのつかない、無意味に過ぎて行つた青春への限（伯父ワーニア）報ひられなかつた片戀の悲しみ（ソーニア）等々、チエーホフの作中の人々は、それぞれ斯かる悲しみを抱いて居る。その種類その程度によつて諦念となり、憤りとなり、絶望となつて居る。斯かる悲しみや絶望からは何が生れたか。涙を振り拂つたソーニアは靜かに、然し乍ら力強く「働きませう、今まで通り人のために――」これは支那人の「沒法子」の諦念ではない。死後の未來に報福を待つ觀念的信仰でもない。「働きませう。人のために」は現實的な宗教の世界への更生である。默々と働く世界である。チエーホフに眞の宗教を觀る人々を私は余り知らない。しかし私は彼の中に強い宗教的信仰が潜んで居ることを看過することはチエーホフを理解する所以ではないと思ふ。彼の若い頃の作品などには殊に宗教的情緒の濃かいもの（例へば聖夜）があつて作者の心的生活を暗示して居る。又チエーホフが晩年のトルストイの感化を強く受けたと云はれて居る所から考へても明らかなことである。彼のあのシベリア旅行（サガレンへの旅）を見ても彼が單なる倫理的な人道主義者であるとは思はれない。人類の永遠の悲しみや絶望を見る彼の眼に、その永遠の救が見えない筈はないのである。彼に於ける絶望は彼の宗教であつたのである。十二年春の大連藝術座公演「伯父ワーニア」に於ける老婆マリーナが時々胸で十字架を切る所作があつた。あれは確か脚本にはなかつたと思ふがあの所作を用ひたことは演出上その意圖は何處にあつたか知らないが前述の意味に於て私には好感が持てた。

斯くしてチエーホフの中に、その科學者又はメフイストの如きリアリストによつて一應否定されたヒューマニスト（而も宗教的な）を私は見るのである。

最後に私はチエーホフの斯かるヒューマニズムの立場より彼の初期のユーモアも後期の憂鬱や絶望も心理的に一元的に理解出來ると思ふのであるがそれについては別に述べたいと思ふ。

私はシエストフがボードレールの詩「諦めよ、わが心生れのまゝの眠りを眠れ」で以つてチエーホフの絶望を象徴するのには贊成しないものであると同時に、「絶望」を安價なる、觀念的な「否定の肯定」と解することも欲しないものである。

『天才論』批判の序章

西川清六

一、素材と成る參考書

1. 「天才と遺傳」改訂版ゴールトン
（一八三一―一九一一）著 甘粕石介譯 岩波書店刊
2. 「天才論」チエザレ・ロンブロオゾオ
（一八三六―一九〇九）著、辻潤譯、改造社刊
3. 「天才・惡」ブレンターノ
（一八三六―一九一七）著、篠田英雄譯、岩波書店刊

註、「天才」と「惡」との論文は岩波文庫として一小册子に纏めてあるが「惡」は悲劇論並に惡によつて概括される素材を盛つた作品のモラリテイとの問題を扱つた論文であつて、私がこゝに書くものゝ直接の參考には成つてゐないことを附記しておく。

4. 「天才人」E・クレッチユメル（現代の人・註參照のこと）著、内村祐之譯、岩波書店刊

註、クレッチユメルは現代獨逸精神病學界の中堅、但しこれは昭和六年十二月、内村祐之氏が該「天才人」の「譯序」に書いてゐるものに據る。

二、天才の概念

天才についての概念規定は論旨の方向を規定する。だから概念規定の相違は各著作の論旨の方向を異にする。この論旨の方向を異にすることが「天才論」の價値の優秀を規定する差額と成つてあらはれる。前掲四つの參考書に於て、「天才の概念」規定について比較論をする場合、フランシス・ゴールトンの「天才と遺傳」は天才と遺傳關係を主體として論述されてあり、天才そのものゝ研究でないことから比較の素材に加へることは不當であり、又ゴールトンにとつて不利な立場に置かれるやうに思はれるが、ゴールトン自身「天才と遺傳」の第一版の序の末尾に、

「本書中には、天才は遺傳するか否かといふ基本的な論旨を外れた多くの問題が論ぜられてゐる。だが私の主張する理論の諸側面には、默過し得ない重大なものがあ

るため、それらにも言及せざるを得なかつたのである。」

と書いてゐる以上、この書の範圍限界から推して、「基本的な論旨を外れた多くの問題が論ぜられてゐる。」といふ提言の中には天才そのものゝ問題が含まつてゐると推定出來ることゝも一つは、天才と遺傳關係の研究も天才の概念が規定されてゐなければ一歩も前進出來ないことから、私は「天才と遺傳」をも比較論の素材の一つに加へることにした。私はゴールトン自身が一八九二年の改訂版の緒言で、ヒレデイタリー・ヂーニヤス（遺傳的天才）といふ題名の選び方のあやまちを指摘してゐるのを知らずに言つてゐるのではない。彼自身ヒレデイタリー・ヂーニヤスが術語的な意味に取られることを氣にし寧ろヒレデイタリー・アビリテイ（遺傳的能力、或は生得の能力）としたかつた意志があつたことを知つてゐるし又彼が「全體を改訂して最新の科學的知識を示すものにするかそれとも若干の極くいちぢるしい誤脱を訂正するに止めてそのまゝ再版するかゞ問題であつた。遂に後の方法がとられるに至つたが、その理由はたとへ僅かなものであつても新に資料を加へることになると、全體の裘を作り直さねばならぬがかゝる徹底的な改訂は現在の私にとつてあまりに過大な勞働であつて、到底企て及ばないからである。」と言つてゐることを念頭に置かずに右のことを言つてゐるのではない。然し書かれたのは遂に書かれたものだけのものである。改訂版が一部の訂正に止められた以上、徹底的に改訂された場合のそれに劣ることは勿論である。勞力を費することの出來なかつたゴールトンの理由は大いに斟酌すべきであり又ゴールトンの「天才と遺傳」に關する造詣は私達が書籍として見る「天才と遺傳」より優に傑れてゐたものであつたことは推察出來るがこれらのことから「天才と遺傳」の著作の中から誤謬と不備な点を指摘し、剔抉することを怠つてはならぬことを私は強調したい。

天才性と精神障礙とに聯絡があることを洞見したロンブロオゾオは「天才と狂氣」を結びつけ、内容の基底に依據する態度は斯くまでは酷くないとしても「寧ろ天才は狂氣なり」と呼ばはりたい程の熱情を以て天才と狂氣とを結びつける材料の蒐集に狂奔した。人間榮譽の最高を荷擔ふべき天才が精神病者と同列の低位にまで引下げられねばならぬか、といふ在來の慣習的な抗辯や見解を嘲笑するかのやうな、寧ろサデイズム的な熱情に驅られ

ながら、自分の持論を實證せんとして躍起に成つた。事實、醫學者にあるまじき餘りに詩人的（純粹な意味の詩人的ではない。こゝでは一般的な意味に於ける）な熟情は「天才論」を書く上に大きな禍と成つてゐる。彼はエルンスト・クレッチユメルが天才に定義づけてゐるものに近い天才の概念を觀念として把持しておきながら、彼自身の熟中的燃燒的な素質と、持論を實證すべき材料が蒐集堆積されるに伴ひ、そしてそれが論文として纒述される過程に於て狂熟的に昂奮し彼自身が依據すべき領域を越え、折角捉へてゐた天才の概念を自分の手で搖さぶり勝手に浮動させてゐると言つたやうな、換言すると字義通りの露骨さでは「天才は狂氣なり」と言ひたくない批評的良心（これあればこそ彼は飽くことを知らない努力と忍耐とを以て材料を蒐集したのではなかつたか！）を持ちながら、結果からは彼自身躍起に成つて「天才は狂氣なり」と叫んで狂喜してゐるかのやうな觀をていする程の醜態と成つてゐるのだ。彼は術語の亂脈や、文章上の言葉の濫用を些つとも顧慮してゐない（嚴密に言つて人間の言葉は抽象性を免れ得ないのであるが、これを考慮に入れても、彼の場合は甚だしい）し、尨大な材料の中から彼が論究するものと相反するやうな材料が飛出して來ても、彼はその矛盾をわけなく例外として片附けたり或は其場限りの辯解で塗抹するといつたやうなことを平氣でやつてゐる。

「丁度巨人が大きな體格を得た代りに子孫を生むことが出來なくなり、筋肉及び精神が比較的虛弱になると同じ樣に思想界の巨人が優れた智力を得た代りに變質と精神病とを得たのである。かくの如くして變質の徵候は狂人の場合に於けるよりも寧ろより多く天才に於て發見せられるのである。」

これは「天才論」の序文に書いてゐる言葉であるが、こゝで變質の徵候の變質の意味に如何程の範圍限界を置いてゐるか全く判斷に苦しむ。そして又、「天才と變質」の章で、

「天才に於ける變質の徵候は精神病者の變質の徵候よりも時として更に多いことがある。」

と書いてゐるが、これ等二つの前者と後者とを比較して見た時如何に言葉に無責任であるか看取することが出來る。「天才論」といふ大きな研究論文の中から右の如き些細な缺点を指摘することは正に枝葉事に過ぎないか

も知れないが、彼の「天才論」には餘りに右のやうな缺点が多過ぎるのである。これ等の缺点は「天才論」の價値としての問題に抵觸して來る以上、云爲せざるを得ないのだ。「天才の人相」といふ項目を設けてわざ〳〵レンブラントやドストエフスキーの顏貌がクレチン病者に酷似してゐることを書いてゐながら、「風土の天才に及ぼす影響」の箇所で「マラリヤ病、及びクレチン病に侵されてゐる地方からは殆ど藝術家が出ない」と述べてゐる場合相反するが如きこの二つの事實に特定の事情が存するか否かには言及して置くべきだのにそれが成されてゐない。こゝでは勿論何等の因果關係乃至は例外の事情が存するのでなく天才の變質に固執し過ぎたロンブロオゾオが藝術家の一群に存する特殊な顏貌を必要以上に取りあげたに過ぎないのだ。若しクレチン病的顏貌に天才の特徵とするに足る生物學的醫學的な論據があるとすれば、何うして系統立てゝその因果關係を說明しなかつたのであるか、又風土との關係に於て矛盾するが如き箇所に遭遇した場合その特定の事情（若し有るとすれば）を開明言及しなかつたのであるか、これ等の解答理論を私は彼の「天才論」の何處にも見出すことが出來ない。又彼は天才の特徵として身體の矮小を指摘しておきながら、

「伊太利に於ける徵兵の結果を見ると人種の影響を別にして最も多く身長の高い兵士を出してゐる處には天才も亦現はれてゐる。タスカニイ、リギユリヤ、ロマニア等がそれである。然るにサルデイニヤ、バシリカタ、アオスタの地方の如き兵役に不適當なそして又長身の人に最も缺乏してゐる地方からは天才が出てゐない。」

といふ材料にぶつかつてゐる。こんな場合の彼の辯明は至極あつさりしてゐる。

「天才の場合に於けるが如き變質の狀態が極めて健全なる場所に發達するのは如何にも驚くべきことの樣に思はれる。しかし若しアネロビツク菌であるとして或物はエイロビツクである。」

この無責任さは辯明とは言へない。遁辭である。遁辭も彼自身餘り平氣過ぎる遁辭である。クレッチユメルが身體的特徵を肥滿型、細長型、小兒型——カント、クライスト、發育異常型——ニイチエを含む　鬪士型の三つに分ち、これ等を體質的賦性型といふ點から見て二つの氣質群卽ち循環性氣質者（肥滿型）と分離性氣質者（細長型、鬪士型）とに分つことによつて天才の體質學

的開明に貢獻した。これにロンブロオゾオが些少でも洞見といふやうなものを持つてゐたら天才が身體の矮小を以て、一特徴とすることを披瀝しておいて後でそれと矛盾するやうな材料にぶつかり混亂するやうな亂脈には陷らなかつたであらう。然しロンブロオゾオの天才そのものに關する、天才の頭腦衝動構造の不調弄放性、創造を胚胎する原動力となる聯想作用（觀念聯合）の俊敏性と想像に於ける強大なる振幅性とについての洞察は鋭い。彼はハアゲンの言葉を藉りて次のやうに言つてゐる。

「天才の特徴の一つは止みがたき衝動である。本能が生命を賭して迄、尚は且つ動物をして或る行爲を遂行せしむるが如く天才は一度ある觀念の下に領せられる時は今迄の觀念を放棄して他の思想に移り行くといふことは不可能と見てよい。奈翁やアレキサンダアは單に光榮を愛するがためにのみ戰つたのではない。彼は單に自己の全能なる本能に服從して事をなしたのである。故に科學的天才は休息を持たない。その活動は時々意志ある努力の結果とも誤解せられる。然し實際はさうでない。天才は創造する。しかしそれは單に創造せんと欲するのではなく、創造せずにはゐられないのである。」

又ユウルゲンマイエルの言葉を披瀝して、「能才の想像は定まれる事實を再現し、天才はそれを全く新にする能才は解說し、反覆する。天才は發明し創造する。天才は何人も氣づかざる一點に力を集中する。能才は何人も氣付いてしかも到達するに困難な點に力を向ける。新奇は彼等の取扱ふ要素の中に秘んではゐない。その要素の激動の中に自ら生ずるのである」と書いてゐる。この点ゴールトンもブレンターノもクレッチユメルも皆一致してゐると言つていゝ。

ゴールトンはかう言つてゐる。

「人口は拔群者（ゴールトンは「拔群者」に特定の意味を與へてゐる。即ち四千人に一人といふ割で頭腦が優れてゐる階梯に有る一群を指してゐるのであるがこの引例文ではこれを無理に考慮に入れなくてもよい。筆者）へ至る道は、苦しい克己の道であり、彼をその道から外れさせようとする誘惑が絶えずあるものだと考へてゐるやうである。即ち少年時代には、教師の嚴重な訓練や兩親の不斷の注意があり後年にはよい友人の力添へとかその他の好ましい環境があつて、やうやくその道を外れぬやうになるといふのである。これは大多數の人間にとつて全くその通りである。だが偉大な名聲を得た人々の大部分にとつては斷じて本當ではない。かやうな人々はその傳記が示すやうに、不斷に知力を働かすやうな本能的な督促に取り憑かれ、驅り立てられてゐるのだ。拔群者たらしめる道からむりやりに引離しても、丁度戀するものがその女の許に戻り來るやうに彼等は間違ひなく自分の道に戻つて行く。彼等は人に卓越せんとして勞苦するのではない。丁度運動家が絶えず運動を求める筋肉の焦燥感のためにぢつとしてゐることが出來ないやうに、天才は頭腦活動に對する自然の督促を滿足させるために働くのである。

次にブレンターノの言葉を引例しよう。

「余は、天才的藝術家の想像が順調に發展するのはそれが陶冶せられた想像だからであると言ひたい。若し人あつて余の言に疑を挾み、余は之を以て何を言はんとするのであるか、余はこの驚嘆すべき特性が單に勤勉の賜であり、過去の訓育と練習とに比例するものであると考へるのかと問ふならば、余は答へよう。否、決してさうでない！寧ろ想像の陶冶にとつて最も重要なるべき要素は嚮きに我々が直接自然に則つて創造せられると言つたかの藝術品が、天才的に生ずる所以を明かにした要素より他の何ものでもない。即ちそれは、美的效果を有するものを特に強烈なる印象を以て受容れるところの旺盛な感受性である。」

これだけでは不備であるが、ブレンターノはロンブロオゾオのやうに蒐集した材料から直接、熟狂的に叫ぶやうなことはせず、或表象に對する美的敏感が聯想（醫學的命名では聯想は觀念聯合と同じである。こゝでは醫學的な意味に取つても一般的な意味に取つてもどちらにも該當し得る。）作用を伴ひ、今度それが次にまた同じ表象に遭遇する時、聯想はますますそれに熟中するやうに被活に働き想像はよりよきものとして陶冶されて行く——ブレンターノはこれが「觀念聯合の法則」の下に行はれてゐることを述べてゐる——天才の頭腦活動の經緯、狀態を自分のものとして整頓し說明してゐる。

ロンブロオゾオ、ゴールトン、ブレンターノ、各三人の言葉を披瀝して來たが、最後にクレッチユメルの言を掲げてみると、

「偉大な研究者に就いて書かれた傳記物は、大多數の場合深い心理的な点に就いて錄することが餘りに貧弱であ

る。勿論甚だ調和の取れた眞摯な性質の學者も澤山ある然し偉大な獨創性を持つた卓越せる研究者の心理の上に屢々明瞭に見られるものは、その意想外な獨創性であり戰く如き敏感な感覺であり、更に又高鳴る精神の緊張である。冷かな思辨の背後には熱情に燃える魂があり、又注意深く育んで胸底深く祕めて居た願望の世界が緊張して横はるのである。深い人生の痛手が偉大な科學的大系を生み出す動因となつた例は古來稀でない。客觀性は此處では其人の最初からの持物ではなく狂熱的な認識によつて闘ひ取られたものであり、精神の烈しい緊張によつて獲得された終局的產物なのである。」

これ等四人の言を比較してみる時、彼等の見解は天才の頭腦の本質的な面に於て一致してゐることがわかる。然し天才の概念規定と成ると意見は區々に分れる。それは言葉が抽象性を免れ得ないことから短文に定義づけることの出來ない事實からも來てゐる。「天才は狂氣なり」といふ言に對して、さうだとも言ひ得るし、さうでないとも言ひ得るのである。このわづらはしさをクレッチユメルは、

「定義に關する諸說が區々たるにも關らず、天才人として吾々は日常、常に殆ど一定の人々を指して居り、之等より名聲の劣る者に於て始めて人々の意見が一致しないのであるから、この問題は差當り吾々に取つて甚だ重要なるものではない」と容易に片附てゐる。クレッチユメルは寧ろ全體的な內容の中で天才の概念を讀者に把持させ、緒言で天才とはランゲ・アイヒバウムの云ふ「價値を持ち來る者」でなく「價値を生み出す者」と簡單に定義づけてゐることの不足を補塡して天才の概念と內容の論旨とを、不卽不離の緊密さに結びつけ天才といふものゝ概念の眞意を究明してゐるのだ。かう書いて來ると私が前に述べた「天才についての概念規定は論旨の方向を規定する」といふ言辭に疑を差挾まれる危險性があるからこれに就いて一言しておきたい。危險性といふのは各天才研究の著者がその發表の經過に於て必ず天才の概念を規定することから出發して內容に進まねばならぬと私が言つてゐるやうに右の言辭が取られはせぬか、即ち一例を取るとクレッチユメルが全體的な內容の中から天才の概念を抽出してゐることを反駁せねばならぬやうに誤解されはせぬかといふことである。私が言つてゐるのは著者の發表の經緯や形態を言つてゐるのではない。

天才の概念の規定といふものがなければ天才研究の論旨は有り得ないといふ意味に於ける「天才についての概念規定は論旨の方向を規定する」である。概念といふ以上或程度の擴がりが有り、その範圍內で何れの方向に重點を置くか、又何れの場所を占むべきかは各著者の自由選擇——こゝでの自由は各著者の研究造詣から來る活動の自由性を指す——であり、この自由選擇こそ天才といふものゝ概念を規めつける唯一のものであり、又著書の論旨の相違といふ擴がりへ進展して行き、論旨とは相互扶助的な聯關作用を有つものである。

ロンブロオゾウは事實以上に狂氣の粉飾をほどこし過ぎた。これに反してゴールトンはロンブロオゾウが天才と區別して稱へてゐるところの能才の範疇に屬すべき人物に重きを置き過ぎてはゐまいか。それ自身の意味からと取材と內容の混亂を防ぐために遺傳的天才（ヒレデイタリー・ジーニヤス）といふ題名の選び方の不備を遺傳的能力乃至は生得の能力（ヒレデイタリー・アビリテイ）としたかつたゴールトンの見解を私は忘れてはゐない。賦性に惠まれた家系の遺傳關係を論ずる際、遺傳的天才といふ場合、それなが狹義意味に取られる束縛から、賦性家系に現れる人物が總て純粹な意味に於ける天才らしさを帶びてゐなければならぬといふ偏見に誘引されることによつて、著書「天才と遺傳」の主要目的たる「自然的能力（ゴールトンは自然的能力を次のやうに說明してゐる。私のいふ自然的能力とは、放つて置いても自己の生得の刺戟に迫られて自然に拔群の域に至る道を登りゆき、遂に頂上を極める力をもつ天性をさすのであり例へ妨げられ挫かれても、奮起し鬪爭してその障碍を遂に克服し、再び自由に仕事好きの本能に從つてゆくところの能力を言ふのである。）は遺傳的に傳達せられるか、もしせられるとすればどの程度に傳達せられるものかを調べることであつた」とする問題に無く抵觸して來ることを除去すべく、ゴールトンが周到な神經を使つてゐることも私は見逃してゐない。それから彼が數理的、統計學的により一層的確な理論たらしむべく、材料を廣範圍に求めず、たとへ狹少でも確實なる材料に平均偏差の法則を適用し、自然的心理的能力の遺傳々達の事實と可能とを證明しその實蹟を高めて行つた彼の頭腦の緻密正確さをも無視してゐない。しかしこの綿密な用意周到さにも關らず、それが時偶「天才」そのものゝ問題に抵觸する

限りに於て、「優生學」の見地に依據し過ぎ、「彷徨變異」「突然變異」を問題にし「種の改善」といふことから、不破の健康と才能優秀を兼備せる天才の遺傳傳達を望まうとする、換言すると、ニイチエが超人（ユーベルメンシユ）と名づけ過激な熱情を以てつくりあげた理想文配者型を、緩漫に――だから氣附かれにくいのであるが――つくりあげようと希求する理想に近い狀態に有ることによつて、天才そのものを偏頗に解釋してゐるといふ缺點を見出し得るのだ。彼は天才と狂氣の聯關をおろそかにはしてゐないのであるが、彼が取りあげる人物は殆ど心身の靜盈を帶びた能才若しくはこの能才らしさを多分に備へた天才である。彼は自信を持つて言つてゐるやうに、材料蒐集に當つて時には自分の好みによつて取捨撰擇しはしないかを懼れて、自分の友人知己に適宜に選擇蒐集させた程の良心と的確さを以て事に當り、平均偏差の法則をその蒐集した材料に見事適用し得た。然し彼は、何故に賦性能力を有する家系が、退化（それが自然的であれ人爲的であれ、極度に淘汰された生物が或種の機能低下や敗脆性を免れぬことによつて持ち來される衰滅經過と軌を一にする。）し始める經緯に於て生ずるものを見なかつたのであるか。「優生學」の見地に重點を置くことから天才が生物學的に如何に醜悪なものであるかを意識的に默過したのであるか、それとも迂濶にも見逃したのであらうか、ゲーテ、バイロン、ベートーベン、バツハ、ミケランゼロ、フオイエルバツハ等の家系群は餘りに悲慘な事實を提供してゐるのだ。クレツチユメルが言ふやうに、

「天才は遺傳史上或る賦性に惠まれた家系が退化し始める時に、特に好んで出現するものだと言ひたい。自已の家系の退化に對抗して天才がなした何十年かの無効なりし闘爭を、ベートーベンやミケランゼロなどの傳記中で眺めるとき、我々は深刻極まる同情で充されずには居ないのだ。」

この事實に當面するのである。ゴールトンは賦性能力が割に好調子な經過を辿る經緯には平均偏差の法則を適用したが、好調子から退化への道を辿る經緯には適用しなかつた。この經緯に平均偏差の法則を適用して、賦性能力を有する家系は如何程の年代を經て退化へ移行して行くか又退化の主要因子は何であるかを剔抉することこそ主要事ではなかつたらうか。

ゴールトンは自國のイギリスといふ狹い範圍に主要材料を求めそして的確性を願ふ良心を次のやうに言ひあらはしてゐる。

「本書ではイギリス人でない、或は少くともイギリス人によく知られてゐない近代の拔群人に對してはあまり注意を拂はなかつた。この大多數の外國人を含めることによつて明白な誤りを冒すことを恐れたのである。」と。

こゝで問題に成ることは、不確實性を嫌惡するゴールトンのやうな場合、そして彼が特に平均偏差の法則を適用して天才と遺傳の確實に理論づけたと信じてゐる場合些細とは言へ次のやうな提議が問題に成り得る。彼がイギリスに重點を置いて取材した人物が、天才的でなく寧ろ能才の列に入るべき人物（これは天才と精神病的素質―循環病性氣質、乘離症性氣質等―との關係を事實以上に離間したことに起因するのであるが、これは又次に述べることゝ大いに聯關してゐる）であることの理由にはゴールトン自身が置かれた物質的並に精神的環境、大きく言つてその時代のイギリスの風潮、世襲的慣習といふやうなものが影響してはゐぬか、といふ提議である。これは、ゴールトンが確實性を固執して行けば行く程一つの確實性有る提議として問題たり得るのだ。ゴールトンは伊太利や佛蘭西の賦性能力を有する家系に興味を持ち特に佛蘭西について、

「革命と斷頭台のお蔭で比較的才能の優れた階級の子孫をなくしたフランスは、幾分興味がなくなつてゐる」

とかう言つてゐるが、そしてこれは事實惜しいことではあるが、佛蘭西革命の導火線と成つたルソー、轟々たる動亂革命の舞臺に躍つたロベスピイルやミラボオ、これ等の眞の天才的人物が如何なる撫育環境、撫育的經過を經て招來されたかをも注目すべきではなかつたらうか（ミラボオの家系については彼の著書の「政治家」の欄の附錄に詳述されてゐるのはゐるが）。そしてこの三人が濃い變質的色調を帶びてゐたこと、即ちクレツチユメルが言つてゐるやうに、

「ロベスピイルは精神病者の息子であり、又分離性精神變質者と神經質な變人の好標本であつた。ミラボオは冒險的な全く疑はしい過去を持つた男であり、又輕躁的な氣質色調を帶びた優秀變質者であつた。そして最後にルソオであるが、その精神的影響の汎さ深さから言へば、三人の中遙かに最も天才的であつたこの哲人ルソオは重い

精神病的追跡妄想の所有者であつたのだ。」

といふことに留意すべきであつたのだ。ゴールトンは心理學的にも生物學的醫學的にも天才を美しく健康的なものとして樂觀しようした。然し何と、ローベルト・マイヤー、レナウ、ドストエフスキー、ボードレイル、ベルレーヌ、ホフマン、ヘルダーリン、フオイエルバツハ、ヴアン・ゴツホ、シユウマン、ウオルフ等の顏は狂氣じみた憂鬱に戰きながら彼に肉迫し、彼等の妖しくも輝かしい價値に滿ち溢れた創造品は擧げて彼に不滿を訴へ修正を迫るかに見える。彼はそつけなく言ふ。

「多くの思ひ上つた馬鹿な人間は、天才が自分の專門以外のことに無頓着で疏略なのを、無能の故だと思ひ込み、彼を全然未經驗の領野に投げ込まうとして、却つて自分自身が豫期せざるひどい窮地に陷ち込むのだ。」と。

これは極く表面的な問題だ。天才の核心を走るものはこのやうな樂觀的な狀態ではない。ニユートン、ゲーテビスマーク、シラー等の不拔な人格構造の直ぐ裏にさへ或特殊事象にのみ燃えあがらうとする衝動傾向の焰と、相容れざる氣質群が對峙して性格を崩壞しようとする不氣味な蒼白さを覗き見ることが出來るのだ。この天才の偏執的傾向はブレンターノが巧みな批評をしてゐる。

「凡そ天才は孰れも彼に獨自の領域を有する。言葉の完全な意味に於ける普遍的天才なるものは實に存在せざるのみならず、概ね天才性は藝術の個々の部門に於てすら比較的狹隘な限界を保つに過ぎない。故に例へばピンダル（古希臘の抒情詩人）は抒情詩の天才的詩人ではあつたが それ以上の何者でもなかつた。しかのみならず天才には更に苦しき制限が加へられてゐる、彼は一の特性を有し苟且にも之から離れることが出來ない、そしてこのことこそ實に彼の凡ゆる作品に天才の刻印を捺印するところのものなのである。」と。

ゴールトンには、統計學的に割り出して一切を律しようとする偏重さも多分にあつたのだ。彼はケンブリツヂ大學に於ける數學優等賞を得た獲得點數を細密に點見した上で首席ラングラー（毎年數學賞を得た者のうち上位の約四十名がラングラーの稱號を得るのであつて、首席ラングラーはその最上位に有る者）について次のやうに言つてゐる。

「上述の首席ラングラーは入賞者名簿中の最下位の者の三十倍、三十二倍以上（これは獲得點數を比較して算出された數字である、筆者註）の能力を有つてゐるのである。これらの人々は最下位の入賞者に比し、て三十二倍以上難しい問題を解く能力を有つてゐるに違ひない。或はまた同じ難しさでみんなに解ける問題であれば、多分この割合の平方根に當る割合で、速くそれを解いてしまふことになるだらう。何れにしろこれらの點數は、當然異狀に優れた人にとつては可成り不公平になつてゐると推量されるのである。といふのは試驗の時間の大部が、書くといふ機械的な作業に奪はれるからである。受驗者の觀念の力がペンの力を追ひ越す場合は、何時でもその人は自分のそれだけ過剩な觀念の速度を無駄にするわけである。」

彼の緻密な頭腦は、受驗者の書くといふ機械的作業と觀念との速度の關係を見拔くことを誤らなかつた。然し彼がこゝで扱つてゐる能力は飽くまで試驗範圍内に於ける、それも狹隘な提供された問題乃至はそれに類似した問題内に於てゞある。諸々の現象にこの能力の單位差額が當て嵌められるものではない。彼はこれに氣附かないのではないが、推理に於て矢張り統計學的偏重は免れない。彼はルートレツヂ社から發行された「時代の人物」を讀んで、

「この書を一讀して「時代の人物」の大部分が中年を過ぎてゐるのを見て私は驚いた。高い功績を樹てた人といふのは(最高の功績の場合は決してさうではないが、確實に一般から認められようとすれば、どうしても五十までは生きてゐなければならぬやうである。」とかう意見を吐いてゐる。この「時代の人物」なる書の眼目とするところが、「その實力によつて世間から榮譽を與へられた人々のみを收錄する」ものであつたにしろ、五十まで生きるとか、或制度機構内で營々として努力し、地位と名譽とを獲得するといふやうなことは天才の核心と成るべきものと凡そ遠いものだと私は力說したい。

こゝで私が一言して置きたいことは、ゴールトンの「天才と遺傳」が直接の天才論でないことは飽くまで私の批評根底の意識裡に置いてゐるといふことだ。彼が右のやうな書籍から取材して理論づける際そして優秀なる才子達が制度機構内に於て地位、名譽を獲得した確實な實蹟を統系的に見られることによつてますく彼はこの方面に依據し過ぎた、その經緯に於てロンブロウゾウが天才と區別して（ロンブロウゾウ自身「天才論」の中で天才

と能才と區別す境界線を簡單に規定することの困難を說き自身二者を混同してゐる場合があるかも知れないといふことを斷つてゐるが）視た能才の系列群に天才の容貌を帶ばしめて見ようとした傾向を排駁したいのだ。「確實に一般世間から認められるためには、どうしても五十までは生きてゐなければならぬやうだ」と言つてゐるのは「時代の人物」を讀んでの意見で、彼の批評の根底には長生することが天才といふ榮冠を與へられる唯一のものであるといふやうな幼稚な考へはなかつたといふ事は容易に推察出來るのであるが、「時代の人物」を持出して云爲してゐる箇所ではこの事は述へて置くべきだつたのをその儘にして輕視して居り彼の統計學的偏重の缺點を曝け出してゐる。統計學的精密さを遂行する上には必要だつたにせよ、彼が形々しく取り上げた一群の人物は、クレッチユメルが天才の生物學的醫學的究明に際し、その核心から遠いものとして除外した天禀を「職責」の爲に聰明に使用して名を得た顯官、外交官、將軍の群である。或制度機構内に於ての榮達が必ずしも天才への道ではない或制度機構を認容して突き進むことが必ずしも絢爛たる價値創造への登龍門とは成らない。天才が社會的聯關に依存し得ること勿論であるが、天才の眞の核心とも成るべきものはもつともつと手前のものである。生物學的に宿命づけられ生來された個性の面に覩かれる禀性素質である。それが社會的聯關に於て如何なる形態を取るかは第二の問題であるべきである。生得的に制度機構内に容れられない者、それと對位的に立つ者、或はもつと狹隘な些細な機構をも拘束として感じるやうな人達の中に私達は眼くるめく活動の原動力ともなるべき妖しく燃える焰を見得るのである。ゴールトンはダランベール等を取りあげ貧民の子から名聲を捷ち得た者とし社會的な障碍も優れた能力を有つた人間が卓越した名聲を得るのを阻止し得ないことを示してゐるが、彼等の障碍を破碎する熱情には一歩を誤れば崩壞傾向を辿る衝動構造、氣質傾向が不氣味に慄へてゐるのだ。ゲーテに與へられた藝術的名聲を剝奪せんとして不遜なる熱情に燃え、或ひは奈翁の暴壓政治に憤激して作品「ヘルマン戰爭」を生んだクライストの頭腦衝動構造の狂奔性や、レンブラントの「猶太の花嫁」に感激し「この繪の前に一週間居ることが許されるならば私は固パンの屑を食つてもいゝ、飽かずにこの繪を眺めてゐたい」と吐露し、その交友關係に於ては

わづかな事にも蹉跌し勝ちだつたヴアン・ゴッホの固執的狂熱性、性格の崩壞傾向を思ふ時、そして彼等が自殺して果てた經緯に思ひ及ぶ時ゴールトンが引例してゐるやうな人物の唯單なる物質的不遇といふ外來的なものはさしたる問題ではない。要するにゴールトンは數理的、統計學的偏重によつてそれから類推する場合、それが天才問題と抵觸する限り、天才の核心と成るべきものを輕視してゐる缺點を有つと言ひ得る。

ブレンターノはその著書「天才」に於て、天才といふ語義が瞬眺多義であり或者には廣範圍に或者には狹義に使用されることを述べ、使用領域の限定はしてゐない。論述の方法に於ては、先づアルキメデス、ニユートン等の科學者を持出し彼等が自然の事象から偶然問題解決の鍵を得て、科學大系を創り出すまでの業蹟は、後學の人によつて追隨し得られることを述べ、正に研究對象と成るべきものは俗に靈感的に或ひは無意識に創造せられるとする藝術家群とし、藝術家の創造過程を究明してゐる。即ち（これについては私は前の方にも書いてゐるが）美的感覺の俊敏性、それに伴ふ聯想作用の敏速なしかも旺盛な活動によつて想像はますます陶冶され創造への胚胎と成る天才の頭腦活動の特徴を縷述し、要するに天才と常人の差は種類上の差ではなく觀念聯合の法則による程度上の差であるとして（この場合天才と常人の開きは生物學的に見る時、又は言語の使用如何によつては種の差と言ひ得るのであるが）純粹な意味に於ける靈感による創造、無意識的創造とかいふものは有り得ないことを明言してゐる。こゝまで解決を持出して來て、最後に何うして、天才を有する藝術家と科學者其他の研究者とを比較し、直覺から創造或ひは發明發見へと燃えあがる頭腦活動の經過は、矢張り皆軌を一にするものであることを論述しなかつたのであるか！これをしなかつたブレンターノには科學者を輕視し藝術家に偏重し過ぎた向きが無いとは言へないのである。彼が藝術家にのみ重點を置かねばならなかつたのは、心理學的法則にのみ依據し生物學的究明を無視したからである。彼は斯う言つてゐる。

「惟ふに或人々はこの特長（筆者註、觀念聯合が高き藝術的天禀を有する者にとつて俊敏に活動し陶冶されたものとして發展する經過）が腦髓の生理的狀態に因ることを指摘せんとするかも知れぬ。然し斯樣な企は少く共現在の如き學問の狀態を以てしては尙早であらう」と。

然し反面にもブレンターノが死んでわづか十數年を經てクレッチユメルによつて生物學的醫學的に「天才」は研究論述されたのである 心理學的には勿論、生物學的醫學的に研究する時、批判の對象を藝術家に限るやうな偏頗さはなくなつて來るのだ。クレッチユメルは「天才は價値を生み出す者である」とする一方「天才は純生物學的に言つて人類中の稀有にして且つ極端なる一種の變種である」とし更にこれを押進めて名言を吐いてゐる。

「從つて正しい哲學的規範概念の下に於ては天才を人間種族の理想型と看做すことは十分に認容されて好いが之に反して天才が生物學的意味に於て、人間の健全さと能力とを高度に現はして居るものであるといふ時々耳にする主張は排擊せねばならない。非常に多數な事實材料がこの主張と全く撞着する結果を示してゐるからである社會學的評價と生物學的評價とが此の場合程截然と區別されることはないのである。」天才の概念についてはクレッチユメルが一番巧みな表出をしてゐる。そしてこのことは彼の著書の內容の價値を裏書するものである。

補　遺

序章を讀みかへしてみて不備な點を痛感してゐる。比較論の素材と成る書籍を列記するのに「素材と成る參考書」として刊記したのもその一つである。「素材と成る參考書」と書けば批判の對象は別にあるやうに取れる。矢張り「比較論の素材と成る書籍」と書くのが順當だつた次にゴールトンが佛蘭西革命について、

「革命と斷頭台のお蔭で比較的才能の優れた階級の子孫をなくしたフランスは、幾分興味がなくなつてゐる」

と言つてゐることに對して、私はルソー、ロベスピイル、ミラボーを取りあげ、この等の眞の天才的人物が如何なる撫育環境、撫育經過を經て招來されたかを注目すべきではなかつたらうか、と反駁してゐるが全く他愛ないと思ふ。佛蘭西革命の導火線を成つたルソーや他の二人が革命當時の代表的人物にしろ、ロベスピイル等と同黨だつたジヤコベン黨のマラーやダントンを始め私の知らない幾多の有能の士が革命の犧牲に成つてゐることは確だし、これらの人達の才能の傳承經過を子孫に見ることが出來ないのは事實興味をそがれることである。ゴールトンは少しも間違つてゐない。私の言ふのは前記三人の人物が如何なる撫育環境、撫育的經過を經て招來された

かに留意すべきではなかつたらうか、といふ彼等を結果として見る遺傳的經過であり、ゴールトンの言つてゐる面と面が違ふ。つまり私の言つてゐることがゴールトンの言を否定してゐるのではなく彼に對する希望の言葉にせよ、無理に理窟をつけてゐると言はれても仕方のない私である。私の反駁の言葉に理窟をつけるとルソーはスイス生れであり、ミラボーについてはゴールトンは政治家の欄で詳述してゐるし、私の立場こそ危いものである佛蘭西革命の眞相も知らず大きな口を叩くものでないと今でははづかしく思つてゐる。も一つはゴールトンがダランベールを例に引き、貧民の子から名譽を捷ち得たものとし社會的障碍も優れた能力を有つた人間が卓越した名譽を得るのを阻止し得ない、と言つてゐるのに對して、私は彼等の障碍を破碎する熱情には一歩誤れば崩壞傾向を辿る衝動構造、氣質傾向が不氣味に慄へてゐるのだと述べ、次にクライストとゴッホとを引出してきてその證左とし、ゴールトンが天才が社會的障碍を破碎する能力を樂觀視してゐることに對する排駁の意味で、

「ゴールトンが引例してゐるやうな人物の唯單なる物質的不遇といふ外來的なものはさしたる問題ではない」

と書いてゐるがこれが言葉の取りようではゴールトンが言つてゐることゝ類似したことを、即ち天才は社會的障碍を容易に突き拔けて名譽を獲得し得る、と言つてゐるかのやうに讀者に取られはせぬかといふ危險性、書き足りなさを痛感することだ。私がこゝで言ひたかつたことは、生物學的に生來される天才の個性の面に覗かれる稟性、素質であり、それが物質的不遇といふ社會的聯關に於て如何なる形能を取るかは第二の問題であるべきであるといふことである。或天才に於ける熱情は社會的障碍を破碎するに役立つ力と成るかも知れないし、他の天才に於ては敏感なる性情は唯單なる物質的不遇にさへ打ちのめされる脆さと成るかも知れないのだ。私はゴッホが物質的不遇に惱んだのを知らないのではない。式場隆三郎氏のゴッホ研究に關したものは讀んでゐないがゴッホが弟テオドルに當てた手紙の譯本を讀んで居り、其他の資料で彼が物質的不遇をかこつてゐる悲慘な事實を知つてゐるし、ゴッホのやうな天才に取つては物質的不遇といふ社會的障碍が如何に致命傷であるかを書くと共に、その誘因と成るべきものがゴッホの宿命づけられた稟性、素質であることの意味を書きたかつたのだが、「序章」ではそこがうまく書けてゐない。

詩

黄河

高木恭造

河はあまりにも老ぼれてゐた。その年齢を忘れてゐる程に。
もはや何物をも辨へ得なく、絶えずいらいらし、氣短かにがなりたてる。
追憶の涙を流してゐるのかと思へば、陽なたぼつこをしながら、たわいもなく眠つてゐるのだ。
それがいま末期だと思はれる程に暴れだしたのだ。

跳ね上り、のたうち廻り、もはや制し得べくもない。
その一切を吐瀉せんとするうめき、叫び。
はては虚空をひつつかんだまゝ、どうと倒れた巨體。
埋沒した歴史の泥沙は掘りかへされ、
氾濫した人類苦虐の汚吐物！
斷末のうめきに喘ぎながら、
河はなほそのだゞつ廣い背中で、濁つた天を支へてゐる。
河は一夜にしてその河道を變へてしまつた。

斷章

モンゴウルの幻想……

わたしは北にひきつけられてゐた、磁針のやうに。
「七ツの湖（ドロガンナグール）」はその方向であるから、
七ツの數はわたしに救ひを想はせたから。

湖は淫靡な黑土地帶に、醜惡な丘陵地方に、汚穢な大濕地に、
或は怠惰な草原に、貪婪な沙漠に、

はては孤獨な凍原に潜んでゐた。

わたしはこれらの湖を求めて彷徨したが、
殘りの一つは遂に見出し得なく、
凍原のたゞ中に身も精神も凍りはて、
わたしは北を喪失してしまつたのだ。

救ひはもはやわたしには來り得ない。

戯畫

井上麟二

寐轉んだ二階の窓から光る七月の空が見える。空の下には天界を辷り墮ちたジュピターがだんびらのツカを握つて怒號してゐるが、そのカリカチュアは此處からは見えない。

地下室は空襲避難所兼榮養食調理室。トマト、玉葱、人參、胡瓜、大根、キャベツ、じやが藷、セロリー、ケチャツプ、單舍利別、サラダ、オイル、メロン、脱脂乳、ヨーグルド、ヴエタミンA、B、C、D。

諾しツ。それでは文化中毒症に惱む僕の食餌を調べたまへ。十、十、十。野菜スープは

十五分間以上煮てはいけない。

僕はそのほか腦神經衰弱症を併發してゐる。目覺めて猶ほ霧の中に住み、都市の僞裝に誘はれてはフラフラと街頭に彷徨ひ出る。快よい夜の南風。かういふ夜はスモーキング、ルームの片隅に、湖のやうな瞳をしたドストイエフスキーと對坐してゐる。彼は今は既に亡き祖國を肯定し讃美する。僕の反駁。彼はルーレットを說明する。僕は八八を敎へる。かうした賭博の快は遂に麻雀牌の妖美な構圖に臻つて彼の美しい瞳が生き生きと耀きを增して來る。思ふにこれら惡魔の齎すまぼろしの美は一擧にして人生を葬つてもなほ悔なき魅惑なのだ。その中には慘膽たる敗戰の苦惱もある。羽衣を纏めて昇天する戰勝の愉悅もある。それらはみな惡魔が人間界に投げかけた最高にして最美な悅樂である。

軈て夜明けも近くなる。僕は眠らねばならぬ。眠らうよ。眠らうよ。うたてき人生を眠らうよ。乳房の眠りは幾世紀の彼方へ消え失せた。今はただ靑白き眠り。白晝夢を乘せて來る妖しき眠りがあるばかりだ。

滿洲建國。承認。否認。梨下運、瓜田履。誰だッ、この畑に足を踏み込む者は。笛を吹かれて踊り出す者は。文學志望者の思想は今も空つぽ。情けない。カールスベルグの黑でも飲みたまへ。それとも單刀直入にミリタリズムを鵜呑みにするか。（暗轉。一應神秘主義のカラクリをひつくり返して見る）。おやツ、これは又何としたことだ。滿洲文學の王座は何時の間にか南京豆の殼で慥えた造型美術に占められてゐる。だが僕はこの現實に反抗しない。僕は骨の髓からのレアリストだ。僕は南京豆を崇めよう。

來た。來た。來た。だんびらが來た。辷り墮ちたジュピターが自暴糞で打ち振るだんびらが來た。赤い房。紅槍。軍刀。飜る。突く。刺す。劉海匂ほやかな乙女の首が一つ僕の足もとに轉がり落ちる。首のない豊かな腰がすこし傾いて佇つてゐる。軈て棒のやうになつて倒れる。あとには何も殘らない。

猿

丸い子供の頭は海の匂ひに包まれて私の腕に眠つてゐる。この小さな頭はぢかに私の頭に接續してをり、私の頭がレアルでありニヒルであり唯物的であり唯心的であり抒情詩であり貸借對照表であり哲學であり科學でありピューリタンであり性慾であり神であり惡魔である如く、お月様でありサーチライトであり純眞であり溷濁であり天使であり野獸でありヒユウマニティイクでありコケティツシユであり――故にこの頭の小ささから湧く思惟はお月様よりサーチライトを美しと思ひ、お月様も好しと思ひ、父を野獸の如く怖れ嫌ひ、

父も母の次に好もしと思ひ、兵士の靴音に天來の歡喜を感じ、矛盾も撞着も眞理も横車も一しよくたにして（おゝ、人生の眞の姿は結局それなのだ）夜は母の乳房に特異な悅樂を味ひつゝすやすやと夢なき眠りに入る。

私がこの頭を愛しはぐくむのは猿が子猿を抱きかゝえるのと少しのかはりもない。私にはたゞ私にこんな西瓜頭の小坊主を授けた運命のあまりな出鱈目さがどうにも噴飯に堪えられないのだ。と云つて笑つてすまされない腹立たしさ呪わしさも多分にある。けれども私は世の多くの父親達と同じやうに運命の前には哀れなでくの棒でしかない。だから私は私の死の直前までこの頭をいたわり抱きかゝえてゐねばならぬ。子猿を抱いてゐる哀れな檻の猿。

汗にまみれた小さな頭のぼんのくぼを見てゐると、私の感情はいつしかじつとり潤んでくる。何を間違つて生れて來たんだ。この愛、この呪、この悲しみ、この諷刺。私の心をゆすぶるたゞ一つのもの。

蝶の宿

城小碓

夕燒けて天も地も眞紅である
今日は園遊會があつたかも知れない
山の麓、醉しれた一羽の紋白蝶
また一羽、また一羽頰を紅く染めながら

○

一こえ二こえ鳥が啼いていつた

遥かに霞の中の古戰場
峠の道の此の一刻を、蝶よ
まさかお前は落武者ではなからうね

○

こころ靜かに
棉の木にとまれ
とまりて眞白き
棉のみになれ

天邪鬼

古川賢一郎

南へ置いて來たお前や子どものことを思はぬではない。ロシア人の臭い部屋を借りて、堅いくろぱんと香りのない紅茶ばかりではやりきれない。さりとて毎日三度々々、まづくてたかい日本飯を喰べに、さむい石だたみの町へ出るのはおつくうではあるし、それにお金がもう心細いのだ。あゝ、安い火酒(オツカ)をのんで、うたゝねをして、風邪を引いたり、おなかをこはしたり、そして夜毎、固い木のベッドで、南京虫にさいなまれながら、切れ〳〵にお前達の夢を見ては、くさいロシア煙草を燻らして、たゞ呆んやりと暮してゐる。

お前は北へ行きたくないと云ふ。病身のお母さんや子どもたちの弱い肉體の灯を消したくないと云ふ。一家揃つて熱い粥をすゝつてゐれば、なんの幸福も望まないと云ふ。然しねえ、男は前ばかり見詰める宿命を持つてゐるのだ。腕を撫し胸を張り、瞬時たりとも足ぶみを許されないのが男なのだ。お聞きよ。ロシア人は隨分北から此處へやつて來た。そして今また雪深い北國へ歸る。生活の不安な祖國へ引揚げる。なんであらう、白夜の北國へ家畜と共に行くロシア人をおもへば、在滿十年のはて、北滿移住の流轉がなんであらう。あゝ、面倒だ。俺は國境の大黑河(アムール)へ行く。馬糞臭い海拉爾(ハイラル)の町へ行く。そして蒙古へ、意地惡い人間のゐない砂漠へ、何處へでも行くんだ。おのれをいとほしむで「流れ者」などと風のやうなためいきなど吐くものか。——

またお前笑ふだらう。哀しく笑ふだらう。

男はみんな天邪鬼だ。哀しい天邪鬼だ。

湯

小池亮夫

熱し、滾り、盡さんとする
冷え、口噤み、沈默もて己が首絞めんとする
透明に徹し、寸毫の隙もなく身を任かせ
神を破り、肉を開き
享樂し、享樂し
溺れ死なんとする。

谷を這ふ

蚰蜒が壁の罅に頭を突込んでゐる。頰を窪ませ、目を細め、滲み出す甘味を嘗めてゐる。夢の虫奴。

私は朝な晨な底なしの谷間から這ひ出す。夜つぴて無始の谷、無窮の溪を這ひ廻り、黎明と共に屍を目醒めるのだ。晝が死に、夜が生れ、暗黑が闇を覘ひ出すと、私は四つ足の毛深い獸物となる。

下へ下へ醉心地で降りて行く。何といふお伽噺である。嶮しい山徑である。曠野である。

生肉である。軟體である、情痴である、大饗宴である、火の海である。

臓腑の間を曲りくねり、ぬらぬらと私は行く。私は地を縫ふ蚯蚓だ。皎々たる月が魔を照らしてゐる。邪教を描いてゐる。怪浪が岩骨を嚙んでゐる。私は首を絞められてゐる。

私は夜毎幽玄へ降りてゆく。淫行の河を押し流されてゆく。鬼が透通つた灯を提げて、私を、私の睡眠を迎ひに來る。

轟然たる地球の崩壊である。噴火である。一切が滅亡である。白の海である。幾萬といふ平坦な平坦な廢墟である。萬雷である。眞裸體である。白兵戰である。一瞬である。號叫である、生血である。圓だ、絶對の圓だ。

地上でもない、空間でもない、光でもない、水中でもない、音でもない、無でもない、一切の敗滅の面を唯一人、私は行くのだ。

脂汗でびつしよりになつた苦悶の肌を撫で廻はし、私は空ろ目を開ける。恐るべき、餘りに怖ろしい邊の靜止に、がばと跳ね起きる。靜止ではない、靜止ではない。

三十年の間私が靜止と信じてゐたものは、睡眠のやうに嘘だ。靜止は、あの電氣の流れのやうに、びびびびと音をさへたて熱烈な運動をしてゐるではないか。

私は微かな、遠吠のやうな得體の知れない呼聲に誘はれ、導かれてゆく。遠い遠い進軍喇叭だ。

四つん這ひ、横になり、仰向になり、逆さになり、何時の間にか私は蟇である。もやもやと妖氣に包まれ、谷間の窈冥たる氣雲に端座し、默々と身構へてゐる。一變私は木乃伊となる。歡樂にくるまつて死ぬ。誰かが私の傍に寢てゐる、倒れてゐる。それは私だ。安らかに寢息をたててゐるのは私だ。いや私ではない。私は今膽水を吐き、膽水を冰いでるではないか。眞晝陽に腹を投げ出し、腸の繩を蠅にせゝらせてゐるのは私か。私は恐怖になる。私は半身化石し、半身翅羽になつて空高く飛翔する。私は空中で私である彼と私でない私との格闘を見物する。ばりばりと摑み合ふ爪の音が空間に亂れる。總髪を振亂した呪文が忽然、天地四方から私に襲ひかかる。私は踊る。私は霧になる。

電燈を點し、電燈を消し、現實となり、夢となり私は夜を這ふ。耳を這ふ、目を這ふ、足を這ふ、手を這ふ。私は嘲笑ふ。然し私は笑つてはゐられない。私は夜を渉り、夜を泣き、向岸へ冰ぎ著かねばならない。私は夜の谷を這ふ。見出されまい、見つかるまい、假面を被り、こそこそと夜を逃げる。私は夢を行く、無限を行く、一坪の牢獄の裡を這ひ廻る。私は私の尻尾を銜へて荒らびる。

兩側に地藏尊の林立した芝路を、長い長い記憶の路を、地平線の泥濘を、汽車路を、白ちやけた屍の肌を。駈け、よろめき、頭を車輪にした車に乘つて哄笑する。私は出口のないトンネルを彷徨ふ。

まだ私はこんな處をうろついてゐて、私は何をしてゐたのだらう。もう夜が明けようといふのに、人生が終ろうといふのに。

夜の入口は何處だ。

夜の入口は何處だ。

あれは夜ではない暗黑だ。あの地の奥から響いて來るものは何だ。睡眠の寢息だ。睡眠とは何だ。睡眠が何處にある。ニューヨークである、深淵である、魔樂である、紀元前一萬年である。鋸の山である。どーん、どーんとお祭の花火である。ヴラマンクの黄昏の畵である、憂愁である。それにしても嗟呼、この縱横無盡に通ずる道、私の歩むべき、進むべき道はどれだ。私が撰んだ、どの道もどの道も、私が二、三歩を運けばもう鎌首を擡げるではないか。

虚妄と虚妄と虚妄と、私と私と私と、影と影と影と影とが折り重なり、倒れ込み、ぶつぶつと怪神を泡吹いてゐる。其の谷間を私は這つて行く。セルロイドの顔、癩病の顔、牛の顔胎兒の顔、顔、顔が波間に泛び、とろとろと燃へあがる。行つてはならない、其方はいけない。膝をむき、掌を皿吹かせ、這つて行く、ぢりぢりと引摺られて行く。重いものを引摺り。重いものとは何だ。其奴は何だ。判らない。其の正體を知らうと、考へてみようとすれば、私の頭は急に中心を失ひ、こん度は私の頭が重くなり、私の腦髄が石にならうとす

る。だから私は唯矢鱈に這ひ廻るのだ。私の體中を、夜の谷を。私は蛇のやうに私を愛する、夜を愛する。夜の入口は何處だ。

私は私を脊負ひ、夜を脊負ひ、夜毎夜つぴて地獄の谷を這ひ廻り、朝になると獣物の皮を脱ぐ。

夜の出口は何處だ。

業病の果ては何處だ。

薔薇百科辭典

三好弘光

ツルクサ　ターキー　イーデン　ドクガス

ドドイツ　アブサン　ミヅムシ　ニンニク

スペイン　セメント　エスプリ　コクバン

インキョ　ソロバン　ビタミン　ウラジオ

モスリン　リクグン　ブルース　ウンチン

スツポン　タケノコ　マクニン　ニンジン

マルクス　チヤワン　レーニン　コスモス

フウテン
ウメボシ
チリメン
ガソリン
マンテツ
マンヤウ
フンドシ
キーロフ

ピン
ギン
ゼ

一九三七
インテリ
ローソク
カルピス
ボーナス
ホルモン
インフレ
ギンガミ

タ
キ
ケ
ダ
リ
リ

アンコロ
バクダン
コクボウ
シンゾウ
シトロン
ポケット
スンガリ
ボエジイ

ゲ
イ
タ
フ
ネ
ロ

カンラン
メンタイ
ヘソクリ
キントン
シンボウ
ワグネル
ビーナス
イチマル

ミ
セ
テ
ソ
キ
ロ

リ
シ
カ
ブ
コ
ヒ
サ
バ
ネ
コ

ブ
タ
コ
ト
ク
ウ
ミ
マ
ミ

ツ
ボ
ゴ
ム
ヘ
ソ
ツ
メ

ハ
ナ
ヒ
ビ
カ
キ
カ
ミ

ガ
ク
リ
ヨ
ウ
ハ
イ
キ
ン
グ
セ
ロ
フ
ア
ン
ヴ
エ
ラ
ン
カ
フ
タ
バ
ヤ
マ
ホ
ト
ト
ギ
ス

クンショウ
キンチヤク
ウマノアシ
ストライキ
ハラセツコ
イタバサミ

ナマビール
ジユンレイ
ラツキヨウ
ヒトノミチ
シヤンハイ
サイゴンベ

トケイ
オカブ
P・C・L
ラツク
ポプラ
ヤブカ
ミカン
リボン
テント
オコシ
オデン
サツク
ライカ
コルク
キセン

トカゲ
ミイラ
カツケ
オアシ
メンコ
ワラジ
トリメ
センス
ウワサ
レース
ダリア
ラツパ
モヤシ

ヒバリ
トロロ
ザクロ
マツチ
カヘル
カバン
タイコ
ヤナギ
クマデ
ヤカン
ヨコネ
ヒバシ
ゲ・ペ・ウ

ヒトデ
ボタン
タンゴ
キツテ
ゲツプ
デンキ
ヨコネ
ヤカン
イツト

ニツキ
オトメ
シラミ
タマゴ
シヨウ
ダイス

コツプ
ワルツ
ハサミ
ホタル
ウナギ
ナチス
コヨリ
スパイ
二・二・六
シルコ
ペスト
マクラ
キシヤ
アポロ
アスコ
ムバナナ
ヨミセ
タンク
ハシカ
ジヤ
ルンバ
タニシ
コケラ
ナ

テガミ
フトン
ギター
ケーキ
トンボ
テニス
シホン
ピアノ
シンプソン
リアリズム
タビノハヂ

ツバメ
ジイド
チラシ
キセル
シルコ
ヒツト
ミイラ
ツバメ
グレコ
クラブ
ペスト
マクラ
キシヤ
ボロ
コヨリ
ナチス
ウナギ
ヒヂヨウジ
アスピリン
メソジスト
エチオピア

七月の愛の歌

古屋重芳

風は　どこから
高い　夜空の星の彼方から
小暗い庭の　しげれる圍みの間から

腕を拱みあなたの爲の愛の歌
ゆらゆらと

消へなんとして想ひはもゆる

蔓ましき花よ
ながい忍苦の　荊棘の道よ
けさ　わが花はこわ怖わと光にむかつて手を伸べた

靜かに眠れ　眠れ　眠れ
はるかな水間で蛙(ひき)なく夜を

私の　愛なる夜露は
眠れるおん身の　肩の上に

新緑の夢

あけがたちかく
風のやうに　馳り去る　蹄の音をかすかにきいた

それから　ふたゝび微睡にはいり

靄のなかなる　故里（ふるさと）の町

新らしき祝典は　未だきたらず

路地裏の　友の住屋に　夕顔の花咲きたり

……

ぱら　ぱら……ぱら　ぱら

ふと現身に　妻はよりそひ

――雨のやうね

それから

私は　新緑まばゆい垣根の小路を歩みゆく

蟬の歌

坂井艶司

じりじりと　生きて　生きて　ひぐらし
びんぼうに　びんぼうに
いつも　いつも　しがみついてゐる
樹々に　うつくしい　つゆ　しづく
いぢけて　いぢけて　しがみついてゐる
つくづく　びんぼうに
しみじみと　生きて　生きて　ひぐらし
鳴かんかな　鳴かんかな

悼歌

——逝ける北條民雄に——

そを聞きしあした　雪晴れ　心冷え
ものも云はずたゞ　雪消え　にじむところ
はだらなる地の面に　釘を見た

繃帯のやうに　白い朝　六時
天は　彼に　釘を打つた

（あらかじめ　用意してゐた　いのちの釘を）

陽ざしにきらめく　釘ながめ
我が胸にもまた　釘打たるゝ時の
いつか　來るであらう日を　思ふてゐた
（あらかじめ　用意されたる　いのちの釘を）

ああ「我村」の　うたびと　北條民雄！
いのちの終夜　天の釘　打ちぬかれ
味爽の　星となり　　やがて
我が傷める胸にまたゝいた

塞北斷章

矢原禮三郎

朝から國旗は風に吹き倒された
このうもれるやうな光りと胡沙の前に
もう私の呼吸は深み細る
風はちぎれて飛び
獄舍の馬車は荒癈し、まるでコルクだ
ほころび行く季節よ！

黄塵にむせび死ぬ黒い蝶もあらう。

喪失記

胡同が左に折れると
もう氣流が澱む城壁の下だ
友をたずねんとて
光茫に路を喪ひ
いま洋車を驅つてこゝに出た

この午後　忽ち埋葬の地は龜裂し
城壁の兵士らは底なしの大笑ひだ
困憊の身を地に下りれば
朔風は家並によりそふ如く
あゝ　路を尋ねた女の顔は
青白い脂光り　脂光り。

巡禮

廿地　滿

破れ翼は軒に吊そう
巡禮はまた流れよう

音もなく年月は煤け
火影の貧しい酒瓶に
翼は風とゆれよう

幼兒

遊びなれた森を見えかくれ
夢のやうに道はつゞいてゐる

そのあたり　幼兒の聲がたえだえてゐる
私の忘れた傷口にあたらしい血がうづく

杳い道のりをあこがれ私の悔恨は歸つていく

幼兒のまろんだいたいけな血の滴りを拾ひながら

風の歎きが聞える　かつての遊びなれた道に

歸つてはきたが　森を渡る風の歎きのみそれは私をはるかに杳い

ああ　幼兒よ　幼兒よ

石ころのかたへ　ひげを垂れ　昆虫は空しく轉がつてあつた

鴉

小杉茂樹

一つ一つ啄いてはあたり視まはし
それから口の中に噛み摧いてもみた
けれど土塊(つちくれ)の他(はか)の何があらう
凝としやがんで啞啞と叫んで
アア……と
むろん嗄れた聲さへ出やしないのに

あの焔と見えるは陽炎、陽炎の燃えたつあたり地上は火を吐いてゐる
俺しはこの喙をひつかけてみる
硬い磐のやうな地面へ――
愚なことだ
愚なことと知りながら俺しはやるのだ
すると何よりもまづ俺しの喙が參る
何をたよりに掘りあてるのか　そしてそれを何うするのか？考へてみると俺し自身にも判らない
一度　俺しはこゝで人間の腐つた骨のついた奴を拾ひあてたことがある
裡なる夢の希ひの焔にかきたてられたのはあれからかも知れない
が　昨日、今日俺しの腦に去來する妖しい焔は熅氣(うんき)に萎(しな)んだ憐れな枯草の姿にかはつた
綠の地を逼つたあの一時季(ひとときき)が過ぎたのだらうか？

せつない枯草の匂ひよ
俺しはもう一度起きあがらねばならない
餘りに暗かつた冬の日の思出を歌ふために！
しんじつ歌ふこころから
貧しくもままよ
土ほじりの土の匂ひの自らの聲にはげまされん。

道

僕を乘せた馬車は昔の馬
僕の通つてきた道は昔の道
耳に象つたのは松吹く風
いくたびも　ふりかえり
日はくらく
いくたびもをもひめぐらし
いまさらに僕は眺めやる
旅にきて日は漸く暮れかゝる

小　説

手記

吉野治夫

佐原龍夫を初めて見た人の第一印象を訊くと、甚しいのは骸骨に皮を被せたやうだといふ人がある。鼻の巣様にとほつた顴骨の高い、頰の凹んだ顔、身體もいつたいに角張つて、圓みが少い。さうまでいはずとも冷たい感じだとは誰もが口にした。皮膚は蒼白の上に肌理が細かいので、ほとんど透明な感じがする。何よりもその切れの長い眼尻に金屬性の冷光が漂ふてゐるのが、尋常でない性格の印象をあたへた。寡默の性で、喋ることばかりでなく人の話を聞くことさへあまり好まず、必要以上に人と顔を合せてゐるのを惜しみ、用件のない限りはいつも何處かへ獨りで去つてゐる。だが人間嫌ひの常として已むを得ず人に接觸してゐる時は、言葉少いが、極めて丁重な謙虚な言葉と態度を持つてゐるので、人は屢々意外な感を受けた。人間嫌ひはもとより彼の潔癖な神經質から、くだらぬと思ふことに一々つき合つてゐられないのであつたが、さらに皮肉に見ればそれによつて自己を守る小さな穴を持つ鼠にも似てゐた。恐らく少かつた友人の中でも親友と名乗りをあげ得るのは僕一人しかゐなかつたにちがひない。それは彼がその唯一の手記を僕宛に殘したことで推察するのである。とはいへ、僕と雖も彼の性格、彼の日常の生活の凡てを知悉してゐるとはいふことができない。ましてその手記の中で、最後に僕は非常な憎しみを受けてゐるくらゐであるから、僕が親友であると斷言するより彼に親友は一人もゐなかつたと斷言する方が、よほどほんたうであるといはねばなるまい。だが、とにかく僕に宛てられたその手記は、僕にとつて滅多に得難い拾得物であつた。こゝに僕が彼を追悼し、またそれを爲すには僕が最も適切な一人であると信ずるわけである。

彼と僕とが話し合ふのは、何かの機會で酒を飲んでゐる時が多く、さうした機會の彼の話を集めた限りで、僕は漸く彼の經歴を語ることができる。

彼の生れは秋田縣の某村、幼年父を失ひ、大阪の兄のもとに引取られ、少年時代兄を失つて大連の伯父の家に

移り、中學を出て高校中途に伯父と爭ふことがあり退學先輩のひきでN會社に入り、秋田の遠緣の叔母の所に養はれてゐた妹を引取つて暮し始めた。僕との緣は偶然そこで机を並び合せたことに始まるといつてもよいが、實はそれ以前すでに僕達は同窓生である。大連で中學を共にしてゐた。從つて僕が入社して係りの近所を挨拶して廻つた時いきなり「おう」と大聲を發し、喜ばしげに迎へて呉れたのは彼一人で、他の社員達の表面かなり變想のよい、さうして誠意のない表情の中で、僕の入社早々の心に唯一つの柔い光を注ぎこんで呉れた恩は忘れ難い。然も彼はその眞心のある「おう」といふ大聲を一言晴々と與へただけで、別段僕にとりわけ親切にして呉れるといふわけでもなかつた。そこに彼の性格を暗示する不思議な友情がある。實は僕の方では、彼が若しこのやうに主任の顏を振向かせるほど大きな聲を出さなかつたら、彼を昔の同窓生であると思ひ出すことはできなかつたらう。それほど彼の面貌は變つてゐたし、また中學時代には交渉のなかつた友人である。その頃から彼の孤獨な性癖と優秀な成績とは級友の視線を集めずにはゐない存在であつたが、まだ無邪氣な遊びに氣を惹かれてゐた僕などとは到底話を交す機會もなかつた。

無心な少年時代のはとんと全部を大連で送つてゐるのに、彼が僕にどうしても大連を故郷であるとは思へないと終始いつてゐたのは、伯父の許から中學に通つてゐた生活の暗さを思はせる。といつて、秋田の村を故郷と思ふでもなく　彼の心には何處にも故郷などはないのであつた。それも無理はない。彼の暮したどの土地をとつてみても、そこに憂鬱な思ひ出のない土地は一つとしてない。六歳、父を失つた時から、否彼の生誕そのものから最早不幸は出發してゐるので、父は失つてもまだ懷しい記憶は片殘するとし、子供にとつては最大の母が彼の記憶の片鱗にさへなく失ふにも及ばなかつたといふ事實は東北人らしい鈍重な遺傳氣質に加へて彼をそのやうに冷たい子供としてしまつた。父の死と共に妹とは二つに引裂かれ、妹は顏も知らぬ叔母といふ人に、彼は大阪の二十も齡のちがふ兄の許に別々に引取られた。「この兄は無論母がちがふんだ。然し兄貴は僕をよく然も深く愛して呉れたな。深くだ、この深くが僕にとつては實に有難かつたな、僕はまだ子供ではあつたが、もう通り一遍の親切や好意といふものにはあまり動かされなくなつてゐた。今思へば兄もやはり不幸だつたのさ。だからあんな心を裏から支へるやうな愛し方ができたんだ。僕はそれを感じながら然も彼（彼は兄を彼といつた）を憎んでゐた。何故なら彼は僕を愛して呉れたが、彼自身は幸福さうに當時の僕には見えたからだ。僕は幸福な奴が大嫌ひだつた。幸福な奴はわが儘で分りが悪いからだ。でも父の僅かな思ひ出と、この兄以外に、僕が人から愛されたと思ひ得る經驗はない。その他の時はいつでも此方をから愛してやつた記憶ばかりだ」もちろん、こんな話をしてゐる時は彼は醉拂つてゐるのだが、兩眼は爛々と燃えて、醉のせいばかりでない不敵な光を發してゐた。恐らく情熱のある眼といふのはこんな時にだけ彼に見られたらう。それを見るのは僕の特權であるらしく、彼でも情熱的な眼をすることがある、と僕がいふと誰でも、へえ、といつて僕の顏を見た。その僕も彼のこんな感情の露はな眼は數へるほどしか見てゐない。兄は彼の生母も知つてゐた。然しどうもそのことは話したがらなかつた。彼はいつか意地になつて追及したことがある。然しそれでも兄は多くを語りたがらなかつた—「實は僕も詳しくは聞くのは厭だつたんだ」といつて彼もその兄のやうに多くを語りたがらなかつた。やがて口を噤むといま激しい語調で乘り出してゐた彼は別人のやうに寡默な彼に歸つて、眼尻には再び冷たい金屬性の光を沈め、みるみる冷却してしまふのであつた。すると今まで微かに兄のやうな優越感で聞いてゐた僕は、最早いつものやうに彼の前で何とも取付きやうのない隔絶感と不思議な壓迫を感じた。

この愛してくれた兄にもまた死なれ、今度は大連の平凡で片意地の強い伯父の厄介者となつたわけだから、彼が素直な人間でなくなつたのは當然のことゝもいへやう彼が弱い性格の持主であつたら、もつと人に甘へることか、卑屈な處世術を覺えたであらうが、拗ね者とはいへ言はば融通に流れ過ぎてゐる世間の角度に對して眞直ぐであり過ぎたといふ拗ね者だから、彼の環境にひしげぬ否逆境にいよいよ鍛へられた性格の強靱さは察することができる。彼はそのために人を憎むやうな人間にはならなかつた。むしろ反つて人をよく愛し特に不幸なものに對してさうであつた。また秋田から腕づくのやうに引取つてきた唯一人の—正しく彼が肉身として體感することのできる唯一の—妹に捧げてゐる愛情は、僕の眼には恰も戀人に對するそれのやうにさへ映つた。然しその人々

に對する愛情の表現は決して直ちに人に分るやうなものではない。敏感な者はもちろん彼の性格を大體において悟りはしたが、たとへば新入社の舊友に向つて「おう」といふ一言を發し、さうしてそれだけで終るといふやうな表現を何と感じてよいものか人が間誤ついたとしても強ち無理だとはいへまい。彼の孤獨で偏狹また傲岸と思はれがちな性格にもかゝはらず、その秀才を愛してM社に拾ひ上げた先輩Hに對し、彼は入社の時「お蔭で仕事を頂きました」と一度頭を下げたきりその後私宅に挨拶にいくでもなく一年を通じて何一つ愛想らしいことを爲したことも言つたこともないといふのは同僚の半ば嘲笑を交へた風評であつたが、僕をして代つていはしむれば、彼はその恩に報ひるには良く働くことが第一であり且それで充分であるといつたにちがひない。事實彼は良く働いた。だが人に感謝や愛情を表現することは下手であつた。反面それは僞善を憎む美しい潔癖とも見えたが、彼の持つてゐる恩愛が人のやうな體溫的なものではなく、もつと理論的に冷えたものであつたことは否めない。いひ換へれば敢て表現するほど積極的なものではあり得なかつた。とはいへ彼が自ら發した「その他の時はいつでも此方から愛してやつた記憶ばかりだ」といふやうな言葉も、一概に不遜だとばかり片附けてはしまへない。僕はむしろそんな時は、それが彼の辛うじて發し得る反抗の言葉なのだと解するやうに務めてゐた。彼が思はぬ好意を僕に示して呉れたのも或ひは僕のそんな態度が愛情に飢えてゐる彼に忍び寄つたのかも知れない。尤も彼は人の愛情といふものには、ほとんどあきらめてゐたが。とまれ人を憎むことさへもできなくなつた無關心が、彼の愛情の半面であつたことは事實で、さうした虛無的な愛以外の愛を彼が持ち得なかつたのも、その生立を知れば肯けないことではない。從つて彼の妹に對する純情な思ひ遣りなどは驚くべき異例で、そんな一端を知らぬものは、佐原は感情のない人間だとか、傲慢陰險な變屈者とのみ評し、惡くいはぬまでも彼の情熱面などは信ずる者がなかつた。

中學時代に比すれば態度はずつと人並になり、言動も前述のやうに丁重で、時には輕口もきくことがあり、何かの拍子にはころころと笑ふことさへあつたのだが、容貌は格段に複雜になり、獨り窓を眺めて我を忘れてゐるやうな時は、放心狀態にありがちの拔けた表情が微塵もなく、

逆に凄いまでに沈んだ虛無が浮び、少くも僕の眼には耐へられぬほど憂鬱な死相に見えたことがあつた。務めて人に合槌をうつて氣の利いたことでも言はふとしてゐる時の方が、彼は頓狂に間の拔けた表情になるのである。ある時彼が女の前で、おどけながらニキビの傷を自殺未遂の痕だといつた時、女が今まで笑つてゐた顏をぎよつと固めて冗談とは受けとれぬ表情をしたこと等も、この邊の勘を說明してゐるだらう。

彼は痩せて靑い顏はしてゐたが體質は粘り強い方であつた、二人で飲んで夜半になつた—多くは偶然おでん屋の片隅で獨り飲んでゐる彼を發見して始まる深酒である—翌朝など、僕が少からずへばつた顏で出勤すると、大むね彼は先に出勤してゐて、相變らず痩せた靑い顏はしてゐるが深酒を白狀する類でもなく、すでに例の事務的な敏速な精力的ともいへる仕事を開始してゐるのである。それを見るたび僕は彼を氣味の惡い男だと思つた。だがそれよりも常に理解できないのは彼がどんなつもりで面白くもない仕事にあのやうに精を出してゐるかといふことである。仕事をして上役の覺えめでたからうとする意識でないことは、その性格、態度から見ても僕は疑はなかつたが、さりとて仕事自身を樂しんでゐるとも思へない。狐憑きといふことがあるが彼は仕事憑きである。仕事が獨り運行してゐるだけで彼はその足に從つてゐる多の影法師とも見える。喜怒哀樂を超絕した無情とはこんなものであるといふ見本を人は彼の仕事に脂がのつた時に見ることができよう。「君仕事面白いか?」といふと「いや」といふだけである。然しそのいやは否定のいやではない。返答をする意志がないときのいやである。彼が仕事を決して愛してゐなかつた證據には彼は仕事について何の主張も持つてゐなかつた。また嫌つてもゐなかつた證據にはどんな多量の仕事をも回避したり怠慢にしたりすることがなかつた。何よりも先づ事務的で、無感興であつた。時に失敗があつて叱責されても謝罪もしなかつた。默つて主任の類を見てゐる態度には、僕もあまり好感が持てなかつたものである。僕は遂に最後まで彼の職務觀を聞いたことがない。然し、僕の察するところでは彼の會社におけるかうした態度の蔭にはつまりは何もなかつたのである。彼の仕事は全然別のところにあつた。それは奇妙なことだが、人の生き方を眺めてゐるといふことである。彼の生活は唯そのためにあるかのやうで、會社で

の仕事ぶりが默々として一年一日も變りなく、水の流れるやうに進行してゐるのは、彼がそこにゐないことを意味する以外の何であつたらう。

趣味といふべきものも全然なく、勝負ごとを嫌ひ、スポーツに接せず、彼の會社生活以外の時間は讀書と僅かにレコードを聽くことゝ酒を飲むことに盡きてゐた。さうして多くは自分が讀書から得た知識や甚だ難解な思索の斷片ともいふべきものを、妹に注ぎこむことに費されたのである。僕は秘かに、彼のこの妹に向けた愛情を、彼の性慾と、知らぬ母性への憧憬との變態表現と考へてゐた。

それだけに、その漸く十九歳に達してゐた妹がいつか隣家の男と戀に陷り、やがて隣家からお嫁にと貰ひに來られた時の彼の憎惡は烈しいものであつたらしい。「馬鹿にしてるんだ。妹もバカだ。あんなくだらぬ男に妹が遣れるか」と彼はある時やはり酒の上で矢鱈に怒鳴つたことがあるが、それはもう妹をその男に與へてしまつた後のことである。いつたいに彼は物事をその時直ちに全對することができなかつた。妹の場合も、妹が相手の男を好いてゐると察した瞬間、何事もいはずに呉れてしまつたのである。然し彼はそのことで非常な打撃を受けてゐたのはその後の彼の酒量と頻度で推察することができた。むしろ、表面には現れなかつたが、それからの彼は絶望的であつたといつてよいかも知れない。

然し僕は、彼の自殺の原因が妹を失つたことにあるとは考へない。事實彼が死んだのは妹を手離してから一年以上も經つてからであり、それだけの時間といふ醫師に心の傷を癒されぬほどナイーブな内的年齢でもなかつたからである。彼は、その手記の中で、自分の死か戀愛とは無關係であることを強調してゐるが、彼の言が常に卒直で己れをも人をも欺かぬことを知つてゐながらも僕はなほ彼の自殺はその戀愛に動機してゐると今でも信じてゐる。ただ彼自身がそれとは無關係の心理狀態であると信じてゐただけで。

妹に去られるまでの佐原はおよそ異性に對して無愛想な男であつた。もちろんそれは一種の反撥に過ぎないともとれないことはなかつたが、記憶もない中に彼を棄てた母に對する憎しみが女性一般におしのべられた半面に妹といふ慰安所のあつたことを考へると、彼の色氣のなさも案外彼なりに正直なものであつたらう。だが一方それ故なほさら女性への強烈な愛情が底に潜んで待機してゐたとは必然想像されたのである。果して、佐原は最愛の肉身を失ふと間もなく或る機會から一人の女性を愛するやうになつた。さうしてそれから一年餘の間に肉體關係は別として彼が愛してゐると僕に思はれた女性の數は五、六名に及び、少からず僕を驚かせたのである。恐らくその中で肉體關係を結んだのは彼が最後に知つたそして前後二回しか逢つてゐないHといふ女だけであつたらうが。何故なれば彼は精神的愛情にこそ飢えてゐても通常の健康な年輩の男のやうに肉慾的な男ではなかつた。却つて異性に向つた出發が人並はづれて遲かつただけ、童貞的潔癖は異樣に強く、彼の愛情の風格には一種貴族的な色彩さへあつたやうである。否より正確にいへば靈肉いづれの世界でも所詮彼の虚無觀は棄て難く、心を信じないとゝもに肉を慾しない弱々しい戀愛を暫時四散せしめたに過ぎないかも知れぬ。僕が驚いたといふのもそれが佐原であつたからで、外面的には何等眼に立つほどのものではなく、彼が死んだ時 僕が不用意に發した「原因は女かも知れません」といふ言葉は一笑に附し去られたくらゐである。その愛したであらうと想像される女の一人などは最早四十前後の夫人であつて、戀愛でも彼は彼らしく風變りに常識を無視した悠々たる歩を彷徨してゐたものらしい。だが、これ等はあくまで僕の想像であつて、その一人々々を擧げて想像の無根據でないことを説明するのは、その人々の迷惑を恐れ、敢て差控へる。何れにせよ彼が情熱的に燃えてゐたと思はれるのは前述のHといふ女だけで、これが最後の蠟燭の消えんとする時の光と俗にたとへるあの悲しい燃焼であつたと僕は信じてゐる。

最初彼が愛した女は二十歳の娘で、機會は僕が作つてゐる。酒を好んだ彼と僕には自然な酒場の娘で、女もかなり彼を愛してゐた。だがこれは結果から見て、ただ彼の女性に向ふ關心に火を點じただけで終つたといへる。從來、女の前では地肌を露はした岩壁のやうに褐土色で垂直であつた彼の姿勢は、それ以來忽ち音をたてゝ崩れていつた。音の靜まつた跡に彼の眼はすべての女に向ひ射るやうに 燐光を發して据つてゐるのであつた。女達が彼を見てこわいとふのは僕が屢々耳にしたことである然しそれは情慾に燃えた眼ではなく、女といふものゝ美も醜も虚も實も、心臓の底までも見透かさずにはおかぬといふ据りであつた。彼が愛し、また程度の差こそあれ

彼を愛してゐた女の二人までが人妻、一人は特殊な境遇にあつた三十女であるといふのも、年齢や經驗の楯がなくては女達は彼を怖れずにゐられなかつたのであらう。それ等の女性はもとよりみな性格は異つてゐたが、必ず幾つかの共通點を持つてゐた。あるものは美人、あるものは醜婦といつた方が妥當である女もゐるが、定つて彼の愛したのは敏感で嘘がなく、何かの意味で聰明といふ言葉をあたへ得る女であつた。唯、Hだけがそのどの例にも洩れてゐる。そして佐原はHにおいて初めて積極的に、言ひ過ぐれば脱兎のごとくその肉體にまで迫り、極めて神聖なほど瞳を清めて退却してしまつたのである。

僕の見たかぎりでは、Hは美しい平凡な無智な小娘であつた。美しいことは、やゝ妖氣を感ずるくらゐで若し彼女に端麗な髪を結はせ粋な着物で着飾らせたら、佐原もまた近附き難く感じたであらうほどである。それは陽春四月のある日、社内の園遊會が星ケ浦に催されたとき佐原は係りの一人に指名されてゐたため物事に逆らはないといふ態度だけで彼がこの面白くもない芝園の遊びに顔を見せてゐた。午後になると手すきになつたので、佐原は僕を促して空々しい紅白だんだらの幔幕に圍まれた獵樂の會場を離れた。倭少な移植松の間をくぐつて海の方から吹いてくる風はまだ寒々しいものであつたが、小徑の砂利を踏んでいくと南側を向いた傾斜面には雜草に混つて少しかぢかんだやうな菫が澤山咲いてゐた。波の音が遠くまた近かつた。會場の騷ぎの音が耳に微かになつていくと、佐原はぽつりぽつり皮肉な口調で園遊會などといふものは會社生活が發見した一つの自瀆行爲だなどと批評した。櫻は蕾だがビール瓶や紙屑で取り散らされる日も間近いことを語つてゐる。後藤新平の銅像の裾をぐるりと廻つて再び會場の方へかなり近く歸つてきた時であつた。向ふから五つ位の男の子に從つて傍の窪地へおしつこをさせに來た女中があつた。それが佐原も僕も最初に見たHである。

さてこれからのことは佐原の手記にも斷片的に見えてゐるし、たとひ僕がこゝに想像を交へてもつと詳しく述べたところで、ほとんど人には信じられないであらう。僕自身にさへ信じられぬ佐原の行動がそこに起つた。彼が突然話してゐた言葉を中斷したので顔をみると、向ふで横の窪地の草中へ子供はもうおしつこをしつゝあつたが、その脇に立つてゐる女中の横顔へ彼は鳶のやうな眼を

突刺してゐたのである。二、三歩つかつかと寄つていくと彼はいつた「あなたは誰でしたかね」女は彼が近寄つていくとき此方を向いたが、佐原を見ると何か幽靈を見た瞬間のやうに驚愕とより形容のできない棒立の姿勢と表情で固まつてゐた。

僕は實は顧みてこの場をかく想像し得るが、その時は當然會社の誰かの家の女中で佐原がそれを知つてゐるだけのことと思ひ、少し樣子がおかしいと皮膚では感じたが、歩を緩めもせず行き過ぎたのである。三、四間過ぎてから彼が遲いのでふりかへると、初めて僕はこれが普通のことではないのに氣附いた。二人はまだ一歩の隔りを置いたまま像のやうに立つてゐる。子供はおしつこを濟ませて勝手によちよち僕の方へ歩いてきた。僕は引返していつた。すると佐原はちらりと僕に眼を呉れて『先に歸れ』と眼に物いはせたのである。このくらゐ冷淡なわが儘勝手な視線を僕は佐原に見たことはない。また唯一瞥を以てこのくらゐ多くのことを語り大聲で怒鳴りつけたに等しい表現を經驗したこともない。僕はいきなり名狀し難い激突的な反感を感じてくるりと脊を向けると歩を速めて會場へ不氣嫌に歸つてきてしまつた。

佐原はそれきり會場へ姿を見せなかつた。

翌日、僕の理由のはつきりしない反感はもう薄れてゐたが、こんどは佐原がいつになく仕事も手に附かぬ樣子であつたので不安が增してきた。何事もいはず一日の仕事を終へたが、退社時間になると、佐原の方から珍しく「一緒に出やう」と聲をかけてきた。二人は二三丁の道を一緒に歩いたが、その間に彼は默つてゐる僕に矢繼早に昨日あれからのことを報告したのである。こんな態度は彼の初めてのことである。それによると彼は强行にもその娘を海岸の方へ散歩につれ出したが、思ひの外に娘は柔順で無抵抗で、いま考へると白痴のやうであつた。彼とても電氣にかかつたやうで、何を言つてゐるか何をしてゐるか、自分の意志で動いたとは信じられぬ。が、然も他の介言を許さぬ絶對的な信念に似たものがあつた。そのほかそれに續く不埒極まる行爲の末までが彼の正氣を疑はずにはゐられぬことばかりで、娘が一面識もない女であつたこと、後から聞いて同じ社内のある課長の女中であると知つたこと、女の名はHであることなど、僕は聞きながら幾度彼の顔を見直してまばたきを忘れたか知れない。

その翌日から彼の表情はまた元のごとく、仕事は正確な事務的速度を持ち始めたが、Hのことについては一言もいはず僕も何事も訊かなかつた。むしろ僕は聞きたくなかつた。不安でもあり、一種不解な憎悪に似た感情さへ彼に感ずるのであつた。それは彼の行爲やその告白の仕方の圖々しさに對するものでもあつたらうが、吟味すると佐原といふ男の幻滅が僕の心中に喚び起したものらしい。佐原が不道德であるといふ輕蔑よりも佐原が急に、虚無的な自己放棄の彼でなく、その殼の中へ强烈な自我意識を詰めこんだエゴイストのあくどさを匂はせるやうになつたからである。

いふまでもなく僕は彼を尊敬してゐた。僕と彼は幾らか似た素質もあつたであらうが、僕が彼を畏敬せざるを得ない理由はみな僕の中になく彼の中にある美點に根據をおいてゐる。中でも僕が懷疑的であるばかりで現世的無秩序をそのまゝ抱懷してゐるのに、彼は虚無的で矛盾がなく、遥かに超越した彼岸を見てゐると思はれたことである。從つて僕にはどうしても誤魔化しがあつたが、彼には否定的前提と赦しがあつただけで同じ一つの行爲をとつても本質は全くちがつてゐた。だから僕は輕々に退却することがあつても、彼は決して退却することがない。僕が後から氣附く理由を彼は先に見てゐるからである。だから僕においては後退であつても、彼においてはそれ以前に否定があつた。否定を越へてきてゐる道には後退の必要がない。僕には到底及び難い境地であつたのである。自然それは彼の無我に慚ましくさへ現れてゐた。いま彼の戀愛にも退却があるとは信じられなかつたが、そこには肯定と同時に否定もなく、いつもの彼の足場はすくはれて、その代りにいはばサーニン的な無退却が立つてゐると感ぜられた。僕は彼の名前が變つたやうな印象を受けて焦々してその變化を憎んでゐたものと思はれる。

ちようど二週間後のこと、僕は會社の便所から出がけに、入つてくる佐原とすれちがつた。視線が食ひ入つたが互ひにガラスのやうな冷たい危險なかけらを持つてゐた。

「どうだい。Hは。その後は」

と僕は初めてそれまでの沈默を破つた。

「うん」

と彼はいつた「あれつきり逢はぬ」

「あれつきり逢はぬ?」

とこのとき僕は自分でも思ひがけない大きな怒氣を含んだ聲を發した。

「君も相當なバカだな」

といつた。この言葉はどうして出てきたものか果して何を意味するか今でも自分で分らない。然しそれは突如咽喉をついて何の苦もなく最もいひたい事のやうに飛びだしてしまつたのである。佐原を馬鹿だと思つたことはもちろん一度もない。だがこの時言つたバカといふ發音は眞實に憎々しい言葉どほり馬鹿といふ極限のバカをこめた語感を以て吐きつけたのである。佐原もきりりと双の眼で見返した。二人は默つて背を向けたが、その日一日、僕は彼の顏をまともに見られなかつた。彼は何か考へてゐたやうである。

習日も同樣の狀態であつた。

その翌朝、彼は出社しなかつた。稀な遲刻と信じてゐた時、彼の自殺が報ぜられて來たのである。僕は彈條のやうに彼の下宿に馳けつけたが、佐原は寢床に正しく仰臥して、咽喉仰の上部に双渡り五寸の短刀を垂直に突き立て、短刀はそのまゝ拔いてもなかつた。眞直ぐに立つてゐる双の廻りに血沫をあげて凛たる死にやうであつた机の上に僕の姓名を淨書した分厚の封筒があり、他には遺書らしいものがなく、その僕宛の手記は字はかなり亂れてゐたが、心の亂れもみられず（ないと僕には感じられる）僕の肺腑を抉つた。

手　記

何もいはず、何も遺さず死體さへも殘さず消えてなくなるといふのが予ての僕の死に處する念願であつたが今とり立てゝあの死期を知つた象のやうに人跡未踏の地へ死に行くほどの勞をとることも自己滿足の感傷に思はれて面倒臭い。しかも死ぬに際して手記を遺す氣持のあることは僕もまだ僕を棄て切る事のできなかつた告白であらう。僕が死體を殘したくないのは然し單なる美的な觀念ではない。あのお通夜とか葬式とか、何の役にも立たぬ未練のはしばしに金をかけて、肉身は煩惱から—幸ひ僕には悲んで呉れるだらう肉身は妹しかゐないが—他人はいやいやながら行ふ面倒の愚劣さを僕は蟲ずの走るほど嫌ふからだ。自殺者の遺書といふ物ほどんなものを讀んでも、果してそれが眞實であるかを疑はなかつたことはない。從つて僕の手記も君は信ずるか信じないか、また信ずることを强ひる必要があるかも知らない。だが僕は

眞實と現實の僞りのない姿を求めてきたのだから、僕のためにでなく人間の物を知らうとする貴い慾求のために少しの材料を殘すことはよいことであると信ずるのだ。辯解と受けとらうがとるまいがそれは君の信念の問題だが。君はよく僕をニヒリストだといつたが、ニヒリストが何物も信じない人間の謂であるとすれば僕はニヒリストではない。僕は信じてゐた。僕は人間一個人の力の限度とか、神の存在とか、幸福は何物も求めないことの中にあるとか、その他澤山のことを信じてゐた。君は意外に思ふだらうが、僕は精靈の存在さへ信じてゐたのだ。僕には信念があつた。君には信念を見たことがない。だから僕の行動はいつも君より大膽であつたし、君は懲じの理智ばかりで物事を判斷するから僕のすることが遂に分らなくなつたのだらう。僕が自分を棄て切れないといふのは佐原龍夫といふ個有名詞の所有者を棄て切れないのでなく、その信ずることを捨て切れないのだ。それも僕の信念の命ずるところで仕方がない。僕は宗教の一切の形式を認めてゐなかつたが、宗教的な人間ではあつた。だが僕の宗教の中では神とは自然の大則であつたし、精靈とは一種の電氣エネルギーの形であつたし、その上體系的にそれを纏めていくことができなかつたので、僕以外のものには役に立たずに終つた唯物的自己流の信念に過ぎなかつた。それは別とし僕の自殺はただ急に力が拔けて、これ以上自分が生きていくことが不快になつただけのことだ。新聞がまた書くことだらう。自殺の原因は神經衰弱であつたとか、失戀の結果であるとか、厭世の果であるとか。まことに一言にして要を得た原因をおしまひにちよつぴりくつゝける。くつゝけずには濟まされないであらう。自殺には原因がなくてはならないものと思つてゐる。自殺には必然性があるかも知れない。だが一言で盡きる原因などといふものは決してない。原因はあまりに無數に堆積してゐる。だからすべてをいふ代りにレデーメードの原因の一つをあてはめて置いても大差ないといふことにもならう。ただ君には少し說明を加へてみたいのだ。自殺といへは何か非常に悲劇的なことのやうに考へるのが普通だが、僕は自殺は人間が有する一つの能力だと考へてゐる。一つの發明でもあり創作でもある。自殺は再び生れることだ。無に歸るといふことは同時に無に出發することだ。さういふ理くつが君には判讀して貰へると思ふのが一つ、もう一つは君が或ひは僕の死の原

因をHやその後のことにあると考へて、君の頭を苦しめはしないかといふ心配に過ぎない。僕の自殺に若し原因といふものがあるとすれば、その原因は遠く五、六歲のときから萠芽してゐる。僕はその後二十數年、その理由をどこからも非難のうちどころのない完全なものにするため蓄積してきたやうなものだ。それはもう僕の心の中で原因などいふ特殊なものでなくなるまで成長し、僕は直ちに死に歸一する狀態に近づいてゐた。然し死を進んで慾しがつてはゐなかつた。僕は厭世家ではない。生や世に何物も求めまいとはしてゐたが、また生きて行くことはそれほど苦しいことではなかつたのだ。僕はすべてを否定したのでなくすべてを肯定したのだ。僕が君に何度もいつたやうに—そのたび君は怪しむやうに僕を見たが—もし樂天的虛無といふものがあるとしたらそれを持つてゐたらうが、決して否定的なニヒリストではない。ただ僕の肉體は實はずつと早くから生命を持ち耐へていく力を少しづゝ減じてゐた。僕が突然、命を放棄する氣になつたのにはその理由も一つある。若し僕の肉體がもつと健康であつたら僕はもつと或ひは七十歲までも八十歲までも生きられるだけ生き伸びたかも知れない。その代り僕に最近あたへられてゐたやうな一種宗教的な安神は逃げて行つたかも知れない。僕の精神史においてその半ば以上は實は世のあらゆる人を物を否定することにばかり費されてゐる。顧みて物を疑ひ人を嫌んだ心の歷史は自ら慚愧に耐へないほどである。だが最近に至つては、僕は漸く疑ふことよりも信ずることの方が遙かに賢明で眞であることに氣附いた。いひかへれば物の明るい半面を見て暗い半面を疑ふよりも、暗い半面を見てその明るい半面を信ずる方が賢くもあり神の道に沿ふた先に詰りのない道だといふことだ。漸く僕がここに生きる術を見出した時に、僕の肉體は最早力乏しく、この光たとひ自然の死を待つとしたところで、大して役に立つ身體でないといふ自信に到達してゐた。ここにも君は悲劇を感じてはならない。僕の考へによれば、肉體は僕のいふところの精靈の容器であつて、容器の衰弱は最早その效果の解消であつた、精靈は新なる容器を求めて出發すべき理由を持つたといふことであることだ。その精靈とは前述のエネルギーだから、エネルギー不滅の法則に從つてただその現象を變化していくに過ぎない。いやもうこのひよつとしたら獨りよがりかも知れない單純な哲學はやめよ

う。でも何かといへばとかく理窟になつて、よく君に悪癖だと揶揄されたのも實際僕の最も愛するものが眞理であつたからだ。眞理といふ言葉を臆面もなく使ふのは氣恥しいことで、僕等が輩の及追し得るやうな竝大低のものでないことはよく知つてゐる。それでも僕が日夜欲して止まなかつたものは眞理であるといふに嘘偽りはない。次に僕の愛したのは仕事だ。仕事は自分を忘れさせて呉れたからだ。第三に僕は睡眠を愛した 睡眠は僕の疲れを癒して呉れたから。第四に僕は酒を愛した。酒は僕を元氣にして呉れたから。第五に僕は異性を愛した。異性には魅力があつたから。さうしてその凡てが最初の眞理を求めることに歸着してくることを僕は弁解でなく斷ずる。僕は一生を顧みて遂に、名利榮達といつた風のものだけは慾しなかつたといひ得ることに微かな喜びを感ずる。僕はそれをこそ「知つた」といひ得るからだ。かりに何かの偶然で僕が巨額の金錢や名譽らしいものを與へられたとしても、それだけには決して執着することがなかつたであらう。それらのはかなさだけは僕は充分に悟つてゐた。住むは雨露をしのぐを以て足る。食ふは飢えを補ふを以て足る。着るは以て寒を避くれば足る。さうした賢者の境地に果して徹底し得たかは疑ふが、それでも衣食住のことにさほど執着しなかつたであらうことは自らの心に訊ねて答ふるに躊躇しない。同時に、だから無暗な潔癖も持つてゐなかつたのは君が時に不審の眼で見た通りだ。つまりそんなものはどうでもよかつたのだ それよりも僕の執着は正直いつて最後にあげた異性のことだ。僕の一生は別の面からいへば、知らないこと解らないことを新しく求めて生きた一生ともいへる。さうしてこの異性だけが僕の最も大きな未知の世界として未だに殘つたまゝ僕はもう人生を辭退する。こゝ一二年の僕といふものはこの最後の未知のものに對する關心で一杯であつた。時には我ながら淺ましいと思ふほどであつた。往來で見かける一人一人の女、それが小學校一年生の描いたクレヨン畫のやうなお孃さんであつても僕の興を惹いた。女とは何であらう。女は男と異つた人間であらうか。どこが異ふのであらうか。僕はそんな事ばかり考へてゐた未だに遂にそれは分らない。その前に僕はやはり本能に負けて、最後には最も原始的な動物的な屈服で女性の中に溺れてしまつた。君は笑ふかも知れない。いや君は笑つた。君は僕をバカだといつた。僕もバカだと思ふ。だ

がバカだからといつて君の憎悪や輕蔑を受けるには當らないだらうと思ふ。だがこの話も後に讓らう。それよりも僕の手記を書く目的は、一人の人間がどうして自殺する心になり得るものかといふことだ。またそれこそ僕の後に生き僕の手記に觸れることのある少數の人々のためにも意味あることだらう。一人が何故自ら死ぬ氣になるか、それは先づ人は何故生きていく氣になるかといふ問題に還元される。僕がよく日常生活の手近な問題からは遠い、土の話とか空の話とかをすると 君は屢々、そんな事を考へて何の役に立つかといつた。その「何の役に立つか」といふ言葉の中に大きな祕密が含まれてゐる。君はどういふ意味で「役に立つ」といふ言葉を考へてゐたか知らないが、たとへば帽子が欲しい、その帽子をあがなふに足る金を持合せてゐたとする。その時その金は帽子を得るために役に立つのだ。さういふ意味の範圍においては、僕の考へてゐることは、つまり眞理を求めるために役に立つたのだ。だが、それでは眞理なんか求めて何の役に立つかといふならば、眞理は方便ではない、それは究極の目的でありそれと交換する何物もないと答へざるを得ない。つまりお互ひに欲しいものを欲してゐただけで君の欲してゐたやうなものにとつて僕の考へてゐたことは何の役にも立たなかつたと同時に、僕にとつては君が役に立つと思つてゐたことは役に立たなかつたのだ。人間がだゞら長く生き伸びるためには、迷ひか煩惱か、或ひは徹底した信念かがなくてはならない。換言すれば僕がこの先の生命に何の未練もなくなつたといふことはそのどれもがなく又は不足で、生きてゐたところで精々（偶然や冒險を含めたとして）この程度のものだといふ見透しだけが殘つたことだ。勿論まぜた、もつと正確にいへば概念的に多くを望み過ぎた觀念の言分である。だが、先輩は僕に教へた。賢明であれと。煩惱も信仰も持てずに先の先まで見透す賢明になつたら（そんなものは賢明でないといふかも知れぬが）彼等の尊重してゐる命さへも尊重し難くなる。生命に魅力がなくなるからだ 僕は周圍の人を見渡す。どこに生きれば生きるほど價値があるといふ人間がゐるだらう。ちようど僕の二倍ほど生きてゐる人が、かりにつまらない煩惱や日常茶飯事のために喜怒哀樂を浪費して、顏色を變へたり口汚く罵つたり愚痴を並べたりしてゐるのを見ると、自分がその年になるまで生きることのつまらなさを感じな

いでゐられるだらうか。或る人の言葉であつたが、人はいくら年をとつても眞の老人になる人は少ない。みな六十幾つになつても老人になり切れずに死んでいく。眞に老人になる人は僅かの人で、然も三十を越す幾何かの年齢で最早そこに達してゐる人も稀にはあると。全くそんなものだ。人生は知るといふことの究まるに從つて魅力を減じていく。あとは道があるだけだ。或ひはまた他の人間のための義務があるだけだ。不幸にして僕はそれ等を負ふ力がなかつたゝめに今こゝで簡單に生命と別れやうとしてゐる。だから何の未練もないのだ。卑怯だとも思はない。僕の役割はこれだけであつたので、舞臺では與へられただけの役はちやんと盡し、科目もこの手記を以て最後とする。では、何故そんなに早く僕は生を知つてしまはなければならなかつたのだらう。僕は不幸であつたからだ。否、その不幸を恰も食物の如く咀嚼する癖が與へられてゐたといふことだ。これは宿命的な運命的なこととといはざるを得ない。僕は一つの不幸を味はつて、二度と同じ苦しみや過ちや失望の繰返しをすまいと心掛けた。それが僕の心を月日と共に灰色に塗りつぶしていく過程であつたといつてもよい。だから僕一個人の死の意味は何の悲劇でもない。僕の死には涙がないのだ。僕はここに來るため生きてきたので、精神史的にのみいへばもう自然死に近い。單なる思付きや浮氣で死ねるやうになつてゐた。君には解るだらうか。僕は母親を知らないことを悲しんだこともあるが、またそのお蔭で母を悲しませたり母に不孝をしたりすることもなく過せることを喜んだ。また子供に向つた母だけにみるあの盲目的な溺愛といふものを知らず、僕の受けたものはみな事務的な愛情の形式または無關心、しばしばそれ以上の憎惡や輕蔑であつたから、僕は自分では溺愛といふものを持たずにこの短い一生を過すことができた。それが幸であつたか不幸であつたかは計算することができないが、とにかく人より理性的に心の浪費を節約して生きることができただけは確かだ。初めから知らない母のことは結局さして苦痛ではなかつた。それよりも父から受けた意志のある愛情の方が、少しでも覺えのあるだけ心惜しい。それも幼い頃の儚い夢のやうな記憶で、輪郭もしかとはとれないくらゐのものだが、何か氣の弱つたとき強い打撃を受けた時、崩折れやうとする心情の隙間へしみじみ甦つてくるのは父の面影である。父は子供心にはむしろおそろしい

人であつた。母が父を棄てゝ去つたのも餘りに父の我が強く、情を弁へない人であつたからだ、と或る時、大阪で兄の身近の人から何かのことで洩れ聞いたことがある或ひはそんな一面があつたかも知れない。僕の記憶する限りでも相當頑固一徹で僕はいはゆる硬教育を施された然しその半面には優しい情愛を感ずることができたのを思ふと、父も母を失つてから孤獨に殘つた僕と妹へ責任と愛情を顧みたのであらう。それにしても僕の母といふのは大阪の兄の母とはちがつて、その父の無情や頑固さに勝手に惚れて、同じ理由で去つていつたといふのだから、どうせ浮薄な流れ者の心しかもつてゐなかつたのにちがひない。父が亡くなつてから後の見も知らぬ親戚から親戚への轉々たる成長期に至つては他人の間に伏寢してゐたのと何等變るところはない。僅かに大阪の兄のことを善良な人として思ひ出し得るくらゐだが、それとて周圍の冷たい視線に圍まれてゐたので樂しい時期では決してなかつた。僕はふと今想起するが、君がいつか屋臺おでん屋の娘に惚れて、その娘が兩親もなく逆境に育つたといふのに、ひがんだところがないといつて無暗に感心してゐたことがあつた。だが、眞に頼るべき人間を持たないものは物事と爭はないのが一番利巧なことだといふことを早くから覺えてしまふものだ。それが君達には素直さや從順として見える。然しその内心は實に冷え切つた無表情なものだ。僕はあの娘の中にも自分の少年時代の類を見て物悲しくなつたことであつた。だから僕の心には、自分のやうな境遇に生れたものは、人の同情や義務や責任や善良を食ひものにして、世の弱點に乘じて身を守ることが當然許されてゐるのだと考へる習慣がついてゐた。道義的にいへば、それは職を乞ふてなほ與へられぬものは盗みをする權利があるといふに同斷である。僕の無抵抗、長じては人に對する寛大ともなり冷淡ともなつた沈默の不道德は、この不逞な一種の人生觀から出てきてゐる。普通ならば小學校で教育も終りとなつたであらうのに、幸か不幸か僕は伯父の手で高等學校までの教育を授けられた。これは伯父にとつては確かに不幸であつた。何故ならば、僕は教育によつて自分の無意識に體驗した人生觀へ理論の燒刃を附けることを覺えたからだ。さうして漸く僕は自分の立場を主張し、或時は烈しい反逆をいふことも覺えた。伯父と喧嘩をして中途に退學しなければならなかつたのもそのためだ。然し反逆によつて

僕は新しい幸福を獲ち得ることもできなかつた。反逆は單に一つの不幸に耐へられなくなつた時の爆發的な跳躍で それを蹴つて渡つた彼岸にはまた彼岸の災禍があるつまり不幸といふものは外にあるのでなく自分の身についてゐるもので、何處へ逃げてもついてくる影法師のやうなものだといふことをやがて僕は悟つた。僕は心内に不幸の原因を探つてはそれを自分で一つ一つ自殺させていつた。それは一種の不感症狀を自己内に作ることでもあつたが、また佛教的な解脱を欲する道でもあつたのだ。さうして僕の心が求めることを知らない靜觀と親しんでいくに從つて外界には太陽がなくなり常住の曇り、自覺的な不幸といふ影がなくなると同時に灰色の虚無觀が單調な呟きを僕に聞かせるのであつた。生きることの魅力がなくなることをこれで君は分るだらうか。

實は—いつてもいいだらう—この手記は君が僕をバカだといつた時から書き始めてゐる。まさか君がバカだといつたから僕が死ぬ氣になつたのではない。君にしてもバカだといつたため僕が死ぬとは思ひもよらないだらうだがあのバカは實に多くのことを意味してゐた。また結論としてあんな強いバカの一言は世にさう澤山ないだらう。僕は君を終始敬愛してゐた。何故ならば君は僕にないものを持つてゐたからだ。たとへば自分を度外視した社交性、不潔な動機のない順應性、明るさ、寛容、平和性等。また君も僕を尊重して呉れた。君が僕の唯一人の親友だとはいへないが、君は最後の僕の親友ではあつたさうしてザラには人を輕蔑する言葉を吐かなかつたことも確かだ。それだけに僕は君の怒氣にうたれたといへる然しながら今こゝにくどくどと述べ立てたやうに僕の自殺への準備は心にも身體にもすつかりとゝのつてゐたしとりわけ最近僕の胸は—君は氣附かなかつたかも知れぬが僕が肺を患つてゐるのはもうかなり長くなる—悪くなつてゐた。羽毛一本でゞも脊後から突かれたら穴へ落ちこむ姿勢だつた。そこへ君の一言がきたのだ だからやはり動機になつたといはねばならぬ。悪いことには僕もまたそれにひたと同感してしまつた。突然力が抜けた。僕は安神したやうな腰の抜け方で、もう生きるのが否應なく面倒になつてしまつたのだ、然しHのことは氣にかゝつてゐる。あれから初めて昨日Hに逢つた 僕はそんなに無責任な男ではないつもりだつた。ところがHは男の責任とか無責任とかを超絶したあらゆるものを受けいれる不

平も不滿もない受容性に生きてゐる。批判癖を捨て切れない僕等には阿呆とも白痴とも見ることができよう。然し僕はあんな美しいものを見たことがない。理窟では勝てない。その前では僕のニヒリスムなんか纏戸物のかけらほどの値うちもなかつた。電話一つでいふ通りに出てきた彼女は、僕の當日の盲目性が嘘でなかつたと同時に最早もとの無情にかへつてしまつたと告白しても、默つて「はい」と肯いた以外に何もない。僕は涙がこぼれてきた。ゆるして呉れといつた。Hは僕の髪を撫でゝゐた。落着いた男は次の野心の坩堝のやうなものだが、じたばたしない女は直ちに女神のやうな氣がする。何といふ無思想の虚無であらう。それは論理の存在ではない。存在自體なのだ。いま幸うじて僕が僕にゆるせるのはあの星ケ浦での狂氣のやうな一瞬の愛戀が僕の意志に出發せず、眼に見えぬ抗し難い力で行はれたといふことだ。かういふところに僕は一つの宗教をさへみる。「ちよつとその邊を歩かう」といつた初對面の女が一緒についてくるといふことなど、僕でも今は到底事實として信じられない。否その前に僕は彼女を十數年つれそつた夫婦のやうに知つてゐる氣がした。二三歩離れて松林の間を縫ひ海岸に降りるまで、僕は最早何等强制的な意志は示さなかつたのだが、彼女は伏目になつたまゝ溫順な妻と等しい姿でついてきた。僕はあの白々しい晝の光を見つゝ岩蔭で行はれた狂人のやうな行爲を「どうして君は默つてゐたんだ」と昨日きいてみた。彼女がちらりと怨めしいといへばいへる詰るやうな視線をみせたのは後にも先にもその時だけである。だが結局彼女は默つてゐた。僕とてそれ以上そんなバカなことを追及できたものではない。それは實は僕自身に對する質問なのだ。彼女が別に愚鈍な女なんかでないことは、それとなく聞いた課長の家での女中ぶりでも察せられる。だが僕はまた悪いことに愛戀のはかなきを知つてゐるし、僕自身の女に滿足を與へてゐられない無關心性も知つてゐる。なほ肝要なことは僕が命にさへも執着のないことを省みてゐたことだ。そんな夫をもつて彼女がどうして幸福であり得やう。若し彼女が僕の彼女にぶつけた行爲のために悶々として今後苦惱に陷ることになりはしないかとそれのみが心配である。僕自身の自殺はまことに我ながら無情なことだが、この戀愛のためではない。むしろ君のバカのためかも知れない。僕は脆くも僕をこの弱力にまで突いた君を憎みもし、また感

謝もする。然しそれとて君の責任でなく、君に對して勝手な信用を傾けつくし、無用意な脅をさらしてゐた僕の罪だ。また君の言葉は眞實であつたのだ。僕はあんなことをする權利はなかつたのに、本能的に自分を絶對のエゴに立歸らせ然も次の瞬間放棄するといふ、派手な芝居をうつてしまつた。君には罪はない。僕はこの故に君にあてゝ手記を書いた。ただもう一つ僕は君を、もう少し知らぬことを知つてみるだけ生きさせて呉れなかつた下手人として微かに怒つてゐる。その怒りを感じてゐるから怒る人の常のやうに僕はきつと君には本當のことをいつてしまふにちがひないと思つたからだ。あゝ、こんな自己分裂の苦しさ、二重性三重性もこれで終る。僕はほとほと自分の生きることにも信用が置けなくなつた。では、君も少しは眞理のためにつくしてくれるやうに。

清水良輔學兄　　佐原龍夫

僕はもうただ暗然としたが、僕が譯も分らず發した一言の恐ろしさと同時に、彼の死はもちろん僕のその言葉でもなく、また彼の病身でもなく、といつて彼のいふ自然死でもなく、佐原龍夫流のニヒリスムが一片のHといふ女の無教養な—彼の言葉に從へば—責任も無責任も超絶した受容性、もしくは本能的な存在自體といふものに、敗れてしまつたからだと考へる。といふのは彼の命を支へてゐた唯一本の虚無といふ支柱を、優しくさらはれたといふことである。尤もそれは後に考へたことであり、その敗北を彼の手記が白狀してゐると斷定してのことである。僕はその後のHを知りたいと思つてゐる。

一農夫

青木實

今日は縣城の市場にゆく日だ。孟が眠を覺ましたときは、まだ外は昨夜臥に就いたときと同じやうな暗さであつた。雨ではないかと、中庭に出てみた。空には細い月が傾いて、降るやうな星空であつた。

眠をこすりこすり大きな欠伸をしてから、もう一度寢床に轉がつた。街へ出たら、砂糖と、石油と、蠟燭とそれから杏兒の眼藥を買つて來なくては……と昨夜寢しなに女房の干氏と語り合つたことを頭の中で思ひ返してみるのであつた。

地蟲が一疋寢床の下の炕の中で鳴きつゞけてゐる。まだ夜明けには間遠い月の在りどであつたが、街へ出る朝といふ意識が、もう一度眠りに就かうとするのを邪魔した。昨日は野良を早くきり上げると、家中總掛りで中庭に筵を擴げ、積み上げた包米を俵に積めこんだ。約二石ほどあつた。

晩飯が濟むと、明日は街へ出るのだといふのを理由に直き床に就いてしまつたのだ……。

孟は眠れないまゝに、昨日村の茶店で村々を行商して歩く小間物商人から聽いた話を思ひ出した。

同じ行商人の一人が、ある縣の縣城近くの街道を歩いてゐると、農夫風の追剝ぎに出會つた。追剝ぎは商人が腹に卷きつけた金の中から、勘定して幾らかを拔きとると、大慌てに、縣城の方に向つて逃げていつた。商人は元來た道に戻らうかとも思つたが、部落には遠いし、それに追剝ぎの追剝ぎがイタに就かぬ容子といひ、再び襲つてくるとも考へられないのでとに角縣城へ急いだ。

城門を入つてからどこかその邊の茶店で幾ら取られたのか調べてみようと思つたが、うつかり質の悪いのに見られてまた附け狙はれてもと考へ直し、いつも泊りつけの客棧に急いだ。縣公署の前を通り縋つたとき、門内から出てきた農夫風の男が彼と擦れ違ふとバタバタと驅け出したので、フト記憶を巡らすと、先刻の追剝ぎに違ひなかつた。商人は無意識に「泥棒！」と叫んで追ひかけた。繁華な町中のことゝて、直ぐ追剝ぎは、捕まつた。

迫剝ぎは、矢張り農夫であつた。今日が期日の稅金に迫はれ、拂へないときの所罰の恐ろしさから、その多の食料に殘した小米の中から幾らかを街に賣りに出た。けれどもまだ稅金額には、ほんの少し不足した。そこで街道に出、商人を襲つたのであつた。

行商人は所持金を調べた。なるほど拔かれたのは一兩に足りない少額の金子であつた。稅金の不足金以外一文も餘計に盜まれてはゐなかつたといふ。

話好きで、話のうまい行商人はその友達の體驗した話を面白く店中のものにきこへるやうに話してきかせた。

孟は今期の稅金も納めてゐた。「孝順父母不怕天。封上錢糧不怕官」（親孝行はお天道樣も恐くない、納稅すればお上も恐くない）彼は行商人の話に思ひきり笑ふことが出來た。だが笑つた後で、なんといふことなくその追剝ぎになつた農夫がどこかその邊にウロウロしてゐさうな氣がした。

うとうとしてゐる內に、竈の中の木のハゼル音で眼が覺めた。干氏は、もう竈を焚きつけ、鵝鳥どもを、巢から放つてゐた。

まだ日の昇らない一刷毛霞が朝空に殘つた時刻だ。

孟は彼が小作をしてゐる地主の家へ出かけた。昨日三頭立ての大車を貸して賃ふやう話してある。馬は二頭だけでいゝのだ。孟のところにだつて一頭位の馬はある。借りてくると、馬どもに高粱の莖を輪切りにした飼料を與へてから、自分の朝飯にかゝつた。

干氏が竈から鉢に移してきた粟粥を啜りながら、黃瓜漬をかぢつた。目を覺まして先刻から啼いてゐた第五子に乳房を含ませて、干氏は街へ行つての買物に對する註文を述べたてた。

「買物はそれだけにして、あとは現金でしつかり握つてきておくれ。今度呉服商人がきたら、この子の着物をどうしても一枚作つてやりたいんだから、可哀さうに生れてお誕生もすぎたつていふのに、みんな上の子たちのお古ばかりで、まだ一度も新しい着物を着てゐないんだから……」

孟は別に返事をしない。默つてゐるのが返事だつた。彼は否定するときだけに「うんにや」と一言いつた。

「車貸りたら禮もせにやならんが……」

「なんだい、つひお盆にお菓子をもつてつたばかしぢやないか、貧乏人が一々そんな眞似してたら乾上つて

しまふぢやないか！」

「旦那はいゝが、奧さまがうるさいんでな」

孟家屯といふこの部落は、孟の先祖が開拓の第一の鍬を下ろした土だ。大きな自作農だつた彼の家も、旱害や水害、恐ろしい馬賊どもの蹂躪で、彼の父の代に土地の大半は手放してしまつた。それを手に入れたといふのはこの地方の軍閥と姻戚關係にあつた隣村の陶といふ家で今日ではそこの小作をやり、傍ら少しばかしの自分の土地から、僅かな包米と小米の收穫を上げてゐるのであつた。

「お前ら乘つてくんか、よしよし」

馬車の周りに集つて、父の出發を待つてゐた子供らは俄をすつかり積み終へると、途中まで乘せて呉れと口々にせがんだ。

十二を頭に、第一子から四子までを、俄の上に抱き上げた。子供たちは、小さい手を擧げ、父や母を見下して喜びの聲を上げた。

馬車につながれた三頭の馬どもは、蹄を鳴らし、首を垂れまだまだ秣が欲しさうであつた。

孟は長い煙管で煙草を吹かし、茶をかぶかぶと二、三杯飲み終ると、やつと尻を上げた。

「さア、出かけるか！」

「途中休まんで、酒は飲みなさるなよ。明日の晩は買つておくから、明るい內に歸つて來るやうにね」

うるさく繰り返す女房の言葉を、煙草の煙と一緒に聞き流し乍ら、手綱を握つた。

馬は前足に力を籠め、肩の筋肉を突き出した。さういふ第一歩のアガキをすると馬車は滑かに動き出した。馬車が動き出したところで、孟は一頭づゝの脊に輕く鞭をくれた。すると、電流が通じた機械のやうに、馬車全體が停滯をしらない進行形をとつた。

街道へ出るまでの道は、雨が降ると一筋の川になる、石塊の多い川底道だ。畑には農夫たちが働いてゐる。高粱の收穫がまだ續けられてゐたけれど、もう刈りとられた跡の方が多かつた。そのまゝ寒い冬に入つてもいゝ薄寒い風景である。

やがて道は街道に出た。こゝの縣城につゞく平坦な道は、嘗て孟も賦役に出され、近くの山麓から土と、岩石を切り崩してきて造つた道だ。多くの喜びをもたない子供らは、馬車に乘せられたことに無上の歡喜を味つてゐたが、街道より低く二本の柳の老樹がもつれるやう

にくねつて枝を繁らしてゐるところまでくると、馬車の上から下ろされた。

「さア、いつものところだ。こゝからは紅鬚子が出るでな」

子供たちは四人がよろめくやうに固く寄り添ひ、父の馬車が埃りを上げて消へてゆくのを見送つた。

正午近く、縣城の三つ手前の村に入ると、道傍の茶店に入つた。楡の木蔭に馬を憩はせ秣を與へた。秋の日を浴びて馬どもはからだをぢつと汗ばめてゐた。

孟は茶店に入ると、持參の乾餅を食べ始めた。同じ卓子の男たちの飲んでゐる酒の匂ひが、強く刺激したが、餘分な金はなかつた。街に入るまでの辛棒だ。さう思つてぐッと咽喉の鳴るのを押さへた。

男たちは、匪賊の動勢を噂さしてゐた。縣城の向ふの山麓に蟠居してゐる一隊が、數日前縣城近くを襲うたといふ。

「で、なんかね街はあぶないことはないかね」

孟は訊ねた。

「うん、日本の軍隊が入つたさうだ……なあに、もう心配することはあるめえ」

「だが、氣をつけるに越したことはないぜ」

茶店の主人が言つた。

一休みすると、そこを出發した。

「さあもう一息だぞ」

馬どもに聲を懸けると、鞭をかざした。乾き〻つた道は塵のやうな埃りを上げた。塵の中から馬の鈴が鳴つた。

縣城に着いたのは三時近かつた。古びた土壁の上に、延びきつた草が萎枯れ始め風の吹くまゝに搖れてゐた。

城門を入ると、顔見知りの接車的が、群衆の中から飛び出してきた。

「やア……今年の最初の荷だね」

「うん、道が悪いですつかり疲れただ。泊めて貰へるか」

「まだまだ出廻りには早いで、暇なもんさ」

接車的は馬車を挽いた泊り客の農民を一人搦まへれば車店主から十錢もらへる。車店といふのは、穀物を馬車で運び出す農民が、馬と一緒に一夜の宿とする旅籠屋であつた。朝晩の食事付で一圓、馬糧は普通農夫持であつたが、孟の泊りつけのところはそれを勉强して馬糧付であつた。孟は彼の小作してゐる陶家の穀物を運んでよく街へ出る。

市場は三時に閉ふので、接車的に別れるとまた馬車を急がした。

彼の積荷は思つたより値良く賣れた。現金を握ると、空車を挽いて元氣に市場の門を出た。蔬は値よく賣れるときいてゐたので、來年は包米の代りに蔬を植えつけてみるつもりでゐたが、今日市場の話では稅金も包米や大豆の五倍もするときかされ、思ひとまつた。瓜の畠には瓜を植えたがいゝ、孟は大罪から免かれたやうに沁み沁みさう思つた。

車店には、先刻の接車的が歸つてゐた。大車から馬を引き放すと、直ぐ秣に水を交ぜて與へてくれた。馬はうるさく腹の邊りにまとひつく蠅に、皮膚をふるはせ、頻りに尻毛を振りながら、いかにもやつとこれで一日の勤めを果しましたわいと、いつた樣子にみへた。

孟が、洗面器の水で顔を洗ひ、濡れ手拭で脊筋をさッと拭つてから、一本高粱酒をつけて貰ひ飯をすました頃には、室内はすつかり暗くなつてゐた。

酒が利いてしばらくウトウトと睡りこけたが、ふと睡を覺ますと、大きな欠伸をしてから立上つた。氣がつくと、手も顔も首筋もむやみにかゆいので、洋火の明りで部屋の中を見廻すと、ブーンとうなりを立てた蚊が頰に當つた。

いつも、もつと寒くなつた出廻期にしかこゝへも泊らぬので、街でも蚊がゐるとは知らなかつた。ポリポリ掻き乍ら、外に出た。

夜になつたら、人一人通らぬ彼の村とちがつて、燈が明るく、外に出てゐる人も晝間より目立つた。彼は、蚊に責められるんでは今からは睡れぬし、今夜の内に買物をすまして、明朝早く歸途につかうと腹をきめた。

直ぐ筋向ひの藥房で、杏兒の眼藥を買つた。良く效く藥だといつて、細長い小さな紙箱に入れたのをくれたが三十錢もとられたには驚いた。こんな高いのだもの杏兒の眞ッ赤な眼、朝起きると湯水で洗はぬことには、開かない眼も直ぐ癒つてしまふのに違ひない。孟は大切に胸の隱しに貯つた。

さて、まだ石油と、砂糖と、蠟燭とを買はなくてはならない。飯をくふとき飲んだ酒はすつかり醒めてしまつてゐた。孟は飯屋を見つけると、酒を一瓶だけつけさせた。久しぶりに飲む酒は腹の底まで沁み渡り、春風のやうに彼の心を和らげた。

一杯機嫌で雜貨店で砂糖を買ふと、蠟燭店にいつた。この街に一軒しかない大きな蠟燭店には、蠟燭に龍が卷きついてゐる大きな招牌が軒から提つてゐた。その近所一帶人通りが繁くいつにない賑かさだつた。

孟が店に入らうとすると、入口にゐた人影に聲をかけられた。

「どこへ行くのだ。」

孟はをかしなことを訊くものだと思つた。暗がりにぢつと透かしてみると兵隊らしかつた。彼は多年父祖の代から植えつけられた見聞から、兵隊ぐらゐ嫌ひなものはなかつた。だから、なんだお前達には別に用はないよ。俺は善良な一農夫で、今この店へ蠟燭を買ひに來ただけだ。さう自答しながら、默つてスタスタ店に入りかけた。店の薄暗い明りの中には、無數の人影が動き、むつと皮革と汗の臭ひが鼻にきた。

兵隊たちの略奪？彼はふとたゞならぬ氣配をみてとり思はず足が停つた。

「おい、コラツ！」

その無數の人影の中から、さう強く呼びかけられると、孟はびつくりして無中にとび出した。後から追ひかけてくる靴の音がした。一散に駈け出した。人に突き邊り、危ふく自分も倒れさうになり乍ら、走つた。呼吸が切れた。

「ズズン！」

銃聲が耳の邊を走つた。孟は、ハツと肩をすくめた。スルト後ろから追ひかけてきた二人の靴音が彼の前部に周り、胸先きに銃劍を突きつけた。孟はペタリと土の上に膝を折つてしまつた。

その翌日、夜になつても孟は家に歸つて來なかつた。于氏は一人胸を傷めた。近所の人達が心配をしてやつてきた。その一人は、なんでも縣城の近くまでに匪賊が來襲したといふ噂さがあると傳へた。孟が茶店できいた噂さが、この日やうやく村に傳はつてきたのだ。

一人が言つた。けれど匪賊の出るのは、定つて、縣城の向ふ側なのだから、まさか孟がやられたのではあるまい。また襲つたとしても、命はとらぬだらうし、孟を、孟みたいな窮人を人質にはもつてゆくまい。きつと孟は身體を惡くしたかどうかして街に泊つてゐるに違ひない。

この說に、みんな同感であつた。で結局、明朝にはきつと歸つてくるであらうが、もし歸つて來ないやうだつたら村から男二人縣城まで見にやることに定つた。

その夜もたうとう歸らなかつた。家をめぐり降るやうに聞へる蟲たちの聲をきゝ乍ら、于氏は眠りもせず、孟の歸宅をまつた。蟲達の淋しい啼き聲を破り賑かな馬車の鈴の音 車輪の響が現はれるのを、ぢツと待ち明かした。

よく晴れた秋の朝はしづかに明け放つた。まるで世の中になんの不幸もないかのやうに——。孟は遂に消へた人のやうに、やはり街道に姿を現はさなかつた。街道まで出迎へにいつた子供たちも、正午近く泣きながら戻つてきた。

午後、村から二人の男が縣城に向つて出發した。

縣城に著くと、直ぐ孟のいつも泊る車店に行つた。車店の庭には、孟の挽いてきた大車もそのまゝであつたし三頭の馬どももひどく平穩な樣子に秣を食べてゐた。

主人は、村から誰か出てくるのを待ち兼てゐたのだ。

「間違ひなんだ。莫迦々々しい一寸した間違ひなんだ」

主人の語るところに依れば、最近、山麓に蟠居する匪賊の一帶が縣城の近くまで來襲したので、近く縣城を襲擊するであらうといふ評判が立つた。日滿軍隊は、縣城に多數出動してきた。ところが、城內で一人匪賊の密偵が捕まつた。密偵の自白で、街の蠟燭問屋の主人も、もと馬賊の出で、通匪してゐることが明瞭になり、軍隊の搜査するところとなつた。警戒中のその夜、偶然孟が店に蠟燭を買ひにきた。そこまではなんでもなかつたのだが、兵隊に聲をかけられて逃げ出した。そのために、こいつ怪しいとにらまれ、留置されたまゝ未だに釋放されない。——といふ大略の話であつた。

村の男たち二人は、兵隊と聽くと、がつかりした。これは困つたことになつたと、今更らのやうに自分たちの使命のたゞごとでは濟みさうもないことを知つた。

車店主につき添はれ、男たちは軍隊へ行つた。

「なあに、自分が一人で話にいつてもいゝのだが、誰か村の人が證人になつてくれぬと困るんで、それで今まで、村からくるのを待つてゐたのさ。よくある話だ。直ぐ釋放されるから、ちつとも心配したことはないよ」

車店主は、二人の男の顏色までが變つたのに驚いて、からいふことに慣れた人のやうに言つた。實際また軍隊へ行つても、彼一人で釋明してくれた。

二人の男たちは、字を書いたものに、母印を押さゝれた。男たちは無智で　今は後難を恐れる氣もちで一ぱいだつた。

引受書が完成すると孟は釋放されることになつた。

やがて兵士に附き添はれ、孟が營内の奥の方から連れてこられた。

頰には髯がボウボウと延び、脊はかゞめるやうにしてゐたが、顏を上にあげてなぜか空ろな眼をしてゐた。

二人の男たちは、幾度となく頭を下げ、そこを引下ると、孟の腕をとるやうにして門外へ出た。

孟は相變らず、ぼんやりとして口をきかない。車店主が、怒鳴つた。

「おい、しつかりしないか！」

街中は、物賣りが間延びた呼び聲を流して歩く、うらゝかな小春日和だ。

孟はまたゝきもせず眞つ蒼な空を仰ぎ、俄かに歩みをとめると兩手をつき出し

「杏兒の藥！杏兒の藥！」

と弱々しくつぶやいた。二人の男たちは、呆然とした。

「―かあいさうに少し氣がどうかしたらしいぞ」

車店主は、ぢつと孟の眼をみつめた。

夜の話

秋原勝二

昨年の秋のことだつた。私は友人M君を訪問にわざわざ吉林まで三日の旅をしたことがある。目的は、M君の齡ひ三十にして營まれた新家庭のお祝ひの爲であつた。私は彼が大して狂喜してゐぬことは知つてゐたが、呢懇にしてゐた某夫妻の祝ひの品と、私が漸く買求めた林檎大籠一つ、麥酒一打、それに私の日用品を入れた手提げといふいでたちで、大連を發つたのである。何でも十一月のはじめだつた。祭日と日曜の休みが二日續く前日で驛は押すな押すなの混雜だつた。冷度私が驛についた時既に午後八時の列車に乘れないことは判つた。(私は一時間も前に行つたのに)で、實に重い荷物を兩手にぶらさげたまゝ、次の午後九時發の改札まで、その人混みの中で立ち盡す破目に陷つた。出發のこの一時間の差は、吉林着の時刻をがらりと變へてしまつた。つまり、新京に於ける連絡の都合で、午前十時着は、午後五時半に引きのばされてしまつたのである。M君との行き違ひは既にその時にはじまつてゐた。

出發の時の靜かな天候は、私らの列車が大連を發した前後から全滿的に急變したものらしかつた。私がそれを知つたのは金州に停車した時である。列車が停ると早速窓をあけてみた。おもては既に大風の世界で、冷雨はとびちり、樹を濡らし、プラットホームにしみ徹つてゐたおそらくは、梢に僅か殘つてゐた枯れ葉なども、忽ち夜の中に消えちつたものであらう。冬が來た――それはひとしく私らの心にしみた。

案の定、夜更けて、大石橋で私は雪をみ、早朝、奉天では既に零下十度といふ寒さに包まれたのである。

實の所、私は秋の服裝で出かけたのだが、これがまた吉林で私にどんなに禍ひしたことか。奉天を過ぎた頃、昨夜の風雪で、垂れた電線や、まだ青い葉に積んだ雪の重さで、折れさうになつた白楊をみたが、それからは一路、果しない雪の原ばかりであつた。

午後、新京で乘りかへ、私は愈々京圖線の人となつた私はそれから始めて、車中長銃を携へた警乘員や沿線

の小驛の樣子にひとしほしみ入るものに打たれてゐた。或る若い男が警乘員にしきりと念を押してゐる。

「あゝ、もう新京と吉林の間など心配ないですよ」

さういはれ、若い男は安心して、それからいろいろ雜談してゐたが警乘員のこんな言葉はふと、私の耳に殘つた。「あんたら、大連に住んでゐるなら、もうそんないことないですなア、こちらに住んでゐると、物價は高いし、不便だし、なかなかねエ……」

私は窓外を瞶つづけてゐた。ひとしきり曠原をすぎてなだらかな山ずつと以前匪襲事件のあつた土們嶺を過ぎる頃、そろそろ邊りは暮れはじめた。その日、一日、雪は大部崩れかけ、所々に紅い山がみえてゐた。その間から這ひ出す木材運びの輕便列車や、驛にある貯木場、造林試驗所などみえはじめると、この邊りの特殊な匂ひは漸く窓の中の私にまで迫つて來て、心をひくのであつた。

中央滿洲の曠原の美しさ——私は敢てかういふいひ方をする。再び出た曠原の中で私ははつきりそれをみたのだ。空のひろごり、夕映えた地平の山、邊りに充ちる香ぐはしい空氣に私は忽ち醉ひ入つた。ふと氣がつくと、もう夜は足許まで包まふとしてゐる。ハッと思ふその頃全くその頃、列車は燈ともしの吉林の街にはいつてゐた。

私はそれまで、樂觀しすぎてゐた。それでも、かう暮れては困つたと思つてゐた。M君が、うまく驛まで來てくれゝば問題ないが、若しさうでなかつたら、私は番地をあてに夜の中をさがさねばならぬ。——が、まだまだ私は安心しきつてゐた。まア、少し搜せば直ぐ判るだらう。……

ホームに下りて、私はゆつくり跨線橋を越えた。しかし、M君の姿は何處にも見當らなかつた。私は眞直ぐ車の溜りに出かけ、洋車にのつた。

「七經路（チーチンルー）」私はすまして、さういひつけたのである。

私は走り出した。私は荷物を足許と膝とに置き、車の上に仰向けになつた。車の行くにつれ、冷たい風が耳許でひやうひやうといふ。ピタピタと雪解け道を走る響。暗い中を馬車がリンリン私らを追ひ越し馭者の影だけが漸く感じられる。街の上のあの空の輝き、それは恰度、大きな湖のやう神秘な光りをいつまでもたゝえてゐた。

道を左折した時、不安がどつと押し寄せた。私はたまらなくなり、折からやつて來た一人の日本人をつかまへた　七經路をきくとやはりそちらだといふ。「代用局宅一二〇つてのは、そのどの邊でせう」「さあ？」私は出かけた。考へてみると、途中私は行きずりの中に譯もなく日本人ばかりをさがしてゐたやうだ。七經路についた時は日はトップリ暮れてしまつた。私はおどろいた。そこはさんざんの雪解けで道はひどくわるかつた。しかも漸く馬車が行き違へる程度の細道なのである。私は漸く一軒の扉を叩いた。そこでも私の問ひは、相手の首をひねらせたゞけだ。車夫は悲鳴をあげはじめた。私は苛々して怒鳴つた。再び車夫は歩きはじめたが、ものゝ二町ほどもぬかるみを行くと一軒の家の前で棍棒を下ろしてしまつた。車夫は大聲で何かを叫んだすると、うす暗い家の中から四五人の男がドヤドヤと出て來る。みるとそれは朝鮮人達。彼らは私をとりまいて、怪し氣な日本語でさかんになにかときゝはじめた。しかし、結局、そこでも埒はあかなかつた。しかし、私の不安は、そこで一つの薄氣味惡さに變りはじめた。私は出直しを決心し、たうたう驛に引き返してしまつたのである。

私は少し、くどくどしくこの小旅行のはじめから書き出して來たが。しかし、それは、その旅行記を書くためにして來たものではない。また、私が訪問する當の相手であるM君のことをこゝに書かうとした爲でもなかつた。大連に住む私が吉林までの三日ばかりの旅行記を書いた所で、それは愚にもつかぬし、またM君の極く幸せな、呑氣な新生活ぶりを語つた所で、もとよりそれも何にもならない。それはつまりそれ自體、私にそれほどの感銘をもたらすものではなかつたのである。

しかし私は、吉林に下りたその夜、卽ち、今書いたやうに、私の單に用意の粗漏から　暗い雪解け道にM君宅をさがしあぐねた　その事から、全く遇然な仕方で　些か興あることに行き當つたのである。

私はそれを書くために、たゞ、その夜の樣子を或程度ほつきりさせる必要があつたのだ。

もつとも、私は今　恰度、つれづれのまゝに讀んだ「教育」に關し、引用されたる植物上の興味ある問題から（しかし、これは既に實驗ずみだ）ふいに一つの連想に因はれたものであつた。しかしまた、もともとこの夜今木さんに遇はなかつたら、もうはじめから何事もなかつたことではある。（おや？私は言葉を追ひはじめてる）。つまり、これは、私が遇然に出會し、今頃漸く改めて思

ひ出したやうな話ではあるが、またそれは、おそまきながら、滿吏興味を持ち得ぬことではあるまいと思ふ。論より證據、私は、大變な熱中の仕方だ。

私は、泥濘と闇と土地の不案内に惱んだ道を再び今度は馬車で出かけた。あゝして吉林驛に戻つた時、私は驛の案内や、時たま待合所に這入つて來る日本人に訊ねたりもしたのだが、結局要領は得なかつたのだ。

私は同じ場所を通り、先よりも奥深く綿密に一時間餘も捜しまわつた。しかし私は再び舞ひ戻るきりなかつた。驛に歸ると私はすつかり氣がくぢけてしまつた。私は、一時間餘もいろいろな横町を根氣よく捜し廻つた馭者に、對し多すぎたと思へる賃銀を支拂つたりした。正直なところ、それは、行き暮れ、ずつと前から私を襲つてゐた餓と寒さに精根盡きた自分を些か慰める氣持も手傳つてゐたことは否めない荷物を手に餘るほど持つて來たことを、私はどんなに後悔したことか。待合所の椅子にそれを積み重ね、私は全く途方に暮れてしまつた。

私は間もなく出る新京行の終列車で歸つてしまはふかと思つた。時間はもう迫つてゐる。しかし、折角もつて來た荷物をみると私はもう全く憂鬱になつた。吉林の宿に泊らうか、新京に引き上げ、そこの宿に泊るか、それともそのまゝ大連に歸つてしまはふか、それすら、私のすつかり疲勞した精神には、自ら決着できないのだ。吉林の驛は、荷物のあづけ場さへ判らない、そして待合所に出入りするものは、殆ど、鮮人か滿人ばかりであつた。ポーターはゐたが、私は全くこの種の人間の世話をうけるのを好まぬ。薄暗い、萬事手のよく行き屆かない、何處か油斷ならぬ氣配の待合所の中で　私はたうとうぼんやりしてしまつた。

そのとき、一人の老人が、ひよつこりその待合所に姿を現した。頑丈な體驅の日本人であつた。私をおどろかしたのは、その老人が、入口に立つたときそのまゝ、私に吸ひつくやうな視線をそゝぎはじめたことである。あまり、身裝のよくない老人であつたし、それに氣づいた途端、私はハツとなつたのである。

しかし、老人は、もうゆつくりとした足どりで、私の方に近づいてゐた。

「どうしましたか？」

老人はいきなり、さう私にいつた。そしてもう此方を覗きこまんばかりの樣子である。

「いえ」

私は視線を合はせぬやうにし、急につんつんした態度をつくりはじめながらいつた。

「宿がいるんぢやないですか？」

「いえ」

私は、これもポーターだと思つた。で、横を向いたまゝ、不快さうに答へた。――迂散くさい奴め、君らのお世話になんかなるものか――。が、私は、ものゝ一分とたゝぬ中に、すつかりこの態度は變へねばならなかつた。

「何か困つてるんでせうに」

と老人。私は言外に何かを感じ、ちよつとひやりとした。が、次の瞬間　私は、ハツとして老人の顔を見直したのである。

「私を怪んでるんですね……」老人は默つて私の顔をみてゐた。「が若し、宿がいるんだつたり、道が判らなかつたりなら、おつしやい、遠慮なく、私はポーターでもないが、手をかしますよ、責任もつて……おつしやい」

私は實は、この言葉に　親切以外のものを見出だすことは困難だつた。

私らは、馬車にのつた。私としては、とにかく、急に目先がひらけたやうなものだつた。

私は土間のある薄暗い家に案内された。しかし、その前に、私がすつかり安心させられたことは、驛を出るとまもなく、老人が一軒のあまり立派ではない書籍商の前で馬車をとめたことだつた。彼は中に這入ると　一人の滿人の若者を連れ出して來た。そして、彼に、M君を呼びにやつてくれたのである。老人は、驛を出た馬車の上で明言した通りを實證してみせたのだ。つまり「私が働いてる店は、書物や、新聞を扱つてゐますから、そこに行けば配達夫が大抵の所は知つてゐる筈です……」と。

老人は　あんたは大變疲れてるやうだから、と私をとどめた。M君に迎へに來てもらふことにし、それまで、自分の所で休んで行け、といふ譯だ。實際、私は疲れてゐた。餓えてゐたし、寒かつたし、耳はジンジン凍りさうだつた、で、老人のいふ通りにした。

老人の家は、その店の極く近くの横町にあつて、彼はまた大變親切だつた。つまり私はそこで、食べ物から、酒類の饗應にまで預つたのである。

間もなく、配達夫が歸つて來て、M君夫妻の留守が知

れた。私は綴つ數日前、葉書で朝の着時時間をしらせたきりなのだから、いよいよ、その不用意が悔まれた。しかし今木さんは紙片に何かを認めて、再び若者を行かせた。どうやら、私の居所と、M君が歸つたら、こゝに來るやうにと、略圖、なども書きこんだものらしい。

「ま、Mさんが、今晩、こゝに見えなかつたとしてもいゝぢやないですか、かうなつたらゆつくりなさい、よかつたら、一諸にこゝに寢みませう……」

私は何故、かうまで自分が親切を受けたものか、間もなく判つた。つまり、私は、偶然——事實、私にとつては全く思ひがけなく——今木さんの心に、或る生々しい記憶を呼びさましてゐたものだ。少しして今木さんはこんな話をしだした。

「私は時々、ぶらぶら、停車場のあたりに出かけるのが好きでして」と、それは非常に落ちついた聲だつた。「たゞ、何といふか、習慣のやうに、ほんとに時々、あの待合所をのぞくのですがね、樂しみといひますか、一つの町に永く住むと、そんな氣持になるのかもしれません停車場は大てい町を出たりする人ばかりで、何といふか、いろいろな匂ひをもつてるものですからね、それが何となく好きで時々、思ひ出した樣にでかけるのです、老人の趣味ですね」

今木さんは、日本を出たのは二十五六で、それからウラヂオに十三年、ニコリスクに十六年、そしてこの吉林に來てから、もう十年になるとのことだつた。あつちこつちと歩き廻つて、いろいろやつて來たが、今ではやつとこんなことで生きてゐる、とのこと……

「私も、まア、恰度、あなたらが、今、そんな時代かと思はれますが一つのやはり夢想家だつたのですね。夢をみてる中、日がすぎてしまひ、何一つ成功もせず、その中、腰が落ちつかなくなり、ふらふらと一生を過してしまひ、人並に一家を盛り立てるでもなく、よその土地で、こんな生恥をさらしてるのです」

今木さんは、私との間に、燒酒を出し、私にもすゝめ自らもふくみはじめてゐた。確かに、今木さんは急に私に話したくなつたものだ。私をとゞめやうとしたことも特別に厚意をしめしたことも、すべてこの故だつたのだ。

「今日も、停車場に出かけたのです。……一昨夜あたりから急に大雪が降りまして、今日はまたカラリと晴れた天氣で、道もわるいのに……出かけました。……あんたをみたとき、私はハツとしましてな、ほんとに、私はまさかと直ぐ思つたのですが、おどろきました、すると勿論、ちがふ人だとは判つてゐるのに、たゞ、あんたに聲をかけずには居れなくなりましてね、行つてみたのでした……」

私は、直ぐ、元氣をとりもどしてゐたのだが、そもそも、私は、吉林まで、今木さんに會ひに來たのではないから、今木さんのこの少し突然な話し込みは、直ちに身に入れてきくことが出來ず、ともすればM君のことに氣をとられ勝で、幾分、窮屈でさへあつた。しかし、今木さんの、私にそゝぐ眼をみると、さうしたことは如何にも悪いことに思へ、私はしきりと熱心にきゝ入つたのだしかし私は、その話の具合は、今でも、なかなかよくおぼえてゐる。

「ま、Mさんがみえられるまで、これをチビリチビリやりながら、時間つぶしに話しませう、こんなことが、私は、また大變好きでして」

部屋の印象を思ひ出す。横の方に暗すぎる電燈が一つ點いてゐた。部屋はガランとして、あまりものはなく、それでも、よごれた壁にはつまらぬ婦人雜誌の口繪風のものが、煤を浴びて一二枚あつた。それにもう一つ、ロシヤの小さな町をおそふ吹雪の夕といつた感じの寫眞版の額が一枚くらがりにかゝつてゐる。全く、二三の家具をのぞいては、あるものといつてもその程度のものだつた。しかし、今木さんの樣子や、聲の抑揚は、何とその感じによく調和してゐたことか。まさにこの人の生活はかうしたものなのだ。暗さと、乏しさと、空虛さと、そしてそれは、その生活のすべてにしみついてゐる——私はさう思ふ。

たゞ、さうした中で、業な性を表すやうな強い坊主にした今木さんの白髪が、時々、鈍い光にキラメクやうに思へた。それは不思議なことだつた。

「あんた、やつぱり、今頃の時節でしたよ、去年のね……あの時は雪は降つてゐませんでした、が非常に寒い晩でした。その時は散歩ではなく、停車場の人に一寸用事が、はゝ、隨分、厚着しましてな、こんなになつて行つたのでした……用事は直ぐすんで、歸る時、またあの三等の、待合所の方に一服しに寄つたのです、全く、一二等の待合所は、あれより幾分小ぎれいにして別な方にあるんですが、そこは面白くありません。逆にジロジロ

みられましてな、そんな所では、煙草もおちおち吸へませんで……何氣なく私は這入つたのですよ、その時、眞直ぐに眼についた男の恰好が……あんた、全く、ちよーど、今日のあんたの樣子にそつくりでしてな、私はあんた、それで、今日はほんとに吃驚したでしたよ、それで腰かけてた場所まで、殆どおんなじで、あんたが、かうして、肩を落して、がつかりしたやうな樣子がね……何てまあ、そつくりだつたですか、あんたは今日ほんとに瞬間、私をおどろかしましたな……その男は、年恰好も恰度、あんたぐらひですが、まあ、私は近寄つて、どうしたのか、きいてみたんです。私もその時、おそらくさうではないかと感じて近づいたのですが、あんた、やつぱりその若いのは病氣でしてね、大變熱があるんです。私はもう早速こゝに連れて來てねかせましたよ、この部屋でそれから永いこと、一月近く寢こんでましたが、いや、風邪がこぢれた程度なんですがね、一體に身體そのものが衰弱してゐましたよ、何でも、やつぱり大連から敦化に行く途中だつたとかで、車中で發熱したんですと、そんとき、少し辛くなつて、こゝで下車してしまつたのですね、ていふのは、奉天で小學校に行つてた頃世話になつた先生が、もう學校やめて、こゝで材木屋を開いてるとかで、その先生の所に休ましてもらはふと、それ、苦しい時のなんで、遮二無二さう決心して下りたんでせう？所があんた、その先生が、一家中で、內地へ歸つてゐて留守だつたんです……はゝゝ……よい男でした。一箇月ほどこゝにゐる中にいろいろ話をきゝましてな、私はすつかりその男が好きになりましたよ。今日、あんたをみた途端、すつかりこの男のこと思ひ出しましてな……ひとつ、今度は、この男の話でもしませうか……この男ですよ」

今木さんはさういつて、後の小机の抽出しから一葉の寫眞をとり出した。それは、陽の照る雪の中で、外套にくるまつた、今木さんと一人の青年とが並んで撮つたものだつた。「どうです？橫山二郎つていふんですがね、元氣になつてからとつたものですが、どつかあんたに似てやしませんか？」

私は今、考へるのだが、これは一種偏執した言葉であつたと思ふ。といふのは、その男と私が、一體どんな所に共通してゐたらうか、顏はもとより、身體つきにしても、私とはまるで似も似つきもしないのだ。そしてまた

思ふのだが、おそらく、かうした老人は、自分が歩いて來た道については、その成功不成功はともかく、もとより一つの少からぬ確信をもつてゐるものだ。しかし、また、永い道程の中で、自分が最も苦しみ、傷めつけられた事柄には、多かれ、少かれ、案外子供じみた感傷的執着も持つてゐるものだと、これはもとより、私の單なる推定であるが、私はその時今木さんから、何かさうしたものを感じたのである。少くとも、驛で遇つた前後の今木さんには、むしろ、立派な、すべてに思ひやりの深い點などばかりが感じられ、私にとつても幾分迷惑だつたかうした人には少しも見なれなかつた。

今木さんは直くかういつた。

「ま、なんですね、私は、瘦せて、おとろへて、何といひますか、惱みほうけた姿の人に會ふと、もうなんともいへない氣がしまして……私の魂はとまつてゐる、私はふりかへるばかりだ、歩く元氣はない、けれど、振りかへつて私に蘇生へる或るものを、既にそつくり身につけて生きてゐる若い人をみることがある、そんな時です私が馬鹿になるのは、……私はまじめに生きなかつた。どちらかといふと、まじめに生きるひまがなかつた。それは、大事なことでした、しかし、今は、自分をどうにも出來ない、ふりかへるばかりの私、だから、たまに、さうした人をみかけると、何處か心が充ちて來て、非常に靜かな心になつて歸つて來れるのです。……自分のこと、はゝゝ、私はまたいひ譯をはじめました、一人でゐる時、始終心でざんげしてることですよ、こいつは……あんた、橫山君の話しませう、あんたの眼はつまらなさうにしてゐないから、私は安心してゐるが、ま、ひまつぶしのつもりで話し合ひませう……」

そのときの今木さんは、淋しさうにみえた。何故だかしれぬ、私はまだ、どうも落ちつかないのだが、それでも、聞き手としての誠實は決して失はなかつたつもりだ。

私は今でも道など歩いてゐて、ふと、思ふことがあるそれは、この今木さんのやうな老人が果して存在しうるものだらうか、といふことだつた。どうも、架空の存在のやうな氣がしてならない、さういふことはあり得ないやうに考へられて來る。それでは、私がみたものは何であつたか、日が經つにつれ、私はその疑問の方が眞實らしく思はれて來るのである。今の私の周圍は、たとへば

道を歩いてゐて、一人の年寄りに行き遇つたとしても、私は、ひからびた、ぼけたものしか見られないからである。或ひはあれはうそだつたか、しかし、それでも、こゝには一つのきえぬ證據がある。それはどうしても、はつきり眼で見えるものなのだ。

私は、はじめの意圖からいふと、少し前書きがながくなつたことをしつてゐる。しかし、私は、今木さんの話をするつもりだつたのか、それとも、その、横山君の話をするつもりだつたのか、あやふくなつた。しかし、何れも否である。私が白狀しなければならないことは、横山君には一面識もないのだし、今木さんにしろ、私がその人柄を知り得た譯ではない、一夜話したゞけの人だ。だから、私はこの二人の話をしやうとするのではない、もとより、はじめつから、そのつもりはなかつたのだ。

だからではないが、今木さんの話のすべてはこゝには書かぬ。私は私の目的に必要なことだけを撰り出すつもりだ。さあ、私の話は、そろそろ、中味の方に近づいて來た。

「横山君は、もとはあなたのやうに幸せな會社員でした」

今木さんはさうして、横山君のことを縷々と話してくれたのだが、そしてそれは、私を思はずその中に引きづりこんだほど、なかなか熟をもつてなされたものではあるが、私は、それよりも、今木さんが何故か、あの酒に赤い眼で強いるやうにゆづつてよこした横山君の記錄風なものを（私はこゝにもつてゐる）その話の替りに、それをこの次にそへてみたく思ふ。それは果して、私の思ふことをよく語りうるかどうかは判らぬが、私が、確信もつていひうることは、私が之れをこのまゝ打ち捨て離いといふことだけだ。その足らざる所を、そして、今木さんの話によることゝしやう。

自分の意圖をまとめるに、かく、小說風の方法によつたことが、最善であつたかどうか、私は今は疑ふが、しかし、この仕事は私の心を確かに傾けさせた。心を傾けるといふこと、何事によらず、今の世で、私は尊ぶことの一つであると思つてゐる。

横山君の紙片は、標題も何もない、たゞ末尾に、四文字「大連にて」と書きこんであるに過ぎないが、しかし、今の世に未だにこんな感謝の仕方があるものだらうか、この紙片は、横山君が、今木さんに別れる前、恰度、かけ

がへのないものを手離すやうに、置いて行つたものらしいが、今木さんに感謝の一端こめて、これは、佗びしい挨拶となつたものであらう……。

一

私らはその頃、數人の親しい友と共に、極めて幸せにも、若き情熱の赴くまゝ、樣々な計畫や、新しい智識について語り合つてゐたものだつた。私らは、漠然と、眞理なるものを愛しやうとし、科學に憧れの眼を放つてゐたものだつた。極力、矛盾をあばき、不純を排斥したのもその頃、そして日々を安易にくらす人々をひどく輕蔑してゐたのも、その頃だつた。しかし、それは、未だ身にそなはるものではなく一方、さうしたことを念願としながら、自らは、大いに青春の時間を享樂するのも忘れなかつた。もとより、それとこれの矛盾については深くは思ひ至る筈もなく、いはゞ、その熟烈な意慾ばかりが私らをかつてゐたものだつた。しかし、或る年、必要に迫られ、私は一月ほど、內地へ旅行した。それは幼時渡滿した私にとつて、生れてはじめての內地旅行であり、それは一つの强烈なものを私にのこして行つた。それが何であるか私は今にして氣づく。

その後、いつとはなし、私の思ひは、一つのことにのみ至るやうになつた。一つのこととはいへ、それは容易ならぬものであつた。今にしていへば、この土地の私らの生活に、その據點をさぐりはじめたのだつた。私らが漠然と信じてゐた、その據點は、實は、その內地旅行により、破壞されてゐたことを私は知る。疑惑は、私を包み、私はもはや徒らに眞理を語り、科學を持ち出し、世事の矛盾を嗤つては居れなくなつた。

私の友だちは知つてゐやうが、私がその頃、どんなことを好んで語らうとしたゞらう。一人の山東から働きに來た車夫について、私が見聞を語つたことは、それは彼らが、こゝに來て、日夜、身を粉にして働く、その精神の據點が、私らよりも現實的であることを、いひたかつたのだつた。私らは日本から來て、どうした據點を見出だし得たらう。日本は遠くて、如何にしても觀念以上には見出だせぬ。またもはや、一意、この土地の異民族の生活研究に突き入らうとしたこともあつたが、しかし、これも如何に身に遠いことであつたか。私らの不幸はこゝにある。私らの心、肉體は、土着せる異民族の如き、

この土地のもの、ならざる、また、日本のものならざる一つのものに變化しつゝあつたのだ。おそらく、この變化は、あらゆる黴菌も、用心も、とめることは出來まい明確な、越えがたき土地の差異なのである。

或る秋の日、私は大連郊外の田園を見下ろせる山腹で一日を過したことがあつた。苦しかつたあの日の事を思ひ出す。

晴れた日で、私の前には果樹園、野菜園が、その中に部落、部落を包んで、一ぱいにひろがつてみえてゐた。菜園に働く土民の農夫や、果樹園に鉸を握る男の姿などがポツリポツリみえ、その鉸の音は空に跳ね、ハツキリと耳に響いて來るほどだつた。眞赤な林檎が樹間にのぞいて、作物は青々と地にひろがり、秋の稔りは充ち滿ちてみえた。野菜を積んで町に行く荷車、畑道を町に行く姑娘をのせた驢馬が通ると、そのくびの鈴が澄んだ音色できこえて來る。所々山に迫つた、かり入れを待つばかりの赤ちやけた高粱畑や芋畑の縁を私は通つたり。

日本人が、この町に移り住んで奬勵した松の植林は、漸くこの附近の山々に裾の方だけ、松林をみせるやうになつてゐた。石塊多い山道を、この松の未だ太からぬ幹につかまり歩いたり、或ひは急に近くにみえた部落の中に這入つて行つて、土民の顏をつくづくみたり 私は一體何を考へてゐたゞらう。私の考へは常に一つ、それが、耳許で樣々なことを囁いてゐたのだ。（いゝか、これだけはたしかだぞ、と——如何なることが、如何なる權力が、こゝに行はれてゐやうとも、彼ら土民は確かに、僕らよりも、この土地を愛してゐる、その事だけは確かだ疑ひの餘地はないのだぞ。それはもう無意識的なものとなつてゐるしかし 愛してゐる。愛しんでゐる 僕らではない、誰よりも、それは彼らがなのだ。いゝか。元來愛しうる土地といふものは誰にでもあたへられるものなのだ。しかし、僕らにはどうか、それが眼の前に、自らが踏んで立つ、その下に見出だせないといふことは何といふ不幸なことだ、一體、それは何處にあるのだ、しつてるか？さうだ、確か、嘗ては東方にあつた、確かにあつた、確か、……しかし、それは……僕らは一體、どこに住まねばならないのか、しつてるか？）

私は尙も、菜園に働く農夫にみいるのである。何か擔いで道を行く若者にも氣をとられる。

（何といふ平和な類だらう、これはこの土地を、世界

の何處よりも愛しみうる安らかな類なのだ。どこに行かうといふ考へも起らない。よその土地に來ても、直ぐに愛する土地に戻りゐるのでもない、僕らはどうだ、滿洲に住む僕ら……これは僕らばかりではないぞ、だが一體僕らは何處を愛し、何を信じて生きて行くのだ）

たうとう苦しさに、私は疲れ、最寄りの海端に出た。波は、昔からもさうであつたやう、間斷なく、寄せ、返してゐる。海の量ははかりしれない、私は涼しい潮風を吸ひ、あつい砂上に腰を下ろして、まだ高い陽にかすむ沖の方にみ入るのであつた。日本がみえないのはたまらない哀しみ。すると、また聲が（確かあるには違ひないしかし、みえないんだ）

この海が越せない、これが容易でない、そして、私は海のこちらで住むやうになつてゐる。（さうだ、おまへのいふのは正しい、おまへは、何處に行つても、あんなに親切に、優しく、もてなされながら、あのやうに佗びしい氣憶に充ちた、はじめての內地旅行を知つてるか思ひ出せるか）

知つてる。私は思ひ出せる。

門司の埠頭でみた、日本人の車挽き、あの驚きは未だに消えない。滿洲ではすべて、土民の男らがする樣々な汚穢な仕事が、そこではすべて日本人の手で行はれてゐた。もとより、私らのひどい考へ違ひだが、しかし、消えない他の一つの悲哀が、私の心をすつかり重くしてしまつた。故郷に歸りながら、何故、安堵感が沸き出ないのだらう。何故、私は異國を旅する者のやう、忙しく歩き、歸つて來たのだらうか……。

かうした考へは、日に日につのつて行つた。そして、まもなく、一つの頂點まで押し進められて行つた。それは私にとつてはどうすることも出來ないものだつたのである。

その後も、はじめの內地の旅行は、いろいろな仕方で想ひ返された、そして、それが、或る明確なものに意識され、規定されるやうになつたのは、暫くしてからの事である。在滿の私らの姿は、その中から、ほのぼのと浮び上つて來るのである。

私はたしかに、一つの自覺をもつた。これは一つの自覺であると、信じて憚るまい。それは、どんなに悲哀を伴ひ、斷ち難き、越え難き如何なるものを伴ふとも、私らは、明確に、つかみとる可き、と信ずる。確か、それ

は、この土地の生の據點だ。すべて、歴史の示す如く、一切の移行に伴ふ苦痛を信じやう。その故に、それ自體の價値を見失ふことを私はむしろおそれやう。

二

昨冬、私は正月休みを利用して、再び三週間の内地旅行を試みた。それは、私のこの考へを、故國の土地で、懐しき、兄姉達の下でかみわけるためであつた。親切な兄、優しき姉、そして、故國全體の感じが、何か私を賞すかもしれぬ。それとも、この愁ひの心は、故國の溫きものにつゝまれ、ひたすら私を思ひ屈せしめるだらうかそれとも、單に、私は自分の正當さをのみ、一層思ひ知らされるのみで歸つて來るだらうか、その何れとも知れぬ期待の中で、私は大連を船出したのである。

一人の兄と、一人の姉と、私はそこだけ訪れるつもりだつた。そして豫定通り、その住む、東京、横濱だけに行き、祖父の住む故郷の田舍にも、嘗て、はじめての旅の折り、訪れた一々の所にも行かなかつた。私は勤め人ありあまる金も暇もなかつたし、さうした必要も感じなかつた。

私は、大連出帆後の、二日二晩、不思議な感情に充ちた海の上の生活を思ひ出す。

船は年末の歸郷者や、入營者のため超滿員で船室はそれこそすし詰めの狀態だつた。私は、たゞの歸郷と心得羨望する友人知人の見送りを受けて、盛な船出をしたのだが結局、あのやう心晴れぬ門出となつてしまつた。私はこの旅行の準備をしはじめた頃から一つの憂愁に閉されてゐたことをおぼえてゐる。私はひどくこの小旅行を懸念して、再び無事に戻つて、滿洲の土を踏むかを危惧してゐた。それは何故か、私にも判らない 今でもそれが、果して何か理由があつたのか、判らないでゐる。單なる危惧であつたゞらうか、それとも、或る愁ひが、私をさうしたものゝ中に追ひこんでゐたのでもあらうか。

滿洲の陸が見えなくなつたとき、それは頂點に達し、恐怖にまで轉じたことをおぼえてゐる。とにかく、どうにもならない一つの門出をしてしまつたことに私は氣づいたのだ。一つの運命にのつてしまつたあとはひたすら日本に行くのみ、と私は思つた。海に對する恐れが、私をとりまいてゐたやうにみえた。私は船室で仰向けにねころびながら、金網にかこまれた、暗い船室の電燈をみ

つめ、若しこの船が沈むやうなことが、たつた今、この瞬間に起つたとしたら……僕は、あわてないやうにしやう。なる可く澤山の人をたすけることに手をかさうボートや何か足らなくなつたら、僕は船に殘る組に入らう、などと考へてゐるのである。この旅行とそんなことゝは無關係である筈なのに不思議とこんな思ひにばかり取りまかれる。

はじめて内地に向つた時は、日本に對する樂しい期待で一ぱいだつた。しかし、この度は、私には愁ひばかりである。何の樂しい期待もない。とにかく日本に上つて故國の野山や、町の人を見ることである。要はそれだけ何か苛々とした風が私の中をぬけて行くと、私はそんな風に思ひ定めるのである。黄海の眞ん中に出たとき、私は一つの事に氣がついた。今、まさに自分の心は、滿洲と日本に二分されてゐる、兩極にひかれる浮動體のやうに、その一方の強弱につれ、私はその中間に漂つてゐるのだ、それが、今の心、それは黄海の感情でありこの海を渡る日本人はひとしく味ふ運命的なものなのであらう。

その夜、甲板に出た時、まさに天頂にあるきびしい月をみた。その空にマストは黑々と立つて、浪は蠻々、しかし、潮風は忽ち、私を凍え上らせてしまつた。

黄海について、後にも機會はあらうが、今少し書きつゞけてみたい。

私らは如何にして黄海を渡つたか。黄泥を溶かしたこの海が、嘗て如何ほど、吾等の感情にしみ搖れたか。

潮風が吹く、朝やけがある、夕やけがもえる、落陽に光る船、海はゆれ、人はゆれる。渺々たる波、雲、その隔絶感。

それにふれ、私らは海の上で、とつくりと考へる。知らぬ間、いつの間にかそれにひきこまれ、私らは如何にしてこの海を渡つたかを考へる。忘れてはならぬ、人よそれを打ち消すな、大連の海邊からみたこの海、こゝは意外に瞑く、深い。

はじめの内地の旅がなかつたら、私はこれを知らなかつた。はじめの日本行はこの海を希望の中で渡らせた。しかし、かへりは、私はおどろきの眼で、この海を眺たのだ。

それから數年の時がたつてゐる。再びこの海を渡るに當り、俄かにそれはくつきりと浮び上つて來る。永い間

考へてゐたそれ、しかし、私にはもう何か氣づかれてゐるそれ、それが、こゝに來て俄かに明確に蘇生つて來る何故私らがこの海を渡つたか、何故超えねばならなかつたか、あゝ、私はそれを知つてゐる。

二日目の夕の黄海の風景は忘れ得ぬ。南に來るにつれ甲板の上は暖まつて來てゐた。夕食を終へるや、私は慌てゝ甲板に上つた。船室の丸窓からみえる晴れた夕景の輝きに私はぢつとして居れなかつたのだ。黄海の西方の美しさ、私はそれを今も思ひ描く。陽は既に落ちたあと羊毛に似た雲が、空高く佇むやう動かない。海は既に一方より暮れてくる。その瞑さと、西の輝き。それは南方の海か、沙漠のやうに思はれた。沙の上に起る夕景か、南方を航する船のみる夕景以外ではあり得ない。このまゝ一切の想念離れ、南方の世界に行かうかと、私は急に妖しいまでに思ひはじめた。波は、殊の外靜か、海底や東から夜はしのび初め、やがて波間は西に向ひ、不思議な黑光を放ちはじめる。

私は黄海を、一つの運命的な海と解する。嘗て、計られざる昔より日本人はこの海を東方より眺めて來た。そして重要なことは、今は、日本人がその海を超えたことださうせねばならなかつたこと、そしてさらに、吾等が今は西方よりこの海を讀めてゐることだ。超え難き海、深き海、北方の海薄より深く廣く、地中海より、我々にとつて運命的なのだ。

夜半に通つた壹岐燈臺の冷光。私の心は震慄する。日本に來た、また日本にやつて來たと。夜半の風は私を吹いた。翌朝門司入港、が、その朝は、私はさほど早く甲板に出なかつた。はじめての時は、夜明け前から甲板に出、あの朝風に吹かれ、沖に迫る日本の陸に歡喜の眼をきらめかせたが……その朝は落ちついてゐた。遂に來たといふ思ひは、私の胸に幾度か短氣を振つたが、私は深靜だつた。

門司の町を船からみて、はじめての時ほど、そのせゝこましさ、その醜さに驚く。下關にしても同樣。私はゆつくり、下關へ渡り、東京行の列車にのつた。

——かくして、私は日本へ渡つたのだ。

三

下關から横濱までの旅は、只管、一つの實在感に打ちたゝかれたのみだ。日本人が曠野に佇み、たゞ茫々たる

草原に、はじめの歡喜の消え行くを知る時、漸く生ずるあの實在感のみ。

翌早朝横濱着。懷しき兄の出迎へを受け、私はこの街の人となつた。今こそ私を取りまく日本人の生の響き。私は驛頭、兄と最初に顏見合はせ、平靜を裝ひ、たゞ笑つてみせた。

兄はこの前と同じやう、遠くから來た私を慈み、いたわる。こんな兄はゐないが、私は自らが、その感動に打たれることを好まない。私らは、お互ひ、自制し合つゐる。お互ひが肉親でありながら、離ればなれの土地で、別々に考へて來たことは蔭の方に押しやり、親しい兄弟のよい部分のみを出し合つてゐる。私らはその部分の感動をも、表面抑制し合つてゐるのだ。

しかし、この度は、はなればなれて考へて來た私の考へを檢討しにやつて來たのだ。誰と一言語らずとも、私はみることでそれは出來ると思つてゐる。私は神經を充分働かして居ればよい。久しぶりに再會の兄達の前にさらけ出すことはない。兄姉の心を何も傷めることはないと思ふ。二週間のことだ。……私はさう思つてゐたのだが、しかし、その夜、歸國第一夜に、私はその誓ひを破つてしまつたことを哀しく思ふ。

私らは、暮れの保土ケ谷小路に肩を並べて這入つて行つた。細い道の兩側には、たてたばかりの青竹が、葉をつけたまゝ並び、注連縄、打水に淨められた氣配は、小路一ぱいに軒毎に何かうきうきとたゞよつてゐた。私は清々しい氣持に洗はれ、小路をまた横に折れた兄の家に旅裝をといた。

こぢんまりとした家、この家も、その路も、さうしたものと、一つの古さに著へられてゐる、この邊りは昔の保土ケ谷宿だとか、私は今確か、かうしたものも、日本の一つの美しさだと思つてゐる。

その夜、私らは嫂の手料理で酒卓を圍んだ。はじめは何かほろ醉ひと、沸き上る喜びに、ぽつりぽつりと言葉を交へ、盃重ね、樂し氣に笑つたのだが、話はいつか思はぬ方にそれて行つた。

夜は更け、嫂は疲れ、寢ねたのに、私は空つぽの盃を左手に握り、夜を徹して喋舌つたのだつた。さう、喋舌つたのは私。酒と熱情に紅く燃え上つた私は、無限の夜を行く如く、喋舌りつゞけた。私の話は、兄を哀しませ疲れさせた。しかし、明け方近く、私が疲れ眠るまで兄

は私の話をきゝ洩らさなかつた。何故、そんなことになつてしまつたのか、私は省みる。が、今となつてもそれは何故だか判らない。とにかく、一つの熱情は、酒に勢ひかり、私に物をいはせたのだ、永い時間の出來事や永い時間の言葉を夜を徹し私にまきちらさせたのであるしかし私は何と、悲慘な物語りをしたのだらう。しかし私は心の十分の一も兄に語り得なかつたし、私自身を喜びに連れ出すことも出來なかつた。

私はやはり、一つの「距離」を語らうとしたのだ。そしてまた、その「限界」を。

日本に來て、日本禮讃の言葉は私にはない。最初の歸國の時、既に私は何處にその言葉を發見し得たゞらう。あの時こそ、我ら住む滿洲の姿を水平線に光茫もつて眺め得た時ではなかつたか。日本の苦悶の一種の表情はここにある。と、私は今に心得る。私はそのとき、うつかりと一つの復習をしたまでのことである。

私は、兄の言葉が氣になつて喋舌り出したやうなものだつた。兄は殊更、何かを喋舌つたのではない、たゞ私は兄の言葉の中に、哀しい慈愛を感じたのである。しかし私は、どんなに眞實と熱情と動搖の中に身を置いてゐたことか。そのために私は自分自身を抑制出來なくなるまでかりたてられた。

「まア、兄さん、僕の考へきいて下さい」何時間繰つたときかも知れぬ。が、それまで何か昂つてまとまりなく話してゐた私は、そのとき寛に語らうとしたのだ。私らの自覺と、私らの獨自さ、私はそれを語らねばならぬ私はさう思つた。それはまるで、何か崇高なものに命じられたかのやうに……私の強い語氣に、兄の眼は不思議な光を帶びはじめた。

私はいつた。

「兄さん、僕が今度、かうして突然やつて來たことは理由なしではなかつたのです。勿論こんなこと兄さんにわざわざいふ氣はなかつたのですが、何かひどく兄さんにお話したくなりました。きいて下さい、僕らが今、一體どういふことを知らうとし、築かうとしてゐるか、兄さんに知つていたゞきたい、國外に住む僕ら、想ひ出も希望も向ふできり與へられない、若い僕らの立ち上らうとする一つの考へだと思つて下さい。」

それから、飽きもせず、倦みもせず、明け方まで私は話し續けたのである。そして、兄はまた何と立派なきゝ

手であつたことか。

私がはじめ、內地に歸つたのは徵兵檢査の爲であつた私は橫濱でこの兄にまるで初對面のやうな再會をし、鄉里までこの兄に伴はれて行つた。私の鄉里は東北の一農村にある。

私らの兩親は早くに町で病沒した。鄉里には祖父一人しか生きてゐなかつた。鄉里の家は祖父の後妻の子供らにより維持されてゐて、私らはそこに訪れたのである。

祖父は兄の場合よりも、私の記憶には遠い。いや、まるで記憶にはなかつた。私が、あの旱魃に惱む村道の白く乾き切つた土を踏んでこの家についた時、傾いたこの陋屋に私らは確か、一つの不安な風を捲き起したのである。今、當主はもとより祖父だが、實の働き手は三郎といふ養子に來た男。三郎氏は働き者で、そのとき私らには非常に遠慮深い態度で接してゐたが、私らは恰度本家の息子らが、永らく留守にしてゐた家にひよつこり歸つて來たといつた恰好だつたのである。それに關する經緯は、この三郎氏の弟だといふ男が、或る時酒に醉つぱらつて喚き、親戚連中を苦しめたといふ次の言葉によく語られてゐると思ふ。

「何とか、かとかいつたつて、この家は俺の兄貴がゐなかつたらかう持ち堪へては來れなかつたぢやないか、息子も娘も孫達だつて、ほんとのこの家の者らは、といつも何處かへ行つて、家に寄りつきやせんぢやないか、俺の兄貴がゐたからこそだ、俺の兄貴がゐたからこそぢやないか、どうだ」伯母達の話によると、彼らはこの家に近い者が行けば行くほど、自分らが折角盛り上げて來たこの家を、とりもどされやせんかと、非常な不安に包まれるのだとか、それはあとから聞いたことだ。僅かの田地、私らには毛頭そんな氣持はないのだが、何とも致し方ないことだつた。

が、そんなことは私にはどうでもよい。しかし、何とも仕方のないものが、私に起つたのだつた。

「兄さん、それは、僕らがあの滑稽な乘合自動車を下りてから、家はあれだと兄さんが指差してくれたでせう？あの時だつたのです。それから僕らは一歩一歩トランクをかついであの道を上つて行つたですね僕らが道をのぼりきつて、あの家の前に立つた時、僕はグラグラとなつたのでした。僕の夢はその時完全に破れたのをあとで知りました。」

私の夢といふのは他愛ないものだつた。單なる故郷への夢なのである。が、しかし、その時、今迄滿洲でもつてゐたはこりも何も一瞬にして瓦解したのであるから、私にとつて、結果は容易ならぬものであつた。

「私らは今迄、私らの周圍の土民の生活をみて來ました。彼らは不潔で不衛生で、無氣力で、破廉恥漢で、輕視に價するものでありました。向ふで、僕ら日本人は、一寸、貴族のやうな位置にあり、その權力は並々ならぬものであり、僕らはひそかに自分自身を――滿洲の貴族――と誇稱しかねない有樣だつたのです。所がどうでせう、僕は故國に、自分の家の前に立つた時、そのほこりも、夢も、一切きえて行くのを知つたのです。あの一種のひなびた匂ひ、あれは向ふでも土民の家の近くでよくかいでゐたものです。骨々のゆるんだ白く埃つぽい家の樣子、兄さんは氣づきませんでしたか、あの土間のある部屋から隱居部屋に行く緣側、暑い日でしたね、あの陽に灼かれる下で、あの緣側は、醜く木目ばかりが目立ち白く荒れ果てゝゐたでせう、今年は燕が巣喰つたから家も追々よくなつて行くとおぢいさんはいひましたねあんな淋しいことありませんでした。そのとき僕は、黄海越えて向ふの土地に住む埋田に突き當つてゐたのです。今になつて、それは氣づくのですが、それからの印象心象すべては、それを裏付けるばかりだつたのです。便所のきたなさ、食べ物のまづさ、あの家のきたない子供らはあの貯水池の底の方にピヤチピチヤと殘つてゐた泥水の中で泳いでゐましたね、あれなども滿洲の土民の子供そつくりでした。一體僕らはどんなことを平氣でごちやごちやに考へてゐたのかと思ひます。それに僕は、今よりも年少く、元氣に充ちてゐたのであの頃は自分はどんな苦痛にも、汚穢なことにもたえられる神經があるやうに考へてゐたのですが、事實にぶつつかつて、そんなことも、うそであることに氣づきました。まるで何もかもくずれましたよ。あの夕方、お墓參りで、母さんらのお墓の前で、兄さんに私らの先祖の話きゝましたね、雨もよひで、あの時、向ふの道から淋しい葬列がきましたね、蠶時に死んだ童を眞夏になつたあの時、葬つたのだとか佗びしくて佗びしくて、兄さんの話きゝ終つた時、僕はもう聲も出なかつたのでよ……それから、裏の雜木林の中を通つて歸りましたねある時、雨が降り出しましたつけ、蜩が一際高く鳴きましたね、カナカナカナカナ、や

かましいほど、僕は蜩といふ虫の鳴き聲あの時はじめてきいたのですが、陰慘でした、あんな陰慘な聲はない、僕はあの暗い林の中で危く叫びさうになつたのです。私らはあの道を一散にかけ下りましたつけ」

その夜は、私は緣側の前から岡の下の暗闇を覗めてゐた。不思議な叫聲が聞えてゐて、私を惱ましてゐたのだ動物のこれも陰慘な叫びなのである。少しして傍にゐた童に私はきいてみた。「羊だ」と童は答へる。するとまた闇の中を幾つもの火が大きくとんでゐる。再び私はきいてみると……「川螢」とのことである。童は羊を「すつじ」といひ川螢を「がぼだる」といひ、大變きゝとりにくかつた。

それは餘談だが、闇と陰慘な響きとしかない世界に、私は不思議な歸郷の心象をうけたのである。

「翌る日おぢいさんと二人で役場と小學校に行つたでせう、あの日もあつくて、田も畠もひからびて大變でした、途中、井戸でおぢいさんに水を汲んであげました、僕には感動が起りましたよ、全く僕はその後、何時再びおぢいさんに會へるかしれないんですからねおぢいさんは途中樹蔭に憩んだとき、僕にこんなことをいひましたあの僕にはいつも眼をふせて、まともに僕の眼をみなかつたおぢいさんが――何でもいゝから、惡いことだけはするなよナ――そして役場でも、學校でも、きまつてかういふんです――ハイ、滿洲から孫が歸つて來ましてナ――と、大變でしたつけ、小學校では、先生達から事變の話ばかりをきかれました」

してまたその夜は私は朝方の二時頃には起き出て寢靜まつた家をそつとぬけ、岡の下の井戸端に下り立つた。あの時の、泣き出したいやうな虚空感――邊りにはもう朝の氣配が漂つて歩くのには不自由は感じなかつた。しかし、まださめぬ故郷の野邊に、動かぬ大氣の中に私はしばし佇んでゐたのだつた。こゝが私の故郷か――貧しく、せまく、きたない故郷、私はそつと井戸の水を汲み上げ、顔を洗つた。――私は三時にはもう三郎氏に連れられて鎭守の山にのぼつた。そして集つて來た數名の壯丁と共に二本松町さして出立した。それきり、私は鄉里には歸らない。檢査が終るや、そのまゝ北海道へ去つたのである。

その朝だつた。私が身仕度終へて出て來ると、三郎氏は圍爐裏の傍で細君をしきりと叱つてゐた。私は己むを

得ずそれを傍できいてゐたのだつた。朝飯は食はなくてよいと私はいふのに三郎氏は食つて行けといふ、所が、飯はまだ煮えないのである。叱られる細君は、その罵聲をきゝながら、赤兒に乳をふくませ、ともすれば眠りこけさうになる、そしては矢鱈と釜の下の火をいぢるのである。疲れたる農婦、夜毎、夜毎、そして昨夜も深更まで働いたに違ひない、この樣子を私は見るにたえなかつた。午前三時、私は眠つてゐた祖父を起し挨拶した。その時、たえ難い沈默の數秒の流れたのを私はおぼえてゐる前夜、石油くさい酒を汲み交はした時のやうな姿勢で、祖父は私の顏をまともには見ず「あ」「あ」とそれをうけてゐた。

私は三郎氏と鎭守樣へ、まだ明けきらぬ林の間をくゞつた。

鎭守樣でもまた一人の舊如　そこの神官は眼鏡越しに私の顏をつくづく瞶め「お—あなたが、めぐるさんの息子さんですが、大きくなりました、大きくなりました、亡くなつたあなたのお父さんとは私は大變仲よくして居ましたつけ、こゝにがゝつてゐるこのふさはあなたのおぢいさんが寄附されたのですよ、これも、これも、おゝおゝ」

舊如、舊如、私の父の影である。ひいては私の過去の影でもあらうか。

「さうして結局」私は兄に話しつゞけた。「僕は、鄕里にゐたのは正味一日半だつたでせう？時間がなかつたからでもありますが、しかし僕はそれで助つたのです。僕はあそこにゐるのがたえられなかつた、二本松に行つたのは、むしろ逃げ出したといふ方が近いのです。故鄕への夢は完全に破られたのです」

それから私は、北海道に不幸な叔母を訪ね、また引き返して、兄の下に一週間ほど滯在し、歸途博多に病友を見舞つて歸滿したのである。最初の旅はそれで終つた。

「兄さん、札幌にふみおばさん訪ねた時のことおぼえてゐますか、以前もお話しましたね、兄さんの慰めの言葉、僕がおつたへしたところおばさんがいつたこと　町の風呂に這入りに行くといふので二人で暑い砂ほこり道を歩いてゐる時でしたが——ありがと、みなも、くにの方に歸つたらどうかなど再三いつてくれたのだけど私もうこゝを離れる氣がないのです、神谷の墓もこゝにあるのだし、息子の墓も嫁も孫もこの町にゐるのだから、

だから兄さんによつくお傳へして頂戴、近頃は私の生活も少し落ちついてゐるからつてね、——おばさんの歩く影を僕はみてゐましたよ、北海道まで來て、みんなに死なれ、あんなに淋しいおばさんが、そんなこといつたのです、ね、兄さん、僕は忘れませんよ、この言葉……津輕のあの眞夏でも寒むざむとした濃い海の色も、函館驛の待合室の佗びしさうな人の顏も……淋しさうな人達が、互ひに別れを惜しんで泣いてましたつけ……まだまだ僕には忘れられないことがあります、あの旅行の歸途、博多に友達を見舞ひに行くといつてたでせう、僕は行きました。肺を病んで、滿洲での職を辭して靜養してゐた男です、一時は經過思はしくないといつてたのですが、そのときは少康を得てゐるとのことでした。彼は僕を誰も顏を知つたものがゐないからと、寢てゐたのに兄さんに連れられわざわざ驛まで來てゐました。少康を得てゐるから一諸に遊べるのを樂しみにしてゐる云ことは僕が滿洲を發つ前に來た便りだつたのでしたが、僕が行つた時は、病狀が急變してゐたのです、もう心臟に痛みをおぼえてゐたのです、彼は二三歩あるいては止り止りして左手で心臟を上からおさへて、聲も途切れ途切れでした。それでも彼は僕に博多の町を少しでもみせやうと、玉屋といふ百貨店まで連れて行つたりしましたつけ。そいつが僕にいひました——病氣がなほつたら、また滿洲に行きたいと思つてゐる、なんぼこゝが兄貴の家でも、さうべんべんともして居れんからね、滿洲がいゝ、僕らも居るし……それからこんな話をしました——まだ僕が小金をもつて居る時だつたがね、病氣の時はつまらぬことが身にこたえるものだが、それでもこんな辛かつたことはなかつたよ、僕は別府で療養してみやうと出かけて行つたのさ、汽車に疲れて別府の宿に辿りついた時、病氣のことを宿の者にきかれてね、僕は事實の通りをいふと、部屋がないからと、斷られてね何ぼ頼んでも駄目だつたのさ、もう他の宿へ行く氣にもなれず、僕まはたこゝにへとへとになつて歸つて來たが、あんな淋しい、辛いことはなかつたよ、もう自分は誰にも相手にされない氣がしてね——つて、兄さん、僕は田舍のその男の所に一晩とまつてから翌夕二人また博多に出かけたのです。彼は送つて行くといふのです、あの村道を通つて、田圃の中の停留場で、急行電車を待つてゐたのですが、あの時、もう暮れた線路の向ふに、輝いてゐたシグナルの色など

忘れられません、その濃い緑色を、僕らはしばらく貫めてゐたのですが、彼の氣持は僕の胸に音をたてゝ流れ込んで行くのです。別れる時の彼の淋しい顏。彼はそれから一箇月餘り後亡くなりましたが、離別といふものこんなだとは何故でせう、札幌のふみおばさんも、あの朝暗い苗穗の驛で何時まで立ちつくしてゐましたつけ。暗いもの、病めるもの、年老いたもの、不幸にして私が內地で目についたものはそれらのみでした」

以來、その旅が、私に大きな反省の種をあたへたことは否めない。今度かうして、再び內地を訪れるまで、私は殆どそれについてのみ、反省しつゞけた樣なものである。

「それからといふもの、滿洲での僕の生活は隨分と味がなくなりました。もうどしやうもない、どうしてよいか判らないやうな味氣なさなのです、僕はいろいろなことに氣づきはじめました。あちらでの僕との生活、それを包む土民達の生活……今迄氣づかなつたものが、眼につきはじめけした。兄さん、故鄕のない心つてどんなでせう、僕の氣持そんなでした、何故つて、僕の夢はそで消えた譯なのです」

茫々の滿洲……兄は私に盃をさした。私はそれをとつて一息にのみほす。

「一番胸に灼きついたのは土民の生活でした。自分らが今迄輕視し勝ちだつたこの土地は、誰よりも彼らによつて愛されてゐるのに今更氣づいたのでした。僕は愛してゐた筈の故鄕に失望して歸つた男、それか、ともかくかうして生きてゐる土地は、もう既に彼らによつて愛されてゐたのです。それに氣づいた時、僕はもうぢつとしては居れませんでした、馬鹿なことですが、海邊に馳け出し、砂濱に背のびし、水平線をさがしたりしたのです日本の方を　日本の姿をざがしたものでした。愚かしい行動です、求めた所でそこにみえるはづはありません、僕にはたゞ虛しいものがしのびこむばかりでした。波の音も、陽の光も僕を孤獨に陷らすばかりでした……一體僕らはどうすればいゝのか……」

四

「しかし、その中、僕もさう焦らなくなりました。土民の部落をうろついたり、郊外の田園にさまよひ出たり僕は非常におちついてさうしたことが出來るやうになつたのです、部落や郊外には以前にも相當出かけたのです

が、落ちついた心と思索の中で歩けるやうになつたのは最近のことでした。心に浮ぶ日本の心象も、眼の前にあるその現實の姿もさうあわてないで並べられるやうになりました。そしてまた、さうした中で、今迄の慌たゞしい、苛々した自分の姿を振り返つてみられるやうにもなつたのです。つまり、僕はさうして、自分達の運命的な姿に氣づきはじめたのです。僕はそれを知りました。……しかしこんな馬鹿なことをどうして直ぐに氣づかなつたのかと思ひます」

それは私にとつて、今度の出がけから保持してゐた心の殆どすべてゞあつた。私はたうとうそれをいつてしまつた。心に押し包んだまゝ內地をみ、再び滿洲に歸らうと思つてゐたそれを。恰度、日本のすべての人に、とりかへしのつかないことを宣言してしまつた後のやうにそれは味氣ないものだつた。

「兄さん、……僕らは元來、內地を戀しがつてはいけないのでした、內地を思ひ出したり、戀しがつたりするのが、間違ひだつたのです、なる可く早くこれは忘れる可きものでした、この鄕愁といふ奴こそ、眞先に叩きつぶす可きだつたのです、兄さんを苦しめるのではありませんしかし事實、內地の人に、又は中に僕らは受け入れてはもらへません、ひがみではありません、かうして內地の空氣にひたつてゐても、それはひしひしと感じます、一人や二人のことといつてるのでもありません、事實、そんな餘裕はないでせう、是が非でも僕らは向ふで生きなければならないのでした、向ふで育つて、殆ど何もしらない筈の僕らが、內地の美しいこと、戀ふ可きこと、本でも話でも隨分きゝました、しかし、これは何でせう、何といふ矛盾でせう、もつとも困つたことが、もつとも全力をそゝいで周圍に行はれてゐたのでした、僕らはおかげで內地に歸ることばかりを考へるおろかな大人達のやう一かどの懷鄕病者になりました、その夢がかなへられなかつたり、消えたりするため、もう、ぼうふらのやうにふらふらしてゐます、直接の目的といひますか、土臺があたへられない、兄さん、僕ら若いものばかりではありません、あちらに永く生活した人は、何處か虛ろな眼をもつてゐる、といはれてるの御存知ですか、全くさうなのです、その言葉に氣づいた時、その眞實さに僕はおどろきました、全くです、それも、叫ひさうないもない鄕愁が極度になつた結果です、僕らは大人も若い者も、虛ろな

人種でふらふらしてゐて、何處か板につかないのです、内地にゐる人はさう思ひませう、殖民地の人間が、浮つ調子だとか、僕ら若い者は意氣地なしだとかいはれる理由もそこなのです、一諸にすむ未開の異人種達には傲慢で横柄な、そのくせに、その誰よりも生きて行く自信がない……

一見した所、誰でもすまして生きてゐます、しかし、誰がそんなに自信があるものですか、土民の如く、着實に生きやうとしても、限りなく變する日本の土が眼の前になく、馴染み難い、嘗て一度も故郷であつたこともない異郷の土と空と民族のみが眼にちらつく……兄さん僕らはすでに黄海を渡るだけに二日はかゝります、たつた二日とはいひますけど、これを越える時間と金とはどれだけ僕達を阻んで來たことでせう。僕は今度來る時この海のひろさをよくよくと思ひみて參りましたが、何よりその距離、その遠さでした。（いろいろな意味からいつてこの海は僕に深い印象を彫りこみました、滿洲に渡る日本人を哀しませたり、内地と滿洲とに決定的な距離をつくつたり、過去幾千年、挿話にとんだ、古く、しかも新しいこの海の明け暮れは、僕には忘れ難いものとなりました）しかし、この海を越えて、其他いろいろと困難な事情を排してまでも歸郷することを、向ふの人はどんなに喜びとしてゐたでせう、どんなに憬れのものであるか、兄さん想像して下さい、濃度の郷愁は深々と、生活の根深く食ひ入つて、それは一種あの殺風景な邊境の生活の糧でした、しかし、それはまたどれだけその生活を萎縮させ阻んで來たことでせう、これは立派に一つの病ひでした……歸郷は生をあたへ、ふるへながら歸つて來ます、吉凶何れにせよ、毎年どれだけの人がさうして内地を訪れますことか、そして、何日か、何十日かの滯在の間に、こちらの人は誰も、何も、思ひも、いひもしなければ、素振りにさへもださないものを、何事かさとつて胸に包んで、歸へて行きます、向ふで内地から歸つて來たばかりで、その暗い眼をキラリと光らせ、返事もしなかつた人に遇つたことがありますが、僕は「どうだつたよかつたらう？」と訊いたゞけなのでした……妻は一つ、おまへの生活の據點は海の向ふだと、内地の全存在に語られることです、敎へられます、おまへらはこゝに住んではならぬ、海の向ふへ行く可きだ……いひかへれば、僕らはかうして内地にやつて來ることは出來ても

結局、向ふに歸らねばならないといふことです、その意識です、歸省、歸國、とそれは何とでも名づけられますが、それは結局一つの旅行でしかない、その旅行すら、さう矢鱈には許されない、しかも僕らは常に向ふに歸らなければならない意地惡くいへば、僕らは故國に歸つても直ぐまた出て行かなければならぬといふことです……兄さん、いつそのこと、滿洲がカリフオルニヤかブラジルのやう、殆ど歸る希みのない所ならよかつたですさうすれば　こんなことは案外簡單なものだつたでせうに、なまじつか日本に近いばつかりに僕らの内地への感情はかうして妙に燃え殘るのです……兄さん、僕は生きやうとしてゐます、こんな鵠りない氣持では居られません、愛し得る土地の上に住むこと、それが、なかつたりまた出來なかつたりならば、今住む土地を愛すること、兄さん、僕は内地にやつて來て、かうして喜んで戴いたのに、僕は向ふで、如何にその土を愛しうるや、如何に愛す可きか、といふことのために、僕を包む内地の空氣にばかり氣をとられてゐるのです、兄さんのいたわりは苦しいのです、しみるやうなものばかりが僕をとりまいて　兄さんのいろいろなもてなし、いたわりに滿足にお答へも出來ない仕末です……しかし兄さん、僕はもはや、かう答へます、遠くの美しさを懷しむより、眼の前ものを愛すること、その方がどんなに大切なことでせう、僕は今、さうした生き方を信じてゐるのです、邪魔にこそなれ役にも立たぬ郷愁など斷ち切つてしまへ、何よりそれが第一です、そして第二は眼の前の手にとれる滿洲の土を愛すること、それは如何に味氣ないものでも僕らには今こそ與へられた唯一です、僕は自覺します、あの北滿のエミグラント御存知でせう？彼らはひどく悲慘な運命の人達です、しかし、少くも彼らよりこの點はすくはれてゐるのです（彼らは、知つてゐるのです）それは彼等の既に行く可き所を知つてゐたからです、ハルビンといふ土地をこよなく愛し、少くも愛しやうと、いろいろつとめてゐるからです、僕達もさうならなければなりません、操り人形のやう、僕らは懷郷の糸に後方から操られ勝ちでした、しかし、もはや、斷つべきです、僕はさう自覺します、さうしなければなりません、すべてはその後のことです、僕らとて、何處に行く可き所があるでせう、北方のエミグラント、またすべての人々の如く、吾が住む可き土地を愛さん哉、です。それが唯一です、

殺風景ならば樹も植え、うるほしもしませうし、美しい音樂、美事な歌もつくりませう、出來ないことはありますまい……疲れました、兄さん……」

私は、或ひは醉つぱらつてゐたかもしれぬ。が、それまで、ぢつと私の話をきいてゐた、あの兄の顏は忘れることは出來まい。

……

それから二週間滯在した。冬の雨に見舞はれた淋しかつた二週間、横濱も東京も濡れそぼり……兄と顏を見合はせ私は暮した。

黃海越えて、再び歸つて來たが、私は、たゞもう、淋しかつた、淋しかつた……。

……

……

○

「それから、ほどなく、務めてゐた會社の方をよしたのですね」

今木さんの顏は酒に光つてゐた。私も、もう身體があつくなつて、ネツトリ汗をかいてゐた。上衣を脫いで私はもう首うなだれてゐる。「この會社をよしたといふこと、確かに今迄やつてたことが、やりつゞけて行けなくなつたですね、さういふことはありますよ、これは人が蔑む以上に價値のある場合もありませう。この人の場合會社をよしたといふことは今迄の生活を捨てるといふことゝ同じだつたと思ひます。確かにさうでした。すつかり捨てゝしまつたのです。私は馬鹿だと思ひませんよ、大變きれいにやめたさうです。上役の所にやめたいからつてたのみに行つたさうですが、そしたら上役は少し腹をたてた樣子で、一體、君はどうすればいゝんだつていつたさうですよ。一體どうすればいゝんだつて 一寸これはなんですね、どの友人も、知人も心配したのは、これからどうするか、だけださうです。それまでも會社での樣子が多少變だつたのでせう、誰もそんなにびつくりはしなかつたやうです、それでも、君は變つたなアつていはれたさうです。やつぱり、自分の群から、一人でも、もげ落ちたり、もげ出たりするのは氣にするんですな。それからです私も面白くなつて時々いろいろと話きいたんです。若い人の事だから、私もあまり意地惡くなれなくて、そつと、そつと、成る可く自然な話をしましてな、あんた、その頃は、まだまだ、ひどい落膽のしやうでしたからな。

始終、自分は馬鹿なことをやつた、馬鹿なことやつたつて嘆き通して、慰めるのに骨を折りましたよ、そんなら何故あんたは、やめたりなんかしたかつて、いひますと、一寸の間ですが、暫くはそんなことを口にしなくなりましたよ。そしてまた始終私の顏をみると、お世話かけてすみませんねエつて、まあひどく哀しさうな顏するんですからね、骨の折れる男でした。默つて寢てればいゝのに……あんた、その中、だんだん判つたのですが、比較的、近しかつた友達とも、びつたり交渉斷つたり、何でも結婚しやうと思つてた女などもゐたらしいですな、それも、自分の方から緣切つちやつたらしいです。とやかく理屈をつけて、さうしたことを、してしまつたのですね。さういふ性の人なんですね。新しく何かするためには、今までの一切の他との關係を一々斷ち切つて、そのものにとびこんでしまふ、さうした絆といひますか、過去の一切に蓋をつけなくては飛び出して行けないのですね、そんな男ですよ。自分でもいつてました。神經質な、大變な潔癖つていひますか、ふだんはあんまり、まじめすぎて、相手の前で、ふるえてゐる樣な男でした、そんな所あるでせう?この寫眞。何故やめたかなんて、私も一寸聞きにくかつたから、あまりぎゝませんでしたが、或る時、こんなことをいひましたよ、後から、何かでひかれてゐると、人間なんて前に歩いて行けない、だから、私は、あとで誰にもうらみつこなしで、自分の手でその糸を一本一本きつて行くのです、そしてたつた一人になつてから、歩きます……つて、そのくせ、あとから後悔したりして、危つかしい、危つかしい。……少し元氣になつてから、私はきいてみました。やめるとき、とにかく今迄のみんなと別れやうとするとき、あんたは何か、考へがあつたのか、つて、つまり、それから何をするかを……あつたらしいですね、目的だけは、たゞ、どうする、どこへ行くつて、具體的には、自分でもいへなかつたらしいです。こんな所にやつて來たのは、それが、よほど、自分の中で、たしかになつてからのことなんですね、採木公司に這入るんだといつてましたよ。こつちに來たのも、そのことでなんださうです。それでも、こんな風に辯解してました。——採木公司に入ることが、滿洲にしむことゝは思ほひませんが、要は、滿洲の自然にもつともつと土まみれになつて、もまれて來ることですつてはゝゝ、うまいことといひますね、私は感心してきいてま

したよ。……よつぽど、元氣になつてからは、それでもあんた、こんな冗談をいつて、よろこんでゐましたよ――今木さん、僕は、馬にのつて、ピストルさげて、興安嶺の山奥を、ポカポカポカつて歩くんですよ、――彼はさういつて乎綱をとる仕草をするんです。この空想は、自分でもよつぽど氣に入つてたとみえて、よくいひいひしましたつけ。……別れる數日前、うらゝかな日を撰んで私は彼と松花江を渡りました。對岸には苗圃と農家とあとはひろびろとした野山しかありませんが、私らの足は自然そちらに向いたのです。明日でも御覽になると判りますが、松花江は今でも向ふ岸とこちらの間を丸木舟が渡しの役をつとめてゐます。私らはそれにのりましたこの河を渡ると、吉林の町を少し離れて見るやうな結果になりますので、きつと、私らはそれをのぞんだのかもしれません。私も彼も、殆ど無言で、離れて行く吉林の町を見てゐました。枯草の上に、落葉と雪が混つて積んだ、誰も歩いたあともない所を、私らは、サクリ、サクリ、歩いて行きました。近くの山にはまだ多少紅葉が殘つてゐる風でした。それが雪をかぶつて得もいはれぬ、輝きと清々しさの中でした。大きな楡の木の林の傍で、私らはまた、立停りました。雪が靴を通して、足がすつかり冷くなつてゐました。私らは又、この町をふりかへつてゐたのです。町を離れて行くことは淋しい、私は、ニコリスクを、その他、住みなれた町を離れて行く時の氣持を思ひ出してゐました。その時、私は、ふと彼の横顔をみたのです。急に別れたくなくなりましてねエ、エ、私はその時、風の音をきゝました。ひろびろとした雪野原を吹いて來る風の音でしたが……私らはまた動き出しました。もう何もいふことがなくなつて、誰もゐない野原の中を、誰も住んでない苗圃の家の附近を、たゞしばらく歩き廻つて歸りました。これが、私らの、何の變哲もない別れでした。しかし、私は、その時のことが妙に忘れられないのです。……これを、こゝに置いて行く時彼はこんなことといひましたよ（私はとうの昔に彼の希望にしたがつてこれはよんでゐたのですが、ひどく恥入りながら、お禮の替りにつていふもんですからね……今木さん、私は、あなたも、自分にも、大きな嘘をひとつ吐いてゐます、こゝに書いたことも、勿論さうなんですびんからきりまで、假說づくめです、つて……馬鹿なことといつてくれたと思ひます。この期に及んで、ま、何て

ことです私は少しおこりました、それが氣になる必要何處にありませう、……それでも元氣で別れて行きました今頃は、きつと、のぞみ通り山奥に這入つてゐる筈です元氣でやつてゐることでせう、さうであつて欲しい……あゝ、私も今日はほんとに馬鹿になりました。いや、あんたのおかげで、これでどうやら氣もすんで來たやうです。」

私の讀んだ書物には、教育とは、人間が下ろしてゐる諸々の根を拔くことであると書いてある。根を拔くといふことが教育するといふ言葉の語原的な意味であると。もつと詳しく引用すれば、教育の本義は、人間をその性格を構成する環境から脫却せしめることにある、と多くの人は、少くも、四十年前には、この明確な言葉を耳にしたことであらう。私もそれに習つて、自らの言葉とするそこにある如く、樹上の移植上の問題が、その成長力に應じた用意、及手入れの周到さ又は繰りかへによつて如何に價値ある事を私らに示したとしても人の意識――苦痛感は、もとよりそれを同列にはおかせまい、こゝになみなみならぬ困難さがある。植物ならば、若しその土地が不適合ならば、たゞ枯死するばかりだし、適應の條件にあれば生長する、しかし、人間にはさうも行かない――あがきもあれば、文句もある。しかし、その書の著者も暗默の中に語り示す如く、その困難は困難としてもそれは克服されねばならない。それは人間の宿命的な課題である。故郷より異郷へ――樹木にあつては、より多くの移植を經たものはそれ自體の價値をより昂めると、私もまた……。

私は些か、問題の適用をあやまつたかも知れぬ、少くもあまり明瞭な適用ではなかつたらしい。しかし、誰が內地と滿洲についてのみかく縷々と述べたて得やうか、私は少くもこの夜の話から、この事を明確に抽出したかつた、私らの如何なる思考も、この道のみには是非とも沿はねばならぬ。……

……M君が、息をきらしてやつて來た。彼はすまなさうに、しきりといつた。「驛には、列車が着く毎、行つてたんだ、たゞ、五時の時は、ちよつと、ほんの一足遲れたんだ、かけつけた時、もう汽車はついてゐてね……もう來ないんかと思つてよそにあそびに行つちやつたんだ……」

私らは、直ぐ出かけることにした。立ち上ると、今木

さんは、私をふり仰いでいつた。

「あ、あんた、これもつて行つて下さらんか、老人の所にあつても何にもなりません、何せあんたらは若いんだ、元氣な友達も澤山ゐるでせうし、もし滿洲といふことで、こんなこと氣にする人でもゐたら、上げて下さいそして、元氣でな、あんたらが元氣のない顏してるの一番氣になります、馬鹿な年寄りですが、また、やつて來て下さい。私も今夜は、もう寢みますワ、いゝ氣持の夜でしたワ……」

私らはおもてに出て、馬車にのつた。先刻行つた書店はもう閉つてゐた。馬車は蹄を立て走り出した。馬車のリンは更けた夜空に消え、街の中、露路、小路に消えた。寒さが、もう私のコートを通し、私は齒の根が合はなくなり出した。私はソッと、毛の襟に包まれたM君の顏をみた。

西喇木倫河（シラムレンカ）

福家富士夫

鋼鐵は動物の血によつて始めて色づけられた

（オヴィヂウス）

四月。

太陽は變らぬ愛情を以て地を護る。その慈愛に滴ちた光は、母の息吹きの如く荒渺たる蒙古の平原に注がれる。

すると秘かなる生命を孵すかの如く、鋼鐵のように凍結した地上も、其の何處からとなく溶け崩れ、軈て上昇した冬の精は、脆くも一陣の驟雨となつて地に吸はれる。

西喇木倫（シラムレン）の氷も何時か美しい流れとなり、長い冬籠りより眼覺めた野兎は新鮮な空氣に跳躍し、綠草は萠へ上る生命の美しさを地上に播く。やがて、野菊や姫百合が廣漠とした草原一體に美しく散るのも間のない事であらう

紫達巴木は百頭の牛を父から貰つた。それが今年は百廿頭に殖へた。だから二十頭の牛を、大巴林旗の市に持つて行ける。

紫達巴木は冬の間、それを唯一の希望と嬉びにしてゐた。春遠しと、薄暗い包（パオ）の中に抄米（ホルスンバケ）と牛糞（アルガリ）で暮した蟄居が今漸くに解放されたのだ。

春だ。紫達巴木は包から躍り出た。氷は溶け吹雪は去つた。生暖いなごやかな微風が頰を撫でる。見よ。愛すべき家族の牛の群は、僅かなる水邊を求めて春の浴みを樂んでゐるではないか。やがて、長夜の夢から覺めた樣に隣りの包からも、又其の次の包からも、人々が顏を現す、紫達巴木は近くの牛糞（アルガリ）の小山に驅け上つた。一冬の燃料に役立つた此の小山は、何と小さく低くなつた事だろう。でも空は晴れてゐる。空氣は明るい。素晴らしい眺望だ。紫達巴木は小手をかざして西方を見守つた。遙かなる平原にぽつんと突立つてゐる道標塔（ナボ）。其れは林東への道を差し示してゐる。其の先、無限の平原が青空に限られてゐる境、あの境を越せば大板（タアバンシャン）上だ。其處には瓦屋根の家が建並んでゐるだらう。美しく着飾つた人々が群立つてゐるだらう。面白い見世物があるだらう。そして素晴らしく壯大な喇嘛廟が丹碧の美しさを空中に映へ返してゐるであらう。紫達巴木は、まだ見ぬ大板上の賑

ひを、其の中に混つてゐる自分の嬉びを、はつきりと蜃氣樓の樣に靑空に現してみた。

春だ。紫達巴木は歡喜に燃へた。手足を振つてみた。思ひ切り牛糞(アルガリ)を踏みつけて見た。そして大聲を上げて叫んだ。巡り來た春を知らせる雄叫びにも似て……。

紫達巴木は歡喜を咲はつた日から大板上の市に持つて行く二十頭の牛に名前をつけた。紫達巴木は一日に一頭の牛の名を呼び上げた。牛の名が一巡した時、廿日と云ふ日數の經過が、ますます近づいて來る市の嬉びを知らせてくれた。

朝早く起き出ると、紫達巴木は牛の群を水邊に追ひこんだ。そして柔らかい嫩葉を求めて身を藉くと、空を眺めて一日を暮した。やがて夕暮れ近くなり、西の空が美しい紅に染め出されると、牛を追ひ返して牛糞(アルガリ)の山に上り、鮮やかな紅が暗紅色となり遂にとつぷりと暮を降ろして星の瞬きを見るまで遙かに大板上を望むのであつた。

「大板上に二大喇嘛廟あり。東大阪廟(ツウンスウ)は榮憲公主の建立にかゝり、大殿八十餘間、僧四百餘名常住す、西大板(バルソスム)廟は叔憲公主の建立になり廟號を善覺寺とも云ふ。……廟會市は陰曆六月十日より廿日に至る十日間及毎年四月八日、五月十三日、六月一日に於て法會を施行し、遠來の商人來りて市を開き、蒙古住人之に雲集し甚だ盛を極むるを常とす」(蒙古地誌)

牛の名が一巡し、二巡し、やがて四月も過ぎ、五月に入る。蒙古の夏の訪れは早い。薄綠りに包まれてゐた草木は早や伸び切つた叢となり、慌てた姫百合が花を咲かせる。日によると夏の眞近かなることを知らせる程に暑く照りつけ、家畜の群は水草を求めて遊び、うるさく纏ふ虻を輕く尾で拂ふ。と、踏みつけた叢の中から狼狽した螽斯が踏ね上る。

紫達巴木の用意は全部出來上つた。父に挨拶をした。姉弟たちと別れの宴も分ちあつた。眞夏の樣に照りつける或る午後に紫達巴木は一切の準備を牛の背につんで、近隣の人々と共に大板上への旅に上つた。

旅程は三日餘りであつた。坦々として見渡すかぎり綠の平原にオボ塔を求めての旅である。オボ塔は遙かな砂丘や山崗の上に突然ぽつかりと其の圓錐形の姿を現す。此れは全く蒙古の旅に於ける燈臺である。オボの眞近かまで辿り來ると、彼等は一樣に馬を降りて無言の敬虔な感謝を捧げた。

紫達巴木は其の時に決つて、遙か自分方を振返つた。大板上に行く憧れの旅路ではありながら、始めて離れた家族が慕はしく、云ひようのない旅愁を輕い溜息に洩らした。彼等はウルジロの河を渡つて林東の近くに來た。此の近くに來た此の邊りの蒙古人には既に放牧を捨てゝ農に歸してゐる者もみられる。午後の日射は無聊の旅の疲れを一層覺へさす。

紫達巴木はある農家の近くで馬を下りて一杯の清水を請ふた。氣輕く與へられた水に涸れた喉頭を冷たく潤すと、紫達巴木は杞柳の蔭に暫らく身の疲れを休めた。

見ると、土壁の家の裏手で、若い娘が炒米の皮取をしてゐる。それは臺穀に似た粗末な木製の柄の片端に乘つて、緩るやかな韻律で石臼の中の炒米を搗いてゐるのだつた。娘は紫達巴木に見られてゐるのも氣付かずに輕い呟くような唄を口ずさみながら、ゆつくりとのどかに仕事を續けてゐた。

星多き宵、疲れ果てし身を
駱駝にゆだねて歸る幾多の若者よ。
君が包(ナカタ)に待つは
美しの妻、花の如き笑顏もて。

砂をふむ、駱駝の歩みに
君が思ひは、やさしく夢ろ(ヤド)む。

娘の謠は、低く人知れず、綠蔭に暫しの憩ひをとる紫達巴木の睡を誘ふように聞えてくるのであつた。娘の搗く臼の音が、其の謠の韻律をとつて、なごやかに響いた。

紫達巴木は生れて、始めて官能的な微妙な美しさに誘ひこまれ、暫らくは吾を忘れて恍惚と聞き入つてゐた。

娘は頭に白布を卷き、其の片端しが微風と共に頰を弄つてゐる。總ては娘を中心とした穩やかな和やかさに滿たされて、紫達巴木も其の雰圍氣に溺れ切つてゐた。彼は娘の容貌を見た譯ではなかつた。然し娘が美しいであらうことは信じて疑はなかつた。

ふと、何事かを思ひついたようにして、娘は炒米を搗く足をとどめた。そして臺穀の上から降りた時、始めて自分を見守つてゐる紫達巴木に氣付いたのであつた。思ふがまゝに無心に遊び戯れてゐる子供が、ふと自分を見守つてゐる親の存在に氣付いた時のように。娘は突差に輕く含羞み、面を伏せた。紫達巴木には其の可憐な姿が痛々しい位にいぢらしく思はれたのであつた。

思はずつりこまれるような頰笑みに誘はれながらも、

紫達巴木は默つて娘を見詰めてゐた。二人は默り合つたまゝ暫ウくの間、向ひ合つてゐた。然し、自分が無意識の内に大變に非禮なことを犯してゐる樣な氣がして來て彼はあたふたと驅けるようにして其の場を立去つた。

やがて紫達巴木一行は西喇木倫河の美しい流れを右手に見ながら、河沿ひに大板上へと遡つて行つた。翌日の朝早く大板上につくために彼等は夜も旅を續けねばならなかつた。

馬の背に搖られながらも、紫達巴木の腦裏には娘の面影が去來した。農家の娘に受けた心地良く美しい印象は今では憧れてゐた大板上の想像に代つて、其の後姿や、低い靜かな謠聲、それにちよつとした僅かな身振りなどが幾度も繰り返し思ひ出されては消へるのであつた。其の追想に思ひ出し得るものを總て映じ出してしまうと、彼は闇に溶け散る香りを惜しむように輕い溜息を洩らした。其の夜は明るかつた。星は鏤められた瑠璃の樣に、地平の彼方にまで冷たく透徹した美しい輝きを放つてゐた

あの娘について思ひ出し得る事を總て思ひ盡してしまうと、紫達巴木は譯もなく遣る瀨ない感情に包まれた。それにしても何故あの時、一言でも良いから娘に言葉をかけてみなかつたのであらうかと、殘り惜しく思はれてならなかつた。

物音一つ聞へない夜の靜けさに包まれながら彼等は此の見渡す限りの平原を大板上へと急いだ。然し紫達巴木の心は既に大板上にはなく、餘りにも根强く自分の腦裏に燒きつけられた娘の印象を、一方では意外とも思ひ、其の反面に壞れ物を運ぶ時のように、何時までもそつとそのまゝ護つてゐようと考へた。

彼等が大板上に到着した時には既に、西喇木倫河と町外れの草原の間に見事な市が幾條も出來上り、色々雜多に並べられた品物や、其れを買ひ求めやうと集り來た群衆で非常な賑ひを呈してゐた。それは全く、砂漠の一隅に突然咲き亂れた花苑にも似てゐた。商人は殆んど支那人である。彼等が無智な蒙古人相手に儲けようと、俄作りの家屋や天幕張りの舗前きには鍋釜の類から鞋や帽子それにどぎつい原色に近い色彩で染め上げられた布疋類などが所狹く一杯に並べられてゐて、奇性な色彩が喇嘛の如く躍つてゐる。紫達巴木は生れて始めて此の壞な風景に接した。其れは、黄や紅や紫などの色彩が生き物のように飛出して來て、眼前にちらつき踊るやうな氣持であつた。其の變化は眩るましく、魅惑的である。

紫達巴木の一行は牲畜市の近くに居を取り包を張つた牲畜市は雜貨市から少し離れた草原に設備されてゐた。

蒙古人の牛を買取る商人は殆んど全部が支那人であるが、其の取引には牙紀と云ふ仲介人が用ひられる。彼等はお互の片手を牙紀の袖の中に入れ其の袖の中で取引を定める。蒙古人は一體に支那人を輕蔑する。それは彼等が餘りに金錢を尊重するからである。蒙古人はそれだけに物價に無智で、牛馬を安く賣り拂つて、高い雜貨に其の金を全部はたき出してしまう。

紫達巴木は自分の二十頭の牛をもつて牲畜市に出かけた。彼を取り圍いた支那人達は其の牛を散々にくさした曰く、此んな痩牛は肉もとれない、と。

結局、彼は現大洋八十元で賣つてしまつた。支那人は用意してある自分の名札を片端から牛に結びつけて行つた。紫達巴木は堪へ得られぬ淋しさを覺えながら、それをぢつと見詰めて居た。

雜貨市は晴天に惠まれ非常に賑つてゐた。牛を賣拂つた蒙古人達は殆んど其の市に雪崩れこんでゐた。彼等に物を賣りつけようと、急かし氣に立廻り騷々しく呼びかける商人の群があると、讀經の濟んだ喇嘛僧が紫紺や黄の僧衣を翻しながら、其の間を悠然と縫つて行く。紫達巴木は人いきれに混つて、其れらを見て廻る内に、多勢の上氣したざわめいた雰圍氣に卷きこまれ、輕い興奮を感じてゐた。すると、何時の間にか、牛を賣つた悲しみも彼の心から消へてゐた。舗前に並べられてゐる色々の品物は美しく又珍らしく、未だ見知らぬそれらの物を見て行くことが、彼に大きな喜びとなつた。

中でも紫達巴木の注意をひいたのは、紅や黄や紫の濃い色彩が花を振り撒いた樣に數き並べられてある布疋舗であつた。それらの美しく華やかな衣服を見ると、彼は農家の娘の粗末な服をすぐ思ひ出した。紫達巴木が見るとも度く店前きに立止まると、商人はすぐと飛び出て來て彼の袖をひくやうにして内に入らせた。商人は彼に椅子をすゝめると、すぐ磚茶さへ出して拔け目なくもてなすのであつた。紫達巴木は早い商人を相手に、どうしてよいのか判らなかつた。

紫達巴木は結局、一疋十元の生地を買はされて店を出た。然し彼は、此の衣服が美しい農家の娘を一層美しく見せるであらうと思ふと、嬉しくて嬉しくて堪らなかつ

た。愉快な感情は跳みをつけて彼の心の内で大きくなり始めて人混みにもまれる時の内氣な羞恥に似た感情も何時の間にか征服されてゐた。

雜貨市の幾條かの街を突き拔けると、小さな廣場に見世物が客を集めてゐた。見物人を集めやうと鐘太鼓を叩き、皺嗄れた聲で怒鳴り散らす叫びと共に、群となつた買物客が右往左往するのだつた。紫達巴木も今は何の恐る所もなく、それらの群衆に混つてゐた。片側に相撲があると、其の向ふに手品師が客を集め、反對側には鞭を持つた支那人が、覗き繪を聲高らかに說明してゐた。

紫達巴木は興に委せて其れらを見て廻つた。覗き繪は一枚、一枚の繪が抑揚をつけた支那人の說明で終ると、すとんすとんと落されて行く。それらの繪は極彩色の北京の宮殿であつたり、支那美人であつたりしたが最後の繪は赤裸な春畫であつた。見終つた後で、紫達巴木は異常な感情の動搖と共に、ぽうつと顏のほてりを覺える羞恥に打たれたのであつた。

夜になり、大陸の冷氣が一瞬にして晝の暖かさを奪ひ去つてしまうと、さすがの市もぱつたりと賑ひを失つてしまひ所々の隙間から洩れ出るランプの光りが侘しい。澄み切つた月の光りで、市全體は白夜のように蒼白くぼんやりと曝け出されてゐる。南の方にはウムナヒイラ山嶺が自然の安らかな憩ひに就かうとしてゐるように見られ、大板上の街は蒼黑く巨大に聳へる喇嘛廟を抱いて靜かな夜となつてゐる。

隨分澤山の買物をして來た紫達巴木は、夜の雰圍氣に閉されると、晝間の陽氣さの反動のように心淋しさに襲はれて、神秘な夜の誘ふまゝに再び市に出掛けた。

市の樣子はすつかり晝と變つてしまつた。鋪々は戸を閉ざして、中に賣上げの勘定でもするのであらう、燈がちらちらと介間見えるのであつた。紫達巴木は掃き出された後のように變つた市を何故かしら淋しい氣持で的もなく歩き廻つた。街を突き拔けて、晝間は見世物で賑はつた廣場に來ても、今は何一つの物影もなく、たゞ夏虫が踏み蹂られた叢に可細く鳴いてゐるのみであつた。

紫達巴木は泣きながらも、美しい農家の娘の夢を淡く心に描いてゐた。自分が買つた華やかな衣服に着飾つた娘の姿も想像してみた。すると、娘の羞じらつた變すべき風情がふと眼前にはつきり見えて來たりする。そしてあの娘をやさしく抱く自分の幸福を考へてみたりした。だが、何故か紫達巴木は淋しかつた。一體どうすれば、あの娘に自分の焦らだたしい氣持を傳へることが出來るのかと、思ふとはや途方にくれて、諦らめに似たものが折角の彼の氣持を灰色に塗り潰してしまうからであつた。

廣場に出て人家を離れ去つたと感じた時、紫達巴木は思はずぞつと身慄ひする、ような不安に襲はれて、再び市にとつて返した。すると、何處からか胡弓の音が輕く流れて來た。それは市の裏街から聞えてくるものらしく、紫達巴木は其の音を追ふようにして裏街に入つた。其處らには飲食店が並んでゐて、何處となくざわめいた氣分が流れてゐた。其の中には洋燈を圍んで白酒に醉ひ高聲に話しあつてゐる幾多の蒙古人の群も見られた。と、醉つた男の歌ふ謠であらう。無限の哀愁をこめた低い單調な歌が響いて來た。

見渡すかぎり、廣漠たる砂丘に立ちて、
我を見送る君よ。
君が右手に揭げられし、眞白き布を、
我は永遠に忘れじ。
終りなき沙漠の旅に、巡り合ふ日は何時か、
我は其の思ひ出にのみ生く。

紫達巴木は思はず立止まつて其の謠に耳を傾けた。やがて歌ひ終ると騷々しく拍手の音が聞へて來た、然し其の賑かな音さへ、紫達巴木の心には變にうら淋しく、心細く感じられるのだつた。彼の感傷的な感情は次第に心苦しくなる程に亢じて來た。彼の周圍に搖れて動いてゐる總ての物が、自分の感情に執拗にからみついて來て、苦しめるやうに思はれるのであつた。彼はそれらのものから逃れるようにして一軒の酒店に入つた。

亢ぶつてくる感情に只だ譯も無く紫達巴木は强か白酒をあふつた。醉ふと共に、周圍から受ける焦らだたしい壓迫感だけは逃れ得たが、心に蟠る云ひ知れぬ憂愁な感情は決して去らうとしなかつた。それ所か、醉ひが全身に廻り始めると共に、晝間見た事、娘の顏、覗き繪、春畫、娘の顏、などが激しく彼の心で旋回し始めた。

紫達巴木は幾何かの金を支拂ふと其の店を出たが、醉ひは漸く全身に廻つて、足元も不確かになつて來た。然し心の内の昂りは一向に溶け去らうともしない。彼は何故かしら自暴的に怒鳴り散らしたかつた。夜も更けて來たのだらう。街はひつそりと靜まり返つてゐた。其の靜かな街を、彼はふらり〳〵と歩いてみた。酒の爲めに一層

增された傷感の興奮は次第に粗暴な影を添へて來た。紫達巴木は總ての物に腹立たしさを感じた。先づ第一に、此の市に蝟集して無智な自分達を欺して、暴利を貪る支那人を嘲けつた。それから、自分の心を此んなにも不安に突き落す娘の姿を呪ひ、其の娘から遠く離れてゐる不幸を嘆いた。

紫達巴木が一つの街角を曲り折れようとした時だつた待ちかまへてゐたように、支那人の女が一人彼の側に寄り添つた。漸く溷濁して來た彼には其れに好奇心を覺える程の氣力もなく、又其れを振り切る程の力もなかつた。女は無理矢理に引つ張るやうにしてくねくねと曲り込んだ小さな路地を通り抜け、一軒の家に彼を導いた。と、其處には荒み果てた醜き肉體の群が待ちあぐねてゐたやうに彼にしなだれかゝつてくるのであつた。

ふと輕い頭痛に紫達巴木は目覺めた。そして、自分の周圍を始めてありゝと冷靜に見た時、信じ得られぬ地獄に突き落されたと思つた。曝された醜い裸形に觸れたと思つた時、恐怖と罪惡觀がひしひしと電擊の如く彼の心を射た。彼は戰慄におのゝきながら驅け逃げるようにして立去つた。

彼の戰のきは止まらなかつた。夜半の冷たい風に弄られて、彼の身體は痙攣したようにガタガタと慄へてゐた。彼は惡魔に迫はれてゐるような氣持で、無我夢中に街から離れようとした。今や彼の心を嚙むものは贖罪以外の何物でもなかつた。自分の身體には惡魔の爪が喰ひ入つたのだ、自分は神から見放されたのだ、惡魔の塵だと

紫達巴木は一刻も早く神に謝罪を淨めたかつた。身を淨めたかつた。彼は何處をどう歩いてゐるか判らなかつた。たゞ此の惡魔の棲む街から離れたかつたのだ。彼の歩行は漸次速さを加へて來た。と、何時の間にか廣漠とした草原に出てゐた。それでも彼は憑かれた者のやうに歩き續けた。否、終ひには驅け出してゐた。

突然、紫達巴木の眼前に一條の銀河が開けた。それは西喇木倫の清い流れであつた。それを見出した時、彼はぱつたりと折れるやうに跪まづいてしまつた。そして息切れのする下から懸命に祈りを捧げた。呪文を口で繰り返しながら、彼は自分の不幸を嘆き悲んだ。やがて祈りは嗚哀に代り、悲しみの餘り溢れ出る涙は頰を傳つて小さな流れとなり、西喇木倫へと注ぎこんで行つた。

ある少年の記錄

木崎龍

その少年の家では、父も漸く老いて地方の名望家の地位に甘んじ、唯只二人の男の子の成り行きに期待のすべてを籠めてゐた。少年の兄が大學を出て東京の會社に勤めるやうになつた時、兩親は永年の勞苦がやつとむくはれたと思つてた。さうして、これからはさうさう一家打揃ふ機會もあるまいといふので、天長節の佳日を選び寫眞を撮つた。その中に、少年は中學の制帽を眉深におしさげ、その蔭で自棄的な眼を輝かせ、冷嘲的に口をひき歪めてゐた。田舍寫眞師の技術の粗さが、それを人々の目から蔽ひはしたけれども——。

少年が五歲のときであつたらうか。父は勤め先に、母と女中とは買物に、そして兄は小學校に出てゐて、廣い家は深閑としてゐた。少年は叔母に抱かれて留守をしてゐた。彼は生れ落ちるとから極めて無口であつた。

猫に迫はれてか、天井を鼠が電光のやうに馳せちがつた。少年はみじろぎもせず、ぢつと叔母の顏をみつめながら、

「こはいね」

と一言いつた。その後遠く嫁いでいつた叔母が、時たま訪れてくる折々には、必ずこの話を持ち出して、身ぶり手眞似で皆を笑はせ、少年の面には澁く薄笑ひが浮ぶのであつた。彼の無口は、五つ違ひの兄が才氣走つて人に愛されただけ、それだけ目に立つたのである。

幼稚園に這入つた時も、母に連れられていつた彼はどうしても教室に入らうとはしなかつた。なだめすかして教室に入れた揚句が、いつかな腰掛けに坐らうとはしないのであつた。小學校までの一年間を彼は遂に立ち通しで過した。

四年生の時に夏の休暇中叔母が來て滯在してゐた。ある日彼女は少年の宿題を見てやつてゐた。算術の問題でどうしても解けないのがあつた。別に難しいといふでもないそれを、彼女が嚙んでふくめるやうに說明してみても、少年はうんともすんとも言はず强情に押し默つてゐ

るのであつた。彼女は思はず聲をはげまし、又繰返して熱心に説明を始めた――ふと氣附いた時少年は聲をおしころしてせぐくりあげながら泣いてゐたのである。叔母は何とも解しようがなくて聲を呑んだ。

默々として少年は中學に進んだ。三年の時、正課の劍道の時間に胸を突かれてから、間もなく發病して肋膜を患つた。床に就くその日まで、少年は苦痛を訴へることをせず、通學を續けてゐた。父母が、その前に何故體の故障をうちあけなかつたのかと、詰るやうにして尋ねたときには、病狀はぐつと進んでゐたのである。無理をしただけに、病後も思はしくなくて、癒りはしたもののその年一杯を休み、更に三年をやり直して四年に上つたその頃、兄は早生れのところへ四年から高等學校に這入つたためもう大學の卒業を眼近に控えてゐたのだ。少年の胸にわだかまる何物かが、これを境に內的苦悶となつてはげしい葛藤で身內をさいなむやうになつていた。

少年の學校の成績も芳しいものではなかつた。彼は不勉强だつたのではない。それだけに、痛切に自己の才能を疑ふやうになつた　さうして、自分の物に耐え得る力持ちこたえる力を疑はねばならなかつた。健康に對する絕望もひしひしと彼を囚へた。一方では、學校の敎育といふものが、人を作るにどれ程までに成果を持つものであるかが怪しまれてくるのだつた。疑ひは社會に及び生にまで到つた。しかし、立ち返つてすべてはそのものの才能と耐久力とへの脆弱さにかゝつてくる。それは、われとわが身を責め苛むことを意味し結果した。

少年の父は生一本に熱くなり、又冷め易い陽性の人であつた。母はその蔭にゐて、さうした夫を補ひ助けるに適はしく陰性の人であつた。永い反噬と融和との過程をへだてて、今はともに彼等の未來と希望とをその子供たちにかけてゐるのだつた。その二人には、少年のかうした心內の葛藤が理解され得る筈のものではなかつた。

だから少年が、自分の考へを最も素朴に單純に切出した時、約めて見れば學校をやめて獨學するといふことになるのであるが、それを言つて見た時に、兩親が驚駭し狼狽したのも無理のないことである。二人にしてみれば世間にはこの少年よりも才能に惠まれぬ學生が――現に彼よりも席次では下の多數の生徒がゐるではないか――皆

曲りなりにでも學校を出、社會に立てば一人前にやつていくのだ、それをしないのは彼の不心得であり、不勉强だからだ、と言ひたくなるのもむしろ當然であらう。少年にもそれ以上說明する言葉の持合せはなかつた。で彼は父母の前に固く座つたまゝ、自分は理解されることはないのだと思ひ、理解させることも出來ないのだとあきらめた。父母が狼狽のあまり、東京の兄に直ぐ歸るやう電報さへ打つたことを知つて、少年は再び默々と學校に通ひ出したのである。

尤も、少年としても、父母や兄にどういふ形で理解されたいのか、それを自分にもはつきりと摑めてはゐなかつた。苦惱の胚胎が、むしろ、そこにあつたのでもある――自己のつきあたつた、この茫漠とした混迷を、どう切り拓くべきなのであるか。勉學によつてか、忍耐心の養成によつてか。自分はいつたいどんな具合にこの社會を生きていくものなのであるか。或ひはまた、生の解決なるものが、それ自體目的となり得るものなのであらうか。

それらは、少年の頭を强く重く壓しつけるのに充分であつた。內攻的にばかり生ひ立つてきた彼にとつては、今問題はあらゆる角度をとつてそこに集注されてゐた。と同時に、それは單一の姿ではなく、複雜混淆のまゝ彼に襲ひかかつたのである。彼には質すべき師もなければ、語るべき友もなかつた。あるとすれば、たゞ、兄だけであつた。その兄とても、所詮は彼にとつて他人に過ぎず、その言葉も他人の言葉でしかなかつた。霧は濃くなるばかりであつた。かうして少年の顏も亦、例の寫眞像となつて現はれたものに變つていつた。

この頃から、少年は自分の生活そのものを變へることによつて、ラビリンスからの出口を求めようと努力しだした。先づ彼は、家族と別交渉の天地を作り、そこに自己の世界を築きあげようとした。

彼の家は二階建ての上に火の見櫓があつて、もとより火の見の用に立てるではなく、恰度村の目印ででもあるやうに、古くから雨風に曝されてゐたものだつた。その櫓の中は三疊數きくらゐの廣さで、屋根に蔽はれた三階にもあたる部分を計算に入れると四階に當つてゐた。

彼は自分の持物をすつかりそこに運び入れた。こつこつと丹念に大工仕事をやる彼は、そこにベッドを作りつ

け、椅子テーブルを据ゑ、書架を立てた。かうして學校へは前通り往復するが、そこから何物か引きださうとする望は全く捨てさつて、只管に自己の確立、搖ぎない自己の依存物を求めて努力しようと決心した。日課がたてられ讀書の表も作られた。時によると貧事さへ「書齋」でとつた。一口も物を言はぬ日も珍らしくはなくなつた。

肋膜を患つた後は思はしくなく、それが引つゞき彼の健康を阻碍してゐた。苦痛を訴へないだけではなく、それを感情にも表情にも現はさない、又現はしてもそれとはつきり讀みとりにくい少年に對しては、兩親さへその判斷に苦しんだ。夕方七時頃にはもう寢込み、かと思ふと、十一時頃から起き出して何やらやつてゐる少年を見ると、父はもうすつかり放任してしまひ、母は唯もうやきもきしながら、さうかといつて何か言へば感情が喰ひ違ひ、世話をしようとしても變にぎごちなく苦い後味が殘るだけでどうにも手のつけようがない有樣であつた。

兄からぢかに少年へ宛てゝ醫者の診察をうけるやうに言つてよこし、父母宛てにも今の内に手をつくしてをかなければ無理をしてゐるだけにとりかへしのつかぬことになるのではないか、と言つてやつたりしても、少年は頑としてそれに從はうとはしないでゐた。

もともと體は丈夫な方でもあり、見たところ健康さうでもあるのだから、學校などでも肋膜は全く癒つたものと見られてゐた。とにかく口をきかぬ性質であるから、武道や體操の時間など、氣持の悪い時でも、休ませてくれとはなかなか言ひ出さないのであつた。それも、一度武道の時間に見學させてくれと申し出たとき、教師が、別にどこも悪くはなさそうではないか、と言つて許さなかつたので、それ以來どんなに苦しくても休むといふことをしなかつた。この場合などは、教師に對して殺しても飽きたりぬほどの憎悪を抱きながら、反射的にその憎悪によつて肉體の苦痛を押しこらえてゐたのであつた。そのことは、兩親にも何か別のことでふと洩らすときもあつたが、彼等もそれほどであるとは想ひもよらないでゐた。

四年に進んだ夏である。休暇も間近い頃、體操が運動場の草取りやローラー引きなどの作業にあてられたことがある。少年はたへ難い苦痛を覺えながらも、休ませて

くれとは言はず、默々としてするだけのことをすまして家に歸りつくとぐつたりしてしまつた。母も心配して學校を休みたいといふのをそのまゝ休ませてゐる中に、夏の休暇になつた。別に床につくでもなく、又自分の生活態度を變へるでもなかつた。しかしそのまゝ休暇が濟んでも、彼は學校に行く素振りを見せなかつた。兩親も、いさゝか手をつけかねてゐたところであり、恰度休暇をとつて歸省中の兄がさう干渉しないでもよからうといふ意見であつたりして、暫らくは少年の意中に立入ることもされなかつた。

九月も半ばになると、さすがに父がたまりかねて、どうするつもりであるかとたづねたところ、遂に少年は休學したいと言ひ出した。さうなると父も默つては居られぬといふので、色色とわけを聞いて見るのだが、唯休學するといふばかりでちつともはつきりしたことはつかめない。體が悪くでもあるのかと聞いても、さうぢやないと言ふ。それでは學校が嫌になつたのか、三年を二度やつたりして皆に遅れたりしたからででもあるのか、と聞いても、そんなことはちつとも氣にかけてはゐないと言ふ。さうなれば生一本の父であるから、それはお前の不心得だ、學校もあと一年のことだし、體をいたわつてさへゐれば卒業ぐらゐはどうしたつて出來る。それを一年休學したりしては、結局學校がいやになるばかりにきまつてゐる。大體勉强したくても出來ぬ惠まれぬ人も多いのに、そんな我儘を言ふとはどうしたことか、といつた調子でふだん放任的に過してきただけに、積りつもつた叱言を一度にあびせかけるのであつた。かうなると少年の心は固くむすぼれて、もはや双方の感情の溝は急激に深くなるばかりである。

父から相談をうけて、少年の兄も困惑した。彼としても亦、少年の氣持や考へを父に說明してやつてそれが理解される望みはないのであるし、元來何故少年がそこまで突きつめて考へたかが理解され得たにしても、それではそこから如何にして何の方向に進み出るかは少年自身にさへ模糊としてゐるのであるから、それを抉ることは少年を殺すことを意味する。又それが父を救けることになるのでもないのだ。とどのつまりは、とにかく休學はするとして、その間少年は父の秘書格でその仕事を手傳ひ、傍らゆつくり身心の修養に努力すること、といつた調停に落着いたのであつた。勿論さうした妥協が、父に

とつても結局無意味であるにはせよ、家族の生活といふものが存在する以上、やはりなくてはかなはぬものであつたのだ。

この時から、少年は餘りにつきつめた自分の考へ方を少しゆるめてみるやうになつた。それは、少年期の精神と肉體とが堪え得られる苦惱の極限の自然的な後退であつたのかも知れない。それは火の見櫓の生活をもとの居間に引きさげることにも現はれて來た。父も母も、永久に離れ去つたと思はれた自分たちの物が、再び返つて來たやうな氣持でそれを眺めた。母は、今までになく彼の身の廻りに注意をはらふやうになつた。

それはだが、兩親の見誤りであつた。彼等が多かれ少かれ少年を意識に上せてすることなすことが、御機嫌取りとして少年に反映することに氣附かないでゐられたからである。それを眼をつむつて受けいれるには、少年の感受性は餘りに矢りきつてゐたのだ。兩親には譯のわからない、少年の突發的な荒々しい言葉や動作は珍しくはなくなつた。それは彼等を悲しませた。その兩親の悲しみは、自乘されて少年の心を深くつきさした。

一方では、自分の作製した日課表や讀書表の不確かな進行が、少年を絶望的にいたぶつた。それは誰しもの經驗するところだとはいへ、彼の場合には、その遂行如何に自己の存在意義の證據がかゝつてあつた——むしろ自己を決定する唯一の具體的な條件であつたのであるからかうした少年懊惱は至りつめた最後的なものであつたと言へるのである。

歳が暮れて歳が明けた。さうして少年の得た最後の結論は、新しい環境に生きることであつた。家庭での生活は彼にとつては唯息苦しい重壓の他に、何物も齎しはしなかつた。彼がもし生を生き續けるならば、それは決して家庭の中ではあり得ないまでに、彼はしめつけられてゐたのだ。それは父母と少年との意志を絶し、彼等の生を嘲笑してゐるもののやうであつた。

少年は兄に手紙を書いた。

思ふところあつて上京します。僕は自分の名前から新しく星久といふ姓名を作りました。僕はあなたを兄と思はず先輩友人と考へるつもりですから、その樣に御承知下さい。上京してからは自活するつもりですが、それまで暫らく同居させて下さい。くはしくは會つてから話します。

それを受とつた兄が半信半疑と驚きとの中にある間に少年は自分名義の貯金をすつかり引き出すと旅裝をとゝのへ服は兄の高校時代のものをつけ、春も淺い頃とて父の古いオーバーを持ち出した。さうして母にだけ、冗談とも本當ともつかぬ調子で、東京行きを打明けた。どうしたことかと母が思ひ惑つてゐる中に、黑革の手鞄と中型のトランクをさげて家を出ようとした。母は物も言へずにゐたがやつと、

「お父樣に御挨拶をして……」

とだけ言つた。父は入浴中であつた。少年は、はいてしまつた靴を脱ぐのも面倒といつた風でそのまゝづかづかと浴場に行くと、外から「行つて參ります」と聲をかけた。父はそんなこととも知らないから「あゝ」といつものやうに返事をした。

それは、山陰線の片田舍から殆んど一日仕事の旅であつた。途中東海道線に乘換へる時に動いたきり、彼は車室の片隅にぢつと坐つたまゝで飲まず食はず眠らず、じつと兩膝を見つめて搖られ通した。

京都驛で打つた電報でやつと本當だと知つた兄が、東京驛に出迎へた時、少年はさつさと省線電車に乘りこんで、待呆うけを喰つた兄が自分の下宿に歸つて見ると、もう少年はとうに上りこんで、蒼くむくみ氣味の顏に手をあてゝごろりと寢轉んでゐた。幼い頃來たことがあるきり、始めてとも云つていゝ旅なのだ。兄は敢て驚かぬといつた樣子で聲をかけながらも、そこに人に頼るまいとする固い決心のほどを見たやうに思つた。

しかし、長途の旅行での無理はてき面に少年の健康にひゞいた。下痢氣味のだるい倦怠が彼の全身を占めつくした。少年はあらためて自分の健康に絶望を感じなければならなかつた。會つたらくはしく話すといつたそのプランを、兄は聞くことが出來なかつた。約めて言へば働きながら勉強するといふことになるそのプランを、今は少年自身不可能だと信じなければならなかつたのだ。よし健康體に惠まれてゐたにせよ、この失業都市でどれだけのことが出來たであらうか。しかもこのプランが、彼にとつては目的であるより手段であり、從つて、卽座に實現を必要としただけに、少年の絶望は大きかつた。會社勤めの兄に代つて案内して呉れる宿の人について見る東

京は、この少年のとぎすまされた神經に殺人的な空氣を吹き送つた。

一時的だと思はれた下痢は、引續いてはかばかしくなく、肉體の倦怠も今は固定したもののやうになつた。兄の机の上でひろげる書物に、少年はもはや何の興味も希望も感じることが出來なかつた。

新しい門出は、立ち上りで完全に叩きつぶされてしまつた。追つかけて父が上京すると知つた時、少年はむしろ喜んでくにへ歸らうと心を決めた。父とは顏を合はせたくなかつた。こんな狀態で三人對座することの苦痛を想つた兄も、それに反對はしなかつた。――いよいよ歸るといふ前の日、兄弟はしみじみと連立つて靜かな通りを選んで歩き廻つた。兄も弟も言ふことはなかつた。唯默つて歩いた。この時ほど、二人がお互を兄弟だと心から感じ合つたことはなかつた。

翌晩、急行列車で發つ弟と、見送る兄との眼には涙が光つた。それをかくし合はうともしなかつし、涙が言葉を殺した。

以前の少年はもう存在しなくなつた。あらゆる出口を封じられた少年にはもう希望も努力もあり得なかつた。既に、前から少年の肺は結核菌にむしばまれてゐた。上京の直後から咯喀がぐつと增した。下痢は、既に腸を犯されたことの表徵であつたのだ。しかし、長途の旅行の無理といふことが、反つて彼自身にも兩親にもさうした觀察をさまたげてゐたのである。その上に彼は、自分の健康に何程の關心も見せなかつたのだ。それが又兩親の眼を欺いた。

食事の量は目に見えて減つた。晝間から、自分の居間や茶の間などで、うつらうつらと轉寢をするやうな日が續いた。さうした徵候が眼に立つほどになり、下痢が度重なるやうになつて、兩親が無理矢理に醫者の診察を受けさせたとき、すでに病狀は救ひ難い昂進を示してゐたのだ。咯喀などでもしやと疑つてはゐた兩親も、一度も咯血しない最惡性の病ひに反つて欺かれてゐたのであつた。しかも、病人は依然自分の體に注意を向けようとはしなかつた。

夏も眞盛りの頃、下痢が一日に十數回を數へる程になつた。すでに再起の望みなしとの診斷が下されてゐた。

もはや少年は病床から起き上る氣力さへ失せてゐた。その頃から、少年は痛切に生きたい衝動に苛まれた。何の爲に何を目的として生きるかそれは全く問題ではなかつたのだ。生きることそれ自身だ。生きる！それは何と輝かしいことであるか。もう一度生きることが出來たら！

それまでは快く思はず、むしろ遠ざけた醫者の投藥と注射を、彼は進んで受けた。それだけでは心もとなかつた。新聞や雜誌の廣告で目ぼしい賣藥を取りよせた。全身の營養回復の爲に實に時間と手間のかゝる眞再療法も實行した。母は文字通り不眠不休であつた。父はもはや諦めてゐた。涙の眼で我が子の生への焦燥を眺めた。彼はこの時、眞實子を愛してゐたことを知つた。愛の喰違ひはもはや彼岸にあつた。しかし、その現在に彼は爲す術のないことをも、知らねばならなかつたのだ。

ある婦人雜誌の難病治療體驗記の中に、恰度少年の場合にそつくりの病氣を剋服した藥の名を母が見つけ出した。少年は希望にうちふるふ視線でその記事を貪り讀んだ。その藥で、その通りに、もしも癒ることが出來たら――母と子との全く合一した至純の感情であつた。母はその頃、病兒が便器にかゝる僅かの時間を、便器をおさへながらうとうとするだけであつた。藥の注文を賴まれた少年の兄はこの分では急に容態が變るといふこともなからうと思つた。彼は會社に縛られた身でもあり、愈々といふ時まではといふので、まだ東京にゐたのだ。

藥が兄の手で發送された翌日の朝である。この田舍では郵便物は朝一度配達されるきりであつた。病床の中でその氣配を知つて、少年は「藥はまだか」と母に尋ねた。前日だされたばかりの藥の小包は屆いてゐようもなかつた。

「ねえ、お母樣。あの藥は本當に利くだらうか」

物凄いばかりに痩せ細つた少年は、蒼白の顏に眼を大きく見ひらいて言つた。彼の母は思はず瞳を伏せた。

「利きますとも」代つて叔母が答へたが、その言葉の强さにまづ自分が驚いた。

「あゝ、生きたい。もう一度癒ることが出來たらなあ」

その間にも肉體が彼を苦しめてゐた。しかし、見ひらかれた瞳は凝然と一點に注がれて動かない。その光は、すでに希望を喪つてゐた。死の苦痛がじりじりと彼をしめつけてゐた。少年の呼吸は、病室につめてゐる人達の呼吸を苦しくした。

少年の死顏は、うつくしく嚴かであつた。

泥家

鈴木啓佐吉

それは登洲がいくら思出さうと焦つてもなかなか思出せない、ずつと前の——或暮方であつた。その日、終日街道や畑の中に落ちてゐる木片や紙屑、枯枝などを拾ひ集めて、土塊でも喰べたい空腹と重いボロ靴をひきずつて歩つて見ると、彼の家の入口の戸が釘づけにでもされたのか、或は内から誰かが悪戯をしてゐるのか、登洲の細い兩腕に力をこめて開けようとしたがなかなか開かなかつた。

をかしいと思ひながら、燃料を一ッぱい詰めた籠を踏臺にし、軒に近い四角の空氣抜きに顔を突込み、内を覗いたが、目に入るものは唯うすら寒い闇と油の匂ひばかりであつた。留守をする母親ではないし母親が町へ出る時はきまつて彼にそれを云ひ聞かして行くのが普通であつたので、いよいよ彼は解らなくなり、俺へ無斷で町に出て行つたのだらう——と、彼は母親を極度に恨み始めた。

母親を恨み始めた彼は、母親への恨みと一緒に、何か寒さに似た怖しさを周圍の暮色に感じだした。

葉などは眞夏であつても繁つた事のない、瘦樹のある並木を曲り、うねうねした細い畑の中の道を飽き飽きする程歩いて、彼の家は在つた。家を取圍むやうにして高粱で結んだ垣が、泥壁を力一ッぱい支へてゐるやうに立つてゐるほか、家と名のつくものは一軒もなく、夏ならば全裸體になりたい位の涼風を持つてくる廣い野面と、街道を越えた處に同じ泥家が四、五軒、忘れられたやうに時々ほそぼそと煙をあげてゐる部落である。

——家にゐなかつたらきまつて畑にゐるのだし、畑にゐなかつたら、薄暗い土間に土龍のやうになつて玉葱や蒟などの根を揃へてゐる母親であつたのである。

彼は云ひやうのない途方にくれた。

彼は自身の臆病を打負かす心算で籠から下り、冷えびえとして迫つてくる闇のなかの、いま來た道をふり返つて見た。皿の底のやうに窪んでゐる畑を越した街道はもはや夕暮のために暗く、その暗さのあちらで鶏の飛上るやうなけたたましい聲が聞えてきて、それが一層彼を怖しさのなかにひきずつていつた。

すがりつくやうに戸の極く僅かな隙間に顔一つぱいを押つけた彼は、家のなかの闇に向つて母親の名を呼んだ終ひにはがむしやらに戸をぶつたたいた。戸をぶつたたいてゐるうちに涙がでた。手の甲でそれを拭うと、涙に濡れた部分だけが夕闇のなかでも、はつきり白く剝げ落ちたやうに縞を描いた。

「おッ母ア！」

いまは必死となり減茶苦茶に戸をたたいた。足で蹴つた。垣の一隅鶏舎ではこのもの音に驚いた雄鶏がククククウ——と奇聲をあげただけで、登洲の求める母親の聲などは聞かれもしなかつた。

「おッ母ア！」

全身を入口の戸にぶちあて、彼は泣き叫んだ。と、何か家のなかで、ものの動く氣配を聞きとめた。

「開けろ！おッ母ア開けろ！」

わめきたててゐる彼の前が、いきなり内側から開けてくれた。開けてくれた人は背の高い、闇の中でも白く見える顔の男であつた。その男は煙草の匂ひをさせながら彼を突飛すやうに横に押退けると、畑の眞中を、おそらく畑のものを踏みつぶしてだらう泥棒犬のやうに駈けていつた。この脱兎のやうな出來事でアッ氣にとられながらも母親の姿を認めると、彼は何か甘えかゝりたい氣持に支配され始めた。

「なにさわぐだ、この馬鹿餓鬼！」

闇のなかで男のやうに母親が怒鳴つた。怒鳴られた彼は母親の不氣嫌を解しかねた。彼は着物の袖端をチュチュ吸ひながら、そろそろ土間に入り込み、突立つてゐた

「いまけつた人のこと、誰にもしやべるでねぞ。いいか！よけいなことぬかすと飯食はせんから！」

母親は激しい息づかいでかう命じた。彼は默つて、破れてゐる重い布靴を脱いだ。

「——しやべるでねいぞ！」

なほも押してくる母親の言葉に、首でうなづいた彼の足許に、何か硬いものを母親は投げてくれた。手探りでかき集めて見ると、ツルツル滑る紙に包まれたもので、小さい丸いものであり、甘い匂ひのするものでもある。

室の隅の小さいローソクをうす暗くともした母親は、向ふをむいて髪をかきあげながら、それを喰へと云つた。

小さい紙を廣げるとハッカの匂ひがした。毛唐みたいな匂ひもした。嚙んでみると、天氣のいい日、向ふの街道によく賣りに來る老人の飴みたいなものであつた。然しあの老人の飴よりはうまい匂ひがすぐ鼻にくるのである。彼はこの珍しいものをなるべく呑み込まないやうに舌の上で轉がして置いて、何時までも口のなかに入れて置きたかつた。彼は無暗に嬉しくなつた。上衣の横のふところへ殘つた紙包を入れたり出したりした。

母親は土間に下り竈の前にうづくまつた。夕飯の仕度である。

「おッ母アな、町の旦那まで行つて來るだ、けふ家にゐるんだぞ、すぐ戻るから遊びに出かけるぢやないぞ、な」

「すぐ歸つて來るか？俺アも行くぞ」

「行つてなにするだ。ウン行つて何にするだよ。ばかおッ母アゝ歸んの待つてろ、すぐ戻るからな、な」

彼を突飛して彼の家から出て行つた背の高い男は、彼等母子からは何時の間にか旦那と呼ばれてゐた。その男は、町の市場にある野菜卸屋の三番番頭であつた。

彼と母子の最初の近づきは、野菜の大量註文を受けた卸屋が、數人の店員を遠くの部落まで出張らせ、野菜の買締めを行つた時であつた。

その頃、登洲の母親は自分一人で育てた野菜を町の入口にある、雜貨や酒や野菜を商つてゐる小さな店へ、毎日毎日運び、數枚の銅貨と交換して來てゐたのであつたが、或日畑に出て明日の商品をとりまとめてゐる母親の傍に來た男が、この畑全部にある野菜を買ひたいが、賣つてくれるだらうかと、とんでもない言葉で母親を驚かした事から始まつてゐる。その日銀貨を鷲摑みにした母親は生れて一度も味つた事のない嬉しさに、一晩中眠れなかつたのであつた。

母子一家の野菜全部を買つてくれたのが「町の旦那」であつた。

町の入口にある雜貨屋へ品物を運ぶ事を止めさせ、日數をきめては野菜を取りに寄こすやうに計つてくれたのも旦那である。母親は土龍のやうに苦勞を重ねないでも細々ながらも竈に火を焚く事が出來たのである。

登洲が突飛ばされたのは、その頃でもあつたらう—。

「俺、行つてもいいぢやろ、なおッ母アゝ」

洗ひざらしではあつたが、取つて置きの着物を着た母

親は、貯めて置いた手土産の鷄卵を四ッ五ッ木綿袋に入れ、旦那の許に出かけようとすると、彼は母親に同行をせがんだ。

「なんぼ言つても解んねなこの、なんでそんなにわからねんだ！」

怒つた母親が土塊を拾つて彼に投げつけると、リスのやうにすばしこくすり抜けて、遠くから母親に悪口を云ひだした。土塊は畑にゐた鷄に落ちただけであつた。

「なんだどうした？おッ母アゝ」

青白い顏の旦那が來たのである。その眼は妙に鋭く、彼が吐く言葉と顏の表情は何時もその反對を行く人間である事を、母子はは全然見逃していた。母子にはただ有難い旦那であつたのである。

訪ねやうとしてゐる旦那の姿を見た母親はチョットはにかみ、長く延びた爪で木綿袋の結目を解いたり結んだりしながら愛想笑ひをして云つた。

「旦那のとこへ參りますべと思つてハア、いま出かけようとしたら、この餓鬼が、俺も行くなんてハアでもまあ、旦那さまに來て貰つて、俺あハア——」

男は著くもないのに絹のハンカチを取出し、おはばさに頭の先からなで廻し、顏中赤くなるまでハンカチをコスリつけた。

「まあ家へ入つて語るべ、サ入れ入れ」

吾家に入るやうな足どりで彼は先に入つたが、すぐ出て登洲を呼んだ。

「來いよ、登、ゼニやるから買つて來て食へ、あすこに何か賣りものが來てゐるぞ」

皮の財布を取出し、三枚の銅貨を登洲の手に握らした彼は飛びつくやうに銅貨を貰ふと街道めがけて走りだした。

「この前もチョット云つたが、いま俺んところに金はないんだ。實のとこ——」

しばらくして男は重くるしく口をきつた。そしてその表情には言葉の逆なものが溢れてゐた。

「まア、それで、それではあんまりだべぞ！」

母親は何か一生懸命に云ふ心算であつたが、それが自分の思ふとほりの適度な言葉にならないので、もどかしがつた。

「解つてゐるよおッ母アゝ、實は方々あたつて見たが運の悪い時は悪いもので、どうにもまとまらんのだ——」

「登の親爺の借金つてこと旦那も知つてゐるだべ、それもほんとに借りたものやら、親爺が死んでから出て來た借金だもの俺アーどうすべや。親爺が生きてゐての話なら話も解るが——」

しどろもどろに云つて了ふと、母親は涙をながし男の前で拜み始めた。

「いま旦那さまにそんな事云はれて、俺アどうしたらいゝんだべ、旦那はそんな金なら何時なんどきでも出してやるからと云はれたので、今日まで旦那のいゝやうになつて來たのさ。なんとか出來ますめいか、このとほり願ひやす」

男は母親の縣命な哀願など一つも耳に止めずと云ふ風を裝ひながら、その言葉を一ッ一ッたたみ込むやうに胸の底でうけ止めて聞いてゐた。

母親の云ふ借金と云ふのは、夫の登樹が死んだ十日めあたりに、この金をこちらの親爺に借したのだが、すぐ拂つてくれと、度重に水より以上に降つて湧いた話であつた。貸してくれた男と云ふのは、町で自轉車屋を營んでゐる者で、登樹がバクチでとられた時に貸してやつた金であり、俺はいままでお前さん達に拂つてくれとはいはなかつた。それはお前さん達から持つて來られるのを待つてゐたのだ。だが一向そんなそぶりもないから俺の方から貰ひに來たのだ。サア拂つてくれ、拂つてくれ拂つて貰ひませう——と、おそろしい見幕に變り、何んでもかんでも今日貰つて歸らねばならんと呶鳴りあげたりしたのであつた。

僅な金額らしかつた。が、その度に云譯をして來たのである。母親が男に出金を申込んだのは勿論であつた。旦那は簡單にそれをひきうけてくれたのだつた。

昨日もその自轉車屋と云ふ男が來て、貸金を貰へないハライセに、土間に積んであつた玉葱を泥のやうに踏みつぶして了ひ吹けば飛びさうな泥家を、たたきつぶして了ふやうな大聲を張りあげて歸つたのである。母親はもう怖ろしくなり、一日も早くその借金を返して了ひたかつたのだつた。

「俺もさ、始めはその借金とやらを返してやるべと思つたさ、だがいま云ふとほり、いまいまと云つて俺の手にその金がないのだ。あれば譯のない金高なんだから、そんな事造作のねい話さ——」

母親に劣らず男も順序の轉倒した辯明をくり返すのである。

「——で、おッ母アどうだ、思切つて登の野郎とこの家から、お前サンいつとき別れて見る氣はないか。そんなら都合はいくらもつくがな、話は——」

「家と登と別れろだと！旦那！」

「ウン、仕方がないな——」

ドギモをとられたやうに驚いた母親を、男は冷たく見返し、亭主の登樹が遺した借金は思つたより多く、そんな譯ではとても支拂ふ事が出來なくなつたと述べた。自轉車屋の話では僅な金だと云ふし、男の言葉によれば多額な借金だと云ふ。母親はまたドギモを拔かれて了つたのである。

向ふの街道を通る石材を運ぶ空馬車を見つけ、腹の底からしぼり出したやうな聲でそれを呼び止めた男は、とにかく町の自轉車屋とも會ひ、その上この話をはつきり解決してやらうと母親に談じ込んだ。

「——女がゐるんだア、町までチョックラ乘せて行つてくれ——！」

彼の聲量は機械のやうに空馬車を止めた。そして母親は風のやうにそのまゝ男の言葉に從ふより外はなかつた町をめがけて登洲はトンボのやうに走つた。畑も道もなく一直線に飛んだ。走りながら彼は掌を廣げて銅貨見つめ、よごれた掌の中で汗をふいてゐるのを見屆けるとまたも一散に駈けだした。

畑を過ぎ、町までの長い道を走り拔いてくたびれた頃町の大通りがあつた。美しい紙の旗をなびかせてゐる店から、彼の希望どほりの飴を買つた。

彼はソット持歸つて母親に見せたいと思つたが、この考へが二尺も歩かないうちに、赤い紙に包まれた飴の半分を口のなかに押込んでゐる彼であつた。

銅貨と飴が彼の掌から姿を消して了ふと、彼は一向この町が面白くなくなつてきた。自然、足は吾家に向いてゐた。たいくつな彼は上衣を旗のやうに振り廻して歩いた。

あたりが暗くなつた畑から葱を拔き、それを喰べ喰べ彼は歸つて來た家のなかは暗く靜だつた。彼は家のなかに入つてもいいものかどうかを迷つた。が、戸外の闇がそろそろ怖ろしくなつたので、彼はまた呶鳴られる事を承知で入口の戸に手をかけた。と、彼の眼が世にも怖しい錠が重く冷たくそこにぶら下つてゐるのを發見した。

「ウウ――ッおッ母ア――」

登洲は小さい身體を大の字に擴げ、殺されかかつた仔犬のやうに吠えだした。

夜に入つて部落一帶を沛然として豪雨が襲つて來た。豪雨は地上の泥を二尺以上も躍ねあげ、窪んだ畑を水と流し、尙も足らずに樹木も家も根こそぎ同じ方向にぶちのめした。地上一面は泥海と化し、空が破れたやうな豪勢さである。豪雨は曉方近くまで續いた。

朝であつた。

草で葺いた屋根だけが水の退いた地上に殘され、奇蹟にも生殘つた赤い一羽の鷄がクククク――と喉を鳴して穴だらけな布靴を穿いた子供の水でふやけて蒼白い脚を草屋根の下から引張り出してゐた。

老家行

(A Fairy Tale)

長谷川四郎

私が漸く物心ついた少女の頃に、仲のよい兄弟たちと一緒にゐながらも、まるで獨りぼつちのやうに、そこで育つてゐた古い家は、谷間の中に立つてゐる白壁造りの小やかな一軒家でした。昔ながらの門の前を、村の方へ行く小路に沿つて、一筋の小川がいつもさらさらと爽かな音をたてゝ流れてゐます。家の人が皆そこから立ち去り別れ別れに遠くの町々へ旅立つて、それぞれの生活を營むやうなつてから指折り數へてみますと、もう六十年と云ふ歳月が過ぎて、そのあひだ私もさまざまな世の中の出來事を通つて來ましたが、それでもその小川の音だけは消えることなく、いつでも私の中を淸らかにいよいよ深く流れてゐるやうです。――それに今日は何と云ふ和かな小春日でせう、かうやつて明るい椽に暖かな陽射しを浴びてゐますとさつきから渡り鳥らしい小鳥の影が白い障子に時々うつるやうです。そして時折私の短い白い髮に顫へてゐる涼しい風は、その長く豐かに黑かつた日を思ひ出させます。きつと、あの淸らかな流れの一滴が響き入ることによつて私の生は初まり、それが出て行くことによつて私の生は終るのでせう。この遍き秋の光の中で眼を瞑つてゐますと、再びあの春淺い故郷の山河にかこまれて庭に含みそめた若い桃の花々が見え、靜かな壁のむかふの方から、ゆるやかにあの小川の音が聞えて來るやうです。――その頃私は人形と一緒に暮してゐましたが、人形は私があんまり可愛がつたために、色褪せて小さくなり、ある時、氣がついて見ますと、何か新たなものにその位置を讓つたやうに、それはもう私の眼から永久に消えてゐたのです。今はそれがあの小川に乘つて流れて行つたやうに思ひ出されてなりません。どんな山奥の夜の、岩間の深みから湧き出て、あの小川は、どんな大きな海の、光り輝く朝の中へ、溶け入るのでせう。それは聞き入る者の心をいつかしら解きほぐしてゐるやうな秘かな律べです、そのとき心は何かに悉く占められその何ものかゞ形もなく、靜かな音樂のやうに、ひろび

ろと無限に擴がるのです。今、私は祖母があの今はない古い家の、明るい椽先の午さがりの中で、ふと仕事の手を休めてぼんやりしてゐた、老後の細々と無駄のない後姿の影を心から理解できるやうな氣が致します。その姿をはつきりと思ひ出すことが出來るためには、私自身もいつの間にかこんなに年老いなくてはならなかつたのです。そして私もうしろから見てゐる柔らかな小さい瞳を暖かに感じてゐます。それにしても、たゞ思ひ出の中にだけゐる、私の變した物たちはどうなつたのでせう、それらは散る花のやうにたゞ方向を示して、私の眼から次々に消えたやうです、そしてその方向へあの小川は終に私をも流すのでせうか。そのとき私はもう思ひ出さず、たゞ徐々として忘れ去られる者になるのでせう。……しかし私の思ひ出とか、あなたの思ひ出とか云ふものよりも、在るのはたゞ一つの大きな思ひ出です、その中で人は生れ人は滅びます。そこに私の踐した小さな足跡も傷が癒えるやうにやがて無くなるでせう。丁度あの古い家の跡に草が生ひ繁つて、谷間は春ごとにたゞ一色の美しい綠で蔽はれるやうに。

その家はもう疾くの昔に無くなりました。それは私たちがゐなくなつてからも、人住まぬまゝに荒れ果てゝ崩れかゝり乍ら訪れるものと云つてはたゞ春ごとに軒に巣くう燕の一家族や、また祖母のお母さんが娘のときに道ばたで拾つて差木した小枝が大きくなつたと言ふて殊にも女たちが喜んでゐた殆ど窓をうづめて咲く野薔薇の花や、また秋の夜長を空しく破風に鳴る裏山の楓林の風や年毎に庭の定まつた立木に來て歌ふ鶯や、山のかなたから突然おそろしく迫つて現れる夏雲の降りそゝぐ雨だつたでせう、しかしそれを生きて内から窓を開く者はゐまんせでした、たゞ寒々と留守だつたのですが、それでもその古い家はそれ自ら生きて私どもの歸り住むのを待つかのやうに、不思議なほど永くそのまゝ立つてゐたさうです。しかし或年の春のこと、丁度あの窓をめぐつて野薔薇の白い花々が咲き亂れる頃でしたが、私どもの遠緣にあたる人が、崩れかゝつたその家を建直して、そこに住むことになりました。家は外から見た樣子ほど壞れてはゐなかつたさうです。壁は新たに塗られ、屋根も葺きかへられましたが、その他は小さな部分もみなそのまゝ使はれたさうです 私が字を覺え初めたころ 窓の外に立つてうす暗い室内にうつむいてゐる母の白い額を氣付かれず

にそつと眺め乍ら、あの子供らしい優しさに滿ちて、母を聲で呼ぶ代りに、默つてその靜かな呼聲を幼い字にして「オ母サン」と落書した、窓框の板なども、きつと荒々しくその位置から取のけられはしなかつたでせう。けれど、どんなに注意深くしても、特にかう云ふ家の修理と云ふことには、どうしても荒々しさが伴ふやうに思はれます。本當に突然のことですが、何でもその人たちが引越してから一月ほど經つて、漸く居心地の落着いて來たとき、或日その一家に何かお祝ひの大きな振舞が近づき、その支度のために一日中さまざまな料理の用意をしたさうですが、その宵、少し疲れていつもよりずつと早く皆が寢しづまつたころ、石の大きな蓋をびたりと立てゝ置いた瓮の蓋の口から殘り火が洩れたらしく、それが瓮所のはめ板に燃えうつり人々が時ならず眼覺めて氣付いたときは そのあたり一面の火で、もう何ともしやうがなかつたさうです。その家は跡方もなく燒けて了つたのです待ち設けた祝祭の朝に眼覺める筈だつた人々は、それよりも早く來た思ひがけぬ火事に、恰もそれが實はその祭りであつたかのやうに、愕いてぼう然と眼をみはつたことでせう。星もなく微風もない夜、谷間の一つ家の火事です。散り殘つてゐた野薔薇の花も、私の植えた若い桃の木も燒けて了つたでせう。小さい家でしたけれども、一晩中かゝつたさうです。初めはあの小川の木に助けをかりて、それを消さうとしたさうですが、やがて諦めて爲す術もなく、大部離れた谷間の入口にある、これも一軒家の新右衛門（しんねむ）と云ふ隣人にあの家の無くなるのを見送らうともせずに、自分らの大切な道具をもつてさつさと避難して了つた人たちが、朝に行つてみますと燃え殘りの白壁のばらばらに崩れた下から、たゞ煙がいぶつて朝の微風になびいて立ちのぼつてゐたさうです。澤山にこしらへた御馳走は火事の饗宴がすつかり食べて了ひました。人々はいまいましさうに、悲しい氣もせず、今さらのやうにぼんやりとその燒跡を眺めたでせうが家の主だけはひどく複雜な險しい顏付をして、それよりも裏山のしづかに明けてゆくさまをぢつと見守つてゐたさうです。その人々にとつてみればそんなにも重大な事件が濟んだ後の山の景色はあまりにも靜かに見えたことでせう。そしてその朝は珍らしい程美しい日を約束して、靄がゆるやかにたなびいてゐたさうです。その靄の中から徐々としてはつきりと現れて來る春の朝の山づらを、私はよく

覺えてゐます。――何でもその火事のある前日の午後おそく、その新しい主人が野良で仕事しながら不圖、山の方を見ますと、殆ど風もないのに、その或る一個所がざわざわと動いてゐるのでおやと思つてその方に注意を向けると、急に身うちが寒くなつて その方向から何とも云えない叫びが一こゑ聞えたさうです。それは獸ともつかず人間ともつかぬものゝ斷末魔の聲のやうでした。そしてそれきりもう二度と聞えず、あの山の動いた部分も、もう何事もなかつたやうに、ひつそりとしてゐたさうです はげしい性格の幾らかがさつな持主だつたその人は、手に握つてゐた鍬でいきなり土をがんと叩き乍ら、「こら誰だ、しやうあらば返事せよ」と大聲で怒鳴つたさうですが、固より何の應へもなかつたやうです。たゞその微枯れた洞ろな聲にふさはしい山彦が遠くかすかに響き消えたことでせう。そのあとに小川の音が一層はつきりと相も變らず聞えたでせう。そして急に、長かつた日の夕ぐれが山づらを暗くしたでせう。家の人々が何事が起きたのかと愕いて走つて行つてみますと、主はその人たちに威嚴を保ち乍ら、少し蒼ざめてぼんやりと畑の中に立ちつくしてゐたさうです、何事もない周圍の平和な夕ぐれにかこまれて、その額は異樣に汗ばんで光つて見えました、そんな主の顏は家の人もその時しか見たことがなかつたのでせう、「まるで別人のやうだつた」さうです。火事にばかりつい氣をとられて、その家の人たちが何のお祭りの用意をしてゐたのか、私は聞きもらしました。ともかく、あの孤立した古い住居は最後に火花のやうな身振を以て、見事に消え去つたのです。

このやうに家が激しく又平然と燒けて無くなつたことを聞き知つたとき、まだほんの子供だつたでせうが、私は驚きながらも口に言へないうら悲しい氣持と共に、何故か大きな安心を 暗默のうちに、皆と一緒に胸の何處かで仄かに感じたものです。燒け出された人たちには本當に氣の毒でしたが、いつの代からともなく細々ながら私どもがすつかり住み慣らして來たと感ぜられる程親しみ深い家でしたから、私が生れたころから起つて來た外からのいろんな新しい事情で、その正當な後繼ぎである人がもうそこへ歸つて住めない以上は、いつそうのことすつかり無くなつた方がよいとでも思はれたからでせうか一つ處に幾代も住むと云ふことも、つまりは言はゞ極くゆるやかな旅行なのでせうが、あの家の燒けたころから

實際、私どもは言はゞ中心を失つたやうに別れ別れになつて、遠くの町々へ本當に旅立ことになつたのです。どの町も故郷ではなく、而もとの土地も故郷であることを學び知るやうになつたのです。たゞ一つ共通な子供の時のことなのですから、――それこそあらゆる人がそこから出て來た唯一のところではないでせうか。これを學び知つたのは本當によいことでした。たゞ私の母が生きてゐるうちに、たとへ家がないにしろ、あの土地へ行つてみたいと云ふ切なる願ひを、果たしてあげることの出來なかつたのは本當に殘念です。私はあそこへ行つて見たいとは少しも思ひません。たゞかうやつてゐる丈で私には十分なのです。祖々からの古い清らかな血があの小川のやうにいつもさゝやかに私の中を流れてゐます。あの時の私に火事は何かのしるしだつたのでせうか、慥かに私どもはそれから最後のお別れのやうな身振りを感じ取りました。それがやがて私に於ては謐かな喜びとなつて育つたのですその家についてもう少し語らせて下さい、それを知つてゐるのはたゞ私だけであると云ふことよりも一人の人間の思ひ出の中にはきつと多くの人々と共通な、何か大切なものが何處かに潜んで氣付かれずに、光つてゐるかもしれないからです。

あの人たちがそこへ引越して入つたとき、家は私どもが歸つて來たやうに初めは思つたかもしれませんね、けれどもそれは私どもより騷々しくて少し荒いところのある人たちでしたから、きつとあの家は少し間誤ついたことだらうと私には思はれるほどです。あなたは可笑しく思ふでせう でも考へて下さい、私が小さい赤ん坊のときに深い眠りの中から眼を開いて而もまだすつかり眼覺めてゐないその瞳に、そよそよとゆらぐ小庭の若葉から何の濁りもなく日の光が一杯に映つたのはあの家の中だつたのです。考へて下さい、私はその家の中から最後に咲き出た花のやうに生れて來たのです。部屋の中に滿ち滿ちた朝の光が、一聲づつ近づいて來る鶯の聲と共に、深く安らかに眠つてゐた私をゆるやかに眠ざまし、その平和な眼覺めの中で無意識のうちに一隅においてあつた白い花瓶を見つめさしたのは、あの家の中でした。その白い壺に私は後でどんな不思議な心のときめきを以て彼岸の花を活けたことでせう。そして又私の記憶にある初めての而も恐ろしい夢を見たのもあの家の中でした。それは重苦しい熟のある夜に巨大な森が私のぐるりを歩い

てゐる夢です。また初めて死ぬばかりの病氣が弱い子供の私を襲つたのもあの家の中です。その時、夕ぐれになつても人々は灯も點さずに薄暗い室の中で私を取りまいて默つてゐました、たゞ時折何かひそひそと話してゐた聲がその沈默と共に私の中に藏はれてゐます。そしてずつと後に私自身が一人の死にさうな子供をとりまく人々の一人となつたとき私の見守つたのは薄暗い夕ぐれの中で、他の皆にはもう消えてゐた日の光をたゞひとり力なく映してゐる子供の眼でした。また父や母の話聲や足音を物かげにゐて聞いたのもあの家の中です、そんな時父母としてよりも、むしろ私に物のあはれを感じさせる人間全體の姿として心に入つたやうです。さう云へば子供の時から私はあまり人の言葉に注意しませんでした、それは言葉として意味が考へられる前に、たゞ聞えて來る何者かの聲として風の音や川の響に混じつて私の耳に入つて來たのです。またレンゲ草の花を摘むために他のことはまるで忘れて小さな細路やせゝらぎの辭りを目が連れゆくまゝ遠くへ出て行つたのもあの家からです。そして豫期しない夕ぐれの恐怖が突然私を捉へ、その何物かに後ろから追はれるやうに、いつかしら歩いて來てゐた長い道のりを走つて歸つたのもその家なのです。そこにはもう灯がともされ門の前には母が立つて、追つて來る薄暗の中へ私の名前を呼んでゐました。それは恰も家全體がそのあらゆる優しさで呼んでゐるやうでした。落日の最後のぬくもりがまだそこに漂つてゐる破風口の小さい窓 それは明り取りで高いところにあり そこから外を見ることは出來ません、ただ家の中で下からそれを見上げると、夕ぐれには美しい光を放ち この家自身のもつてゐる西方落日の風景のやうでした、人はただそれを見上げたのです。また柱の中にはこの家を始めて作つたときこゝに生へてゐた木を、根づいたまゝに使用したと思はれる自然木のが一本ありました。それは木としては死んでゐましたが、家全體を尤も力强く支へてゐるやうに見えました、そして實際それには神聖なものとして祀られたしるしが附いてゐたのです。祖父が火打石をかちかち鳴らして燈明をつけた神棚は、皆が食事する樣を上から見てゐるやうでした、それは物日になると夜の暗さから輝いて現れ私には何だか怖いものに思はれたのです。家の墓地は村のお寺の傍にありましたけれど、本當を云へば先祖の人々はこの魂棚の奥に眠つてをられたのです、

その前で私が小さい手を合はせて鳴らした柔らかな肉體の小さい音は、あたかも深く靜かにそこに安らつてゐる人々の新しい糧として、その中へ吸はれるやうに思はれたでせう。だが、ごらんなさい、息子のものであるこの家には、もう神棚はなくなりました。

この家の燒ける前に、その新たな主人が聞いたと云ふ異樣な叫びの事も、私はそれから幾人かの人に話してみましたけれども、誰もみなそれを錯覺だと云つて說明して呉れたのです、さうかも知れません、それならばきつとそんな無氣味な錯覺を起こさせるものがこの家のぐるりに漂つてゐたのでせう。固より說明など出來ない事ですが、私はそれを家の死ぬ前の聲だつたやうに思へてならなかつたのです。それが非常に無氣味な怖ろしいものだつたと云ふことも私には分るやうな氣が致します。さうです、私どもはそれにすつかり慣れて、それもまた私どもに慣れてゐましたから、その無氣味さは少しも感ぜられませんでしたが、それは元來怖ろしいものだつたに違ひありません。長い年月のうちに、ぐるりの山河の氣がそこに集つてはゐなかつたでせうか。それはきつと私どもの血の中に溶けこみ、それから私どもの日常の動作を通じて、家のいろんな部分に滲んでゐたのです。例へば祖母が亡くなつたとき、そのなきがらの安置された奥の間などは、あらゆる靜けさよりも靜かに安らかな恰も完全に過ぎ去られた岸邊のやうに後に殘つてゐるその姿を、夜もすがら見守る家族の人が不眠と悲哀の故に疲れた身體をもたせかけた柱が、あたかも昔から幾度となくその爲に使用されて來たかのやうに、その部分が黑光りして人間の背中の形に少しばかり凹んでゐました。何ごともなく平和に明るく樂しい日でも、遊びあきて不圖その柱にもたれますと、體が暗い處へ入つたやうな氣持になり、今まで爲した外のことは遠く忘れられ、たゞそこから見える窓の景色だけが唯一の現實のやうに妙にくつきりと眼の中へ入つて來たものです。その窓に區切られた山林の一部分は、そこから見ますと、殆ど吹かない風にも不思議に奥の方からゆすられるやうにざわめいてゐるのかと見えました、しかし見てゐるうちにそれは完く靜寂にかへり、人はいつかしら曾てこゝで眼前に見つめた、一つの徐々に腐ちて無くなる前の、いかにも脆い生なき物としての顏が、彼の中で生き返つて微笑するやうに感じたのです。一つの窓は常にこのやうに甦へ

る内と外との二つの面から出來てゐます、それが生きてゐる窓なのです、けれど長いこと捨て去られてゐたその室内に、新たな人が、そんな秘密について少しも知らず、從つてそんな心遣ひもなく突然入つて來たとき、その人は何か親しみ難いものゝそこに在ることを朧ろ乍ら感じたでせう。私どものあの小やかな古い家も慥かにそんな空氣を有つてゐました、もし町中にあつたならば化物の出る廢屋だ等と言はれたかも知れません。それはおとなしいものでしたが、それでも無くなる前には陋ろしい聲で見知らぬ主人を恐がらせたのです。私はそんなものから解放されました、どの家もが誰にでも快く住まれなくてはならないのです。たゞ、無くなつたあの家の前を空しく流れてゐる小川は、そこでは人に聞かれることもないのに、私の中ではこのやうに滿ち滿ちた一つの意味を私の生命に與へてゐます。これがあの家の私に感じ取らせた最もよい此の世の贈物でした、それは與へられ、そして徐ろに取り去られます。そのあとの空しさを思ふことが私を物に一としほ近しく感じさせるやうです…。

それは村の人々によつて「澤の家」と呼ばれてゐました。明るい南向の岡邊にあるその村から見ますと、谷間の奥深くに隱れ立つてゐるやゝな一軒家は、何か特別の境遇の故に住はれてゐるのかと思はれたことでせう。實際、家の系圖は或る豪族が戰爭に敗れて落ち延び、此處に居を卜した事から書き出してありましたが、そんな事は家の人も殆ど知らなかつたやうです。たゞ私の家とその血筋をひく人たちの顏には、村の他の家がそれぞれさうであるやうに、他とは區別される少し變つた風貌があつたやうで、それを村の人々は又右衛門殿顏（またえもんどんがほ）と名づけてゐました。又右衛門と云ふのは先祖の名前から來た私の家族の通稱なのです。この土地からずつと遠い所で生れた子供が、まだ少年の頃に、あの年の夏、徒歩旅行して初めて此の知らない村に差しかゝり、道端に休んでゐると、何處からともなく一人の老婆が來て顏をしげしげ見守つてから「これはどう云ふ又古衛門殿顏（またえもんどんがほ）だや」と云ひ乍ら、こちらが何のことか判らず愕いて默つてゐるうち、また何處かへ行つて了つたさうです。併し、こんなことは多分もう起きないでせう。私の子供とそのお婆さんとの遇然な遭遇が、その言葉の使はれた最後のやうな氣が致します。私が今あの村へ行きましても、たゞ見知らぬ旅人として行き交ふ人々の眼に物問はれ誰からも知ら

れず、あすはこゝを立ち去ると云ふ遽しい眠の夢を、宿屋の新しい二階に結ぶことでせう。家の顏と云ふものはだんだんなくなりました、それを名ざして呼ぶ人があつても、當の本人には何のことか理解できないのです。そして、たとへそれが家から出て來たものにせよ、個人の顏がますます目立つてゆくやうに思はれます。私はそんな風に息子たちが家から出てゆくのを見送りました。彼らが家なとよりずつと廣いものに、いや、云はゞ廣々と開放されて一つになつたあらゆる家に、よき個人として直接結びついてゐなくてはならないことを、私も知つてをります。

村とこの家とをつないでゐる一筋の小路は、私が最後に家を立ち去つてその村に移住したとき、たつた一度通つたことがある丈なのです。それからもう私はその家へ歸つたことがありません、そして遙てその村を去つて、又もつと遠くの町へと移住したのです。そのたつた一度だけ歩いたことのある小路のことを思ひますと、それはいつも春の景色をば私の中に擴げるやうです。初めその追憶は極めて朧ろで、殆ど意識されなかつたものですが年と共に、恰も人氣ない山峽の徐々として晴れ渡つてゆく夜明けのやうに、明らかなものとなり、いつかしら、眼をつむると、そこにはつきりと見えるものになつてゐたのです。誰でもきつと、心の暗い底に、子供のとき見た明るい景色を、寶物のやうに藏つてゐることでせう、そして私は、その思ひ出の小路を辿るときは、いつも逆に村の方から家に向つて歸つて行くのです。馬車が一臺やつと通れる位の、淡い樺色をした明るい古い踏み慣された道が、村を出て田圃の中を、果ては何處へ行くとも知れず、遠く山の端をめぐつて沒れてをります。これは常に新たな春に沿つてそれ自身生きてゐるやうな、美しく彈力のあるうねりなのです。それをば人は何と云ふ立派な菁田を以て飾つてゐたことでせう！菜の花も所々に咲いてゐました、そして人には殆ど感ぜられない程の風が立つて、その可愛らしい姿を少しばかり撓めてゐます、花は風に身を委ねて、それと共に華福な一體を成してゐるやうに見えました。時折、やゝ強い風がさつと吹くと新鮮な早稻の綠が何か眼に見えない生物が勢よくそこを通りゆくかのやうに美しく目立つて波打つてゐました。菁田の中に小さな池があつて白い雲が時々そこに影を落してゐます。人の生活が直接それによつて土にかゝつてゐ

る青いものが、人の手によつてかくも綺麗に整へられてゐるこれらの眺めは、私の心を本當に和やかにして呉れるのです、そして私は歩くともなく、その平坦な彈力のある道に乘つて、我知らず隨分遠くまで歩いて行くやうです。けれども、美しい青田の中に働いてゐる人々には歌もなくたゞ重苦しい沈默が、この自然のあらゆる樂しさを消して了ふ程に滿ち滿ちて籠つてゐたのでせうか。

雲雀の囀づりに聞き入つて陽炎の立つ柔かな道をぼんやり歩いてゐるうち、足許の感じが何だか急に變つたやうに思はれるのです。道はまだずつと續いてゐますが、いつかしらそこは小やかな木橋の上で、下をあの小川がさらさらと音立てゝ流れてゐるのです。初めてこの道を歩いて來た人はその清い音にいきなり捉へられたやうに立ち止まつて、橋の手擦れのした欄干にもたれ、水の流れ行く方を見守り見送ることでせう。それは野生の綠深き繁みから現れ、氣持よく歌ひ乍ら、かなた遠く兩側の土堤の間をぴかぴかと光つて、水車をひねもすかたりことりと廻しつゝ、平野のむかふへと次々に流れ去つて行きます。振向くと曲りくねつた道の果てに、青田とつゞいて、木々の綠に打混つて、村の黑ずんだ屋根々々が小さく見えてゐます。雲雀はもう小川のざわめきにまぎれて聞えて來ません、たゞ水の流に耳を滿たされて草立の細やかに透き通つて微風に吹かれさゆらぐのや、水面の流れゆくかなた遠い靜かな光の上に白い雲がぽかりと浮んで、動かぬと見え乍ら、東の間の後に氣がつくともうそこから立去つて、その後に水が見えるともない靜かな波紋を描いてゐます。青田の中には案山子のやうな人や人のやうな案山子が動いたりぢつとしたりしてゐます。足下の橋板の上には殊に陽炎がゆらゆらともえてゐるやうです。直く下の流れを見ますと、そこは石ころが轉つて淺い爲に、氣がつくと水の音は特に高く響いてゐて、小さな泡が渦卷いて次々に消え乍ら現れ、人の顏がをかしな形に顫えて映つてゐます。そして時には川自身が谷間の中から折つて來たと思はれる名も知らぬ花が流れて來て、そこの渦卷きにかゝつて暫くもまれてゐることがあります、が見てゐるどやがてそれは放たれて遠くゆるやな方へ流されてゆきます。こんな道草を食つてから、隣り村へ行く人々は橋を渡つて今まで來た道を遠く山端の方へと猶も歩み續けるでせう。けれど、その小川に乘つて流れて來る花の中には、谷間の中に住んでゐる人の

手折つたのも混つてゐたことがあつたのです。そして又時としてはそこに、言はゞ人の手から咲いたやうな物のかけらも流れて來たことがあつたのです、あの古い小さな白壁造りの家が私たちによつて住まはれてゐたころには……。

そしてその「澤の家」を訪れるためには、橋を渡らずに、その川上にあたる右側の袂から人の足跡を傳つて川の岸へ下りてゆくのです。長い間、少しづゝ人に踏まれて自づと適當な段々を形作つて、それが人を河原へと導いてゐます。そして そこにはもう道はなくなつて、圓い石がごろごろ轉つてをり初めて來た人はそこでちよつと間誤つくことでせう。しかし、よく見ると、その石ころの上には人が幾度となく繰返して歩いたやうな跡が一筋かすかについてゐて、それが小川と藪の間をずつと谷間の奥の方へ通つてゐるのです。川音はいよいよはつきりと爽かに鳴り響いて、人をばその源へと誘ふやうです。固く滑らかな丸い石ころの上を草鞋穿きの足が自分の有つてゐる彈みだけで 氣持よく引締つて暫く歩いてゆくと、それは小川のうねりに沿つて自然に右の方へ曲つてをり、やがて少しばかり廣い空地となり、藪奇りの方は細い草が一面に生へた美しい綠の憩ひ場のやうになつてゐます そして今まで歩いて來た朧ろな足跡道はこゝで消えて無くなつてゐるのです。振返つてみるともうあの橋も藪に遮ぎられて見えはしません。それから草地に足を投げ出して暫く休むのです。丁度、太陽がまともに此の空地を照らしてゐる時です。仰向けになつて眼をつむつて、その光が瞼の中に作り出す血のはかない虹を樂しみ乍ら耳を澄ますと、絶え間ない小川の音がふともう遠のいて聞えなくなつて了ひ、その靜寂の中で松風の音だとか小鳥の聲などが不思議にはつきりと響いて來るのです。そして、それが再び眼を開かせるのです。川がきらきら運に輝いて流れ、風がさつと吹いて藪が波立ち、小鳥の影がちらと眼をかすめてゆきます、視野はたゞ光です、草地の日向の上には大きな松が悠かに伸びて背後に影を靜かに落してゐます。そこで立上つて川の直ぐ傍まで行くと、今度は水面に大きな石が幾つか現れてゐて、それらが丁度飛び石のやうに對岸へと續いてゐるのです。そんな石は川の所々に澤山あるのですが、そこのは具合よく並んでゐて、表面が他の石よりも人に親しみ深いやうな感じを有つてゐますので、それらが歩いて來た河原路の

續きであることが直ぐ感じとられるのです。

それを傳つて行くと、上流の方へと斜めに川を横切つてゐて、その行き着いた岸邊に、今まで向ひ側からは見えなかつた一本の細い道が藪の中に新たに初まつてゐます。それは川に沿ひながら、川から少しづゝ離れてゆくやうに、藪の中を通つてゐるのです。すると氣のせいか急に川の音が遠のいて、あたりが段々薄暗い感じになりその中で兩側から白や薄紫や赤い雜草の花々が浮き出して咲いてゐます。醴が草の葉に觸れてさらさらと鳴る音が、川の遠のくに從つて、新たな別の川のやうにだんだんとはつきり聞えて來るのです。いつも濕り氣のある黑土の道の上で足音は殆どしません。かうして、やや暫く藪の中を歩いて行くうち、つと立止まつてみますと、川の音はもう全く聞えず、また自分の立てゝ來た葉づれの音もぱたりと絶えて、たゞあたりの繁茂し出した植物の靜寂な氣息だけがぐるりをひろびろと密接に收まいてゐるやうです。山が迫つて來たやうな氣配がして、時に鋭い鳥の聲が一聲鳴いて、頭上を高く飛んでゆきます、かうやつて、また歩き續けてゆくうち、川の音が再び遠くの方から聞えて來て、それはだんだんと徐々に近づき道はつひに藪を出て行きます。そこには小川がさつきよりもずつと細くなつて、冷たさうに、清やかにさらさらと流れてゐます。あの家の前を流れてゐるせゝらぎです。そして正しく前方に兩側の山々が互ひに近く迫つて奥深く眺められる、その中に遠く一軒の小さな屋根が綠の中に黑ずんで沈默して見え、そこから柔らかな炊烟が一筋ゆるやかに立ち登つてゐます。こゝまで來ると道はもうたゞ日に照らされた河原に沿ふて、その家の前まで明るく喜ばしく走つて行く丈です。道ばたに春はレンゲ草が咲き續き、秋は曼珠散華が澤山咲くところです。それは道を歩き乍ら、何氣なく折り取らずにはをれない程に、豐かに美しく咲くのです。折り取つて、それを小川に浮べ、流しやつて何者かに供へずにはをれません。けれども今は、それを思ひ出すことが、何者かへの供へ物のやうな氣がするのです。美しいと思つて、それを折り取らずにをれないのは、一つの祭りです。つぼみや、咲きかゝつたのや、完全に開いたのや、そして散りかゝつてゐるのや、またそよりと吹く風に徐かに一片づつ散つてゆく花々が、私の思ひ出の中では、たつた一つの姿となつてゐます。一つの花が含み初め、散り布くまでが、眼の

中で見えるやうです、そしてその散り去つた後にはまた新たな蕾が現れてゐるのです。側にあの川のせゝらぎが聞えてゐます。私の心は今そんな一輪の花を活けてある脆い壺のやうです。

こゝより奥にはもう家なんか無いだらうと思はれましたが、併し私どもの家の裏手から又一本の小路が出て、可也急な山の斜面を登つて行くと、そこから谷一つ隔てた彼方に小高い山が見えました、そしてその臼平（うすんであら）と呼ばれるたにには一軒の小屋が立つてゐたのです。そこには、私どもが家を立去る少し以前まで、お爺さんお婆さんが僅かばかりの畑を耕して住んでゐました。それは私どもの家より先に無人になつたのです。旅人はこんな山路を通り過ぎ乍ら、何とふふこれは淋しい處だと感ずるでせうが、そこに住んでゐる人々はその内部から淋しく出來てゐるためでせうか、極く單純な事物にも小やかな喜びを見出して生きて行けるのです。この二人の老人の一人息子は町に出て相當の聯人になり、いつも老いたる父母を町へ出て來られるやうにと招いてゐたさうですが、二人は時々町へ行くことがあつても、直ぐまたその小屋に歸つてゐました。そしてだんだん町へ出ることも希になつたのです。三月に一度くらゐ郵便脚夫が私どもの家に來て、それからこの小屋の方へ裏山を登つて行きました二人は字が讀めないのですが息子は手紙を書いたのですそしてその若い脚夫が讀んで聞かせたのです。私の母はいつも此の郵便脚夫から二人の消息を聞いてゐました。何でも多の寒い夜など山から貉が出て來て、この小屋の扉をほとほとと叩くことがあつたさうです、すると室内のお爺さんが立つて戸を開けてやると貉が幾匹も入つて來て、溫順しく默つて、爐端に坐つて火にすつかりあたゝまつて、また山へ歸つたさうです。このお爺さんが先に亡くなつて、あとはたゞひとりでお婆さんが住んでゐましたが、何處からか一匹のよもぎ猫を連れて來て、それとよくお話をしてゐたさうです。そしてその話の中にはお爺さんとの話のときには一度も出なかつたやうな言葉だけが使はれたさうです。「さむしいのう」とよく話しかけてゐたさうです。郵便脚夫が眼を細めて私どもに話して聞かせました。そして或る初秋の美しい日でしたが隨分長いこと來なかつたその脚夫が來て、その小屋の方へすたすたと歩いて行きましたが、暫く澄んだ時間が經つた後に、再び彼が歸つて來たとき、彼はお婆さんの死

を私どもに報らせたのです。「猫は？」と母が靜かな聞を置いて尋ねました。猫は何處にも見付からなかつたさうです。かうしてその小屋は、やがてすつかり荒れ果て、雪に埋れ、翌る年の春、雪が溶けてみると、殆ど無くなつてゐたのです。

「澤の家」の主、即ち私の父は醫者で、春風先生と呼ばれてゐました。この號は併し自分で付けたものでなくいつかしら村の人がさう呼びならはしてゐたのださうです。平凡だけれども、良い名前で、かう云ふ風に人々からも感ぜられてゐたとすれば、それは醫者として望ましいことだつたでせう。かゝる谷合の一軒家で醫者をしてゐたなど、今から考へると不思議ですが、丁度、以前によく見かけた、巡回する床屋のやうに、父は月に幾日と云ふ具合に藥箱を擔いで、村々を訪れたのです。元來、私の家は祖父の代まで、たゞの百姓だつたのですが、祖父は野良仕事の片手間に勉强して、醫術の心得を少しばかり有つてゐたさうです。そして自分の息子を本當の醫者にしやうと云ふのが、祖母の願ひだつたのです。かうして私の父の代にはもう野良仕事は女たちに殆ど任せて、醫を業とすることになつてゐました。藥箱の澤山な抽斗の中に、それぞれ藥を準備してをくことが、母の仕事の一つでした。父が金具の澤山打つてある其の黑い箱を背負つて、門のくゞりから出て行く後姿と、それから暫く留守の後に、ひよつくりと歸つて來て、門から入つて來られる顏の表情を私はよく憶へてゐます。それは少し淋しさうなものでした。いつものことでしたけれど、父のお歸りは私どもを隨分喜ばしい氣持にさせたものです。しかし父は出て行く時よりも、私どもを喜ばせながら歸つて來る時の方が、何故か暗い顏をしてをられたやうです。今にして私はその事をよく思ひ出します。それはその頃の私にはよく解らないことだつたのですが、それでも理由なしに私は早くも父と共に同じやうなある淋しさを感じてゐたのでせう。それが何であるか、名ざして云ふことは出來ませんが、さまざまな不幸を泌々と見た眼で、育ちゆく幼い者らを見守るとき、そこに自ら作り出される溫かな淸い空氣の中に、それとなく籠つてゐるものなのです。

父は花火を上げることが上手だつたさうです。私は見たことがありませんが、父は若いとき、年に四度、春と夏と秋と冬の月もなく風もなく雲もない、星空の夜を選

んで、大仕掛な花火をひとりで打上げたさうです。きつと、眞暗な谷間が、父にそんな美しい夢みたいなことをさせたのでせう。私が大きくなつてから、父はもう花火を上げやうとしませんでした。煙火指南と云ふ古いをかしな本が父の書箱にあつて、それに載つてゐる木版畫の黑と白のさまざまな花火圖を見て、子供らがそれらを上げて下さいと、父に夏の夕ぐれなどせびつても、父はたゞ微笑して「もう忘れて了つたよ」と言ひました。そして母が、それを父と一緒に樂しみ見た話を子供らにして聞かせたのです。母はいかにも熱心に手眞似などして、花火の模樣を說明しましたが、子供らにはさう面白くありませんでした。たゞ子供らがその挿繪を示して、「こんな綺麗なのが出たの？」と訊くと、母は「もつともつと美しかつたよ」と言ひました。母はきつと、もうその花火について言つたのではなかつたのです、何か、自分の中の美しい思ひ出について言つたのでせう。それはきつと若さの秘密なのです。

或夏の夜のことでした。子供らも母もみな寢しづまつて、谷間の靜寂が深まさりつゝ、たゞ川の音が長い日照り續きのため細くなり乍らも、いつもより一層鋭くなつて、聞えてゐる夜更です。父は居間でひとり本を讀んでゐました。ランプが微かに音立てゝ燃えてゐる傍らに、机の上に本をきちんと開いて、端坐してそれに向つてゐたのです。何の本か知りませんが、そのうち眠くなつてその本の上にうつ伏して了ひさうになつたさうです。すると、そのとき戸外の深い靜寂の中をたゞ聞えてゐる川の音の上の、板橋を渡つて來る人の足音が微かに聞えて來ました。やがて誰かゞ門を叩きました。出てみるとそれは三里ばかり距てた海村から來た病家の迎へでした。父は家の誰をも起さずに直ぐ藥箱を背負つて、その若者について行きました。前の濱と云つて、それは貧しい小さな村が、峠を一つ越えた海の岸にあります。病人はその若者のお父さんでした。父はその老人に手當し、藥を置いてまだ暗いうちにひとりで山道を歸つて來たのです。空は晴れてゐました。眼をつむると、その貧しい病家の窓に響いてゐる海の遠聲が、聞えるやうな氣がしたさうです。もう少しも眠くなく、あの病人も大丈夫だと思ひ乍ら兩側に赤松の生えた山上の暫く平らな道を晴れやかな氣持で歩いて來たのです。そろそろ夜明けでした。木々の重なり合つた枝たちがぼんやり見えてゐます。星

の光も少しづゝ薄れてゐます。その時、前方の樹枝に何か圓いものがぶら下つてゐるのが眼につきました。それはまだまだ遠くの方にあるやうでしたが、いつかしら直ぐ前まで來てゐたのです。見ると蜂の巣のやうなものでした。そしてその下を通らうとすると、頭にぶつかるやうな氣がしたので、つと除けるその瞬間、それは頭に觸れるか觸れないうちに、パチンと音を立ててたゞ中から破れ、火の子のやうな細い無數の光が、眼の前一面に散つて消えました。父は何氣なく歩きつゞけました、稍々暫くしてやつと、變なことだと氣付いたさうです。そして振返つて見ると、丁度火の子が消えたあたりに、異樣な樣子をした一人の男が、道の上に焚火して前屈みにあたつてゐたのです。何だあの人か、と父はその時思つたさうです。そして、どんどん家に歸つて來ました。しかしその父の顏は少し蒼かつたのです。あの男は自分に似てゐた、父はさう云つて、またあの山道へ母と一緒に行つてみましたが、そこには焚火した迹もなく、何ら變つたところもなかつたさうです。父は烈しい熱を病んで聞もなく亡くなりました。村にその頃初めて開業した、若い醫學士が來て臭れましたが、無駄でした。病名は腸チブスです。一人の老人を癒し、それから新たな若い醫者が村にゐることを知つて父は安らかに死んでいつたのです。

それから暫く後に私たちはその家を捨てゝ立去りました——。

滿洲の受胎

工清定

天の巻

「若！大變でございますぞ。びつくりなさいますな……お、お、大殿が……あゝ……」

葉といふ葉が逸早く霜の呵責を受けて、いちじるしい衰へを見せた丘陵の大きい楡の樹蔭で、さきほどから次々と傳へられて來る味方の戰況が、すこしも有利に展開しないのに氣をもんだり、豫備隊に殘されたことに、業をにやしたりしてゐた努爾哈赤も、どうやら（何だか虫のすかない戰だが、何も今日一日に限つたといふわけではないし、それにこの俺にしたつて漸く二十五歳だ、まだまだ若んだからな）と、やつと落ちつきの場所を見つけたやうに、その楡のしげみを透して見るともなしに空を仰いだ。……躍かしい光を含んだ桔梗色の大空に、いくすぢかの白雲が東へ悠々と流れて行く、東！鹽筒山麓東！蘇子河畔、ふるさと！赫圖阿拉。（おゝ宋香華！）

若い努爾哈赤は、秋の感傷からその赫圖阿拉に、自分の勇ましい凱旋姿を待ちかねてゐる宋香華の、この秋空のやうに清々しい眼を聯想して、にんまりしかけた矢先、こんな風に慌しい聲が自分を呼びかけたのを聞かねばならなかつた。そしてそのために心の平靜が突然やぶられてしまつて、瞬間、ひどく面喰つて不機嫌にふり向いた。

——そこには、たゞでさへ出ばつてゐる顴骨を、ひどく硬化させ傳役の宋不凰の顏があつた。

「何だ？一體。おちついて言つて見ろ、宋」

（祖父の負傷かな。いくら年老いてゐるとは言へ、捕へられるなどといふぶざまは、あの頑固さにある祖父には、萬々考へられないことだ）—さう思つてきゝかへした努爾哈赤はさすがに微笑を添へることを忘れてはゐなかつた。

「は、はい……美事なお最期でございました。あ—、あの御老體で……」

宋は顏を兩手で蔽つて泣き伏した。

努爾哈赤は棒のやうに突立つたまゝ祖父覺昌安と同年

輩でしかも竹馬の友だといふ宋のさうした姿を、うつろな眼で見下す外はなかつた。

丘陵の中腹で休憩中、廣梨を果皮ごどかじりながら雑談に余念のなかつた努爾哈赤の手兵の部將に、無言のどよめきが、見る見るつたはつて、みんなが丘陵の上に登つて來た。その自然につくられた人垣の一部分は

「わか、若殿……」

とまたも、遠くから呼びかけて來た第二の傳令によつて開かれた。

第二の傳令は、黄い房をつけた鉞を右手でさし上げてゐる。

黄鉞！

父、搭克世愛用の黄鉞だ！

努爾哈赤は瞬間、まつ黑い鳥の羽ばたきを眼前に見ると同時に、腹の底から熱湯が沸騰して來るのを、まざまざと感じた。はるかに見える古勒城の高塔がゆらぐほどの砂塵だ！

鬨だ！

馬のいなゝきだ！

父の搭克世までが、もろくも怨敵尼堪外闌の詭計に陥つて、その愛用の黄鉞が漸く持つて歸られたゞけで、屍體は勝誇つた敵の馬蹄の蹂躙に委せる外はないところで討死してしまつたといふのだ。

努爾哈赤は、腰かけてゐた橙子をいままでの雑念妄想と共に兩足でふみくだいて、すつくと起ち上つた。

建州女眞の酋長阿臺は、遼東の猛虎とまでおそれられてゐたがその晩年、遂に明の政府に謀殺されてしまつた文の果から、古勒城は承けついだが、勢威は最早それに伴つてはゐなかつた。

さうした建州女眞衛には、晩秋のひるさがりにも似たわびしさ、頼りなさが多分に見られるやうになつたことは事實だつた。

その中に、先代の信任に報いるはこの苦艱の時にこそとばかり、若い猶長阿臺を擁したのが、律義一點張りの祖父覺昌安であり、父搭克世だつた。……優柔不斷で凡庸な青年酋長を仰いで、鋭意經營する二人の苦衷が容易にあらはれないのに乘じて、同じ建州女眞衛でありながら、豫てから果と快くなかつた尼堪外闌が、明の總兵として鐵嶺に駐屯してゐた李成梁と合流して、突如、古勒城に阿臺を襲つて來た。

危急を聞いてはせ參じた祖父や父に、かうして古勒間近まで隨いて來ながら、必死に一方をきり開いて城内へ入つたそのあとを追ふことを許されなかつた努爾哈赤はその戦闘の報を耳にするまで、刀を拔く必要もないこの丘陵上に空しく待機せざるを得なかつたわけである。

（二本の大支柱を失つた古勒城には、陥落があるばかりだ！）

先年――蘇子河へ舟遊びに來た時、祖父たちが鄭重きはまる待遇をしたのにつけこんで自分の許婚宋香華に、こつそり崑崙玉の耳飾りを贈つた阿臺に對して、むしろ不快な追憶こそあれ、決して死を捧げねばならぬ程の恩誼を感じない努爾哈赤ではあつたが、同じ建州女眞衛でありながら尼堪外闌が女々しくも詭計を用ひたと聞いては、とても、ぢつとしてゐられなくなつてしまつた。――努爾哈赤の血管の微細な尖端にまで、眞紅の血が突擊ラッパを奏しながら、くるめき廻つた。

「出發だ！そして古勒城逆襲だ！」

簡單に、しかし力強くかうさけんで、颯爽とうち振つた黄鉞は、秋の陽を眞受けにして光つた。さうした凛然たる努爾哈赤の武者振を見て、また、おいおい聲をあげて泣いたのは、傳役の宋丕顒である。宋香華の祖父宋丕顒である。

「宋！淚は不吉だ」

手兵七千五百。あたかも努爾哈赤の四股のやうに肅々と進軍をはじめた。

祝勝の酒宴に取りかゝらうとしてゐた尼、李聯合軍は春いた黄色い太陽を、早くも覆ひそめた霧の中に、青年に率ゐられた逆襲部隊を發見した。しかし、その意外な小勢に、嘲笑を洩して、はじめから、輕くあしらはうとした所に、つぐなひきれぬ不覺の敗因が藏されてゐた。

必死の逆襲！

整然たる行動！

嘲笑から緊張へ！

緊張から驚愕へと、急角度に幾變轉してもすべてがあまりにも遲かつた。

防ぎきれないで、城外へ逃れた聯合軍は、執拗果敢に急追して來るこの部隊を、甲板の野に禦がうとしたが、それも無駄であつた。

月明の曠野を長驅して、鷲爾渾城に立籠つたが、神速なこの部隊の追及は、崩れた陣形を整へる寸暇をも與へなかつたばかりか、却つて尼堪外闗の生命にまで迫つてしまつた。

――聯合軍の完全な敗亡であつた。

數刻前の敵が見せた亂軍ぶりを、今度は自分で味はつた李成梁は、辛うじて鐵嶺にのがれた。

鷲爾渾城の黎明――。

何事をも知らぬ氣に、さしのぼる洗はれた太陽をアカシヤ並木の向ふに見た努爾哈赤は、傍らの宋丕顯にきまりの惡いほどはしやぎきつてゐた。

美事に復讐成つた今ではあるが、そして祖父の死はあきらめうるとしても、（父を喪つたのが、つひ、昨日だといふのに、あんまりな……。と、宋が思つてゐはしまいかと、いくぶん自制してみても、あとからあとからたえずこみ上げて來る微笑を、どうにもかくしやうがないのである。

六年前、すでに母の棺側に侍した努爾哈赤は、いまや天涯孤獨の境遇におかれたわけである。しかし世間で言はれ、いくぶんは自分でも豫想してみた淋しさとか、心細さとかは少しも感じないばかりか、あらゆる制肘を全く離れて、宋香華との新しい生活を待たれる樂しさ嬉しさがますます力强くなみうつて來るのである。

宋香華との新生活の日が、一時でも一分でも早く始められるやうに、努爾哈赤は煙筒山麓へ歸るのが急がれてならなかつた。

秋風、瑟として渡る中を、白馬に跨る若い努爾哈赤。

この度の出陣に、大殿と殿を同時に喪つた赫圖阿拉の人々は、悲しみを秘して龍姿鳳日犀堀大耳にして、面は玉の潤ふが如き明朗濶達な若殿の凱旋を歡迎しないわけはなかつた。

けれども――努爾哈赤は意外な情景を部落の入口で見た。堵列した部落民が極度に狼狽してゐるのだ。或る者はしかめた顏を押さへるやうにして家へ駈け込み、或る者は團栗のやうにみはつた目を努爾哈赤から直ぐ後に隨つてゐる宋丕顯に移して、あやふく何かを叫ばうとして堪へてゐるのだ。

宋香華が居ないのだ。

行方を晦ましたのだ。

努爾哈赤は、自分の立つてゐる足許に、突然、暗く大きい奈落の口があいて、背後から强い力でその中へ轟逆樣に押しこまれてしまつた自分を感じた。

そしてその絕望は今度は五臟六腑を一時になまくら刀でたゝき切る樣な、おそらく祖父や父の死を聞いた先にも增した憤懣に身を委ねざるを得なかつた。

阿臺だ！

亂軍のうちに忠死する祖父や父を無情にも見捨てゝ逃走したのだ！

しかもその途中この赫圖阿拉へ潛り込んで宋香華を說くに努爾哈赤投降を唯一の口實にして、うまうま世馴れぬ乙女を逆言僞の興に載せてしまつたのだ。

おゝ、そうしてうまうま宋香華の手を拠へた阿臺は自ら進んで李成梁の軍に投降したといふではないか。

何のための自分の出陣だつたのだ！

宋香華を阿臺に奪はれ、祖父と父を尼堪外闗に殺させたほかに、何ものが酬いられたか。

何のために祖父と父は死んだのか。

當の主人が、おめおめ敵に降つてしまつたではないか。

努爾哈赤は、晩秋の長夜を床に反轉して、夜もすがらまんじりともしなかつた。

おそらく、翌朝、一死もつて孫娘の罪を謝した宋丕顯の死體が、蘇子河に發見されなかつたならば、努爾哈赤はその光榮ある清朝の創業に着手することはおろか、今日の東洋史に眇たる小活子を拾はせるに過ぎない小部落の長として、老いてしまつたに違ひない。

「遼東に若き飛將崛起す。」――飛報は、鐵嶺總兵李成梁の敗報と同時に、北京にもたらされた。

多年、遼東の抑壓に困憊しきつてゐた朝廷は、愕然と色をなして若い努爾哈赤に龍虎將軍の榮名を與へて、その歡心を購ふ策に出た。

龍虎將軍。

努爾哈赤が、紅色の綬をつけた大袈裟なその印を、うつろな哄笑のうちに勅使の面前で、凍りついた大地に投げ出したことは言ふまでもない。

努爾哈赤の笑顏に、あながち、傲慢な表情ばかりでなく到底、覆ひつくせない一抹のさびしさが漂つてゐたこ

とを、讀みとる餘裕までもすつかり吸ひとられてしまつた勅使は、匆々と引きあげてしまつた。

地の巻

努爾哈赤は阿臺の行爲を思ひ出す度毎に、齒をきりきりとかみならした。

投降！

それは名譽と傳統に輝く建州女眞衞に屬する一介の部民にすら決して許されぬ卑劣きはまる行爲ではないか。しかも、唯一の忠臣の孫であり、子である自分の許婚の女を、當の相手さへ、手を觸れることも憚つて、ひたすら時の到るのをまつてゐた女を、虛言を弄してまで誘拐するとは……。かう考へ續けて來ると、努爾哈赤の考へには、はてしがつかなかつた。——その心に湧き起る萬丈の波瀾を押し鎭めるべく、たつた一つ殘されたものは自分の始祖に神を發見し得る矜持だつた。自分の體內をこんこんと流れてゐる血は、神の血であることの自覺だつた。

三人の天女が、長白山麓の水靜かなタメンの池で水浴してゐるところへ、赤い山楂子の果實を銜へて來た神鵲がその中の一人佛庫倫の脫いだ衣服の上に落して行つた

やがて岸に上つた佛庫倫が、その果實を何氣なく口に含むと、忽ち姙娠して男兒を產んだが、この兒は呱々の聲を發して間もなく能く言語した。

この兒長じて——姓は愛親覺羅、名は布庫里雍順。

努爾哈赤は鬱積した汚氣のはけ口を戰爭に見出した。

祖父と父の生命を奪つた明朝への復仇。

許婚宋香華の體を盜んだ阿臺への敵愾。

戰ふことによつて、勝つことによつてすべてを忘れよう。そして、始祖發祥の聖地長白山へ！の憧憬も多分に手傳つて、戰備おさおさ怠らなかつた。

萬歷二十三年。

努爾哈赤はすでに三十七歲になつてゐた。その年、長白山、鴨綠江地方を輕く經略して、その衆を收めて凱旋したが、その後、內政をとゝのへ、部下を八分して、八色の旗を夫々その隊の標識とすべく授けた。

黃、紅、藍、白の四旗と、黃、藍、白に各々紅の緣をつけた三旗と紅に白の緣をつけた一旗。

一旗の兵、七千五百は古勃の快勝にゆかりを持つことは言ふまでもないが、紅に白の緣をつけた鑲紅旗は、赫圖阿拉にゐたころの少女宋香華が好んで身につけた衣裳の思ひ出を語るものとして、それを第一旗として、正黃旗の更に右翼の位置を與へた。

とまれ、八旗、六萬——努爾哈赤の親衞軍の向ふところ朔北嫩江の草も、ために靡き伏すかと思はれるばかり威風はなはだ振ふものがあつた。

四十一歲の時、蒙古文字を採用して國文とし、新に滿文を創始して、雄志すでに大興安嶺を呑むの慨をあきらかにし、十月、はじめて田賦を加徵したが、領內和平を謳歌し令德に沐浴する農民は、競つて努爾哈赤の軍費に貢ぐに吝かでなかつた。

越えて、遠く烏拉國まで兵を遣つて、これを滅した。

努爾哈赤は、自分の一呼吸ごとに、領域が擴がつて行くやうに感じた。——事實、東は日本海から、西は明の邊牆に接し、北は嫩江から南は鴨綠江にわたる茫洋たる平野が、努爾哈赤の掌に握られたわけである。

もちろん明朝としても、このと無氣味な狀態を拱手傍觀してゐたわけではないが、萬歷二十年、釜山と薺浦に大擧上陸した日本の征師の進擊に抗しかねて、義州に出奔した朝鮮の宣祖の歎願によつて、神宗が同年十月、古勒城の敗將李成梁の子李如松を、海防禦倭總兵官に擢用して、赴き救はしめた。この遠征軍は、呆氣なく翌年正月、京城郊外の要地碧蹄館の死戰に潰えて、國帑の徒費と國威の失墜といふみぢめな土產を携へ歸つて以來、さうした邊牆外のことまで、とても、手が延びかねたのが、當時の實情であつたにちがひない。

萬歷四十四年の春は、壺筒山の峰にほのかにみせるうす綠をさきぶれとして、蘇子河を遊戈する鱘の尾鰭に乘つて來た。

正月——鬱氣おごそかに忍びよる城內講壇に、黃の禮服を着て立つた努爾哈赤は、五十八歲の老齡を迎へたとも思へない若々しい聲で、力強く自ら帝位に卽き、汗と稱しこゝに建國を宣した。

國號は大金（後金）

元は天命

さきに女眞部から蹶起して金國を建てた阿骨打の後繼者たることを自任し、さらにこのことたるや天命にほかならないと確信してゆづらない努爾哈赤は滿場神前のや

うな靜寂さにある中で、さう宣し終つてから、城外で親衛軍を閲した。

八旗、六萬——

鑲紅旗……。

正黃旗……。

正紅旗……。

正藍旗……。

正白旗……。

鑲黃旗……。

鑲白旗……。

鑲藍旗……。

順次、肅々堂々と繰出す精悍な部隊の步調のたしかさ隊列のたゞしさ。威儀のいかめしさ。

標旗は、まだ、いくぶん寒い北風をうけてはたはたと鳴り、旗竿の金具はちかちかと春の日に光る。

長子禮王代善を從へて壇上に立つた努爾哈赤は、三十有餘年前の痛々しい追憶に、まだ多少のほろにがさは遺されてゐるけれども、それは必ずしも昔のやうな毒々しい絕望的な色彩を具へてはゐなかつた。そして、老聖者らやうに努爾哈赤の胸中は淡々としてゐた。

長らく草に臥し露と寢て、生死を共にした忠實な部隊の行進を、ぢつと見つめてゐた眼を、禮王代善に移した努爾哈赤は、瞬間、何故かしら、氣まづいものを直感した。

禮王代善の眼は戀してゐるものゝ眼だ！

（禮王代善が、秦祿芳と楊金蓮を疑つてゐる、そして楊金蓮の心は皮肉にも、秦祿芳に傾いてゐる。）といつた噂を隨分以前から、努爾哈赤も聞かなかつたわけではなかつた。

その秦祿芳が、今度鑲藍旗長となつて殿衛の分列部隊を指揮してゐるのだ。苛毛に跨つて揚々と振る馬鞭の房は城内第一花の譽れ高い楊金蓮が今日着てゐる朝衣と同じい鵝色であるといふ些細な點まで、目敏く見て取つた禮王代善が、哀訴を兩眼にこめて父を見返したのであるが努爾哈赤は見てならぬものを見てしまつたやうに、急いで目をそらした。

——城下の人々は、卽位、建國、改元の擧事に加ふるに、老帝の妃の一人として、かねてから呼び聲高かつた重臣宿將の子妹が凡て除外され、萬人の話題にも上らなかつた微賤の出、大福金が册立されたといふことを傳へ

聞いてはちきれさうな歡喜と祝福をうちこめた爆竹に夜を徹した。

いつの間にか塹筒山の上に出た月が、たち迷ふ紫がすみの世界へ、いぶし銀の光の兩降らせて、更になごやかな朧月夜をつくろひはじめてゐた。

秦祿芳——それは努爾哈赤が鴨綠江長白山から海蘭河を迂回して凱旋して二三年令名を聞いて欽慕のあまり江を渡つて來たといふだけで素性を明かさなかつたのに寬仁大度な努爾哈赤に、仕官を許された秦立芳の子である。

秦立芳の風格は直ちに努爾哈赤に高く買はれ、驕男は忽ち重い恩賞をもつて酬いられた。殊に蒙古遠征後、宿將の列に加へられたのであるが、誰もその飛躍的な昇進を嫉むことの出來ない程、秦立芳の戰功には輝かしいものがあつた。その秦立芳が烏拉國討伐に奮死したので、秦立芳への追賞の意味と、遺子祿芳もまた父に劣らぬ雄直剛毅な資を享けてゐるといふので、この春、特に八旗長中最も若年ながら鑲藍旗長を命ぜられたのである。

事實、秦祿芳の陽燒した凛々しら顏に浮ぶゑくぼと、神技とも見られる劍の扱ひ方は、城内の侍女たちの魂を捕へずには措かなかつたのである。

禮王代善は新妃册立にひきつゞいて、自分の名が呼ばれるにちがひないと思つてゐる皇太子册立の宣旨がなかつたことから、是非その地位を豫約するためにも、秦祿芳に傾きかけた揚金蓮の心を呼び戻すためにも、秦祿芳に劣らぬ戰功を樹てるべきだと思つた。禮王代善は、ひたすら、父が下す出兵の命を待つほかなかつた。

元命三年、努爾哈赤は還曆を一年後に控へて、愈々起ち上つた。——禮王代善が夢寢の間にも念頭を離さず待望してゐた時機が、つひに到來したのである。

空はあくまで晴れて輝き、アカシヤの木にうす甘い香を放つ白い花の咲いてゐるのが夜目にもしろくそれと見られる四月の夜、二、三の部下を隨へた秦祿芳が努爾哈赤の密旨を受けて出發したことを知つてゐるのは、禮王代善と七旗長のほかゐなかつた。

一死以て使命の決行を誓ひ、決然として城門を辭した秦祿芳のうしろ姿を、えもいはれぬ感慨のうちに、誰よりも長く見送したのは禮王代善だつた。

三日後の黎明、——城外に肅然と整列した正黃旗、正藍旗、正白旗二萬有餘の總勢を前にした努爾哈赤は、洪

鐘のやうな聲で、雲を黄金に染めていままさに昇らうとする太陽を胎んでいきづく東天に向つて、七つの大恨を告げた。

一、明の邊吏は輕々しく尼堪外闗の言を信じ故なく血を流し我が父祖を殺した。

二、明は盟約を守らず、逞兵、界を越えて葉赫を衛助する。

三、明の邊民は毎年境を踰えて竊をなすを以てこれを殺した然るに明は又これを壇に殺したのだといふ口實を設けて我が人民十數人を捕へて、邊境で所刑した。

四、明はふ葉赫を助け、滿洲へ許婚の女を改めて蒙古へ嫁せしめた。

五、明は滿洲の人民に牧畜農耕の地を與へない。

六、明は使を滿洲に遣はし、侮蔑暴慢な行動をする。

七、哈達は既に征服せられた。しかるに又我を脅迫してその國土を回復しようとする。

――行文の推拙であるところに、却つて惻々と迫る熱情をひとしく總身に感じた二萬餘の總勢は、固唾を呑んで下令を貪るやうに待ちうけた。

「出發だ。そして撫順城占領だ！」

はじめて目的を明かにするために、簡單にしかも力強くかう叫んで高く擧げた努爾哈赤の右手には、三十五年前、古勒城逆襲の際の黄鉞がかたく握られて折柄全圓となつた太陽の光に、さつときらめいた。

――威風すでに明朝を壓する精鋭の光榮ある進發だ！

玄の巻

「馬の奴、いやに遠慮しやがつて、地面の馬鹿げてだだつ廣いのに似合はず、まるで雛型みたいでさつぱりどうも……。」

「しつ！冗談ぢやないぞ……ばれたらどうするんだ……馬のことは知れてるぢやないか、こつちは驢馬といふんだよ。まだ知らなかつたのか、馬鹿げてゐるはお前の方だよ。」

「といふお前も聲が高いや。だが、本當にのんびり俺たちの言葉が使つてみたいな。」「おい、おい、いま更女々しい里心を出すなよ。それよりか、今日の空合に氣をつけてろい……秦野氏……うゝむ、いや秦大人の心のうちをいくらかお裾分けしてろい。」

道路からやや入込んで建つてゐる壁の崩れかかつた平房の前に、初夏の白光を一手光に引受けたやうに、眼もあざやかに青葉したねくんと楓が二三本茂つてゐる。その樹蔭に腰をおろした三四人のものが、無骨な手で不器用に落花生の皮を剝いで喰べながら、ひそやかに話してゐるのだ。

――さう言はれた男が、反射的に立ち上つて空を見上げた。

「これそんなところで、のうのうと小手をかざしてみる奴があるかつ！」

一團から二三歩離れて先刻から腕組みしたまま、薩爾滸山方面を中心とした空を刻々覆ひつつある黑い雨もよひの空に、ぢつと見入つてゐた男が叱りつけた。

「へえ、つひ、うつかり昔の物見の癖が出ましてな……ふつ、ふつ。……」

叱られた方がすつかり恐縮して、逞しい身體にも似合はない何だか寂しい追從笑ひをした。

みんな伯樂姿をしてはゐるが、その物腰がすこしもいたについてゐないばかりか、肝腎の馬市に行かうともしないのであるが、一昨日から行はれてゐる一年一度の市も、今日はその最終日だといふので、何かなく人なつこい氣持にひとしくそそのかされて出て來た。初夏の群集の眼も雜鬧整理に朝から血眼になつてゐる撫順遊擊の李永芳の部下たちの注意も、この不思議な一團にまでは及んでゐないらしい。

「困つたな。今夜一晩といふ瀬戸際になつて、どうやらこりや暴風雨らしいぞ……」

腕組みした男が長い溜息と共に、樹蔭の方をふりかへつた。おお、それは鑲藍旗長秦祿芳ではないか。

秦祿芳は薩爾滸山の方角に雨雲の湧き出したのが、必然的に暴風雨への前兆であることを知つてゐた。

努爾哈赤の密令を受けて、巧に撫順馬市の雜鬧にまぎれ込み、遊擊李永芳の人相はおろか城内の地理を細大となく調べあげた秦祿芳は、いまや部隊總攻擊の豫定日たる四月十七日の夜を控へて、密令外に亙ることだけれども、あはよくば李永芳生捕といふ奇功を樹てたいとまで意氣込んでゐたのだが、折悪しく不吉な雨雲だ……

風が出て來た……

砂塵が九天にまで舞ひあがる。

雨の前兆だ……

撫順へあと三十分――翰渾顎莫の野に休憩してゐた努爾哈赤指揮の部隊は、忽ち晦冥の天地に入つたかと思ふ間もなく、恐しい豪雨に見舞はれた。

文字通り篠突く雨だ！

汗ばんでゐた肌に吸ひつくかと思はれるほど、無氣味につめたい雨だ。

「是非もない。中止とするかのう。」

丘蔭に招き寄せた三旗長と禮普代善を等分にぢろりと見廻した努爾哈赤が、いままで續けられた善後措置協議のけりをつけようと、ぼつくりかう言ひ放つた。

「父上、何度も申しました通り、ただ攻撃あるのみです。敵の虚に乘ずる絶好の機會を、天が雨によつて與へてくれたのではないでせうか。それに、それに私は秦の苦心を見殺しにしたくはありません。」

（秦の苦心を見殺しにするな。――うむ、よくぞ言つた、禮王！それでこそお前はさすがに俺の子だ。）努爾哈赤は柔和な微笑を含んだまま、何も言はずに三旗長の口が動くのを待つた。

「起たう！明月の未明を期して……。」

「恐れ乍ら、同意……」

――努哈爾赤はほじめて莞爾と笑つた。黄鉞の柄をしつかり握つた。

血のやうに燃えた夕焼が間もなく、アカシヤの青葉を緑の露を乘せた百猪を、人を、馬をひた包みに包み込んだ。

黎明の爽やかな空氣が流れて顔を撲つ。

楡にかゝる蜘蛛の網に溜つてゐた露が眞珠のやうに光つて、そこら一面に低く霧が漂つてゐる。

樹蔭で尿をしてゐる努爾哈赤は、近くの丘蔭から慌しい馬のいななきが聞えて來るのを聞いた。（計畫の暴露だ……李永芳にちがひない！）咀嗟にさう感じた努爾哈赤はさすがに狼狽して、いま拂曉の決戦に出るべく露宿の草の床を蹴つて整列しはじめた部下を、うすやみの中に見かへつた。

「陛下！」

丘の彼方に聞きなれた聲だ！

秦祿芳！

何といふことであらう、息をはづませながらも、につこり笑つた秦祿芳が馬から降りる前に、いままで輕々と右

脇に抱へてゐた人間を、まるで槍でも投げすてるやうに地上へ抛り出した。――うしろ手に縛られた人間だ！

「お！」

努爾哈赤は思はずかう言つて、二三歩その方へ近よつたが、どうしてもあとの言葉が續いて出ないのだ。

「陛下！もはや攻撃は無用ございます。」

と、凛と響く秦祿芳の聲だ！

「……うむ、一體どうしたといふのぢやな祿芳！」

柔和な眼に微笑を刻んだ努爾哈赤である。

――うしろ手に縛られた男が、撫順遊撃の李永芳だといふのだ。

部隊の攻撃開始が遅いところから、大豪雨のため中止になつたのだと速斷した秦祿芳は、せつかくの計畫が畫餅に歸したせめてもの腹いせに、眞夜中、李永芳の寢込みを襲ひ、それと知つた城中の混亂を尻目にかけて、有無を言はさず拉致して來たのだといふのである。

はじめの中は、その不敵にして豪膽な行動を俄に信ぜられなかつた努爾哈赤も、草原に蛙のやうに投げ出されてゐた男が。しきりに強がりをいつてゐるのを見ては、とても疑ひつづけることが出來なかつた。

努爾哈赤は何も言へなかつた。ただ、その節くれ立つた兩手で、しつかりと秦祿芳の手を握つてゐるばかりだつた。（俺の眼がねにいささかの狂ひもなかつた！それにしても訝しいのは、この稀代の勇士の素性だ！）と思ひながら……。

「陛下！」

秦祿芳は涙にぬれた感激の面をあげて叫んだ。

「私は今まで素性をかくしてゐましたが、實は私は」

それは努爾哈赤にとつても訊きたくてならないことだ。

秦祿芳――父の秦立芳は日本の征明師の先鋒、鬼上官加藤主計頭清正に屬して秦野辰之助道芳と名乘る武士だつた。

文祿三年、豐臣秀吉の薨去は征明師召還となつてあらはれたが、決河の勢で既に海關河を突破し、大陸の濶達な風物に接した先鋒中には、歸還してまた狹い國土におくせくしなければならない身分であることを窮屈に思つたり、征明師折角の奮戦が有耶無耶のうちに葬られることを残念に思つたりした武士の存在したことは、是非ないことだつた。

さうした武士の一人、秦野辰之助は征明師引揚の前夜逃亡して、二三の若侍と一緒に海關河を中心に狩獵しながら放浪の旅をつゞけ、乘ずべき大陸の風雲をひたすら待つこととした。

その矢先、土民から聞かされた颯爽たる努爾哈赤の長白山討伐戰話は、秦野辰之助らの魂をゆすぶるに充分な魅力をもつてゐた。

そして漸く努爾哈赤に用ひられたのが、秦立芳と姓名を變へた父と、土民の娘の胎中にゐた自分であるといふのである。

（さてこそ！）と努爾哈赤は思ひながら、この告白の結びをつける秦祿芳の言葉に耳を傾けた。

「陛下！何卒、私を何日までも長く陛下の忠臣の一人に數へて下さることを、一同に代つてお願ひ申上げます。陛下の怨敵は亡父の不俱戴天の仇であり、同時にまだ見ぬ母國の敵でもございます。」

秦祿芳の背後には、もはや年老いてはゐるけれども、これもいかめしく張つた兩肩を大地についた手に支へた三人の姿があつた。

秦祿芳の長い物語は、努爾哈赤とその傍に侍した人々を、深い感動の渦潮にまき込んだ。

「うむ、祿芳、俺こそ頼むぞ…」

例によつて言葉は簡單ではあるが、努爾哈赤も老いた兩眼をしよぼつかせた。

薩爾滸山は通り魔に遊擊を奪はれた撫順城を從へて、朝晴れの空をついて聳えてゐる。

三旗二萬有餘の心は、努爾哈赤を中心にして、一段と強い白金線を以て結ばれた。

努爾哈赤の傍にゐた禮王代善は、堪へられなくなつてすゝり泣きをはじめた。

（若殿の感激なさるのも無理はない。若い同志だもの。）そのすゝり泣きの原因を深く追及もせずに、ごく常識的にさう考へるだけで、戰功を賭けた戀を、この東洋の勇士に潔く讓る決心をした禮王代善の胸中を察するものは、誰もゐなかつた。

不戰、凱旋――。

努爾哈赤の右手の黃鉞は振られた。

さうして撫順城混亂を聞いて後を襲つて來た瀋陽總兵の張承胤を屠り、歸途、東州、馬群丹、清和堡の諸鎭を占據した努爾哈赤は、同年秋風が立ちはじめる七月、渾

河上流にある營盤の對岸鐵背山の嶺、吉林崖に城を築いて、ここを天下經略の根地と定めた。

四面、山に回まれ、東は寬甸に接し、南は鞭陽を隔て北は瀋陽に達する要地、清和堡の落城――遼河一帶の震驚は、けだし思ひなかばにすぎるものがあるといへよう。

黃の卷

撫順遊擊の捕虜。
瀋陽總兵の敗死。
清和堡の陷落。

疾風迅雷的な努爾哈赤の追擊を傳へる相次ぐ飛報に、北京の朝廷はいよいよ萬金の對策を講じて、この急に應ずべきであつたが、落日の悲運に直面してゐる兵部省の金庫が、豐かであらう筈がない。

社稷浮沈の非常時局に際して、神宗が楊鎬を遼東經略使に擧げて、朝鮮葉赫の兵も合せて總數九萬をその麾下に屬せしめたのは、清和堡陷落後逡巡七ケ月を經た萬歷四十七年の二月であつた。

遼東經略使楊鎬は萬歷八年の進士で、二十五年朝鮮軍務となり、恰も來襲した加藤清正の軍と蔚山で一戰したが大敗して以來不遇の二十年を喞つてゐたのであるが、今や再び酣の春、この重任を拜した以上、至寵に對へ舊悅を雪ぐべく蹶起一番した。

軍の主力は全明第一流の所謂傾國の師、これに配するに朝鮮、葉赫の兵。

楊鎬は成化三年女眞討伐の故智を踏襲して、全軍を次の如く四路に分ち、總數四十萬と號させ、自分は瀋陽にあつてこれを統率することにした。

北方攻擊部隊（明葉聯合軍）主將馬林。
――開原鐵嶺を出て撫順の東方へ。
南方攻擊部隊、主將李如柏。
――太子河清和堡から興京へ。
西方攻擊部隊、主將杜松。
――撫順から渾河に沿つて蘇子河へ。
東方攻擊部隊（明鮮聯合軍）主將劉健。
――寬甸から興京へ。

二月二十九日、二道關に於ける主將會議には、行動開始は同時なるべきこと、進擊は一齊なるべきことを嚴達されたにも拘らず、眼中に努爾哈赤を認めない杜松に率ゐられた西文攻擊部隊三萬は、技量の功名をあせり、

引續き三個所の小砦を占領した勢に乘じて、古城子から塔連に向ひ、八里の行程を一氣に薩爾滸山麓に達して、渾河を隔てた鐵背山の嶮に努爾哈赤の城を遙かに望み得るところで野營した。

三月一日、諸方から敵勢來襲の諜報が櫛の齒をひくやうに傳へられて來る中に、神色自若と胸に成算をたゝみこんだ努爾哈赤は、それぞれ嶮道を控へてゐるにのに、南北兩路來襲の報を耳にするのが早きに失する點から、これを敵の索制策と觀破して、輕くあしらふべく各々五百の手兵を分遣するに止め、撫順方面の敵を主力と斷じまづこれを破つて後、他に向はうといふ根本方策を樹てた。

そして二旗一萬五千に鐵背山死守を命じて、禮王代善にこれを統べさせ、秦祿芳を先鋒とした六旗四萬五千は薩爾滸山に敵を邀擊すべく間道を取つて西へ移動した。

これより先、杜松は二萬を薩爾滸山に駐め、自ら輕騎一萬を引具して、無暴にも渾河を渡つて鐵背山攻擊に向つた。

杜松が進發して留守であることを逸早く知つた秦祿芳は、敵に先んじて矢庭に攻擊の命令を下した。

ここに老大明と新興金とは、互に存亡榮落の運命を、きはどくも細い一線に挾んで、猛烈果敢な死鬪を開始した。

山上の明軍にとつてみれば、主將杜松の留守を衝かれ他の三路の友軍がまだ到着しないのにさきだつての開戰だ。

地理に通じた四萬五千。

萬里縣軍の二萬。

條件に於て、兵數に於て既に比較にならぬ程、不利な狀態に置かれ大明軍ではあつたけれども、流石にはじめの中は兵器の優劣が物を言つた。——精巧な銃やボルトガル式巨砲に、味方の立ちすくむ色を見た秦立芳は、切齒して先頭に立つて山を攀ぢた。

山麓に馬を駐めた努爾哈赤は、この獅子奮迅の青年旗長の姿を、ほゝゑましく眺めながら、今度凱旋したら楊との媒酌の勞を進んで執つてやることによつて、彼の戰功を犒はうと、そんなことを考へるほどのゆとりを心に保つことが出來た。

彼我兩軍の戰況は未だに五分と五分。しかし運命はあくまで皮肉に、時と所を選ばずに匿れてゐる。

霧だ！

兩軍の阿鼻叫喚を、天も正視するに忍びなかつたのか咫尺も辯じ之ぬ霧だ。

渾河の水が一時に蒸發したかと思はれる程、深い霧が湧いて流れ出した。——と、山頂に點々と點じ出された松明だ。

この松明が却つて明軍に禍の種を蒔いてしまつた。——秦祿芳はすかさず叫んだ。

「火をねらへ。火を…今、一いきだ！」

暗い所から明るみへ放つ矢、齊しくあたらないものはないが、明軍の銃砲彈は徒に樹林の梢や幹を傷つけるばかりで、効果を俄に半減してしまつた。それと氣づいた明軍は急いで松明を消しにかかつたが、それは最早徒勞であつた。この間、僅々十分を出でない時間が、兩軍の態勢に著しい隔たりをつけたのだ。

かうして薩爾滸山は殆ど秦祿芳直屬の鑲藍旗一旗の力によつて占城されてしまつた。

鐵背山に向つた杜松は急を聞いて引返したが、豫めその退路を要してゐた正白旗の小部隊に阻まれて、渾河の渡渉さへ今度は容易でない。あまつさへその狹路で、山上、山下から六旗の挾擊に遭ひ、中央を突破され、全軍覆沒、慘めな亂軍の中に杜松は流矢にあたつてあへなくも戰死した。

努爾哈赤は先刻から全軍を叱咤する秦祿芳の聲が響いて來ないのを訝しく思つてゐた。大聲で呼んだとしてもわかるとは思へない程の負傷兵の呻き聲だ！味方の鬨聲だ！探し廻らうとしても、歩かれさうもない程、累々とした屍體の山だ…

漸く霧が霽れかゝつた頃、辛うじて頂上近くまで登つた努爾哈赤は、痛ましい秦祿芳の死體を發見した。——巨砲の砲身にかけたらしい右手が、無殘に燒けたゞれてゐる。そして鶸色の馬鞭を腰に挿したまま、胸を射拔かれて仰向けにぶつ倒れてゐるのが、まさしく秦祿芳だ！包みきれぬ喜びをゑくぼに深く刻み込みながら……。

努爾哈赤は思はず抱き上げた。何といふ立派な最期だらう。今日の活躍に十分の自己滿足を感じつつ死んで行つたのか。今日の戰に於ける殊勳第一も當然お前だつたのに。そして俺が目論んでゐた恩賞に對しても、お前はあまりにも恬淡と死んで行つた！）努爾哈赤の傷心は今日の勝利の快感の大半を蝕んでしまつた。

旗長を喪つた鑲藍旗は通夜の意味で休養させ、殘りの五旗に終夜敗殘兵の掃蕩を命じ、併せて開原路の北方攻擊部隊たる明軍聯合軍に備へさせたが、葉赫兵の謀叛はあまりにも呆氣なく主將馬林の敗死となつて現はれた。

二日は朝から快く風いだ晩春の晴天となつたが、六旗をまとめて鐵背山に歸る努爾哈赤の馬上の姿は、どうしても戰勝將軍の凱旋とは受取れない位、悄然としたものがあつた。

途中、寬甸路から來た東方攻擊部隊明鮮聯合軍の側面攻擊を受けた。

鑲藍旗の老武士三人は、いまにも正紅旗に應戰命令を下さうとしてゐる努爾哈赤の傍へ駈けつけて歎願した。

「陛下！秦野……いえ秦旗長の弔合戰を私共に是非やらせて下さい。こんどの敵の大將！彼奴は昔蔚山で洒落れた眞似をした楊鎬の手下に相違ありません。あの髭髯に見覺えがあります。何卒！陛下。」

努爾哈鑲は昨夕からはじめての笑顔を見せて大きく肯いた。

鑲藍旗對明鮮聯合軍。

まだ後詰の五軍が目前に無氣味にも控へてゐることを見た明鮮軍の步調は、最初から揃はなかつた。そして一時間後、自軍の主將劉健の首級を手土產にした朝鮮兵の單獨投降となつて、努爾哈赤の苦笑をあがなつた。

六旗が鐵背山へ歸ると、太子河邊で味方の敗報を聞いたらしい南方攻擊部隊が、自發的に後退を開始したといふ諜報が待つてゐた。

明軍今回の遼東遠征の總決算として發表したところによると、

將領戰死者	三一〇餘名
兵卒戰死者	四五八七〇餘名
歸還者	四二三六〇餘名
馬匹損傷數	二八四〇〇餘頭

遼東經略使楊鎬の歸京は、斬罪の極刑を以て迎へられた。

戰死した將領三百十餘名の中には、文祿慶長の役に從軍して、朝鮮を援けた勇將の名が尠からず發見される。

これに比べて努爾哈赤の軍の戰傷者は、至寶秦祿芳をも數へて五百を出でなかつた。

——日本不世出の英雄太閤秀吉の雄圖が、滿洲椛代の

梟雄努爾哈赤に繼承され、その完成への燦然たる工作に與つて、大きい力を致したものに、秦祿芳を見出すことは、誰しも不思議な因緣を感ぜずにはゐられないことであらう。

ともあれ、曠古の大勝だ！

凱旋將士も留守部隊も、われを忘れて祝勝の一夜を明かした三月三日。努爾哈赤は楊が渾河に投身して相果てたといふ奏上を聞いた。

「父上…秦と楊を葬ることの一切を、私に任せていたゞけませんか。」

傍に控へてゐた禮王代善の聲だ。

「うむ、汝にまかせる。ねんごろにな……。」

（俺の子代善もまた戰勝の日に、悲哀をしみじみ味はつてゐる……。）鸚鵡がへしにかう考へて努爾哈赤は、心にふと湧いて來た淋しい波紋を覆ひかくすやうに、强ひて微笑んで見せた。

隣一二軒

町原幸二

私の家は、近江町社宅街の一角。昨年の夏の初めに改築された並びの一番端ツこにある。あんまりコヂンマリしすぎた家だ。

九月十五日、私が其處に移つた時はまだ兩隣も二階も空いてゐたし 家の前の生垣は、改築の際に取拂はれた儘で道路を歩いてゐる人達から家の中は丸見えにされる有隙だつた。家の前の庭は相當廣く場所をとつてあつたが、北向きのせいか雜草すら生へてはゐなかつた。私は夕方歸つてくると、必ず窓を開け放ち、何も生へてない赤土庭を眺めては春になつたらなんとかしたいものと思つた。

右隣に武田氏が引越して來たのは九月二十日であつた二十日の夕方歸宅してみると、隣家にあかあかと電燈がついてゐたのである。玄關先には「武田四郎」といふ名刺と西洋紙に包んだ日本タオルが投げこまれてあつた。八時頃、クラブ食堂へ行く時に見たら もう燈は消へてゐたが、隣に人がはいつた、といふことは心強く嬉しいことだつた。私は九月三十日に結婚する身で、毎日の行ひをつゝしむことに努めてゐた頃であり、朝は隨分早く出勤したが、武田氏は私よりもまだ早いらしかつた。毎朝表に立つてゐる子供に聞いた、「父ちやんはまだお家にゐるの」すると子供はニツコリ笑ひ「あつち行つた、あつち行つたよ」と會社への道を指さすのである。晩は私が食事に行く頃もう燈が消へる。結局、彼との初めての對面は 私たちの結婚式の晩であつた。如何なる運命でか私の一生の同伴者となることにきまつた新妻と、先づは目出度くとタクシイで歸宅した時に、武田氏は子供を連れて庭に立つてゐたのである。それが武田氏だといふことは傍の子供で判斷ついた。彼は私たちがタクシイから下りると同時に、へなへなと腰をかゞめて最敬禮に近い禮をした。私も慌てゝ返禮したが、お互ものは言はなかつた。

武田氏とそれから行つたり來たりの交際をしたかと言ふと、そうでない。彼の出勤は以前よりも早くなつたやうだし、夜分風呂で會ふことも一度だつてなかつた。何

時打ちつけたのか「ひとのみち」の青い札が玄關の戸にかゝつた。朝早いのはそのせいだつたのかもしれない私の從弟も熱心な信者であり、最近は人が變つたかと思はれる程物事に眞劍味をたゝへてあたつた。多分武田氏もさういふ人であらう。私はまるで會ふことのない彼を勝手に想像してみたりした。

家の前のアカシアが落葉しつくし、いつか庭土も黑ずんできた。雪が何度か降り、北向きの家並からは日々煙突の黑煙が增へた。私の家は焚いても焚いても寒いのである。客間にしてゐる六疊は、いくら焚いても北極のやうだわと妻はこぼし、來客があると「本當はあつちが客間なんですが……寒いんで此處が何もかも兼用です、いや、やりきれません」と愚痴にも似た挨拶を、私はするのだつた。武田氏の家も寒いのだらう。表のガラス窓は眞白く凍り、夜は前よりももつと早く七時前後には燈が消へた。

二階や左隣がふさがつたらきつとこんなことないと思ふわ、隨分遠つてよ」

妻は早く誰か這入れと毎夜言ふのだつた。

左隣がふさがつたのは十二月二十日過ぎだつた。私が白い息を吐きながら日暮時歸つてきたらいきなり妻は

「お隣りに誰方かいらつしたわ」

と嬉し氣に言つた。今朝、私が出て行つてから間もなくのこと、トラックが二臺左隣の家に來たと言ふのである。それから半日、水を流す音や釘を打つ音が絶間なく續き夕方になつて、ひよつと窓から見るとまだ若い夫婦らしいのが隣の庭先でボロ屑を焚いて居たさうである。妻は兩隣共ふさがつたといふのが如何にも嬉しいらしく

「窓を開けて呼びかけてみようか、と思つた位だわ」

と話した。私は妻のさびしがりを笑ひながら

「やれやれ、隣近所に人が來たらうるさくなりさうだな、僕はどこか郊外にでも引越したい」と言つた。

晩食がちようど濟んだ時、玄關をノックする來客があつた。出てみると以前同じ所に勤めてゐた友人佐世君である。

「まあ上んなさい」

とすすめると

「いや此處で結構です……實はあんたとこの隣に來たんでネ、その一寸挨拶に」

と言ふのだつた。

「なんだ、君が來たのかね」
私は臺所の妻を呼びに行きながら
「なんだ、佐世君が來たんか、へえお隣りは佐世君か」
と繰り返した。佐世君は妻に向つて「どうぞよろしく」とペコンペコン頭を下げながら開いたまゝの外に手を伸した。すると女の人がドアーの外から現はれた。
「あのネ、ワイフですよ」
佐世君は早口に言ひながら、顏を綴くした。私はこの間、佐世君の結婚披露によばれたばかりである。しかし隣へ新居を構へるとは全然思ひがけないこと、うすぐらい玄關先で四人は何度も何度もお辭儀をし合つた。
しかしそれから佐世君が家へ來たか、と言ふと一度も來てゐない。私も又彼の家へ行つたことがない。會社の廊下で、社宅の風呂で毎日のやうに顏を合はせ「遊びに來ないかね」「あゝ行かう、が君もたまには來てくれよ」と話しはした。しかし一度も行かぬし來もしない、妻たちも裏庭で毎日顏を合せ挨拶はするが、私たちの留守中行つたり、來たりといふことはなかつた。
佐世君の家からは、毎夜レコードが聞へた。どんな北風の強い夜でも壁づたひに流れこむ美しい音樂の調べには影響がなかつた。私たちはこの壁づたいの靜かな音樂を毎夜たのしんだのである。
佐世君が正月早々入院し、妻君は病院へ看護に行つたきり家に歸らなかつた。毎晩まツ暗な家を眺めては「明日は見舞に行かう」とその度思つたが、次の日には忘れてしまつてゐる。一箇月も過ぎたがまだ退院せぬ。しかし今更のことは行けなかつた。武田氏の方はどうか、私はもう彼がどんな顏をしてゐたか忘れてしまつたやうである。子供だけは如何に寒い日も表に立つてゐるので「坊は元氣だな」と言葉をかけることができた。この右隣は裏が離れてゐるので、妻も、お隣の奥さん見たことない、と言ひ、その度「一度行かなくちや」と私の顏を見た。
二階に羽金興一氏が這入つたのは二月初めであつた。これは十日位して「おや、二階に人がゐるわ」といふ程度で、多分二月初めだらう、と思ふのである。それからは標札を毎日たのしみに待つたが、遂に春が來るまでかゝらなかつた。なんといふノンキな奴だらう、一體郵便はどうしてゐるんだ、私は時々二階に向いて怒鳴つてゐた。
春が來たことを知らせる大きな牡丹雪が朝から降つた

り止んだりした。道がぬかるみ、空はどんより曇つた日なのである。病院の前を通つてゐると、「おーイ」と呼ぶ人がゐる。見上げる二階の中央の窓が開いてゐて佐世君がのぞいてゐた。私は「やあ」と手を上げたが、急にきまりわるくなり急いで手を下した。心やすく「やあ」と言へた義理ではない。私は暫く當惑してゐたが「今日は隙いねエ」と別のことを叫んだ。すると佐世君の横から妻君がひよつこり顏を出して默つて頭を下げた。
「四、五日したら退院だア、よろしくたのむねエ」
佐世君は元氣に嬉しさうな聲で又手を振つた。妻に歸つてそのことを話すと「それなら今夜行つてみませうか」と妻は言つた。夕食後、私は町へ出て、甘い香ひのする果物籠をかゝえて歸つて來ると
「でも退院されるといふのにお見舞なんておかしいわ」と妻は行くことを中止にしやうとした。
「退院のお祝と言つたらいゝだらう、おかしくはない行かう、行かう」
佐世君の部屋をノックしたのはもう入時近かつた。ところが佐世君は先刻退院したといふ——出る時はまだ隣は眞暗だつたが、では入れ違ひか。歸つてみるとやつぱり入れ違ひだつたらしい、久々で佐世君宅の窓がほのぼのとでも言ひたい程にあかるかつた。
庭の赤土が水氣をふくんでぼゝれだした。ある日曜日私は鍬を振つて赤土を堀つた。出てくるのは石ころと石灰のかたまりばかりだつたが、なんとかして花畠を造りたい、と半日つぶして掘つて、掘つて、掘りまくつた、が駄目なのである。底はだんだん大きな石塊になるばかりだつた。
「骨折り損のくたびれ儲けだワイ」
私は一人苦笑し、午後からは妻と海岸へ行つた。陽はさんさんと照り、歩くと汗ばむ陽氣だつた。夕方、歸つてから何氣なく表に出ると、武田氏の庭に畠が出來てゐる。何處からか運んで來た土だらう、黑い土をもり上げた相當大きな畠。周圍には丁寧にかこいまでしてあつた。私は午前中のことを考へた、私が汗を流して赤土を掘りまくつてゐる樣を武田氏は窓からでも見ては居なかつたか。私は自分が掘り返した跡をふりむいて見乍ら思はず又苦笑ひした。
夜になると、羽金氏の家のラヂオが聞へた。私は窓を開け放つてそれを聞いた。相當なラヂオらしく電波の聲

は明瞭だつた。又時々だつたが羽金氏がひいてゐるらしいヴアイオリンが聞えた。しかし素人にもこれは下手くそだと分るほど、全然音が出なかつた。佐世君に言はせると「あれはなつとらん」程度である。その佐世君はすつかり元氣になつたが、矢張り遊びに來ない。私も行かぬ。たゞ妻たちは少しづつではあるが裏庭での立話が長くなつたやうだつた。

羽金興一氏は、遂にその顔すら知ることの出來ぬ中に何時の間にか何處かに行つてしまつた。この間氣がついたのであるが、私の標札に「この二階羽金」と鉛筆書きがしてあつたのを見つけた。多分郵便配達人が書いたのだらう。羽金氏は今度の引越先も書殘して置かなかつたらしく、郵便配達人が二、回三も私の家へ尋ねに來た。とにかく羽金氏はのんきである。

武田氏は庭のアカシアの花が咲く頃に、眞金町へ移轉して行つた。夜、挨拶に來られて「永々いろいろと有難ふございました」と言つて、又へなへなと腰をかゞめた武田氏を見たのはこれが二度目である。まことに賴りない隣同志だつた。

秋になつて、武田氏の造つた畠にはコスモスが咲いた陽當りがよくないのでヒヨロヒヨロとしてゐるが、それでも美しい眺めである。今、這入つてゐる齋藤健一氏は私の留守中に挨拶に來られたので、もう一ケ月になるがまだ面識がない。

私の母にこの話をしたら、隊を叩いてこぼした。

「內地だつたらお隣といふものは親類よりも大切にするし世話にもなるが……これが植民地かねエ」

佐世君の所も私の所も男の子が生れた。しかし矢張り行きもせぬ。來もせぬ。風呂で會つて「どうかね、大きくなつたか」と話す位で、「遊びに來給へ」「あゝ君も來給へ」はもう言はなくなつた。

私たちも、やがて何處かへ引越すのだらう。

逃亡

今村久米子

夢うつゝに、タエは自分を呼ぶ誰かの聲を、遠くの方にきいてゐたが、三度目か四度目か、あ、だん〳〵近づいて來たな、と思つた瞬間、はつきりと現實へ引戻された。

醒めてみると、入口に一番近く寢てゐるタエのすぐ横に、丹前に懷手をして立つてゐる鄉田の姿が、寢てゐて見上げるせいか、相撲取のやうに大きく見えた。無意識に胸をかき合せながら、半身を起しかけるタエに、顎で二階をしやくつて見せ、つぶやくやうな低い聲で、

「話があるんだ。ちよいと來てくれ。」

さうゝつて注意深く部屋中を一わたり見廻す鄉田の視線を何といふこともなくタエも追つた。

夜の遲い商賣のことゝて、幸ひまだ誰も目を醒ます氣配はなく、中には見る方がテレるやうな淺ましい格好で眠りこけてゐるのもゐた。一人も起きさうもないことをたしかめると、鄉田は安心したらしく、

「待つてるぜ。」

念を押すやうにゝひ置いて、やがてゆつくりと、足音を立てずに階段の方へ消えて行つた。

ゾクゾクッと、寒けを覺えて、タエは一たん起しかけた躰を、かたつむりが殼へ引込む時のやうな恰好で、薄汚れた搔卷の中へもぐりこませた。もう眠くもなんともなかつたが、たゞ蒲團の中のぬくもりが戀しかつたのだ。

新京の十月は、もう冬に近い寒さの日が多かつたが、こゝでは十一月から煖房を通す定めとかで、スチームはまだ冷えかへつて居り、その上タエ達の寢る女部屋は、北向きでひねもす日がさゝず、寒くて陰氣で薄暗かつた。

それでも、枕許の窓へ目を移すと、この部屋へは訪れることのない太陽が、隣の窓硝子にカッと照つた、その强烈な反對が、タエの寢てゐる眞上の天井を、その部分だけ明るい色に染出してゐた。

朋輩のお豐が、夜店で買つて來たといふ古びた目醒し

時計が、彼女の死んだ子供の寫眞や、破れた講談本や、ヒビの入つた瀬戸物の花瓶などと一緒に、窓枠の上に雜然と載せられてゐて、九時半になると、それが錆びつきさうな音を立てゝ短く鳴つたが、腐つたみたいに眠りこけてゐる女達の鼓膜は、そんなものをてんで受付けないらしく、寢返り一つするものもない。

タエは蒲團の中で、躰を海老のやうに折り曲げ、夜着の襟から目だけ出して、惜しいぬくもりをおさばつてゐたが、階段の軋む微かな音を耳にすると、電氣にでも觸れたやうにサツと飛びのき、手早く前を掻合せ、ゆるんだ伊達卷をキユツと締めると、寢間着の上から人絹の羽織を引かけて、そゝくさと、それでも物音をたてないやうに氣を配りながら部屋を出た。

タエが階段を上りかけた時、女部屋に續いた料理場の隅から、故意にする咳拂ひが二度ほどきこえたが、全身の注意を二階の方にばかり集めてゐたタエは、遂に氣がつかなかつた。

それから四十分もたつたらうかタエは何ごともなかつた風に、つとめて落着いた足どりで、二階から降りて來たが、部屋へ入るなり羽織も脫がずに寢床に轉げこみ、頭からすつぽりと夜着をかぶつて身動きもしなかつた。

二階ではその頃、部屋隅の電氣ストーヴを眞赤に燃して、フカフカと厚い蒲團の中で、いかにも滿足げなゆるい寢息を立てながら、鄉田が二度目の深い眠りに落ちてゐた。

×

働いても〳〵食ふに困る小作農の赤貧。

タエは廣島在の農家に生れ農家に嫁いで、飽きるほどその貧困を味はされて來た。貧乏の中へ神經を置き忘れて來たかと思へる鈍感な夫、それに反比例する勇夫婦の小やかましさ、おまけに姑の五十も屆かうといふのに臆面もなく、子供を產む旺盛さに、タエはつく〴〵呆れてしまひ、この上自分に子供が出來たら?と考へると矢も楯もたまらなくなり、一年足らずで實家へ遁げ歸つて來たが、やれ出戻りだ、何だ彼だと噂される口のうるさゝに、自分はともかく、家の者達が肩身のせまい思ひをするのが見てゐられず、ちやうど募集のあつた滿洲働きの女中を志願して、默つて家を飛出してしまつた。

周旋人の話では、勤め先は極く氣樂な官吏の家庭といふことだつたが、來て見ると、タエの差向けられた家は

たから亭といふ一寸した小料理屋だつた。タエは周旋人の言葉の相違に、田舍者らしい驚きは感じたけれど、だまされたといふ怒りや失望は微塵も覺えず、かうした世界にむしろ激しい好奇心を湧き立たせたのだつた。その夜からタエは、生れて初めて見るやうな料理や飲物を盆にさゝげて、ワクワクする胸と手のふるえをじつと抑へながら、電飾の施された明るい灯の下をゆき來することになつた。

タエが住込んだたから亭は、主の鄉田が事變の直後、あるぼろい仕事をしてゐる頃に、女房のお崎が遊んでゐては勿體ないといつて、ほんの內職のつもりで始めたおでん屋だつたが、むかし味を知つた相場で、一度摑んだ金をスツテンテンに鄉田がすつてしまつた時には、いつか時世も移つて居て、もう以前のやうなうまい儲け口はなく、內職がいつか本職になり、それに如才ないお崎の商賣上手が、だんだんに店をひろげさせ、女も六七人も置くやうになつて、今ではこの土地で相當に知られるまでになつたのだといふことを、タエは先輩のお豐から聞かされて知つた。

お崎は水際立つた容姿に頭も働く、いはゆる才色兼備の女將で、鄉田夫婦を知る限りのものは誰でも、お崎は鄉田には勿體ない女房だと噂したが、お崎はそんな讃辭は聞えぬ風に、一にも旦那、二にも旦那で、どんな些細なことがらでも鄉田に相談を持ちかけ、鄉田の面子を立てゝゐたが、實際には彼女ひとりが店を切り廻してゐるのだつた。

お崎はかなり前から食堂をやりたいと考へてゐた。座敷に上つて飲んで行くはいゝに違ひないが、時間がかゝつて仲々捗どらない。それはそれとして、別にホールを作つて、大衆向きに氣輕に食べられる店にしたい、さういふ考へを鄉田に打明けるとすぐに贊成し、早速階下の小部屋を二ツ三ツ取りこはして、グリル風に改築し、洋食も始めることにして、今までゐる板場の外に洋食專門の腕きゝのコックと、女も二人ばかり殖やし、華々しく改築披露をしてやれやれと、安心するとお崎は長い間の無理がたゝつて、子宮癌の切開手術を受けねばならないことになつた。

お崎が滿鐵病院へ入院してからの鄉田は、夜毎々々、客には愛想よく、女達にはきびしく、料理場の方も目を通し、そして帳場といふ工合に、あるじの役と女房の役

を一人でやつてのけねばならないことになつた。それは郷田にとつては非常な努力の要る仕事で、神經ばかりか躰までクタクタに疲れ果て、お崎のゐない不自由さが今更のやうにしみじみ感じられ、お崎がこの家でいかに重要な役割を持つてゐるかゞ痛感された。

×

自分には過ぎたいゝ女房を持ち、その女房に首つたけでありながら、ふとした場合にムラムラと起る氣持、それはたとへて云へば、美食はいつだつていゝに違ひないが、たまにはつまらないものにも一寸手を出してみたくなるやうなものだらう。だがそのつまらないものも、氣輕に手が屆かない場合は、無理してまで欲しいとは思はない。そんな程度のあるものが、お崎が入院してからの郷田の躰内に、チラチラと動き始めてゐた。しかも彼の場合には、周圍のすべてがそのあるものを突き動かすに都合よく出來てゐた。夜は屋根の下のあらゆるところに酒の香に混つた男女の艶な言葉のやりとりが聞こえ、晝はやゝ白けた家の中に、寢亂れた女の肢躰が浮動する。手を出しさへすればすぐもげさうなところに、欲しい木の實は成つて居り、しかも郷田は四十をやつと一つ越したばかりの、男盛りでもあつた。

割合に垢ぬけた女の大勢ゐる中から、わざわざ新參のタエを選んで郷田が白羽の矢を立てたのは、成熟したお崎の對象として、女としては未完成なタエの土臭さに食慾を感じたには相違ないが、その反面には、分別盛りの男特有の冷たい打算が十二分に働いてゐた。

水商賣に多少でも經驗のある女ならば、郷田の場合のやうな男の氣紛れは、手もなく見拔いてしまつて、なかなか糸にかゝりはしない。またもしも、かゝつたとしたら、それは女に男以上の魂膽があるからで、いざとなれば尻をまくつて坐りこむ。郷田にしてみれば、女に坐りこまれる位は何でもないが、そのためにお崎から輕蔑されることが怖かつた。輕蔑して出て行かれることが恐ろしかつた。

タエはその點はまだ子供で、絶對にひとに知られる心配はないし、知られたつて自分に楯ついて來るとは思はれない。だがタエが子娘でいかに田舍者でも、すでに一度男を知つてゐる以上は、子供に對するとは別な手管が要る。そこにまた郷田のひそかな樂しみがあつたとも云へよう。

着たまゝで飛び出したタエは、店へ出るための着物や帶は無論のこと、下駄、半襟、前掛の類に到るまで、かうした時にふさわしいものを揃へなければならなかつたし、それと、來る時の旅費や周旋人へ拂つた金などが、百圓餘りの借金になつてゐた。かうしたところに働くもの、借金としては、百圓はむしろ尠いくらゐだつたけれど、まだ客拔ひに馴れないタエは、座敷の方は受持たされず、いつもホールばかりに居るので、自然に祝儀も少なく、來て一ケ月になるのに、まだ借金は一錢も減つてゐず、郷田はそこに目をつけたのだつた。

×

三日目の朝タエが二階から降りて來ると、料理場のまだ薄暗い口に、こちらに背を向けてしやがむでゐる男の姿を見て、彼女はギョッとして立ちすくんだ。

男がコックの坂本で、自分に氣付かず煙草を吸つてゐるらしいのを知ると、タエはやゝ安堵して、猫のやうに足音を忍ばせて女部屋に近づいた。そして、もう一歩で入らうとした時、まるでその出足をとめるかのやうに、

「朝つぱらから、おやぢに用事かい？」

ふり向きもせずいやに落ついたバスだつた。入るに入れず、タエは狼狽を、くづれた桃割の鬢の毛をかき上げる動作に紛らしながら、

「旦那が、話があるつて呼ぶもんだから……。」

「何の話？」

すぐに追ひかけて來る坂本の問ひを、

「……。」

タエが默つて答へられずにゐると

「借金のことだらう。」

その決定するやうな口調に、仕方なく、

「え、」

とはゞかるやうに答えた。

「借金がどうしたつて？」

「ちつとも減つてないから、もつと稼いで入れなければいけないつて……。」

「それだけかね？」

「さうよ。」

「まだ一ケ月やそこらで、おまけに素人じやないか。そんな無理な話つてあるか。」

「だつて、旦那がさう云ふんだもの。」

「たつたそれだけのことで、三日も續けて呼びつけた

のかね？」
タエはハッとした。
「えッ？」
と思はず出かゝつた反問を、やつと抑へて笑ひに紛らし、
「あら、旦那が呼んだのは、今朝だけよ。」
と呆けてしまはうとした。すると其の時、坂本は初めてゆつくりとタエの方へ向き直り、「悪いと思つたら、よした方がいゝぜ。俺以外に、まだ誰も知つちや居ないんだから……。」
靜かにさとすやうな言葉だつた。それが親切から出た忠告であることはよく判つてゐながら、タエは妙な意地から卒直に肯くことが出來なかつた。そこには秘密を知られた後めたさも手傳つて、
「へんな云ひ方しないでよ，私が何をしたつて云ふの？」
虚勢を張つてさうつゝかゝつてみたが、坂本は彼女の言葉には耳を借さず、
「ちつとばかりの借金におどかされて、自分を台無しにしてしまふなんか、悧口なやり方じやない。それによかみさんに對してだつて、濟まな過ぎやしないかい。」
何も彼も道理であり、そして何も彼もタエ自身がひそかに良心に責められてゐることだつた。だがそれだけに、ズバリと云ひ切つた坂本に對して、無性に腹が立つた。
「何をしやうと餘計なお世話よ。ほつといてよ。」
ヒステリツクに叫ぶタエの胸の底まで見透すやうな、靜かな凝視をフツと外らして、
「餘計なお世話か、なるほどね。」
坂本はさうつぶやいて立上ると、料理場の隅の棚のやうな寢床へ、サツサともぐりこんでしまつた。
あとにひとり取殘されたタエは、故もなく涙ぐみ、自分へとも坂本へともつかず、バカバカバカと心の中で叫びつゞけた。

×

このことがあつて以來、タエは坂本と顔を合せることがテレ臭くて、出來るだけ彼の視線から遠ざからうとしたが、心は反對に彼に對して不思議な關心を持つやうになつてゐた。
お崎の手術後の經過ははかばかしくなく、女達は鄉田の命によつて、毎日交代でお崎の看護に行くことになつた。鄉田はいろいろの意味から、タエだけに病院へ行かせたくないと考へてゐたが他の女達の手前そんな勝手も出來ず、またそんなことをすれば、秘密を嗅ぎつけられるおそれもあつた。
お豐が小さな風呂敷包みをかゝえて、寢不足な顔で歸つて來た朝、タエは代つて病院へ出かけて行つた。けれどもさすがにお崎をまともに見ることが出來なかつた。扉を背にしてモジモジしてゐるタエを、お崎はわづかに頭を持上げて目で迎へ、
「けふはお前さんの番？御苦勞さまね。」
さう云つてかすかにほゝえみかけたが、タエは默つて大きくおじぎをしたまゝ、ジツと顔をうつ向けてゐた。お崎はそんなタエを、かうした場所に馴れないせいと見てとつたらしく、ふだんよりも一そう打とけて、
「タエちやん、もつとこつちへ寄つて、お店の樣子話して頂戴。旦那はひとりで、さぞ忙しがつてゐるだらうねえ。」
そんな風に話しかけられては、いつまでも入口に立つゐるわけにも行かず、ベツトに一番遠い椅子に、タエは小さく腰を下した。
タエがチラと見たお崎は、いくぶんやつれては居たが、いつもは水々しい丸髷に結ひ上げてゐる豐かな髮を、無雜作に櫛卷にしてゐるのが、やゝ蒼みを帶びたきれいな肌に、不思議に調和して、凄化粧をしてキチンと裝つてゐる時よりも、はるかに清淨なものを感じさせた。
お崎は非常に大儀であるらしく、間もなく靜かに目をとじたが、タエはお崎のかくれた氣高さを、今初めて見たやうな氣がし、無條件でお崎を美しいと思つた。と同時に、鄉田が自分をお崎と比較して、お前にはお崎の持つてゐないものがあるといつて喜ばせたのは、たゞ自分を抱くための方便に過ぎず、自分の行つてゐる良さはすでにお崎が皆持つて居り、自分が持つてゐてお崎が持つてゐないものと云へば、結局その愚かさだけだつたと氣がついた。タエは自分の自惚れと自分のとつた行動に今更のやうに深い悔いを覺え、するとあの時坂本の云つた一語々々が、鞭打つ痛さで胸によみがへつて來た。

×

息苦しい一日の勤めを終へて、翌朝タエが遁げるやうに病院から歸つて來ると、料理場で板場のおやぢが、坂本の寢床へガラクタを積上げてゐる。タエは不思議に思

つて、
「おぢさん、何してるの？」
何げなく尋ねると、
「タエちやんか、あゝ、お前はまだ知らなかつたね。坂本はやめたんだよ。」
タエは瞬間足元から全身の力が抜けて行くやうに感じたが、わざと落着いて、
「どうして、やめたりなんかしたの？」
すると話好きのおやぢは、片づける手をやめて、タエの立つてゐる入口へ腰を下し、懐から煙管を出して、コヨリをよつて掃除を始めながら、ゆつくりと話し出した。
「あいつは、ずつと前から獨立して商賣したいと云つててね、どうせ働くなら奥の方が面白いつてんで、齊々哈爾の奴の兄貴に頼んであつたんだ。この間その兄貴から適當な家の賣物があるからつて便りがあつたんだが、奴好きな女が出來たんで、もう少し辛棒して、その女の借金を拔いてやつて、一緒に店をもつつもりでね、兄貴の方は一應ことはつたらしいんだ。ところがおかみがあんなことになつたんでうちの大將が早いとこその女に手をつけちやつたつてわけさ。奴、がつかりしたさうだが、なあに女さへ一時の迷ひと目がさめさへすりやいゝ、つてんで、女に注意して見たんだと。ところがそいつが鈍くて奴の氣持をちつとも察しないんだつてよ。それですつかり氣が變つて、今朝の一番で兄貴の所へ行つたつてわけよ。早速その家を買ふつもりなんだらう。」
おやぢはそこでプッと煙管に息を通して見てから、
「だがねタエちやん。世の中にはうかつな女もゐるものさね。おいらは庖丁一本の渡世、あいつはフライパン一つありや世渡りが出來るつてわけだが、いゝ腕はもつてゐるし 煙草も酒もやらず、道樂もないつて男だ おいらの社會にや、めづらしい掘出しものよ。それに考へて見なうちの大將ときちやあ、今でこそ亭主面して收つちやゐるが、からきし値打のない男さ。それにおかみはあの通りの出來だ。云つちや悪いか知れないが、うちの女達がいくら若いからつて、束になつて逆立ちしたつて、おかみの足元へも追付きやしない。おかみが癒つて歸つて來さへすりや、ぽいと拋り出されるのは知れきつたことさそこに氣がつかないなんて、馬鹿なアマじやないか。」
タエは眩中が火のやうにほてつて、それ以上聞いてゐられない氣がしたが、今更逃げるわけにも行かず、ジッと俯向いてゐた。
おやぢはそんなタエに頓着なく、
「しかし坂本つて男は ろくでなしの女と一緒に苦勞させるにや惜しい男さ。それにしても、ねえタエちやん。」
と、ジッと好奇に充ちた目を向けて、
「あいつはその女の名だけは、たうとう云はずに行つてしまつたが、このごろ大將に可愛がられてるつてのは、一體誰だね。お前知つてるだらう。」
きかれてタエは微かに頭を横に振つたが、しばらくためらつた後、思ひ切つてきいた。
「ねえおぢさん、坂本さんの行つた所つて、どこ？」
「お前坂本に何か用でもあるのかい？」
くすぐるやうなその視線を避けるやうにして、それでもタエは一生懸命に、
「だつて、一つお釜のご飯をたべたんじやないの。手紙ぐらゐ出すことだつて、あるかも知れないわ。」
「アハハハ、なるほどさうか。所はこゝだ。」
さう云つておやぢが財布の中から取出した紙切れをひつたくるやうにし、兩手の中に固く〳〵握りしめた。
その夕方、來た時のまゝの、みすぼらしい姿で、下り列車の片隅にうづくまつてゐるタエだつた。
たから亭では、漸く忙しくなり始めた食堂の、造花の紅葉の紅く照り映える下を、お盥がひとり忙しさうに皿や小鉢を運ぶ合間に、帳場へ寄つては、タエの失踪をなぜ警察へ屆けないのかと、郷田にしつこく追及するのだつたが、郷田は默つてゐるだけで何も云はなかつた。料理場ではおやぢが何も彼も呑みこみ顔に、鮮やかな庖丁のさばきを見せてゐた。
やがて弦歌のさんざめきが流れて來たりして、この繁華街は昨日と變りない夜の繪卷をくりひろげて行くのだつた。

炎天

宮川　靖

美佐が窓から見下ろしてゐると、玄關先から伊部博士の姿が出て來た。黑い折鞄をさげてゐる。おや先生今日は白服でゐらしたのかと美佐ははじめて博士の服の替つてゐるのに氣がついた。研究室の中では誰も皆白い仕事着だから普段は下に着てゐる洋服のことなどちつとも氣がつかないで居たが、矢張り皆んな時々は洋服も着替へてゐるのだなと、美佐は珍らしい發見をしたやうな氣がした。それにしても、いつもきまつて先生と肩を並べて出て來る宇佐美が、今日はどうしたのか、先生だけ一人でお歸りなのかしらと、ゆつくりした歩調で門の方へ歩いて行く博士を眺めてゐると、門柱の傍の所で博士は急に立ち止つてひよいとふりかへつた。ふり返へつたとたんに博士の視線が二階の窓の自分の視線とぶつつかつたやうな氣がして美佐は瞬間どぎまぎしたが、博士の方では別に二階を見上げたわけではなかつたらしく直ぐまた眞直ぐ表の電車通りの方を見るともなく眺めてゐる樣子であつた。先生やつぱり宇佐美さんをお待ちになつてゐらつしやるのだわと美佐が考へた時、宇佐美の背の高い姿がつと玄關から出て來た。

「やあお待たせしました」といふ宇佐美の聲が聞えて博士がまた後をふり返へつた。するとその拍子に今度こそ博士の視線が美佐の視線とかち合つた。

「なんだ、咲田君まだ居たのか」と博士は二階を見上げながら美佐に聲をかけた。それで氣がついた樣に宇佐美もちよつと立ち止まり、

「咲田さん、まだ居たの」と同じやうなことを言ひ、

「先生のとこへ御馳走になりに行くんです、一緒においでよ」と言つた。

美佐は、恰度片方だけ開いてゐる硝子窓を閉めようとしてゐたところであつたが、宇佐美の聲を聞くとどうしたことか突然その窓硝子の一枚が粉々に碎けて自分の顏に噴きかゝつて來たやうな氣がし、急に胸のあたりが熱くふるえ、その反對にゾッとする寒さが頭の中をつき拔けた感じであつた。美佐は自分のこの混亂が何處から來

たかを考へるひまもなく、すぐ立ち直らうとあせつたが、不覺にも硝子窓に掛けてゐた手がはづれ、窓は風に煽られてはげしく外へ向つて開いていつた。

「咲田君どうしたの」博士はそんな美佐の普通でない容子をいち早く見て取つたやうであつたが、宇佐美は何とも言はず悄然と見上げてゐる許りであつた。

「早く降りて來給へ、いゝだらう、行こうぢやないか」と博士は言つてゆつくり歩き出した。

「えゝ、でも私今日は島渡廻り道いたしますから」と美佐はようやく落着いてものが言へたが、今度は先刻とはまるで反對に頭の中がぼつと熱くなり、一生懸命嘘を吐いたあとのやうに頰に血がのぼつて來るのを感じた。急いで窓をしめ、窓の中から下の二人が表の通りへ歩いて行く後かげをしばらく見つめてゐた後、自分の机の上から手提をとり、飯り支度を始めた。

花の散つてしまつた胡櫻は、あとは蔓れるだけ蔓れと言はんばかりに葉を繁らせて黝づんでゐた。そろそろ役所の人夫によつて枝おろしが始まる頃である。美佐はその胡櫻の蔭を拾ひながら停留所の方へ歩いて行つた。六時に近かつたがまだ日はかんかんと街路を照りつけてゐた。歩きながら不圖小半町程先の停留所を眺めると、電車が來ないのか、さつきの二人がまだ並んで立つてゐるのに氣がついた。美佐は島渡ためらつたが、考へ直して構はずその方へ近づいて行つた。

「お歸んなさい、遲かつたのね」と茶の間から叔母の呼びかけるのを聞き流して、二階の自分の居間に這入ると、美佐はいそがしく洋服を脫ぎ、そのまゝ坐り込んだ。

歸りの電車の中、それから電車を降りて家までの途々考へ續けて來た宇佐美と博士に對する自分の心持を、もう一度はつきり判斷しようと思つた。

二年程前に妻を亡くした博士が叔父の新介を介して、もし美佐がいゝなら後添ひに貰ひ度い旨を申出て來たがと叔父から切り出された時には、美佐は別に深く考へることもなく、そんな風のめぐり合せになつて來てゐるものなら博士の後添になつても構はない、どうせ自分も何時までこのまゝ叔父の家に厄介になつて居られるものでなくいづれは身の振り方をつけねばならぬものであるからには、早くさうした方が結句子供のためにもいゝことではないだらうかと考へ、美佐は、郷里の母の許に頂け

てある優里の顔を思ひ出した、それでも一應は「考へさして頂きますわ、私も何時までもこの儘ではどうせ居られませんけれど、でも、矢張りよく考へて見度いと思ひますから」と返事をして膝を立てた。

「まあゆつくり考へて見るさ、けど伊部なら子供はなし、善良な男だし、それにお前に優里の居ることも承知してゐるのだから、お前達も不幸になることはないと思ふ」新介は重ねて言ひ、何うやら美佐の氣持が動いてゐることを見てとつたか安心した顔になり話を打切つた。叔父達が、夫の死後稚さい優里をかゝえて實家に戻つてゐた美佐を、態々大連へ呼んだのも、もともとその前からこんな筋合に事を運ぶ順序立てがあつてのことであつたのかも知れぬと美佐は其の時になつて氣が附いた。どうでもいゝ、早く落着いた方が優里のためでもあり母のためでもあるなら、こゝら邊りで素直に周圍の者の言ふなりになつてやらう。

叔父の部屋から退り美佐はひとりになつて肚をきめた胡藤の花の匂がはげしく窓から流れ込んでゐた。明日にでも叔父にその旨を告げることにしよう。

それにしても内地に居る間はあれ程頑強に再緣の話を振りもぎり、もう金輪際そんな話はご免、私は私一人で結構優里を育てて行ける自信がありますから、それには僅かではあるが亡夫が殘して置いて呉れた金を元手に恰好な場所に小さい洋裁の店は開けるしと、不安がつたり淋しがつたりする母に逆ひながら自分ではもうガツシリ決心してしまひ、この決心は死ぬまで動かぬものと思ひ込んでゐたのはほんの半歲とは經たぬ此の間のことなのにこんなに早く足許の土塊が壞れるやうにみじめに崩れて行く心の變化といふものは、これは一體どうしたことであらうか、と美佐は改めて考へ直して見た。何遍見直して見てもどうしても自分の顔とは思へない「自分の顔」が鏡の表にあらはれてゐる時があるものだ、さういふ鏡に向つてゐる氣持で、何かにつまれてゐるやうに美佐は不安になつた。すると今のさきまで、考へてゐたことまでが一々、鏡の中の狐の仕業の如く思へて來たが、一旦ずるずる滑降をはじめた考へ方は、このまゝではどうにもとめやう手段がなく、美佐は暗い部屋の中で――なるようにしかならぬ、なるようにしかならぬ――と押しつけて自分に言ひきかしてゐた。

夜が明けると、しかし、美佐の考へはまた變つた。伊

部博士への返答は兎に角もう少し考へた上にしたいと思ひ直し、こんなに心がきまらないで始終ぐらぐら動搖してゐるようでは行末どうなることかと、つくづく情なくなりながらも、何か吻つと「危機」をのがれた氣がしたが、それでもなほ研究所への電車の中で右へ左へ樣々に思案の移つてゆくのを美佐は我ながら不甲斐なく感じずには居られなかつた。

此處の研究所では數名の醫學者達がそれぞれの研究に沒頭してゐた。伊部博士の研究室にも博士を中心に三人の男の助手が働いてゐたが女の助手は研究室の各室を通じて美佐一人であつた。學校時代に仕込んだ英語と、亡夫が醫師であつた關係から、少しづゝ覺えた獨逸語が役に立つて、美佐は博士の傍でカードや原稿の淨書や整理を振り當てられてゐた。博士とは大學以來の友達である叔父の新介の世話だつた。研究所の人達は殆ど相當の年配で、助手の中にはまだ若い人も居るには居たが、誰も美佐がこの研究所内でたつた一人の若い女性であるといふことだけにも關心を持つてゐそうな風がなく、こんな世界では折角血の通つた人間も全く一本の試驗管にしか過ぎないのであらうかと、美佐はむしろお可笑しくさへなる程であつたが、伊部博士の求婚の相手が自分であることを知つて見ると、研究所の人達もやつぱり人間であることには變りがなく、自分もまた矢張り女として研究所の中に存在してゐるのだといふ氣がして來たが、果して博士がどんな眼で自分を觀察したり、どんな必要で自分を求めたりしてゐるのかといふことを充分知らないうちは迂闊に心をきめるわけにはゆかないと思つた。するとその瞬間、美佐の頭の中に今までどこにひそんでゐたのか、ひそんでゐるといふことすら氣がつかずにゐた宇佐美の姿が急に大きく膨れ出して來た。美佐は駭然とする氣持でしばらく宇佐美の姿を見戍つてゐたが、こんなところへ不意に宇佐美が現はれて來ようとは思ひもかけぬことであつただけに、美佐の重心はぐつと宇佐美の方へ偏寄つて行つた。いくら狼狽して見てももう遲かつた。

同じ部屋に机を並べてゐる宇佐美とは、別の他の人達とどう違ふといふ程の變つた交渉を持つたことはないが唯一度だけ二人きりでお茶をのんだことがある。それも何か特別の機會を二人が作つたといふわけではなく、偶然博士の家で落ち合つた歸り途だつた。まだ美佐が研究

所へ這入つて二三日しかならぬ頃であつた。
「少し疲れましたね、珈琲でものみませんか」
「結構ですわ」と美佐は、背の高い宇佐美の後から喫茶店へ這入つて行つた。
「僕は、今チブスの方をやつてるんですがね……」
「チブスの方……」
「え、、チブスですよ、滿洲チブスといふ奴でしてね今虱と取つ組んでるんですよ」
「シラミ?」
「虱ですよ、血を吸ふ奴ですよ、あの虱のお尻からチブス菌を注射してワクチンを作るんです」
「あら」と美佐が小さい聲を立てると、宇佐美は不思議さうな顔をしたが、ははは と笑つて「喫茶店でする話ぢやないな。でも虱も飼つて見ると可愛い、ですよ、虱の奴、いつの間にか服の袖口やなんかに匐ひ上つてゐるんです、家へ戻つて入口のとこで上衣をぬいでばたばた拂ふと二匹や三匹必ず落ちて來るんですよ、……貴女もこれから注意しないと虱がつきますよ」と宇佐美は愉快そうに聲を立てて笑つた。
「出ませうか」
「え、」と美佐は言つたが、宇佐美の若い笑聲がしびれるやうに足の爪先に殘つた。信頼の出來る笑ひ聲だと美佐は思ひ、宇佐美の後に蹤いて街に出た。
「では失禮」宇佐美はちよつと會釋をした。
「あの、お宅どちらでゐらつしやいますの」
「老虎灘の方です、貴女も?」
「あら、それぢや御一緒の方ですわ」
「ぢやも少し歩きますか」
しばらく默つて並んで歩きながら、美佐は宇佐美を拘泥はらぬ性質の男だと思つた。
「咲田さんお子さんおありなんだそうですね」と宇佐美が突拍子もなくきいた。
「まあ、先生そんなことお話になりまして」美佐は娘のやうに頰に血の上るのを感じたが、別にかくして置く程のことではないと思つた。
「御座いますわ、一人、女の兒。鄕里の母に預けてありますの」美佐はもつと喋らうとしてゐたが止めた。宇佐美が煙草に火をつけたからである。
「滿洲はどうですか ずつと落ち着ける氣がしますか」もう幾度も違つた人から質問されたと同じ言葉であつ

たが、宇佐美の場合は他の連中の通り一遍のと何か異つたものが含まれてゐると感じられ、美佐もお世辭は言へないと思つた。
「まだ何とも分りませんわ、でもいゝ所ぢやないんですの」
「ふむ」宇佐美は鳥渡口を噤み、二足三足歩いた。
「段々分つて來ますよ、尤もこの分つて來たと思ふのが一番危險なので、分つて來たと思ふ時はもう分らなくなつてゐるんです。植民地は阿片だな。皆な何が何だか分らなくなつて仕舞ふんです。自分の意志があると思つて皆居るんですが實際はもう意志なんか無いんですよ。線を引いて街が造られて行くやうに、純粹な精神とか文化とかいふものは區劃整理の線の外に逐ひやられてしまつてその後に植民地が建つんですよ。そんな街に何が殘つたり、何が芽を出したりするかお判りになるでせう。しかし、これは何もこの土地に許り限つたわけではなくどこの國の植民地でも同じことでせうし、僕らが考へてゐるより他の連中は皆幸福そうですよ」宇佐美はぽつつと言葉を切り。
「今に胡滕の花が咲きますよ、五月の初めかな、胡滕の花はいゝですよ、その頃になると大連もよくなりますよ」と思ひ出したやうに附け加へ。
「僕鳥渡思ひ出したことがありますから、近所の友達のとこへ寄ります、貴女は電車でお歸りになるでせう。ぢや失禮します」と宇佐美は美佐の傍を離れ、さつさと電車道を横切つてゐた。
——あの時宇佐美さんはきつと何か私に注告しようとしてゐたのに違ひない。——と美佐は考へた。すると恥しさで頰が火照つて來た。僕等が考へてゐるより他の連中は幸福そうにしてゐますよといふあの夜の言葉は、半歲後の今の美佐に浴せかけた彼の皮肉であつたと思つた。
もう胡滕の花もすがれてしまつた。葉だけが蓊々としげつたこの街で、自分の意志も宇佐美の言葉のやうにもう自分のものではなくなつてしまつたのであらうか。美佐は急に蒼ざめて來る自分を感じながら涙が出て來た。
Hic Jacet (此處に睡る) ——美佐はいつか外國のモニュメントの寫眞帳で覺えた羅甸語を紙に書き、そして消した。その上に意志と書いた。
母は母でいゝ、優里は私だけで結構幸福に出來る。

——意志だ、意志だ。

美佐は、宇佐美が今日研究室で、明日は埠頭で虱の採集ですといつてゐたのを思ひ出した。

——さうだ、私も明日は宇佐美さんに埠頭へ連れて行つて頂こう。何萬人かの苦力の鐵の樣な體軀にむらがつてゐる虱と戰つて見よう。

美佐の腦裡に、豆粕の野積の山とその間に立ち働く苦力達の赤銅色の逞ましい裸の姿と、それらの上に照りつける爛れるやうな炎天の壯觀が浮んで來た。

美佐は涙を流しつづけてはゐたが、何か安心して却つて胸がひどく疲れて來た。

母へ

西川清六

父上のと同封してお手紙をよこされたのは去年の十二月の初旬でしたか知ら。無沙汰勝の私として直ぐ御返事差上げるべきでしたが、直ぐ筆を取つて居れば必ず母上を怒らせるか泣かせるかしてゐたと思ひ、失禮ですが、今では延引してゐたことを喜んでさへゐます、母上の手紙の本文の欄外に、「そちらでKの娘がカフェの女給をして居るから決して足を踏み入れてはなりませぬ。母が賴みます」と書いてあつたのが癪に觸つたのです。手紙をいたゞいた頃は恰度大和ホテルのベント・ハウス增改築工事が期限にせまられて忙しく、毎日朝早くから夜遲くまで地下足袋を穿いて働き、安い給料でぎりぎりの生活をしてゐましたので全く腹が立ちました。

「遊ぶ時間的な餘裕や物質的な餘裕が何處に有る！

手紙を手にしたまゝから叫び狹い部屋をぐるぐる歩き廻りたい程でした。朝食六錢、晝食九錢、夕食八錢、一日二十五錢程度の勞働者や失業者の通ふ最低級の簡易食堂で食事を取つてゐたときだつたので、手紙との對象がますます腹立たしく、愚にもつかぬことを書いてよこされる母上だと母上を憎む氣さへ起りました。

「女さへ見れば誰かれの差別なく好きに成る、私がそんな男に見えますか

私は母上を眼の前に据ゑてのゝしつてゐる自分を想像しました。

「ちつぽけな町ぢやあるまいし、さう容易に逢へるものでせうか。たとへ逢つたにしても何に成ります。以前何かの關係が有つたら兎も角も、何でもないものを唯以前近所にゐた女といふそれだけの理由であぶなつかしがられるのでしたら、全くお母さんの考へは幼稚過ぎます馬鹿らし過ぎます。第一あんな女は大嫌ひです。」

次々に憤りの言葉が湧いてきました。

あの時のこんな腹立たしさを直ぐ手紙に書いてお送りしてゐたらその結果は何うでせう。私は昂奮してゐながらそのことを考へました。涙もろい母上の姿がはつきりと思ひ浮び、しまひには私自身が泣きたくなりました。

そして手紙はよすことにしました。

ほんたうに直ぐお手紙を差上げずによかつたと思ひます。直ぐ筆を取つてゐたらどんなに皮肉つた手紙に成つたらうと今考へると恐しい氣がします。如何に筆不精とは言へあの時だけは腹立たしさから筆を取りたい氣持で一ぱいでしたが、昂奮しながらもそれから來る不幸な結果を考へ我慢したことは全くいゝことでした。

母上からお手紙を頂戴する前に私の苦しい狀態を知らせてゐたら、母上もあんな餘計なことは書いてよこされなかつたらうと思ひますし、矢張り私の筆不精が祟つてゐるといふよりほか有りません。

延引にしては餘りに遲過ぎますが、延引の理由の大半は右のやうな事情で、いつか氣をしづめてゆつくり書かうといふ心構へでゐたのが例の不精性に取り憑かれてこんなに延び延びに成つてしまひました。

最初から厭なことばかり書いてお氣を惡くされはしないかと心配ですが、事の理由を曖昧にしておくよりもはつきり書いた方がいゝと思つたので書きました。何とぞ惡しからず。

弟が突然名古屋から私をたよつて來たのには全く面喰つてしまひました。弟からは再三手紙を受取つて居り、最後のにそちらに直ぐ行くが何うかと返事を待つ旨書いてよこしましたので、その返事として、私自身が去年の暮の三十一日から石谷さんのお世話に成つてゐる始末だし私の知己の人に工事の取れる見込みがつくまでこゝ半月か一と月待つてくれといふ意味を書いて送つたのですがそれがわづか二、三日の行違ひで弟は既に名古屋を發つてゐたのです。私の力で何うにも出來ないので石谷さんに事情をお話して弟も共に厄介に成らせてもらふことに致しました。然しお喜び下さい。弟は昨日から甘井子の方で臨時ではありますが働いてゐます。私の知合ひの後藤といふ請負者の人に盡力していたゞいたのです。委細は昨日父上宛にお手紙差上げましたからそれをお讀み下さい。弟は丸一ケ月石谷さんのお宅に厄介に成りましたが、その間、割に遠慮なく過せたゞらうことは兄の私としても嬉しいことです。實は弟は名古屋で林野局の兄を介して潛越とは思ひながら林野局長に滿洲での就職をお賴みしてゐたのださうですが、それが突然林野局長が東京に榮轉に成り、そのまゝお流れに成つてしまつたのださうです。それに私の例の手紙が屆いてゐない時ですし

私が十二月末で工事が完了し、間借りしてゐた家を引拂つて石谷さんのお宅に厄介に成つてゐることは、弟は知る筈もありません。弟は私がまだ工事の方で働いてゐるものと思ひ込んでやつて來たのでした。

弟のことでは一時私も狼狽しましたが、事が割に順調に運んだので安心して居ります。

「貧乏をしてゐるとみんなから馬鹿にされる。この苦しい中で唯そなたたちの出世をたのしみにして居ります」

かういふ意味のことをあの手紙で讀み、何か明治臭い文章だと蔑みながらも、眼がしらが熱くなるのを覺えました。母上の言はれること至極尤もです。然し貧乏をしてゐるからと言つて必要以上に小さく成ることもないと思ひます。時には大きく構へてゐていゝと思ひます。根が小さく成り勝ちの私達ですから大き過ぎたなど思ふ程度が普通のところです。成功とか出世とかいふ言葉は大嫌ひですが今に清六の清六たるところを誰かれの容赦なく見せつけてやらうと沸るやうな情熱をぢつと堪へて心の奥底に秘めて居ります。これが努力に拍車をかけ情熱と一緒に成つて爆發する時こそどうなるか見て居れと叫びたいくらいです。男の生涯は闘ひの連續でなければならぬ、私はかう思ひます。小さく言つて喧嘩。闘爭。大きく言つて戰爭、ダーヴインの「弱肉强食」「自然淘汰」はいつも私の頭からぬけません。私の闘はふとする意慾、戰爭を愛する熱情は私が批評的立場に立つて拘く反軍國主義的な思想といつも矛盾しますが、これはいつかは統一出來ると思ひます。私はナポレオンが好きです。子供の時よりも好きに成つてゐます。人が笑つても平氣です彼の野獸的な闘爭意慾が速かに時間を驅使することゝきつちりと結び合つてゐる点が好きなのです。小說を書くことでも仕事でも戀愛でも事業でも人から批難され嘲笑されても平然として居れる自信を持ち得ることはいゝことだと思ひます。

つい話が横道にそれてしまひましたが、母上には餘り貧乏を氣にせず私達兄弟三人のことは心配せず體に氣をつけて長生きされることが一番です。そしていつもたのもしい自分の子供達として私達を見まもつてゐて下さることが、どれほど私達にとつても樂か知れません。

母上が神經質にいろんなことを氣に病まれることを知つてゐる私として餘りこちらでの苦しかつたことは書きたくありませんが、隨分ひどい目にあひました。一昨年

の夏N工業の奉天出張所にゐたときには便所の拭き掃除から工事部長の赤ちやんの守りまでしました。拭き掃除をする時、吉開は「君はこんな仕事をさせられても我慢出來るか」とよく私に不平を漏らしました。「仕方ないぢやないか。」

私はいつもさう返事しました。吉開の場合は奉天出張所に來た條件が違つてゐますし無理も有りませんが、私の場合は吉開について行つて奉天出張所に厄介に成つたのですから事實仕方がなかつたのです。吉開は一と月程して工事現場に出されましたが、私は出張所に女中がゐないことから却々現場に出してもらへず、自分も女中のやうな氣持で働きました。赤ちやんからおしつこをかけられおむつを取りかへてやつたことが何度もあります。赤ちやんの名前はヒロちやんと言ひますが、私はヒロちやんをよくだつこして彌生町から紅梅町を守りして歩きました。ほんたうに女に成つた氣持でヒロちやんを可愛がることが出來ました。然し去年の夏また厄介に成つた時にはヒロちやんはとても痩せてゐて私になつかずおとなびた顔に成つてゐたので私は眞から厭に成りました。それで一昨年よりもずつとずつとだつこすることが少くなりました。吉開は工事現場に出ても一と月で拾圓程度しかもらへず、四、五ケ月で到頭工事部長と喧嘩をして內地へ歸つてしまました。私も月に五圓もらつたり拾圓もらつたりしてゐたのですし、吉開もも少し辛抱してこちらに居れば何かいゝ職につけたのだと思ひます。吉開は好きだつたのでいつも吉開のことばかり思ひ出します。一緒に拭掃除をする時など吉開は却々ずるい方でした。

「男に便所の掃除が出來るものか」

いつもさう言つて居りました。で便所の掃除はいつも私がしてゐました。男は便所の掃除をしたり人の靴を磨いたりするものではないとほかの人の話でもよく聞きました。單純に考へるとさうだと思ひ、滿く考へるとなぜだらうといぶかしく思ひました。吉開は、「西川君には不平がないやうに見える」

かうも言ひました。

「不平を口にしたつて同じではないか」

私がさういふと、

「君は全く世の中を諦めたやうな態度だね。世の中を知り過ぎた顔つきをしてゐる。それで君は時々鈍感に見える時があるよ」

と言つて彼は大きな聲で笑ふのです。笑はれても私は吉開が好きでした。私は風呂焚きをしたり鼠の拭掃除をしたり便所の掃除をしながらよく空想に耽りました。書きたいと思ふ小說の構想を考へながら鼠を何枚拭きをはつたか忘れることが何度もありました。用向を言ひつけられて外出する時には、私は殆どの場合就職のため取寄せてゐた戶籍謄本と學校の成績表をポケットに入れることを忘れませんでした。工事部長や奧さんに見られることを氣遣つたからです。戶籍謄本には今の父が認定したことにして嫡出子に訂正され朱線で私生兒が消されてありますが、以前私生兒だつたことが歷然としてゐますので、それを知られることを恐れたのです。奧さんが、以前私の前にゐた北海道から來てゐた書生の惡口を言つてあれは花柳界の女に出來た子で何でも私生兒だつたらしいとよく言つて居られたので私は尙更氣がかりでした。成績表も學校の成績が惡かつたので成るだけ隱しておくやうにしました。

私は工事部長夫婦を餘りよく思ひませんでしたが、私が濱綴線へ向け發つ時に驛まで自動車で見送つていたゞきましたが、あの時は心から嬉しく思ひました。

私はよく朝鮮人に間違はれました。葦沙河にゐる時赤川といふ男から言はれたのが最初でした。第一身なりがきたないのでさう思はれるのも當然でせうが、相手は私の話しぶりが朝鮮人のつかふ日本語にそつくりだといふのです。私は組みついて行きたい程腹が立ちましたが、相手は酒に醉つて言つてることだしそれに堪へねばならぬ事情があつたのでぐつと我慢しました。この男は鞍山に職を見つけて葦沙河をたつとき私に頭をさげてあやまりました。能辯家で國粹主義派らしいことをしきりに口にしてゐました。が言ふことがつじつまが合はず、こんな男に何が出來る、彼と話す時私はいつもそんな感じをいだいてゐました。一面坡で土木屋から泥醉の惡ふざけに言はれた時もむつとしました。然しその男は私が世話に成つてゐた家の主人の知人だつたのでこらへて笑顏で濟ませました。立山の工事現場で働いてゐる時などは、そのときは私ばかりでなく中村といふのもつかつてゐた阿部も目に灼けて皺い恰好をしてゐたものですから、滿人の飲食店に行つても理髮屋に這入つても、

「日本人かね朝鮮人かね」

「いや朝鮮人らしい」

滿人の奴等がそんな話をしてゐるのをよく耳にしました。

「おい又朝鮮人に間違へられたぞ」

私達はお互ひに嫌いなりを見合つてよく笑ひました。立山から大連へ來る一寸前、中村と奉天へ出向いての歸途蘇家屯で下車して日本人の飲食店に寄つたことがありましたが、その時もまた私はそこの給仕女に朝鮮人に間違へられました。話しぶりで直ぐわかると女がいふのです。私はおこることも出來ず顏が引きつゝたやうな妙な表情をしたことを今に覺えてゐます。嫌いなりにも勿論原因してゐませうが、私は肥厚性鼻炎の傾向があつて聲がよく鼻にかゝる。これが朝鮮人の話しぶりによく似てくるらしいのです。私は全くやりきれないと思ひました。いよいよ顏も似てるんぢやないかと思つたほどです。私はかうした侮辱を受ける度に朝鮮人の悲哀を自分のことのやうに感じました。そして被壓迫民族の辿るべき道、こんなことが聯想されました。朝鮮民族を一朝にして亡びる民族などとは思ひませんが、この地球上で亡びつゝある民族の淋しい聲音をぢかに耳にする想ひがしてくるのです。

こんなことを一つ一つ書いてくると母上は私を不愍に持つて思はれるか知れませんが、私はこんなことでへこ飢ゑたれる男ではありません。 根強い意志と忍耐力をへゐます。 私はたとへ浮浪者に成り果てゝも、そしてをに苦しむことがあつても自分で命を絶つといふやうなまなことはしません。 路傍で仆れても誰かゞ救けて食與へてくれる、こんなずるい考へをいつも抱いて居ります。轉んでもたゞは起きぬ、この負けん氣とは別な氣力をも一緒に持つてゐる私の意地强さをほめてやつて下さい。

人と餘りいさかひをせぬやうにとの注意、母上としてはもつともなことゝ思ひます。立山での件などお知らせしてゐますので心配されるのは無理もないことでせうが立山の工事現場での喧嘩は私としても言ひ分があつたのですし、むやみに腹を立てゝ喧嘩してゐるのではありません。大連の大和ホテルの屋上でTといふ建築屋と言ひ合つたことがありましたが、その時も私に條理立つた言ひ分があつたから爆發したまでに過ぎません。男の生涯は闘ひで終始せねばならぬ、この考へがいつも頭にありますので腹を立てた際これが導火線に成る危險性が充分

にありますが、これは私自身注意して居ります。過敏な氣質は自分で百も承知ですからいつも氣をつけてゐますし、この頃は女のやうにおとなしいです。一度こんなことがありました。四五人居る中で或話から劇藥の話に移り私が大ざつぱに話したものですから相手の一人に訊きたゞされたことがありました。人のあげ足を取る！最初から誤認した私は——向ふにも或程度のずるさはあつたと思ひますが——矢庭にストーブの側に置いてあつた石炭掬ひの鐵器の柄を握り相手を叩きのめしたい衝動に驅られましたが、私は腹立たしさをぐつとおさへて冷靜な態度を裝ひました。然し全身が慄へるほど私は昂奮しました。そして頭の中で相手を動けぬ程叩きのめしてゐる場面を機敏に想像しました。鐵器に手が行くか行かぬかそんなとき全く紙一重の危險ですが自分で敏感過ぎると氣づいた時には厭でも我慢します。

酒は、飲む機會が多いのも理由してゐますが、飲み過ぎることが多く。飲んだ後今に體が一ぺんに參つてしまふのではないかと氣づかふ程ですし、これからは出來るだけ節制するやう心がけませう。體だけが唯一の資本だといつもさう思つてゐるのですけれど、つい深酒してしまひます。

酒を飲んだり愚にもつかぬ空想に耽つたり、放埒な性格は多分にありますが、何と言つても私ははにかみ屋で小心者です。これで私は處世上どれだけ損をするか知れません。去年の十月から暮まで工事現場で働いてゐたとき、朝道で登校する女學生とよく一緒に成ることがありましたが、そんなとき私は胸がときめいて固く成つてしまふのです。二十歳前のときとちつとも變りありません自分の歩きぶりが女學生におかしく見えはしないかと氣遣つたり、たまに女學生の中に綺麗なのがゐたりすると顏を赤くすることさへあります。前の晩土木屋仲間と一人當り五合も六合も飲んでゐたりした時などは、がらでもないと高飛車な氣持に出ようとするのですが女學生は飽くまではつきりした異性として眼に映つて來ますし、ますます緊張し昂奮してしまふのです。こんな風ですから道を歩いてゐても、通行人が自分を注視してゐるやうに思つたり家々の窓から自分の一擧一動を見られてゐるのではないかなどゝ、自分でも恐しいほど神經をつかひます。そして大連の大廣場を横切る時など自動車や電車に轢かれはしないかとはらはらします。自動車や電車の

頻繁な往き來を見てゐると、道を踏切る前に自分の轢かれた無慘な姿が頭に映つてくるのです。

いらぬことに神經をつかひ過ぎる、この性癖や症狀は早く癒したいと思ひます。母上もこんな点はひどいんぢやないのですか、どうも母上の引ッ込思案だつたり非交際的だつたり、それに人前で時々顏をあからめたのを見てゐる私にはさう思へますが――――。

私たちはもつと快活で開放的にならなければいけません。

お手紙のしまひの方は讀んで涙が滲み出て來ようとするのを堪へたほどでした。「書きたいこと山々なれど母は涙が出て來て書きつゞけることは出來ません。何の因果か親子ちりぢりばらばら、母はそれが一番悲しい」と書き綴つてありましたが私は胸を打たれてしまひました下趣味な小說を讀む厭な感じもしましたが、文章があぶなつかしければあぶなつかしい程、なまのまゝのいたいたしい力强さで私の心を搔きむしりました。

實父を知らない私達兄弟――もつとも名古屋の兄は實父の顏をほんの少し覺えてゐるさうですが――を不愍に思はれそしてあちこちに轉々としてゐる私達を可愛く思つて、感傷に沈まれるお氣持よくわかります。けれどもこんなことで餘り心配されないやうに、ほんたうに私達には自暴自棄に成るやうなことはありませんから樂にしてゐて下さい。

實父がまだ生きてゐるかどうか知りませんが、生きてゐたとしても會つてみたいと思ふ前に、今まで育てゝいたゞいたそして將來も面倒を見てもらはねばならぬ現在の父上に對する謝感の念で一ぱいです。父上が人の保證で失敗されてからは私達も切りつめた生活をしましたがその前までは相當贅澤をさしてもらつてゐますし我儘もしてゐますので、今では父上に心から濟まなく思つてゐます。自分が今苦しんでみて父上が自家を切り廻して行く上に努力もし相當無理もされたゞらうことが身にこたへて感じられるのです。失敗して後母上は口癖のやうに人の保證をするものではないと私達の前でも言つて居られましたが、出來た後で愚痴ッぽく言ふのも見苦しいし第一父上の立場に成つて考へていたゞかねばならぬと思ひます。男は時と場合によつては人のために捨身に成つて救けてやらねばならぬときがあります。父上の場合が完全にこれに該當する例とは思ひませんが、失敗後家庭

の者からまでひやゝかな眼で見られるとすれば父上もさぞ淋しいだらうし、私は母上も私達も共に父上の曾ての男氣、度胸つ骨を酌んであげるのがほんたうだと信じます。富山で生れて横濱や東京を蕩び廻り日本のあちこちを流れた擧句、上海へ渡つた後蘇州で支那の兵隊と大喧嘩をやらかしたことのある父上であればこそ、實父においてけぼりを喰つた母上や私達を引受けて下さつたのだと思ひます。そして今までにまゝ親としての苦しみも隨分味はれたゞらうと思ふと線の太い父上だと知りながら父上を不愍に思ふことがあります。世間でよく聞く家庭內での不詳事。あれはまゝ親の側に原因があることも勿論でせうがひがんだ眼でまゝ親を見ようとする子供の側にもあるのではないでせうか。

父上の話は能辯のためもありませうが時には大げさに聞えることがありました。しかし私は子供のときから父上の話を聞くことが好きでした。蘇州で支那の兵隊と喧嘩をやらかした父上の話を聞いた時など、後で自分も一かどの俠客氣取りに成り、小さい時などあぐらをかいて啖呵の一つも切つてみたいやうな昂奮を子供ながら感じたことを記憶してゐます。

今に何かして父上を喜ばせたいと思ふものゝ今以て矢張り面倒をかけることが多く恐縮して居ります。母上からもこの氣持宜しくおつたへ下さい。

實父が生きてゐるとすれば、まだ五十幾歲ですし順調に行けばまだ死ぬ歲ではありませんが、向ふに會ひたいといふ氣持がなければ絕對に會ひたくありません。强ひて會ひたいと言ふのだつたら會つてやらうといふ氣持です。今度弟と五年ぶりに會つて實父の話もしましたが弟も大體私と同意見です。若しかしたら私より冷淡かも知れません。私の冷淡さの中には實父への愛着、ひたむきな反抗、腹黑い復讐などが錯綜して含まつてゐます。これとは別に若し會つたとして會つた後惹起されるであらう不幸が考へられ理智的な冷さもその中に含まつてゐます。實父が生きて居れば妻子があることだらうし實父と私達とが會ふことから家庭に波瀾が起りはしないかと直ぐ聯想されるのです。向ふから乘り出して來ない以上、私達兄弟には實父に會ひたいといふ氣持は有りません。私達がこんな態度でゐることを母上はさぞ喜んで下さるだらうと思ひます。母上の今までの御樣子からかう推察してゐるのですが――――。

實父と私達とを關聯させて餘り考へられないやうに、惱まれないやうに、私から切にお願ひ致します。心配がどれだけ體に毒であるか、それを思ふと老い込まれた母上の姿が可哀想に思へて成りません。

實父に會ふとか會はぬとかの問題よりも氣に成ることは私達兄弟が家庭的に謎の中で育つたことです。私達が置かれた立場、狀態といふものをはつきり知らないことです。これは今までに母上に直接聞いて居れば直ぐはつきりしてゐることですが、母上が實父上——今まで實父として書いてきましたがこれから私の氣持の狀態で實父上と書いたり實父と書いたりするか知れませんから然るべく御承知下さい——の話と成るとなぜか遠慮されるやうな態度で婉曲に話されたり又自分で努力して話さうとされる時でも實父上の輪廓を概念的に話す程度にとゞめられる母上の心の動搖が除りにいたいたしく感じられる私としては、立入つて聞くことは出來ません。母上が泣き出されはしないかと心配なのです。それにお互に泣いて語り合ふといふやうな芝居がかつたことをするのが大嫌ひな私としては尙更出來ぬことです。今後もこの氣持には變りありません。で出來れば母上がこの手紙の返事の意味で、母上と實父上との過去の關係、それに私達三人の兄弟が現在の父上の盡力で昭和八年六月戸籍面を嫡出子としてもらつたその前まで何うして、私生子でなければならなかつたか、私生子として誕生しなければならなかつたかその理由を委しく書いて送つていたゞきたいのです。然し母上に書く元氣がないやうでしたら強ひてとは言ひません。母上の親戚が福岡にたくさんあることですから、いつか機會があつたら交渉して私達があゝした立場や狀態に置かれなければならなかつた理由をはつきりさしておかうと思ひます。母上に書くだけの元氣がお有りでしたらこれに越したことはないのですがその以外の手段としては右に書いてる通りにするのが一番いゝと思ひます。母上はどう思はれますか。

「お父さんのことで私をいぢめないで下さい。福岡の親戚にきけば過去の事情は直ぐわかります。お願ひですから私には聞かないで下さい。お前達を私生子として誕生させたこの私はほんたうにいつも大罪を犯した女のやうにおどおどしてゐるのです。可愛いお前達を眼の前にしてどうして過去のことが語れませう。私は涙が出て參ります。泣けて參ります。手紙に書いて打明ける、それ

も厭です。たとへ努力して書いたにしても、悲しく成つて筆は運ばないでせう。可愛いお前達、どうか私をいぢめないで下さい。」

つきつめて考へてくると母上のこんな悲痛な聲を耳にする思ひで私は粟然としてしまひます。過去を明かにする、このことで母上をいぢめようなどゝは毛頭思つてゐませんが、未だに家庭的に謎を背負つてきてゐる私達といふ者の存在の漠然さが腹立たしいのです。これは私の性分かも知れませんが、たとへば小說を書く上でも私は象徵派文學といふものに相當興味を持ちながら、まだまだ寫實主義を檢討して後のことだ、書かれた表象が讀者の頭にはつきり來るやうに的確に書かねばならぬ、といふことから書く範圍内に於ける一切の事象をはつきり知るといふことに躍起になるくらいなのです。そしてたとへ象徵的な小說を書くにしても、筋の運びによつて次々にぶつゝかつて行かねばならぬ直接の對象は、わざと朦朧さを漂はせる美的表現の小手細工や修辭法は一切ぬきにして、飽くまで浮彫りのやうにはつきりと書き、全體の表現が始めて何かを——この何かは書く前に作者には何であるかはつきり狙ひをつけられてゐなければならぬことと勿論です——象徵する巨大なものを包含してゐるものでありたいとねがふくらいです。象徵が表現の別にあるといふのではありません。藝術は飽くまで表現であることを知つての上での態度なり希望なのです。母上にはわかりにくいことを書いてしまひましたが、私はこれ程まで存在の漠然性を毛嫌ひする方です。母上を苦しめないで過去の事情をはつきり知るためには、前に書きました通り福岡の親戚にきゝたゞすことが最上だと信じます。

私達が私生子として誕生しなければならなかつた事情を私が今まで知り得た家庭内の輪廓に根據を置き、推察として次に書いてみます。母上に御返事を强要するのではありません。母上を苦しめるやうなことばかり書いて氣が咎めるのですが、私としても書きたいと思ふことは書いてしまはねば荷厄介を背負ひ込んでゐるやうで氣が晴々しませんから、つらいでせうけど、も少し辛抱して下さい。

母上の伯父、私達がをぢいさんと呼んでゐた泉勘右衛門なる人に子供がなかつたゝめ母上は伯父の家に養女として來られた。このことは母上が幾ら嫌はれても周圍の事情から仕方なかつた。これに伴つて前から戀愛關係に

あつた副島權助――私達の實父の性名が副島權助だといふことは四五年前兄が東京から戻つた時兄から聞いたのです――なる人が問題に成つてくる。この場合、副島權助なる私達の實父上が、母上が泉勘右衛門の家に養女に行くことを拒否すべく努力されたことが考へられる。これが周圍の止むを得ない事情からか母上の弱さからか無効に終つてしまつた。も一つの場合は母上が養女に行かれて後に結ばれた戀愛、といふことも考へられるが、これはどちらにしてもさう大した問題ではない。次に起り得べきことは二人が愛の契りを固めんがためには實父上として養子の立場を甘受するか否かである。これは大きな問題である。然し母上を愛される實父上としては甘受する意志が充分にあつた。が甘受どころではない。泉勘右衛門を始め周圍の親族がこれに反對する。實父上は躍起に成られる。周圍はますます喧しく成つてくる。それでも實父上は尙自分の地歩を譲らず頑張られる。その間に長男の兄が出來、次男の自分が出來、三男の弟が出來て行つた。實父上の負擔は二人の愛情の問題だけではなくなつてきた。三人の子供を不義の子供を不義の子として誕生させねばならなかつた實父上の罪悪感、二人の愛情の問題と將來の處置、そこに實父上の苦惱がつゞく。自棄にならうとする氣持をおさへて意志を取戻されるが、周圍の重壓は支へきれず踏み固めた筈の地盤は脆くも崩れて行く。實父上は暫くでも現實から眼を覆ひたく成られた。そして逃亡された。逃亡された後も一度ははなばなしく餘を出して母上と三人の子供が幸福に暮せるやうに處置してやりたい氣があられたに違ひない。しかし時は容赦なく流れて行つた。何度も力まうとしながらその意慾は次々に挫折され、あとには灰汁を啜るやうな苦惱と逡巡がつゞき、到頭私達三人の子供にとつては實父上の生死居所不明といふ大きな隔りと成つてしまつた。

右が私の推察ですが事實と隨分かけ離れてゐるかも知れません。私達がをぢいさんと呼んでゐた泉勘右衛門なる人が果して母上の伯父に當るかさへ判然としないほどですから――。當り前ならこのことは直ぐ母上に訊ねてゐる筈ですけれど、このをぢいさんのことをきけば母上が直ぐ實父上のことを聯想されて厭な思ひをされはしないかと氣遣ひ今までできかないづくでゐるんです。でも早晩過去のことは私にはつきりしてくることですし、只現在私が謎と成つてゐる過去をどの程度に知つてゐるか、

母上がそれを知つていたゞけば結構です。

兄と弟とは六つも違つてゐますから兄としてもつとはつきり實父上の顔を覺えてゐなければならないのが餘りはつきりしてゐないところから推して、母上と別居されてゐたことが多かつたのではないかと思ひます。これはほかにも根據があります。といふのは私達がまだ宇戸にゐた頃、私が五つ六つの時、自家から二、三町先の他所の二階に住んでゐたをぢさんのところに遊びに行つて可愛がられたことを記憶してゐますが、あれが實父上ではなかつたかと考へられるからです。

實父上に發狂された事實があるかどうか、これについては今度弟と語り合ひましたが、弟は「たゞさうした傾向があつたゞけのものぢやないかね」

と言つてゐましたが、私としては、私が抑鬱性神經衰弱を患つて醫大の精神病院に通つてゐた頃、母上が實父上の症狀をちよつと語られたこともあり、その前に婉曲に口にされたこともあるし、それに子供の時、よく母上に健腦丸を買つて飲まされたことを記憶して居りますから、實父上の發狂の有無はかなり氣にしてゐます。發狂の事實があるとすれば、それは遺傳的のものであつたか後天的のものであつたか、このことは是非知らしていたゞきたく思ひます。弟は實父上の發狂については否定し勝ちですが私は肯定する方に傾いてゐます。私達が宇戸から正林下の方へ引移つて間もなく、たしか私が六つの頃だつたと記憶します。少し氣の變な人がよく自家を訪ねて來てをぢいさんと何か話してゐましたが、そんな時、母上はいつも

「あの人はきちがひだから側に寄つちやいけないよ

と言つて制し私達がその人の側に行くのを大變氣にしてゐられるやうでした。私はあれが狂つた實父上ではなかつたかと疑つてさへゐる程です。

私が泉清六から西川清六に變つたことは今に嬉しく思つてゐません。私は飽くまで泉清六でゐたくありました手許に有る戸籍謄本を見ますと、戸主泉フデ私生子男西川マキト養子緣組同人及緣組承諾者泉フデ屆出大正六年拾貳月拾八日受附入籍とあります。これはをぢいさんが亡くなられた直後ですね。戸主である母上の後を繼ぐものは私の兄である筈のものを、をぢいさんの內緣の妻――內緣の妻といふのは私の推察ですがこれは間違ひないと思ます。私達がをばあさんと呼んでゐた西川マキな

る人がをぢいさんが亡くなられた直後を幸ひに、泉の家を自分の家にしてしまはれたことは全く悪いことだと思ひます許せぬことだと信じます。戸籍面では母上と私とが承諾して養子縁組といふことに成つてゐますが、無論その時私は六つの子供で何もわからぬし、母上だけはほんたうに強く出られてよかつたのだとくやしく思ひます。全くをばあさんが悪いのです。あの家は私の兄が繼ぐべき家なのです。私が吝嗇家のをばあさんの養子と成つてゐることは不滿で不滿で成りません。も少し私が大きかつたら養子縁組には極力反對してゐる筈ですのに――。

昭和七年にをばあさんが亡くなられた時、私はちつとも悲しくありませんでした。一滴の涙も出ませんでした寧ろをばあさんが亡くなられたことで七つの時會つて以來そのまゝに成つてゐた奥ノ堂のをばあさんや水茶屋のをばさんに會へたことがこの上ない喜びでした。葬式の時周圍の眼があるので強ひて悲しい表情をつくらねばならなかつた程、をばあさんの死亡は私に何の衝撃も與へませんでした。

兎に角母上も私達兄弟も日本の家族制度の一番悪い例外の地域でよく今まで忍從してきました。時々自分で自分がいとほしく成ることがあります。これからはみんなしてすこやかに伸び伸びとして過せるやう努力しませうたまにもう自分は一生涯實父の愛情を知らずに死んで行くのだと思ひ、淋しくなることがありますが、これはほんのわづかの間で直ぐ勇氣を取戻すことが出來ます。

父上が失敗される前まではほんとに餘分なお小使を戴き母上からも無理をしてお小使をねだつて居りますし、不服はありませんが、たつた一度でいゝ、ほんたうのお父さんから遠慮のない大きなお小使をねだる氣持を味はつてみたいとよく空想します。

「さう度々要る筈がないぢやないか」

實父上がかう言はれたとする。

「大きなお小使は今度きりでよしますから――――」

と一寸恐縮した態度を裝つて私が言ふ。そして同僚と旅行する場合だとして、

「若い者の旅行にさう金が要る筈がない」

今度少しむきに成つて實父上が言はれる。

「使はないにしても懐が樂でないと面白くありません」

「それは氣分の問題だ」

「氣分の問題だから大切です。旅行が用件を兼ねてない以上飽くまで氣分の問題だと思ひますが――――」

實父上はこゝで大きな聲でお笑ひになる。

「お前も理窟を言ふやうに成つたな。仕方がない。出してやらう。金は兎も角も肝腎の旅行の準備の方は出來てるのか」

かうしたことを空想するのです。實父と子が張り合つてゐるやうで心の底には何の蟠りがない。この氣持はどんなにいゝでせう。

今の父上からお小使をもらふ時には自分で遠慮しまいと努力しても矢張り心にこだはりがありましたし、母上のは臍繰金でつまりませんでしたから、尚のこと右の空想が生き生きとして來ます。

實父上が今何處にゐられるか――これは實父上がまだ生きて居られると假定してです――私達には全く見當がつきません。以前臺灣にゐられたことは事實ですね。これは三、四年前たしかな證據を握つたことがありますから間違ひありません。自家の便所の紙屑籠の中から偶然に實父上が母上に送られた昔の手紙を見つけだしたのです。その時自分に豫期とか探す意志とかは微塵もなかつたことは事實です。全く偶然に手に觸つたのがそれでした。手紙の前半は既に裂けてゐて有りませんでしたが、その後半には今臺灣で繩製造業に從事してゐるが思はしくないとか殘して來た子供達が可哀想だとか書いてありました。私は便所の中で昂奮しました。自家にあるたつた一枚の實父上の寫眞を瞰想し、手紙を何度も讀返しました。母上がいつも讀めてゐられた實父上の筆としては拙いものでしたが、それよりも寫眞以外の唯一の實父上のかたみだと思ひ捨てる氣はしませんでした。嬉いとも思ひませんでした。私はそれを自分の机の抽斗に藏ひました。三、四日たつてそれが誰かに盗まれてゐることに氣付きましたが母上のお仕業だとぴんと直感が頭に來ました。そして母上を憎む氣で一ぱいに成りました。それから數日の間、どちらも手紙のことには口に出さず張りきつた神經を隠さうとして素知らぬ風を裝ひましたが、その時私は肉身といふものをほんたうに厭に思ひました。母上はどうしてあの時あの手紙を隠されたのですか私があの手紙で感傷に沈み何か途方もないことをしでかすかとお思ひに成つたのですか。若しさうだとすれば母

上の行爲は餘りに輕卒過ぎます。餘りに幼稚過ぎます。今はそのことで昂奮するやうなことはありませんが、母上のあの時の行爲は矢張り愚にもつかぬものだつたと信じます。

これでかねてから書きたいと思つてゐたこと書き終りましたが、母上がこれをお讀みに成つて泣かれはせぬかと大變氣に成ります。書き出した最初は私も出來るだけ母上を苦しまさないやうに努力したのですがそれに今書かないでもいつか一度は書かねばならぬことだつただけにむきに成り勝ちでしたのでこの點悪しからず御許し下さい。

善次郎や善三郎はどうしてゐますか。今の父上と母上との間に出來た子供、父違ひの弟として彼等を憐んだ眼で見るやうなことは私達には有りません。時々こだはることがあるかも知れませんが、それは取るに足りぬことです。善次郎も善三郎も可愛く思ひます。善三郎の方はよくだつこしてやつたことが多いのでいろんなことが思ひ出されます。もう今度の四月で小學校の三年に成ると思ふと早いのにびつくりします。此頃はどんな小說を讀んで居られますか。菊池寛の「勝敗」が新聞に載つてゐた頃、母上はしきりに讃めて居られましたが、去年の暮こちらで時間潰しに見た映畫の「勝敗」で母上のお氣持がわかりました。然し母上の感じ方には隨分下らぬ感傷がまじつてゐると思ひます。菊池寛、久米正雄、大佛次郎、吉川英治、この人達の小說を讀むのもいゝでせうけれども一歩進んで志賀直哉、山本有三、丹羽文雄、この人達のを讀まれるやうにされた方がいゝと思ひます直哉さんのでは「大津順吉」「和解」「或る男、其姉の死」それから「暗夜行路」などがいゝでせう。有三さんのは私自身時々拾ひ讀みする程度で完全に讀んだものは一つもありませんが、矢張りいゝ作品を書く人です。若しおわかりになれば樋口一葉や國木田獨歩等のものを少しは讀まれた方がいゝと思ひますが、これは註文する方が無理でせう。でも獨歩のにはわかり安くて面白いのがありますから若し讀むのでしたら自家の本箱を探して下さい。改造社の獨歩集がある筈です。大連の人達は私が交際する人毎にみんな親切です。でもいつまでも皆さんの厄介に成つてゐるわけには參りませんし、これから身を入れて就職運動をやり出來れば大きな土木の組に這入つて實際家として、技術屋として行きたい希望です。一に金

二に金で、三に實力、といふ醜い現實を見せつけられても、負けん氣でやることです。父上を始め善次郎や善三郎にも宜しくお傳へ下さい。母上は特におからだを大切にされるやうくれぐれも申上げておきます。今度母上からお手紙を戴けるのはいつだらうかとそれを樂しみに待つて居ります。

桔梗の季節

松原一枝

青い海風の吹く夕方でした。

私達は夕食を濟ませて寮の隣にある赤十字社の庭に、垣の破れから入つて、松の林を散歩してゐました。

なんでも「巳里の屋根の下」の

……懷しの思ひ出にさしぐむ涙……

とか言ふ歌が悲しい程私達の間に流行つた頃で、甘い思ひもない淸らかさでそれ故に何となく一圖に感傷をそゝつたのでせうか。それにしても歌聲は潮の音に交つて嚴めしく、歌ふ私達は皆しあわせで愉しい。

—假奈子さん。バイオリンの小父さんの御面會です。

遠くから上級生の誰かが叫ぶと、その聲は波の樣に乘つて傳つて來たのでした。私はバイオリンの小父さんといふ言葉が恥しくて、赤くなり乍ら馳け下りました。

バイオリンの小父さんと云ふのは私の從兄で、如何いふものかバイオリンの御稽古に行つた歸りにばかり寄るので、皆がバイオリンの小父さんと云ふ樣になつて了ひました。あの黑いケースを抱えて、チヤキチヤキと砂利を踏んで寮舍の方へやつて來るのを見ると、私は急いで逃げ出したものです 從兄はそれが得意であつたでせう

バイオリンなぞ持つて來ない樣にと私が願ふと急に應接間の窓を開けて窓に腰をかけ、靑きダニーブを彈きました。來るたびに名刺を三枚位も置いて行つて、私の友達で治療に來る樣な人がゐるなら是非させて呉れる樣にと賴むでゐました。研究生から、やつと先生と云はれる身の上に成つたのが嬉しくて堪らなかつたでせう。併しバイオリンもさう上手でなかつた樣に、この方の腕前も怪しいもので肩書は、ミサオといふ優しい名前に似ず整形外科と嚴めしく附けて居り、危なつかしくて私は誰にも配らずに机の中に藏つた儘でしたが。

珍しくその日の從兄はバイオリンを持つてゐませんでした。

何の用事なの

私は怒つた風に研つた聲を出すのでしたけれど、私なぞ自分の孫の樣にしか考へてゐない從兄は、それに持ち

前の人の好さとで平氣な顏をして笑つてゐました。

おや、裏の庭にたくさんクローバがあるんだねエ、珍らしい、實際こんなに丈の高いのは……一つ取つて歸つて瓶に活けよう。

等と思ひ附きの自分の事だけを言ふと用事も忘れて歩き出してゐました。

從兄は獨りでその日は來たのではなく、門の外から中に入らずに待つてゐる御友達がゐる事が分りました。まだ角帽も新しかつたから多分一年生だつたのでせう。私は從兄がクローバを取りに行つてゐる間突つ立つてゐながら、その人に御入り下さい——と云ふ術も知らぬ位でした。

段々手持ち無沙汰と默つてゐるのが苦痛になつて來ると、外に立つてる位なら來なければいいのにと心の中で意地惡く考へ、又すらすらと話をして此の樣な初對面の間位何でもないのだといふ風に見せたい虛榮心。それが出來ぬ自分なので一層にいらいらして來てゐました。

大きな癖に何て氣のきかぬ人だらう。

從兄の用事は、バイオリンを持つて來てはゐなかつたのですけれど、矢張りバイオリンに關する事で、二人が一緒に習ふと月謝が得だから、私も同じ先生にピアノを習ふ樣にと云ふ事でした。

その御友達、富岡さんは一言も私に話しかけずに從兄の歸つて來る間中後を向いて待つてゐましたが、從兄が

「歸るよ」と私に暇を告げると、明晰な聲で

ぢやあ、さよなら

と挨拶だけしました。恰もいまゝでの會話の續きを持つた樣な云ひ方であつたので、私には全くの才意討ちでありました。簡單に此の言葉に答へられる迄の接近を持つてゐなかつた私は、心の中で非常に狼狽して了ひました。

四、五日してから私は從兄の家へ、私の入學の祝ひに招待されました。

その時富岡さんも一緒で矢張り入學の御祝ひだとの事でした。高等學校の間をずつと從兄の家に下宿してゐたので、その日は特に伯母も嬉し相で、自分の身體は實によい研究材料になるから——これは何時もの伯母の云ひ癖でしたが、伯母の病氣は何處の博士がみても分らぬと云ふのが大變の自慢でした——死體は富岡さんに上げる積りだから立派な博士に成る樣にと云つたりして、皆を

笑はせてゐました。

富岡さんは、最初私を十四歳位の女の子だと思つたのに十七だとは意外であると驚いたけれど、大變默つてゐるので段々大人に見えだしたと云つて笑ひました。物言ひはすつぱりと云ふのに、何か氣恥しげな癖を持つた人で、男なのに笑ふと八重齒が見えるあたりは穩かでした。

最初の日にあんな風だつたのに、もうその日は會つた時からずつと昔からの知り合ひの樣な氣がしてゐましたし、皆でピンポンをしても私達はよく組になつて意氣投合して勝ちました。どうしてかう最初の日の不氣味さが取れたのであらうか等と考へると、私には、さよならと云つた一言の樣な氣がしてなりません。

富岡さんは御酒は何だか不馴れに見えました。ごくりごくりと咬みつく樣に杯を乾してゐました。伯母は富岡さんの歸つたあと、大人しい、いゝ子だと賞めて、

——さう酒も飲めさうでない樣だね——と云つたのですが伯父は簡單に

なあに、あの分では酒の方は大分やりつけてゐるやうだ

と申しました。

七月の暑い日でした。私は友達と町に出て歩き疲れて呆んやり花屋の前で硝子戸を覗いてゐました。私は何氣なく花が買つてみたいと考へてゐましたが、私の友達はこの暑いのに持つて歩くのは大變だし、喫茶店に入るにしても花なぞ抱え込むのは恥しいと云つて引き止めるのでした。さう云へばこの太陽の下で花を抱えて歩くには自分達の方が痛ましいし花にそれには餘りに不似合の感情をもつてゐる若い私達でした。

併し私はとうとう桔梗を買つてしまひました。私達が持つて歩いて可笑しいと云ふのなら桔梗はいゝだらうと私は友達を說き伏せるのでした。

ダリヤ、ガーベラア、山百合の色彩の中に盛り上げて積んである山の花、それは幼い嚴肅さでありましたけれど、際立つた切り立ての水氣を含んでゐました。全く桔梗なぞ此の立派な花屋では薄い紫の存在でしかないのでせう。併しすくすくと硬い莖と、とがつた小さな葉をつけて伸びた精氣を中空にぽつかり開いた花瓣の色でまき散らしてゐる、此の花は、何と元氣な生きものであつたでせう。

山の花の情調がその三つの蕾の中に一杯にふくらんでゐるのです。

むらさきは野暮な花

友達は冷笑するのでしたが、五束も手に抱え込んだら華やかな存在になりました。花屋の人は私に束を包んで渡し乍ら可愛いゝ、夏の日に負けない花です

と云ひました。

だけど少し多過ぎるよう

私は店を出ると少し許り照れる思ひでした。その時肩を誰かに叩かれました。振り向くと富岡さんが微笑してゐました。

桔梗？買つたの

とか富岡さんは云つた樣ですけれど、私は眞赤になつてその束をそつくり富岡さんの手に壓しつけ乍ら

いらないの〳〵あげる〳〵。

と云ひ乍らどんどん友達を引つ張つて馳出しました。

友達は

なーんだ。あの人貴方が御花買つてる時から見てゐた人よ

と後で云ひました。私の行動が不意だつたので、何時迄もはしたなさに、どきまぎしました。自分で桔梗を突然に投げる樣に渡して逃げて來た事が夢中の樣でした。だい分立つて振り向いてみると、富岡さんは驚いたでせうけれど、あの桔梗を片手に引き下げて電車通りを渡る處でした。

あの人も花など持つて歩くのが恥しいのか知ら、急いでゐるわ、

友達は立ち止まつて見てゐ乍ら云つてゐました。

私は何故か、よかつたわ、よかつたわと安堵してゐました。桔梗の花でよかつたの、

桔梗の硬い莖の一本一本の肌がざらざらと克明に浮ぶ樣でした。

だけど、遂々二三日して私達は喧嘩をして了ひましたもともとバイオリンの從兄が原因であつたのですが、で一緒に來た富岡さん迄私の飛ばつちりを蒙つた樣なものです。富岡さんが來る豫定でなかつた音樂會を從兄が誘つたので、私の友達の爲めに取つてあつた音樂會の切符が足りなくなるのです。從兄は呑氣さから、

―なーに、君の友達は誰かに貰つて行くよ、その切符は富岡にやり給へ――

と餘りあつさり片附けたので、自分の友達を無視されたといふ妙な幼地味た反感から厭だと駄々つた樣な氣がします。何にしても、今考へて全くの冷汗せものですが。で結局私達は私の友達を犧牲にして音樂會に行きました私も成り行きから云つたものゝ富岡さんに濟まない事をしたと後悔してゐました。だから一寸も愉快な音樂會でなく喉が痛いのだと殊更兩手を首に卷いて從兄達に挨拶して早く歸つて了ひました。

翌日、初めて富岡さんから御手紙を貰ひました。案外につたない字で、學校のノートの樣な固い字が横書きにきちんと並べてありました。濟まなかつたこと……常識の一つとして音樂會に行けたことを感謝します。

といふ風に何か四角ばつた難かしい手紙でした。最後に下宿の地圖が畫いてあり、遊びに來て下さいと結んでありました。地圖はすぐ暗誦して了ひましたけれど、何か昨晩の事が怒られてゐる樣で、

私の我儘を御許し下さい。

と返事を出さうかと考へたりして一日中氣を散らしました。が此の手紙も社交辭禮の一つだらうと考へると、禮狀に返事を書くのは可笑しいのだといふ解釋をつけてその儘にして了つた樣です。併し富岡さんにもう變想をつかされてゐるのだらうと不圖その時思へて來て、涙が出る樣な氣がした樣に覺えてゐます。

ある日、從妹と一緒に御風呂に入りました。私は寮生活をしてゐましたので、滅多に從妹達と話す折がありませんでした。くつろいだ話し、世間話し、そんな風に話が解けて落ちて行くのは泊りがけに行く土曜日の寢床の中だつたりするのですけれど、私は規則で泊りに行く事が出來ない時分でしたので、二人でよくぬるい御風呂につかり乍ら永い間樣々な話しをしてゐた樣です。從妹は細い聲で家の中で歌つては叱られるといふ流行歌を御風呂の中で私に傳授致しました。

その折に富岡さんの話しが出ました。從妹は必らず、最後には自分の兄さんの友達の事を私に話して聞かせ、富岡さんが眞面目で一番尊敬出來る人だと、あれこれと私の知らない具體例を聞かせるのが得意の樣でしたけれどその日は富岡さんは大變な御酒飲みで御茶屋遊びもす

るいけない人だと云ひました。

從妹は、すつかり富岡さんは見損つた人であると失望してゐました。

―それに女の人からも手紙が來るのですつて―女の人の手紙とは自分の書いた手紙ではなからうかと一瞬はつとしたのですけれど、考へてみれば私は實際に出した事は一度もなかつたのです。それにもう、私が富岡さんに會はなくなつてから三年も立つてゐました。その間同じ土地にゐ乍ら偶然に會ふ折もなく、私もすつかり從妹からかうして富岡さんの話しを聞く迄は昔語りの樣に忘れて了つてゐましたのに、こんなにも永い間あの時出し損ねた手紙の悔いが私の胸の中で自分にも氣附かぬ位の密やかさで培はれてゐたのでせうか。

私は赤く成つた頬を何處へも持つて行き樣がなくゴシゴシと手拭で顔を洗ひました。

バイオリンの小父さんは横濱のある病院の副院長格で行きましたが、その院長さんが免狀なしのインチキだつたので一緒に一寸ばかり取り調べを受けたと云ふ事ですそれだからでありませんが、辯護士の御孃さんを貰つて今頃は髭なぞ生やして鄕里で病院をやつてゐます。窓を開けて時々寄きダニーブなぞ彈くでせうか。

富岡さんは學校を卒業して了つて伯母の云ふ博士に成る筈なのですが、先日の伯母の手紙に、

まだまだ下手くそで先生の後からチョロチョロとノートを持つて歩いてゐる位だから當分のこと富岡に診察は委されぬとありました。

私も一度背廣を着た立派な富岡さんに五年振りで街の角ですれ違つたのですけれど、生憎な事に大變醉つてゐて、太々しい限りでした。

暑い夏の晩でしたが。向ふもその昔桔梗を投げた女の子だとは氣が附かなかつたでせう。私こそ白粉なぞつけて氣取つてゐたのですから。

安東

島崎恭爾

雪は粉々と安奉線の溪谷を包んでゐる。視界を奪はれた乘客達はどうとも仕様のない倦怠に、皆默りこくつてゐた。淚都から乘込んで喧噪をきはめた半島人の一群も嬶てはこの沈默の中に押流されてしまつた。

河西を前に、琥珀の飾りを上衣につけた老人は濁つた瞳を車窓にむけて、底知れぬ無邊の中に何物かを求めてゐる樣であつた。

汽車は雪空の貧しい中間驛に幾度かその車を休めて行く。その度毎に僅かの客が降りては亦、乘込んで來る。

河西の眠りを呼起した奈津子もその僅かな人々の中にゐたのである。河西は奈津子が此んな中間驛で乘込んで來たことを知ると、さては奈津子もたうとう結婚したのかと思つた。

「又出張ですの」

「あゝ君は?」

「奈津子もこの汽車で歸るのよ」

奈津子は元祿模樣のコートの上から毛皮ショールですつぽり頤を埋めている。

汽車は鈍く雪交りの中を滑り初めた。安東まではまだ數時間殘つている。

「嫌に冷たいわね,手袋をしてゐてもこんなに冷めたい」

奈津子は手袋を外すとその手を河西の頰に當てた、その指は河鰕のように凍ぢけてひんやりした。

「何んだつてあんな處うろうろしてゐるんだ」

「宿賃の催促に來たの、少し纏つた金が必要なので、でも切角出て來たけれど取れなかつたの、圖々したらないわ」

「なる程ね、僕は君が結婚したのかと想像した」

「そう」

奈津子は河西の横に席を占めると、ショールを疊んで膝の上に置き、コンバクトで寒さのために粟立つた頰を叩き初めた。

「嫌ね。髮がびしよびしよでせう」

「それ程でもないけれど、こんな雪の日に帽子も被らずじやらじやらと着物など着て出る方つてないよ」

河西は先刻から、奈津子のうらぶれた皮膚の色が寒さのせいばかりでないことに氣付いてゐた。其處には奈津子の心の若さと、肉體の相剋が皮肉な暦となつて全身に擴つてゐるのではないかと思つた。

「クリスマスには洋服を贈ると河西と約束したのだけれど駄目ね、送つてなんか寄起さないから」

河西は苦笑しながら

「妻君のある僕にそんな約束をするから駄目なんだよ」

「奥さんそんなに嫉妬深い?」

「あゝ、君が安東の鈴闌を送つて寄起すやうに簡單に片付けられないよ。第一僕が安東に出張することがとても苦になるらしい」

「淸い交際なんだけれど」

奈津子はそう言ひながら河西の顏を見て、ぷつと噴出してしまつた。

着く驛も着く驛も粗末な煉瓦建の驛舍と驛員の舍宅が雪に吹きまくられてゐるばかりで、乘込んで來る客もなかつた。河西はこれで五度目の安東出張である。河西は沿線にある各機關庫の入場車修繕狀態を調査するため、年に數度各地に出張を命ぜられるのであるが、安東は河西にとつてはこの上もない樂しい土地であつた。奈津子は河西が安東において宿泊する宿の娘で、奈津子の他に妹の克子がゐる。

「どの位の宿賃を踏倒された」

河西はこゝで話を轉じた。

「澤山の金よ、社員だといつてもうかつに信用出來ないお母さんが人好だからお蔭で奈津子達正月が來ても映畫も觀に行けなかつたのよ」

「映畫か……君達はよく映畫の中毒者みたいなことをいふ、克子ちやんにも注意してやらなくては」

「隨分無理な註文ね、河西さんが安東に住んでみると分つてくれるわ、若い人には映畫でも觀ていないと頭がぼんやりする處よ」

その儘汽車は墜道の中に入つて再び奈津子の顏が强い雪の反射で輝き出した。奈津子は背を椅子に靠して心持ち顏を上に向けてゐる。滑かな唇を引締めて頭の中で想を整理してゐる風にも見えるが、その反對に生活につかれた呆然さが漂ふてゐる風にも見えた。奈津子の顏はよく整つてゐる。わけて瞳孔の茶褐なのと厚ぼたい唇は美

しい、河西にはこれ程の美を備へた女が結婚を避けてゐることを疑はしく思ふのは現在ばかりでなかつた。其の原因は理想が高いとか、病弱だとかいふでもなく母胎から承繼いだ結婚恐怖症である。奈津子達の母親は若くして子供とともに男に棄てられたのである。滿洲の空で奈津子達を抱へて生きてゆかねばならない恐怖は奈津子達にも宿つてしまつたのである。その結果は結婚といふことより男性の樣に獨立してゆく精神が奈津子達には發芽してゐたのである。「滿洲の男の生活は不安でならない、獨立心がなく開拓の氣構えがちつともない」と奈津子の母は言ふ。この觀察は奈津子を抱えて大陸を彷徨してゐるうちに培かはれた觀察である。奈津子はそれを滿洲娘の結婚率が悪いといふことまで結びつけてしまふのであつた。河西が最初に逢つた時は奈津子は妹の克子と洋裁店を經營してゐた。それは母が經營している宿屋の近隣にあつて、奈津子達は愉快さうにミシンを踏んでゐた。河西はその時は現在の妻と結婚してゐなかつたので當然奈津子と氣易くなるといふことは結婚まで押進めてよい事になるが、河西自體こそ感じても奈津子には毛頭そんな態度が露はれなかつた。それでゐて平氣で河西に、身を任かすことがあつた。奈津子にはそれが大きな損失とか後悔とかいふ感情は塵程も浮んで來ないのである。こうした奈津子の不行蹟はおそらく母親も知らなかつたであらう。

奈津子も二十五である。生涯この儘の信念で押進んでゆけるものか、じつと疑視してゐると奈津子の心の中に破綻しつつある個處が見透ける樣に思へた。

鵲の巣を懸けた疎林が雪の中に貧しい影を伸してゐる。安東の町に近づくにつれてトラック運轉がぽつぽつ目につく。無數の鳥が飛立つかと思ふ程雪は雨輪に懸つて白光塵を揚げてゐる。

「河西さん、すぐ春ね」

「あゝ春だ、春がそんなに氣に病む」

「氣に病むことないわ、春までには克子と共同で喫茶店を開かうと計畫してゐるの、そうして爺々むさい青年達に明るい音樂を流し込んでやることよ。ねえ河西さん賛成出來るか知らん」

河西はかすかに不快な顏をした。

「そんな事に克子さんまで卷添させないでもいゝよ、早く君は結婚しなくては」

「卷添だなんて克子の發案よ。」

「克子さんが……よくも似た姉妹だ」

これはおそらく克子の發案でないことを河西は知つてゐる。克子は奈津子の樣に美しさこそ劣つてゐるが安東の街のどこともなく寂しい古典の匂が染み込んだ物靜かなる女である。淺黑い肌と胸の高い女學生からやつと脱けたばかりのキビキビした克子には河西もどうかしたはずみに奈津子に對して抱かない感情に物怖ぢることがあつた。克子も結婚の恐怖といふものがあるが奈津子の樣に強い信念でなく單に甘い夢に過ぎなかつた。それ程深く人生を覗く年齢でもなかつた。

「そんな事でもしなければ、この頃生きてゆくことが味氣なくなつたの、人生も終りだわ、笑はないでよ」

「笑ひはしない」

「嘘、心の中で笑つてるわ」

「どちらだつて構はないけれど、ぼつぼつ君も宗旨を變へて結婚する男を探し給へ」

「えゝ河西さんの忠告に從つて探して見るかな、現在一人居るんだけれど奥さんがあるの」

「よくよく君はそんな男ばかり好んで探すのだね」

「その方が危險がなくていゝわ、未知數な男と異つて幸福な家庭を營んでゐる男は間違ひなく幸福にして呉れる立證みたいなものよ、幸福を奪ふことは奈津子が悪いのではなく、その女の努力が足りないからなの」

得たり顏にしてゐる奈津子の胸の中には、河西自身があがく姿を冷笑されてゐる風に思はれた。

黄昏の安東驛に汽車は到着した。驛の建物の間から鴨綠江橋のガードが仄かに見える。

勿論雪に包まれて黑々しい彎曲したガードである。ホームには克子がショールを首にぐるぐる卷にして立つてゐた。克子は姉の後より降りて來る河西の姿を見ると颯つと顏の色を變へた。

「まあ河西さんと一緒だとは思はなかつた。うまく嬉臭してるわ姉さん」

「馬鹿さんね。先に歸つて河西さんの室の掃除してよ」

河西はオーバの襟を立てて突立つてゐた。

克子は河西のトランクを受取る風をして河西の手を抓るとクツクツと笑ひながら凍ついたホームを滑る樣にして逃げた。

「克子私達のこと注意深く探つてゐるのよ。貴女の手紙よく盗見してるの、それにあの夜のことだつて感附いてるわ、猜疑心の強い娘」

P　型××××機
走行粁二一〇、一四四（三五ケ月）
修繕處置
1　車輪廻り全修
2　エキセンロッド軟グリスカップ送る。
3　セッチバルヴスプリング不良に付注意
4　シリンダウオール檢修、右シリンダ龜裂す
豫備品至急準備して取替のこと
5　ピストンボテリング取換
6　テンダボックスLR23異型
7　エヤポンプ、ブラケット龜裂
G3　型×××機不在につき檢査せず
F　型×××機
走行粁一五七〇〇〇（一七ケ月）
1　メンロッド曲檢
2　テンダボキホルスタ龜裂取換
3　ピストンロッド弛緩の兆
4　第三働輪グリス現狀の儘
5　テンダボックス給油規定より多量なり注意
6　エヤーポンプ繼手部ストップバルヴハンドルを內側にして容易ならしめる

以上

「春のめざめだ」

河西は奈津子と並んで克子の後を歩き出した。

明朝此の地を出發す。今晩は區長より晩餐の招待にあづかつてゐるが鴨綠江にて克子とスケートの約束があつたので辭退す。區長は自分の名を（カワニシ）と呼ぶ。それ（カワニシ）でなく（カサイ）と訂正願つたら（イイ名だ）と讃める。

河西はこれだけの出張日誌を書き終へると、克子達の部屋に降りた。外は暗かつた。滿人街の湯を沸す蒸氣の音がふき鳴されてゐる。

安東の二月は溫度もぐつと氷點を降下してゐるが氷上にはスケートが盛んに行なはれてゐる。國際競技に出場

する選手達が鳥の樣に目の前を過去つてゆく。對岸には朝鮮部落の低い屋根がごてごてと群つて月の光に照し出されてゐる。雪橇が右往左往してゐる。河西はスケート靴の紐を締めると姉妹の樣子を視つた。奈津子と克子が先程から頻に口論してゐたからである。

「姉さん後生だから滑らないでよ」

「どうしていけないの、姉さんだけ禁足されることないわ」

「禁足してゐるのは私でなく神樣よ」

「神樣だなんて克子が禁足しようとするのね」

奈津子は克子のスケート靴を引つたくらうとした。

「いけない。身體の事も考へなくては姉さん」

この時河西は銀盤の上に躍り上つた。鉛色をしたロングの双先がすうと氷を斷切つたと思つた時は三間程奈津子達と離れてゐた。河西は滑走しながら克子があゝ迄して何故姉を引留めてゐるかといふ疑も抱かなかつた。河西の胸には唯壯快な運動神經のみが突く樣な風に向つて働いてゐたのである。

河西が隨分走つた頃克子が河西の後を遂ふ樣に脊を曲げて近づいて來た。

「河西さん姉さん姙娠してゐるのよ」

河西は驚くといふよりその事が奇妙なものに聽えた。

「誰の人か知つてるかい」

「この間泊つた人。吉林で學園を開いてる人よ」

「河西さん」奈津子が克子の話を咎める樣に呼んでゐる

「姉さんその男を愛してるのか」

「姉さんの氣持ちわからない」

河西と平行して克子も走つた。

「それで姉さん子供を墮さうとしてるの、この間もゝ×を飲んだりして」

「何故そんなことをするのだらう」

「自由になりたいのよ」

「河西さん」と呼ぶ奈津子の聲がスピートを持つて近づいてくる。

幾山河

富田　壽

一

眼をあけると、うす靄のやうに淀んだ空氣の中に、ほのかな明りが感じられた。どこかの室の中であるらしいだが、栂鶴吉は仰臥したまま、そこが何處であるのか判斷がつかなかつた。重い瞼のすき間から、僅かに光線を感じるだけで、意識はまだ半ば眠つてゐた。體のどこか分らぬ部分が、かすかな疼痛を訴へた。それが自分の體であるのかさへ判然としなかつた。深い沼の底にでもゐる樣な、漠然とした寂寥に包まれてゐた。

彼は無意識のうちに、喪失した時の觀念を取戻さうと闘つてゐた。眼を開いては閉ぢ、……どれほどの時が經つてからか、そこが高い天井と眞白な壁を持つた室であることに氣づいた。ほの白い光線は仰臥した足もとの方の窓からさし込んでゐるらしかつた。

「あゝ、朝だ！」

さう思ふと一緒に、栂はは じめて自分の意識と感覺を取戻した。痛みがはつきりと大腿部に感じられて來た。瞬間昨夜の恐ろしい記憶が閃光の樣に頭を掠めた。轉覆……だが、それから先ははつきりと思ひ出せなかつた。擊たれた瞬間の激痛と、人々のざわめき――それだけがかすかに記憶の底にあつた。

彼は改めて室の中を見廻した。たしかに見覺えのある室だ――さう思つてゐる時、誰か靜かに入つて來た。思ひがけない秀蘭だつた。

「まあ、トガさん氣がつきましたの……」

彼女は、枕もとに顔を近づけ、安堵とよろこびに滿ちた聲で云つた。栂は、默つて微笑した。日頃親しい者同志の意志が、それだけで充分通じ合つた。栂は、もう考へるまでもなく、そこがダリーさんの教會の一室であることを知つた。秀蘭は教會の召使だつた。

傷は痛みませんか――とたづねる彼女に、栂は靜かに頭を振つて答へた。秀蘭は、まあよかつた――と云ふ顔つきで、栂さん死ぬのぢやないかと思つた――と微笑しながら、言つた。

栂は、このやさしい少女に、何か云つてやりたかつたが、まだ時々痛みが襲つて來て、口が硬ばり、言葉が出せなかつた。

秀蘭は、ご主人夫妻が大へん心配してゐるから、あなたが眼をさましたことを告げて來よう――と云ひ殘して出て行つた。

間もなく三人が入つて來た。

ダリー牧師は、飛びつく樣にベッドに近づき、

「オオ、ミスター・トガ、氣がつきました。よかつたよかつた……」

と、呼びかけ、栂の額を撫でた。牧師夫人も「ほんとに、トガサン、心配しました……」と、同じ樣に栂の顏を撫でゝ云つた。

栂は、この夫妻の慈愛に充ちに微笑に、何年もの間感じたことのない深い人の情けを感じた。

「とんだご厄介をかけました」

硬ばる口を開き、やつとこれだけ云ふことが出來た。そして、自分はどうして此處に來てゐるのか、そのことを訊ねようと思ひながら、言葉が出せないでゐると、

「昨夜は全く心配しましたよ……」

ダリー氏はさう云つてから、出來事の顛末を語つた。

昨夜十時すぎ、もう牧師達は床に就いてゐると、突然火車站から擔荷で運ばれて來たのが栂だつた。昨日は生憎たつた一人の町の醫師が不在で、その方に經驗のあるダリー氏に手當を乞ふて來たのだつた。栂は意識を失つてゐた。準備に手間取つたりして、夜半の二時にやつと手術が終つた。幸ひ貫通銃創だつたので、手術は思つたより順調に運んだが、出血がひどく、それが心配だつた――と、ダリー氏は言葉を切り、

「何にしても、不慣れな私の醫術がお役に立つて、こんな嬉しいことはありません。もう熱も下つた樣だから大丈夫でせう。」

と靜かに笑ひながら結んだ。

栂は、それほどの大きい迷惑をかけてゐたとは知る由もなく、ただ、

「……色々と申譯ありません。」

と、日本流の感をこめて言つた。ダリー氏夫妻には、その言葉の意味が分つたのか、ただ笑つてゐた。夫人は

「少し元氣をつけませう」と云ひ、用意して來た搾りだての山羊の乳をスプンで掬つて飲ましてゐた。

梅は、三人とも自分のため殆ど一睡もしてゐないことを知つて、濟まない氣がした。

みんな休息して呉れる樣に云ひ、無理にひきとつて貰つた。

一人になると、梅はダリー氏がゐなかつたら自分は死んでゐただらうと思つた。生きてゐると云ふことがむしように嬉しく、涙が流れた。その感動が次第に落付くと彼は急に今まで思ひ出さなかつた仕事のことを考へ浮べ新たな重荷を感じはじめた。

彼は、今この熱河山中の鐵道工事現場で、○○組工區の下請をしてゐるA工務所の一員だつた。この春工事着手と一緒に四人の現場監督たちと此の町にやつて來た。梅一人が事務員なので事務所に殘り、四人の監督達は、翌日からすぐ手分けして各工區に出かけて行つた。彼等は一週に一度、十日に一度位事務所に歸つて來てはまた出かけて行つた。——

第二工區の岩崎から昨日の午後突然電話がかゝつて、工事材料の品違ひがあつて困つてゐるから、すぐ引合せに來て呉れと云つて來た。夕方の汽車にもう間に合はず、梅は困つてゐると、丁度その工區迄行く機務段のモーターカーがある事を知つた。事情を話してそれに同乘させて貰ひ、梅は二人の機務段の人達と一緒に工區に向つた。

この邊は事變後の治安も大體回復してゐて、殆ど匪賊の心配はないとされてゐた。しかし、それでもまだ夜間は安全とは云へないので、夜の旅客列車は通らなかつた梅達のモーターカーは、薄暮の線路を風を切つて驀進した。目的の第二工區迄は約五十粁だつた。

いつの間にか殘照が消えて、あたりが暗くなつてゐたあともう十粁位の地點まで來てゐた。次の站で貨物列車とすれ違ふのだ、と同乘の人が話してゐた。梅は、明日の仕事の段取りをあれこれと考へつゞけてゐた。

ゴーと激しい音をたてゝ、車は一つの鐵橋にさしかゝつた。數日前の大雨で、水嵩の增した川の面が、鈍く光つて見えた。

と、鐵橋を渡り切つて間もなく、稍々急な上り勾配のカーブにさしかゝつたと思ふ途端、强烈なショックと一緒に「アッ！」と聲を立てる暇もなく、梅達は車諸共線路の外に投げ出されてゐた。一度失つた意識を取戻し、起ち上らうとするところへ、すぐ近くの木立の蔭から、

待ち構へてゐた銃聲が、タン、タンタンと、つゞけざまに襲つて來た。「匪賊だ！」と誰かが大きく叫んだ。梅は、瞬間、半ば無意識に線路に逼ひ上り、向ふ側の土堤の蔭に逃れようとした。と、今一、二歩で線路を越え切らうとする刹那、腰のあたりに、グワンと强い打撃を感じ、そのまゝコロコロと土堤の斜面をころげ落ちた。何處かでワッと人々のわめく聲がきこえたと思つたが、それつ切り彼は草の中で意識を失つてしまつた。

間もなく、梅は貨物列車の人々に救はれて、町まで送られ、思ひがけぬ教會の一室に運ばれたのだつたが、その間の記憶は一つも殘つてゐなかつた。……

二工區の方はどうすればいゝか——梅は仕事の事を考へ、頭をかき亂された。だが、今は考へたつてどうにもならぬのは知れ切つてゐた。

その日の午後、倉崎が驚ろいて歸つて來た。

「濟まん、濟まん、こんなことになるなら無理に君に來て貰はなくてよかつたんだ、俺が悪かつた、勘辯して呉れ。」

倉崎は、赫く陽燒けした顏に、眞實申譯ないと言つた人の好い表情を浮べて言つた。そして、事務所の方は何とかなるから心配しないでゆつくり養生する樣にと言つた。

梅は疲れのため暫く眠つたらしかつた。急に蒸し暑さを感じて眼をさました。ベッドの後で秀蘭が何かしてゐた。

「暑いね——」

と聲をかけると、

「あなたが眠つてゐらしたから、しめて置きましたの……あけませうか。」

と窓を開けに立つた。まだ外は熱暑が衰へる時刻でないのか、それほど冷たい風も入らなかつた。梅が、タオルを取つて呉れとたのむと、秀蘭は「まあ。ひどい汗。」と云ひ、ベッドの背にかけてあるタオルをとつて顏を拭いて呉れた。梅は、それを受取り、自分で首のまわりを拭かうとすると、彼女はまた默つて彼の手からタオルをとり、胸を擴げて首から胸にかけてヂッとりと浮いた汗を拭いて呉れた。

彼女は脇置臺をひきよせ、その上へ、先刻から生けてゐたのであらう、古風なカット・グラスの花瓶一杯に盛つた花を梅の眼の屆く位置に置いた。野菊と薊とコスモ

スであつた。
「きれいだね……」
栂はさう云ふと、
「トガさん、花がお好き?」
秀蘭は何故か恥かしげに云ひ、微笑した。栂は、つゝましいこの野生の花を、心から美しいと思ひ、同時に秀蘭と云ふ少女の美しさも、畢竟この花のつゝましさだとそんなことを思ふのだつた。
秀蘭は、決して上流に育つた少女ではなかつた。十一歳の時兩親に死別した不過な孤兒だつた。だが、ダリー氏夫妻の親切な養育によつて、今は熟河の山奥には珍らしい立派な少女になつてゐた。十七歳の今日までまる六年間、自分の子供と同じ樣に育てゝ來たと云ふ夫妻の勞苦を想像し、栂は我がことの樣に嬉しく思ふのだつた。
秀蘭は簡單なことなら英語で讀み書きが出來た。そして、今度は日本語を學びたいと云ひ、栂が教へる約束でまだそのまゝになつてゐた。
栂は、別にクリスト教の信者ではなかつた。だが文字通り無味乾燥なこの町では、こゝより外に行くところがなかつた。ダリー氏とは散歩の折に知り合つたのが縁でずつと交際をつゞける間柄になつてゐた。
ダリー氏は、決して栂に信仰を強ひはしなかつた。然し、栂は、滿二十年の歳月をこの熟河の山中に送つてゐるダリー氏夫妻の、信仰の生活を目のあたりに見、頭を下げずにはゐられなかつた。クリストの教義よりも、ダリー氏の信仰そのものに尊敬を抱き、氏の生活に心ひかれて、暇さへあれば教會に足を運んだ。孤獨と放浪でいびつになつた心が、矯めされ、淸められる氣がした。
ダリー氏は熟河に入る前、既に山西の山奥で十年の傳道生活を送つてゐた。從つて支那のあらゆる事情に通じ世界に支那の土民ほど善良な民族はないと、口癖の樣に語つてゐた。
ダリー氏の話す支那語は純粹の北京音で、未熟な栂の耳にもよく分つた。大抵の話は支那話で話すのだつたが栂の發音の不完全からよく通じないことがあると、ダリー氏はいつもウエイドの字引を用意してゐて、これだらうと字引を開き發音を訂正して呉れた。ダリー氏は國籍はオランダであつたが母方が英國で英語も達者であつた。氏には二男一女があつた。二人の男の子の方は既に成人して、今英國の方で勉强してゐるのだと云つてゐた

女の子はまだ昨年生れたばかりの赤ん坊だつた。五十八歳の氏は、この年になつて子供を授かつたのは、やはり神の思召だと、相好を崩して話すのだつた。
いづれはお國の方へお歸りになるのでせう——栂はダリー氏にかう訊ねて見たことがある。その時氏は、滅相もない——と云つた顏付で、
「恐らく一生此處にゐるでせう。」
と、信念のこもつた口調で云つた。栂は、
「ではお子樣は?」と重ねて訊ねた。と、氏はけげんさうに栂の顏を見返し、
「子供達には子供達の運命があるから、私にはわからない。」
と答へた、栂は、一瞬不思議な氣持がしたが、「運命」と云ふ言葉に、何か抗し難い深い眞理が含まれてゐる氣がして、それ以上追及する言葉を愼しんだ。彼は他國の風習に日本流の家族觀念から解釋して、割り切れない、さうした傳統のあることは前から聞いてゐた。然しダリー氏の心の中にあるものは、單に風習からばかりでなく人類に課せられた一つの使命を遂しとげる爲に、人は勝手に自分の生活を規定し得ない環境に置かれてゐるものだ——と云ふ强い別な觀念ではないかと想像した。
彼はつと長い間忘れようと努めて來た自分自身のことを思ひ出してしまつた。
生きてゐる母の面影が、電光の樣にチラッと彼の眼に映つて消えた。もう幾年も逢はない。だが現實に生てゐる母だつた。栂はその血を分けた母と、別れて生活しなければならない現在の環境が、果して「運命」なのであらうかと反省した。だが、それは決して「運命」ではなかつた。母と子が故意に作つた環境だとしか考へられなかつた。栂は、今更その實を老いた母だけに着せようと思はない。しかし、母の子に對する愛の喪失が、この悲しい結果を生んだのだ——と、今に心の隅にくすぶるいかりの火をかき消すことが出來なかつた。
栂の父は彼の五歳の時亡くなつた。
父の死後、間もなく栂達はNと呼ぶ町醫者の家と背中合せになつた家に引越した。
引越の最初の夜、栂はフト眼を覺ますと、側に寢てゐる筈の母がゐないことに氣がついた。大聲で呼んで見たが返事がなかつた。急に大きな不安に襲はれ、家中泣きながら逼ひ廻つた擧句、蒲團に戻つてそのまゝ寢入つて

しまつたらしかつた。朝眼がさめたときは、母はもう家に歸つてゐた。栂は何故か昨夜の事が本當でない氣がして默つてゐた。それから後、母は屹度栂の枕許に、繪本か玩具をあてがひ「母ちやんがゐないでもおとなしくねんねしてゐるんですよ、おつきしてはいけませんよ。」と云ひ、栂の寢入つたのを窺つて、どこかへ行くらしかつた。栂は、夜中に眼をさましても泣かなくなり、次第に母の體溫を忘れてしまつた。

この悪しい習慣は、その後ずつと長くつゞいた。そして、數年後、栂は小學校に行く樣になり、自分達が、N醫師の同じ邸内に生活してゐる意味が漸く分つて來た。N醫師の奥さんは年中病氣で寢た切りだつた。その奥さんの代りに、彼の母が醫師の世話をしに行くのだと、誰からとなく聞かされた。母は醫師の事を、栂に「旦那さん」と呼ばせたが、栂は一度も醫師と口をきかなかつた何か理由は判然としないながら、自分のうちのある禍なものが自然にさうさせてゐるのだつた。同時に、心の中の母の存在が、次第にうすれて來るのを感じた。その頃母は夕飯がすむと「早くおやすみ——」と云ひ殘し、本家（N醫師の邸）へ行く習慣だつた。栂は、押入から蒲團を下して、一人で眠つた。そして、早く大人になりたい——とそのことばかり考へた。

栂が豫てからの計畫を實行したのは小學校を卒へた年だつた。その夜も母は本家に行つてゐなかつた。栂は、一晩眠れなかつた。時計を見るともう十二時だつた。彼は決心して、羽織とマントを風呂敷につゝみ、簡箪笥の抽出を開けた。そこにはその日母が郵便局から持ち歸つたハンカチにくるんだものが、そのまゝ入つてゐた。栂は急いでそれを懷にねぢ込み、何も考へないで表に出た。

海邊の驛のある町まで、三里の夜道を栂は夢中で急いだ。疊つた空には星かげさへ見えず、闇の中に、道路だけが仄白く浮いて見えた。彼は大事を決行した自責と、闇の恐ろしさで體を固くし、足だけ思ひ切り大股で歩いてゐた。金を盜み出したことが、彼の心をとがめた。だが、彼は、その金が決して母一人のものでないことを知つて居り、構ふものか——と心に反撥した。亡くなつた父が、長年の官吏生活で殘して行つた遺族扶助料がその金だつた。それだけの金があつて、母はどうして今の樣な生活を送らねばならないのか——と、栂は自分で思ふばかりでなく世間の人達の非難さへ耳にしたことがあ

る。

驛に着くと、間もなく上りの一番列車が入つて來た。栂は、ポツと胸を撫で、固い三等車の隅に腰を下した。

それから一十年、栂は、苦學と放浪にその半生を費して來た。その間幾度か彼は母を母として考へ直し、失つた母への愛を取戻すことに努力したが、母の方で常にそれを避け、彼と生活を共にすることさへ肯じなかつた。

斯くして、彼は母を忘れようと努め——母を忘れた。が、代りに彼の心を捉へたものは、母ではなく、母性への新たな憧れだつた。而も彼はそれがいつの間にか異性一般への憧れと形を變へてゐるのを意識した。彼の中なる母は異性一般であり、異性は卽ち母だつた。自分を愛して呉れる母、やさしい母——彼は、孤獨と放浪の闇の中に、ひたすらその眼に見えぬ姿を求めて彷徨した。彼はふと現實の母の悪い血を、自らの體の中に感じ、思はず慄然とした。道德を超した、何か不潔を感じた。母の悪血が自分をかつてその彷徨に陷れたのだと錯覺する彼は次第に眼をつむつて眼界を覆ふ努力に落ちていつた。

「あなたは故郷を想ひ出されますか？」

栂は、一生この土地を離れないだらう……と云ふダリー氏に訊ねたことがある。ダリー氏はそのとき、栂の質問の眞意を先廻りして、

「……勿論、私はどうしてあの美しい田園風景を持つた故郷を忘れませう……けれども、故郷は故郷、私達は必ず故郷に歸らなければならないとは思ひません。」

さう云つて、栂の心を計る樣に、だが、いつもやさしい眼で見返した。

「故郷に歸る義務は別として、歸り度い欲望は起りませんか？」

「欲望？」ダリー氏は一寸首を傾け、

「……それは、たゞ自然だけを對象としての考へ方です、私には心の故郷がありさへすれば……心の故郷は、私の心を知つて呉れる人々との日々の交りの中にあるのです。」

「……」

栂は、この問答をつゞけることに何故か無意味を感じた。しかし、ダリー氏の云ふことは、一々肯けた。そればかりか彼は、自分の考へてゐることを、ダリー氏の言葉によつて裏付けようとしたのではないかとさへ思ふの

であつた。

栂は、ダリー氏にひき比べ、自分の方が故郷と云ふ觀念に溺くこだはつてゐることを知つてゐた。が、それは日本人である以上仕方のないことだと思つた。「祖先墳墓の地」――と云ふ家族觀念を土臺として故郷と云ふものが、日本人ほど溺く頭に刻み込まれた國民はないであらう――と思ふあとから、彼は一轉してその特殊な故郷さへ失ひつゝある自分を顧み云ひ樣のない焦躁にかられた事が屢々だつた。ダリー氏の云ふ「心の故郷」の實體が何であるのか、未だ漠然としたまゝだつたが、栂は、それを自分なりに解釋し、故郷は常に自らの心の中にある誰にも知られない一つの思念だと、いつの間にかきめてゐた。そして、その思念は、いつか自分と同じものを抱く人に接したとき、何かの形をとつて現れるだらう――そんな風に思ふのだつた。

三週間の日數が、寧ろ物足らない早さで、既にすぎ去らうとしてゐた。

栂は、患部に最早少しの痛みも感じなかつた。四五日前から用ひてゐる松葉杖が煩らはしい氣さへした。彼は誰もゐない時を見計らつて、杖を用ひずに廊下に出た。少しばかりひよろつく感じがしたが、足はもうしつかりしてゐた。はじかりに行き、歸りに陽の當つてゐる裏庭に出た。コスモスと鷄頭が一面に咲き亂れてゐた。彼は暫く其處に蹲んで、靜寂な外氣の中に何故ともなく、ヂツト聽き耳をたてた。シーンと心にしみる音のない響きが、何處からかきこえて來た。それは悠久な大地の呼吸――そんなものを感じさせる深い靜かな響きだつた。

「まア、トガさん！」

突然、背後に聲がした。秀蘭が立つてゐた。

「……杖なしで、いけませんよ。」

彼女は柔しい眼で栂を睨む眞似をした。栂は微笑したゞけで答へなかつた。あわてゝ秀蘭の取つて來た杖にすがり、栂は病室に歸ると、輕いめまひを感じた。

しかし、其の夕方、栂は首をかしげるダリー氏を無理に納得させて、教會の一室を引き上げた。長い間放任した儘の仕事が急に心につかえて來たからだつた。

工事場は各區とも竣工に近づいてゐた。

事務の栂は、一人で眼の廻る思ひだつた。休んでゐる

間のたまつた仕事をやつと片付けたところへ、各區からの部分竣工書が次々に殺到し、その調書と略圖を書くだけでも一通りの勞苦でなく、健康を省る暇さへもう與へられなかつた。

ダリー氏にもあれ切り會はず、秀蘭がダリー氏の下を去つて、町の伯父と呼ぶ男に引取られ、居酒屋の女になつたと云ふ悲しい噂を耳にしながら、まだ訪ねてやることも出來なかつた。彼女が、どんな日々を送つてゐるか栂は身に迫る思ひで想像をはせた。……

もう間もなく十月だつた。

各區の工事は豫定より遲り、あと十日もすれば全部片附く筈だつた。調書や圖面も大體處理を終つて、栂は本店に持歸つてする後始末だけを殘してゐた。

彼は夕暮前の一と時を、久し振で戸外に出た。道で、いつも出入する苦力頭の劉に出會つた。劉はどこへ行くのか馬をひいてゐた。

「劉……俺に馬を貸して呉れないか。」

「掌櫃、危いよ！」

呆れ顏に云ふ苦力頭の手から、栂は奪ふ樣に手綱を取つた。次の瞬間、彼はもう裸の蒙古馬に跨がり、丘の道さしてギャロップを踏んでゐた。

爪先上りの道を暫くかけると、流石に息切れがして來た。彼は馬をとめて呼吸を休めた。半ばかげつた入陽が丘を取圍む山々の襞を、或は赫く、或は紫に彩り、山々はその屈曲する頂の一線を薄暮の空にくつきりと描き出してゐた。栂は、熟河の自然で最も愛すべきものは、この嚴肅な夕暮の山の姿だと常に思つてゐた。そして、あの一つに登れば、遙か砂漠の一端を望むことが出來ると聞き、一度その望みを果したいと思ふうち、もうその時期のすぎてしまつたことが、何かなし限りない心殘りの樣な氣がした。

……

歩度を緩めて、もと來た道を引返すと、ステツキを振つてゐる人影が見えた。ダリー氏であつた。栂は思はず馬をはやめた。

「そんな亂暴して大丈夫ですか！」

近づくと、ダリー氏はニコニコしながら云つた。

「……」

栂は、「もう大丈夫です」と微笑で答へて馬を下り、改めて

「……まだお禮にも上らないでゐます――」
と赤面しながら云つた。ダリー氏は、もう忘れたかの樣にそのことには觸れず、實は相談があつてやつて來たのだと眞劍な顏で告げた。
「實は秀蘭が……」
「エッ！どうかしましたか？」
「王さんの家にゐられなくなりまして……」
この一語が、ヅキンと梅の胸を刺した。
――秀蘭の伯父の店に來る毛皮仲賣人の王と云ふ男が二百元で彼女をぜひ買ひたいと云ひ、伯父は既に承諾を與へてゐる。勿論その五十男の第二夫人か第三夫人にしようと云ふのだつた。
「秀蘭は泣いて私に訴へるのですが……」
ダリー氏の悲みに滿ちた聲をきくと、梅は何か今まで意識しなかつた強い責任感にかられた。そして、考へる餘裕もなく、「……私が引受けませう。」
と、決然として云つてしまつた。
その夜は、現場員達の引上げの前夜だつた。事務所は彼等の荷拵へでごつた返してゐた。
梅は、僅かの暇をぬすみ、はじめて王の酒場に出かけた。すぐ秀蘭が寄つて來て、「まア！」と聲を立てるのを、梅は眼で制し、酒を命じた。濁つた支那酒が、胸に燒きつく樣にすぎるのを待つて梅は頭を上げ秀蘭の顏をまじまじと見た。瞬間、彼女は泣き出しさうな表情で、物言へぬくやしさを唇でかみ殺した。話をどう切り出していゝのか――店の中には一人も客が居なかつた。梅にはそれが却つて危險な氣がした。だがこの時を外したら、永久に機會はない――と思ひ返し、
「今夜二時に、火車站に來るんだ！」
ただそれだけを、低い、しかし命令を含んだ聲で云ひ彼は殘りの酒を乾して立上つた。
戸口まで送つて來た秀蘭に、梅はも一度「いゝか？」と念を押した。秀蘭は「え……」と、强いうなづきを殘して姿を消した。……
三日の後 梅は奉天の本店に引揚げた。そして先着の倉崎に頼んだ秀蘭が、途中無事××行の汽車に乘り替へたことを聞き、旬日の重荷を下した氣がした。彼はあの夜火車站で「梅さん、あなたが連れて行つて下さるのでは

ないですの？」さう云つて悲しい眼で訴へる彼女に危く「お前が望むのなら……」と云ひかけて、「いや、それは駄目なんだ、××の伯母さんとこへおいで、その伯父一家はいゝ人達だと云つたではないか」と、半ば無理强ひに出立させたことを思ふと心に殘るものがないではなかつた。しかし、一人の孤兒の運命が、今後どうなつて行くか――そこまでは所詮力が及ばないと思ふと、ともかく彼女の希望する安全地帶に一應屆けてやつたことだけで、何か知らホッと安堵した。そして彼女は屹度幸福になつていく――と信じたかつた。……

二

國都新京にもこんなところがあつたのかと思へるほどの、ゴミゴミした一角だつた。自動車がやつとすり拔けられる程度の小路は、年中陽當りが悪くジメジメしてゐた。その小路に入口があり、更に倉庫の樣な灰色の建物の間を通つて、鐵の手摺の付いた急なコンクリートの石段を上つたところに、薄い粗末な板に「靜思莊」と書かれてゐた。
梅の借りたのは北向きの一番奥で、其處だけが六疊と三疊の二間つゞきだつたが、彼は一間の室が空くまでと云ふ契約で、六疊分の家賃しか拂はなかつた。
九月末に熱河の現場を引上げてから、梅は奉天で半月ほど後始末に從つた。大部分の者達は來年の仕事が出るまで暇を取るのがこの商賣の慣しであつた。誰が事務の者一人だけ殘つて貰ひたいと云ふ店主の希望で、梅が殘ることになつてゐた。だが、東邊道の方の現場から最後に歸つて來た鈴木と云ふ事務の男が、家族が多く、半年遊ぶことは困ると聞いて、梅は進んで自分の椅子を彼に讓つた。話がきまつた翌日、鈴木の細君に菓子折を持つて禮に來られ、梅は云ひ樣のない寂寥に打たれた。
その夜彼は荷物をまとめ新京へ發つた。先輩に當るK氏が政府の役人にゐる筈だつた。一先づそこを當つて見ようと考へたのだ。
だが、あてにしたK氏は北滿の省公署の方に轉じてゐず、彼は仕方なし靜思莊の一間を探しあて、其處からK氏宛に手紙だけ出した。
梅は失業には最早慣れ兒になつてゐた。しかも、その度毎に新な不安を加へずにはゐられなかつた。明日への生活の不安ではなく、度毎に自分がすり減らされて行く思ひ――その氣持に參るのだつた。極端な言葉で云へば

何處で野たれ死しようと、人生に對して如何程の未練もあるわけではなかつた、いよいよ食へなくなれば、それが最後と覺悟をきめてゐた。ふと熱河での事を想ひ出しあのとき自分は死にそこなつた——と考へたりした。しかし、慾を云へば、たつた一つでもいゝ、何か安堵し得る仕事を殘して置きたい——と思ふのだつた。

彼は暫く何も考へず、天氣のいゝ日は新しく開けた新京の市街を、足にまかせて歩き廻り、それにも飽きると夜店で買ひ込んで來た古雜誌を手當り次第によんで暮した。彼にとつてこれは全く久し振の贅澤な保養だつた。

十日ほど經つたある日。異樣に嵩ばつつた小包と一緒にK氏から手紙が來た。

——(前略)熱河の方の御仕事中絶の由、お困りの事と存候、目下之と云つて心當りも無之候も何とか考慮仕る可く、それまでのところ別便お屆申上候原稿の整理にてもお頼ひ致したく、別に急を要する譯のものに無之故、お退屈凌ぎにでも相成らば好都合に存候尚本稿は別紙編纂方針にも記載の如く、明年中に出版の××叢書の一として發表の豫定に有之、御則待に沿ふほどのお禮は全難かと存候も下宿の間代程度の薄謝は差上得らるべく、又御覽の如く、資料は未だ斷片的素材の程度を出でず、僅かに小生の愚見を差し加へたるに過ぎず候、貴兄の御骨折によつて、光彩を放ち得れば幸甚この上なく、何分の御援助賜り度希上候——云々。

「北滿の農業と勞働力の需給」と題した原稿で、詳細な編纂方針書が添へてあつた。「大へんなものを背負ひこんだ」——梅は最初さう思つた。が、内容を見て行く中に、次第に興味を感じはじめた。

この仕事をやり遂げることによつて、何か自分自身の大きな收穫が豫期される氣がし始めた。勿論假には、手に餘る大きい仕事に違ひなかつた。しかし、N氏の緻密な調査と研究によつて、打ち見たところ既に仕事は九分通り出來上つてゐるのも同じだつた。あとは、方針書に從つて之を配列し、體裁づけさへすればいゝ——それだけが殘された仕事だと、思へた。

彼は、何か希望を感じ、暫くその嵩高な原稿の束を見つめてゐたが、思ひ切つて、K氏へ承諾の返事を書いた。

梅は、毎日朝の十時から、午後の三時まで晝食抜きの丸る五時間をその仕事にあてゝ机に向つた。三時が來ると、外の空氣を吸ふため必ず日に一度の散歩に出た。そ

の規則的な勞働が、彼には樂しいものの一つとなつた。

その日も彼は一日の勞働後の散歩に出で、歸つたのは五時近かつた。

薄暗いアパートの廊下を入り、室の前まで來て、梅は思はず立止つた。たしかに閉めて出た筈の扉が開いてゐた。沓脱に揃へてあるのは見覺えのない女靴だつた。

默つて自分の室に入ると、すぐ隣室に氣配がして襖が開いた。

「お留守に突然越して參りました、梶上と申します、どうぞよろしく……」

思ひがけない挨拶だつた。

梅は、どきまぎと坐り込んで頭を下げた。

無造作にカールした豐かな髪と、美しく澄んだ眼がすぐ襖の蔭に消えた。

では——今日から襖一重のこんな生活が始まると云ふのか……梅は改めて考へこんだ。

一週間ばかり何事もなくすぎた。

隣室の女は午前中大低何處かへ出かけて行くらしかつた。午後は殆ど音も立てず何をしてゐたのか分らなかつた。

或る日、梅はガスの火をつけようとして、マッチの切れてゐるのに氣がついた。思ひ切つて隣室に聲をかけるとすぐ氣輕い返事と一緒に襖が開いた。

「何かご用でございますの?」

女の姿がすぐそこにあつた。

「マッチを拜借願ひたいのですが……」

「……どうぞ。」

この僅かなきつかけから、梅は彼女——梶上牧子と親しく口を利くことになつた。

牧子は何か書きものをしてゐた。小さな机のぐるりに紙が一ぱい散らかつてゐた。

「何かお仕事なんですか?」

梅は何氣なくさう訊ねた。日頃から抱いてゐた疑問が口に出たのだつた。

「いゝえ……」

一瞬、牧子の顔は當惑さうに曇つた。が、すぐに、

「……履歴書を畫いてゐましたの。」

と、彼女は平靜に戻つて云つた。その云ひ方は、とり樣によつては、殊更親しみを見せようとするかの樣でもあつた。しかし、梅は、それが彼女の持前の態度である

ことをすぐに感じとつた。

「どこかへ就職なさるんですか？」

「……え、まだきまつたわけではないんですけれど……」

牧子は、氣拙さうに云ひ、心中の焦慮を努めて壓へてゐる風に見えた。栂は、悪いことを云つたと思つたが今更仕方がなかつた。

「實は、僕も今失業中なんですよ」

栂は何か義務の樣なものを感じ、笑ひながら云つた。

「まあ――ほんたうでございますの？」

牧子は意外だと云ふ顔付きで見返したが、その眼は急に親しみを增して來た。

牧子は毎日午前中外出するのは、體が悪くて病院通ひをしてゐるのだと云つた。栂はそれを聞くと、何故ともなく、暗い過去を彼女の上に直感した。直感は果して當つてゐた。

――三歲の時、彼女の父は北海道の炭坑でガスの爆發にあつて急死し、つゞいて母は其の頃日本全土を襲つてゐた流行感冒で死んでしまつた。兄妹もなく、遠緣の兒のない夫婦に引きとられ、ともかく小學校だけは終へたが、もともとその義父達は彼女を生活のもとでにするつもりでゐた。女中奉公一年の後 函館へ五百圓で賣られる話がきまつた。彼女はただわけもなく恐ろしさを感じ義父の家を拔け出した。女工賃ひの男につれられ本州に渡つた。それから轉々あちこちを流れて、十六歲の時東京に辿りついた。爲替貯金局の給仕から會社の受付けそして、暇々にY・M・C・A の夜學で英語とタイプライターを習得した彼女は、一生自活の決心をきめたのだつた。……三年前、彼女はそれまで勤めてゐた東京の會社が突然解散したのを機會に、大連にゐる友人のU子にすすめられて渡滿した。U子の勤めてゐる會社に丁度空きがあつて、大連についた翌日から働くことが出來た。牧子はU子の親切を身にしみて感謝した。だが、僅か一年たゝない中に其處を辭めねばならぬ結果になつてしまつた。同じ事務室のMと云ふ青年が、いつとなく牧子に好意をよせて來た。彼女はその好意を、たゞ平靜に受けて來た。だが、それがいけなかつた。彼女は自分に對するU子の態度が急に冷たくなつたのに氣づき、U子がMに抱いてゐる愛情の深さを、はじめて知つた。

彼女は迂濶さを後悔し、U子に謝つたが、既に遲く、却つて疑惑を深めるばかりだつた。……牧子の不幸は、

それ以來更に深まつた。暗い生活の第一歩がその時から始まつたのだ。知人も何もない土地で、女が明日からの生活をつなぐどんな方法が外にあらう――眞であることを意識して彼女は女給と云ふ職業に飛び込んでいつた。大連、吉林、熱河――と二年間彼女のくぐりぬけて來たのは、何處でも同じ泥濘の道だつた。而も、その間、彼女が抱きつづけて來たものは、どうしてその世界から拔け切ることが出來るか――と云ふ考だけだつた。彼女は、その轉機が、思ひがけない體の不健康から、今やつとめぐつて來たのだと知つた。せめて昔の生活に返らう――さう決心した彼女が新京に來たのは、治療の便宜を求めかたがた、此處なら何か一つ位自分の職場が與へられはしまいかと、淡い希望を抱いたからだつた。……

栂は、牧子の話を聽き終つて、何か遠い道を感じ、同時に、「此處にも、人の世の光を失つた、哀れな女がゐる」と、强く胸を打たれた。「何か云つてやらねばならぬ。」さう思ひながら、何も云へないのが、こんな場合の彼の性格だつた。

「お體の方はもういいんですか？」

やつとさう訊ねた。

「えゝ、お蔭さまで暫く遊んでる間に大へんよくなりましたの。もう病院の方も二、三日もしたら行かないでいいと云ひますの、やはりあんな生活がいけなかつたんだと云ひますわ……」

牧子は淋しく笑つたが、栂はその一見おだやかな表情の奥に、生活を取戻さうとする强い信念の渦卷きを感じ愕ろきと共に何故かホッとする氣持を覺えた。彼は、牧子の心に元氣づける適當な言葉を見出し得ない代りに、自分の半生についてかいつまんで聞かせた。

――母を捨て、十四歲で故鄉を飛び出して以來、彼女と同じ樣な東京での生活だつた。牛乳配達から運送店の小僧、見習職工等を渡り歩き、その間に夜學と獨學で、やつと專檢につゞいて、私大の專門部卒業證書だけ握つたが、一箇年近く就職の道がなく、辛じてありついたゴム會社はすぐ潰れてしまつた。

それ以來、いつの間にか本格的な失職組に陷つたのが彼の結末だつた。牧子は幾度か歎息を洩らしながらきいてゐた。露をふくんだ美しい彼女の瞳が、思ひなしか、一層隔てのない親しさを增して來るのが感じられた。「それは不幸なのは自分ばかりではないのだ――」と云ふ彼

女の内心が自然に示してゐる親しさの樣に思はれた。
「お互に滿洲まで來て失業しなければならないのは、よくよく不運なんですね、……しかし、人間覺悟さへきめてゐれば、その中いつかは道の開ける時もありますよ氣を落さずに頑張ることですね。」
栂は、最後の言葉に面映ゆいものを感じながら、そんな風にしか云へなかつた。そして、先刻の牧子の話をふと思ひ出して話を元に戻した。
「あなたは熟河は何處にゐられたのです?」
「はじめYと云ふ小さな町に、そして此方へ來る前はSにゐました。」
「Yに……では、あそこにあるオランダ人の教會があつたのをご存知ですか?」
「ダリーさんの教會でせう。知つてゐますわ、わたくしよく教會には參りましたもの……で、あなたも——」
「……」
栂は強くうなづいて見せた。思はず「まあ!」と無言の表情がとけ合つた。それは、落したものを二人で探しあてた時のよろこびと云つたものに似てゐた。
意外な發見が二人を元氣づけた。

「ダリーさんには隨分厄介になりましたよ、……それから、あそこにゐた少女をご存知ですか?」
「秀蘭さんでせう。」
牧子は何もかも知つてゐた。栂は、ゆくりなくも當時のことを想ひ浮べ、新たな昂奮にかられた。彼は自分がダリー氏夫妻と秀蘭に如何に世話になつたかを話さずにゐられなかつた。牧子は栂が秀蘭を救つたいきさつをきいて、
「もしも、あなたがゐらつしやらなかつたら秀蘭さんは——」
と女同志の感情をこめて云つた。
栂はそれには答へず、あの時もし秀蘭を自分が連れて來たら——と考へ、つゞいて、今はどうしてゐるだらう——と思ふのだつた。
二人は暫く無言で、すぎた日のことを、互の心の中に反芻してゐた。
栂はふと、ダリー氏の慈愛に滿ちた俤と一緒に、いつか氏の云つた「心の故郷」と云ふ言葉を思ひ浮べてゐた。そして、その「心の故郷」こそは、自分と同じ心を抱く友を得さへすれば、いつかは自分にも巡つて來るものと

考へてゐたことなど新たな感傷を以て思ひ起すのだつた。
「ダリーさんの生活は實に偉大ですね、あなたはどう思ひます?あの信仰と、あの信念……」
栂はそんな風に云つた。と、
「えゝ、あの方のご信念……故郷はいつも心の中に持つてゐるとおつしやる、あのご信念はほんとに貴いと思ひますわ。わたくしどもも……」
豫期しない牧子の言葉だつた。栂は何か虛をつかれたものゝ樣に狼狽して、
「……さうです、僕達も、ダリー氏の樣なあの根强い信念を持つてゐたら、どんな生活にだつて、耐えられると思ひますよ。」
と思はず大きい聲で云つた。それは牧子に云ふと同時に改めて自らの心に「お前の知己はそこにゐる」と誰かに云ひきかされてゐる別な言葉の樣な氣がした。

二、三日すぎた夕方。
栂は散歩から歸つて、寢ころびながら雜誌をよんでゐると、突然アパートの管理人が、牧子に電話だと告げに來た。間もなく電話から歸つて來た牧子は、何か思案してゐるらしかつたが、急に、
「栂さん、ご無禮して構ひません?」
と聲をかけた。
「どうぞ——今遊んでゐます。」
「ごめん下さい……」
いつもの如く、敷居際に手をついて云ふ牧子の樣子に栂は瞬間何か落付かないものを見てとつた。
「お願ひがあるんですけど——」
「何ですか、僕に出來ることなら——」
栂は起き上つて訊ねた。
「……大へん申しにくいんですけど、おあしを一圓ばかり拜借願へないでせうか?」
「それ位ならある筈です、大金だと困りますが……」
栂は机の抽出から裸のまゝの札をとり出して渡した。
だが、彼は次の瞬間牧子に電話の事情を聞いて、ふと漠然とした不安を抱いた。牧子は、履歷書を送つて置いた××興信所からハガキの通知が來、今朝一度面會に行つたのだつた。電話はそこの所長からで、牧子を採用に決定したが、も一度ゆつくり話して置きたいことがあるから今からすぐに來て呉れ——さう云ふのだつた。

牧子は、化粧をするために洗面所へ立ち、歸つて來ると、急いで外出の支度をするらしかつた。間もなく、また襖が開いて「では、行つて參ります」と挨拶する彼女を、栂は、漸く薄暗くなりかけた室の中に、何故か聲も立てずに見上げるばかりだつた。ねたましいほど美しく裝つた彼女の姿が、いつまでも眼について消えなかつた。

夜仕事をしないことにきめてゐる栂は、毎晩自炊のあと片づけを終ると、何もせず、暫く牧子と雜談して早く寢ることにきめてゐた。

その日は牧子が居ず、退屈な彼はいつもより早く床に入つたが、仲々ねつかれなかつた。と、……いつの間にねむつたのか、ウトウトとねむつてゐたらしかつた。何かのもの音にふと目をさました。突然隣室に泣聲が聞こえた。牧子が歸つて來たのだ。栂は、咽嗟に不吉な豫感が胸に來た。彼は思はず起き上り、電燈をつけて、帶を締め直し、急いで襖をあけた。

「どうしたんです?」

「……」

外出着のまゝ打伏した牧子は、顏を上げなかつた。途端におのゝいてゐる白い頸が、栂の寢起きの眼に痛みを感じさせた。彼は、しばらく無言で立つたまゝの自分を意識し、

「何かあつたんですか、僕に話して呉れませんか……」焦々とさう云つた。

牧子は、漸く氣をとり直し、顏を上げた。

「濟みません……」

さう云つただけだつたが、栂のゐるのを判然と意識すると、彼女の氣持は次第に落付いて來た。

栂の不安が、事實となつて現れたことを、牧子は告げた。——彼女を連れ出した興信所長と稱する男は、行きつけの料理屋らしい家に彼女を連れ込んだ。男が、どんな要求を持ち出すか、その時もう彼女の覺悟はきまつてゐた。執拗に迫つて來るその要求を、默つてぢつと聞いてゐた。そして、最後の一語でそれを手嚴しくはね返した。と、相手の態度は、俄然變つた。

「君は、自分の經歷をかくしてゐるんだらう、僞の履歷書で俺をだます氣なのか——」「そんな精神でまともな就職が出來ると思ふのか……」と重ねて投げつけられた毒舌に、彼女は完全に打ちのめされてしまつた。もの

も言はず其處を飛び出しはしたが、くやしさで一ぱいだつた。戰ひに敗れたくやしさではなく、自分の價値をあまりにもはつきりと知らされた悲しさだつた……。

「もうわたくし駄目だと思ひます……」

牧子は力なく云つて肩を落した。栂は、言ふべき言葉に迷つた。

「氣を落しては駄目です……それ位なこと男の常套手段ですよ、自信を持ちませう自信を——」

どうしても言葉で足りなく、思はず彼女の肩を叩いた牧子はやつと淋しい微笑を返した。

それから約四箇月。舊正月に近い滿洲は寒氣の頂上だつた。栂は、北滿のK氏から突然また手紙を受取つた。——先般は面倒至極なる御依頼致し、御骨折仲々大へんならんと恐縮致居候、時に當方に一寸した仕事の椅子見つかり候處貴兄に若し御希望有之候はゞ推薦可仕……。

さう云ふ書き出しで、××縣農事組合の書記の仕事が云つて來た。

勿論仕事の內容ははつきり分らなかつた。しかし、栂は「君を煩すには些か荷不足の感有之候も—」と、手紙にかゝれた文句を勿體なく思ひ、早速行くことに肚をきめた。幸ひ出版原稿の方は七分通り終つて居り、あとは定職についた暇々にでもすゝめられる自信があつた。

快諾の返事を出すと、折返し「スグコイ」と電報だつた。……

栂はスチームの利きの悪いウソ寒い部屋で、荷造りをしてゐた。と、蒲團づゝみを作るために、隣の部屋に入らうとし襖を開けると、漸く忘れかけてゐた牧子のことが再び想ひ出された。

牧子は、あの事件があつて間もなくこの部屋にはもうゐないのだつた。ハルピンにゐると云ふ知人を頼つて、彼女は此處を引き拂つたのだ。自分にどうする力もない栂は、その時ただ言葉で力づけるより外に道がなかつた。

「決してやけを起さないで、元氣でやつて下さい。」

最後にさう云ふと、

「えゝ、そのお言葉決して忘れませんわ……」

牧子はシミジミさう云つて別れた。

彼は物質的に窮迫してゐる彼女が、たとひ今再びもと

の生活に入つたとしても、決してとがめられないと思つた。たゞ、打ち見たところまだ回復し切つてゐないあの體が、痛まなければいゝが――と、そればかり案じられた。――

彼は、今そのことを想ひ出し、「どうしてゐるであらう?」さう思ふ心で一杯だつた。フト、窓際を見ると、牧子の殘していつた白粉の空瓶がころがつてゐた。栂はそれを取上げ、何氣なく匂を嗅いた。一瞬仄かに殘つてゐる香料の香が、むせぶ樣な風となつて、彼の感情をかき立てた。失つたものへの愛着が再び油然と湧き起こるのを感じた。

三

栂は、「もう一本!」と催促する島村の腕を抑えて、

「もう澤山、止さうよ」

と云ふのを、島村は、「まあ、まあ、折角六年振の奇遇ぢやないか……ぢや、あと本當に一本でおつもりにしよう」

と又酒を命じた。

先刻から島村の幾度か口に出した「奇遇」と云ふ言葉が、妙に心に絡んで仕方がなかつた。學校を出て丸る六年間、一度も音信さへしなかつた男同志が、突然この北滿の一隅で出會つたことは確かに奇遇に違ひなかつた。しかし、島村が一つの職業を持つて此處に來てゐる如く自分が仕事にありついて同じ街にやつて來たのに何の不思議があらう。――醉の廻つたせいか、栂は辻褄の合はないことを、そんな風に繰り返し思つてゐた。

島村は栂と同じ大學の夜學を出るとすぐ、つてがあつて滿洲の鐵道に就職した。その頃、日本はどつちを向いても不況の時代で、特別な關係を持たない限り就職は容易でなかつた。栂など、最も不幸な組だつた。卒業後一箇年もゴロゴロして、やつとありついたゴム會社に、僅か半年ゐて會社は潰れてしまつた。だから、島村の落付いた生活を思ふと、羨望を感じないわけにいかなかつた。

栂はK氏からの電報で、今朝この街についたばかりだつた。驛前でK氏のゐる省公署へ行くバスを待つてゐると、「突然栂君ぢやないか?」

と、肩を叩いたのが島村だつた。

栂はびつくりし、高價なシューバにくるまつた相手を暫くは人違ひでないかと眺めたが、島村と分ると、流石

に懷しく手を差しのべた。そして、夜の再會を約して島村と別れたのだつた。――

栂は、K氏に會つた結果、明日すぐ任地へ向けて出發することになつてゐた。こゝから又六十粁ばかり離れた田舍だつた。暫く街の燈にも遠ざかることを思ふと、酒の味にも何がなし感傷が湧くのだつた。

「君は踊はどうだ?」

島村は、最後の銚子が空になつたところで、起ち上ると一緒に云つた。

「踊?……ウン、俺は專ら見物の方だが、つき合つてもいゝよ。」

「さうか、ぢや暫くつき合つて貰ふかな」

その建物は變な建物だつた。おでん屋の奥にすぐホールがあり、階上はまた映畫館になつてゐた。せまい廊下を通り突當りに垂れ下つた緞帳をくぐると、シャンデリヤの別の世界があつた。栂は、北滿の果てにこんな場所のあるのが不思議な氣がした。時刻がまだ早いためか、ホールには僅か二、三組の人が踊つてゐるだけだつた。

栂が斷るのもきかず、島村はビールを注文した。踊れない栂は仕方なくコップを手にとり、人氣の疎らなガランとしてホールに、やけの樣にひゞくジャズの音を聞いてゐた。

島村は、先刻から眞白いドレスの小柄な女を抱いて、ブルースを踊つてゐた。

と、ジャズがバタと止んだ瞬間、栂はハッと、自らの眼を疑つた。その眼に映つたのは、意外にも打ち變つただが間違なく梶上牧子の顏だつた。せまいホールなので彼等の距離は眼と鼻の間だつた。牧子もすぐ栂を見つけ「オヤッ!」と云ふ感動を溢れる微笑と一緒に返して來た。

「まあ、どうして?……いつ此方へいらつしやいまして?」

彼女は小走りに寄つて來、栂の顏をまじまじと見て云つた。そのまなざしは、曾ての親愛と、それ故にどうしていいか分らない――と云つた一種悔恨の情に似たものを感じさせた。栂は、湧き起こる激情とたたかひながらそのこだわりを捨てさせるために、

「暫くでした……この頃お體の方は?」

と、それだけを案じ顧に云ひ、そして、今日此所へ來た顚末を、かいつまんでつけ足した。

「わたくし、ハルピンでもいけなくて、またこんなところへ來てしまひましたの、それでお手紙も差し上げにくくなりまして……」

さう云ふ牧子の氣持を思ふと、栂は又しても返事に窮した。

この悔恨がつゞく限り、彼女は永久に不幸なのだ――さう思ふあとから、何故かそこにのこるものが彼自身の責任の樣な氣さへしてならなかつた。

「ご無沙汰はお互ですよ……それよりお體ほんとに大丈夫ですか？……」

栂は、ちぐはぐな氣持をそのまゝ口に出して云つたが

「え、……長くはゐたくないつもりですけれど。」

と、半ばあきらめを含んだ答をきくと、牧子の現狀が何故か、以前より一層行詰つてゐるのではないかと云ふ氣がしてならなかつた。

「それで、いつ此方をお發ちになりますの？」

「明朝一番の汽車です、當分またお眼にかゝれないと思ひますが……」

「まあ、そんなにお急ぎですの――」

牧子は、一瞬悲し相な表情で云ひ、

「でも、また此方に出ていらつしやるでせう。」

と云ひ足した。栂は、恐らく出て來られないとは思ひながら、うなづいて見せた。

牧子がまた何か云ひかけようとするところへ、

「いよう、睦まじさうだね……君この人知つてるのか？」

先刻からつづけて踊つてゐた島村が、席に戻り、いきなり二人の間に立つた。

「え、一寸……」

牧子が仕方なく答えるのを覗んで、

「へえ、おやすくないですナ。」

と、島村は下卑た口調で云ひ、ソファにどかつと腰を下した。

牧子はそれをしほに、島村が引きとめるのを斷つて、栂には輕く會釋し、其處を離れた。そのまゝ席へは返らず、奥へ引込んでしまつた。栂は、喪服の樣な牧子の黑いドレスの裾が、衝立の蔭にかくれるまで入り亂れる思ひで見送つてゐた。機會は再び去つて行く――自らの無力を嘲るその樣な聲が、佗しくきこえる氣がした。

栂達は、間もなくホールを出た。島村は、下宿へ歸る

途々「あの女はあそこのナンバー・ワンでとても凄いんだぜ。」――と、如何にも女の評價に興味をもつ云ひ方で牧子の噂についてしやべつた。

栂は、毛皮のない外套の襟を立て、やつと深夜の寒氣に耐へながら、だまつて島村の言葉をきいてゐた。

島村の話によると、牧子はあの美貌と柔順に見える性格を武器に、常に數人の男を操り、それが大抵町の上層階級なので月々莫大な收入を得てゐる、最近彼女を巡つてある一部に烈しい爭奪が行はれてゐる。――さう云ふ風な噂だつた。

栂は、牧子の何故か淋しさうだつた表情を思ひ、はじめて理由が分つた氣がした。島村の云ふ彼女の噂は寧ろ反對であり、それ故にこそ、彼女は今又惱みにぶつかつてゐるのではないのか――さう思ふのだつたが殊更口をさしはさむのをさし控へた。

翌朝。島村はまだよくねむつてゐた。

栂は、音を立てない樣に身支度を濟し、突然厄介をかけて濟まなかつた、また會はう、元氣でやつて呉れ給へ」――と書き殘し驛に向つた。

發車に十分前だつた。鞄一つの外荷物もなく、開札を待つてゐると、

「栂さん！」

と呼び、いつの間に來たのか防寒靴を穿いた牧子が立つてゐた。寢不足のためか、美しい彼女の顔が、今朝は青白く艶がなかつた。

「早いのに。わざわざ濟みません、時間を云はなければよかつた……」

「まあ、そんないぢわるお仰るもんぢやありませんわ。」

彼女は、何故か固くなつてゐた。つとめて平靜を裝はうとして、言葉だけそんな風に云つてゐるその態度に、栂は、會つてない眞劍なものが含まれてゐるのを感じた彼は危くそれに應へる言葉を吐かうとして口をつぐむだ。

既に開札がはじまつて、滿人の乘客達が、ゾロゾロとその方へ列を作つて動いてゐた。新聞に傳へられてゐた勞働移民の團體らしく、皆思ひ思ひの大きい荷物を抱へ着ぶくれた綿襖の大きい體を、せまい開札口で持ち扱つてゐた。引率の監督者らしい男が、先に中へ入り、大きい聲で列を崩さぬ樣にと、怒鳴りちらしてゐる。朝が早

いのと、この方面に行く用事がないと見えて、日本人は梅の他に一人もなかつた。梅は、行列の一番あとに立つた。

「あちらにいらしたらぜひお手紙頂きたうございますわ……」

牧子は、梅の耳元に口を寄せてさう云ひ、彼の手を固く握つた。梅も思はずそれを握り返したが、彼女のさうした仕ぐさが、この場の空氣の中で少しも不自然でないのが不思議な氣がした。厚い皮の手套を通して感じられた指の圓みがもどかしく、いつまでも梅の感覺から去らなかつた。

その驛が始發になつてゐるのに、團體がのり込んだため、列車はもう一杯だつた。梅はやつと座席を見つけることが出來た。牧子は、梅の鞄をあけ、何か小箱の包をポケットから出してその中に入れながら、

「わたくし、ひよつとしたらお訪ねするかも知れませんわ、構はないでせう——」

と云つた。そのひゞきにも梅は冗談でないものを感じとり、

「構はないですとも、だけど一人で來られますか、おつかないですよ。」

とわざと輕く答へたが、

「大丈夫、わたくしどこへだつて一人で行けますわ。」

彼女は、決然とさう云ひ、

「では、ごきげんよう……」

と時間が迫つたので車から下りていつた。

梅はプリッヂに立ち、

「ありがたう、體をお大切に。」

と手をふつた。車が動き出し、次第に遠ざかる牧子の姿に、梅は、切なくも募つて來る強い愛情を覺えた。

彼は、座席に返つて、ふと鞄を開け、先刻牧子の入れて行つた包みを開くと、煙草の贈りものに、走り書した手紙が添へてあつた。

——わたくしは今危く岐路に立つてゐます、そのことで、あなたにご相談にのつて頂きたかつたのですが、お暇がなくて殘念でした、その中わたくしの方から一度お伺ひいたしたいと存じますが、お許し下さるでせうか？屹度、お許し下さることゝ信じますけれど……

梅は、讀み終つて愕然とした。彼女の期待に添ふ力の有無は別として、何故無理をしてでも彼女のために一日

の暇を作らなかつたか——と心は後悔で一ぱいだつた。同時に、強いと信じてゐた牧子の意志が、かうも脆く弱くなつたのかと思ふと、憐憫より先に、暗澹としたものが胸に迫つた。崩れては起ち上り、崩れては起ち上りして來た彼女——その牧子が弱音を吐くのはよくよくのことに違ひない。……

汽車は默々と雪の荒野を走つてゐた。梅は、哀れな牧子を、そして無力な自分をいたはる樣に、胸を抱き、暗然とした氣持でぢつと冷たい車窓を見つめてゐた。

四

Tは、北滿でも最も寒い地帶にあつた。

その日も零下三十度を既に越してゐた。凍てつく空氣の中を、城外の農事組合さして、蜿蜒と大車の列がつゞいてゐた。近くのもので十支里、遠くは六、七十支里の果てから、この特產搬出の荷馬車は、鈴を鳴らしながら凍つた雪道を集まつて來るのだつた。

組合事務所と云つても、木造の半ば潰れかゝつた支那家屋を僅かに改造した小舍だつた。

土かべと柱のすき間を、幾重もの紙張りで、やつと寒氣が防がれてゐた。三本のダルマ型ストーブが、絕えず音を立てて燃えてゐた。

半間巾の入口を入ると、中は思つたより廣く、むき出しの土間に、右隅が庶務と記帳、隣に計算、中央が監査の机だつた。そして左半分は糧棧店員の溜りになつてゐた。

梅は四人の滿人を相手に、庶務と計算をかけ持ちで主務の仕事を預り、縣から派遣された、たつた一人の日本人だつた。

牧子からはあれつ切り音沙汰がなかつた。何かいゝ道が拓けたのか、それとも、彼女はその道をやつぱり自分で拓く決心をしたのか？——さう思ふすぐあとから、梅はあの別れ際に彼女の呉れた手紙に對して自分の出した返事が何故か氣になつた。いつでも快く待つてゐると書き送りはしたが、所詮彼女に貸す自らの力のほどは知れてゐると思ひあきらめてゐる消極的な氣持は、かくしたつて彼女にさとられぬ筈はない、自分は遂に彼女に失望を與へてしまつたのであらうかと思ふのだつた。

牧子を想ふこの氣持は、時に堪へ切れぬ感情となつて梅の胸を苦しめた。しかし日がたつにつれ梅はこの感情からも次第に遠ざかつて行つた。日々の忙しさが凡てを

忘れさせ、孤獨ながら彼は一つの道に自らの生活をすゝめていつた。

ガラン、ガランと立合の鐘が鳴つた。ストーブにかたまつてゐた糧棧達が、ガヤガヤと戸外に流れ出て行つた午前の立合が始まるのだ。

栂は、つけかけの帳簿を措き、外套を着て外に出た。彼は立合の光景を見るのが好きだつた。買賣係の男が三人「元豆」「小麥」「高粱」と立札のある臺により、大聲を張り上げ糶りを開始した。糧棧達がそれに應じ喚き合つた。少し離れた場所に穀を積んだ荷馬車をひき、農民達は各々檢査場で受けた票を持つて、自分の糶りの番の來るのを待つてゐた。それ等は、馬も人も一樣に口のまわり、眼のまわり、眞白い氷の花をつけてゐた。

かうして、午前二時間、午後二時間の糶り取引は零下三十度の深雪の野天で行はれた。成立した取引は事務所の監査と計算に廻され、頭金の額が決定される。糧棧は買取つた穀を馬車のまゝ自己の院内に運ばせるのである。

この取引は從來の不當な賣倒しと、量目のごまかしを防ぐ目的で、農民保護のため縣が乘り出した仕事だつた從つて惡性糧棧にとつては少くとも有利な制度でなかつた。

栂はこの仕事に對し、深い興味を抱き、そこに起つて來る將來的な種々な問題に、既に研究をすゝめてゐた。

取引が終ると計算から廻される傳票で、整理の記帳は一しきり忙しかつた。彼は、午後の立合が始まる前にそれを片附けることにしてゐた。そのため晝食の時間さへ不足がちだつた。

「栂先生——これで完了です」

と、計算係の宋が廻して來た傳票の束を、栂は分類にかゝつてゐた。と、突然給仕の李少年が、

「お客樣だよ！」

と告げに來た。「誰だらう！」栂は、急いで外に出たが、思はず足をすくめた。ポストンバッグをさげた牧子が雪の中に立つてゐる。思はず「おゝ！」とその方へ走り、栂は感動で胸がつまつた。

「誰かと思つたら——よく來られましたね。」

「……」

その云ひ方に、不滿を含めた複雜な表情で、牧子は默つて笑ひを返して來た。と、その笑がすぐにいつもの牧

子のものに變つたのに安心して、

「……まさか本當にこんなところに來て下さるとは思はなかつた。」

栂は二樣の意味をこめて云つた。

「ご迷惑ではないでせうか？」

「決して……しかし、よく來られましたね、驛から此處まで歩いてですか？」

「えゝ、乘物何もないんですもの。」

「そいつは大へんでした。前以て知らして下さればゝ…」

栂は、改めて氷の花をつけた牧子のシューバの襟を見た。二粁半の雪道を思ひやつて云つた。「さう思つたんですけれど——」「何故か云ひにくさうに云ふ牧子を、栂は「ともかく中に入りませう。」と導いた。

土間のあちこちから二、三十人の眼が、一齊にサツと牧子に注がれた。栂は、ハツとしたが、すぐにその氣持を殺して板の腰かけを彼女にすゝめた。

栂は、あと二時間で、こゝが退けるからと告げ、彼女を待たすことにした。彼は、再び傳票に眼を移しながら心では「牧子は遂に來た！」と云ふ思ひがけぬ現實が何故か、不思議に思へてならなかつた。

牧子は、別な世界をのぞく興味で、この異樣な部屋の中を、珍らしげに眺め廻してゐた。間もなく午後の立合の始まる時刻だつた。

突然表の戸が開いた。丁度其の方へ視線をやつてゐた栂は、縣公署の監督官水田氏が入つて來たのを見た。暫く來なかつた監督官に、從事員達は一齊に立つて頭を下げた。栂も叮嚀に挨拶したが、水田氏は、栂と傍の牧子に鋭い一瞥を與れただけで、そのまゝ他の係員達の間を廻り栂の方には寄り付かなかつた。

栂は、咄嗟に不快な感情を抱いた。彼は牧子がこの部屋に居る限り、上役に紹介しないわけにいかないと思ひながら、何故かその氣になれなかつた。彼は、實を云へば最初からこの上役と相入れないものゝある自らを感じてゐた。まだ出來て間のない此處の組織や設備の不完全によつて起る支障を、凡て栂の落度として責めてる水田氏の態度に、常から不審を抱いてさへゐた。たゞ、水田氏が自分と同じK氏の後輩の一人であることを知つて居り敢て爭ひを避けてゐるに過ぎなかつた。

栂は、その日報告すべき用件を持つてゐた。だが、水田氏は遂に立合も見ずに、愴惶と姿を消してしまつた。

「今の方どなた？」
牧子が訊ねた。
「此處の監督をする偉い人ですよ。」
「まあ、わたくしご挨拶もしなかつたわ……」
「構はないですよ——それより、今立會と云ふものが始まりますからごらんに入れませう……」
丁度鐘が鳴つたので、栂は牧子を戸外に連れ出した。凍つた空氣をふるわせ、一しきり又喧騒がつゞいた。
「何だか分らないけれど、大へんなものですのね……」
牧子は栂を省みて、昂奮した口調で云つた。
「あれも飯を食ふための、一つの眞劍な戦ですよ。」
栂は、自分にも理由の分らぬそんな言葉を口にした。

夕方。城内の家に歸つて栂の手製の支那料理とも分らぬ怪しげな晩餐が終つた。食卓を片づけ、栂は牧子と漸く對峙の樣な姿勢になつた。薄暗いランプの燈を見つめ合つて、暫く手持ち無沙汰な沈默がつゞいた。何を話したらいゝのか——栂は迷つてゐると、
「栂さん……わたくし、お伺ひしたりしていけなかつたでせうか？」
突然牧子が云つた。
「どうしてそんなことおつしやるんです……」
「……」
牧子は悲しさうに眼を落し、暫くして云つた。
「もつと考へなければいけなかつた樣な氣がいたしますの……」
「それはどう云ふ意味なんです？」
「……」
牧子は再び無言の後、決心した樣に顔を上げた。
「……わたくし、もうあそこを辭めましたの、それで折入つてお願ひいたさうと思ひまして伺つたのですけれど……。」
「お止めになつたのですか……」
栂は、瞬間切迫したものを感じた。
「どうぞ……どんなことでも遠慮なくおつしやつて下さい。」
思はずさう云はずにはゐられなかつた。
「暫く、わたくしを預つて頂けないでせうか……ご迷惑は決しておかけしないつもりなんですけど。」
「こんな汚ない部屋にですか……あなたをおとめする

位少しも構ひませんが、あなたはそれで……」
今後どうしようと云ふのか——と訊ねようとして、栂は相手の言葉を待つた。牧子は、そこで、今日の決心までに至る一切について、次の樣に語つた。
——新京で栂と別れてからの生活は、不幸の連續でしかなかつた。彼女の求める健康な職業、そんなものは何處にも與へられなかつた。栂の云つた「決してやけを起さないで…」と云ふ言葉を忘れたわけではなかつた。しかし、結局行かねばならぬ道はきまつてゐた。哈爾濱から、更に北滿に、彼女は到頭こゝまで來た。しかし救つて呉れるものは何もなく、栂への手紙に書いた「危い岐路」と云ふのは、野心だけで云ひ寄つて來る男達のどれかの腕に、思ひ切つて自分を投げ出してしまはうかと、幾度思つたか知れない——と、そのことだつた。そして、ただ一つ殘された道が、何處かにある——さう思ふ心に浮んだのが栂の姿だつた。……
「ほんたうにご迷惑とは思ひますけれど、でも外にどこにも行くところがございません——五箇月間に殘つた僅かばかりの金を持つてゐます、これが無くなりましたら、またどこかへ……」
牧子は最後に悲しげに聲を落した。
「……」
栂は何も云へなかつた。たゞ默つてぢつときいてゐた肉親も故郷もない、しかも生活の支柱を求めてさ迷つてゐる哀れな女の姿を改めて見つめ、胸にひろがる感情をヂツと堪へた。そして、今こそ、彼女の自分に求めるものが何であるかゞ、はつきり分つた氣がした。
彼は堪へ切れぬ樣に聲をかけた。
「牧子さん……」
「はい。」
「……淋しいところですが いつまでもゐて下さい。」
「えゝ……」
思ひ餘つて何も云へなかつた。期せずしてかち合つた視線だけが、深い愛情で結び合つた。
栂は瞬間、潤んで來る牧子の美しい瞳をソッと避けた。

四、五日無事にすぎた。
栂は、朝、辨當を包んで貰つて勤めに出た。夕方雪道を踏んで歸つて來ると、もう食事の用意が出來てゐた。今まで亂雜だつた部屋の中は、キチンと片づき、オンド

ルの床はきれいに拭き清められてゐた。——彼はそんな日々がはじまつたことが、何か不思議な氣がした。自分にも説明し難い生氣と云つた樣なものが、生活の隅々までしみ渡る氣がするのも意外だつた。

が、その日の彼の足は別人の樣に重かつた。我が家の門口まで入るのが躊躇された。やつとノックしたが、その手にさへ力がなかつた。

「おかへりなさいまし——今日はお早いですのね」

牧子はいそいそとドアを開けた。と、すぐに

「おや！どうかなさいまして？」

敏感な彼女は、元氣のない栂の顏色をよみとつてしまつた。

「別にどうもありません。」

栂は、その場はさう答へたが、食事が終つて、

「ご氣分でもお惡いのぢやございませんの？」

牧子の心配さうな顏を見ると、いつまでも默つてゐるわけにいかなかつた。

「あなたを驚ろかしたくないと思つてゐたのですが」

「？……」

「實は、今日限り馘になつたのです。」

「えゝつ、どうしたわけでございますの？」

美しい眉がさつと曇つた。

「……上役と喧嘩をしてしまつたのです。」

「まあ！で、どうしてもお辭めにならなければなりませんの？」

「えゝ——」

「……」

牧子は、それ以上たづねることを憚る樣に、悄然と眼を伏せた。

栂の失職の原因は、監督官水田氏と日頃の不和にあつた。が、動機を與へたのは、今何も知らず栂の前にうな垂れてゐる牧子なのだつた。

縣公署から突然電話の呼出しがかゝつて、栂は事務の打合せだらうと行つて見ると水田氏はゐず、待つてゐたのは意外に省から出張で來てゐるK氏だつた。しかも寢耳に水の樣な辭職の勸告を受けたのだ。これが、自分に仕事の椅子を與へて呉れた人でなかつたら、簡單には引かなかつたも知れない。しかし、「これだけが仕事でもない、あとのことはまた考へよう」と云つて呉れるK氏に對して、栂は今更何も云へなかつた。

ただ、組合事務所に情婦を連れこんでゐた——と下劣な云ひ方でK氏に告げたと云ふ水田氏が、鬼の首でもとつた如く空嘯いてゐる樣を想像すると、栂は自分はどうあらうとも、牧子に濟まない氣がした。

「水田氏は何故直接私に辭めろと云つて呉れなかつたのかそのことが殘念だと思ひます。だが、今となつては凡て愚痴でしかありませんし、潔く暇を頂きませう。」

栂はK氏にそれだけを云ひ殘し、公署の門を出たのだつた。……

暫く沈默がつゞいたのち、

「折角あなたに來て頂いたのに、こんなことになつてしまつて……」

栂がさう云ふと、

「そんなこと致し方がございませんわ……二人でお仕事を探しませう、あなたのお仕事が見つかるまで、わくしどんなことでもいたします。」

牧子は突然さう云つて、栂の顏を見上げた。その、何かを強く決心した瞳にぶつかると、栂の心は瞬間ハッと行き詰つた。女を養ふ能力を失つた男の慘めさが、今更の如く感じられた。

仕事はさう容易に見つかる筈のものではない。と云つて、栂には女の氣持に甘へることは何故か恐ろしい氣がした。どうしても別れるべきだ——さう思ふあとから、それが出來るか——と冷たい自嘲に追ひたてられた。

然し栂は、ほどき切れない愛情の纏絆に縛られてゐる自分をはつきりと意識すると、却つて心は次第に靜まつて來た。自棄でもなく、あきらめでもなく、凡ては自然の流れに任すより他に道はないと思つて來るのだつた。

栂と牧子は、翌日の午後、もうハルピン行の汽車に乘つてゐた。まだ何處へ落付くと云ふあてもなかつた。

窓外は、よく晴れた雪野原だつた。ゴトン……ゴトン車輪のひゞきはのろかつた。しかし、急ぎの用をもたぬ者には却つて氣の落ちつく、快いひゞきだつた。

客は少く、栂達はゆつくり二人分の席を占めて向ひ合つてゐた。昨日までのことが、何か遠い昔のことの樣な氣がした。先刻から、二人は過ぎた日のことをとりとめもなく話し合つてゐた。想ひ出がふとダリー氏達のことにふれると牧子の顏は急に生々と輝いて見えた。

「栂さん……わたくし、ダリーさんのあの尊いご信念

を、いつまでも忘れないでゐたいと思ひますわ。」
彼女は突然、感慨深く云つた。それは曾て二人で話したことのある、「心の故郷」と云ふ、あの老牧師の信念を指してゐた。
栂は、もとより牧子の氣持が分らぬではなかつた。が眼の前の現實の暗さを思ふと、牧子ほどおだやかな氣持になれなかつた。自信のない明日をあてに、自分達は一體何處まで行かうと云ふのか――さう思ひ、ひとり慘めな氣持に沈んでゐた。暫くして、
「牧子さん。」
「……」
「あなたは内地へ歸りたいとは思ひませんか、もしそれなら……」
栂は、ふと思ひついて云ふと、
「いいえ、どうしてそんなことをおつしやいますの?」
牧子は不安げな視線で云つた。
「どうしてと云ふ理由もありませんが――」
「わたくし、あなたが滿洲にいらつしやる限り、いつまでもご一緒にゐさして頂きたいと思ひますわ……」
「……」
栂は、今更自分の云つた無駄な言葉を悔いた。
汽車は、××線地帶の高地を走つてゐた。緩やかな丘陵の起伏が、見渡す限り白皚々の積雪に埋もれ、何處までも果てしなくつゞいてゐた。平原と、丘とけじめのつかぬゆるやかな地形の波は、栂達に曾つて見たことのない大陸の廣いさを感じさせた。僅かな丘と丘の凹みに、立ち並ぶ樹々が枝一面に結晶した雪をつけ、照りそふ陽光の中に眞白く花咲いてゐた白樺の林が特に美しかつた。人家は何處にも見られない廣さだつた。雉の群がバタバタと飛び立つのが見えた。と思ふとすぐ線路の側を、のろしかの二匹連れが走り、また停つては列車を見送つてゐた。
「あれ何でのす?」
「のろしかと云つてこの邊に澤山ゐるのです。」
「飼つてありますの?」
「いや、みんな野生ですよ」
「まあ、まるで飼つてあるみたいですのね……」
「こんなところに住んで見たい氣が致しますわ」
牧子は、しきりに眼前の自然に心ひかれ感歎の聲を放つてゐた。栂は何も考へず、彼女の横顔をヂッと見守つてゐた。

流離

竹内正一

猶太系のエミグラント、ヤコブ・ファインの息子ジョーヂはいつものやうに隣りの寢室に臥てゐる父親の咳の音に眼を覺した。十二月も末になつて今日此頃は、日に一度朝の中に焚くペチカの薪だけでは、寢臺もなく客間の痛んだソファの上に毛皮外套一枚を被つてゐる體にはひやりとした冷たさを感じた。
父の咳が二度三度弱々しく苦しさうに續いた。白く透きとほつた骨ばかりの鷲のやうに尖つた顔が、ごそごそとベットから出て來るのももう間もない。古ぼけた時計が九時を打つと、滿人のコックが室の掃除を始め、卓子の上に食布を擴げる。さうすると近所に住んでゐる叔父がこつこつと階段を昇つてくる。呼鈴を押す、コックが扉を開ける、炊事場の叔父は入つて行く、朝の紅茶の支度をし、晝の食事の材料を買ふ金を渡すのだ。それが二十錢を越すことのないやうに、口喧しく計算をする。ジョーヂの一家は父が病氣なのと、商賣上の失敗ですつかり弱つてから、凡ての經濟をこの叔父が切り廻してゐた。やがてジョーヂが起き、父が起き、最後にジョーヂの姉のラーヤが起きる。
食卓の上にところどころ錆びた洋銀鍍金のサモワールが運ばれると、灰色の麵麭と紅茶のさゝやかな朝食が始まる。一家は吾れ先にと味のない黑麵麭を默々と頬ばつた。白い麵麭の方がうまいことは分つてゐるのだが、それでは皆が餘計食ふので、叔父は黑麵麭しか買はなかつた。それも遲くたればなるだけ端つこの固い部分を嚙らなければならないから急がしかつた。
朝食が濟んだつて何もすることはない一家である。室の思ひ思ひの片隅に凝つとかけてゐるだけだつた父と叔父は何かぼそぼそと呟いてゐる。ジョーヂは仕樣ことなしに麵麭を包んで來た古新聞の皺を伸ばして讀み出した。新聞には近づいてくる降誕祭のことなどで景氣づいてゐる。が猶太教徒であるこの一家にとつては、それは何の興味もないことだつた。然し二十一になるジョーヂには例へ他教徒の祭りであらうと、何であらうと單調な冷た

い近頃の生活を少しでも色彩づけることの出來ることであれば、興味を感じないではゐられなかつた。

「ラーヤ、御覽よ 今年の降誕祭は相當やるらしいぜ。」

ジョーヂが室の中を歩き廻つてゐた姉に言つた。

「降誕祭が何たい。毛皮外套一つ買ふ金もお父さんは呉れやしないだよ。友達のところへ招ばれても一體何を妾着て行けばいゝんだよ。」二十四になる姉はいらいらしさうに、その大きな體を搖りながら、ジョーヂの度の強い近眼鏡の前に、自分の顏を押しつけて言ふのだつた。ジョーヂは父親の方を氣兼しながら、

「仕方ないさ。」

「何が仕方ないんだよ。ママだつて叔父さんだつて金金つて、一年中金のことしきあ言つてないぢやないか、それに家はだんだん貧乏して行くんだよ。ママの生きてるときは、こんなことなんか無かつた。家にはピアノもあつたし、ボーイも三人もゐたんだよ。それが今はどうなの、道具はみんな失くなるし、私は一年この方一枚だつて着物も作つたことはないし、これが生活なのかい——みんな叔父さんや叔母さんが悪いんだ。みんな叔父さんや叔母さんが悪いんだ。」

そして終ひの方はヒステリックな叫聲になるのだつた

「喧しい、止さないか。」

父親が隅の方から怒鳴つた。叔父が立つて來て、ラーヤの肩を抑へて慰めるやうに抱いたのを、振放つて一層いきり立ち、泣聲でわめいた。

「さあ家の生活をもとに歸しておくれ、あんた達の一家がよつてたかつて、家の財産を無茶苦茶にして了つたぢやないか、こんなに困つてゐる家へ、まだみんなして晝食を毎日食ひにくるぢやないか……もうこんな家にはちつとだつてゐるのは厭だよ、妾は、天津の伯母さんのとこへ行くんだ。」

それから家中で一しきりどなり合つた末、ラーヤもジョーヂも外へ出かけて了つた。二人の出かけた後は、又ひつそりした中で、父親と叔父は又ぼそぼそと話してゐたが、軈て叔父も直ぐ近所にある自分の家へ歸つて行つた。父親が寢室に入つたと見えて、弱々しい咳の音がその方から聞えて來た。

ジョーヂは外へ出ても行くところもなかつたが、毎日の牢獄のやうな家の中に凝つとしてゐられなかつた。

流石に通りは年の暮に近く人通りは絶えることがなかつた。雪がうす黑く凍りついた街路に、冬の弱い日射しが、鈍い家の影を、葉の一つ二つ褐色にこびりついた街路樹の影を石甃の上に落してゐた。黑い油壇が風のまにまにころがつて行つた。

襟毛の擦り切れた毛皮外套の襟も立てずに行く、ジョーヂの耳は寒さに赤くなつてゐた。三年越しに着るたつた一枚のスコッチの洋服の膝は生地が薄くなつて、冬の風が遠慮なく吹き込んだ。懐中には四、五錢のバラ錢と二、三本の安壇草だけだつた。それでもジョーヂにとつてハルビンの街はよい都會だつた。香港、上海、天津、ハルビンと東洋の都會を廻に、北に彼等の一族は流れ流れて一生を終る宿命を持つてゐるのだ。世界こそ彼等の故郷だ。何處に悲しみがあらう、何處に淋しさがあらう金だけが彼等の力であり、希みでもあらう、併しその金さへ無いジョーヂではあるが、彼は只自分の若さを持つてゐた、それだけで今の彼には充分だつた。一圓の金があれば女と映畫を見るに足り、二圓の金があれば共にキタエスカヤで晝餐を囲るに足り、三圓あれば朝の三時四時までキヤバレーを樂しむに足りるのだつた。彼は何時の間にかある街の理髪店の前に出てゐた。扇風器の廻つてゐる硝窓の硝子越にちらつと手を揚げて合圖を送つた、十八になるチェッコ生れの彼女は、この店のマニキュア・ガールをしてゐた。

「ジョーヂ、お前何處へ行くの」栗色の髪をしたあまり綺麗でないこの娘は、その身裝もこんなところの女にしてはみすぼらしかつた。たゞ白いキャラコの上つぱりが僅かにそれを救つてゐた。それでも外から入つて來たジョーヂを見ると嬉しさうに笑つて聲をかけた。

「何處つたつて何時もの通りさ、行くとこなんてありあしないよ。」

「さつきお前の從兄のウイリアムが、友達と一緒にこの前を通つて行つたよ。新しい外套着て……お前相變らず仕事ないの。」

ジョーヂはちよつと淋しい苦笑をしながら兩手を擴げて見せるのだつた。ヘブライ語が出來、古代エヂプト文字が讀め、英語が自由に喋れても、このハルビンでは仕方もないことだつた。彼は商賣が何より嫌ひだつた、又、馬車屋にも、自動車の運轉手にもなれなかつた。さういふ性の男に適當な職業は、殊にこれが日本人以外のもの

であつては、この頃のハルビンにはちよつと有りつく譯にはいかないのだつた。

女は、憐れむやうに、

「どうせお金もないんだらう。今晩家へお出でよ。」

さう言つて、隱しから二、三十錢の銀貨を出して、ジョーヂの手に握らせて、ちよつと、伸び上つて男の耳のあたりに唇をつけるのだつた。

キタエスカヤの通りは、ぼろタクが寒さうに、幌を深々と下し、客馬車の駿者が、北極熊のやうに毛皮にくるまつて南に、北に走つてゐた。そして歩道には各國の人種がみな夫々に自分自身の用事を持つて歩いてゐた。ジョーヂはその中を寒さに赤くなつた耳を冷たい空氣にさらしながらモデルン・ホテルの方に足を向けた。そこのロビイは金の要らない休息所であり、彼等の仲間の待合所だつた。そして彼と同じやうに何をして生活するともなく一日を生活して居る者達、その中には何時の間にか知り合ひになつた日本人のHやYなどといふ男達もゐたYはジョーヂの顏を見ると、つかつかと近づいて來て、

「ハロウ、ジョーヂ昨日からお前を探してたんだよ。」

と、アメリカのトーキー張りの覺束ない英語で聲をかけた。

「Yさん、何?」

「例のサウンド・ボックスどうなつた。」

Yはこの一年程の間に四度職を得て、四度職を失つた何れもキタエスカヤに軒を並べる猶太人系の露人の雜貨商だつた。そのあるものはジョーヂの父親の紹介で入つた。併し何れもこの露西亞語も話せない、さうかと言つて商賣熱心でもない男に對して、一度は使つて見てもあまり優遇しようとはしなかつた それでなくてさへ、露人の店は北鐵の讓渡以來、洪水のやうに入り込んでくる日本人の勢力に押されて沒落の途を辿るのであつた。その挽回策として日本人の顧客を吸收しようとして何處の店も日本人の店員を入れて見るのだつたが、これは大した成績を擧げるに至らず、寧ろこういふ店に入る殆どが日本人でも食ひ詰め者が多く、始末に困るのが落だつた結局日本人を入れて日本人の客を引かうとするよりも、自分達が日本語を覺えた方が早手側しであることに氣がつくと、軈てさういつた日本人の店員は働いた何日分かの給料を極めて正確に日割で貰つて斷られるのだつた。Yも然ういつた一人だつた。そして彼は最後の店を追はれるとき拔目なく商賣物の蓄音器のサウンド・ボックスを一つくすねて來たのだつたが、他のものと違つて、そんなものは賣足が遠いので處分に困つてジョーヂに賴んだところ、何時まで經つても金が手に入らないのである。勿論その金は何時の間にかジョーヂの一晩のキャバレー代になつてゐたことはYは知らなかつた。

「あれまだ賣れないんだよ、ミスター・Y」

「困るな、俺一文もないんだぜ。」

「私も同じだよ。」

自分より一尺も低いYの肩を叩きながら、ジョーヂは笑つて云ふのだつた。

「何れにしても、君は困つてゐることは僕はよく知つてゐるんだから、何處か好い就職口を紹介してやらう、僕の父は好い店を澤山知つてるから、今日三時に家で會はふ。」

「俺はもうお前の言ふことは信用出來ないよ、ジョー、それよりサウンド・ボックスを返して呉れ、俺はヂ自分で賣るから。」

「そんなこと言つたつて、僕はこゝに持つてないぢやないか、あれは友達に賴んであるんだ。君が賣つたつて二圓か三圓にしかならないぜその友達なら十圓位ひで賣つてくれるんだよ。ミスターY、僕はこれからその友達のところへ行くから、三時に會つて結果を話すよ ぢや失敬。」

さう云つて早く逃げ出さないと、うるさいと思つたのかジョーヂはYの返事も待たずそこを離れた。

晝になつてジョーヂは家に歸つた。晝食は彼等の最も賑かな食事だつた。朝と晩は極く簡單に濟し、晝の食事だけに炊事場の爐に火を入れ、魚を煮てスープを作り肉を燒いた。

食事時になると、叔父夫婦と、その息子の何處かの學校教師をしてゐるといふウイリアムもやつて來た。毎日のことだつた。一斤十何錢かの肉はスープになり、燒肉になつた。馬鈴薯のフライが何時ものやうに並べられた。誰も餘り好きでない黑麵麭が大きな盤に盛られてあつた。みんなで分け合ふスープや肉の分量の多い少ないが何時も爭ひの種になつた。

姉のラーヤが泣き聲を立てゝ喚いた。父親が病身に似ない聲で怒鳴つた。

「お前達は勝手なことばかり言つて、そんなことは許

されないことだぞ、一人前の教育を受けさし、一人前の人間になつてながら、未だに自活出來ないぢやないか。親の家に住み親のものを食はして貰つてゐながら何といふことだ。」

そしてその子供達と父親は叔父が立ち上つて止めに入るまで果しなく言ひ爭ふのだつた。叔母とウイリアムはそんな騒ぎを目の前に見ながら默つて食事を濟ませ、默つて歸つて行つた。

實際この一家は食事も充分に攝れないやうな苦境に陷つてゐるのは事實であつた。その中で叔父一家のものが毎日晝食にやつて來るのはどう云ふ理由か分らなかつた寧ろ叔父夫婦の家は息子のウイリヤムが働いてゐるだけに生活は樂な筈だつた。それにも拘らずジョーヂ達の方から叔父の家に出かけて行くことは一度もなかつた。それでこの家に間借りしてゐる日本人の夫婦者が、その理由をジョーヂやラーヤに尋ねると決つて、

「私の家にはコックがゐます、けれど叔父さんの家にはコック居ません。」と答へた。そして尙、

「家のコック大へん上手です、給料毎月二十五圓です。」

などと、問はれないことまでも答へた。併しこの滿人のコックの言ふところに依れば始めの約束は十五圓で、現在では十二圓しか貰つてゐないと云ふことだつた。そしてそれさへも滿足には拂つて貰つてゐないらしいことは、時々、この年老いた滿人コックが、ジョーヂの父親と火の出るやうな口論を始めることで、それが露西亞語の解らない日本人の細君にも察しられるのであつた。

「ねえ、今日またやつてるのよ、そしたらね、終ひには、あの病氣でフラフラな父親がボーイを毆りつけるのボーイも負けてないで、親父を突きとばすし、大へんだつたわ。」

その細君は、亭主が夕方歸つてくると報告するのだつた。

「ほう、それでどうなつたい。」

亭主は玄關で外套を脱ぎながら訊いた。

「結局、あの叔父が出て來て、ボーイをなだめてゐたわ。何でも先月からこつち五圓とかしか貰つてゐないんだつて。」

「よくそれでこんな家に働いてゐるね。」

「だつてあんな老頭兒他へ行つても雇つてくれやしないでせう。」

「そりあ、然うだな。」

室も明けつぱなしで高聲で話してゐるのだが、日本語が相手には解らないのだから平氣なものだつた。それでもこちらの話の樣子でそのコック兼ボーイの件だと察しられることもあるらしく、そんな時は、ジョーヂやラーヤなどが間の惡さうに出て來て笑ひながら、

「今日お父さん、大へん怒りました。毎日ボーイに渡す炊事の金ボーイ誤間化します。お父さん怒ります。近い中にあのボーイ出します、もつと好いボーイ雇ひます。」

などといふのだつた。

實際さういふ爭ひが二、三回くり返された擧句の果にこの年老つたコックは、炊事場の爐の上にある穴倉のやうな寢床から、自分の荷物を布團で卷いて、この家を出て行つて了つた。そして夫れから何遍でも、給料の殘りを貰ひきるまで、出て來てジョーヂの父親と口汚くいがみ合ふのだつた。その後、ジョーヂの叔父が何處からか、次々と新しいコック兼ボーイを探して雇つてくるのだつたが、一月過ぎて、給料の滿足に貰えないことを知ると皆同じやうに表の方まで聞えるやうな口論の擧句、扉を叩きつけるやうに閉めて出て行くのだつた。嬶て、さういふコックも雇はなくなつた、といふよりもどうしても雇へなくなつて了つたらしかつた。パンと紅茶だけの日が續いた。時によると、室を貸してゐる日本人の夫婦の米や野菜が何時の間にか減ることがあつた。そんな日は細々とした火が爐の中に燃えてゐた。

如何に切りつめた生活をして見ても、一文の收入もない一家が日に日に苦しくなつて行くことは、誰の目にも明らかだつた。流石にパンと紅茶だけの晝食には、叔父の家族も出て來なくなつた。

斯ういふ窮迫した家の事情は、二十三になる娘のラーヤにとつては耐えられないことに違ひなかつた。新しい寢卷一枚買へない彼女は、何時もところどころ地の弱つてやぶけた室着を着て家中のものに當り散らしてゐた。

——ワーリヤチカ、變りはないかい、お前のお父さんの病氣は相變らずかね、ジョーヂはまだ哲學者のやうな顏をして遊んでゐるのかい。ヤコブ叔父さんは毎日ダニのやうにお前のお父さんに附纏つてゐるだらうと思ふ。あの牧師上りの叔父さんを妾は大嫌ひだ。ハルビンは今

一番寒いときだらう、こちらも寒いよ、併し妾も伯父さんも、お前と仲の善かつたイサベラもみんな元氣だから安心してお呉れ。商賣も順調に行つてゐる。妾はお前がこちらへ來れば好いと思ふ。こゝは歐洲人が多いからお前のピアノのお弟子だつて澤山あることと思ふ。妾の家族達はみんなお前の來ることを歡迎する。——

天津の伯母から來たこの手紙だつた。

「ジョーヂ御覽よ、伯母さんが妾に天津へ來いつてだよ。」

小躍りしながら彼女はその手紙を家中の誰かれなしに見せて廻つた。日本人の止宿人達の室まで持つて行つてたどたどしい日本語で說明して聞かせた。

「天津の伯母さんのところへ行くのはお前の勝手だがその旅費はお前が自分で作りなさい。俺にそんな金はないんだからね。」

「えゝ、作りますよ、誰がお父さんなんかに頼むものか、伯母さんに言つてやつたつて旅費ぐらひ送つてくれるよ。」

それから當分の間ラーヤは天津行きの支度に夢中だつた、食事時以外に彼女の姿は家になかつた。外から歸つてくるときは何かしら紙包みを抱えてゐた。安物の手提鞄だつたこともある。高踵(ハイヒール)の靴だつたこともあつた。またキタエスカヤの裁縫屋が出來上つた着物を持つて來たこともあつた。その金が何處から出てくるのか誰にも分らなかつた。そして豫定の出立が何日も何日も遲れて、たうとう出發の日が來た。父親も叔父もジョーヂも玄關先で抱き合つて別れの挨拶をした。叔母も同じやうに涙を拭きながら別れの言葉を交してゐた。驛まで叔父とジョーヂが見送りに行くことになつた。そしてところどころつぎはぎの皮鞄と二つ三つの紙箱を下げたジョーヂは往來に立つて姉の出てくるのを待ちながら近所の露人達にラーヤの天津行きを誇らしく話してゐた。そして軈てみんな馬車に乘つて行つて了つた。父親は輕く二つ三つ咳をつゞけながら、老人らしい涙の溜つた眼をハンケチで抑へ、人氣のない廣い室の中へ入つて行つた。

軈てハルビンの冬が去り春も何時の間にか深くなつてゐた。街を通る夕方など、家々の庭の薬馨や晩香玉の白い花の香がほのかに往來に漂ふのだつた。

ラーヤの居なくなつた家の中は、多くは父親獨りが、

何をするともなく、何を考へるともなげに、一日の大半を寢たり起きたりしてゐた。時々外人の習慣で、室の中をぐるぐると歩き廻つてゐるらしい靴音が、絨毯の敷いてない床に、こつこつと響いた。そして、天氣の好い晝過ぎなどは、杖をついて散歩に出かけた。普通のロシア人と宗教を異にするこの一家は日曜になつても教會へ行くことがなかつた。

ジョーヂは相變らず、晝と晩の食事時以外には、家には姿を見せなかつた。毎晩、十二時、一時過ぎになると歸つて來て呼鈴を押しても、仲々起きて來ない父親を待つて、長い間扉の外に待つてゐた。それでも父親が起きて來ない時は、夫婦者の日本人のどちらかが、仕方なしに起きて鍵を外してやらなければならなかつた。さうすると恐縮して、何遍も何遍も繰り返し、繰り返して、

「有難うございます、有難うございます。」

と、それだけを知つてゐる日本語で云つて、自分の室に、父親に氣取られないやうに足音を忍ばせて、引つこんで行つた。

「實際莫迦にしてるわ、親父起きてるくせに、扉開けに來ないのよ。もう開けてやらないから。」

と、いつもその日本人の若い妻君はジョーヂの父親の狡さに憤慨していふのだつた。が、また翌晩は同じやうに、開けてやらねばならなかつた。

「一體毎晩あんなに遲くまで、何處へ行くんだ、ジョーヂ」と、偶々この妻君の主人が、會社から歸つてゐる時など、ジョーヂが話しに來て、尋ねると、

「私、戀人のところへ行きました。」とか、「日本のダンス・ホールへ行きました。」とか、「昨夕は從兄のウイリヤム金ありましたからキャバレー行きました」とか言つてゐた。

「ダンス・ホールへ行つて踊るの。」

「いえ、私、只見てゐるだけです、日本のホール、見るだけなら金要りませんからね。それに日本のダンサー皆、外國人に親切ですからね。」

と、云つて、笑つてゐた。日本人の若い女は、殊にダンサーなどは、一體に外人に對して、殊の外に興味を持ち、好意を感じるらしいが、このハルビンくんだりまで流れて來てゐる女達でさへ、やはりさう云ふところがあるのであらうか。

然ういふ風に、金もなく、職業もなく、たゞふらふら

と、毎日遅くまで遊びまはつてゐる息子に對して、別に喧しく叱言を言ふでもなく放任してゐるところに、日本の家庭などと違つたところがあつた。然しそれが些細なことでも金錢上のことになると、この父親は息子を決して容赦しなかつた。聞きかねるやうな罵聲を擧げて、彼は、充分に利かない軀で杖を振り上げて、その息子を室の中で追ひ廻すのだつた。そして、「はあ、はあ。」と、苦しい息を休めて、椅子に腰を下すと、ジョーヂは、耐らないやうに、父親の肩を抱いて、

「パパ、パパ、そんなに無茶しちゃ駄目だよ。」

と、泣聲で宥めた。

その頃、この家に、二三日、急に人の出入が激しくなつた。見知らぬ支那人や露人が日に二度も三度も出入りしだした。その度に、ジョーヂの父親は怒鳴り、叔父は何にか相手を言ひくるめて歸した。昔の商賣上の負債の期限が來て、その金を拂はない爲めであるらしかつた。

間もなく朝から家のなかがごたごたしてゐると思ふと目ぼしい家具が、次々と街路に運び出された。父親の寢室からは大きな華麗な裝飾のついた寢臺が運び出され、客間からは、黑塗の食器棚や、カットグラスの食器類や、銀器などと、無造作に擔がれて行つた。そして、何時までも、白い、埃つぽい石塊道の往來に投げ出されてゐた。が、軈て晝過ぎ、二三人の債權者がついて何處かへその荷物を、車に積んで運んで行つた。

「お父さん、もうあの古い道具、みな嫌ひになりました。それで賣ります、また新しいの買ひます。」

ジョーヂは、日本人達の室まで來て、然ふ言つた。

成程、翌日になると、何處からか古びた、埃にまみれた、木製の寢臺を運び込み、錆びたナイフやホークの幾組かを、叔父は、臺所でごしごし磨いてゐた。去年の麥藁帽に、初夏の夕日が玻璃窓を透して、鈍く當り、蠅が祿な食料もない流しのあたりを、弱い羽音を立てゝ飛び廻つてゐた。

室のなかはがらんとして、大きな塗の剝げた卓子と、ところどころバネのこわれたソファと、固い木の椅子だけが、この家に殘つた凡ての財産だつた。

窓帷の白いレースも、あちらこちら穴のあいた、使ひものにならないやうなのしか殘つてゐなかつた。

秋の日が油のやうに照り、楡のが葉黃色く散る頃になると、この一家は、日に三度の麵麭を買ふ金にさへ困つて來たらしく、五錢、六錢の金を、その下宿人達から借りるのだつた。毎日屑屋を呼んで、僅かに殘つた食器類を一つ二つづゝ賣り拂つて、その日を凌いでゐた。穴の開いた洗面器とバケツだけが　臺所の爐の上にゴロンと轉がつてゐた。

日本人の夫婦者はあまりの慘めさに呆れて、そこそこに荷物を纏めて引越して行つて了つた。この後の室に殘つてゐた壞れた卓子電氣が窓框の上で埃をかむつてゐたのが、軈て二十錢で屑屋に賣られた。叔父はその金で、麵麭と一つかみ程の珈琲を買つて來た。

そんなことが有つてから間もなく、どうしたことか、ジョーヂの姿が丸で、家の中に見えなくなつた。三晩も四晩も歸つて來なくなつた。初めの中は平氣でゐた、父親も叔父も、終ひには流石に氣にかゝり出して、叔父はあちこちと探して歩いたが、皆目行方が知れなかつた。叔父や叔母も、その息子のウイリアムまで、ジョーヂの家に集つて毎日評議をしてゐた。が、どうにも行方が知れないことには問題が無かつた。

「ジョーヂ最近、商店街の變な日本人のところへ盛んに出入してたから、それでどうかしたんぢやないかな。」

と、最後に思出したやうに、ウイリアムが言つた。

「何、日本人、それは何だね。」

と、叔父が聞いた。

「いや、何でもね、その日本人は日本の貴族の親類で毎日白い着物を着て、座つて、その兩脇に、若い女が一人づつやはり白い着物を着て、サービスしてるんだつてそして色んな人間が來て、寺院へ行つたやうに最敬禮をするさうだ。何でも英語でも、露西亞語でも、その國の人間と同じやうに話すさうだ。それで、ジョーヂが行くと何時でも日本の歴史の話をして、歸りに二、三圓づつ金を呉れる人だつて、奴、そいで此頃は、ちよいちよいポケットから札を出して見せてたことがあつたよ。」

それは、何とも奇妙な話だつた。父親達には想像も出來なかつた。

「併し、それにしても歸つて來ないのは可怪しいぢやないかね。」

「だからさ、騙されて、どうかされてるんぢやないかと思ふんだがね。例へば、何かに利用されて、殺される

とか監禁されるとかしてゐるんぢやないかしら。」
そんなことも有るまいと思ひながらも、どうにも、本人がゐないことには、彼等にはさつぱり樣子が分らなかつた。それだけに一層、みんなは不安の募つてくるのを抑へることが出來なかつた。その次の日、叔父が何處からか、息せき切つて歸つて來た。
「兄さん、ジョーヂの居處が分つたよ。」
「何、分つた、さうかい。何處にゐたかい。」
と、父親は、外套を拔いでゐる、弟のところへ立ち上つて行つた。
「それが、困つたことになつたんだ。何でも警察につかまつてる相だよ。」
「えつ、警察に。」
「どうも、よく話が分らないんだが、ジョーヂが、日本人の巡査に連れられて行くところを見たものがあるんだ。」
「莫迦奴が、どうせ碌なことをしないんだろ。」
父親は吐出すやうに言つて、卓子の前に腰を下した。
それから　毎日、叔父は警察へ行つても話が分らなかつた。そして、ジョーヂに會ふことも出來なかつた。
「兎も角お前が父親でないのなら、父親を連れて來いお前ぢや話は出來ん。何、病氣で臥てゐる。それなら癒つてからで好い。」
と、この滿洲國警察の日本人の係官は、とりつく島もなかつた。そして、此の街に住む外國の移民（エミグラント）にとつては何よりも警察が一番こはかつた。叔父はすごすごと歸つてくるより仕方がないのだつた。
結局、その翌日父親は、衰弱した體でとぼとぼ警察まで出かけて行つた、が、矢張り息子には會はして貰へなかつた。
「お前の息子は取調中だから會はす譯には行かん。當分こちらへ留めて置くんだ。」
「併し旦那、家の倅は仕事こそ何もせんで、至つて怠け者でござゐますが、惡いことの出來るやうな奴ぢやござゐませんから。」
「そんなことは分らん。だから今調べてゐるんだ。惡いことさへしてなけりや、直ぐ釋放してやるよ。」
それきり、その係官は傍を向いて仕事を仕出した。
父親は又、杖をついてとぼとぼと歸つた——ジョーヂの莫迦が、何といふ奴だ、この病氣の俺をこんなところまで引つぱり出すやうなことをして——二十錢も三十錢も乘り物代を使はせやがつて——彼は腹の中で、今日の損害を計算しながら、ぶつぶつと呟いた。——一體どうなるんだらう。若し、このお蔭でみんなハルビンから退去命令でも出たら——彼は何よりそれを恐れてゐた。この病氣の軀で、この貧困のなかで何處へ行けやうか、と、考へた。
家へ歸ると、叔父の一家の者達が揃つて待つてゐた。
「兄さん、どうだつた。」
叔父が聞いた。彼は默つて手を擴げた。そして帽子を掛けながら、激しく咳をした。
不安な日が續いた。父親にも叔父にもどうすることも出來なかつた。其の後のジョーヂの消息は更に知れなかつた。刑事らしい日本人が、滿人の巡査を二人連れて、家宅捜索にやつて來た。勿論、何も出て來なかつた。併しその爲めに、ジョーヂが何か思想的な嫌疑で留められてゐることが解つた。
「冗談ぢやない、あの莫迦者が、そんな大それた考へなんか持つてるものぢやない。」
父親は刑事が何物も得ず歸ると、直ぐさう言つた。
「大體あれは少し饒舌りすぎるんだ。」
と、叔父は言つた。
とに角、それで、若しかするとハルビンから退去を命ぜられるかも知れないといふ懸念は、愈々強くなつて來たのだつた。
軈てジョーヂが未決に移されたといふことが解つた。併しもう二度と父親も叔父も警察に行かうとしなかつた。
さうして、ハルビンの街に、又、冬の風が吹き初めるころジョーヂは赦されて歸つて來た。一應の嫌疑は晴れたのだつた。
「ジョーヂ。」
扉を開けて入つて來た、ジョーヂを見ると父親は、よろめくやう抱きついた。二人は暫く抱き合つた儘ほろほろ涙を流した。
「お父さん。」
ジョーヂも然う言つたきり、顏をくしやくしやにした。
「一體どうしたんだ。」
父親は、氣をとり直して訊いた。
「それが解らないんだよ。日本のダンス・ホールで遊ん

でゐるところを捕まつたんだが、何故か分らないんだよ。そして白狀しろ白狀しろつてさんざ虐められたんだよ。」

さう言つて、ジョーヂは洋袴を捲いて傷ついた臑を出して見せた。

「お前が惡いんだ。仕事もせずに毎日遊んでゐる罰だよ。お前のやうな伜を持つた俺はどんなに不幸なんだ。」

それから父親は、何時までもぼそぼそと呟いてゐた。ジョーヂは疲れ切つた軀を、壞れたソファの上に仰向けに倒れて凝つと眼を潰つてゐた。——俺のどこが惡いんだ。成程俺には仕事がない。それは何も俺が惡いんぢやない、そんな世の中なんだ。その爲めに、俺は、譯も分らず捕へられて、非道い目に會はされたんだ、いくら言はれても、俺に白狀することなんて有りはしないんだ。それだのに、あの日本人の刑事だつて、お父さんだつて叔父さんだつて、俺の言ふことなどどうせ聞いて呉れやしないんだ。——彼は眼の隅から糸のやうにじみ出る涙を拭はふともせずに、凝つとしてゐた。

そして、ジョーヂは一週間以内の間にハルビンを立退かなければならなかつた。その日彼は、その姉のラーヤの三分の一もない小さな荷物を提げて、上海に向つて立つて行つた。叔父だけが驛まで彼を見送つて行つた。無事に汽車に乘つてこの街を離れるのを見屆ける爲めに。

秋の末になると、一人殘つた日本人の下宿人も出て了つたので、愈々この中は父親一人きりになつて了つた。新しい下宿人も來なかつた。近所では冬の支度に餘念なく、窓には綿を置き、目張りのバテを詰め始めた。ペチカに焚く薪を運ぶ馬車が、日に日に家の前を通つて行つた。

そして、軈て、父親もこの家を見捨てなければならない時がやつて來た。

僅かばかり殘つた古家具を賣拂ふまでは、この家を出ることさへ出來なかつた。層屋が二、三日通つて來た。その擧句十五、六圓の金が出來た。賣れ殘つた荷物は小さな荷車に一ぱい積み込まれた。

父親と叔父は、車の後から歩いて行つた。うすら寒い晝下りの街外れの石塊を敷きつめた惡い道に、車はガタガタと搖れた。その度に、ところどころ琺瑯の剝けた洗面器と湯沸し(サモワール)が、本箱の中でぶつつかつて、ガラガラと音を立てながら遠ざかつて行つた。

短歌

事變は進む

甲斐水棹

敵前上陸指揮せし君がまなざしの斯くしも澄みておほく語らず

發ちし兵をいづべと知らぬ曉にさとりの如く沁むおもひあり

第二乙種のためなき身に雜嚢をかろきがごとく立ちし思ひいづ

山上にて

斜面(なぞへ)より谷へひろがる文化むら初夏の靜寂の時ゆきてをり

蒼湖のここに寄せひきし想ひはるけく今みるは一山こえし遠海

栗原大尉

富田　充

栗原大尉は昭和十二年八月十五日〇〇飛行場を出發、悪天候を冒して連絡偵察飛行を敢行密雲とざす山岳地帶を難航、又難航敵陣深く突入し、敵彈十數彈を受けて、重大任務遂行の一歩手前にて遂に大行山脈に墜落、壯烈な戦死を遂ぐ。

雲とざす山の幾尾根飛翔して糧秣投下せむ坂田隊はいづち

坂田隊の在處(ありど)もとむる機の下に山の起伏(おきふし)ただ動くのみ

連絡のつとめむなしきいまはには敵陣ふかく機を進めたまひき

敵彈を翼にうけてなほし行かむ機上に君の肚すはりたる

横峰村(わうほうそん)に晴間の陽光あはあはし君がみ命は墜ちたまひけり

離心抄

荒川石楠花

松かげのひそけさに沁む山蟻の健やかなるは冴え居つつ見ぬ

搖られつつ容(かたち)たもてる牡丹花の白ひといろは陽を吐きてをり

（寶塚牧場にて二首）

雨霧に壓さるる丘の閑けさに緊まるこゝろは切なくなりぬ

（中央公園にて）

夕日を搖りつつゐる窓際の黄葉葉むらが身を傷ましむ

（病みて二首）

寂しさのつのりゆくのを危ぶみて病む枕邊に紅き花挿す

旅順

伊東千鶴子

旅順白玉山頂にて南京陷落を祝ふ

大君にこの慶びをおくりまつる故國遠く住むみ民集ひて

支那事變戰捷展に於ける戰死者の寫眞

きかぬ氣のまなざしもありやさしげのひとみもありて皆死せるなり

雨雲り低き夜空に無電台のモールス信號せはしく瞬く

何時しかに小米櫻の咲きさびて萌えし芝生にひそかに散れる

夕明き窓邊に寄りて指先の仙人掌の棘を拔きあぐみつつ

年若き僧

香川末光

年若き僧は桂の鏡にてそしらぬ風に顏うつしたり

晝火事のけむれる空をひとつらのかり渡りゆく高く少さく

街の音とどかぬ家に移り來てもの忘れせし如く寢に就く

先住者が庭樹にかけし物干をそのまま妻は利用して居り

電車より降りし松葉杖の青年は支那街の角を露路へまがりぬ

雨と滿人

新井重美

雨降るを空を見上ぐる滿人の佇ちつくしつゝ大氣冷えくる

馬車の荷の上にうづくまり來るニーヤ雨は氷雨にならんとぞする

音たてゝ氷雨つのるを踞る洋車曳等は慣れてゐねむる

仕方なしとせるにぞ雨に濡れにつゝ袰襖裙（ギアーオー）ながう歩む満人

氷雨ふるなかに群れつゝ苦力等のいつかは仕事ありとして佇てる

激流渡舟

相川澪

逆風に波のうねりのさだめなくはがゆがり漕げと舟の進まず

橋脚に裂け散る水の水勢に吸はれゆくなりこぎにこげども

波しぶき擢のしぶきにぬれしよぼつ吾子等底板にしがみうつぶす

ぐるりつと舟廻はされて流るゝに今は水勢にまかして漕がず

本流を舟は避けたり擢おさめ今にして抱く泣く己が子を

苦力

宮島正美

春なれや家財道具と移動する苦力はむしろたのしきごとし

糸瓜の花陽に照る見れば午(ひる)近し海へ行く子が聲あげてをり

たまきはる命まがなし瓣膜症の子が心臓は鈍くうごける

暑き陽のさせる朝窓に襤褸買が甜瓜(まくは)の種を吐きてものいふ

苦力らはざわめき通れ新聞に便衣の兵を憎む朝なり

吾　兒

欅　田　正　東

吾兒連れて妻を見舞へば病室の玻璃戸の外に雪降りしきる

妻の居ぬ家に雇ひし家政婦に吾兒は漸く馴れそめにけり

母の居ぬ家さびしきか歸りくる我にまつはり吾兒は離れず

スチームの音を聞きつゝ宵早く蒲團を着せて兒を寢ねしめぬ

朝床に目覺めし吾兒はかたはらに母のあらぬを淋しめるらし

北支事變抄

永原いね子

燈火管制幾夜つゞきて小さき灯を守るがごとく親子相寄る

消燈のさいれん響き渡り關東州の暗空にしるく星は光れり

梅雨空のくもりものうき幾日を足の痛みにわがふれてゐつ

冬日いま落つる曠野の空の下ひとところ赤し崩えし岩山

北大營の赤土原に照る日光戰ひの跡もしのばれにけり

俳句

南嶺

三溝沙美

南嶺

廢砲に座し南風に對ひをり

松山臺

樹々を洩れ網戸を透し西日あり

旅順

芝に寢ね菊みるすさびよからずや

新京

けふの雪長春知らぬ人に降る

○

大本營立ちたる巨き歳暮るゝ

新京

三木朱城

春聯の扉に大雪となりにけり

羅や老ひさらばさらばと正夫人

向日葵や埃まみれの洋燈(ランプ)賣る

高粱列に大きな雲のかぶさりぬ

滿洲の日々好日や高粱熟るゝ

氷山

高山峻峰

氷山を射る黎明の朱(あけ)一線

早天の茜氷山浮游して

光り合ふ氷山に藍漂渺

青み屹(た)つ氷山に落暉慌だし

月光は水なり氷山死の如き

不毛の地

久米幸叢

山一つなき野焼けゐて人をらず

興安の暮れはじめたる露臺かな

秋耕や蒙古に近き不毛の地

朝寒や靄立ちのぼる不毛の地

駱駝率(ゐ)て雪降る白音太來を過ぐ

奉天

石原沙人

春大風やみぬ暮れゐる塀のもと

日永くなりぬ高空(たかぞら)は煙にごさず

八重葎(やえもぐら)夜を地いきれのなほこむる

冬木かげ石人(せきじん)南向きて立つ

包子(パオツ)の湯氣道の凍りを忘れしむ

月

金子麒麟草

薄氷となりゆく河の月明り

水冷し暮るゝに冴えて煙草の火（松花江）

楡の垣形つくりて月夜なり（哈爾濱）

某任務を帶びて水害地を旅す

秋霖雨行けるとこまでといふ汽車に

洪水（みづ）崩（く）えにおどろく汽車の窓へ月

春耕

江川三昧

春耕の畝あつまれるはるかかな

春水と言へど汚し水きぬた

春泥や芥の如く家鴨臥す

春服も耳環の石もうすみどり

紐胸に結んで黄衣さはやかに

柳絮

森脇襄治

アカシヤの蘖木花をもつあはれ

州外の木立より來る柳絮かな

白楊の小さき蔭に晝寢人

夜業の灯洩れゐて人ら聲たてず

手あぐれば馬車集ひ寄る吹雪かな

春聯

靑山靜丘

春聯の低き扉口に燭を置く

目貼剝ぐ窓に海の香流れ來る

高粱の中に河あり帆を揚ぐる

鶉とび明けてきいろき野のひかり

凍海を遠く牡蠣採り氷上に

隨筆

蔦の實

覓　太郎

割箸程に切つた蔦の芽を家の周りに挿してから、やがて十二、三年にもならうか。蔦はどんどん伸びてすつかり壁を覆ひ、ともすれば屋根までも匍ひ上らうとするのだが、さうなつても鬱陶しいし、それに、緣起を擔ぐ人が出て來たり、建築の爲めによくないなどと敎へて吳れる人も現れたりするので、粗石を積んで腰の方だけ匍はせて、それより上に芽が伸びると絕えず心を止めることにしてゐる

緣起は兎も角、果して建築にまで悪いかどうかは聊か私には疑問であるけれども、さう言へば二、三年前タイムスだつたかで、英國の名城が殆ど皆餘りに蔦にからまれ過ぎて建築物保存上有害な爲め、風致の點からは無論遺憾ではあるが、全部之を取除くことになり、その爲めに何萬と言ふ豫算を必要とするに至つた、とか書いてあつたのを讀んだ記憶があるから、やつぱり匍はさぬ方が好いのだらう。それならいつそ一と思ひに引拔いて了へば好いやうなものゝ、春先の新芽を思ふと、然しそんな蠻行は到底出來るものでない。

春も四月半ばに進めば、あの節くれ立つて乾からびた莖のあちこちから赤い艶々しい芽を吹く。さなきだに永い冬から解放された喜びに溢れてゐる矢先だけに、この蔦の若芽に限りなき愛着を覺えるのは決して私許りではあるまい。この油を浴びたやうな艶は若葉の頃までも殘つて、初夏の生氣に充ちた周圍の空氣に一段と精彩を與へるのだが、この頃になると雨の尠い滿洲では、ともすれば埃に覆はれてむさ苦しい感じを與へる。それに、悪いことにはよく毛虫がつく。

だから私は蔦なら今言つた若芽の頃か、さもなくばいつそ冬の姿を取る。冬には無論葉は無いが、晩秋に黑く紫に實つた野葡萄程の實は、北風にも飛ばされず、しつかりと莖に着いてゐて、邊りの枯れきつたやうな裸樹の刺々しさの中に一點「生」のアクセントを打つ。

私が蔦の實を愛する理由は今一つある。それは、この實ゆゑに吾家の庭が絕えず可憐な小鳥の訪れを受けるからである。南側の壁など終日彼等の賑かな、然しつまし

い、饗筵が張られてゐる。

この一と月許りは、これらの小鳥に混つて可成り大きな鵜が一羽毎日やつて來る。連日の事とて何時の間にか家内中の誰かゞ朝一番にその姿を見附けると、「又來てるよ」と報せ合ふ習になつて了つた。だから、どうかして鵜が姿を見せぬ日は、家中何となく物足らぬ氣持の裡に夜を迎へる。それにつけても、蔦の實も大分殘り少なくなつたが、今に食べ盡して了つたら小鳥どももやつて來なくなるのだらうと心細くなり始めた。

處が數日前の夕方、勤めから歸つて見ると一人の支那人が壁にくつついて何か採つてゐるではないか。よく見れば蔦の實泥棒である。梯子持參で高い處まで手を伸ばしてゐる。早速捉へて麻袋を檢べて見ると凡そ袋に半分程も摘み溜めてゐる。何やら自分の親父とかが病氣でそれにこの實が効くものだから採つたのだ、などと當然のことのやうな口振である。この連中の言ふことなど眞に受けられるものではない。どうせ奥町か小岡子あたりの藥屋に持込んで、何枚かの銅子兒に換へるつもりだらう私はいきなり中味を花壇のわきに明けて、空の麻袋を投げつけてやつたら、いかにも不服らしく、成程此處で採つた分はお返しもしようが、大部分はよその家で採つたものだからそれまで取上げる法はない、と言ふのである正に盜人にも三分の理ある次第だが、勵聲一番、兎も角も追返して了つた。それでなくとも殘り少なくなつてゐた蔦の實は、お蔭で殆ど採り盡されたらしく、その後は可憐な來訪者の姿は見られず、それにつけても、よそで採つた分は返せとまで言つたあの支那人の徹底した圖々しさを思ひ返しては腹を立てたものである。

處が二、三日前から再び例の鵜が姿を見せ始めた。注意してゐると、あの支那人から取上げて庭の片隅に明けた蔦の實の在處を探し當てたものと見えて、その邊を飛び廻つては實をつゝいてゐる。實はまだ摺鉢を伏せた程あるから春まで勿論殘つてゐようし、從つて、鵜もそれまでは、惡童の空氣銃にでも擊たれぬ限り毎日やつて來て吳れるに相違ない。盜んで來たよその蔦の實を捲上げそれを鵜に食べさせて愉んでゐるのも妙な趣味だが、自然に惠まれぬ多の滿洲に暮す者にとつては、或はこれ位のことは許されても好くはあるまいか、などと問はれもせぬうちから獨り言ひ譯を考へてゐる處を見ると、案外罪のないものだなと吾乍ら微笑ましくなる。

喜怒哀樂帳

橋本八五郎

讀書

本が讀みたくなり、讀まなくても買つて見たくなる時は内に顧みると、健康狀態の好い時である。健康狀態が面白くなくて、讀書などに氣が向かなくなると、子供の復習の相手にでも成つてやらうかと、常にも似ず考へつくことがある。若し私が或る程度に不健康で、同時に、勤めを休むまでに至らぬ程度の健康狀態なら、子供の學習相手に成つて居るかも知れない。それは、外出するには何等の藝を持合はさぬ、家居がちな私にとつて、暇潰しの一の方法である。若しさうだつたら子供も喜び、家人も喜ぶかも知れないが、間もなく健康が回復して來ると、讀書に、已一人の愉快を貪りたくなつて、家族たちには、申譯ない狀態を現出する。昔から讀書の樂しみを云ふものは、相手を要せず費用が少く、時所の制もいと、自畫自讃するが、その相手を要せず、といふ所が世間的に見れば、其のまゝ一の缺點で、社會的には、世間を狹く渡り、家庭的には、よき父、よき主人たることを難くする。して見ると、健康は私を幸福にして居るとは、簡單に云へなくもなる。

健康であらうが、家族の相手をすればいゝのだが、健康で、讀書の興味が湧くのに、それを抑へて、家族達の爲に犧牲（？）となることは、遂に出來ることではない私は矢張り我かまゝ者なのであらうか。

例へば亂暴な仕打ちをする人、外出がちで、家庭を構はない人、更に進んで酒色に身を持ち崩す人など、よからぬ主人として排斥される條件は多々あるが、それらに共通する一の條件は、自己本位的で、我かまゝ一杯に自己の興味を押し通さうとする點にあらう。讀書を樂しむなど云つても、此の一點を外にしては居ないので、興味本位の、自己中心主義である。而も、之を酒色に耽る者などと同列に置かぬのは、別に理由の存するに依るとしても、この家族を無視する自己本位な生活に思ひ及べば讀書人も、一人前の顔はして居られないかと思ふ

家庭生活を中心に考へれば、若い時代に、なまじ讀書の習慣など造つて置かぬがいゝといふことになる。

讀書に就いて思ふことは度々ある。其の思ふことの內容も複雜であるが、今は書くせぬ。

師　弟

珍しい婦人客の訪問を受けた。この雨季中のことで、其の日は殊によく降つた日であつたが、玄關の受附から某といふ婦人の面會人があることを、事務室の電話へ通じて來た。

私に婦人の面會といふことは、周圍の人にも奇異な位であるのに、其の名は曾て記憶になかつた。私に面會を求める人などに、別に特殊な人がある譯はないので、いつも簡單に逢ふことにして居るが、其の日は、念の爲にその電話で婦人と話して見た。

「私はまだ旦那樣にお目にかかりませんが、實は、私は先生の敎へ子の某の家內で御座います、……○○で先生に御世話に成りました××の家內で御座います。實は今日は先生に一寸、お願ひが御座いまして……」

電話での土地○○は、成程私の子供を敎へたことのある地名であるが、××といふ名は、どうしても頭に浮ばぬ。それでも、多少回想癖のある私には、○○といふ地名は忘れられぬ名であり　婦人の話ぶりが、相當筋が通つて居たので「それでは　そこに居て下さい、私が出掛けます」と電話を切つた。

玄關へ降りる階段の途中から　受附に居る婦人を見て直ぐ私は事務室へ通さなくてよかつたと思つた。私が自身玄關へ出たのは、馴れぬ事務室へ來る婦人に對するいたはりからであつたが、この風躰で、部屋へ來られたら周圍の人に對して氣がねが出來たであらうと思つた。が私はのろい、それで居て、まだ「お願ひ……」には氣付かなかつたのである。

婦人は、「早速で御座いますが……」と斷つて、「××はもと○○の――町で、△△さんのお隣りに居ました。先生の東京へいらつしやる迄お世話に成つたと申して居ます、隨分亂暴者で、先生には特別に御厄介に成りましたさうで……といふあたり、嘘とは思へぬが、其の名はまだ頭に浮ばぬ。試にその同級生の名を云はせて見ると、一二知つて居るのがあつて、何れも私の記憶にある。××の名前と其の郷里とを尋ね、その父の職業をも

尋ねたがそれでも私には思出せぬ。

「……で主人は長く病氣をして居ます、今は西崗子の先の支那部落に居ますが、お恥しい次第で、どうか誠に相濟みませんが、お志を、××がさう申して來いといひますので……」

婦人の口調は、誠に相濟まなさうでもないが、さう繕ろつて居るとも見えぬ。自らカード階級たることを云つて、昨年の暮、方面委員の厄介になつたことを云つたから其の委員の名を尋ねたら、躊躇なく卽答したのも、虛構とは思へなかつた。

私の○○時代は、今から二十年と何年か前のことだ。それ以來一度の消息もなく、曾て頭にない人の上だけれども此の雨の中に來て、斯く實狀を訴へられて見れば、殊に方面委員も手を差しのべて居るとすれば、同情すべき境遇なのは明らかだ。其の氏名人物が分り、せめて、私のこゝに勸めて居ることをどうして知つて居るのかでも分れば、何等かの親しみを感ずるのであらうが、それすらも分らないのだけれど、其の日持つて居ただけの紙幣は全部やつてしまつた。

自分の部屋に歸つてから、○○の小學校に居た社內の知人に電話をかけたが、××といふのは覺えてない。同窓だから、大連に居ればいつか分るだらうに、全く知らぬといふ。今度は私の知つて居る方面委員に、××の方面を受持つ委員を尋ねたら、其の名は　婦人の答へたところと一致して居て、更に××はカードに登錄してあることも知らせて呉れた。今迄に判斷したところでは、先づだまされたのではないことになる。だまされたので無いとすれば私は幾分か、人を助けたといふことになる。

私はこの問合せの電話を聞いて居た周圍の人々に、この事件のあらましを報告した。

「さうでしたか、私はまたあなたがどんな美人を連れて來るかと思つて待つてました」といつたから、私も答へた。

「うんさうだよ、僕も、僕の面會人を見ろ、といふ意氣込みだつたが、ひどい目に逢つたよ」

暫くして私の頭に、ふとかういふことが浮んだ、が之は周圍の人には云はずにしまつた。

二十餘年も、逢つたこともなく、手紙一つ書かないでも矢張り敎はつた先生として記憶して居るのであらうか

そして、今窮境にあることを、昔の先生に一寸訴へて見る氣に成つたのであらうか。之をあつかましいと云へばそれ迄だが、既に兩親もなく、一度は妻とも分れ、子供もなくて貧乏と病氣に苦しんで居ることを、先生に云つて見ようとするのであつたら、之も人間心理の一面であらうと。

日支事變の悲劇

左の短文を引用する。此の筆者は、小學校から日本兒童と一緒に學び現に中學四年生たる一少年で、其の小學校時代からの友人に寄せたものの後半である。

僕は今非常に惱んでゐます。いくら學問には國境が無いとは言へ、人間そのものには、ちやんと區別が有ります。今度事變で僕相當こまりました。人には言へずほんとに困りました。神經衰弱になりそうです。人生てつまらぬものだと度々思つた。神樣の前では人類平等とは言ひますが、でもなぜ神樣はいたづらに人種を區別して作つたのでせう?なほ國をなぜ作つたのだろう?

僕にとつて今一番ほしいものは一人の兄です。一人の親友でも好いからほしい。當地の滿人中學生は一人として知り會ひが居りません。

今度の事變で、相當に惱んだといふのは、何を惱んだのであらうか、たしか北平に其の兩親の鄕士を持つ此の少年として、その惱みは、恐らく日本の態度に就いてゞあつたであらうか。人には言へず本當に困つた、と云つてをるが日本に對する不滿ならば尙更のこと、支那の態度に對する非難にしても、周圍の日本人の學友には言へもしなからう。言つたとしても、殊更に日本の御機嫌取りと思はれはせぬか、或は、自國を嘲る罪を、殊に國民的自尊心の强い、日本の少年達に笑はれもしないだらうか流石にまだ少年のこととてそこ迄は考へ及ばぬにしろ、何かしら、それに似た心持だけは、敏い此の少年には既に感ぜられるのであらう。此の惱みを人に告げようとする時、一人のいはゆる同胞はゐないのである。彼は幼時より日本人の中に成長すること十數年にして、今初めて全校中に唯一人の自分を發見したのである。彼の寂寞は思ひやられる。

斯くて惱みは、人類平等に就いての疑問となり、國家の成立に就いての疑問ともなり、果ては人生を悲觀しようとしてゐる。その懊惱が、どれほどの內容を有するかは別として、彼にとつては少年の身に重過ぎる負擔であるに相違ない。神經衰弱になりさうだと云ふのは事實であらう。

日支事變は、日支兩國にとつての悲劇であること勿論である。而かもその大悲劇の蔭に、斯かる小さき悲劇が稀に或は數知れず行はれてゐるのである。兩國の最終目的は、兩國の親善提携にあり、そして其の事實の實現の日は、地上に天國の來るよりは比較すべくもなく早い。日支兩國の仁人志士は、其の時機の到來を早からしめんことを準備する、其の準備の中に、斯かる小さき魂に與へられたる惱みを跡かたなく除去する用意を怠つてはならぬ。

手紙を受けた相手の少年は、此の筆者の心持を、直ちに全面的に理解することができない。それは日本國民といふ幸運兒の一人であるが爲に、其の心理が未だ單純無垢なのに依るのであらうか、それにも依る。が、それよりも多く相手の少年としては、彼は全く自己の親友の一人なのであつて、國家を區別し、人種の差を考へる程、餘所餘所しい氣持が無いからでもあつた。第一、彼が、日支事變を問題にしてゐることすらが、相手にとつては意外な文字であつたのである。兩國民の心は、少しも惡意を含まずに、既にこれだけ距たつてゐる。

仕掛花火

石森延男

一週間にすることを豫定たてて、仕事をしたり、訪問したりする人がゐる。一週間だけではなく、一と月とか一年といふやうに、かなり長い間を目論んで、軌道に乘つた車のやうに、少しのわき路もせずに、時とともに歩いていつて、行きつくところに、いつのまにかゆきつくこれは、むだな時間も省けるだらうし、整然として生活がきまりよく進むにちがひない。が私にはどうもそれができない。今までに、そんなことを考へたこともないがしようと思つたこともない。

子供のころ、四方拜の式に臨んで、學校の先生から聞かされることは、

「一年の計は元旦にある。今日はその元旦だ。一年のことを考へて、よく計を立てねばならない。」

おとなしくして、わかつたつもりできいてゐるのだがさて自分の心に尋ねてみると何のことやらちつともわからない。一年の計の計がどうものみこめない。この年になつてもわづか一週間の計もたてられないほど、ゆきあたりばつたりで生きてきた自分には、少年の頃、一年の計のわからないのもあたりまへであらう。

新聞などで、一週間分の献立表がでてゐることがあり雜誌には、一箇月分のがのつてゐる。これを見て、あのこまかいお料理をならべたものだと感心するが、またそのお料理の一品一品を朝から晝、晝から夜と、順々に喰べていくのは、たのしいかもしれないが、なんだか蠶が一枚の葉を片端から、順々にくひつくしていくのと同じやうに思はれてなさけない氣もふとおきる。もしそんな献立表を妻から見せつけられてもあ、この水曜日にはオムレツか、あ、土曜日は、茶碗むしかと思ふだけで、お腹の中がふくれたやうなうつろのやうなへんな氣がしてくる。これをみんな喰べてしまはねばならぬかと思ふとちよつと辟易もする。それよりは、今夜は、どんなお料理がでるかわからずにゐてふとすきなやき魚の匂ひがもれてきたりすると、わけもなく家らしいおだやかな心もちになることがある。

お役所といふところは、さも規則づめで、ゆとりがなくて機械的だと思つてゐたが、中に入つてみるとさうでもない。一年中の仕事は、あらまし定つてゐるが、中味は、殆ど去年とかはることが多い。それに突發の事件、問題交渉、計畫といふものが、次から次へとあつて、日時のたつのが、殆ど氣にかゝらない。それにくらべると、學校といふところは、はるかに型にはまつてゐるやうだ。考へやうによつては、學校は人間が集り、生きた仕事なんだから、これなんか偶然的でその時その時で工夫をし善處し、いはゆる臨機應變の處置をとらねばならぬかと考へるがさうでもない。始業時間が、定つたが最後、少しおくれても遲刻となり、一時間ごとにお辭儀したりされたり、日々の出缺簿をつけたり、月々出缺統計表をつくつたり、成績表を記入したり、行事は判で押したやうに例年くりかへし、千遍一律である。ちがつたことを考へても、學校規則とか因襲とかいふいたつて偶像風な根づよいものがはびこつてゐて、一々職員會議を經なければ、型を破られない。年々歳々生徒の顔は變つても、そのする仕方は、昔も今もさほど變つたとは思へない。世の中がどんどんうつり變つてゐるのに、先生ばかりは泰然としてゐると、良いやうな悪いやうな評をされることになる。

自分のやうな氣まぐれものが、黄河の流れのやうに變ることない學校教育に職を奉じてゐるのはずゐぶんをかしい。よくつとまるものだと自分で思ふことすらある。といつて他の職業はなほさらできないから、かうして駄馬に鞭うつことにもならう。

近來夏になると、子供たちは、花火をして夜をたのしむことが流行つてゐる。私が少年の頃は、もつとさかんであつたやうに思ふ。實際は、これほど盛んでなかつたのかもしれないが、當時は、今のやうにラジオとか映畫とかネオンサインとか子どもらの感覺を喜ばすものがないために、まつ暗な夏の夜のあの花火は、子ども心には實に美しいすばらしい遊びなのであつた。私は光の美しさにもみとれたが燃える時の火藥の匂ひも、好きでならなかつた。マッチをすつて、たちのぼる硫黄の香からすでに好きなのである。線香花火の可憐な菊の花の火花は掌にあてても熱くなくて、抱きたいほどだ。私はただ一種の花火を燃やすだけでは滿足できなくなつた。ある時大きな紙の箱の中に、さまざまな花火をつなぎあはせて

とりつけてみた。まあ仕掛花火のつもりである。自分のなけなしのお小使ひを捧にふつて買ひあつめた花火を一瞬にして燃えつくさせてしまふのは、もつたいなくて近所の友だちをみんなかりあつめてきて、庭の落葉松の下でやつてみた。端に火をつけると、しゆしゆ火の子がでは じめてやがて、青い光が輝き、紅い光にかはり、えたいのしれない音がしたり、ぱちんとはじけたり、龍のやうに火がながれおちたりしてふと消えてしまつた。あつまつてゐた子どもらの顔が、花火にうつつて、緑になつたり、桃色になつたりして闇から浮いたのは忘れがたい好印象である。仕掛花火をつくつた御本人の私は、はたしてこの花火に次々とうまく火が移つていくものやら、どんな光になつてあらはれるやら全く見當はつかないでゐる。ただうまくいきさうな氣持がするだけで、大膽に火をつけてみる。それが思はざる時に、思はざるところで眩しいばかりの閃光が迸つたりすると、たまらなく嬉しがつた。

それから近所の子供たちに、また仕掛花火を見せてくれとせがまれてお小使を奮發してやつてみたが、どうも途中で火が消えたり、ぽつと一どに燃え上つたりして、最初ほどのてぎはのいゝ美しいものはできなかつた。かうやれば、きつとかうした結果になるといふ豫想をして仕組むのは憶劫になる。結果が少しでもわかるものは、もうやらなくてもいゝやうな氣がする。

私はこれから何年この世に生きていくかはしらない。今更豫定生活をしようとも思はない。日記をつけて過ぎにし方を眺めることさへ自分はあつさりやめてしまつた神がつくつてくれた燃えさき不明な仕掛花火のやうな生涯になるだらう。どこでぱちんとはじけてしまふかもしれないし、いつ碧い光を發するかもしれない。

深谷溫泉にて

竹内節夫

十月初旬、祖母が死んだといふ電報に接して急遽私は故郷のM町へ歸つた。四日目の夜故郷の家についたのである。停車場に降りると、何だか窮屈な思ひがする。出迎へて呉れた人の涙を含んだ視線に、私はたゞ空虛な感樹を酬いたのみであつた。

葬式は濟んでゐたが、改めて悔みに來る近親の人々に應待したり、僧侶にお經をあげて貰つたりして數日を過してしまつた。死んだ祖母は九十一歳だつた。戒名も永壽とつけられ、死ぬ數日前には湯飲みに八分ほどついだ酒を、水藥でも飲むやうに一乾しに咽喉へ通したといふ健啖ぶりを聞かされた。

私の酒を周圍のものは、この祖母の遺傳だといふが、私は尾籠ながら痔疾に惱み、その遺傳とやらを返上したいほどで、この深谷溫泉へ來たのも專らその保養のためである。

痔がわるいといつたら、土地の人々が深谷へ行けといふ。加賀の國 河北郡三谷村の字であるが、同村の入口にはこの種の鑛泉としては日本一だといふ廣告がしてある

日本一かどうか私は知らないが深谷には湯屋が三軒しかなかつた。私は中の湯に逗留したが、階下の室はうす暗く、猿が住むといふ裏山には、秋の風が瀟條として鳴つてゐた。終日、なすこともなく湯に浸つては三度の食事を遂げてゐるのは、まことに退窟で、勿體ないやうな氣持がした。これは、小賢しい人間が大愚のよさが判らないのと同一ではないにせよ、私は自分のせつかちな性分を腹立たしく思つた。

志賀直哉の短篇「城崎にて」は、電車に跳ねられて怪我をした男が背推カリエスになることを案じながら城崎溫泉に三週間ほど滯在した記であつたと覺えてゐるが、その主人公のやうに小説でも書ける人間ならともかく、手紙もろくに書けない私はたゞ無聊を嘲つたのみであつた

最初、頭がぼんやりしてゐたが、痔の痛みが緩むと同時に、氣持も何となく晴れて來た。雨が降りつゞいてうすら寒い、暗い部屋の中には濕氣がねつとり漂つてゐるやうであつたが、身體の調子が回復したことは、まづ嬉

しかつた。夕食の給仕に來た女中に、酒をのみたいといつたら、こんこんとその不逞をさとされた。

刺戟物は一切禁じられて、食事にもそれが注意されてあるらしかつた。

その夜であつたが、隣の室へ若い男女が泊り込んで、高聲で猫の如くじやれ合つた。鼻にかゝつた女の嬌行唄も私には愉快でなかつた。湯は一日三回、入浴時間も三十分を超えてはいけないといふことで、さうさう湯にばかりも浸つてはをれず、といつて耳に蓋をしてゐるわけにはゆかず、神經はいらだつた。

痔を癒やして神經衰弱になつて歸る男の圖などは漫畫の材にもならぬと、獨り苦笑してゐたが、そのひそかな夫妻は文子通り一夜の泊りで、朝早く出立したとの事であつた。女中は、私を見て顏色がよくなつたと慰めてくれる。すこし辛抱してすつかり癒してゆけといふが、小都會の雜然たる空氣に馴れた私には、堪へられぬ淋しさであつた。保養と思へば贅澤ではないが、なす術もない私には時間が惜い氣もした。

障子を開けて、宿の庭につゞく裏山の樹々を見てゐても、興趣の湧く理由がない。廊下に出てそこの窓から裏通りを眺めると、藁ふきの屋根のぬれてゐるのが見え、往來を荷馬車の通るのが眼にはいる。

たゞ、靜かな情景といふ他はないせめて書物の一册でも持つてくればよかつたと思つたり、文字は却て煩はしいと考へたり勝手に迷ふ心も澄んではゐないためである

雨があがり、陽がさしたので繩緒の下駄をつゝかけて庭に降り飛行を傳つてゐると、この石一つに私の家一軒よりも高い金をかけてゐる豪華風俗の邸宅もあるのだとまたも卑しい雜念に促はれ、九十年の生涯を閲した祖母の上には、いろいろな人生の煩雜な出來事もあつたらうと、沁々思ひ返すのである。

曇りのち晴といふが、祖母の生涯は曇りの連續であつたやうな氣もする。信仰のこゝろ篤かつた祖母が、臨終まで如來さまのお側へゆけると喜び語つたその氣持が、或は晴だと私には考へられる。

數日滯在してゐるうちに私の病はすつかり收まつた。私は此處を去つて、故郷での殘務を整へ、滿洲へ歸らねばならない。

深谷へ來て私の印象に殘るものは、馬糞くさいこの湯の香りと、裏山の風の音のみではなかろうか。

川柳と滿洲

石原巖徹

滿洲在住邦人の間に行はれる日本獨特の短詩形文學・和歌・俳句・川柳等は、由來題材を其土地—滿洲—に求むる點に就て一般に關心と努力を缺いでゐる。和歌、俳句に關しては別の機會に讓るとして、こゝには川柳に就て語る。筆者の念願としては、折角滿洲に住つて日常滿洲の事物に接してゐるのだから、作品の内に滿洲の題材を出來得る限り用ひて、縱横に之を詠みこなすことは、責務とまでは言はれないにしても、極めて意義のあることゝ思ふのである。廣い意味から言へば、滿洲に於ける日本人文化の一部門として、この方面を開拓することが直ちに一つの貢獻ともなるものである。

今更こゝに事新しく川柳の價値を說く必要は無いと思ふが、そのねらひどころが卑近な日常茶飯事であり、皮肉・諷刺・滑稽（ユーモア　或は人生のあら探し等であるが故に、貴族的とは凡そ緣遠く、お上品ではない。然しそれがために、川柳の大衆文藝としての價値を否定するのは、早計であり、短見である。眞理は路傍の塵芥の一片にも存するのである。

筆者は趣味として川柳を手がけること十數年、その間常に滿洲及支那に在住してゐるので、前述の如き念願のもとに、滿支風俗事物の川柳化を心がけて來たが、今日まで、事志と違ひ、未だ見るべき成果を擧げ得ない身の不敏を愧づるのである。かうした事業は一人の力では到底物の數にならない。多數人の協力を必要とするのであるが、遺憾なことには、川柳に趣味を持ち而も筆者と志を同じうするといふやうなあつらへむきの人は甚だ稀である。

そこで、先年筆者等の川柳の同志を以て組織した大連川柳社に於ては、その發行する機關誌「青泥」に、「ますかげ輯」といふ一欄を設け、廣く一般から滿洲の風物に關する川柳を募集して、之を集錄することにした。爾來既に七年の歲月を閲してゐるが、顧みて餘りにも成績の擧らないのに我ながら驚くのである。けだし筆者の體驗に依て言ふならば、これは實際に甚だ困難な事業なの

である。滿洲の風物を詠むことは詠んでもそれが川柳としてものになつてゐなければ價値はない。同時に又題材が多いやうに見えて、其實川柳に詠みこなし得る題材といふものは割合に範圍が狹いのである。川柳に表現する以上、一般日本人に判らなければ意味をなさないから、あまり突込んだ滿支事情を詠むことができない。同時に又、支那語の妙味を充分に出すわけにも行かないといふ惱みがある。これらの困難な事情と照し合せて考へれば成績の擧らないのは無理もないとも言へる。

然しながら、不滿足の裡にも多少の成果は無いでもない。多くのことは尙無限大の將來に期待することゝしてこゝに不取敢過去七年間に於ける收穫を上記青泥誌所載「ますかげ輯」を中心として拔萃して見る。

滿洲を題材とした川柳を大別すれば、(一)滿洲人の風俗習慣に關するもの、(二)一般滿洲事情、(三)日本人に關するもの、の三種に分けられる。(以下青龍刀とあるは筆者の柳號)

(一) 滿洲人の風俗習慣に關するもの

帳房（チャンファン）

帳房は直ぐ日本語へ筆を貸し　茗八

帳房の晝寢へ蠅の油房夏　同

（註）帳房は滿支人の帳場

阿片

支那宿の鼻をかすめる阿片の香　百穴

新來へ癮者ものうく首をねぢ　茗八

零賣所屋號料理屋ほどに凝り　青龍刀

出る時は颯爽として零賣所　同

寢佛の如し阿片を吸ふ姿　箱八

纏足

纏足の腰搖る幅に人を分け　茗八

荷こぼれへ纏足馬鹿にならぬ足　青龍刀

纏足がピッチをあげる手の捌き　水母

姑娘の足も次第に太る御代　論山

苦力

苦力小屋雨を覗けば皆寢込み　佐々市

苦力の太陽街の裁縫婦　青龍刀

雲雀趣味苦力の中の人格者　呆仙

豆粕の湯氣は苦力を裸にし　桃園

山東の移民山羊ほどうろ〳〵し　茗八

山東に女房がゐる稼ぎぶり　磊笑

胡弓の音男ばかりの住居なり　同

早撮の寫眞に苦力眞面目顏　炭吉

廟會

落ちて行く如く娘々廟詣り　青龍刀

廟會の線香薪の如く負ひ　同

廟さんを燻して何の願ひごと　穀半子

廟會は常着のまんま坊主連　龍峰

平康里

平康里紅燈の下綠酒無く（クウニヤン）　青龍刀

姑娘へ支那語で言へばわきを向き　同

平康里鮮娼の愚に及ばんず　同

看々（カンカン）へツンとして來る大年增　同

看々へ清倌（チンコワン）は茶目らしく來る　同

開盤子（カイパンツ）乳へ蓋（フタ）して逃げ廻り　茗八

頭等（トウトン）はインテリらしく髮を斷り　同

（註）清倌は雛妓、頭等は一等妓女

太

富士額太太（ひたひタイタイ）色香衰へす　茗八

太太は子供のやうな頭巾を被　青龍刀

太太の胡坐（あぐら）土足のまゝでよし　無智庵

大人

大人と鼻毛小指も大分伸び　茗八

大人はとかくホルモン過剩なり　炭吉

泣き女

泣き女本物ほどに聲が嗄れ　人右

見物が多く泣聲高くなり　炭吉

喇嘛

喇嘛廟にうごめく活きた羅漢像　雨露地

ラマ僧は檀家へ馬を乘り廻し　水母

喇嘛塔の尖だけ光る地平線　醉雷

盛り場風景

賣武藝どこかいなせな腰ッつき　青龍刀

銀蠅が休む膏藥賣りの軒　同

見る物も喰ふ物もある露天市　茗八

瓜子兒

瓜子兒（クワツル）が泳ぐ茶腹で茶園を出　暮仙寺

瓜子兒の穀談笑の抄（はか）がゆき　桃煙

物賣り

奥さんをポンユーにして野菜賣
蝿追ふにあらず甜瓜に水をかけ　濱月
クリヌークイ聲も舊正前のもの　青龍刀
威勢よくエースクリンを賣つてゐる　茗八
道端の包子は湯氣につゝまれる　同
爆竹　箱八
世も末となつた爆竹屋の恨み　青龍刀
氣の拔けた爆竹が鳴る時間ぎめ　同
街頭風景
小便に君子自重を强いられる　青龍刀
馬車馬の禍を貼られてうつろな眼　同
お國ぶり忌中の型に禍を貼り
夏の夜の地べたへ死んでもゐる樣　浦村
印刷屋修理鑑表金入れ齒　茗八
五金行眞鍮と錫映え返り　同
支那街は埃氣にせぬ顏ばかり　雲水
田舍風景
舊道の飯屋ほこりの驢馬を停め　喜一
牛糞に王府も近いなと判り　木耳
喘息の咳支那村の夜が明ける　茗八
嫁入りに荷馬車の馬の氣が驕り　同
洗濯へ姑娘を二直角　青龍刀
豚肉を提げて枯野を斜に切り　磊笑
道きけば滿人農夫首を振り　可礫
顏だけを出して戻つた驢馬の草　里柳
地方民和製支那語にへつらはず　小女郎
匪馬賊
けし畑馬賊春からアテがあり　新生
劉曉と逃げの喇叭で匪賊なり　泥柳
川になる道が惱みの討匪行　青龍刀
新舊正月
舊正の油房雀のお正月　茗八
五色旗を新正月の申しわけ　青龍刀
掌櫃的
お茶ばかり飲む掌櫃の二重顎　青龍刀
日本語
滿人は出世がしたい日語熱　蓮樂
姑娘の日本語はアリヤトウから　青龍刀

回回
回々は蛇蝎の外に豚があり　青龍刀
其他
腿帶子喇叭ヅボンを不性視し　茗八
肺ペスト蚤が食ふのは沒法子　青龍刀
支那流の凝りは刺繍のハイヒール　同
白布縫ひつけるも見得の喪に服し　奴我坊
アイロンを氣が遁げる洗衣局　同
支那豆腐秤へなげる堅さなり　房枝
村一杯喚き喧嘩は媳婦勝ち　同
滿人は蔗居を知らず押し閉ける　呵枝
おしぼりが石鹼臭い支那料理　箱八
きこしめすとは燒酒に鹽鴨蛋　茗八
バス乘場洋車梶棒すりつける　明朗
(二)　一般滿洲事情
蒙古風
蒙古風青いは葱のさきばかり　青龍刀
蒙古風雲などの出る幕でなし　同
蒙古風易者とうとう荷をしまひ　青龍刀
蒙古風油斷をみんな埃にし　茗八
醬肉に小籠が要る蒙古風　同
燈節（元宵）
燈節は名ばかり零下四十度　青龍刀
山
滿洲の山は熊手の櫛で禿げ　桃園
罌粟
王道の餘光に咲くや罌粟の花　青龍刀
サチガイモト（洮南名物）
枯れてからサチガイモトは名が高し　青龍刀
曠野
曠野たゞ老刀牌に暮れかゝり　明朗
（註）老刀牌は紙卷煙草パイレート
春風
春風に煤と埃が入り換り　青龍刀
春雨
春雨に雀の煤は落ちぬもの　青龍刀
北滿
北滿の風に紅葉のひまもなし　青龍刀

歡喜佛　青龍刀
滿洲の旅のなごみに歡喜佛
歡喜佛ガッチリ抱いたおん姿

城壁　箱八
城壁の今となつては好い都市美

望小山　青龍刀
注連縄は望小山に短か過ぎ

蘇家屯　青龍刀
蘇家屯で寢不足同士さようなら

觀光雜景　殘丘
志士の碑に觀光寒く降される

赤白露　箱八
見學は壹の書館に首を入れ

砂金景氣　咲亂帽
ハルピンの町で赤系いゝ暮し

砂金景氣　逸名
喫茶店白系類を以て寄り

砂金景氣　青龍刀
平康里砂金苦力は肩で風

砂金景氣　同
金廠は故郷を忘れた顔が利き
（註）金廠は砂金採取場のこと

砂金景氣　同
砂金苦力宵越の錢など持たず

砂金景氣　同
砂金苦力高粱飯はオカシクて

砂金景氣　同
增水に迫はれるケチな砂金採り

（三）日本人に關するもの

支那語　榮丸
見學に來てペイチャンを一つ知り

支那語　亞鳳
メイユウとプヨウで通し留守の妻

平康里通ひ　青龍刀
平康里浴衣まぶしく朝歸り

平康里通ひ　同
すががきの氣味を胡弓に平康里

平康里通ひ　同
强引にドテラ平康里へ泊り

平康里通ひ　炭吉
平康里ヨボと云はれた武勇傳

雄圖挫折　青龍刀
はしなくも滿洲景氣ヘロに墮ち

雄圖挫折　竹翁
千金を摑む手モとに痩せて行き

支那料理　青龍刀
高砂や冷めてしまつた鱶の鰭

支那料理　同
支那料理いつもの蝦で日本人

彩票　明朗
彩票のケツ番もなく草臥れる

彩票　青龍刀
頭彩へ祝ひを云へば逃げ仕度

野遊會　青龍刀
つかの間の春を逃がさず野遊會

野遊會　三柳子
空罐の取引も見る野遊會

老滿洲　青龍刀
支那服が身について第一線に老い

老滿洲　明朗
營口で育つたといふ撥(ばち)の冴え

胸中秘策　水母
新京でたくらみのある髭を撫で

國幣不慣　青龍刀
ギザギザが無いを國幣と知る闇

國幣不慣　錦魚
一角と思つたギザへつりが來る

以上の拔萃に依て知らるゝ如く、（一）の滿洲人の風俗習慣に關するものが、最も多く、（二）の一般滿洲事情に關するものが、これに次でゐる。（三）の日本人に關するものは、比較的に作句が少い。筆者の念願とする所も、（一）及び（二）に關する作品であるが、本文の冒頭に述べた通り、（一）に關しては、餘り專門的（滿人社會としての）に深入りすると多數人に判らないものが出來上るといふ惱みがある。（二）に關しては、上揭の程度では餘りに範圍が狹い。此方面にはもつと開拓されなければならない餘地がある。たゞ川柳的の情趣を摑むことに相當の困難が伴ふ—川柳は事實そのまゝ說明的に詠んだだけではものにならないから。

尙ほ、蛇足ながら附記して置きたいことは、上揭（一）の句は、滿洲人風俗を紹介するのに、ユーモアを含めて相當の效果を擧げてゐるといふことである。川柳をやる附隨的の產物として、こうした效果を擧げるといふことは、誠にモツケの幸ひと云はなければならない。

秋の隨筆

三溝沙美

（一）秋

秋の隨筆を書けといはれて、不圖、秋を考へ込み戸惑つてしまつた。二十年の滿洲生活は眞當の秋の味ひを外處に置き忘れてしまつてゐる。向日葵が咲き照り蠅の惱ましい殘暑から、一足飛びに一夜の風で外套をきる冬隣乃至初冬になつて仕舞ふ滿洲では、秋の味ひを忘れるのも無理はあるまい。

日本民族が一年の好季とする秋。思索的な感傷的な秋は葛が垂れ下り、梢に柿が眞赤な大和、山城の國原あたりで最も典型的に味はれるのであるまいか。つまり、

夕されば小倉の山に鳴く鹿の
今宵は鳴かず寢ねにけらしも

舒明天皇

愛誦、三たび四たび、吾々民族の感情的な秋の氣持が油然と湧いてくるのである。

けれど萬葉集や畿内ばかりでない。明治の末、大正の初「思出」の作者トンカージョンは、武藏野でかくも秋を泣いたのである。

秋の日は赤く照らせり
誰が墓そ風の光りに
鷄頭の黄なるがあまた
咲けるみてけふも野に立つ
母ありき髮のほつれに
日も照りき御手に引かれて
かゝる日のかゝる野末を
泣き濡れて歩みたりけむ
ものゆかし墓の鷄頭
せきの世かうつし世にてか
かゝる人ありしをみずや
われひとり涙ながれぬ

（北原白秋）

滿洲に住んで日本の秋を彼是云つたとてせうがあるまい。暫く忘れてしまつて、茲では清澄明朗な滿洲の秋の景物を擧げよう。

（二）落葉

米國では秋を AUTUMN と謂はず FALL と謂ふ。大陸性氣候で寒暑の差の激しい北部米國では木の葉の落つることが最も秋を表すものらしい。同樣滿洲の落葉も凄じい。一夜の中に濶葉樹は丸裸になり、甍や土塀が忽然として現出する。このどつどつと瀧の如くしぶき落つる落葉は「落葉踏みわけ鳴く鹿の」と云ふが如き日本の纖弱な觀念は微塵も無く、寧ろ豪壯な、男性的な感じがして此方を採りたい。

啄木鳥や落葉を急ぐ牧の木々　秋櫻子

秋櫻子君は慥か赤城山で此の句を作つたと思ふ。落葉を急ぐと云ふ痛切な表現は、この大陸でも凛然として存在の理由を持つ。

この男性的な落葉を讃歎する私も、未だ青い葉が殘暑の消え去りない間に、急激な冷寒に襲はれて青いまゝに朽ち果てゝ落つる姿は悼ましいと思ふ。

（三）金州の葦

秋は詩を感ぜしめる。之は清澄明朗な大陸でも同じである。

私が俳句を志したのも、慥か秋ではなかつたかと思ふ十年も前に一日、家族と馬車を驅つて金州を廻つた。地獄極樂の永平寺で松鎭を聞き木犀の高い香りに地獄の惡どさも洗ひ落した。それから三崎山をさした。山裾の川を越す馬車が白い砂を軋つてゆく。ざくざくと轍が砂に這入り込む。馭者は轡を採る。葦原へさしかゝつた。

白い穗が颯々と靡く。私も子供も爭つてその葦の穗を手折つた。この穗をみると吾しらず故郷の水郷が思ひ出され、かずかずの記憶が湧いてきた。

楓葉荻花秋瑟瑟

此麼詩句が胸中に徂徠して、じつと考へ度くなつた。そして自分は久しく齷齪とした月給取生活に趁はれて自然を疎かにしてゐたことに氣がついた。アドバンス、イン、ライフといふことが人生にどんな價値があることかと疑惑を抱いた。そのころから一木一草を凝視して、それから溢るゝ感懷を十七字の文字にとり纏め、自然を讃ふる術の貴さを知り初めたものである。

（四）旅順の鶉

旅大に住むものにとつて見遁せない秋の景物は旅順の鶉狩である。

ひと秋、大連から吾々仲間が大勢泊りがけで繰り込んだ。かうした場合の習はしとして、一間に固まつて酒を飲み歡談して、却々眠られない。それで未だ午前二時過ぎといふのに起き出でゝ馬車を老虎尾半島に驅つたのである。

動く灯は鶉を追へる灯なるべし　沙　美
鶉追ふ灯のちらばりて相寄らず　三　昧
灯を振りてせばまりよりぬ鶉狩　幽　靜

山中に點々と無數にある灯は、滿人がカンテラの灯で寢てゐる鶉を手網で捕へてゐるのである。

この灯を前にし、白玉山の燈火を背にして、そゞろ秋寒を覺えつゝ馬車を進めて約束した高粱畑に着き、そこで夜明を待つた。待つ間が長いから空を仰いで星の談をするより外ない。丁度蝎座がくつきりと見える頃である大陸の朝冷えは思ひの外峻烈で總身が慄へ出す。やがて銀漢が次第に薄れて東雲の色がつき出すと、苅り殘された高粱畑へ這入つて、皆が勢子となり、ホウホウとかけ聲をして綏くり追ひかけるのである。急いで追ひかけると翔つて仕舞ふさうだ。服は朝露でしとゞに濡れ、その上草じらみは背と云はず洋袴と云はず一杯につき、靴は泥まみれになつて馬鹿に重く、一同は全く草臥盡して、やがて樹蔭に集り、草を衾として携帶した辨當を喰べつゝ手柄話に耽つたのである。

鶉網高粱高く張られたり　沙　美
切株のきびに躓き鶉追ふ　同
高粱折れて頬を打つあり鶉追ふ　同

（五）　吉林

先日、詳しく言へば八月廿七日の日曜を水都吉林に遊んだ。北山も小柏山も廻つたが、折角水都に來たからには松花江に舟を泛べなくてはと、輕舸に乘つた。大江の水は濁つてゐて、水嵩は高かつた、江心に立てば涼し過ぎる位だつた。

――もう秋ですネ。

とは、一同が幾度も繰り返した言葉だつた。

對岸のこんもりした楡や櫺の杜に船を纜つた。これが聖母の丘である。丘の窪みに所謂吉林材の流木が一本引き込んであつた。この流木は同中の一人の所有に屬するもので、一本の時價八〇圓と聞いた。この窪みを越して半圓形の石橋を渡ると、そこに二丈餘の崖があり、石で疊んである。崖のひと所を刳り、それへ白い大理石に刻んだ聖母の全身像が安直せられある 像の上には Le Suit

Immaculée Conception と金字で入れてある。崖の石疊の間からは野茨が自生して風趣を添へてゐる。聖像は鐵の柵で劃られ、日曜の今日は祈禱があつたのであらう秋草が柵に捧げ懸けられてあつた。柵の外には禮拜者のため跛脚の長椅子があり、傍の井戸には水が滾々と湧いてゐた。

崖を刳り聖母立たせり花茨　沙　美
鐵柵に秋の草挿し祈禱せり　同

更に丘に登ると、加特力克の禮拜堂があり、色繪硝子美しく、そこにも麗しい聖母の像が安置されてゐる。

一同は再び先刻の窪みに來り、談は又も流木と木材に戻つたが、誰かゞ杜を歩きつゝ――

此麼所を通ると切支丹莫天運の頃世を忍んで教會へ禮りに來た昔を思ひますネ。

と云つたら皆が默つた。恐らく一同は流木の現實と信教の神秘との混淆から、一時頭腦の困惑を感じたに違ひないが、すぐ踏繪時代の昔に立ち返り、おのかじゝ詩とか宗教とか、このシーンに相應しい念慮に搏たれたであらう。永い沈默を續けて崖の徑を辿つた。その徑は野菊と桔梗が咲き亂れて、黍や玉蜀黍の畑に沿ひ、脚下には松花江の濁流が旺洋としてゐる。

天主教禮拜堂の堂守の住居は禮拜堂のすぐ裏手にあつた。吉林特有の分厚い板塀を繞らし、その板塀から畫顔の白い花が垂れてゐた。謂ふまでもなく堂守は長い顎鬚を蓄へた見るからに好々爺の滿人である。

（六）　日向ぼこ

新涼と謂ひ爽かと謂ふ、初秋の肌に快適な空氣もよいが、冬の早くて永い滿洲では、日向ぼこの日の溫みこそいひ盡くせぬ懷しいもの〻一つである。膚に直接刺す溫みもいゝが、着物を通してぢりぢり泌みこんでくる溫みもいゝ。

私の家は六〇坪餘りの裏庭があつて、樹と草花と雜草とがほしいまゝに成長さしてある。俳人仲間には「廢園」として知られてゐる。これは昔、草葡萄が生ひ茂つてゐた當時

廢園と呼ばまほしけれ草葡萄　沙　美

の句から起つてゐる。家の修繕を依頼する毎に、工事引受の人が

こんな町のいゝ所の土地を草を生やして遊ばして置く

なんて勿體ないぢありませんか。それかと、バつて裏ですからお庭にもなりません。矢張りアパートですナ、三階建のアパートを建てれば九軒の貸家が出來ますヨ。

と有利な採算を示して、勸誘してくれるのであるが、この裏庭こそ秋から冬へかけての逃避場所の一つである丁度殘暑の過ぎる今頃から子供と共に下り立ちて、先づ雜草と草花を刈りとり之をよせ集め、又櫻、杏、楓、楡等々の落葉も掻き集めて之とで草の山を拵へる。

一方では春から夏へかけ伸び茂つた樹々の枝を剪して積む。この枯草の山には子供と共に腰を下ろす。之は椅子なぞに腰かけるとは違つて何となく平安粗野な氣持になり、ゆつくり日向ぼこ出來る。剪ろした枝の方は風の靜かな日曜を選んで、落葉と一緒に家中總がかり焚火する。焚火位子供の喜もぶのはない。焚火のあとの灰の中には甘藷を埋めてをいてその燒けるのを待つて、すつかり餓じくなつた腹を膨らす。之が晩秋初冬の私の家の行事である。親は之によつて遠い過去の記憶を喚び起し子は將來の夢を作る。

十一月のある日曜、かの枯草の山に憩はうと下り立つと、既に露の深い草の坐には猫の糞があつてそこは猫のねそべり場所となつてしまつてゐた。私は猫を憎む氣になれなかつた。曖かき場所を好むことこの動物の如き、この安住の場所を見遁す筈がないからだ。

けれど人生の激しい競爭において、人は相排擠し相鬩ぐ、その醜さに見兼ねて十七字詩を求めこの平安の草の座を擾れば、心ない動物は心なくも私を趁はふとする。人は人ばかりでなく、家畜とまで爭はねばならないのか。

ぢつと懷手したまゝ庭の隅を凝視すれば、この寒空に蒲公英は短い莖から返り花を擡げ、實生の瓜は四葉、五葉ながら僅かの蔓を伸ばしてゐる。週日の命であり乍ら尙もけなげにも生きようと藻掻くのか。

鶏頭や朝顏ちさく地を這へる　　沙　美

目をイリスの花圃に移すと、イリスの葉は半ば枯れてゐる。更に仔細に之を見ると、顚へつゝ日光に浴してゐる蠅は、枯葉には一匹もとまらないで、靑い葉にのみとまつてゐる。矢張り枯れずにあるものには力强い何ものかゞあるのかとつくつく大きい自然の摂理を考へた。

あるは枯れあるは生きをるイリスの葉の
生きの葉にとまり秋の靑蠅

雜　錄

一月

九日　〃蠟人形〃大連支部新年研究會於マルキタ
大連俳句會主催新年大會於大連亭支店

滿日）一一月創作評」青木實「牛の姿」紫藤貞一郎「畫人コント」三好弘光、平山熊雄、川上旗男、島田幸人、山崎チエ子、「文學の主張」森田茂「山下氏の語源考を讀みて」渡部洸「耳の芝居」絲山貞家「支那文學界最近の動向」池田孝「滿洲美術界に望む」江內豐「滿洲國描寫」大江賢次「露惡精神の敗北」橋守夫「醫學慢遙」牛文郎「日本文化と自然科學」奥藤多藏（大連公論）「劍かがやく」鹿島鳴秋（滿洲公論）「喜怒哀樂帳」橋本八五郎「牛と宗教」紫藤貞一郎「顯者の藝術」「葦沙河の日誌」西川清六「松竹梅」甲斐水棹「初手紙」岡三郎（滿蒙）「俠人の討匪」柴田天馬（新天地）「滿洲作家への希望」大住孝二（滿蒙評論）「文化運動について」西村眞一郎

▲小說――「憂愁の北」中村學（滿公）「隣一、二軒のこと」町原幸二「冬日抄」青木實（新天地）「一日」岡二郎「うりかひ」高島青史（滿蒙評論）

▲詩――「呪ひ」「ぼろ釘」「すり硝子」小池亮夫「ニュース」「シネマ」「鑛」「埋葬」三好弘光「道」「曉」「夕暮」「雪道」「或る男の歌へる」龍口武士「出發」井上麟二「鵲」「詩」「それは私にはわからない」松畑優人「續打たんかな」八木橋雄次郎「且」「クリスマスの夜」「寄港地」矢原禮三郎（鵲）

二月

六日　〃蠟人形〃大連支部例會於三葉
二十八日　文藝懇談會蠟人形支部大連モナミ倶樂部共同主催於大連マルキタ

福家富士夫創作集「眠劑」發刊（滿日）「日本文化と自然科學」奥藤多藏「渡部洸氏へ駁正」山下藤次郎「文藝時評」大谷健夫「讀紙拾遺」宮島深雪「木のない街」富田壽「冬夜追悼――碧梧桐を偲んで」村田都波木「プーシュキン回顧」佐藤通男「プーシュキン斷想」野崎留夫「諷刺詩としての川柳」井上麟二「支那映畫展望」矢原禮三郎「坪內博士三周忌を迎へ」水口薇陽（作文）「同人雜誌評」秋原勝二（滿洲公論）「喜

怒哀樂帖」橋本八五郎「歸省」岡一郎「旅行雜感」古川哲次郎「承德視察記」西田孝雄（滿蒙）「幽露の受驗」柴田天馬

▲小說＝「手袋」松原一枝「靜かな風」三宅豐子「明日」富田壽（作文）「浙江旅社」福家富士夫（滿洲公論）「その三人」伊地知進「寄生する村」富田壽（新天地）「秋夫と千代」夕張彥介「首都郊外」隱可達夫（滿蒙評論）

▲詩＝「挨拶」古屋重芳「砂壁」落合郁郎（作文）

三月

二十日　大連俳句會例會

二十一日　新興俳句陣大連支社俳句會

二十四日　G氏文學賞第一回受賞發表受賞作小杉茂樹詩集「麥の花」

△滿文雜誌「明明」月刊滿洲社より發刊

△「滿蒙評論」休刊

（滿日）「蔦の實」寬太郎「野菜の感覺」三宅豐子「連翹と蜆」城所英一「三月創作瞥見」石森延男「飛躍の響ひ」水島葉「涓滴の響き」三溝沙美「鄉土の春」宮川靖「宗教に答へる」湯下誠一郎「移民と讀物」高橋源一「日本の日本的」江原鐵平「萬葉集の精神」橋本八五郎「支那滿蒙の古地圖について」河野耕三「內蒙古に春を尋ねて」兵頭保久「物のあはれ」平井嚴男「マロニエの葉」二瓶等觀「朝鮮の樂舞」長谷川甫（滿洲公論）「天才論批判の序章」西川清六「進退」岡二郎

▲小說＝「蹇子たち」吉野治夫（新天地）「母へ」西川清六「月からた」菅野雄木男（滿洲公論）

▲詩＝「鶯――G氏文學賞に選ばれて」小杉茂樹（滿日）「朝」「日記」「夜」三好弘光「會」「迷へる羊」「願」「春」瀧口武士「うちに燃ゆ」「合法騙取」「我執」井上麟二「馭者」「わが時」松畑優人「並木道」「肩」「醉歌」八木橋雄次郎「谷を這ふ」小池兎夫（鵲）

四月

二日　小杉茂樹氏へG氏文學賞授與の會於マルキタ

△「新陽」滿人兒童讀物として南滿教科書編輯部より發刊

△G氏文學賞委員會より「滿洲文藝年鑑」を遂年刊行することに決定

△日本詩人會滿洲支部「鵲」發行所に設置することとなる

△大連藝術座公演「伯父ワーニヤ」於協和會館

△竹內節夫隨筆集「石斑魚」再版

（滿日）「日本的なるもの」瀧口武士「婦人雜誌論」石田豐子「役の設計圖」大連藝術座員『四月創作一人一誌評』八木橋雄次郎、町原幸二、青木實、槇一枝、落合郁郎、秋原勝二、大谷健夫「最近の滿洲文學界」西村眞一郎「無詩學的な〃麥の花〃感」モンタージュ」寺安鵲十「滿洲における文化の發展私見」古川哲次郎「さくら」甲斐水棹「疑似風流」大野斯文「チエホフにおける絕望――大連藝術座を觀て」紫藤貞一郎「雜讀近營」福家富士夫「木魚の記」村田治郎（滿蒙評論）「詩の手帳から」橫澤宏「碧梧桐を憶ふ」齋藤仙六「春」柊縫子（滿洲公論）「喜怒哀樂帖」橋本八五郎「柳想」飯村白帆

▲小說＝「保菌者」島崎恭爾「黃花女」古川賢一郎（新天地）「手記」吉野治夫「氷雨」池淵鈴作「明日」富田壽（作文）

▲詩＝「霜の朝」落合郁郎（作文）「街の踏繪」砂見あきら（滿蒙評論）

五月

一日　滿洲アヴアンガルド藝術家クラブ結成、畫家を主とし詩人も參加、滿洲における前衛藝術研究團體として注目を受けた。

十日　滿洲俳句會例會

二十日　外山卯三郎氏來連

二十五日　大連日本畫家聯盟結成

△本月より急激に滿洲文學に關する議論が活潑に動き始めたのは注目される

△「醫科」第四號、滿洲醫大文藝部より發刊

△小杉茂樹氏大連より奉天へ轉住

△北村謙次郎氏歸滿

（滿日）「滿洲文學の精神」城小碓「滿洲の新線」鮒太郎「自然不自然」鈴木啓佐吉『一誌一評』福家富士夫池田孝、古川哲次郎、福富菁生、阪口穹太郎、佐々木勝三、富田壽「新線の哈爾濱」竹內正一「滿洲文學に就いて」角田時雄「最近の映畫から」町原幸二「男の觀方・女の觀方」松原一枝「娘々祭」奧村義信「木魚考」竹內坦道「當爲的と自然的」大河節夫（滿洲公論）「詩に關して」福原清一（滿蒙評論）「詩と繪畫」三好弘光「頃日雜感」西村眞一郎「わがノートより」古屋重芳「心」柊縫子

▲小說＝「樹木」木田修「斷章」岡

二郎（滿洲公論）「白鳥の歌」池淵鈴江「生滅緣故」宮原欣（新天地）「肉體」松原一枝「花財布」岡二郎（滿蒙評論）「若い情感」中山美之「姉」星子未知男「黃色い日曜日」小日向和夫「西喇木倫河」福家富士夫（醫科）「雪消」三宅豐子（旅行滿洲）「王屬官」牛島春子（大新京日報）

▲詩―「記憶の薄暮」矢原禮三郎「蝶の宿」城小碓（滿日）「青春」「南洋」「春」瀧口武士「心なく」「役に立たないベルト」「いのち」井上麟二「僕は煙草だから」「木よ」松畑優入「蝶」「愛のカンバス」「バイブ喇へて」「砂の上」八木橋雄次郎「尋ね廻る」「黑鯛を喰ふ」小池亮夫「エピクロス」三好弘光（鵲）「古き市街」瀧口武士「追放」島田幸人「鳥瞰圖」岡二郎「デルタ」砂見あきら（滿洲公論）「道――歸鄕詩篇」小杉茂樹（滿蒙評論）「詩・三篇」高木恭造「待避驛」小幡隆「蓮の香」本田保雄（醫科）「裝塡」赤川幸一（大新京日報）

六月

十八日　滿洲文話會發起人會於大連マルキタ

二十三日　平原俳句會於滿鐵社員クラブ

三十日　滿洲文話會創立大會於大連滿鐵社員クラブ

△竹內正一・古川賢一郎兩氏「作文」同人加入

△最近在滿邦人の文藝文化に對する關心が著しく昂まり、その活動も日を遂うて活潑となつて來つゝあるが從來これ等文藝文化人の間には何等包括的な親睦談合聯絡の機關なく關係者間では頗る遺憾とされてゐた。然るに過般來有志間に新たにその親睦機關として「滿洲文話會」の創立が目論まれ、文藝の發展育成のため延いては滿洲文化促進の一助たらん目的の下に着々計畫が進められつゝあつたのであるが此程漸く準備が整つたので愈々全滿各地の文藝家に廣く呼びかけその實現化の第一歩を踏出すこととなつた。同會では近日發起人會を開き會規その他細目について協議する筈であるが發起人は左の如くである

井上麟二、橋本八五郎、八木橋雄次郎、西村眞一郎、富田充、大谷健夫、岡二郎、吉野治夫、横澤宏、瀧口武士、古川哲次郎、靑木實、紫藤貞一郎、（六月三日滿日記事）

（滿日）「五果會短評」河野想「文時藝評」北村謙次郎「滿洲文學の特有性」金崎利光「フオト藝術素人想」槇一枝「同人雜誌論」靑木實「現代學生を觀る」奧藤多藏「滿洲の文學を思ふ」八木橋雄次郎「地元の小說評」黑瀨剛「味の藝術と科學」紫藤貞一郎「社會時評」加納三郎「文壇醫見記」北村謙次郎（滿蒙評論）「續繪畫雜感」三好弘光「短歌以前」岡二郎「ジヤック・フエデについて」吉野治夫（大新京）「去つた妻に寄せて」「北滿だから」河利致「親友の日記」赤川幸一

▲小說―「S君と二十」岡二郎「息子」靑木實「心臟の强い男」竹內正一「頰白」町原幸二（新天地）「花子と女達」宮川靖（旅行滿洲）

▲詩―「父」小杉茂樹（新天地）

七月

四日　アヴアン・ガルド・藝術家クラブ「マイクロビジョン」見學

六日　春柳吟社川柳例會於大連土建協會樓上

七日　滿洲文話會事務所大連伊勢町鈴鹿ビル內に設置

九日　平原俳句會於大連滿鐵社員クラブ

十七日　文話會主催「杉山平助氏を圍む」座談會於滿鐵社員クラブ

文話會委員會於大連三葉

二十日　大連俳句會例會於和田烏峰宅

二十二日　松原一枝送別會於中央ビルホテル

二十八日　文話會例會談話「文學と醫學」紫藤貞一郎於大連伏見台圖書館

△島田幸人氏逝く

△紫藤貞一郎隨筆集「實驗薄餘白」滿鐵社員會より出版

△滿日文化協會より羅振玉他十七氏の醵金に成る「四書集注直解」を宮內府に獻納

△大岩峰吉隨筆集「三百六十五日」出版

△三宅豐子歌集「七草」あしかび社より出版

△大谷健夫氏〃作文〃同人復歸（滿日）「帝國藝術院と批評」春田武「自由偶話」蜷原八郎「郭公の街」森脇襲治「文藝時評」宮川靖「詩情の夏」木山多加「ヘレン・ケラーは何を敎ふるか」柿沼介「最近の國文學研究思潮について」渡部榮「くら闇見聞」井上麟二「夏白頰」石田貞藏「新劇諸相」柏木龍吉「地元の小說評」西村眞一郎「商業美術への一考察」

川上旗男「故郷喪失」秋原勝二（滿蒙評論）「藝術學と方法」三好弘光「滿洲短歌合崩十周年記念と其の業績」永原いね子「旅人の記」北鮫夫「詩日記「東三樹」「女」（作文）「小說の印象寸評」町原幸二「滿日連載中篇小說を讀む」富田 秋原、青木、松原、落合、町原「第一回G氏文學賞推薦事由」（大連公論）「胎動する滿洲歌壇」岡二郎（滿洲公論）「夏」福原清一「檢波器」畠山六十「南嵐のひとときり」西島貞子「死せる花と星」藤井千鶴子「虫目鏡」甲斐雍人（大新京日報）「サラリーマンの旅行」武川葉之輔「野びる」池邊青季「或る生活と畫家」赤川幸一「滿洲文學の新精神」赤川幸一「道化讀者の感想」藤塚贅三

▲小說—「女」澤木峰生（滿蒙評論）「春の一節」谷川らん子「別府の宿」福家富士夫（新天地）「夜の話」秋原勝二「明日」富田壽（作文）「滿洲の受胎」工清定（大連公論）「零になる翅」岡二郎（滿洲公論）「煙館の殺人」大庭武年（旅行滿洲）

▲詩—「眞夏」井上麟二「青嵐」古川賢一郎「潮風」八木橋雄次郎「涙」小杉茂樹「線魔」小池亮夫「わたしは答へた」高木恭造「眞夏」松畑優人「正午の夏」矢原禮三郎「愛憐の朝」古屋重芳「海」若鳥叶「蟬の歌」坂井艷司「夏」三好弘光「美しき鷹」濱田帆六（滿日）「今日の人」落合郁郎「表情・道」小杉茂樹（作文）「四月集」龍口武士「遠近法」三好弘光（滿洲公論）「戲畫」井上麟二「電車の歌」「廢物の歌」松畑優人「僕の人形」「引込線」八木橋雄次郎「懷疑」小池亮夫「薔薇百科辭典」三好弘光「海」「海」「ロビンソン」龍口武士（鵲）

八月

十一日 文話會新京支部設立準備委員會於大連東拓ビル三葉

十二日 三宅豐子歌集「七草」出版記念會於奉天滿毛百貨店五階

十四日 矢田津世子、大谷藤子來連

十六日 井上長三郎來滿歡迎會アヴアン・ガルド・クラブ主催於大連東拓ビル三葉

十七日 文話會新京支部委員會於大興ビル

二十一日 文話會新京支部成立大會

二十五日 文話會大連例會談話「北支事變の見通し」島屋進

治於大連伏見台圖書館

△上村哲彌「親たるの道」出版

△「作文」發行所大連秀月台九七の一の四に移轉

△詩集「裸跣詩信」大連裸跣詩社より發刊

（滿日）「童謠を繞る滿洲の諸相」鹿島鳴秋「社會時評」田村詢一「川端康成小論」大谷健夫「荷風と髮堂」橋本八五郎「文藝時評」絲山貞家「島田幸人と作品」市村力「尾崎一雄」富田壽「燕京籠城記」江內豐「滿洲文學と滿洲生れのこと」江原鐵平「人體隨筆」大野斯文、高木恭造、井田潑三、古川哲次郎阪口弩太郎 藤川夏子、八木橋雄次郎 川口彦太郎、三好弘光、福家富士夫、若鳥叶、川上旗男「紅菁亭雜草」工清定「滿洲文話會への課題」青木實「映畫時評」竹內晋「滿洲における文學の方向」川上旗男「東洋の猶太民族—秋原・江原兩氏の所論に就て」西村眞一郎（新天地）「教育の環境としての滿洲の特殊性」湯下誠一郎

（滿蒙評論）「前衛繪畫」三好弘光「惡魔に墜ちた醫師」紫藤貞一郎「島田君の藝術」高橋勉「旅人の記」北鮫夫「戀愛」東三樹

（滿洲公論）「現代の焦燥」福原清一「文化の實力」畠山六十「帶」白井尙子「喜怒哀樂帖」橋本八五郎

（大新京日報）「藝術と實生活の力」遠藤美津男「阿汁哈達探碑の記」杉村勇造「文話會感想」古川哲二郎「偶感一皿」「隨筆の愚痴」藤塚贅三「俸給袋」「惡黨の日記」河利致「シユプレヒコール北支事變一幕」一谷清郎

（日滿女性）「滿洲文學の問題」城小碓

（滿洲行政）「滿洲文壇回顧」大內隆雄

▲小說—「人影」池淵鈴江高「梁歌」坂井艷司（新天地）「純情」澤木峰生「枯木と老婆」秋原勝二（滿蒙評論）「農談」岡二郎（滿洲公論）「滿洲の受胎」工清定（大連公論）「河童」島崎恭爾（日滿女性）「S軍醫上尉の話」冬木辛二 旅行滿洲）

▲詩—「影と生物と」松川笛秋（滿日）「詩—二篇」城小碓「水流」鈴木十良三「かぜ」「丘によせて」我孫子元治「流れ」植上八重子「專用線」今村義夫「虛無」西町春介「幼兒」廿地滿「しづかなしづかな」水野靜芽「小石」古城毒「憂鬱」八木ひと美「おもひで」水城雅夫「斷想」川原田憲（裸跣詩信）

九月

五　日　川上旗男離連東京へ
十　日　旅順句會於森脇宅
十八日　文話會大連例會「文話會事業討議」於大連伏見台圖書館
十九日　旅順句會子規忌於旅順新市街千歳倶樂部
アヴアン・ガルド・藝術家クラブ委員會於大連マルキタ
二十九日　文話會委員會於大連東拓ビル三葉
△「滿蒙評論」休刊
△江川三郎（井上郷）坂井艶司〃作歌〃同人となる
△西原茂〃鵲〃同人となる
△滿洲文話會事務所大連東公園町技術會館内へ移轉
△「滿洲川柳句集」大連川柳社より發刊
△本月落合郁郎の「地元作品評」中の詩評に對し八木橋雄次郎よりの反駁あり討論繰返されて問題となつた。
（滿日）「驅逐の北支を行く」島田清「地元の作品評」落合郁郎「ふるさと」金崎賢「戰時と文學の夢想」森田茂「文藝時評」紫藤貞一郎「頃日斷想」安土眞赫「詩の擁護のために」八木橋雄次郎「秋の隨筆」三溝沙美「建設の文學」木崎龍「博物隨筆」小林勝「秋日隨想」町原幸二「八木橋雄次郎氏への返事」落合郁郎「滿洲文化の文學的基礎」上野凌嶽「秋を讃ふ」八木杜朗「超現實主義繪畫が難解だといふ問題」三好弘光（作文）「最近滿洲雜誌の作品」富田壽「映畫時評」秋原勝二
（滿洲公論）「喜怒哀樂帖」橋本八五郎「島田幸八論」三好弘光「新文學と鄕土的採掘」岡二郎
（滿洲行政）「身邊漫談」藤山一雄「新京の俳味點描」生田鳴秋
（新京日日）「埴岳の町」島田清
「滿洲文話會の社會性」岡二郎
（大新京）「滿洲における文學當面の問題について」佐藤技郎「大同劇團初公演を觀る」坪井與「祀孔の日」杉村勇造「東新京の秋」鈴木啓沙吉「大同劇團の創立について」松本秋夫「近頃雜感」藤塚賢三「中秋節前後」北村謙次郎「朝霧」松川幹郎「言表美論」松川幹郎「旅心」河利致「作品の傾向康成其他」藤塚賢三
▲小說―「霧雨」三宅豐子「藤の花」池淵鈴江「桔梗の季節」松原一枝「晩學」町原幸二（作文）「花葩」北村謙次郎「ぎす」宮原欣（新天地）
「農談」岡二郎（滿洲公論）「秋とアパートの住人たち」奥一「蔣」境

野重明（滿洲行政）「弓子の手紙」G駿平（旅行滿洲）「富ちやん」河利致（大新京）
▲詩―「鴉」小杉茂樹「七月の愛の歌」「新綠の夢」古屋惠芳（作文）「胎動の歌」「テント村にて」八木橋雄次郎「或日―四篇」松畑優人「湯」「裂傷」小池亮夫「ニュース」「秋」「死」三好弘光「書齋」「太陽年鑑」「夜の歌」西原茂「揚子江をさかのぼる歌」「浦島子傳」「旅」瀧口武士「神・科學・人」「猿」「花」井上麟二（鵲）

十月

二　日　「文學親話會」滿洲國民生部社會司並滿日文化協會共同主催「文藝親和會」事項の一項として滿洲國における文學作興の手段を檢討、於新京大興ビル
三　日　新京文話會臨時集合於新京大興ビル
十七日　開原俳句柳絮會於開原新公園
二十日　文話會新京例會於新京大興ビル
二十二日　岡二郎離連東京へ
三十日　文話會大連例會談話「戰爭と文學」大谷健夫於大連伏見台書館圖
△「滿洲文藝年鑑」第一輯G氏文學賞委員會より發刊
△「滿洲公論」休刊
△「文苑」大連圖書館員を會員として發刊
△「新土」新京文藝集團より發刊
△藤原定氏滿鐵入社
△山内靜夫隨筆集「生活」電々會社より發刊
△伊地知進作品集「彈片に咲く花」滿鐵社員會より發刊
（滿日）「戰爭を描いた文學について」大谷健夫「二科展を觀て」川上旗男「日記文學論」渡部榮「落合郁郎氏への再返事」八木橋雄次郎「三井良太郎の死」眞畝星麿「明暗隨錄」松崎鶴雄「滿洲青年として」鈴木篁二「文藝時評」井上麟二「事變と論策」春田武「友田恭助追想」芹澤吉雄「兒童繪畫について」高橋勉「幻想の文學」加納三郎「戰爭と國民文學」芹川鞆生「地元小說評」福家富士夫「目送記」長谷川四郎
（新天地）「映畫雜記」竹内晋
（滿蒙評論）「戀愛について」三好弘光「旅人の記」北鮫夫
（文苑）「芥川龍之介論稿」大谷健夫「デュヴイヴイエの正體」竹内晋
（新土）「文學斷想」篠原捷二

（哈爾日）「哈爾濱における文藝人懇談會について」近東綺十郎
（新京日日）「忙中雜記」今村榮治
「秋風帖」島田清
（大新京日報）「再び滿洲文學のために」佐藤四郎「氣運について」北村謙次郎「國語を擁護す」夏本草郎「吸殼」松川幹郎「旅の老婆」「詩精神再吟」河利致「國のない風景」佐藤孜郎
▲小說―「老家行」長谷川四郎「ある街筋の話」靑木實（新天地）「空拳」矢留八郎（滿蒙評論）「はは こぐさ」林紅子（文苑）「或る事件の序」今村榮治（新士）「或る生活」長谷川濬「苦力」牛島春子（滿洲行政）「安東」島崎恭爾（旅行滿洲）
▲詩―「北支詩鈔」四篇矢原禮三郎（滿日）「風車」坂井艷司「露天市場」橋本末喜（文苑）「いくさ雲」太田まさし「秋」伏木龍三郎「生へる日の歌」堀井正一「この流民」泉芳雄（新士）

十一月

十七日　文話會新京例會「文藝誌取締方針に關して」於新京大興ビル
二十八日　文話會總會「滿洲における文學運動の回顧」於大連「大力」
△新京文化倶樂部結成
△城小碓氏「日滿女性」文藝編輯を辭す
△宮下秀雄氏―〃鵲〃同人加入
△林重生氏―旅行滿洲―編輯に當ることとなる
△羽宗長靖氏―旅行滿洲編輯を辭す
△森脇龔治歐洲旅行記念短歌句集「羈旅諷詠」出版
△橋本八五郎氏滿鐵退社安東學校組合へ轉出
△蘆澤吉雄氏瓦房店滿鐵地方事務所より北支事務局へ轉出
（滿日）「滿洲文壇とは何か」江原鐵平「バンプタオ集團の繪を見る」田中總一郎「最近の支那評論界瞥見」大村達夫「在滿雜誌論」大杉直也「奉天第一劇壇を見る」絲山貞家「文藝時評」藤原定「滿洲美術聯盟展評」三井正登「批評の基準について」福家富士夫氏へ」坂井艷司「靑年の感傷」鈴木篁二「滿人ものを何故書くか」秋原勝二「論壇時評」土井章「フオト藝術斷片」槇一枝「社會時評」奥藤多藏「地元文藝評」八木橋雄次郎「初冬隨筆」白井尙子、藤井千鶴子、武田勝利、伊東千鶴子
（新京日日）「文學靑年のサロンの推移」「十月行文帖」大內隆雄「熟河追放序章」島田清（大新京日報）「映畫の藝術的一考」遠藤美津男「文學の道と題して遠藤美津男氏へ」松川幹郎「故三井良太郎を語る」眞殿星磨「云ひたい事松川、遠藤兩氏の文學道に對して」河利致「ラジオ藝術の可能性」長谷川正雄「常勝と常識」橋詰勉「滿支固有名詞の發音矯正」富田男太郎「黃鼠の計」北村謙次郎「滿洲映畫女優讀本」近藤伊與吉「墨繪」宅野田夫「晴れ行く親日思想朝鮮侮日思想」小森丈夫「國語擁護と作歌の批評」相川濬「飜譯・幽靈已金著短篇將軍より」氏森幸雄「桂定治郎氏を滿洲歌壇に迎へて」鈴木濟「再び國語擁護を相川濬氏に」夏本草助
（鵲）「表現と描寫」三好弘光「鵲回顧」八木橋雄次郎「詩神」秋畑優人（新天地）「映畫雜記」竹內晋「文苑）「川端康成小論」大谷健夫「オルダス・ハックスレイ」春野みどり「クレエル西へ「行く」竹內晋（滿蒙評論）「十月の文藝時評」武川葉之輔「詩評の常識性」西原茂「冗舌記」靑木實「旅の無駄ごと」橋本八五郎
（滿洲公論）「鶯は下手に歌ふ」福原清一「現代世相と花嫁」白井尙子「津輕照子夫人のこと」藤井千鶴子
▲小說―「逃亡」今村久米子（大新京日報）「流離」竹內正一「黑髮の滑」吉野治夫「雨の日」古川賢一郎「農夫」靑木實「汽笛」池淵鈴江「月夜譚」秋原勝二（作文）「其の日」松原一枝「續老家行」長谷川四郎（新天地）「牧師館」長谷川四郎（滿蒙評論）「哀戀譚」西田孝雄「秋緣」且高靑（文苑）「海膽」松原一枝
「蝶と星」石森延男（滿蒙評論）

十二月

土「弘の場合」古城毎「秋雲崩る」下田孝雄（滿洲公論）「ある少年の記錄」木崎龍「仙人館」福家富士夫（滿洲行政）「千代子」町原幸二（旅行滿洲）「意地」河利致（大新京）
▲詩―「松」小杉茂樹「茜雲」坂井艷司（作文）「散步」井上麟二「白畫像」「食人種」「感想」「粘土の神」瀧口武士「砂塵篇」「或る雅樂調」西原茂「心」「若い日」「酸つぱい苹果」「有病」松畑優人「秋を顫ふ」「古水」小池亮夫「人造石」八木橋雄次郎「無禮な季節」三好弘光「鵲」「秋晴」「秋風獨吟低唱」「坂井艷司「鳴蛙」橋本末喜（文苑）「蝶と星」石森延男（滿蒙評論）

六　日　第二回「文學親話會」滿日文化協會滿洲國民生部社會司共同主催於大興ビル

十五日　忘年文藝懇親會、新京文話會、新京文化倶樂部共同主催於新京賓宴樓

二十六日　アヴアン・ガルド・藝術家クラブ總會於大連いろは

二十八日　文話會大連例會「十二年度創作總評」於大連伏見台圖書館

△高木恭造〃作文〃同人參加

△松原一枝作文同人を退く

△奥一著作集「與太もんのマンシウ」高溪社より出版

△詩集「裸跣音信」裸跣詩社より發刊

△「凍土」新京文藝集團より發刊

△「醫科」第五號滿洲醫大文藝部より發刊

（滿日）「一九三七年滿洲文壇の回顧」古川哲二郎「黄嬴の死」宮川靖「十二月創作評」町原幸二「哈爾濱の冬」竹内正一「その昔を語る」瀧口武士、大島濃明、中澤新一、加藤映一「論壇時評」加納三郎「北條民雄の死を悼む」紫藤貞一郎「滿洲インテリ論」大住孝二

（新天地）「一九三七年滿洲の回顧」—社會相・加納三郎、文學・大谷健夫—繪畫・中島荒登—映畫・竹内晋——寫眞・淵上白陽（滿蒙評論）

「滿洲文藝家の聲を聽く」座談會

「醫學と文藝」紫藤貞一郎「繪畫時評」三好弘光「今年の文藝回顧」吉野治夫「大連歌壇歳末記」中島新

（醫科）「隨筆二題」相原信作（滿洲公論）「滿洲雜誌寸評」斬人斬馬劍「文藝時評」福原清一

（文苑）「ダンテに關する覺書」大谷健夫「隨讀隨想」久安勇「シナラ」春野みどり

（大新京日報）「季節の窓から」島田清「深谷溫泉にて」竹内節夫「三七年の滿洲文壇」佐藤玫郎「本年の新劇運動」坂垣守正「滿洲國と國家宣傳」上野百合子「鬼の笑ふ話」鈴木啓佐吉「歌壇回顧十二年の覺え書き」三井實雄「滿洲美術の一歩」那迦弘「文學斷想」德富春雄「晴れ行く親日思想朝鮮侮日思想」小森丈夫「文藝三百六十日」赤川幸一「滿洲映畫の創刊」齋田善平

▲小說—「繪の旅」町原幸二「泥家」鈴木啓佐吉（新天地）「濁流の中」下田善司「執着」木暮倉（滿蒙評論）「幾山河」富田壽「故郷」井上郷（作文）「重い宗氣」星子未知男「鬼向日葵」福家富士夫「筑波寮」中山美之「喜樂莊七號室」小日向和夫（醫科）「或る夫婦」冬木羊二「嫁」何醒徵、戲曲「岐路」板垣守正（滿洲行政）「牧師館」長谷川四郎（文苑）「三つの車窓」青木實（旅行滿洲）

▲詩—「夜ひらけなば」古屋重芳「秋の海」「海戰」坂井艶司「星夜」小杉茂樹（作文）「戰爭」「蜂群」鈴木十良三「そしてすべては」我孫子元治「秋の歌」植上八重子「窮乏せるアポロ神の歌」「或る書かるべき小說の序」廿地滿「歸趨の歌」「崩壞の歌」西町春介「喪失」水城雅夫「路」「小さき反逆兒の唄へる詩」深町敏雄「煙・海になまける」水野靜芽「痣のある鶴」「そのころ」古城毒（裸跣音信）「南砂」佐々木一臣「悪夢」鳥居次男「黄河」「睡眠」「斷章」高木恭造「嘆息」「疲えたる酒」黒田源次（醫科）「祈禱歌」大元時英（滿洲行政）「詩—四篇」母里山正夫（滿洲公論）「蟋蟀」坂井艶司「崖」橋本末喜（文苑）「冬の歌」佐々木勝造「秋」沼田哲二（大新京）

新聞雜誌社一覽

△滿洲日日新聞社　大連市東公園町
△滿洲新聞社　新京市中央通
△新京日日新聞社　新京市永樂町
△哈爾濱日日新聞社　哈爾濱埠頭區
△協和　大連市東公園町滿鐵本社內滿鐵社員會（大正五年）
△滿蒙　大連市紀伊町九一滿洲文化協會（大正九年）
△新天地　大連市楠町三新天地社（大正十年）
△滿洲公論　大連市伊勢町一一三鈴鹿ビル滿洲公論社（大正十一年）
△滿鮮　大連市須磨町六滿鮮社（昭和二年）
△日滿女性　大連市若狹町四二日滿女性社（昭和三年）
△大連公論　大連市櫻花台三四大連公論社（昭和三年）
△滿蒙評論　大連市但馬町七八滿蒙評論社（大正四年）
△新京（モダン滿洲）新京市祝町二の四モダン滿洲社（昭和七年）
△日滿公論　奉天市江島町二〇　日滿公論社（昭和四年）
△月刊滿洲　撫順市東八條通四七月刊滿洲社（昭和三年）
△明明　同右（昭和十一年）
△鐵魂　鞍山昭和製鋼所社員會（昭和十年）
△合萠　大連市柳町六三滿洲短歌會（昭和三年）
△滿洲短歌　大連市浪速町一〇九（香川方）滿洲鄉土藝術協會（昭和四年）
△滿洲　大連市神明町一〇〇（江口方）滿洲俳句會（昭和六年）
△作文　大連市秀月台九七の一の四作文發行所（昭和六年）
△鵲　大連市須磨町五二鵲發行所（昭和九年）
△觀光東亞　奉天市住吉町五　ジヤパン・ツーリスト・ビユーロー（昭和九年）
△平原　奉天市滿洲醫科大學文藝部（昭和七年）
△醫科　哈爾濱透龍街九
△北滿歌人　新京市安大路一一滿洲行政學會（昭和九年）
△滿洲行政　大連市鳴鶴台二〇三
△アカシヤ　大連市青雲台五〇あかしや短歌會（昭和十一年）
△滿洲通信俳句　大連市青雲台二〇大連俳句會（昭和十年）
△滿洲歌人　新京市雲鶴台二〇六三井方滿洲歌話會（昭和十三年）
△裸跣詩社　大連市攝津町八七盛方
△大連番傘　大連市八幡町一一の四一大連番傘川柳會
△新京文藝集團　新京市同大街自治會館三一四北村方

備考―括弧內―創刊年

文藝團體

滿洲アヴアン・ガルド藝術家クラブ

昭和十二年五月結成。

滿洲における前衛藝術家の懇親と相互の啓發、文化的役割の遂行を目的として生れ、主として畫家詩人を會員とし、滿洲における新時代の藝術開拓に資するところ大なるものあるべく期待されてゐる。

隨時集會を開き展覽會の主催後援其他の事業を行つてゐる。

委員
（常任）三好弘光、三井正登
（委員）橋本勝、八木橋雄次郎
會員
（顧問）井上長三郎、外山卯三郎、龍口修造、山中散生、福澤一郎、河野恕、佐波甫
四宮潤一、（繪畫）橋本勝、高橋勉、野本悌二、大河內省三、松畑優人、三好弘光、三井正登、島田幸八（故）、井上麟二、池田滿、岡二郎、吉野治夫、龍口武士、八木橋雄次郎、藤敏强、小池亮夫、田中佐々市、布施正子、寺尾茂子、加藤正之助、內田實、板谷喜美子、吉田智眞留、津田維福、柳英夫

滿洲文話會

昭和十二年六月三十日結成

從來滿洲における文化方面の文藝家間に綜合的聯絡親睦の機關が存在しなかつたため、その必要に應じて十數氏の發起人により企劃せられ、全滿の文筆家を殆んど網羅して結成せられた。會場は文藝を中心とし、繪畫、舞踊、音樂、科學等各種の文化面に文筆を以て活躍してゐる人々を集め、將來の滿洲における文化の助成促進のため文化的意義ある凡ゆる事業を企劃實行せんとしてゐる。

會員は全滿に約百七十名あり、大連、新京、哈爾濱等各地に文話會を有し、漸く具體的活動に入つてゐるが滿洲における最初の文筆家綜合機關として最も大きなものである。

毎月例會、年一回總會を開催する他、「文話會通信」なる會報に依り會員の聯絡を保ち、地方會員作品の發表斡旋、名士招待座談會等を行つてゐる。

文話會委員　十二年度

紫藤貞一郎、橋本八五郎、富田充井上麟二、龍口武士、横澤宏、八木橋雄次郎、青木實、大谷健夫、古川哲次郎、高尾憲太郎、岡二郎、今井一郎、大內隆雄、宮川靖（常任委員）

西村眞一郎、吉野治夫

會員

（大連）伊藤順三、井上一郎、井田潑三、石森延男、池田孝、絲山貞家、濱田篤一郎、西村眞一郎、富田充、大谷健夫、大野斯文、大島濤明、大脇武夫、奥藤多藏、河野想、川口彦太郎、香川末光、寛太郎、鹿島鳴秋、甲斐水棹、横澤宏、吉野治夫、高尾憲太郎、高山峻峰、田中總一郎、武田一路、田川良一、武田勝利、津田維福、長濱哲三郎、中薛新一、中島新、樋原健三、柳生昌勝、古川哲次郎、福富八郎、胥木啓、胥木實、秋原勝二、齊藤欣志郎、坂口千馬太、三溝又三、三井正登、水口薇陽、紫藤貞一郎、城小碓、島崎恭爾、進藤智惠子、平井孝雄、福家富士夫、中川潤、古屋重芳、坂井艶司、渡部榮細井常夫、石田貞藏、桐原東一、長谷川甫、加藤齡明、逮藤武之輔、横内圓次、甲斐雅人、鈴木小兵衛、永原いね子、橋本末喜、林一郎、宮島正美、上田淳一、下田孝雄、大下三雄、加藤二郎、吉田智眞留、藤原定大岩峯吉、甲斐巳八郎、上村哲彌、毛利元輔、諸谷司馬夫、森脇龔治、内山若枝、木原鐵之助、大谷勇夫、

（旅順）伊東法俊、伊東千鶴子、菱田正基、島田のはぎ、瓜生茂秋、

（哈爾濱）古川賢一郎、竹内正一、日向伸夫、新井重美

（新京）今井一郎、藤井圓夢、夏本草郎、佐藤四郎、西田猪之輔、三井實雄、竹田譲、落合郁郎、山口愼一、桃北好澄、宮川靖、藤山一雄、佐々木勝造、松本光厲、坪井興、矢原禮三郎、北村謙次郎、山川博、堀善照、椿紗智、今村久米子、奥一、江草茂武本正義、美濃谷善三郎、池邊胥李島田幸二、大阪嚴、高木喜久藏、今村榮治、天野光太郎、松川幹郎、大野澤綠郎、小池龍雄、杉村勇造、木崎龍、下島甚三、篠原捷三、太田正玉置昇平、蘇容叟、長谷川濟、磯部秀見、

（吉林）志賀清一、村松周二、

（奉天）富田譯、大庭武年、小杉茂樹、三宅豐子、白井尙子、平野博三宮川一郎、林重生、石原嚴徹、加藤郁哉、田中武夫、藤井千鶴子、

（撫順）吉賀俊甫、砂見爽、城島舟禮、竹内節夫、母里山正夫、工清定

（其他）高木恭造、橋本八五郎、奥行雄、島田清、上野凌嶸、吉田幸一境野重明、島屋進治、秩父忠敬、小山田忠男、長谷川四郎、竹内晋、近東綺十郎、岡二郎、川上旗男、西島貞子、松原一枝、

（以上昭和十三年六月現在）

滿洲文話會々規

第一條　本會ハ文化文藝ニ關心アル會員相互ノ聯絡親睦ヲ圖リ滿洲ニオケル文化活動ノ助成促進ヲ目的トス

第二條　毎年一回總會ヲ開キ、會員相互ノ研究發表座談懇親ノ機會トス

第三條　會員ノ研究論文作品等ノ發表刊行ニ對シ斡旋援助ヲ圖ル

第四條　名士來滿其他機會アル毎ニ講演會又ハ座談會ヲ催ス

第五條　文化的意義ヲ有スル事業ヲ主催又ハ後援ス

第六條　毎月一回「滿洲文話會通信」ヲ配布シ會員相互ノ聯絡機關トス

第七條　日本ニオケル文化文藝團體トノ聯絡ヲ圖ル

第八條　本會々員タラントスルモノハ會員二名以上ノ推薦ニヨルモノトス

第九條　會員ニシテ退會センストルモノハ常任委員ニ通知スヘシ

第十條　本會ノ秩序ヲ紊シ又ハ會費滯納二回ニ及ブモノハ除名スルコトアルヘシ

第十一條　本會ノ入會金ヲ五十錢トス

第十二條　本會々費ハ半箇年金一圓五十錢トシ前納スルモノトス

第十三條　本會ノ會計報告ハ「滿洲文話會通信」紙上ニオイテ之ヲ行フ

第十四條　本會々員ノ所在スル地方ニハ地方名ヲ冠シタル文話會ヲ置ク

第十五條　本會ニ委員若干名ヲ置キ内二名ハ常任委員トシテ會務ニ當ル

第十六條　委員ハ總會ニ於テ選擧シ其ノ選出方法ハ各地文話會ヨリ會員數十名ニツキ一名ノ割合ニ依リ選出シ其ノ任期ハ一箇年トス常任委員ハ委員會ノ互選ニヨル

第十七條　委員會ハ隨時召集シ會活動ニ關スル事務及基礎的合議ノ機關トス

第十八條　各地文話會ニ幹事若干名ヲ置キ各地文話會ノ事務ヲ處理シ本會委員ハ其ノ所屬スル各地文話會ノ幹事ヲ兼任スルモノトス

第十九條　本會ノ會計ハ會總體ニ關スル會計ノミヲ取扱ヒ別ニ各地文話會ハ獨立ノ會計ヲ設ケ各地文話會ノミニ關スル會計ヲ取扱フ

第二十條　本會事務所ヲ大連市東公園町三五・滿洲技術會館内一階ニ置ク

滿洲文話會

（五十音順）

▲相川　澪　哈爾濱市透籠街九號

▲青木　啓　大連市山縣通市營住宅滿洲弘報協會

▲青木　實　大連市秀月臺九七大連圖書館「作文」同人

▲青山勝重　大連滿鐵本社主計課

▲秋原勝二（渡邊　淳）　大連市蔦町對山寮　滿鐵經理部　庶務課「作文」　同人

▲安達義信　哈爾濱阿什河街七四滿鐵第二社宅　哈鐵產業課　詩集「一月の河」

▲阿南次義　大連市　龍ケ岡水源池「青い塔」　同人

▲天野光太郎（價殿星麿）　新京記念公會堂內

▲新井重美　哈爾濱斜紋街新井病院

▲荒川石楠花　大連市大和町二六ノ一二六「合萌」同人

▲池田　孝　大連市聖德街一三三滿鐵調査部資料課　著書「現代支那の教育」

▲池邊青李　新京市興安胡同二〇三滿洲國協和會本部宣傳部

▲石田貞藏　大連市月見ケ丘　大連商工會議所

▲石原巖徹（沙人、青龍刀）　北京滿鐵北支事務局運輸部旅客課

▲石森延男　大連市　長春台　一二三大連彌生高女教諭　童話集「まんちゆりあ」其他

▲磯部秀見　新京國務院弘報處

▲井田透三（西巻透三）　大連市西通六四　大連放送局囑託

▲市村　力　大連聖德街四ノ一〇六「大連詩書倶樂部」同人　獨立美術展作家

▲伊東千鶴子　旅順市　吾妻町　三二「水纜」「アカシヤ」同人

▲伊東法俊　旅順市吾妻町三二　旅順工大豫科教授

▲伊藤順三　大連市光風台一七　滿鐵弘報課

▲絲山貞家　大連市不老街二三三高山ビル　大連放送局「大連藝術座」主宰

▲井上一郎　大連市下馥町二四

▲井上　鄕（井上三郎）　大連市吉野町　滿鐵地整編纂係「作文」同人

▲井上麟二　大連市久方町一〇「鵲」同人

▲今井一郎　新京滿洲新聞社

▲今村榮治　新京特別市崇智胡同一〇九豐樂莊七號室「新京文藝集團」同人

▲今村久米子　新京市興亞胡同三一七

▲今村義夫　大連市櫛津町八七「裸

跣詩社」氣付「裸跣詩社」同人

▲稻川凱二路（稻川淺二郎）新京市清和街一二一　著書「滿洲民謠曲譜」

▲稻葉孝二　鐵嶺輸入組合理事長　詩集「夜航船」

▲上田淳一　大連市滿日編輯局

▲上野凌嶙　龍江省訥河城外鐵道局宅一號ノ二

▲牛島春子　龍江省拜泉縣副縣長公館

▲內山若枝　大連市東公園町技術會館內「滿洲婦人新聞」記者　「滿洲短歌」同人

▲瓜生茂秋　旅順師範學校

▲江川三眞　奉天鐵道總局資料課　奉天市朝日町四一ノ三

▲江草　茂　新京市昌平胡同六一二民生部保健司囑託「健康滿洲」編輯

▲衛藤利夫　奉天市新高町三　奉天鐵道總局圖書館長　著書「滿洲生活三十年」「糧粗」

▲遠藤武之輔　大連市　但馬町　七八滿日編輯局

▲大岩峰吉　大連市大和町一　大連市收入役　隨筆集「三百六十五日」

▲大坂　巖　奉天市住吉町ジャバンツーリストビューロー編輯部

▲大森志朗　新京寬城子　建國大學助教授

▲大下三雄　大連市山縣通一四八ノ九學ノ五「アカシカ」同人

▲大島濤明　大連市西公園町一四九

▲太田　正　電々會社會計課　「新京文藝集團」同人

▲大谷健夫（大谷武男）大連市下葵町五一ノ六ノ四　大連圖書館「作文」同人

▲大野斯文　大連市山城町二ノ二三

▲大野密雨　撫順炭鑛庶務課

▲大野澤綠郎　新京圖書館

▲大庭武年　奉天市商埠地十里碼頭滿鐵社宅七ノ一　鐵道總局愛路課

▲大脇武夫　大連市彌生町　彌生寮滿鐵調査部資料課

▲岡二郎　東京市牛込區早稻田鶴卷町一一二文新莊「歌集」「闇」「呂」「じふさん」

▲奥　一　新京　寬城子頭道街二六高粱社經營「新京文藝集團」同人小說集「與太もんのマンシュウ」

▲奥　行雄　新京滿洲新聞編輯局

▲奥藤多藏　大連市三室町二七　南滿工專教授

▲落合郁郎（落合利巨）天津日本租界宮島街三六興友寮　誌集「三人集」「作文」同人

▲甲斐水掉（甲斐操子）大連市鳴鶴臺二〇三　歌集「埴道」「花アカ

シヤ」「水甕」同人「アカシア」主宰

▲甲斐雍人　大連市鳴鶴臺二〇三「アカシヤ」同人

▲甲斐巳八郎　大連市東公園町滿鐵社員會編輯部「滿洲鄉土色研究會」會員

▲香川末光　大連市大和町二六の二四「滿洲短歌」同人

▲柿沼　實　奉天市富士町シンガーミシン會社詩集「古き旅行地圖」

▲寬　太郎　大連市　光風台一七六滿鐵文書課英文係

▲鹿島鳴秋　大連市若松町二一　滿日囑託

▲上村哲彌　大連市榊町七六　滿鐵參與日本兩親再教育協會　主幹　著書「親たるの道」「續親たるの道」「愛兒の躾方讀本」「兩親の再教育と子供研究」

▲加藤郁哉（今枝折夫）奉天市朝日町三七ノ四　鐵道總局旅客課觀光係主任　詩集「逃水」「杏」「滿洲異聞」

▲加藤二郎　大連市　監部通大信洋行

▲加藤齡明　滿日編輯局

▲金子　麟（麒麟草）新京北安路五〇一　新京赤十字社新京診療所長

▲加納三郎　大連市清水町一平井方

▲川上旗男　東京市大森區上池上町六七　滿鐵東京支社鐵道課

▲川口彥太郎　大連聖德街一ノ六八

▲木崎　龍（仲賢禮）新京市龍門街第四政府代用官舍五七〇

▲北村謙次郎　新京市外城寬子一區街　滿洲映畫協會「日本浪漫派」同人

▲木原鐵之助　大連市西通小島ビル辯護士

▲桐原東一（若蔦　叶）大連市初音町一四二ノ七　同愛病院

▲近東綺十郎（棧　朝男）北京華北電政總局總務部調査課

▲櫻田正東　大連市清見町六一「滿洲短歌」同人

▲久米幸義　齊々哈爾鐵道局

▲小池龍雄　新京市興安大路興安莊

▲小池亮夫　吉林朝日町一七ノ六五ノ一　吉鐵旅客科「鵲」同人

▲河野想（河野　久）大連市千草町三〇　滿日學藝部

▲小杉茂樹　奉天市浪速通四五　齋藤洋行　詩集「麥の花」「作文」同人

▲古城　毒（宮添正博）大連市櫛津町八七盛方　電々會社　「裸跣詩社」主宰

▲小日山直登　鞍山昭和製鋼所社長歌集「獄に行く」「黃塵」「大磯を臨ゆ」

▲齋藤欣志郎　大連市若狹町二四

▲坂井艷司　大連市惠比須町九九ノ

三　大連圖書館「作文」同人
▲境野重明　奉天省西安縣西安炭礦總務課
▲坂口穹太郎（坂口千馬太）新京市義和胡同四〇四電々社宅三六の二　電々放送課
▲佐々木勝造　新京大同大街ニツケビル滿洲映畫協會「滿洲映畫」編輯
▲佐藤孜郎（佐藤四郎）新京中央通　滿洲新聞社編輯局
▲三溝沙美（三溝又三）大連市花園町六四　「ホトトギス」「平原」同人
▲澤井　寛　大連市西公園町一七五「青い塔」同人
▲志賀清一　奉天省海龍縣梅河口工務區
▲紫藤貞一郎　大連市若葉町九一の一　關東州廳衛生課長　醫學博士「科學ペンクラブ」會員　著書「實驗簿餘白」
▲柴田大馬（柴田一郎）大連市柳町五三「卿齋志異」
▲篠原摺二　新京市新發路　大同自治會館二四六林武氏方「新京文藝集團」同人
▲島崎恭爾　大連市霞町三ノ五ノ四「大連詩書倶樂部」同人　詩集「國際都市」
▲島田　清　熟河省　凌源營房胡同電々會社
▲島田のはぎ　旅順市　常盤町一八「合朋」同人
▲島屋港治　上海乍浦路ピーアスパート内　滿日支局長
▲志村末吉　鞍山　昭和製鋼所　社内「鐵魂」編輯部
▲下島甚三　新京市新發路大同自治會館三一四　北村氏方「新京文藝集團」同人
▲下田孝雄　大連市山縣通一四八ノ一ノ四
▲城　小雄（本家　勇）大連市伊勢町鈴鹿ビル「大連詩書倶樂部」同人　詩集「黑麥酒の歌」「假設の春」
▲城島舟禮（城島德壽）撫順東公園通月刊滿洲社
▲白井尙子　奉天市住吉町奉天ビル四五七片野氏方　滿洲日日新聞社記者
▲進藤智惠子　大連市磐城町一三三宅ビル藤田方「日滿女性」主筆
▲菅野雄木男（菅野啓介）鞍山昭和製鋼所「鐵魂」編輯部
▲杉村勇造　新京滿日文化協會
▲鈴木啓佐吉（三好啓佐吉）東新京局宅九ノ二
▲鈴木皇二　大連市　山縣通　一一一　滿鐵大連圖書館

▲鈴木小兵衛（大住孝二）新京市花園町四の六一著書「滿洲の農業機構」
▲砂見　爽　撫順東三番町藤飯氏方　詩集「街の印象」
▲芹川鞆生　旅順月見町二八
▲蘇　星（蘇容叟）新京市國務院弘報處
▲高尾憲太郎　大連菖浦町九三ノ一　滿日學藝部
▲高木喜久藏　大連市彌生町八「新京文藝集團」同人
▲高木恭造　本溪湖滿鐵醫院眼耳科「作文」同人「科學ペンクラブ」會員　詩集「まるめろ」「我が鎖魂歌」
▲高山峻峰（高山謹一）大連市臥龍台六八　大連汽船會社「滿洲」「曲水」同人
▲田川　亮　大連市神明町三四　福田方
▲瀧口武士　大連市霞町八六「鵲」「新領土」同人　詩集「園」
▲工　清定　撫順高等女學校
▲竹内正一　哈爾濱鐵道總局圖書館主事　「作文」同人
▲竹内　晋　北京滿鐵北支事務局資料室
▲竹内節夫　撫順東二番町十一　撫順新報社記者　隨筆集「石班魚」
▲武田一路　大連市桃源台桃林莊　滿日學藝部
▲武田勝利　大連市芝生町一一一　日本赤十字社大連病院藥局「アカシヤ」同人
▲竹内　讓　新京市百滙街六〇六
▲武本正義　新京電々會社放送課
▲田中總一郎　大連市櫻花台一六九　滿日編輯總務　戲曲集「午前八時」
▲田中武夫　奉天市白菊町二二新興ビル一ノ六　奉鐵總務課資係
▲棚木一良　新京滿拓公社
▲玉置昇平　新京中央電報局通信課「新京文藝集團」同人
▲秩父忠敬　大連市薩摩町二九　滿日編輯局
▲津田維福　大連市伊勢町二七
▲椿　紗智　新京市明倫街五〇二
▲坪井　興　新京市大同大街ニツケビル滿洲映畫協會製作部
▲富田　壽（高橋敏夫）奉天市稻葉町六六ノ一ノ二三　滿鐵總局貨物課「作文」同人
▲富田　充　大連市聖德街新二丁目四六七滿化社員「滿洲短歌」同人　詩集「奉朝」
▲外山英樹　大連市西公園一七五「青い塔」社内「青い塔」同人
▲中川　潤　大連市西公園町四三金子ビル
▲中島光夫（野地耕作）奉天中央

電報局内　詩集「春の基督」
▲中島　新　大連市天神町八ノ一三
「合崩」　同人
▲中薄新一　大連市聖德街四ノ二四
大連市社會課　著書「豚ちやんの記錄」
▲中村秀男　間島省延吉康平街　滿洲弘報協會延吉支局主任
▲長濱哲三郎　大連市　楓町五五
辯護士
▲永原いね子　大連市晴明台七二ノ六「合崩」　同人
▲中山美之　奉天市稻葉町八前田眼科醫院內「醫科」同人
▲夏本草郎　新京滿洲新聞社
▲楢原健二　大連市大和町三〇ノ五
大連神明高女
▲西川清六　大連伊勢町鈴鹿ビル內
「滿洲公論社」氣附
▲西島貞子　兵庫縣西宮市川東町四七「合崩」　同人歌集　「沙金」
「蒼波」
▲西田猪之輔　新京電々會社　「合崩」　同人　歌集「御空ゆく」
▲西田孝雄　大連市日出町一四ノ二ノ五　大連滿鐵圖書館
▲西村眞一郎　大連千草町一二五
▲西原　茂　大連市長春台一二〇
「鵲」　同人
▲橋本末喜滿鐵上海事務一所調査課
▲橋本八五郎　安東市六番通二丁目
安東省學校組合主事　著書「滿洲より母國へ」
▲長谷川四郎　北京南官坊胡同二五
滿鐵北支事務局資料室「世代」同人
▲長谷川　甫　大連老虎灘五二
▲長谷川　濟　新京大同大街ニツケ
ビル滿洲映畫協會
▲濱田篤一郎　大連市桃源台一三三
▲林　一郎（小此木壯介）　大連市初音町三四三　滿鐵　大連圖書館
沙河口分館
▲林　重生　奉天市住吉町五ジャバンツーリストビューロー「觀光東亞」編輯
▲菱田正紀（菱田正基）　旅順赤羽町一三ノ二
▲日向伸夫（高橋貞雄）　哈爾濱松花江街グランドホテル井手氏氣付
「作文」　同人　詩集　「白い繪本」
▲平野博三　奉天彌生町三　著書、「鮮滿の車窓から」
▲溪町敏雄　入營中「青い塔」同人
▲福富菁生（福富八郎）　大連市伏見町五八丹山莊　滿鐵社員會編輯部「滿洲鄉土色研究會」會員詩集「海の馬鹿」
▲福家富士夫　大連市柳町一一四
大連醫院皮膚科「醫科」同人　小

說集「眠劑」
▲藤井千鶴子（千種千鶴子）　奉天市平安通三八千種方
▲藤井圖夢　新京滿洲新聞社文化部
▲藤山一雄（靈南翁）　新京市北安南胡同九〇二著書「群像ラオコン」「滌鐵記」「歸去來抄」「新滿洲風土」記等
▲藤原　定　大連市清見町七六滿鐵調査役附社會文化係　「世代」同人　評論集「文學に於ける人間の生成」
▲冬木羊二（白石義夫）　新京保健所　「醫科」同人　小說集　「青き夜の醫師」
▲古川賢一郎　北京西交民巷北京鐵道局工務處土木科
「作文」同人「滿洲鄉土色研究會」會員　詩集「老子降誕」「氷の道」「貪しき化粧」「蒙古十月」「芽柳」
▲古川哲次郎（武川葉之輔）　大連市初音町八六　大連汽船調査係
▲古屋重芳　齊々哈爾正陽街一七三
滿洲國通信社「作文」同人
▲細井常夫大連市外甘井子滿化旭寮
▲堀口善照　新京市曙町六ノ四　三利公司
▲町原幸二（島田幸二）　新京市白菊町三ノ一二ノ四　滿鐵新京支社庶務課「作文」同人
▲松川笛秋　滿日營業局
▲松川幹郎　新京圖書館
▲松本光庸　新京市大同大街ニツケビル滿洲映畫協會製作部
▲松畑優人　大連市老虎灘汐見台十一「鵲」　同人「五果會」會員
▲松原一枝　福岡縣昭和通六二「九「洲文學」　同人
▲三木朱城　新京電々會社用度課
▲三井正登　大連市聖德街四ノ一八四大連中學教諭
▲三井實雄　新京電々會社　「滿洲歌人」同人
▲水城京一（江藤政數）　大連市二葉町一常盤ビル二階「踝跳詩社」同人
▲水口薇陽　大連市桃源台一五〇
▲美濃谷善三郎　新京放送局
▲宮井一郎　奉天市浪速通四伊豫ビル三〇九「作文」同人
▲宮川　靖　大連放送局　放送課長
▲三宅豐子　奉天市白菊町二二ノ一ノ一三「作文」「あしかび」　同人歌集「七草」
▲宮本のぶ　奉天市藤浪町四四　大連詩書倶樂部同人
▲宮島正美　大連市大和町三八ノ一一
▲宮原欣（中村芳法）　大連市楠町三「新天地」主宰「滿洲讀本」編

襲長篇「未來」「國境を越ゆれば」

▲三好弘光　大連市巴町一〇一　電業沙河口發電所「鵲」　同人「五果會」會員

▲武藤富男　新京　戯曲集「發明と自由戀愛」

▲村松周三　吉林朝日街二ノ六〇ノ二

▲毛利元輔　大連羽衣高女

▲桃北好澄　新京「滿洲歌人」　同人

▲森田　茂　新京電々會社放送課

▲森田富義　大連伊勢町　著書「滿洲巷說奇話哀話」「滿洲傳說牛鬼邪神」

▲母里山正夫　撫順四國町二八光風寮「日本詩壇」　同人

▲森脇襲治　大連市松山町二　大連療病院長　句集「羈旅諷詠」

▲諸谷司馬夫　大連市東公園町　滿洲國通信社

▲柳生昌勝　大連聖德街五ノ一四　大連彌生高女

▲八木沼淳雄　八木沼丈夫）　奉天鐵道總局「滿洲短歌」　同人　歌集「長城を踰ゆ」

▲八木橋雄次郎（矢留八郎）　大連須磨町五二「鵲」「新領土」　同人

▲矢原禮三郎　新京大同大街ニッケビル滿映製作部

▲山川　博　新京市崇智胡同五〇一　關交寮

▲山口愼一（大內隆雄）　新京市曙町二ノ十六　新京日日新聞社　著書「支那研究論稿政治經濟篇」

▲横澤　宏（柊　憲二　寺安鶴十）　大連市山縣通一四八ノ八ノ六山口氏方　滿日學藝部

▲與謝野麟　奉天鐵道總局圖書館

▲吉賀俊甫　撫順大官屯滿洲輕金屬

會社

▲吉田幸一　嫩江野線郵便局氣付中村部隊

▲吉田智眞留　大連市但馬町七八滿蒙評論社

▲吉野治夫　大連市桃源台一五八　滿日學藝部「作文」　同人

▲吉村四郎　新京市梅ケ枝町二ノ二七　上田ビル「蹶跳詩社」　同人

▲渡部　榮　大連市　白菊町　一二二　大連一中

昭和十三年十二月十日印刷
昭和十三年十二月十五日發行

定價金壹圓五拾錢

發行人　橘　秀一　大連市但馬町七八番地
編纂人代表者　吉野治夫　大連市東公園町三一番地　滿洲文話會
印刷人　橘　秀一　奉天市大和區揚武街一番地　奉天市大和區揚武街一番地
印刷所　立花印刷株式會社　奉天市大和區揚武街一番地
發行所　滿蒙評論社

不許復製

奉天市大和區信濃町十三番地

協和オフセット印刷株式會社

電話 三三—三五四三 三三—七九五八番 三三—三七七四

振替 奉天一五〇番

受電略號「ホウテン」キヨウオフ

出張所—新京・大連・哈爾濱

満洲文芸年鑑

第一輯～第三輯／別冊

一九九三年九月十日発行

解題 西原和海

発行人 久本三多

発行所 葦書房有限会社

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号

電話 福岡〇九二(七六一)二八九五

振替 福岡一—三九四三〇

印刷 アロー印刷株式会社

製本

定価はケースに表示しています。

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

ISBN4-7512-0510-2